

京都府遺跡調査報告書

第 34 冊

女谷・荒坂横穴群

<本文編>

2004

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



女谷・荒坂横穴群全景(南西から)



女谷B・C支群、荒坂B・C支群全景(上が北東)



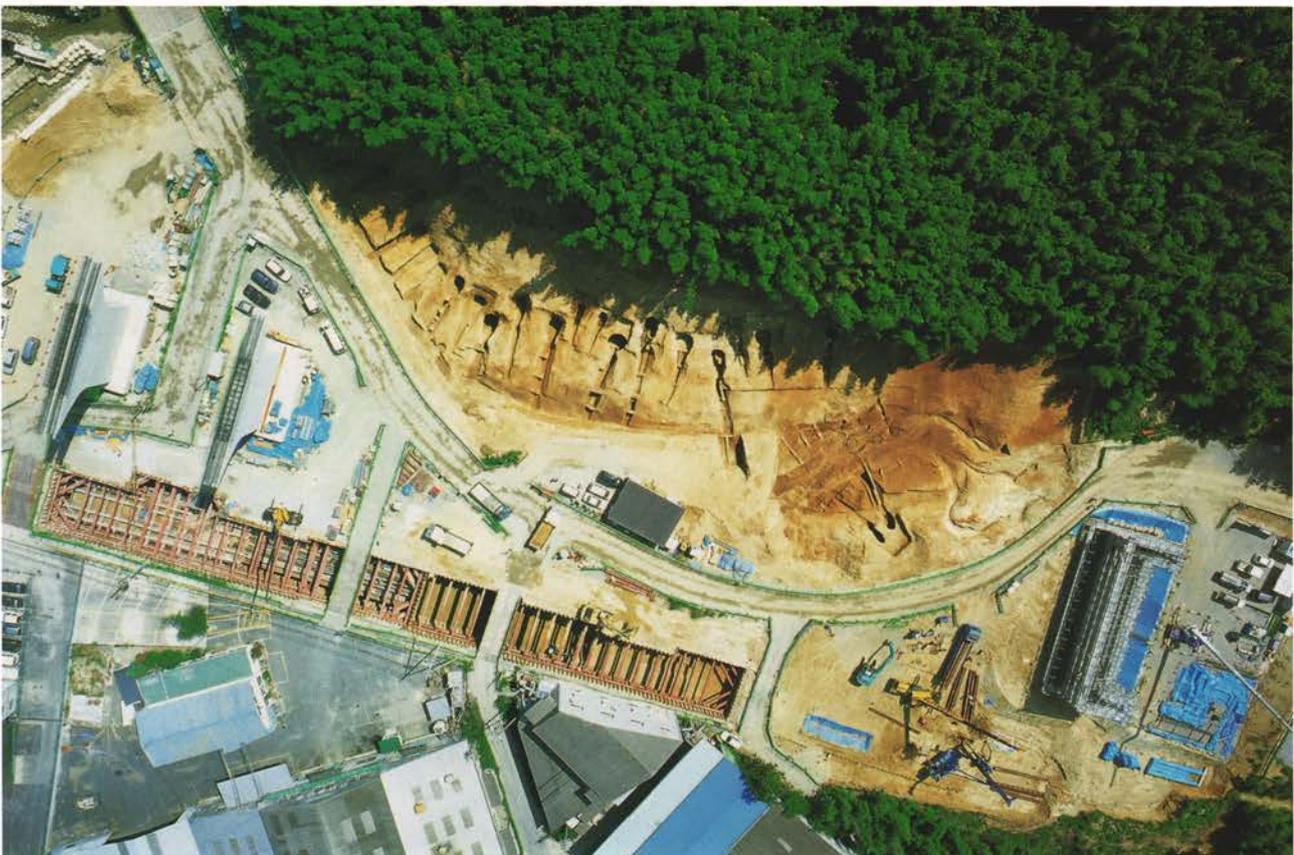
(1)女谷B・C支群全景(北から)



(2)女谷B支群15~18号横穴全景(北東から)



(1)荒坂A支群全景(南西から)



(2)荒坂B・C支群全景(上が東)



(1)女谷B支群17号横穴遺物・人骨検出状況(東北東から)



(2)荒坂B支群5号横穴礫床・遺物・人骨検出状況(北東から)



(1)女谷B支群17号横穴出土土器



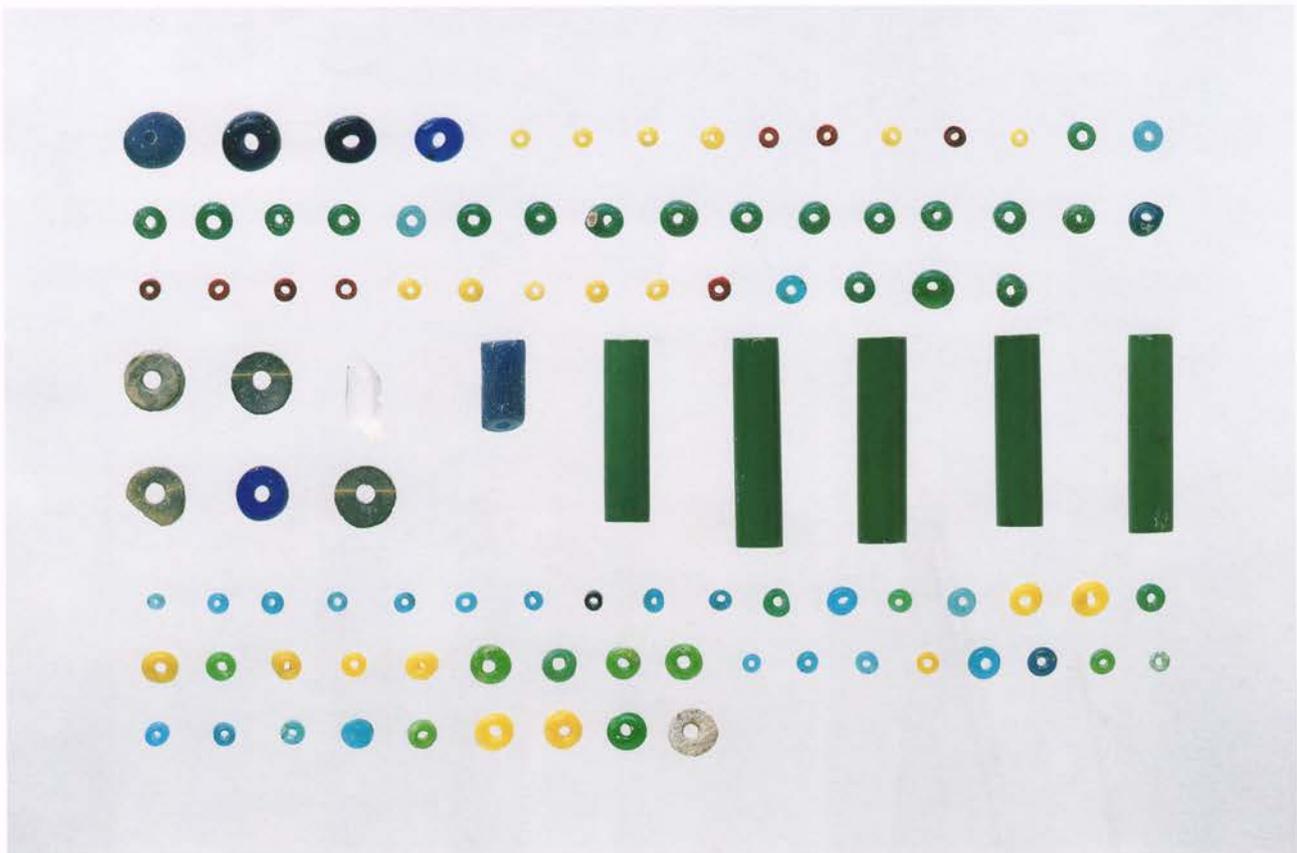
(2)荒坂B支群5号横穴出土土器



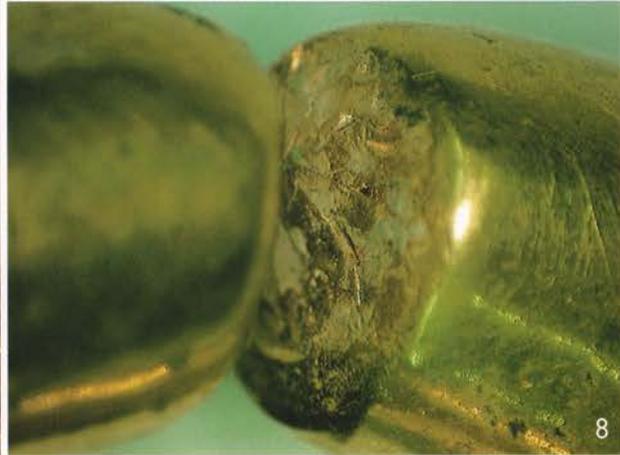
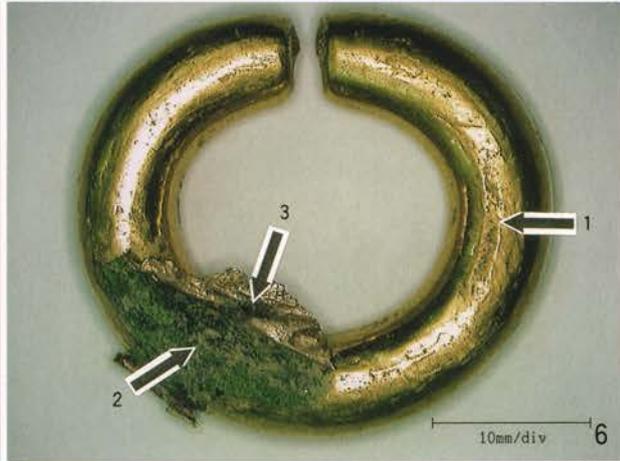
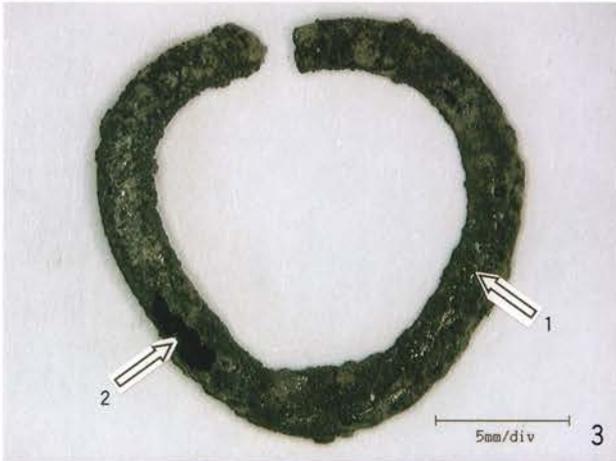
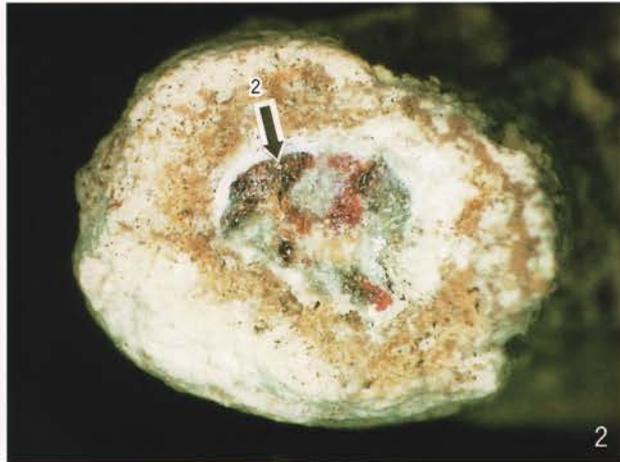
女谷B支群18号横穴出土遺物；胡籙金具



(1)女谷・荒坂横穴群出土遺物；耳環



(2)女谷・荒坂横穴群出土遺物；玉



耳環マイクロスコップ写真(1)



耳環・胡籙金具マイクロソープ写真(2)

序

京都府八幡市内里女谷・美濃山荒坂に所在する女谷・荒坂横穴群に関する報告書を『京都府遺跡調査報告書』第34冊として刊行します。

この発掘調査は、第二京阪道路および一般国道1号の建設工事に伴い、日本道路公団の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となって、平成11年度以降、平成14年度までの4年度にわたって実施したものであります。

各年度の調査成果の概要については、逐次、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』に掲載してきたところですが、本書は、それら各年度の概要報告で果たせなかった詳細な事実の報告を行うとともに、それらの諸事実を分類・集成し、考察を加えたものであります。

現地での発掘調査の実施から本書の刊行に至るまで、日本道路公団に多大のご理解とご協力を賜りました。また、京都府教育委員会・八幡市教育委員会・京田辺市教育委員会をはじめ、関係各方面から、有益なご指導ならびにご助言をいただくことができました。この場を借りまして厚く御礼申し上げます。

最後に、この仕事に係わった担当職員諸君の労苦をねぎらうとともに、本書が京都府のみならず、わが国の古墳時代研究の進展に寄与することを、心から願ってやみません。

平成16年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 上田正昭

例 言

1. 本書は、八幡市内里女谷・美濃山荒坂に所在する女谷・荒坂横穴群の調査報告書である。
本調査は、第二京阪道路および一般国道1号の建設工事に伴い、日本道路公団関西支社の依頼を受けて実施した。調査期間は、平成12年1月18日～平成14年6月27日までである。
2. 現地調査および本報告書に係る経費は、すべて日本道路公団関西支社が負担した。
3. 本書に記載した発掘調査区は、試掘調査と発掘調査により明らかとなった横穴のまとまりを支群と捉え、支群名を地区名に代用した。
4. 本書は、各調査の担当者と検討の上、主として、調査第2課第3係主任調査員岩松保が執筆した。出土人骨の整理・執筆に関しては、京都大学人類学研究所片山一道先生の専門的な指導のもと、整理員上田真一郎が中心となって行い、原稿の一部を岩松が補足した。第5章第1節については、立命館大学聴講生有沢明子が執筆した。
5. 現地での遺構撮影は現地調査担当の調査第2課調査員がそれぞれ行い、出土遺物の写真撮影は調査第1課資料係主任調査員田中彰が行った。
6. 本報告書で使用した横穴番号や記載事実は、これまでに刊行した「概報」および「情報」の報告内容を踏襲しているが、本報告書の内容がそれらと不整合があるものは、本報告書をもって訂正とする。
7. 本書に掲載した遺構図は、国土座標第6系座標系(日本測地系)によっており、方位は座標の北を指す。また、国土地理院発行地形図の方位は、真北を指す。標高の表示は、東京湾海拔(TP)である。
8. 本書の作成にあたっては、下記の方々の指導・協力を得た(敬称略・五十音順)
荒川史・有馬義人・一ノ瀬和夫・伊藤潔・伊藤久嗣・井上満郎・上村憲章・大賀克彦・片山一道・金子 裕之・櫛田謙周・高正龍・小森俊寛・佐原真(故人)・寒川旭・吹田直子・杉本宏・鈴木重治・大同真白・鷹野一太郎・都出比呂志・高橋克寿・高橋誠一・高橋美久二・西山良平・菱田哲朗・藤井学・藤田憲司・八十島豊成・吉村正親・和田晴吾
9. 調査・整理報告に係わる実測図・写真などの記録は、当調査研究センターにおいて保管している。

本文目次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査の経過	1
第2節 調査の体制	2
第3節 各年度の調査概要	4
第4節 横穴群と支群の分布	7
第5節 各部の名称および図の表現について	7
第6節 歴史的環境—八幡市・京田辺市における古墳時代—	9
第2章 女谷地区の調査	12
第1節 女谷A支群	12
1. 支群の概要	12
2. 9号横穴	12
3. 10号横穴	12
第2節 女谷B支群	13
1. 支群の概要	13
2. 1号横穴	13
3. 2号横穴	16
4. 3号横穴	18
5. 4号横穴	19
6. 5号横穴	21
7. 6号横穴	23
8. 7号横穴	24
9. 8号横穴	26
10. 9号横穴	28
11. 10号横穴	30
12. 11号横穴	31
13. 12号横穴	34
14. 13号横穴	36
15. 14号横穴	38
16. 15号横穴	40
17. 16号横穴	42

18. 17号横穴	45
19. 18号横穴	48
第3節 女谷C支群	51
1. 支群の概要	51
2. 1号横穴	51
3. 2号横穴	53
4. 3号横穴	54
5. 4号横穴	56
6. 5号横穴	57
7. 6号横穴	61
8. 7号横穴	62
9. 8号横穴	64
第4節 墓地内通路およびそのほかの遺構	65
1. 墓地内通路	65
2. そのほかの遺構	66
第3章 荒坂地区の調査	68
第1節 荒坂A支群	68
1. 支群の概要	68
2. 23号横穴	69
3. 24号横穴	70
4. そのほかの遺構	71
第2節 荒坂B支群	71
1. 支群の概要	71
2. 1号横穴	72
3. 2号横穴	74
4. 3号横穴	77
5. 4号横穴	79
6. 5号横穴	81
7. 6号横穴	84
8. 7号横穴	86
9. 8号横穴	88
10. 9号横穴	89
11. 10号横穴	90
12. 11号横穴	92

13. 12号横穴	93
14. 13号横穴	95
15. 14号横穴	97
16. 15号横穴	99
17. 16号横穴	101
18. 17号横穴	102
19. 18号横穴	103
20. 19号横穴	106
21. 20号横穴	108
第3節 荒坂C支群	108
1. 支群の概要	108
2. 1号横穴	108
3. 2号横穴	110
第4節 墓地内通路およびそのほかの遺構	111
1. 墓地内通路	111
2. 谷地形	112
3. そのほかの遺構	112
第4章 平成14年度の調査	114
第1節 はじめに	114
第2節 荒坂遺跡	116
1. 調査経過	116
2. 調査概要	116
3. まとめ	117
第3節 御毛通遺跡	118
1. 調査経過	118
2. 調査の概要	118
第4節 女谷・荒坂横穴群(女谷B支群)	119
第5節 女谷・荒坂横穴群(荒坂A・B支群)	119
1. 調査経過	119
2. 調査概要	120
(1) 荒坂A支群	120
(2) 荒坂B支群	120
3. まとめ	122

第5章	まとめ	123
第1節	女谷B支群18号横穴出土の胡籙金具	123
1.	はじめに	123
2.	胡籙の出土状況	123
3.	胡籙の形状	123
4.	胡籙金具の成立と分化の流れ	124
5.	日本の盛矢具	126
6.	女谷B支群18号横穴出土例との比較	126
第2節	横穴の築造順位	127
1.	時期区分	127
2.	小群の構成	130
3.	小群と横穴の築造順位	131
4.	支群と小群の経営母体	133
第3節	横穴の閉塞と追葬	137
1.	横穴の閉塞・追葬の方法	137
2.	玄室空間とその出入り	138
第4節	初期整地と初葬時の閉塞土・横穴構築時の儀礼	140
1.	初期整地と墓道端土坑	140
2.	初葬時の閉塞土	141
3.	初葬時の土器埋納と横穴構築時の儀礼	142
第5節	墓道内出土の土器について	143
1.	土器を墓道に埋めること	143
2.	横穴外に土器を持ち出すこと	144
第6節	葬送儀礼の一事例—杯身・杯蓋の転用枕—	145
第7節	葬送儀礼の諸段階—改葬を中心に—	147
1.	出土人骨の概要と改葬骨のタイプ	147
2.	改葬の諸段階と魂の浄化	148
第8節	横穴の再利用とその時期	150
第9節	女谷・荒坂横穴群の地域的様相	154
1.	はじめに	154
2.	横穴墓の分布	154
3.	女谷・荒坂横穴群の立地	154
4.	歴史的背景—大住隼人との関係—	157
5.	まとめ	159

第6章 総括	161
付編 自然科学的方法による分析結果	167
I. 古墳時代出土人骨の観察	167
II. 理化学分析	187
1. 理化学分析概要	187
2. 女谷B支群の花粉化石群集	189
3. 京都府女谷・荒坂横穴群における樹種同定	193
4. 女谷・荒坂横穴群出土土師器・埴輪の胎土分析	198
5. 女谷・荒坂横穴群出土耳環の蛍光X線分析	226
6. 女谷横穴B支群18号横穴出土胡籙金具の蛍光X線分析	235

付表目次

付表1 美濃山丘陵の調査一覧	6
付表2 再利用された横穴一覧	151
付表3 丹後・南山城地域の横穴一覧	155
付表4 土器観察表	243
付表5 鉄器観察表	275
付表6 耳環観察表	280
付表7 玉観察表	281
付表8 石器そのほか観察表	283

挿 図 目 次

第1図	横穴各部名称	8
第2図	女谷B支群14号横穴上面出土貨幣	40
第3図	荒坂遺跡 調査トレンチ配置図	115
第4図	荒坂遺跡 第1トレンチ平面図	116
第5図	荒坂遺跡 第2トレンチ平面図	117
第6図	荒坂遺跡 第3トレンチ平面図	117
第7図	荒坂遺跡 出土遺物実測図	118
第8図	荒坂B支群 調査トレンチ配置図	120
第9図	荒坂B支群 土層図	121
第10図	奈良時代の胡籙	124
第11図	高句麗古墳にみられる盛矢具	125
第12図	杯身・杯蓋の時期分類 I	127
第13図	杯身・杯蓋の時期分類 I	128
第14図	杯蓋 口径/器高比率	129
第15図	杯身 口径/器高比率	129
第16図	横穴出土の土器(時期別)	132
第17図	横穴の築造順位(復原)	134
第18図	木津川左岸の横穴分布	158

第1章 調査の経過

第1節 調査の経過

日本道路公団と国土交通省(旧建設省)は、京都と大阪間の交通渋滞緩和のために、第二京阪道路(一般国道1号)の建設を計画した。当調査研究センターでは、日本道路公団および国土交通省の依頼を受けて、道路建設予定地内の埋蔵文化財の発掘調査を実施してきた。

同道路建設に伴う発掘調査は、大きく3地区に分かれ、北から、木津川右岸地域にあたる久御山町域の調査、木津川左岸域にあたる八幡市の平野部の調査、その南の美濃山丘陵上の調査を実施してきた。

久御山町域の調査は、平成9年度の試掘調査を皮切りに、平成13年度まで実施した。この地域では、佐山尼垣内遺跡・佐山遺跡・市田齊当坊遺跡を調査し、それぞれ重要な知見が得られた。佐山尼垣内遺跡では、縄文時代晩期の集落遺跡を調査し、佐山遺跡では、弥生時代末～古墳時代中期の集落遺跡および中世の居館跡を調査し、この2遺跡についてはすでに調査報告書を刊行しているところであり(『佐山尼垣内遺跡 京都府遺跡調査報告書』第31冊 2001、『佐山遺跡 京都府遺跡調査報告書』第33冊 2003)、市田齊当坊遺跡についても調査報告書の刊行を予定している。

木津川左岸域にあたる八幡市域平野部の調査では、内里八丁遺跡を昭和63年度から平成10年度まで調査し、弥生時代の水田遺構や奈良時代の古山陰道とも判断される道路状遺構が調査され、その成果は2冊の報告書にまとめられている(『内里八丁遺跡Ⅰ 京都府遺跡調査報告書』第26冊 1999、『内里八丁遺跡Ⅱ 京都府遺跡調査報告書』第30冊 2001)。

美濃山丘陵上では、古墳時代後期の横穴を調査した。南山城地域の木津川左岸の丘陵裾には、従来より、多くの横穴が分布していることが知られており、八幡市内里・美濃山地区の第二京阪道路建設予定近くの丘陵裾には、女谷横穴群と荒坂横穴群が分布していることが知られていた(図版第1)。そのため、女谷横穴群と荒坂横穴群の範囲確認およびそのほかの遺跡の有無を明らかにするために、まず、平成11年度に、両横穴群の間に計画された道路建設予定地内に試掘トレンチを設定した(図版第3)。その結果、道路建設予定地内にも横穴が分布していることが判明した。この試掘トレンチは、道路建設予定地の北辺、女谷横穴群に近接していたことから、女谷横穴群の一部と判断された。

平成12年度には、試掘対象地を道路建設予定地の南側、荒坂横穴群の分布する丘陵の西側斜面地に試掘トレンチを設定し、ここでも横穴が分布していることを認めた。あわせて、丘陵上の荒坂遺跡側に向けて、試掘トレンチを設定し、横穴・遺跡の有無を確認した。これらの試掘調査の結果、横穴が分布しているのは、女谷横穴群と荒坂横穴群を繋ぐ、平野に面した丘陵斜面に限ら

れることが明らかとなった。

このように、女谷横穴群と荒坂横穴群とは、従来、別個の横穴群と判断されていたが、試掘調査の結果、両横穴群を繋ぐように横穴が連続して分布していることが判明し、同一の横穴群と判断されるものであった。女谷・荒坂横穴群の一連の調査終了後に刊行された『京都府遺跡地図(第3版)』では、その成果を受けて、女谷横穴群と荒坂横穴群とを併せて一つの横穴群と認識し、新たに“女谷・荒坂横穴群”と呼称している。同遺跡地図では、現地調査時には女谷横穴群と荒坂横穴群のそれぞれ下位のグループと判断していたA～C支群を、それぞれが女谷・荒坂横穴群を構成する女谷A～C支群、荒坂A～C支群と認識している。本報告書においてもその名称を踏襲し、従来の女谷横穴群、荒坂横穴群が分布する地区をそれぞれ女谷地区、荒坂地区とし、それぞれの支群を女谷B支群、女谷C支群、荒坂B支群……と呼称する。

平成12～14年度の3年度にわたる調査では、女谷地区では26基の横穴を調査し、そのほか、横穴の墓道端2基を確認した。荒坂地区では24基の横穴と近・現代の導水施設を調査した。本調査報告書では、52基の横穴を中心として、調査記録を報告するものである。

第2節 調査の体制

本調査を行った調査組織は、以下の通りである。

調査主体者	樋口隆康(理事長 平成11～14年度)
	上田正昭(理事長 平成15年度)
調査責任者	木村英男(事務局長 平成11・12年度)
	中谷雅治(事務局長 平成13～15年度)
調査担当責任者	平良泰久(調査第2課長 平成11～13年度)
	長谷川達(調査第2課長 平成14・15年度)
現地調査担当者	辻本和美(調査第2課第3係長 平成11～13年度)
	奥村清一郎(調査第2課課長補佐兼第3係長 平成14年度)
	岩松 保(調査第2課第3係主任調査員 平成12～14年度)
	小池 寛(調査第2課第2係主任調査員 平成14年度)
	黒坪一樹(調査第2課第1係主査調査員 平成12年度)
	〃(調査第2課第2係主査調査員 平成13年度)
	〃(調査第2課第2係専門調査員 平成14年度)
	伊賀高弘(調査第2課第3係主査調査員 平成13年度)
	中村周平(調査第2課第3係調査員 平成14年度)
	中川和哉(調査第2課第2係調査員 平成14年度)
	石崎善久(調査第2課第1係調査員 平成12年度)
	柴 暁彦(調査第2課第3係調査員 平成11・12年度)
	筒井崇史(調査第2課第2係調査員 平成11年度)

村田和弘(調査第2課第3係調査員 平成13年度)

◇ (調査第2課第1係調査員 平成14年度)

整理報告担当者 奥村清一郎(調査第2課課長補佐兼第3係長 平成14年度)

石井清司(調査第2課第3係長 平成15年度)

岩松 保(調査第2課第3係主任調査員 平成14・15年度)

発掘調査参加者

平成11年度

調査補助員 川嶋聡子・木下亮・佐伯光祥・谷口梢・南部勝・横井宏行

整理員 田中美恵子・辻井和子・栃木道代・福田玲子

平成12年度

調査補助員 上田真一郎・岡田晃・奥浩和・川嶋聡子・喜来雄二・佐伯光祥・福原寛史・

村上計太・村山和幸・李義之

整理員 東保子・奥平廣子・小西ひとみ・辻井和子・栃木道代・福田玲子・森田千代子・
与十田節子

平成13年度

調査補助員 青木正幸・井谷朋子・上田真一郎・岡田晃・奥浩和・川嶋聡子・喜来雄二・澤井
亮佑・武永仁美・谷村真慈・田村和成・浜中有紀・村上計太・村山和幸・李義之

整理員 東保子・荒尾倫子・井谷朋子・上田真一郎・内海操・岡田晃・荻野富紗子・奥
平廣子・尾崎嘉美・鎌田智恵子・木村理恵・合田美佐子・小西ひとみ・辻井和
子・栃木道代・西島真由美・西村香代子・福田玲子・藤田久子・船木登喜江・
村本幸美・盛本照代・与十田節子・李義之

平成14年度

調査補助員 上田真一郎・大歳浩史・奥浩和・木村理恵・金倫延・黒慶子・田村和成

整理員 赤木卓郎・東保子・荒尾倫子・上田真一郎・内海操・荻野富紗子・奥平廣子・
木村理恵・木村涼子・黒慶子・合田美佐子・小西ひとみ・財前幸一郎・田村和
成・西島真由美・西村香代子・長谷川マチ子・福田玲子・藤井矢壽子・藤田久
子・船木登喜江・松尾奈緒子・村本幸美・与十田節子

平成15年度

整理員 荒尾倫子・有沢明子・内海操・荻野富紗子・奥平廣子・木村理恵・木村涼子・
黒慶子・藤田久子・船木登喜江・与十田節子・渡辺咲子

年度別現地調査体制

平成11年度

調査期間 平成12年1月18日～2月24日

調査面積 約2,500㎡

調査体制 調査第2課調査第3係長 辻本和美

調査第2課調査第3係調査員 柴 暁彦
 調査第2課調査第2係調査員 筒井崇史

平成12年度

調査期間 平成12年8月2日～平成13年2月27日

調査面積 約7,400m²

調査体制 調査第2課調査第3係長 辻本和美
 調査第2課調査第3係主任調査員 岩松 保
 調査第2課調査第1係主査調査員 黒坪一樹
 調査第2課調査第3係調査員 柴 暁彦
 調査第2課調査第1係調査員 石崎善久

平成13年度

調査期間 平成13年4月11日～11月15日

調査面積 約5,240m²

調査体制 調査第2課調査第3係長 辻本和美
 調査第2課調査第3係主任調査員 岩松 保
 調査第2課調査第2係主査調査員 黒坪一樹
 調査第2課調査第3係主査調査員 伊賀高弘
 調査第2課調査第3係調査員 村田和弘

平成14年度

調査期間 平成14年4月10日～6月27日

調査面積 約2,940m²(御毛通遺跡約400m²含む)

調査体制 調査第2課課長補佐兼第3係長 奥村清一郎
 調査第2課調査第3係主任調査員 岩松 保
 調査第2課調査第2係主任調査員 小池 寛
 調査第2課調査第2係専門調査員 黒坪一樹
 調査第2課調査第3係調査員 中村周平
 調査第2課調査第2係調査員 中川和哉
 調査第2課調査第1係調査員 村田和弘

第3節 各年度の調査概要

平成11年度の調査

平成11年度には、美濃山丘陵の北裾および丘陵上で試掘調査を実施した。丘陵裾部は、女谷横穴群(現女谷A支群；以下同)の南側で、荒坂横穴群(現荒坂A支群；以下同)の北側に隣接した位置にあたり、道路建設予定地内に横穴が分布しているかどうかを確認するための調査を行った。試掘調査は、女谷横穴群の南西側にほぼ平行して、総延長180m、幅5mの試掘トレンチ2本を

設定した(1～2tr)。その結果、計10基の横穴状の土色の違いを確認した。

美濃山丘陵上では、荒坂遺跡の試掘調査と荒坂横穴群での横穴状遺構の確認調査を行った。荒坂遺跡の試掘調査は、平成4年度に実施した調査地(伊賀1994)の北東側にトレンチを設定し、遺構の広がりや横穴の有無の確認に努めたが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。

横穴状遺構の確認調査は、平成5年度に実施した試掘調査で荒坂横穴18～22号横穴を確認していた(竹原1995)が、これらの横穴が実際に横穴であるのかどうか、その性格を明らかにすることを主眼とした。18号横穴を調査した結果、近・現代の導水施設と判断され、19～22号横穴と報告しているものについても、同様の性格のものと判断した。

平成12年度の調査

平成12年度には、平成11年度の女谷横穴群の試掘調査結果をふまえ、道路予定建設地内のほぼ全域に試掘トレンチを設定し、横穴が分布している範囲とその基数を確認することを目的として試掘調査を実施した。試掘トレンチは、女谷横穴群の範囲内のみならず、平野に面した丘陵裾部では荒坂横穴群の範囲にまで及び、丘陵上の平坦面では荒坂遺跡の近傍にまで及んだ。

試掘調査の結果、女谷横穴群から荒坂遺跡にかけての丘陵上の試掘調査では、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。それに対して、丘陵裾の1～3トレンチでは、『京都府遺跡地図(第2版)』所載の荒坂横穴群と女谷横穴群の間を埋めるように、横穴状の土色の違いが49か所で認められ、横穴が稠密に分布していることが確認された。そのため、女谷横穴群と荒坂横穴群は一つの横穴群と捉えることができ、横穴分布の偏りから、女谷・荒坂の両地区に、それぞれA～Cの3支群ずつが分布していることが判明した。この結果を受け、同年度には、女谷B支群の横穴状の土色の違い21か所を含む、約3,240m²の発掘調査を実施し、15基の横穴を確認するとともに、墓地内通路などを検出した。

平成13年度の調査

平成13年度には、平成11・12年度の試掘調査の結果を受け、女谷C支群で横穴8基を含む約630m²、荒坂B・C支群では横穴22基を含む約3,900m²を調査した。あわせて、道路建設予定地の西辺に沿って、女谷・荒坂横穴群と荒坂遺跡の範囲確認のための試掘調査を実施した。試掘調査は、女谷B支群から荒坂遺跡に至る丘陵上に8本の試掘トレンチを設定したが、1～6トレンチ計約440m²が女谷・荒坂横穴群、7・8トレンチ計約270m²が荒坂遺跡に係わる範囲確認調査であるが、いずれも、顕著な遺構・遺物の出土は見なかった。

平成14年度の調査

平成14年度には、女谷B支群の西部にあたる横穴と、女谷A支群と女谷C支群の間にある谷部の調査を行った。女谷B支群1号横穴は、平成12年度に墓道部分を調査していたが、玄室部分は未調査であったため、この年度に玄室の調査を行い、そのほかに、16～18号横穴の3基の横穴を調査した。また、平成13年度には未調査であった、女谷C支群1～4号横穴の墓道部分の調査を行うとともに、その前面の墓地内通路を調査した。この通路を挟んで北側では、墓道の先端部分を2か所で検出し、女谷A支群の横穴の一部と判断した。

付表1 美濃山丘陵の調査一覧

女谷横穴群 所在地：八幡市内里女谷

次数	調査年度	地区	期間	担当	調査面積 (m ²)	概要	報告
1	平成11 (1999)	試掘	平成12. 2. 1～ 2. 24	柴・筒井	約1,800	1・2トレンチ。 横穴10基	岩松・柴 2001
2	平成12 (2000)	試掘	平成12. 8. 2～ 平成13. 1. 18	柴	約4,900	1～9トレンチ。 横穴25基確認	岩松・柴 2001
		B支群	平成12. 11. 6～ 平成13. 2. 27	岩松・黒坪・ 柴・石崎	約3,240	15基の横穴調査 試掘と重複	
3	平成13 (2001)	C支群	平成13. 4. 11～ 6. 28	岩松・黒坪・ 村田	約630	横穴8基の調査	岩松2002 b
		試掘	平成13. 11. 5～ 11. 15	岩松・村田	約440	1～6トレンチ	
4	平成14 (2002)	B支群	平成14. 4. 10～ 6. 27	岩松・中村	約700	3基の横穴調査	本報告書

荒坂横穴群 所在地：八幡市美濃山荒坂・御毛通

次数	調査年度	地区	期間	担当	調査面積 (m ²)	概要	報告
1	平成5 (1993)	A支群試掘	平成5. 7. 19～ 11. 2	竹原・森島	約1,450	18～22号横穴確認	竹原1995 b
2	平成11 (1999)	A支群試掘	平成12. 1. 26～ 2. 15	柴・筒井	約100	18号横穴調査。導 水施設	柴2001 b
3	平成12 (2000)	B・C支群 試掘	平成12. 8. 2～ 平成13. 1. 18	柴	約2,500	3トレンチ。横穴 21基	
4	平成13 (2001)	B・C支群	平成13. 4. 11～ 10. 3	岩松・黒坪・ 伊賀・村田	約3,900	横穴22基調査	岩松2002 c
5	平成14 (2002)	A支群	平成14. 4. 15～ 6. 27	黒坪・村田	約680	横穴2基調査。3 基の導水施設	本報告書
		B支群	平成14. 4. 25～ 5. 21	黒坪・村田	約360	顕著な遺構なし	

荒坂遺跡 所在地：八幡市美濃山荒坂

次数	調査年度	地区	期間	担当	調査面積 (m ²)	概要	報告
1	平成4 (1992)	A・B地区	平成4. 10. 12～ 平成5. 2. 25	伊賀	約2,700	古墳・掘立柱建物 跡	伊賀1994
2	平成11 (1999)	試掘	平成12. 1. 18～ 2. 24	柴・筒井	約600	1～4トレンチ。 顕著な遺構なし	柴2001 a
3	平成13 (2001)	試掘	平成13. 11. 5～ 11. 15	岩松・村田	約270	7・8トレンチ。 顕著な遺構なし	柴2002 b
4	平成14 (2002)	A地区北西 部	平成14. 4. 10～ 5. 16	小池・村田	約700	顕著な遺構なし	本報告書

荒坂地区では、荒坂A支群とB支群で試掘トレンチを設定した。荒坂A支群は、平成5年度に試掘調査を行った地点の北東丘陵斜面にあたり、当初、約200m²の試掘トレンチを設定して調査を行ったところ、横穴の分布を認めたため、一部拡張を行って、最終的には2基の横穴と5基の導水施設を確認した。荒坂B支群の試掘調査は、荒坂B支群の横穴が分布する丘陵斜面の上位の平坦面に設定したトレンチで、平成13年度に京都府教育委員会が試掘坑を入れて、埴輪片が混じる溝を検出していた。この試掘坑を拡張して、確認・試掘調査を行ったが、顕著な遺構は確認で

きなかった。

さらに、美濃山丘陵の下にあたる平野部で、御毛通遺跡の試掘調査を行った。御毛通遺跡は、京田辺市と八幡市の市境にあり、須恵器などが分布する散布地として知られていたが、顕著な成果は得られなかった。

平成14年度の女谷B支群の調査成果については、第2章第2節を、荒坂A支群については、第3章第1節を参照されたい。荒坂遺跡・御毛通遺跡・荒坂B支群の試掘調査結果については、第4章の平成14年度の調査を参照されたい。

第4節 横穴群と支群の分布

道路建設予定地内の現況は、竹林に全面が覆われて、多量の盛土がなされていた。そのため重機により盛土を除去したところ、開発対象地内には2つの谷が埋もれていることが判明し、その谷内より、総数48基の横穴と横穴の墓道2基が新たに見つかった。従来、女谷・荒坂横穴群は、女谷横穴群と荒坂横穴群の別個の横穴群と考えられていたが、両横穴群の間の空閑地の総長約400mにわたって横穴が稠密に造られているとことが判明し、基本的には同一の横穴群と捉えてもよい分布状況であった(図版第4)。

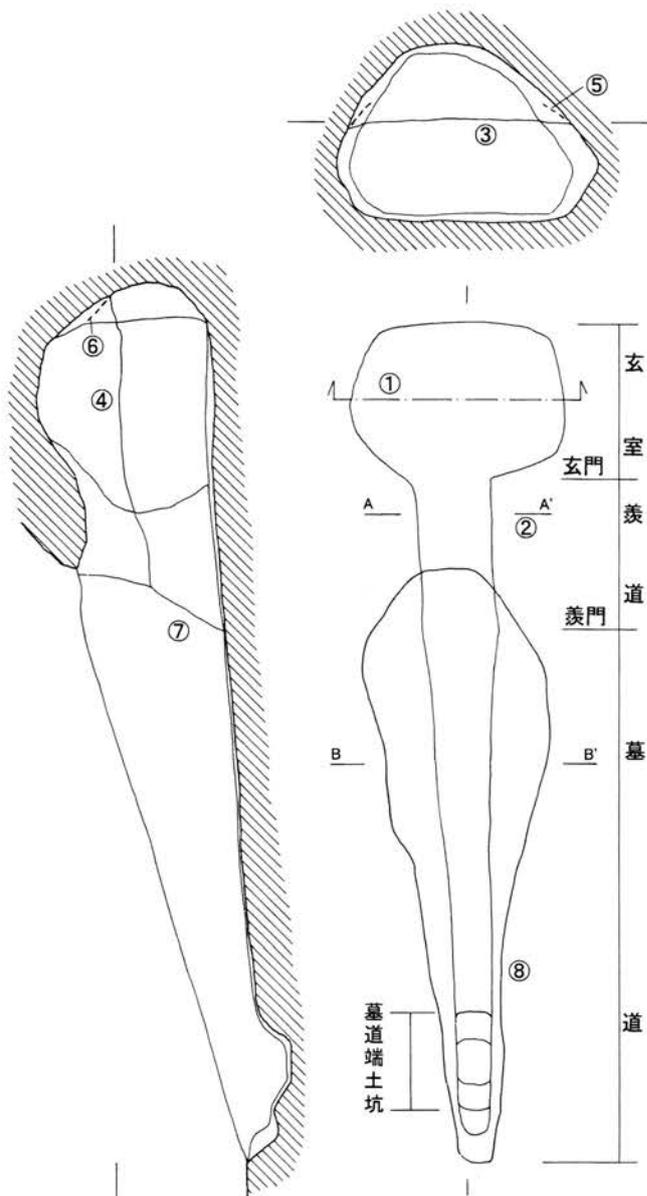
2つの埋没谷のうち、西側の谷は、従来の名称で言うところの女谷横穴群が分布する谷で、横穴が分布する位置により、3つの支群に分けることができる。ひとつは、谷が平野に向けて開いている位置の北側に分布する一群である。これは、『八幡市遺跡地図』所載の「女谷横穴群」に相当するもので、8基の横穴が登録されている。これを女谷A支群とし、今回の発掘調査では、横穴2基の墓道端を確認した。この谷を隔てた南側斜面に分布する8基の一群を女谷C支群、この谷が南東方向に伸びていき、奥まった位置の両斜面に造られた18基を一群として、女谷B支群と呼称する。

もうひとつの埋没谷は、女谷地区の東側に位置し、荒坂地区に所在している。この谷部で見つかった横穴は、『八幡市遺跡地図』所載の荒坂横穴群(17基)が分布する丘陵の西側斜面に造られていることから、荒坂横穴群と一連のものと判断した。そのため、従来の「荒坂横穴群」を荒坂A支群とし、新たに確認した谷部のもののうち、東斜面の20基の横穴群を荒坂B支群とした。また、B支群と谷を隔てた西側の丘陵斜面には、2基の横穴が分布しており、荒坂C支群とした。

荒坂A支群の最南端においては、23・24号横穴の2基の横穴を新たに確認し、調査を行った。荒坂A支群の総延長は650mに及ぶもので、この範囲の現況は竹藪が密生しており、現状では横穴を確認することは困難である。そのため、荒坂A支群が複数の支群に分かれることも想定できるが、現時点ではその実態については不明であるので、ここではその全体を荒坂A支群と呼称しておきたい。

第5節 各部の名称および図の表現について

第2章以後の横穴調査の記述では、横穴各部の名称を統一して呼称するために、ここで横穴の



第1図 横穴各部名称

天井が掘り残されてトンネル状を呈しているので、その壁面は持ち送られて、内側に湾曲して掘削されている。玄室と羨道では、通常、その横断面の面積が異なるため、湾曲を作るカーブが異なっている。それに対して、墓道は上位がやや広い逆台形に掘られているため、その壁は直線的に立ち上がる。このように、壁面に残る湾曲の有無や、その度合いに着目すると、天井が崩落している場合でも、玄室・羨道・墓道の区分をある程度推測できる。このように、壁面の湾曲の観察と平面形状を組み合わせ、そして後述の閉塞盛土位置との関係を検討することで、玄室・羨道・墓道の区分を行った。

以上のように、玄室・羨道・墓道を認識した場合、玄室の入口部分を玄門、羨道の入口部分を羨門とし、玄室・羨道・墓道の右・左は、奥壁から玄門方向を見て右・左と呼称する。

横穴の玄門もしくは羨門位置で、閉塞を行うために積み上げた石については閉塞石と呼称し、閉塞のための土盛りについては、“閉塞土”と呼称する。第1図に掲げたように、壁面の湾曲を

構造の概略と名称を説明しておきたい。

横穴は通常、玄室・羨道・前庭部・墓道から構成されている。遺骸を納めるための空間が玄室であり、羨道・墓道は玄室に至るための通路、前庭部は通路の前面に造られた空間とした場合、女谷・荒坂横穴群のすべての横穴では、前庭部は認められない。羨道・墓道はともに玄室へ至るための通路であり、羨道は天井を有しているのに対して、墓道は丘陵斜面を切り通して造った、天井を有さない部分の通路とする。羨道がなく、玄室の前面に墓道が直接取り付く場合もある。

墓道は溝状に掘削されているが、墓道端部の底面に土坑が掘られている場合がある。これを“墓道端土坑”と呼称する。

横穴の全長は、玄室奥壁部において、床面の平面形が発生する地点から、墓道が掘削されはじめる地点までを、その全長とした。玄室・羨道は、袖を有していたりして、平面形で区別できる場合にはその位置までとしたが、平面形でそれと分からない場合には、壁面の湾曲を次のように観察して推測した。玄室・羨道は

観察して確認できる羨門の位置⑦は、天井の発生する位置とややずれている。大きくは開口部と呼べる範囲の中でも墓道側に位置する。そのため、横穴を実際に閉塞した位置は、壁面の湾曲から推定できる羨門位置⑦からやや玄室側に位置することとなる。

初葬終了後、直ちに閉塞土を盛り上げるとともに墓道もその大部分を埋め戻している(第5章第3節参照)。追葬などのために玄室内に進入する際には、閉塞土を開けるとともに墓道上を溝状に掘削して、通路を造っている。このような通路を、“墓道内通路”と表記する。墓道内通路は、玄室から退出した後に埋め戻されており、このように、墓道や墓道内通路を人為的に埋め戻した土については、“埋め戻し土”と呼称する。

また、横穴掘削直後に、雨水などの水抜きのために玄室や墓道を埋め戻した土や、初葬面を構築するために玄室内に敷き詰めた土については、「初期に行う整地」として、“初期整地土”と呼称する。

玄室の遺物出土面は、上位から掘削し、検出した順にⅠ面、Ⅱ面、Ⅲ面とする。後世の段階の、いわゆる再利用時の遺物の出土面も含めたものであり、横穴を造った集団がその本来の目的で使用した埋葬面の総数ではない。図中の表現については、

- ① 1点鎖線+矢印 奥壁を見通した位置
- ② A・B・C・Dは対応する土層断面・断面掘形の位置
- ③ 奥壁で本来の掘形に近い湾曲が認められる範囲
- ④ 側壁で本来の掘形に近い湾曲が認められる範囲
- ⑤ 本来の奥壁掘形の復原ライン
- ⑥ 本来の側壁掘形の復原ライン
- ⑦ 羨道掘形の発生位置(湾曲が認められる位置)
- ⑧ 墓道の検出面での掘形 検出面が当時の地表面からどれほど削平を受けているかに関わらず実線で表示

女谷・荒坂横穴群の横穴は、水性堆積の砂礫層よりなる大阪層群を穿って構築されている。地盤が弱いため天井や壁面の崩落が著しく、当初の形状を完全には留めていない。そのため、以上のような観察に基づいて各部を認識し、各部長を計測したが、本来の形状をほとんど留めていないので、あくまでも推測値であると言わざるを得ないのが実情である。各横穴の調査で掲げた数値については、そのような状況であることも鑑み、かなりの不確かさを含んでいることを承知されたい。

第6節 歴史的環境 —八幡市・京田辺市における古墳時代—

ここでは、古墳時代に限って、八幡市から京田辺市にかけての古墳・遺跡を概観したい(図版第1・2)。

八幡市域の男山丘陵には、前期・中期古墳が集中して造られている。北から茶白山古墳、西車塚古墳、東車塚古墳、ヒル塚古墳、西二子塚古墳、東二子塚古墳、王塚古墳があり、京田辺市域

には大住車塚古墳、大住南塚古墳が分布している。それに対して、中期～後期にかけての古墳の造営は活発ではなく、いわゆる後期群集墳の造営や首長系譜に連なる大規模な古墳の造営は認められない。南山城地域の八幡市域から山城町にかけて、首長系譜に連なる古墳を造る時期が小地域ごとにずれることから、古墳首長の輪番制が唱えられているが、都出比呂志はこれを小地域における自立的な動きではなく、全国的に連動した現象と理解している(都出1988)。

この地域は、群集墳があまり造営されておらず、古墳時代後期を特徴づけるのは、横穴の分布である。京都府内にあっては、北部の丹後地域と南部の南山城地域の大きく2地域に横穴が分布しており、横穴式石室墳が府内全域に遍く分布している点と大きな相違をなしている。

京都府南部の南山城地域の中でも、木津川左岸は横穴が分布する地域として知られている。その中でも、八幡市域南部から京田辺市域北部に集中して横穴が造られており、北から、狐谷横穴群(11基)、美濃山横穴群(6基)、女谷・荒坂横穴群(77基)、松井横穴群(11基)、堀切谷横穴群(10基)が分布する。この地域以外の南山城地域で周知されている横穴には、京田辺市南部の木津川に近い独立丘陵斜面に造られた飯岡横穴群(2基)、相楽郡山城町に所在する北谷横穴群(4基)が知られているに過ぎない。

南山城地域における過去の横穴調査を概観すると、京田辺市飯岡横穴群では、1基の横穴が調査されているが、横穴使用停止後の再利用面を確認しただけであった(鈴木・真鍋・大竹ほか1980)。京田辺市堀切谷横穴群では、2度にわたって調査が実施されている。昭和44(1969)年の調査では、5・6号横穴が調査された。6号横穴では、横穴内部に石棺が置かれており、改葬骨が納められていた(高橋1969)。2次調査では、4・7～10号横穴とその背後の丘陵上にある古墳、4・7～9号墳が調査されている(林ほか1989)。堀切谷横穴の墓道は削平を受けており、玄室部分の調査に留まり、横穴の全貌を明らかにし得なかった。10号横穴からは鍔帯金具が出土しており、その被葬者の性格を知る上で手掛かりとなろう。

八幡市狐谷横穴群では、8基の横穴を一度に調査し、横穴の残り具合も良かったために、南山城地域における横穴の群集のあり方や、横穴の構造について多くの知見が得られた(久保田1982・1983)。特に、玄門部の床面に溝が穿たれている横穴を確認し、この溝に閉塞用の板戸を立てたものと推測されている。

一方、文献史学の立場から、横穴が密に分布する八幡市域南部から京田辺市域北部にかけては、大住隼人が移住させられた地域と考えられている(西田1951)。それを受けて『八幡市誌』では、現地地形で見て取れる荒坂横穴の構造が、宮崎県から鹿児島県にかけて分布する地下式横穴と類似することを指摘し、大住から移住させられた人々がこういった横穴群を構築したと指摘している。

それでは、実際に横穴を造った人々の集落—古墳時代の集落調査について概観したい。この時期の集落には、女郎花遺跡、上奈良遺跡、内里八丁遺跡、新田遺跡などが周辺に立地している。これらの遺跡では、多くの発掘調査が実施されているが、集落の実態はよく分かっていないのが実状である。

女郎花遺跡の一連の調査では、埋没古墳の周溝(榎井1995、赤松1996、赤松・山田1997)と、古

墳時代前期の竪穴式住居跡を検出している(八十島1999 a・b)。上奈良遺跡では、平安時代の掘立柱建物跡や大溝を検出しており、あわせて古墳時代の遺物も出土している。これらの遺跡では、わずかな竪穴式住居跡を確認しただけで、古墳の検出や遺物の出土から、間接的に当時の人々の活動を示唆する程度の成果しかあげられていない。

発掘調査により、古墳時代の大規模集落の一端を見せている遺跡もある。内里八丁遺跡は、弥生時代後期～平安時代にかけての集落跡で、古墳時代中期～後期にかけての竪穴式住居跡26基が確認されている(竹原・森下1999、森下・柴2001)。新田遺跡は、女谷・荒坂横穴群の分布する丘陵の北側の平野に位置しており、京田辺市と八幡市の両市にまたがる広大な面積が集落の範囲と考えられている。過去の調査により、古墳時代後期から飛鳥時代に至る竪穴式住居跡や溝を検出しており、女谷・荒坂横穴群を実際に造営した可能性が高い集落である(奥村1984、竹井・筒井2000、岡崎2000)。過去、数度にわたって調査が実施されているが、調査面積が少ないため、古墳時代後期の10数基の竪穴式住居跡が調査されているに過ぎない。

以上、周辺の古墳時代の遺跡および横穴の調査について概観した。南山城地域の横穴調査は、過去、10数基が行われただけで、その構造や群集のあり方については、その一端を垣間見る程度にしか知られていなかったのが実状である。今回の一連の調査では、墓道端のみを確認した2基を含めて、総数52基の横穴を調査し、質量ともに過去の調査分をしのぐものである。なお、荒坂横穴出土土器は、横山浩一が、須恵器編年の中で「荒坂式」を設定する際に指標としたものである(横山1959)。

(岩松 保)

第2章 女谷地区の調査

第1節 女谷A支群

1. 支群の概要(図版第5・156)

女谷A支群は、女谷地区の中で、女谷C支群とともに、平野に近い位置に造られた一群である。谷の南側に位置する一群を女谷C支群、北側に造られた一群を女谷A支群とし、谷部の底所に設けられた墓地内通路が両支群を分けている。

女谷C支群の前面の墓地内通路部分の調査を行ったところ、調査地外にのびていく2基の土坑状の遺構を検出した。その平面形状と、埋土が黄褐色～暗黄褐色砂であることから、横穴を構成する墓道の端部と判断した。横穴の墓道端は、墓地内通路上から掘削されるのではなく、わずかな空間を空けて、通路に直交して掘削されているという点もほかの横穴と同様である。

これらの墓道端部が、『八幡市遺跡地図』所載の1～8号横穴のどの横穴に相当するのかは、分布調査を行った時点と現地形が大きく変わっているため、特定できない。そのため、便宜上、9号横穴、10号横穴と呼称して報告するものであるが、必ずしも1～8号横穴とは別個の横穴であるということを意味するものではない。

9号横穴、10号横穴は、C支群3・4号横穴の前面に位置し、谷奥から谷の開口部に向けて、9号横穴、10号横穴で、それぞれの主軸の間隔は5.8mを測る。

横穴本体部分については道路建設予定地外に位置するため、未調査である。

2. 9号横穴(図版第5・157)

(1)横穴の概要

検出長1.0m、幅0.9mの隅丸方形を呈した土坑で、横穴の本体は調査地外にのびる。谷底の溝状の窪みは当時の墓地内通路をなしていたと判断されるが、その肩より約80cmの平坦面を隔てて、直交する方向に掘削されている。検出高は最大35cmを測る。

埋土は2層に分かれ、底面に暗黄褐色砂が10cm程度堆積しており、その上位に茶褐色土が堆積していた。2層の暗黄褐色砂は、ほかの横穴の例から類推すると、横穴の床面全面に敷かれた初期整地土と判断される。

調査地の壁面の土層の観察では、古墳時代後期における地表を形成していたと判断される3層の淡茶褐色土層の上位から掘り込まれており、その上面からの掘削の深さは、約50cmを測る。遺物の出土は全く認められなかった。

3. 10号横穴(図版第5・158)

(1)横穴の概要

検出長0.9m、幅0.7mの隅丸方形を呈した土坑で、横穴の本体は調査地外にのびる。検出高は最大35cmであるが、壁面の観察では、古墳時代の表土と判断される5層の淡茶褐色砂質土の上位から掘り込まれており、深さ0.8mを測る。

埋土は、底面に主として3層の黄褐色砂が約50cmの厚さで堆積しており、横穴墓道内の初期整地土層と判断する。この上位には、初葬終了後の墓道の埋め戻し土と判断する2層の黄茶褐色砂質土があり、その上から1層の暗茶褐色砂質土が溝状に堆積している。この暗茶褐色砂質土は、追葬時に掘削された墓道内通路を埋め戻した土砂の可能性はある。遺物の出土はなかった。

第2節 女谷B支群

1. 支群の概要(図版第6・159～164)

女谷B支群は、女谷地区の中でも谷の最奥部に位置し、谷部が南東方向に屈曲してのびていく、その両斜面に分布する。谷の中央の最低所には墓地内通路が認められ、大きくは、西側斜面と東側斜面の横穴群に2分できる。西側斜面には10基の横穴が分布し、東側斜面には8基の横穴が分布する。

隣接する2～3基の横穴は、軸を揃えて近接して造られており、11の小群に分割することができる。それぞれの小群は、1・16号横穴、2号横穴、3号横穴、4～6号横穴、7号横穴、8・9号横穴、10・11号横穴、12・13号横穴、14号横穴、15号横穴、17・18号横穴である。

2. 1号横穴(図版第7・8・165・166)

(1)はじめに

墓道部分を平成12年度に調査し、玄室部分は平成14年度に調査を行った。平成12年度の調査時には調査地の西端にあったため、1号横穴としたが、その後、この西側を調査したため、結果的には、支群の中央から横穴番号を付したこととなった。

墓道部分の調査終了後に道路工事が行われ、その際に玄室部分の壁面の一部が削平を受けた。そのため、2年度にわたって記録した横穴実測図には、横穴の壁面の高さに若干の不整合がある。北側の16号横穴と軸を揃えて近接して造られており、2基で一小群を構成していると判断する。

(2)形態と規模

全長13.3mで、平面形が羽子板状を呈した玄室である。羨道の有無は、壁面の残存高が低いいため分からなかったが、平面形のくびれ位置に閉塞土が盛られているため、羨道は付設されていないものと推測する。玄室の幅は奥壁部が最も広く、玄門に向け徐々に狭くなる。玄室長は4.8mで、玄室幅は奥壁部が2.4m、玄門幅が0.9mを測る。

墓道の大半は、平成11年度の試掘トレンチによって削平されており、その下部をかりうじて残すのみであった。墓道は平面で見るとやや湾曲して造られており、墓道長は8.5mで、墓道の上半幅は最大で1.5mを測る。墓道の底面での幅は、最も狭いところで0.4mしかない。墓道端近くの

底面には、長さ1.05m、幅0.4m、深さ0.3mの墓道端土坑が穿たれており、この土坑より墓道端側は24層の砂礫で埋められていた。

(3) 土層堆積状況

1～9層は、横穴使用停止後に堆積した土層と判断するもので、これより下位に堆積している土層と比べて、土質の強い土砂(6～9層)や締まりのない砂礫層(1～5層)が堆積している。前者は、雨水で流されて堆積した土砂と判断され、後者は玄室の天井がそのまま陥没したものと判断される。

10層以下が横穴使用に伴う堆積土と判断するものである。遺物の出土は3面で認められ、上から18・15・16層上面、19層上面、20・22層上面である。

20～24層は、基本的には砂層で、横穴掘削直後の初期整地土層と判断され、横穴の床面全体を整地している。この20・22層上面がⅢ面で初葬面に相当する。この上位は19層で整地され、Ⅱ面が形成されている。Ⅰ面は、15・16層を整地土として盛り上げている。

閉塞部分の土層の観察はわずかな範囲でしか行えていないので、玄室内の遺物出土面と閉塞盛土との関係は確定できなかった。わずかに、Ⅱ面に相当する閉塞土が17・18層であると推定されるだけである。また、初葬面であるⅢ面の閉塞土に相当する土層が認められないので、Ⅲ面の閉塞土は、おそらくⅡ面の閉塞土として盛り直されたのであろう。この上位には、閉塞部が開口された進入口が、14層で埋め戻されている。E-E'は、第2次調査時の壁面土層図で、墓道内の閉塞部寄りに位置し、墓道を斜めに横断する断面で記録を行っているため、幅広になっている。横断土層B-B'の14層下面の進入口に対応する墓道内通路は、12～14層の下面がそれと判断され、12～14層で埋め戻されている。その上位から10・11層を埋土とする墓道内通路が掘削されているのが観察できる。この10・11層中より、須恵器杯蓋1点(2)・高杯3点(13～15)が出土しており、墓道内通路の中に埋納されたものと判断する。以上のように、土層の観察により、初葬終了後、少なくとも3回にわたって横穴内に進入したものと推定される。

(4) 遺物出土状況

遺物の出土は3面で確認した。Ⅰ面は15・16層上面で標高32.5m、Ⅱ面は19層上面で標高32.2m、Ⅲ面は20・22層上面で標高32.1mである。

Ⅰ面では、奥壁近くで、須恵器平瓶(17)と須恵器高杯(9)の破片1点が出土したのみである。これらの土器は、それぞれ、Ⅲ面、Ⅱ・Ⅲ面出土の破片と接合したので、元々は下位の面に副葬されていたのが、その後の横穴内での業により、Ⅰ面に混入したものと判断される。このように考えると、Ⅰ面に固有に副葬された遺物は認められないので、この面で実際に遺骸が安置された可能性は低い。何らかの作業を行っただけと考えられる。

Ⅱ面の遺物の出土量も少なく、玄室中央で須恵器高杯片(9)と鉄鏃(682)が1点ずつ出土しただけである。高杯片がⅢ面出土の破片と接合したことと、遺物の出土量が少ないことから、この面で出土した遺物もⅢ面からの混じり込みと考えられる。調査時には、Ⅲ面に置かれた人骨1の上半がⅡ面でも見えていたので、Ⅱ面を埋葬面とした場合、この面は下位の人骨が一部見える程度

にしか整地していないこととなり、やや納得しがたいものである。そのため、例えば、Ⅲ面に安置した人骨1を改葬して動かす目的で玄室に進入し、閉塞部の土を開口した際に、玄室内に若干の土砂が入り込んだのを、簡単に均して整地したのがⅡ面であると考えられることも可能である。鉄鏃(682)は完形であるので、この鏃は下位の面からの混じり込みではなく、このⅡ面に置かれた可能性は否定できない。

Ⅲ面では、人骨1・2と須恵器・鉄鏃などの遺物を検出している。人骨1・2は、玄室の中央よりやや左側壁側に置かれており、玄室主軸に平行して、ほぼ1列に並べられていた。人骨1は長管骨を揃えて集められており、長管骨の奥壁側で頭蓋骨片・歯を検出した。人骨1はⅡ面でもその集積の上部が見えていたが、その下面はⅢ面上に置かれていた。人骨2は、枕として須恵器杯身(5・6)がうつ伏せにして並べられており、その前面に骨片が腐食して、散乱していた。この骨片中より歯が1点出土し、人骨に近接して耳環(848)が出土した。歯や須恵器転用枕、耳環の出土位置の関係から、玄門側に頭が位置していたものと推定される。

土器は須恵器だけの出土で、土師器は全く出土しなかった。これらの遺物は、人骨1・2の周囲に配置されている。また、土器を1か所に集め直した状況は認められない。出土位置とその接合関係を見ると、玄室内の諸所に散らばっている破片が接合し、Ⅲ面とⅠ・Ⅱ面出土の土器が接合したことから、Ⅰ面に土器が置かれた後に、かなり手が加えられて動かされているようである。その一方で、提瓶(20)は直立して出土しており、Ⅱ面よりその口縁が見えていたので、当初の位置を保ったままと判断されるものも認められる。耳環(846・847)は、ちょうど、頭があった、20cm程度の間隔を空けて出土したが、人骨片や転用枕は認められない。

墓道内でも遺物が出土しており、10・11層中より、須恵器杯蓋(2)・高杯3点(13~15)が出土した。土層の検討より、10・11層は墓道内通路を埋め戻した土砂と考えられる。これら以外に、脚付長頸壺と見られる破片、高杯片などが墓道内の埋土から出土しており、より多くの土器が墓道内に埋納されていたのかも知れない。

墓道端の墓地内通路上では、黒色土器小片が多数出土した(土器溜まりⅡS X10)。

(5) 出土遺物

1号横穴より出土した遺物は、須恵器杯身4点(3~6)・杯蓋2点(1・2)・高杯7点(8~15；10・11は同一の土器)・同蓋(7)・脚付長頸壺1点(16)・平瓶2点(17・18)・提瓶2点(19・20)、鉄鏃4点(682~685)、耳環3点(846~848)、木片(987)が図化できた。

杯身・杯蓋は、基本的に底部および天井部が回転ヘラケズリにより仕上げられているが、杯蓋(1)・杯身(3)はヘラオコシ後にナデただけで、ヘラケズリが省略されている。杯身(5)と杯身(6)は、対となって人骨2の枕として置かれていた。杯蓋(1)・杯身(6)の内面には、「一」の記号がヘラ描きされており、杯身(3)の底部外面には「=」が、杯身(5)の底部外面には「一」の記号が描かれている。これら全ての杯蓋・杯身は、胎土・焼成・色調がそれぞれ異なっており、一揃いの蓋・身として作られたセットではない。

須恵器高杯脚部(11)と杯部(10)は柱部が欠損しているが、胎土・焼成より、同一個体のもので

ある。また、胎土・焼成・色調より、須恵器蓋(7)と高杯(8)が一揃いのセットとして復原できる。

鉄器には細根式のもの2点(682・683)と平根式のもの(684・685)が出土した。耳環(846・847)は、形状・出土状況ともに対となるものである。耳環(847)の接面には、木片(987)が挟まった状態で出土した。この木片を材質鑑定したが、予備鑑定の際に、小片であることと酸化が著しいため、材質の鑑定はできないであろうとの回答を得たため、鑑定は実施していない。

(岩松 保)

(6)人骨出土状況

人骨1・2の2体の人骨をⅢ面で検出した。人骨1は玄室中央の奥壁側で、人骨2は人骨1の玄門側で検出した。

人骨1は、頭蓋骨・下顎骨・肋骨・椎骨・上腕骨・尺骨・腰骨・大腿骨・脛骨・腓骨および手足の骨が残る。これらの骨はいずれも保存状態が悪く、完存するものは皆無である。現地調査段階でも破損が進行していき、室内では、現地以上の観察は行えなかった。

人骨1は、上肢長管骨と下肢長管骨が別々に軸を揃えて集められ、それぞれの群は南北方向に約10cm離れて並べられていた。頭蓋骨は破片となって奥壁側に位置しており、それらの長管骨群とは東西方向に約30cm離れている。上顎骨は歯槽部が失われていたが、歯列の並びを現地調査時に観察できた。検出状況から、その歯列は原位置をとどめていると判断された。歯列の並ぶ方向より上顎前面の向きを復原すると、頭蓋骨は横穴開口部方向を向いていたと復原できる。下顎骨は頭蓋骨から約15cm離れた位置で検出したが、破損が著しいため詳細は分からない。

下肢長管骨の集骨は、左右の大腿骨や脛骨・腓骨が軸を揃えて1か所に積み上げられており、その方向は横穴主軸に平行する。この中には肋骨や手足の骨なども数点含まれていた。腰骨はこの集骨の南に隣接して置かれており、それらの骨とは重複関係を有していない。上肢長管骨の集骨には、右上腕骨や前腕骨と考えられる骨片が遺存していた。下肢長管骨・上肢長管骨ともに、交連状態を保つものは認められなかった。頭蓋骨と下肢長管骨の集骨との間からは、椎骨や肋骨・骨種不明骨片が数点出土した。

以上の人骨の配置状況より、人為的な改葬骨であると判断する。

人骨2は、歯が1個と骨種不明の骨片が数点残るのみである。全体的に風化が著しく進行しており、詳細な観察は行えない状況であった。人骨2の各骨の配置状況を見ると、歯の破片と骨種不明骨片を1か所で検出した。骨種不明の骨片は、その形状より歯の周辺骨である可能性は低い。そのため、骨化した後に歯もしくは骨種不明の骨片のいずれか一方か両方が動かされた可能性が想定できる。しかし、骨片の遺存点数が少なく、また細片であるため、詳細は不明である。

(上田真一郎)

3. 2号横穴(図版第9・10・167・168)

(1)はじめに

2号横穴は女谷B支群の中でも比較的規模の大きな横穴であるが、調査の結果、鉄鏃および鉄

釘数点の出土を認めただけで、玄室内より土器の出土はなかった。盗掘を受けたためと判断されるが、その時期を直接的に示すものは認められなかった。墓道の端部では、黒色土器片が粉々に破碎されて集中して出土した(土器溜まりⅡS X09)ので、これを盗掘に伴う何らかの代償行為とするならば、10世紀を相前後する時期に盗掘にあったと考えられる。

一連の横穴調査の中で、唯一、玄室奥壁で柱穴状の土坑を1基検出したが、その性格は不明である。

南側の3号横穴と近接して造られているが、主軸がややずれることから、この2号横穴1基で小群をなすものと思われる。

(2)形態と規模

玄室の平面形は羽子板状を呈しており、幅広の墓道が付設されている。羨道の付設の有無についてはよく分からないが、閉塞盛土位置と平面形のくびれ位置が一致していることから、羨道は付設されていなかったものと思われる。全長13.95mと女谷B支群の中では最長の横穴で、玄室長3.1m、玄室幅(奥壁)2.15m、玄室幅(玄門)1.1mを測る。墓道長は10.85mで、墓道の上幅2.7m、墓道の検出高は約1.1mを測る。遺物の出土は1面だけであるが、盗掘の際に動かされたものと判断される。

玄室奥壁側に直径30cm程度、深さ約30cmの柱穴状の土坑を2基検出したが、その性格は不明である。横穴の床面はほぼ水平に掘られているが、奥壁より約7.5mの位置から9.5mにかけて、地山面は傾斜をもって掘削され、浅い土坑状を呈している。

壁面に残る湾曲より、玄室の天井の高さは、地山面より1.8～2m程度に復原できる。

(3)土層堆積状況

調査時に、一部断ち割りを入れたため、閉塞盛土と玄室内の堆積および墓道内通路との関係が一部不明である。以下、横穴内の堆積層序について、概述したい。

1～24層は横穴使用停止後の堆積層と判断するもので、玄室と墓道の一部に堆積している。これらの堆積層は、玄室内では締まりのない軟らかい砂質土・砂礫が中心で、天井が崩落して堆積したものと考える。この下位近くの17・18層より、鉄釘をはじめとする遺物がわずかに出土したが、それ以外の遺物の出土は見なかった。ほかの横穴と比べて、遺物の出土量が極めて少ないことから、後世の盗掘を受けているものと判断される。一方、墓道内の横断D-D'を見ると、21～24層は有機質を含む褐色系統の土で、それより下位のある砂礫を多く含む堆積層と質的に異なることから、横穴使用停止後に墓道上の窪地が永く表土となっており、そこに流入・堆積した土砂と判断する。

下位の土層から見ていくと、56～67層は横穴構築時の初期整地土で、砂質土や砂礫土が最大で75cmの厚さで埋められている。56層の淡明褐色砂礫は玄室内にのみに固く敷かれており、初葬面を形成するための特別な整地土と判断される。この面に置かれていたであろう副葬品は全く出土しておらず、徹底的に抜き取られたためと考える。48～55層は、追葬時の墓地内通路(25～47層で埋まる)が掘り込まれるベース面を形成していることから、初葬終了直後に、墓道を埋め戻し

た土砂の残欠と判断される。25～47層は、25～44層および45～47層の2回の墓地内通路に分けられる。

(4)遺物出土状況

埋葬面は、初葬面と判断される土層の堆積を確認したが、遺物の出土は認められなかった。

玄室内の出土遺物としては、18層中より、約15cmの高低差を有して、鉄鏃片(686)と5点の釘(687～691)を検出し、17層中で鉄の小片の出土が認められただけで、須恵器や土師器などの遺物は全く出土しなかった。土層の観察では、明瞭な盗掘坑の痕跡は認められなかったが、副葬遺物が皆無であることから、後世の盗掘により、玄室内が徹底的に掘り返されたものと推測される。

墓道の掘削中には、須恵器高杯片(21)と石器(984・985)がわずかに出土しただけである。土層断面で観察すると、43層に有機質が集中しているのを認めたので、平面的に掘り広げたが、板材などの痕跡はなかった。また、2号横穴の墓道端にあたる墓地内通路上の淡暗黄灰色粘質土層では、黒色土器の小片が散らばっており(土器溜まりⅡS X09)、この時期に盗掘を受けた可能性がある。

(5)出土遺物

玄室内より鉄釘が5点(687～691)出土し、ほかに鉄鑄の固まりが1点あった。また、墓道の埋土中より、須恵器高杯片(21)および石鏃(984)・剥片(985)が出土した。

4. 3号横穴(図版第11・169・170)

(1)はじめに

玄室検出面より、約1.4mの深さまで掘削を行ったところ、須恵器や土師器が完形で出土し、この面を埋葬面と認定した。この横穴が調査を行った最初の横穴で、調査の方法や地山の認定に不慣れであったため、土器出土以後、約80cmの深さまで掘削を進めたが、遺物の出土は全く見られず、結果的には地山を大きく掘りすぎてしまったものと結論づけた。この横穴は、遺物の出土量も少なく、しかもそれらが分散して出土しているので、後世に盗掘を受けたものと思われる。

2・4～6号横穴とは主軸が異なることから、この1基で小群を構成するものと判断する。

(2)形態と規模

玄室床面を大きく掘り過ぎてしまったので、玄室の形状や規模については不明と言わざるを得ない。墓道端は試掘時のサブトレンチの深掘りのために破壊されて検出できなかったが、墓道端部で土坑状の掘り込みを確認したので、ほぼこの位置近くで墓道が終わるものと判断する。全長は現存で13.9m、玄室幅は推定で1.9m、玄室長は推定で3.0m、墓道長は推定で10.9mが現存し、墓道幅(上場)1.2～1.6mを測る。墓道端部は土坑状に深く掘削されており、最深部では、検出面から1.5mを測る。遺物の出土は1面だけである。

(3)土層堆積状況

土層は横断のみの観察である。玄室内で遺物が出土したのは8・9層下面の1面のみである。これより上位には、1～8層の土質のやや強い砂礫が厚く堆積しており、この中からは土師器皿

(25)が出土した。埋葬面からの遺物の出土が少ないため、この土師器の示す平安時代中頃に盗掘を受けたものと思われる。

このI面で出土した遺物を記録した後、I面より約80cm下位まで掘削を行ったが、遺物の出土は全く認められなかった。9層より下は土層を十分に観察できていないが、現時点では地山の認定を見誤り、地山を大きく掘り抜いてしまったものと考えている。そのため、I面が初葬面と推測する。その場合、9層が横穴構築時の初期整地土層となるが、その厚さについては記録できていない。

墓道内の土層は、当初、墓道の位置を誤って認識し、掘削して破壊したため、その一部を記録できていない。墓道内の横断土層の観察では、15～22層は砂礫・砂質土で、横穴構築直後の初期整地土と判断される。横穴の排水を目的とした下部構造と判断する。この整地土層は、横断面B-B'では0.8m、横断面C-C'の位置では1.2mの厚さを測る。横断面C-C'では14層を13層が切り込んでいるので、12・13層は墓道内通路として掘削された溝を埋め戻した土砂で、14層はそれ以前の堆積層—初葬終了後に墓道を埋め戻した土砂と判断される。12・13層を切り込んで新たな墓道内通路が掘削されており、それを埋め戻した土砂が11層と判断される。10層は、女谷B支群の谷を大きく埋める土砂流の堆積土層で、横穴使用停止後に堆積した土砂である。

(4)遺物出土状況

玄室内の遺物は1面で出土した。

玄室の中で1か所に集められている状況にはなく、散発的に遺物が出土した。遺物は土器のみで、須恵器短頸壺(22)、土師器杯(23)・壺(24)と、出土点数も3点と少ない。これらは全て完形で正立して据えられていた。ほかの横穴と比べて遺物の出土量が少ないことと、土器が蝟集して出土していないことより、盗掘により大部分の遺物が抜き取られたものと判断される。玄室埋土上層より土師器皿(25)が出土しているため、この土器が示す平安時代中頃に盗掘を受けたものと推定される。

(5)出土遺物

土師器杯(23)および壺(24)は、通有に認められる甕などの黄褐色系統の色調とは異なり、ともに橙褐色に発色しており、胎土も砂粒をほとんど含まない精良な粘土で作られ、固く焼かれている。精製土器と言えるもので、内面および外面には暗文が施されている。壺(24)は胎土分析を実施した。土師器皿(25)は、小森・上村編年(小森・上村1996)によると、IV期古段階のもので、11世紀前半頃のものであろう。

5. 4号横穴(図版第12・13・171・172)

(1)はじめに

この横穴の調査は、女谷・荒坂横穴群の調査の中でも早い時期のもので、まだ、閉塞部分をはじめ、墓道の縦断土層を観察する必要性を認識する以前で、十分な土層の観察を行えていない。

墓道は端近くで、約45°の角度で左側に折れ曲がっており、端部は段差を有さずに、そのまま

掘削を終えている。

南側に位置する5・6号横穴と軸を揃えて近接して造られており、3基で小群をなすものと思われる。

(2)形態と規模

墓道の端部約1.5mが北側、谷の低い方に屈曲している。直線の中心軸上では全長11.0m、墓道端部の屈曲に沿うと11.75mを測る。右・左側壁ともに、玄室をトンネル状に掘削した際の湾曲が見られ、地山面より0.9mの高さまで見て取れる。奥壁から2.9m付近の地山面上には、約5cmの段が掘り残されており、この位置が側壁に残る玄室掘形の湾曲がはじまる位置と合致することから、玄室と墓道を区別する段と判断される。羨道は、平面形・壁面の観察では認められない。玄室は、長さ2.9m、奥壁部の幅1.7m、玄門の幅が0.85mで、平面形は均整のとれた撥形を呈している。玄室の天井までの高さは、壁面の湾曲より1.5m程度に復原できる。墓道長は8.85mで、墓道の上幅1.3m、下幅が0.5～0.65mを測る。墓道端は、明瞭な形での土坑状にはなっていないが、やや深く掘削されており、墓道端土坑を意識した掘り方をなしている。遺物の出土は、1面のみで確認した。

(3)土層堆積状況

横穴内の堆積土の観察は、玄室横断および墓道横断土層と、墓道部の縦断土層で行った。

玄室内の堆積土は、下位から、23層の淡灰色砂、22層の淡灰色砂質土～砂が約25cmの厚さで堆積しており、22層上面で遺物を検出した。22層上面以外に遺物が出土した面はなく、この面が初葬面で、最終埋葬面と判断される。13層は2～4cm大の暗褐色礫で、副葬遺物を覆っていた。この層は、玄室内に30～50cmの厚さで堆積しており、玄室内の天井が崩落した土砂と判断される。13層より上位の10～12層は砂を主体としたもので、これらも天井の崩落土と判断される。その上の5～9層は、やや粘質が強く、天井崩落後の陥没痕に、雨水に流されて堆積した土砂と考えられる。

墓道内の堆積土層には、地山面上に横穴構築時の初期整地土層と判断される24～26層があり、墓道を最大45cmの厚さで埋めている。これらの土層は、基本的には黄褐色系統の砂・礫である。これより上位の堆積土は、横断面が「U」字形を呈している。墓道の上を溝状に掘り返して、埋め戻した、墓道内通路が複数回にわたって重複しているものと判断されるが、縦断土層の観察はこの部分だけであるので、詳細は分からない。1～4層は、女谷B支群の谷を埋める土砂流や現代土坑で、2層より、近・現代の染め付けなどの破片が出土した。

(4)遺物出土状況

遺物の出土は1面のみである。I面は22層上面で、須恵器杯蓋2点(26・28)・杯身2点(27・29)・提瓶1点(30)、土師器甕1点(31)が全て完形で出土した。耳環などの装身具や刀子・鉄鏃などの鉄製品は全く出土しなかった。また、小片で図化できなかったが、奥壁付近で須恵器甕片が出土した。杯身(27)・杯蓋(26)は、奥壁に近接した位置に置かれており、ともに口縁を上に向けて一部が重なっていた。玄室のほぼ中央では、杯身(29)・杯蓋(28)および提瓶(30)が出土した。

ここで出土した杯身・杯蓋は、ともに正位に置かれており、枕として用いられたものではない。土師器甕(31)は玄門付近の右側壁に接して、正立して出土した。

埋葬面の下の、整地土23層上面では、有機質が炭化したわずかな痕跡を認めたが、その形状を特定するには至らなかった。

(5)出土遺物

杯蓋・杯身は、胎土・焼成や色調から、杯蓋(26)と杯身(27)、杯蓋(28)と杯身(29)がそれぞれ蓋と杯を一揃いに作られたセットになるものと復原できる。杯身・杯蓋の底部・天井部は全て、ヘラオコシ後に回転ヘラケズリを省略しており、軽く指ナデで調整を行う程度である。土師器甕(31)の底部には、黒斑が認められる。鉄器や耳環の出土は認められなかった。

6. 5号横穴(図版第14・15・173・174)

(1)はじめに

5号横穴の調査も、調査着手後早い段階のもので、地山の認定に不慣れであったため、奥壁を大きく掘り抜いてしまう結果となった。そうした中でも、かろうじて玄室奥壁の両角を確認できたので、横穴の規模・形状を知ることができた。

この横穴は、両隣の4・6号横穴と軸を揃えて等間隔に造られており、4～6号横穴の3基で小群をなすものと判断される。

(2)形態と規模

玄室の平面形態は、左側壁・右側壁ともには玄門に向けてなだらかに狭まっているが、左右対称とはならず、総体的にはやや崩れた撥形をなしている。左側壁がやや崩れており、本来の形状は右側壁の形状に近いものと推測される。羨道が付設されていたかどうかについては、よく分からなかった。以下、羨道がなかったものとして記述する。

玄門付近の地山面の2か所に、それぞれ約15cm、約5cmの段差が設けられている。これらの段差の中段にあたる位置の上位では、須恵器の杯身や高杯・提瓶などが出土しているので、玄室が狭まりきった位置の段差が、玄室と墓道を分けるものと意識されていたのであろう。玄室内では、遺物を2面で検出した。

墓道端近くの底面では、長さ1.3m、幅0.55m、深さ約0.3mの土坑を検出している。墓道の端は平坦に終わる。各部長を掲げると、全長10.15m、玄室長3.6m、玄室最大幅は奥壁部分で1.95m、玄門部で0.85mを測る。墓道長は6.55m、墓道の上幅2.2m、下幅は0.85mを測る。

(3)土層堆積状況

墓道端の土層を記録しただけである。最下位には黄褐色細砂が堆積しており、墓道端土坑もこの土砂で埋められていた。ほかの横穴の例を参照すると、横穴構築時の初期整地土と判断される。1・2層は、初葬後に墓道を埋め戻した土と判断する。

(4)遺物出土状況

遺物の出土は2面で確認した。上位からI面、II面とすると、それぞれの標高は33.6mと33.5

mで、約10cmの高低差がある。初葬面にあたるⅡ面は、地山面より約10cm上位にある。

追葬面にあたるⅠ面では、奥壁に接して、須恵器高杯3点(37・39・40)・脚付長頸壺1点(43)、土師器長頸壺1点(46)、鉄鏃1点(692)が出土した。これらの遺物は乱雑に集められたような状況で密集して出土し、土師器長頸壺(46)や須恵器高杯(39)は横位に転がった状態であるのに対して、須恵器脚付長頸壺(43)や高杯(40)は正立した状態で出土した。

Ⅱ面では、須恵器杯蓋1点(32)・杯身2点(33・35)・高杯1点(38)・提瓶1点(44)、土師器高杯2点(47・49)が出土した。これらの遺物は、玄室中央のやや奥壁側と玄門付近の2か所に分かれて出土した。玄室中央付近のやや奥壁寄りでは、須恵器杯身(33)・杯蓋(32)が、それぞれ口縁を下にして並べて置かれていた。遺骸の頭を据えるための枕として用いられたものと思われる。玄門付近からは、須恵器杯身(35)・高杯(38)・提瓶(44)、土師器高杯2点(47・49)が出土した。

墓道内よりも遺物の出土をみている。墓道内の上位の層では、墓道の中央付近で約2.5mの長さにならって須恵器甕(45)が破片となって散らばって出土した。これらの破片は、墓道底より約70cm上位に位置する。細片に割れて、まとまって出土したことから、人為的に破碎して埋め置かれたものと推定される。この大甕の破片に混じって須恵器杯身(34)が完形で出土した。ほかに須恵器蓋片(36)、土師器高杯片(48)が混じっていた。墓道端近くでは、土師器甕(50)が細片となって出土した。これらの破片に混じって須恵器高杯(41)が出土した。このように墓道内からは比較的多くの遺物が出土したが、出土層位の観察はできていない。ほかの横穴の例を参考にすると、墓道上に墓道内通路が掘削され、それを埋め戻した土砂の中に埋め置かれたものと判断される。

一方、墓道部の玄門近くの底面より、須恵器壺(42)が正立して置かれた状態で出土した。現地では出土層位の観察をできなかったが、出土レベルより、横穴構築時の初期整地土層と判断される黄褐色細砂の直上に置かれていたものと復原できる。玄室内で出土したⅡ面の土器群もこの整地土の上に並べられていたと判断される。しかし、壺(42)の出土位置が墓道内であることを考慮すると、玄室内の土器群とは違った用途に用いられたものであろう。

(5) 出土遺物

須恵器には、杯蓋1点(32)・杯身3点(33～35)・高杯5点(37～41)・同蓋1点(36)・壺1点(42)、脚付長頸壺1点(43)・提瓶1点(44)・甕1点(45)、土師器には、高杯3点(47～49)・長頸壺1点(46)・甕1点(50)がある。鉄器は、鏃1点(692)が出土した。須恵器蓋(36)は、破片であるので確実とは言えないが、杯蓋・杯身と比べて、口径がやや大きいため、有蓋高杯の蓋と判断する。

須恵器杯身(34)と杯蓋(32)は、胎土・焼成・色調より、一揃いの杯・蓋の組み合わせとして作られたセットである可能性がある。ところが、杯蓋(32)は、そういったセット関係にはない杯身(33)と対になって、枕として用いられていた。杯身・杯蓋の底部および天井部は、ヘラオコシ後ナデただけのもの(32・35)、ヘラオコシ後、ていねいに回転ヘラケズリを行ったもの(34)、外周部のみヘラケズリを行ったもの(33)が混在している。

土師器長頸壺(46)は胎土も密で焼成も堅緻で、赤茶褐色に発色しており、外面には密に暗文が

施された、精製土器と言えるものである。土師器高杯(47~49)も通有の甕や高杯とは違って、長頸壺(46)によく似た橙褐色に発色しているが、胎土に砂粒が混じり焼成もやや軟らかく、精製土器と言えるものではない。長頸壺(46)と高杯(48)、甕(50)は、胎土分析を実施している。

鉄鏃(692)は茎部分で、木質が遺存しているが、本体は欠失している。

このほかに、小片で図化はできなかったが、墓道検出面上層・覆土より土師器甕片、平瓦片、土師器不明品が出土した。

7. 6号横穴(図版第16・17・175・176)

(1)はじめに

試掘時にサブトレンチを設定して深く掘り下げたため、玄門付近から墓道にかけて大きく破壊してしまったが、墓道端をかるうじて検出できた。奥壁については、地山の認定が困難であったため、大部分を掘り抜いてしまったが、最終的には、奥壁両隅を確認することができた。

北側の4・5号横穴と近接して、主軸を揃えて造られており、3基で小群となるものである。

(2)形態と規模

全長12.3mを測り、玄室の平面形態は均整のとれた撥形を呈している。遺物は2面で出土し、Ⅱ面である初葬面には拳大の石磔を敷き並べて磔床が造られていた。中央部は試掘トレンチにより損壊しているが、現存している床面では、疎らになりながらも石磔が分布している。荒坂B支群5号横穴のように、羨道にも磔床が造られている場合もあるので、石磔が分布している床面が全て玄室に相当するとは限らないようだ。壁面の観察では、羨道の有無はよく分からなかった。奥壁から3.2m付近で磔床の石磔が疎らになっており、この位置で床面がわずかな段を有して掘削されているので、この位置が玄門である可能性もあるが、確証はない。そのため、一応、羨道は付設されていないと考えておく。磔床が損壊部分にも続いていく様相を呈するので、玄室の一部も破壊されているものと推定される。そのため、玄室の全長は不明で、現存長で4.15mを確認できるだけである。玄室の最大幅は奥壁部で2.4mで、玄門付近で幅1.0mを測る。

墓道は、墓道端の2.2mにわたって確認した。幅は最大で1m、深さ40cmで断面「U」字形の掘形を有している。図上の復原では、墓道は玄室側から墓道端側に向けて、やや下る傾斜をなして、ほぼ直線的に掘られている。墓道の端部はわずかに土坑状に深く掘削されていた。

(3)土層堆積状況

横穴を埋める土層は、墓道端と玄室内の埋葬面より下を記録した。試掘時の攪乱により、閉塞状況や墓道内通路の掘削回数などについては不明である。

玄室内では、遺物は2面で出土し、上位のⅠ面が標高33.8m付近、Ⅱ面が標高33.65m付近である。Ⅱ面が初葬面で、玄室の全面にわたって、拳大の円磔が敷かれて、磔床が設けられていた。磔床の下には、砂・磔を中心とした土砂(1~5層)により10~20cmの厚さで初期整地が行われている。

墓道端では、下位に約40cmの厚さで黄褐色磔混土があり、その上に薄く暗褐色土が堆積してい

る。黄褐色礫混土は墓道構築時の整地土もしくは墓道端に穿たれた墓道端土坑を埋め戻した土と判断され、1層の暗褐色土は、確認できた厚さは薄いですが、初葬後に墓道を埋め戻した土砂の残欠と判断する。3層の黄褐色粘質土は、墓地内通路を埋める埋土で、横穴・墓地内通路は4層の赤褐色砂質土および茶褐色土をベースとして構築されている。赤褐色砂質土層は、横穴構築時の地表と判断している土層である。

(4)遺物出土状況

遺物は2面で出土した。

I面では、須恵器杯身3点(53~55)・高杯2点(56・58)・脚付長頸壺1点(59)・平瓶2点(61・62)、土師器高杯1点(63)が出土した。これらは、玄室内に散乱して出土しており、意図的に集め置かれた状況ではない。玄室中央やや奥壁側では、須恵器杯身(53・54)はともに逆位に並べて置かれており、枕として使用されたものと思われる。奥壁に接して須恵器高杯(58)が正立して据えられた状態で出土した。

II面では、須恵器杯身1点(52)・杯蓋1点(51)・高杯1点(57)・壺1点(60)、耳環2点(849・850)が出土した。玄室中央よりやや奥壁側で、須恵器杯身(52)が逆位、須恵器杯蓋(51)が正位で、ともに口縁を下にして置かれていた。杯身(52)に近接して耳環2点(849・850)が出土しており、これらの杯身・杯蓋は枕として用いられたものと判断される。そのほか、右側壁に接して、須恵器高杯(57)・壺(60)が出土した。高杯(57)は約50cm離れて出土した破片どうしが接合した。このほかに、埋土中より、円筒埴輪片や須恵器壺片、土師器片が出土した。

(5)出土遺物

I・II面合わせて、須恵器杯蓋1点(51)・杯身4点(52~55)・高杯3点(56~58)・脚付長頸壺1点(59)・壺1点(60)・平瓶2点(61・62)、土師器高杯1点(63)、耳環2点(849・850)などが出土した。

II面で枕として用いられていた須恵器杯身(52)・杯蓋(51)は、胎土・焼成・色調が異なり、一揃いの蓋と身として作られたセット関係ではない。これらは、ともに回転ヘラケズリで調整を行っているが、I面で出土した杯身・杯蓋はヘラオコシ後指ナデで調整を行うだけで、回転ヘラケズリ調整を省略している。土師器高杯(63)は柱部が全くなく、意図的にはずされた可能性がある(女谷C支群1号横穴出土、土師器高杯参照)。

8. 7号横穴(図版第18・177・178)

(1)はじめに

女谷B支群の分布する谷の最奥部で確認した横穴である。玄室の南側には、現代の竹焼成土坑が掘られていたので、7号横穴の南側に横穴が造られていたのかどうかは、確認できなかった。現状の地形を見る限りでは、この横穴の南側は谷の深度が急激に浅くなるため、横穴を造る高低差を確保できないものと思われる。そのため、この横穴が女谷B支群を構成する最奥部の横穴と判断される。近接して横穴は造られておらず、この1基のみで小群となるものであろう。

玄室のⅠ・Ⅱ面からは瓦器碗や土師器杯などが出土しており、平安時代～中世段階に横穴の再利用が行われたものである。また、横穴本来の使用時を示す遺物の出土量が少ないため、再利用のために玄室に進入した際に、盗掘を受けたものと思われる。

この横穴に至る墓地内通路は、谷部を試掘時に深く掘削したために消失してしまった。

(2)形態と規模

玄室の右側壁の形状がやや乱れており、左側壁が当初の形状に近いものだとすると、奥壁および奥壁近くが玄門部よりもわずかに広い、短冊形を呈している。墓道の中央より墓道端部にかけては、試掘時の重機掘削により削平されて不明である。

全長は現存で5.85m、玄室長は3.8m、玄室幅は奥壁部で1.45m、玄門部が1.0m、最大幅は奥壁よりやや玄門側の位置で1.6mを測る。墓道長は現存で2.05m、墓道上幅が1.2mを測る。玄室内で、遺物は3面で出土した。

(3)土層堆積状況

横穴内には、砂層・砂礫が厚く堆積していた。2・7・12・13層は、さらに細かく分層することが可能であるが、それぞれが同色系統の砂礫を主体としており、天井を構成していた砂礫が数10cm単位の厚さで崩落したもの、もしくは人為的に攪拌されたために均一な土砂になったものと判断される。これらについては、個別の層名は省略した。

遺物が出土したのは、7層下面近くで瓦器碗が出土し(Ⅰ面)、12層中からは土師器皿や黒色土器片が出土した(Ⅱ面)。これより下位の土層は平安時代以前の堆積層と判断され、横穴再利用以前に堆積した土層と判断されるが、遺物の出土は皆無であった。古墳時代の遺物が層的に揃って出土するのは、40・42層上面のⅢ面である。Ⅲ面よりは、耳環2点が出土しただけで、Ⅰ面もしくはⅡ面の段階に玄室内が大きく掘り返されて、盗掘を受けたためと思われる。そのため、13層もしくは12層全体は、その段階に一旦動かされたものと理解できる。

2層は、中世以後の天井崩落土であるが、遺物の出土がなく、どの時点で崩落したのかは判断できないが、少なくとも、中世段階に玄室へ進入した時点では、天井がまだ残存していたことになる。また、土層の重なりから見ると、縦断土層の4～6層はⅠ面に後出し、8～11層はⅠ・Ⅱ面の間に挟まれており、それぞれの時期に堆積したものである。

横穴構築から使用時の堆積土は、14層以下がそうと判断される。初葬面であるⅢ面を形成する40～42層は、玄室構築時の初期整地土層と判断される。縦断土層を見ると、玄室内は大きな単位で水平に堆積しているのが基本であるのに対して、玄門位置には、細かな単位で土砂が堆積し、マウンド状の盛り上がりが見られる(14～39層)。これらは、横穴に進入した時々には開口し、埋め戻された閉塞土と解釈できるが、玄室内の埋葬面が後世に荒らされているため、墓道内通路と埋葬面とを関連づけて解釈することはできない。

(4)遺物出土状況

遺物は3面で出土した。Ⅰ面は、7層中の標高35.5m付近で、Ⅱ面は12層にあたる標高34.9～35.2mで、Ⅲ面は40・42層上面で、標高34.4m付近である。

I面では、左側壁近くで瓦器椀2点(68・69)が出土した。瓦器の年代観より、12世紀中頃の再利用面と判断する。この面を調査している時点では、横穴の壁面の砂礫層と埋土の砂礫層の区別がつかなかったので、玄室の平面形態はおおよその位置を図示している。

II面では、左側壁から玄門にかけて、土師器杯(67)、須恵器杯身(65)が出土した。これ以外に、土師器皿(66)、黒色土器片が出土した。

III面は、横穴の初葬面に相当する層で、耳環2点(851・852)が大きく離れて出土しただけである。耳環はともに銀環であるが、形状が異なるため、対になるものではない。

また、II面からは、小片のために図化できなかったが、横穴使用時に納められていたと判断される古墳時代後期の須恵器甕片、土師器甕片も出土した。これらの破片は、III面に元々置かれていた土器が掘り返されて、II面に取り残された破片と判断される。一方、II面出土の須恵器杯身(65)は接合するとはほぼ完形になったが、これ以外に同様の胎土・色調をした杯身底部片がII面でも出土している。この破片は、後世の盗掘—I面から掘り返されて盗掘を受けた際に、破片となって取り残されたものと考えられる。このように考えると、II面におけるIII面の盗掘は必ずしも行われたと言えるものではなく、I面の段階で、II・III面の両面を一度に盗掘した可能性も想定できる。正確を期して言うと、I面の段階もしくはI・II面のそれぞれの段階で、玄室内が掘り返されて、II面とIII面に置かれていた土器が抜き取られて、横穴外に持ち出されたものと言える。

(5)出土遺物

須恵器高杯底部片(64)は横穴の検出時に出土したもので、盗掘をした際に紛れ込んだものであろう。耳環(銀環)(851・852)はその大きさが異なり、対になるものではない。瓦器椀(68・69)は、内面には密にミガキが施され、外面の体部にも数条のミガキが見て取れる。口縁端部内面には1条の沈線がめぐり、森島・近江の編年によると、II-3期のものと判断され、12世紀末頃のものである(森島・近江ほか1995)。土師器皿(66)は、口縁部にススが付着している。小森・上村の編年では、土師器杯(67)とともに、II期古・中段階のもので、9世紀中頃～後半にかけてのものである(小森・上村1996)。

9. 8号横穴(図版第19・20・179・180)

(1)はじめに

女谷B支群の南斜面の谷最奥部で検出した横穴である。墓道の端部は、試掘時の深掘りで墓道端の一部を破壊してしまったが、かろうじて墓道端土坑状の落ち込みを確認できた。

北側の9号横穴と平行して造られており、2基で一小群となるものである。

(2)形態と規模

墓道端が削平を受けており、横穴の全長は現存で7.8mを測る。玄室の平面形は羽子板状を呈している。玄室の幅が狭まることと、側壁の湾曲がこの位置で発生することから、玄門位置は奥壁より2.8mの位置と判断される。この玄門位置と縦断土層に見る閉塞盛土の位置がズレることから、羨道を有している可能性がある。平面図を子細に見ると、奥壁より4.1mの位置でも平面

形がわずかに屈曲し、両壁はほぼ平行に掘削されている。この位置が羨門である可能性があるが、壁面ではその湾曲は認められなかった。羨道が付設されているとした場合の各部長を掲げておくと、玄室長が2.8m、玄室幅が奥壁部で2.1m、玄門部での幅が1.1m、羨道長1.3m、羨門の下幅が0.6m、墓道長が現存で3.3m、墓道の上幅が最大で1.6mを測る。遺物は3面で出土した。

墓道端の約80cmにわたって、深さ25cmの土坑状の掘り込みが認められ、墓道端土坑が掘られていたと判断される。

(3)土層堆積状況

1～4層が横穴使用停止後の堆積層で、基本的には締まりのない砂礫層で、天井がそのまま陥没した土層と判断する。

玄室内では3面で遺物が出土した。Ⅰ面は7層上面、Ⅱ面は11・12層上面、Ⅲ面は14層上面に相当する。それぞれの遺物出土面は、玄室内を整地土で盛り上げて形成している。Ⅲ面は初葬面で、この面を形成している14層は、横穴構築時の初期整地土で、墓道端土坑は13層の淡黄灰色砂礫で埋め戻されている。

Ⅲ面の閉塞土に相当する盛り上がりは土層図に認められないが、土を盛って閉塞を行ったとするならば、追葬時に玄室内の整地土として転用されて、玄室内に均されたのであろう。この考えが正しいのならば、Ⅱ面の整地土である11層が、Ⅲ面の閉塞土の残欠と考えられる。このⅡ面に対応する閉塞土・墓道内通路の埋め戻し土は8・9層である。この上から玄室内に進入するための墓道内通路と進入口が掘られ、玄室内を7層で整地し、退室時に進入口と墓道内通路を埋め戻したのが5・6層であろう。この閉塞土の5層は、天井崩落土である1・2・4層の上に載る形となっているが、天井が崩れる際に、崩落土が5層を奥壁側に引きずったために、その形状が変形したのであろう。

以上のように閉塞盛土を想定すると、この横穴は、玄門位置と閉塞盛土位置が合致しておらず、壁面の湾曲具合ではそれと観察できなかつたが、おそらく、2m内外の短い羨道を有していたと推測される。なお、横断土層A-A'は1層を除去してから記録したもので、縦断土層とは整合していない。

(4)遺物出土状況

Ⅰ面では、玄室中央部で鉄刀(693)およびその刀装具(694～698)を検出した。この鉄刀は、柄部分に拳大の石を8～10個を敷き並べており、切っ先を奥壁に向けて、ほぼ水平に、玄室側壁に並行して置かれていた。この面では、鉄刀以外の副葬品は出土しなかった。

Ⅱ面はⅠ面の10～15cm下位にあり、副葬品が玄室・羨道で出土した。遺物は、玄室奥壁近くで鉄釘(699)、南側にやや離れて須恵器高杯2点(81・82)・提瓶1点(83)、玄室中央から玄門にかけての左側壁に近接して、須恵器高杯1点(80)・杯蓋2点(76・77)が出土した。右側壁では、玄門部で須恵器提瓶(84)が出土した。羨道では、須恵器杯身1点(75)・杯蓋(74)1点が出土した。これら杯蓋(74)・杯身(75)はともに正位に置かれていた。

Ⅲ面はⅡ面を約10cm掘り下げて、地山に近い黄褐色砂上で遺物を検出した。奥壁部に須恵器杯

身4点(71・73・78・79)・杯蓋2点(70・72)が1か所に集められていた。杯蓋(70・72)は口縁を上にして逆位にあり、杯身(73・78)が正位、杯身(71・79)は逆位に置かれており、転用枕として用いられたと判断される組み合わせはない。

(5)出土遺物

土器は須恵器のみで、土師器は出土していない。杯蓋5点、杯身5点、高杯3点、提瓶2点がほぼ完形で出土した。鉄器には鉄刀一揃えと鉄釘がある。

杯蓋(70)と杯身(71)、杯蓋(72)と杯身(73)、杯蓋(74)と杯身(75)が、それぞれ胎土・焼成・色調および蓋と身を組み合わせた際の微妙な歪みが一致しており、蓋と身を一揃いのものとして作られたセットである。Ⅲ面より出土した杯身・杯蓋は、回転ヘラケズリを行っているが、Ⅱ面より出土した杯身・杯蓋には、回転ヘラケズリを省略しているものも認められる。

鞘金具(694)は出土した位置が切っ先に近接していたため、鞘尻の金具と判断される。ほかに、足金具(695～697)、鐮(698)が出土した。鉄釘(699)は1点のみの出土である。

10. 9号横穴(図版第21・22・181～183)

(1)はじめに

重機により竹藪造成土を除去している際に、それまで空間を保っていた横穴の天井部が陥没した。そのため、横穴壁面の残りは非常に良い。

南側の8号横穴と軸を揃えて近接して造られており、2基で小群となるものである。

(2)形態と規模

横穴の全体が調査でき、全長は10.85mを測る。玄室の平面形態は羽子板状を呈している。壁面には、地山面より最大で1.1mの高さにまで横穴掘形の湾曲が認められ、この湾曲具合から天井の高さを復原すると、1.6m程度となる。

閉塞の盛土位置は奥壁から約4m位置にあること、壁面に残る湾曲が段を有していることから、8号横穴と同じく、短い羨道を有していた可能性が高い。羨道が付設されているものとして各部長をあげておくと、玄室長2.7m、玄室幅は奥壁部が最大幅で2.1m、玄門部が1.4m、羨道長0.9m、羨門幅0.8m、墓道長7.25m、墓道上幅0.6～1.0mを測る。

墓道端には、長さ3.3mにわたって、深さ最大で45cmの墓道端土坑が掘られている。長辺の側壁は直に立ち上がる。内部には黄褐色～茶褐色礫混土が充填されていた。玄室内の遺物は2面で出土した。

(3)土層堆積状況

玄室内の1～8層は、砂層・砂礫層が中心で、横穴使用停止後に、天井が崩落したものと判断される。9層以下が横穴使用時の堆積土と判断され、遺物は2面で出土し、Ⅰ面が13層上面、Ⅱ面が18層上面で初葬面に相当する。Ⅰ面とⅡ面は約10cmの高低差がある。

Ⅱ面の初葬面より下位には、横穴構築時の初期整地土として18～20層の砂礫層が認められる。特に墓道端には墓道端土坑が深く掘られ、黄褐色～茶褐色礫混土で埋め戻されている。この土坑

の壁面には雨水などで風化した乱れが認められないこと、底面に壁面から崩落した土砂が堆積していないこと、土坑内部がほぼ均質な砂礫層で詰まっていることから、この土坑が掘削されると直ちに埋め戻されたものと推測される。

15層は横断面で見ると溝状に堆積しており、これを追葬時の墓道内通路が埋め戻されたものとする、そのベースとなる16～19層は、初葬直後に墓道を埋め戻した土砂と判断できる。追葬時には、この15層下面の進入路を経て玄室内に入り、13・14層で玄室内を整地して、I面が形成される。この面で遺骸が安置されると、墓道内通路は15層で埋め戻され、その上に9～12層が閉塞土として盛り上げられる。今回記録した土層は墓道の堆積土層の上位が消失しているが、これは墓道の上半を大きく削り取ってしまったためである。9・10層の一部が天井崩落土の6層の上に載っているが、天井が崩落した際に、崩落土によって奥壁側に引きずられて、乱れたのであろう。また、墓道端直上付近に堆積している21～28層は、谷内を埋める堆積土である。

(4)遺物出土状況

I面では、羨道のやや玄門側で、杯身1点(98)と刀子1点(701)が出土した。杯身(98)は口縁を下にして、逆位に置かれていた。

II面では、奥壁と玄門付近に遺物が集中しており、玄室の中央部ではほとんど遺物が出土しておらず、鉄鏃1点(702)が出土しただけである。奥壁近くでは、須恵器杯蓋3点(87・89・94)・杯身4点(88・90・95・99)・高杯2点(104・105)・同蓋1点(103)・フラスコ形瓶1点(109)のほか、刀子1点(700)、鉄鏃1点(703)が出土した。玄門付近では、須恵器脚付長頸壺(108)・高杯3点(102・106・107)・同蓋1点(101)・杯身3点(86・96・97)・杯蓋2点(85・93)・提瓶1点(110)のほか、土師器杯1点(111)、耳環一対(853・854)が出土した。杯蓋(93)・杯身(96)および杯蓋(85)・杯身(86)、杯蓋(87・89)はそれぞれが対となって、口縁を下にして近接して置かれており、枕として用いられた可能性がある。また、杯蓋(87)の下から、歯牙を1点検出した(人骨3)が、これ以外の骨や歯の出土はなく、その詳細は不明である。また、蓋(101)、高杯(106)は破片となって、やや広い範囲に散らばっていた。

このほかに、図化できなかったが、先のものとは別個体の須恵器杯身もしくは杯蓋の破片、土師器高杯の小片、土師質埴輪片が玄室内で出土した。一旦横穴内に納めた土器を、その後、横穴外に持ち出した際に、玄室内に遺存したものと判断される。

そのほか、閉塞土を盛り上げた土砂と判断される9層中より、土師器杯(112)が破片となって出土した。墓道前面の墓地内通路からは、須恵器杯蓋(91・92)や朝顔形埴輪(113)が出土した。これら、墓道内および墓道前面から出土した土器と玄室内から出土した土器とは、接合関係は認められなかった。

(5)出土遺物

胎土・焼成・色調より、杯蓋(85)と杯身(86)、杯蓋(87)と杯身(88)、杯蓋(89)と杯身(90)、蓋(101)と高杯(102)、蓋(103)と高杯(104)にセット関係が認められ、それぞれ、一揃いの組み合わせとして作られて、焼かれたものと判断される。

杯身(99)は形状から見て、杯蓋もしくは蓋である可能性もあるが、底部が回転ヘラケズリのままであること、杯身(97・98)などと時期的に連続することから、杯身と判断する。杯身(100)は型的にやや古い段階のもので、墓道内の埋土より出土したことから、墓道を埋め戻した土砂に紛れ込んだものであろう。

フラスコ形瓶(109)は、横瓶の体部に細長い頸が付くもので、今回報告する中で、唯一の出土例である。朝顔形埴輪(113)は胎土分析を行った。

(岩松 保)

(6)人骨出土状況

9号横穴では1体の人骨を検出している(人骨3)。Ⅱ面の玄室奥壁近くで須恵器杯蓋(87)が正位に置かれており、その内側の床面上で歯が1個出土した。歯の保存状態は悪い。この歯以外に骨片などの出土は見なかった。

(上田真一郎)

11. 10号横穴(図版第23・184・185)

(1)はじめに

10号横穴からは須恵器杯身2点が出土した。遺物の出土量は少ないため、盗掘を受けた可能性がある。

11号横穴の南に近接しており、南側の9号横穴とは7m隔てているので、10・11号の2基の横穴で1つの小群を構成するものと判断する。

10号横穴の墓道上では、土坑ⅡSK02を検出した。

(2)形態と規模

墓道端まで完存しており、全長は9.6mを測る。玄室は、平面形が撥形を呈しており、玄室長2.3m、玄室幅が奥壁部で2.05m、玄門部での幅が0.9mを測る。壁面の湾曲の残り具合は、玄門付近の壁面にわずかに認められる程度で、それ以外の側壁や奥壁については、壁面の崩落のため、全く認められなかった。しかし、土層の観察では、閉塞盛土が玄門の墓道側約1mに位置するため、羨道を有しているものと判断される。平面形を子細に見ると、墓道は、奥壁から3.45m付近まで、それ以西と比べてやや幅広に掘られており、ほぼ閉塞盛土位置に一致する。この位置を羨門とすると、羨道長1.1mで、墓道長は6.2m、墓道の上幅は0.7~0.8mを測る。

墓道端は、長さ2.6mにわたって最大約50cmの深さで土坑状に掘削されている。この墓道端土坑内には、淡黄灰色砂礫が埋まっており、墓道が掘削されているベースである明茶褐色土とは明瞭に異なっていた。土坑の底面は階段状に掘られており、玄室側の斜面では、工具による掘削痕と推定される小穴を検出した。小穴は径10×20cm程度で、深さ約5cmを測る。遺物は1面で出土した。

(3)土層堆積状況

1~15・17・18層は砂礫・砂質を主体とするもので、横穴廃絶後に天井や壁面が崩落した土層

と判断されるのに対して、16・19層は粘質の強い土質で、玄室内へ雨水とともに流入した土砂と判断されるものである。

遺物が出土したのは40層上面の1面だけであるが、土層の観察により、36層上面でも何らかの作業が行われたと考えられる。この作業面を形成するための整地土が36・37層で、これらの土層でI面の副葬遺物が覆われている。40・41層は横穴構築時の初期整地土で、基本的には黄色系統の砂・砂礫であり、特に41層は墓道端土坑を平坦に埋めている。40層上面のI面が初葬面で、39層は初葬面での葬送儀礼終了後に墓道を埋め戻した土の残欠である。I面に対応する閉塞盛土が縦断土層で観察できないので、閉塞土は玄室内に平坦に均されて、36・37層の整地土に転用されたものと思われる。36層上面の作業面に対応する閉塞盛土が34層で、横断面B-B'を見ると、その上位より通路状の溝2条(20・21層、29・30層)が掘り込まれており、34層の閉塞土が盛り上げられた後に、何らかの作業を行うために玄室内に2度進入したことが分かる。縦断土層で見ると、20～28層、29～33層が、それぞれの通路を埋め戻した土砂と解釈される。

(4)遺物出土状況

遺物の出土は1面でのみ確認した。玄室中央部で杯身2点が正位(114)と逆位(115)で出土しただけで、遺物の出土点数は少ない。玄室内の横断面A-A'では、向かって右側の土層が斜めに堆積しており、玄室の一部が盗掘を受けた可能性がある。墓道内の39層中より、土師器小片および須恵器高杯小片が出土した。

墓道端土坑を埋める41層より、炭化材が出土しており、樹種同定鑑定では、ヒノキ科のものである。

(5)出土遺物

杯身(114)は外周部を回転ヘラケズリしただけで、中央部にはヘラオコシを行った痕跡が残るのに対して、杯身(115)は、回転ヘラケズリを底部全面に行っており、ヘラオコシ痕跡を消している。

12. 11号横穴(図版第24・25・186・187)

(1)はじめに

10号横穴の北側にあり、10号横穴と軸を揃えて、近接して造られており、この2基で一小群をなすものと判断される。遺物は2面出土し、上面では9世紀中頃の遺物とともに、人骨片が出土し、平安時代に墓として用いられている。

(2)形態と規模

玄室の平面形は撥形を呈している。奥壁から3.55mの位置で、平面形が狭まっていること、この位置付近で玄室を掘削した際の湾曲が壁面で観察できたことから、この位置が玄門であると考えられる。この玄門位置から、土層で観察される閉塞盛土位置が約60cm墓道側にズレており、この横穴には短い羨道が付設されているものと推測される。羨門位置は、閉塞盛土位置から推定して、玄門から0.9m付近のところと判断される。

墓道端には、長さ3.5mにわたって、最大0.6mの深さの墓道端土坑が掘られている。墓道端土坑の両小口部分の底面は、段を有して掘られている。内部は、明黄灰色粗砂で埋め戻されており、底面に接して炭化物が出土した。

各部長をあげておくと、全長9.65m、玄室長3.55m、玄室幅は奥壁部が最大幅で2.4m、玄門部で1.15m、玄室の最大幅は2.35m、羨道長0.9m、墓道長5.2m、墓道幅(上場)0.7~0.95mを測る。

遺物は2面で出土した。上面のⅠ面では平安時代の遺物が出土し、下面のⅡ面は横穴の初葬面にあたる。

(3)土層堆積状況

遺物の出土は、上から8・9層中と25層上面の2面である。Ⅰ面では、平安時代の遺物・骨が出土したので、この上位の1・4~7層については、平安時代以後に堆積したものと言える。これらは、基本的には粘質土系の土砂であるので、天井が崩落した後の陥没穴に雨水に流されて堆積したものと判断される。一方、玄室内のⅡ面である25層の上に堆積している10~16層は、横穴使用停止以後、平安時代までに堆積した土砂で、これらは砂礫層が中心であるので、天井・側壁が崩落したものと判断される。その中でも、14・15層は粘質土で、閉塞土の上に斜めに堆積しているため、閉塞部から玄室内へ雨水とともに流入した土砂と判断される。

23~26層が横穴構築時の初期整地土で、ほかの横穴と同様に、黄色系統の均質な砂礫で整地されている。特に26層は、深く掘削された墓道端土坑を平坦に埋めるものである。25層上面が初葬面で、Ⅰ面に相当する。初葬直後の閉塞土および墓道を埋め戻した土砂の残欠が23・24層と判断される。横断土層B-B'で見ると溝状の堆積をなしている22層および縦断土層で見ると17~21層は、それぞれ、追葬時に墓道上を掘り返して設けた墓道内通路を埋め戻した土砂と判断され、初葬後、少なくとも2回にわたって、玄室内に進入したものと考えられる。整地面は初葬面のみで、新たな面を造ってはいない。

閉塞土・墓道の盛土は、約35cmの高さが認められるが、横穴を閉塞するために、もう少し高く盛られていたと考える。

(4)遺物出土状況

遺物の出土は2面で認められ、Ⅰ面が8・9層中、Ⅱ面が25層上面である。Ⅰ面では、平安時代の遺物・人骨が出土し、Ⅱ面は本来の横穴使用時にあたり、古墳時代後期の遺物とともに人骨が出土した。

Ⅰ面では、人骨と土器を検出した。人骨は、玄室中央のやや奥壁寄りの8層中、標高33.9m付近で、掘形検出面より約15cm掘り下げた段階で、頭蓋骨およびそのほかの骨片を検出した。青年以上おそらく成人の男性と判断される^(注1)。ほぼ同じ標高の9層中で、土師器杯(125・126)、黒色土器椀(127)・皿(128)、須恵器壺(129)、が出土したので、平安時代前期頃に横穴が墓として再利用されたものと判断される。

Ⅱ面は、標高33.6~33.7mにあり、Ⅰ面とは約20cmの高低差を有する。この面では、玄室中央

部よりやや右側壁寄り、人骨4～6を検出した。人骨は骨片が散乱した状態で残存状況は良くなかったが、頭蓋骨・歯の出土位置から頭位を割り出すことで、3体の人骨が配置されているものと推定した。人骨4・5は一直線に並んでいたが、人骨4は頭を玄門に向け、人骨5は奥壁側に頭を向けていることから、2体に分かれるものと判断した。人骨5の南側には、人骨6が置かれており、奥壁側から歯が出土しているため、頭は奥壁に向けていたものと推定される。

遺物は、須恵器杯身2点(117・118)・杯蓋1点(116)・高杯2点(119・120)・壺1点(121)・平瓶2点(122・123)、土師器高杯1点(124)、刀子1点(704)、耳環3点(855～857)が出土した。これらのうち、土器類は人骨4～6の周囲に配置されており、人骨と重なるものはない。奥壁の左側壁に近い位置に土器が集められており、高杯(119)、壺(121)は正立して出土した。高杯(120・124)は横転していた。杯身(117・118)・杯蓋(116)は、全て口縁を上にして置かれていた。人骨6の南には平瓶(122)が正立して、北側には平瓶(123)が横転していた。人骨4からは耳環(856)、人骨5からは刀子(704)、人骨5・6の間からは耳環(857)が、人骨6からは耳環(855)が出土した。このほかに、須恵器平瓶もしくは横瓶の口縁・破片・高杯片が玄室内埋土から出土した。

墓道内の土坑の底面で、炭化物が出土しており、樹種同定分析によると、スギ材である。

(5) 出土遺物

土師器杯(125・126)、黒色土器(127)・皿(128)、須恵器壺(129)はI面より出土した土器群で、『平安京提要』によると、II-古段階に相当し、9世紀中頃のものである。

杯身と杯蓋は、色調・胎土から見て、一揃いの組み合わせとして作られたセットにあるものはない。高杯(120)のスカシは、ヘラ状工具で筋を入れただけのもので、器壁を貫通していない。

耳環は3点(855～857)が出土したが、これらは対になるものはない。

(岩松 保)

(6) 人骨出土状況

11号横穴では、平安時代の人骨1体および古墳時代の人骨を3体を検出した。平安時代の人骨は、I面の玄室中央の奥壁側で出土したが、遺存状況が悪く、詳細は不明である。古墳時代の人骨は、II面で検出した。人骨4は玄室ほぼ中央、右側壁寄りに置かれ、人骨5は人骨4の東に隣接していた。人骨6は、これら2体の南側に隣接しており、骨片の散乱が2か所で認められた。これらの人骨は、ともに保存状態が悪く、詳細な観察は行えなかった。

人骨4は、頭蓋骨・上肢長管骨・下肢長管骨・骨種不明の骨片が10点程度遺存している。人骨の配置は、頭部が玄門側に位置し、奥壁側には長管骨が2群に分かれて、横穴主軸にほぼ平行して並べられていた。これらの長管骨群はともに遺存点数が少ないが、頭蓋骨から奥壁に向けて、上肢長管骨群、下肢長管骨群の順に並べられている。それぞれの群は上肢長管骨と下肢長管骨で揃っているため、それぞれの部位ごとに集められた可能性がある。上肢・下肢の長管骨ごとに集骨されているかどうかの当否は別にして、長管骨が軸を揃えて2群に分けて配置されている状況から、人骨4が改葬骨であることは間違いない。

人骨5は、歯と骨種不明の骨片が数点遺存するのみである。出土した骨はほぼ全てが細片で、

骨の配置の詳細は不明である。歯は、人骨が出土した範囲の中でも奥壁側で出土したことから、頭部が奥壁側に位置していた可能性がある。もしそうならば、人骨4とは逆位に置かれていた可能性が高い。

人骨6は人骨4・5の南側に、骨片が、約20cmの空閑を隔てて、2群に分布している。奥壁側の一群内から歯が出土したので、奥壁側に頭蓋骨が置かれていた可能性がある。

(上田真一郎)

13. 12号横穴(図版第26・27・188・189)

(1)はじめに

玄室内のⅡ面より、平安時代前期の遺物と骨が出土しており、墓として再利用されている。奥壁には小横穴が穿たれていたが、その内部からの遺物の出土はなく、その掘削の目的や性格は不明である。

北側に位置する13号横穴と主軸が揃っており、2基で小群を構成するものと判断される。

(2)形態と規模

玄室の平面形態は、奥壁が広く、玄門部が狭い羽子板状を呈している。壁面の湾曲が発生する位置は、平面形がくびれる位置にはほぼ一致し、土層に見る閉塞盛土位置とも一致するので、羨道は付設されていなかったと推定される。玄室を墓道側から掘削して調査を進めていくと、玄室の天井の一部が残存していた。天井は厚さ数10cmしかなく、安全のため、天井をはずしながら調査を行った。横断面B-B'における天井までの高さは、地山面から1.6m、Ⅱ面・Ⅲ面からはそれぞれ、1.1m・1.5mであった。

全長13.15m、玄室長4.4m、玄室幅は奥壁部が最大幅で2.85m、玄門で1.45m、墓道長8.75m、墓道の上幅は0.7~1.7mを測る。遺物・人骨は3面で出土した。

奥壁の南東隅で、地山面から約0.7m上位で、径約0.6m、長さ1.4mの小横穴が南東方向に穿たれていた。小横穴の先端は南側に屈曲して、さらに0.5mの長さにわたって、小さな袋状の孫横穴が掘られていた。土層の観察により、先端部の横穴は、小横穴の本体部分とは別個に掘削されていることが判明した。孫横穴は、狭い小横穴の奥に掘削されており、不可能とは言えないまでも、手を伸ばして人手で掘るのは難しい状況である。そのため、小動物の手になる可能性が大きい。これらの小横穴内には、遺物は全く認められず、土砂の堆積順序より、平安時代以降に埋まったものと判断される。

墓道の端部は、長さ約3mにわたって土坑状にゆるやかに掘削され、内部は暗黄灰色砂礫土で均質に埋め戻されている。明瞭な土坑にはなっていないが、墓道端土坑状の施設と言えよう。

(3)土層堆積状況

玄門から墓道にかけての閉塞位置の土層は、記録を取る前に土層観察用畦をはずしてしまい、十分な観察と記録を残すことができなかった。そのため、閉塞盛土の状況と墓道内通路の再掘削状況とを関連づけて解釈することができない。

1～21層が横穴使用停止以後に玄室内に堆積した土砂で、奥壁南東部に掘られた小横穴内には11層の淡黄灰色砂礫が堆積している。小横穴の先に掘削された孫横穴は、この11層を切り込んで掘られており、その埋土が10層の淡褐色砂礫である。これら小横穴・孫横穴の内部からは、全く遺物が出土しなかった。小横穴を埋める11層の淡黄灰色砂礫層の玄室左隅部においては骨片が混じっていた。これらの層の下位には平安時代前期の再利用面があるので、この小横穴が埋まったのは平安時代以降と言える。孫横穴は11層を切って構築されているので、平安時代以降の構築になるものと判断される。

遺物・人骨は3面から出土した。I面が11層中、II面が21層上面で平安時代の再利用面であり、III面が31層上面で、横穴使用時の初葬面にあたる。31層は横穴構築時の初期整地土層である。初葬時の閉塞盛土は23・24層で、このうち23層の淡茶黄色礫混土は何層かに分層可能であるが、閉塞のための盛土として一括した。

墓道内の土層は、22層が後世の流入土と判断されるほかは、全て、横穴使用時の整地土および埋め戻し土である。25～27層が墓道内通路の埋め戻し土と判断され、堆積にやや不自然なところがあるので、複数回にわたって通路が掘削され、埋め戻された可能性がある。28～30層は初葬直後の墓道への埋め戻し土と判断され、32～34層が横穴構築時の初期整地土層である。

(4)遺物出土状況

I面は、標高33.5～33.6mに位置し、11層中の奥壁に接して骨片が2か所で出土しただけである。これらは比較的近接して出土したにも係わらず、約20cmの高低差がある。やや高低差が大きいことと、ほかの遺物が全く認められないことなどから、攪乱などにより、II面の人骨の一部がこの高さにまで紛れ込んだとも考えられる。

II面では、奥壁部から玄室中央にかけて遺物が出土し、奥壁部が標高33.2mで、奥壁から玄室中央に向けてやや高くなって標高33.4m付近で遺物が出土する。奥壁の北西隅には6枚の長年大寶(848年初鑄)が置かれ、玄室中央付近では、黒色土器碗(146)、土師器皿(144)・杯(145)、須恵器平瓶(142)、槍状鉄製品(709)が出土した。玄室中央部の左側壁付近で、頭骨とそのほかの骨片を検出している。

III面は横穴の初葬面にあたり、横穴使用時における埋葬面はこの面だけである。須恵器杯蓋2点(130・131)・杯身2点(132・133)・高杯4点(136～139)・同蓋2点(134・135)・脚付長頸壺1点(140)・平瓶1点(141)、土師器碗1点(143)、刀子1点(706)、鉄鏃2点(707・708)、砥石(983)が出土した。杯蓋(130・131)、杯身(132・133)、蓋(134・135)は全て口縁を上にして出土しており、枕として利用された状況ではなかった。土師器碗(143)は底部を上にして出土した。このほか、図化できなかったが、須恵器甕片が出土した。

墓道内の通路埋め戻し土と判断される25層中より須恵器甕片および横瓶体部片が出土した。須恵器甕片は、13号横穴の墓道内に埋置された須恵器甕(173)と接合した。横瓶の体部片は、女谷B支群6号横穴の墓道前面の墓地内通路上より出土した破片と接合した。刀子(705)は墓道検出時に埋土中から出土した。

(5) 出土遺物

杯蓋(130・131)はともに天井部を回転ヘラケズリで調整を行っているのに対して、杯身(132・133)はヘラオコシ後、指でナデ調整を行っているだけである。また、この横穴から出土した杯身・杯蓋および高杯・同蓋には、一揃えとして作られた組み合わせのセットは認められない。高杯蓋(134)には「×」のヘラ記号が施されている。平瓶(141)は、口縁端部が全周にわたって欠損しており、頸部外面にはヘラ記号が施されている。砥石(983)は女谷・荒坂横穴群の一連の調査の中で、唯一の出土例である。

Ⅱ面では、古銭が6枚出土しており、全て長年大寶(848年初鑄)である。黒色土器は『平安京提要』のⅡ期古～中段階にあたり、9世紀中～10世紀初頭のもものと判断される。土師器皿(144)・杯(145)は、小森・上村編年(小森・上村1996)によると、Ⅱ期古・中段階にあたり、9世紀中頃～後半のものである。

(6) 人骨出土状況

人骨は、Ⅱ面の玄室中央付近の南壁寄り出土した。同一面で出土した土器の年代観より、9世紀中～後半に埋置されたものと判断される。頭蓋骨に近接して骨種不明の骨片が出土した。なお、Ⅰ面の11層中よりも骨片が出土したが、遺存状態が悪く、詳細は分からない。

頭蓋骨は、右眼窩上縁、前頭骨・右側頭骨・頭頂骨が遺存している。しかし風化・破損が著しく、詳細な観察は行えない。そのほかに、骨種不明の骨は長管骨らしきものであるが、破損が著しいため詳細は分からない。骨の遺存状況が悪いため、性別・死亡年齢・身体特徴は、いずれも不明である。

14. 13号横穴(図版第28・29・190～192)

(1) はじめに

墓道内に須恵器甕が埋められており、詳細にその状況を観察し、埋納の過程を復原することができた。また、この甕の破片の1点は、12号横穴の墓道内から出土した。

北側の14号横穴とは約5mの空間が認められ、南側の12号横穴と2基で小群を構成すると判断される。

(2) 形態と規模

横穴は全長が12.9mで、玄室は撥形を呈しており、玄門部は側壁に残る湾曲の発生と平面形が狭まる位置とが一致する。玄門部に閉塞盛土が位置することと遺物の配置が玄門より外に出ないことから、羨道は付設されていないと思われる。玄室の長さは、4.2m、奥壁部の幅2.85m、玄門部の幅0.65mを測る。墓道長は8.7m、墓道の上幅0.7～1.0m、遺物は1面で出土した。

墓道端は長さ約1.8mにわたって土坑状に約20cm深く掘られている。この土坑状の掘り込みを中心に、墓道端より約5.6mにわたって、淡黄灰色砂礫が厚さ30～40cmで埋め戻されている。

(3) 土層堆積状況

1～12層は、横穴使用停止後の堆積土で、基本的には、砂礫層と粘質土層が互層になって堆積

している。このうち、3・4層より上位の約60cmにわたっては、淡黄灰色粘質土と暗黄灰色砂礫が互層になってほぼ水平に堆積している。その堆積が、水性堆積の状況を呈していることから、大阪層群よりなる天井が一挙に陥没したものと判断される。3～12層は、玄室内が空間を保っている時点で、玄室内に流入もしくは天井が崩落した土砂と判断される。

遺物は、31層の暗褐色砂礫上面のみで検出した(I面)。遺物の出土は見なかったが、土層の観察では、I面の土を20層の灰白色粘土で整地し、この上面でも何らかの作業が行われたものと判断される。31層および32層は横穴掘削時の初期整地土で、31層上面が初葬面である。32層の淡黄灰色砂礫は均質な砂礫層で、墓道端土坑状の掘り込みを中心に埋め戻されている。

26～30層は、初葬面であるI面に伴う閉塞土と墓道の埋め戻し土(残欠)である。これを切り込んでいるのが21～25層で、追葬時に墓道上に設けた墓道内通路を埋め戻した土砂と判断する。この通路を掘削して玄室に入り込み、玄室内に20層で整地し、この上面で何らかの作業を行ったと推測される。退出時には、21～25層で通路を埋め戻す際に、22層中に須恵器甕を据えている。15～18層にもその須恵器甕の破片が広く入り込んでいたが、その状況は、甕の破片が土砂とともに窪地に流入して堆積したというよりも、後述のように、閉塞開口部への埋め戻し土の15～18層内に甕の破片を意図的に混入したと考える。

以上のように、初葬直後に閉塞土を盛り上げ、墓道を埋めた後に、横穴への進入は1回行われたと推測される。

(4)遺物出土状況

玄室内の遺物の出土は、31層上面の1面だけである。遺物は玄室のほぼ全域から出土し、玄門部に近いものは閉塞土によって覆われていた。玄室内では、須恵器杯蓋2点・杯身14点・高杯5点・同蓋2点・平瓶2点、土師器杯1点、刀子1点、耳環1点が出土した。

須恵器杯身・杯蓋の出土状況は、杯身(160・161)は近接して出土したが、ともに口縁を上にしており、枕としての配置ではなかった。玄室中央では杯身(151・152)、高杯蓋(164)、土師器杯(174)が置かれており、これらは全て口縁を上にしていた。玄門部で出土した杯蓋(147)と杯身(153)のみ、口縁を下にして並べられており、枕として用いられた可能性がある。また、杯身・杯蓋が口縁を合わせて出土したものもない。

墓道の玄門部近くにおいては、土師器甕(175)が完形で、口縁を上にして、ほぼ直立して据えられていた。墓道内の横断土層で見ると、28層上面に置かれており27層で覆われていた。27・28層が堆積した時期の解釈より、初回の埋葬後に、墓道を埋める際に埋め置かれたと判断される。

須恵器甕(173)は、墓道内通路の埋め戻し土と判断される22層の中に口縁が置かれて、倒立した状態で出土した。口縁部から体部上半にかけては、土圧により破片となりながらもほぼ原形を保っていた。同一個体の破片は、15～18層中にも入り込んでいたが、その大半は18層中と22層中の、さほど広くない範囲で出土した。また、体部の破片のうち数点は、口縁よりも下位で出土した。以上のことから、甕の据えられた状況を復原すると、まず、須恵器甕が体部上半と体部下半に大きく割られた後に、下半部はさらに細かく割られ、その一部は閉塞部の上位の位置で、墓道

内通路の22層の砂礫土とともに埋め戻される。その後、甕上半部を倒立させて置き、そのほかの破片は15～18層の閉塞土に混入させて、閉塞位置から玄室内に向けて閉塞土が盛られたのであろう。この須恵器片のうちの1片は、12号横穴の墓道内より出土した。

そのほか、墓道内22層より杯身(163)が出土し、玄室I面で出土した杯身(156)は、その破片が墓道内より出土した。また、図化できなかったが、須恵器の高杯と思われる破片が墓道内の甕片(173)に混じって出土した。墓道端の前面の通路上では、須恵器壺片や土師器碗片が出土した。

(5)出土遺物

杯身は、受け部の立ち上がりが短く、10cm内外の口径と小振りのものである。また、杯身・杯蓋は、全てヘラオコシ後にユビナデで調整を行っており、回転ヘラケズリによる調整は行われていない。蓋と身が一揃えのセットとして作られたと判断できるものは、胎土・焼成などより、杯蓋(147)と杯身(148)、蓋(164)と高杯(165)、蓋(166)と高杯(167)がある。高杯(165・167)はともに透かしが無く、胎土焼成・色調がよく似ており、同一工人の手になるものと推定される。

土師器杯(174)と甕(175)は胎土分析を実施した。

刀子(710・711)は金具が付いたものである。耳環(858)は1点だけの出土で、金環である。

玄室内より、用途不明の炭化材の小片が出土しており、樹種同定したところ、コナラ属のものであることが判明した。

15. 14号横穴(図版第30・31・193・194)

(1)はじめに

この横穴の玄室上に、長さ9m、幅3m程度、深さ約10cmの不定形な土坑状の色の違いが認められ、その掘削中に寛永通寶が出土した。調査時には、床面から0.7m上位の高さで完形の須恵器短頸壺が出土し、出土した遺物はこの1点だけであったので、盗掘時に紛れ込んだものと考えたが、最終的には、後述のように、人為的に造られた埋葬面であると考えに至った。

近接して横穴は造られておらず、14号横穴1基で小群をなしている。

(2)形態と規模

全長11.8mで、墓道端までを調査した。奥壁から3.4mの地山面上に、高低差15cmの段が掘り残されており、この位置が玄門部と考えられ、側壁に残る湾曲が始まる位置とも一致する。

玄室の平面形は羽子板状を呈しており、玄室長3.5m、玄室幅(奥壁)2.15m、玄門幅1.35m、玄室最大幅2.25mを測る。この玄門位置と縦断土層に見る閉塞盛土位置とは一致せず、短い羨道が付設されていたものと想定される。奥壁から4.6m付近まで、両側壁は垂直からやや内湾して立ち上がっているのに対して、それより墓道側は上に開いた逆「ハ」の字形をなしている。両側壁の形状が異なることから、この4.6m付近で横穴の掘削が異なっていたと推定され、墓道側はオープンカットで、奥壁側はトンネル状に掘られていたと推測される。そのため、この位置付近より玄門にかけてが、羨道であったと推測される。羨門の位置は極めて不確かであるが、羨道長1.3m程度とすると、墓道長は7m程度となる。墓道の上幅は1.10～1.55mを測る。墓道端は、

段を有さずに平坦に終わる。墓道端より1.2mの位置に、長さ1.2m、深さ約0.4mの墓道端土坑が穿たれている。遺物は3面で出土した。ほかに1面、遺物のない作業面が認められる。

(3)土層堆積状況

1・2層および3層が、横穴の埋没以降に上位より掘削された不定形の土坑状の埋土で、3層中より、寛永通寶2枚が出土した。4層の黄褐色土は、横穴が造られた谷内に厚く堆積している土砂流と同一のものと判断される。5～7層は横穴使用停止後に玄室内に堆積した土砂で、天井が崩落したものと推定する。8・9層は、横穴使用停止後に墓道内に流入した土砂であるのか、横穴使用時の最終段階に墓道を埋め戻した土砂であるのか、判断しがたい。特に、8層には有機質が多く混じっており、長期間にわたって表土を形成していたものと判断される。

遺物が出土したのは3面あり、奥壁から1mの位置で見ると、I面が15層上面で標高32.2m、II面が18層上面で標高32.1m、III面が33・35層上面で標高31.75m付近である。I面は検出面から0.4m下位で、地山面から0.55m上に位置する。遺物の出土は見なかったが、層序の関係より、55・56層上面が初葬面に相当するものと判断され、標高は31.7mである。

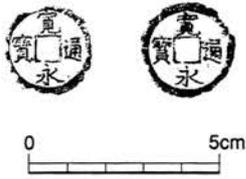
11～14層は、横穴の最終使用時に伴う閉塞盛土と墓道内通路の埋め戻し土と判断される。14層は、墓道から玄室中央付近にかけて堆積している点と、この層がI面を覆っている点から、最終段階の閉塞土の残欠と判断され、その大部分が自然もしくは人為的に玄室内に引き入れられたと考える。11～13層は横断土層で見ると「U」字形に堆積しており、墓道内通路を埋め戻した土砂と判断する。15～17層はI面を形成するための整地土で、18～20層はII面を形成するための整地土、33～35層はIII面を形成するための整地土である。それぞれの埋葬面に対応する閉塞土は、その一部が残っているだけであるが、21～23層、24～29層、30～32層のそれぞれがIII面に対応する閉塞土と墓道内通路を埋め戻した土砂で、3回の出入りがなされている。初葬面に対応する閉塞土・墓道内通路の埋土は、36～43層、44～46層、47～54層のそれぞれと判断され、3回にわたって進入している。55・56層は、横穴構築時の初期整地土で、墓道端土坑から玄室に至るまでの全面を整地しており、この上面が初葬面と判断する。

また、閉塞土を盛り上げている位置が移動しており、III面を埋葬面としている段階に、奥壁側に約50cmの移動を行っているようだ。これは、荒坂B支群1号横穴でも認められ、例えば、羨道の天井が崩落したといった事情により、閉塞位置を変える必要があったためと思われる。

(4)遺物出土状況

玄室内では3面で遺物の出土を認めたが、最下面の初葬面と判断する面では遺物の出土は見なかった。

I面では、須恵器短頸壺(189)が奥壁に接して完形で出土した。左側壁に沿って、人頭大の石4個が列状に並べられており、その前面に須恵器杯蓋(182)が破片になって散らばっていたが、この杯蓋はIII面より出土した土器片と接合するので、おそらく、玄室内で何度も作業を行うことによって、III面からI面に土器片が混じり込んだものと判断する。須恵器杯蓋(180)は、墓道内の38層より出土した土器片と接合した。



第2図 女谷B支群14号横穴上面出土貨幣

Ⅱ面では、奥壁に接して須恵器提瓶(190)が出土した。完形に近い須恵器杯身(183)が玄門付近で出土したが、Ⅲ面出土の土器片と接合したので、元々はⅢ面にあったものが、閉塞土の掘り返しなどの要因で、Ⅱ面に紛れ込んだものと考えられる。

Ⅲ面では玄門部から羨道にかけて遺物が出土した。須恵器杯身2点(177・181)は完形で出土した。杯蓋(182)はⅠ面、杯身(183)はⅡ面で出土した破片と接合し、元々はⅢ面に納められたものと判断できる。須恵器杯身(179)は墓道内36層出土の破片と、杯蓋(176)は墓道内で出土した破片と接合した。

墓道内では、11層中より須恵器杯蓋(184)・脚付壺(188)が出土した。脚付壺は墓道端の前面で出土した破片と接合した。そのほか、28・29層はⅢ面を作業面とする段階に墓道内通路を埋め戻した土砂と判断されるが、28層からは須恵器杯身(185)、29層ほかからは須恵器高杯(187)が出土した。杯身片(178)は36層より出土した。杯身(186)は墓道端の墓地内通路上で出土した。接合関係がなく、図化もできなかったが、墓道内より須恵器杯身・杯蓋・高杯の破片、土師器片が10点近く出土した。

(5) 出土遺物

第2図は、横穴の上面で出土した寛永通寶の拓影である。

須恵器杯蓋5点(176・178・180・182・184)・杯身6点(177・179・181・183・185・186)・高杯1点(187)・脚付壺1点(188)・短頸壺1点(189)・提瓶1点(190)が図化できた。

遺物は土器のみで、鉄器や耳環は出土していない。杯蓋(178)は口縁が10%程度しか残存していないので、図ではやや口径が大きくなっているが、杯身(179)とセットである可能性がある。そのほか、胎土・焼成・色調より、一揃えの組み合わせのセットとして作られたと判断できるものには、杯蓋(176)と杯身(177)、杯蓋(180)と杯身(181)、杯蓋(182)と杯身(183)、がある。

杯身の口径は11cm未満で、杯蓋の口径も12cmを超えるものはわずかである。杯身・杯蓋の底部および天井部は、わずかながらヘラケズリが認められるものの、ヘラオコシのままのものが多く、ヘラケズリを省略する傾向にある。

16. 15号横穴(図版第32・33・195・196)

(1) はじめに

女谷B支群が分布する谷の口部分で検出した横穴で、この1基で小群をなすものと思われる。墓道の大半は削平により消失しているが、墓道端土坑の残欠を確認し、その全長はほぼ計測可能である。

(2) 形態と規模

玄室は羽子板状を呈しており、玄室内の壁面には、ほぼ元の形状が分かる程度の湾曲が認められる。その湾曲より、天井の高さは地山面より1.6m程度に復原できる。しかし、玄室と墓道の境で湾曲が発生する位置は、壁面の高さがほとんど残存していないので、やや不確かである。壁

面の湾曲が発生する地点は、平面形で見ると、漏斗状に狭まる直前の位置にあたり、平面形の変換点とほぼ一致していることから、この位置が玄門であったと推定される。このように推定した玄門位置と、閉塞土を盛り上げた位置とがほぼ一致しているので、羨道を有しない横穴と判断される。

墓道はそのほとんどが消失していたが、横穴の主軸上で土坑を検出した。墓道端が土坑状に掘られており、その底部が残存しているものと判断した。

各部長を掲げると、全長8.45m以上、玄室長2.5m、玄室幅(奥壁)2.0m、玄室幅(玄門)1.05m、玄室最大幅2.0m、墓道長5.95m以上、墓道の上幅は1.5mを測る。

遺物・人骨は2面にわたって検出した。

(3)土層堆積状況

遺物・人骨は2面で検出した。Ⅰ面は、14・16層下面に位置し、18・20・21層の上面に相当する。標高31.6m付近である。Ⅱ面は24層の上面で、初葬面にあたり、標高31.4～31.5mである。

横穴内の埋土は大きく5層に分かれる。1～14層は、横穴使用停止以後に堆積したもので、天井の砂礫が陥没した土砂と、その後のできた地表の陥没地に堆積した土砂である。14層の赤褐色粘質砂がⅠ面出土の人骨を覆っていた。15・16層は玄門から玄室内に堆積した粘質土系統の土砂で、追葬時に閉塞土上に開けた進入口を埋めるものである。17～19層は、Ⅰ面に進入するための閉塞土の開口と墓道内通路を埋める土砂である。20～23層は、Ⅱ面に相当する段階の閉塞盛土および墓道内通路の埋め戻し土の残欠と判断される土層である。20層は、玄室内のⅠ面を形成するための整地土として、初葬時の閉塞土を転用したものと判断される。20・21層下面はⅡ面で、この下位には、横穴構築後の初期整地土の24層がある。墓道先端部には、墓道端土坑が認められ、25層の淡暗黄褐色の粗砂で埋められている。

(4)遺物出土状況

玄室内の埋葬面は2面を確認し、Ⅰ面は14・16層下面に相当する。この面では、人骨7を奥壁左側で検出した。人骨は14層中に埋まっていたが、この層は横穴使用停止後の堆積層と判断され、改葬されて置かれたのは20・21層上面と判断する。人骨以外の遺物の出土はなかった。

Ⅱ面は24層の明褐色礫混中粒砂の上面で、初葬面に相当する。玄門部左側壁近くで、須恵器杯蓋4点(191～194)が完形で出土した。全て口縁を上にして逆位に置かれていた。玄門部の中央付近では、土師器杯小片が出土したが、図化できなかった。玄門付近では、30×80cmの範囲で炭化材を検出した。繊維の方向は横穴の主軸方向に沿っている。樹種同定を委託したところ、その材質はスギであるとの結果を得た。ほかに、精査時に、須恵器提瓶もしくは横瓶片、土師器碗片、瓦片が出土した。

(5)出土遺物

杯蓋4点は全て、口径11cm以下のものである。杯蓋(191)は天井部を回転ヘラケズリで調整しており、杯蓋(192・193)は天井部の外周のみ回転ヘラケズリを行っており、杯蓋(194)はヘラオコシをした後にナデで調整を行っている。(岩松 保)

(6)人骨出土状況

人骨7はI面より出土した。玄室西側壁寄りに各骨が集められた状態で検出した。頭蓋骨・下顎骨・肋骨・椎骨・上腕骨・尺骨・橈骨・大腿骨・脛骨・腓骨および手足の骨など、ほぼ全身に及ぶ骨が遺存していた。遺存骨は概ね保存状態が良いと言えるが、完存するものは皆無である。

集骨は大きく3層に分かれていた。頭蓋骨が最上位にあり、中位には長管骨や下顎骨などがあり、最下位には肩甲骨・肋骨・椎骨・手足の骨が置かれていた。

頭蓋骨は大きく数片に破損していたために原位置は特定できなかったが、破片は奥壁側に集中して出土した。下顎骨は頭蓋骨片の下位にあり、前面を玄室の開口部方向に向けていた。長管骨は横穴主軸方向にほぼ平行して「川」の字様に並べられていた。玄室西側壁より順に、右脛骨、左尺骨、左上腕骨、右尺骨、左大腿骨、右大腿骨と並んでいた。このうち、左脛骨のみが右大腿骨の上に交差した状態であった。最下位には、頭蓋骨・長管骨以外の骨が不規則に置かれていた。右橈骨は長管骨に分類できるが、これのみ最下位の一群から出土した。

上肢と下肢の長管骨が1か所に集められており、女谷B支群1号横穴出土の人骨1に見られるような、上肢と下肢の長管骨を分ける意図は認められないが、骨の配置状況より、改葬骨と判断される。

(上田真一郎)

17. 16号横穴(図版第34・35・197～199)

(1)はじめに

横穴を平面的に掘り下げていくと、玄室内は砂層のみが堆積しており、閉塞に伴う盛土が認められないため、埋葬を伴わない横穴—横穴構築時に天井が陥没したので、墓道とともに埋め戻された横穴と考えていた。ところが、床面近くまで調査を進めた結果、玄室内で人骨・遺物の出土を見たため、通常横穴であることが判明した。誤った予断で調査を進めたため、閉塞部の土層の観察については、十分な問題意識を持っていなかったため、やや不明瞭なところがある。

1号横穴と2基で小群を構成しているものとする。

(2)形態と規模

玄室は長方形から羽子板状を呈しており、左側壁に袖部が造られている。全長は12.9mを測り、玄室長は3.7mで、奥壁における玄室の幅は2.15m、玄門部の幅は1.4mで、最大幅は奥壁よりやや玄門側で2.55mを測る。この玄門位置は、閉塞盛土位置と一致していることから、羨道は付設されていないようである。墓道の上幅は最大で2.6m、墓道長は9.25m、墓道端から玄門側に4.4mの地点で、約15cmの高低差を有した、なだらかな段差が設けられており、33層の黄褐色砂で埋め戻されて平坦になっている。墓道内土坑と同様の性格が考えられる。天井までの高さは1.7m程度に復原できる。

(3)土層堆積状況

玄室内の1～5層および墓道内の6～12層は、横穴使用停止後に堆積した土層と判断するもの

で、後者は粘質の強い土層で、これより下位の砂質の土層と区別される。前者は玄室内に厚く堆積した砂礫層で、締まりがなく、玄室の天井が陥没した土層と判断される。

27層中に人骨が埋まっており、26層下面で耳環(859・860)が出土したので、28・29層上面が埋葬面と判断した。遺物の出土面はこの1面だけである。

横穴の形状に地山を掘った後に、28～34層で初期整地を行っている。この整地土は、黄褐色砂を基本とし、この上面で初葬を行っている。このI面上には27層が水平に堆積しており、人為的に造られた整地面と思われる。

墓道上では、その横断土層の観察より、23・24層、13・14層を中心として、それぞれが異なった段階の墓道内通路の埋め戻し土と判断される。これ以外に、21・22層もまた違った段階の墓道内通路である可能性がある。

閉塞土は、25層の淡黄灰色砂と26層の淡黄褐色礫混土がそうと判断され、山形をした盛り上がり認められただけで、細かな層序は観察できていない。墓道内の土層の観察では、墓道内通路が2ないし3条が観察されるので、この閉塞土もそれに対応した層序が観察されるはずであるが、先述のように問題意識がやや希薄であったこと、閉塞盛土の25・26層は砂質で、色調も単調であったため、分層できていない。

(4)遺物出土状況

調査時には、複数回にわたって遺物を検出し、数面の出土面を想定していたが、室内整理で出土遺物の配置やその高さを検討すると、全て同一面と判断できる状況であった。

I面では人骨4体と土器をはじめとする遺物を検出した。人骨の配置は、玄室右側の礫床上に人骨11があり、玄室左側に人骨8・9が並べられていた。これらの人骨は、横穴主軸に平行して置かれていた。また、人骨11の北側、人骨9の玄門側では、耳環一対とその間に骨片(人骨10)を検出した。

人骨の配置を中心に遺物の出土状況を見てみたい。人骨11が置かれている礫床は、拳大の円礫を敷き詰めて作られており、長さ1.75m、幅は玄室側が0.45m、玄室奥側は石の配列がやや乱れており、幅0.8mを測る。玄門側に杯蓋2点(197・198)が伏せて置かれており、その上に頭蓋骨片があった。枕として利用したものである。この奥壁側には、長管骨が束ねられていた。この礫床の西側、奥壁に接して土器が集められていた。口縁を上にして置かれた杯身(201)の内部に提瓶(203)が置かれていた。その西側には、杯蓋(195)、杯身(196)の順で口縁を上にして重ねられており、一番上に高杯(202)が置かれていた。これら2群の土器の間には、杯身(200)が破片となって散らばっており、その中には杯蓋(195)の破片も混じっていた。

人骨8・9も各部の骨が動かされた状態で並べられており、ともに奥壁側に頭蓋骨があり、玄門側に四肢の長管骨が揃え置かれていた。頭蓋骨の残りは比較的良好であった。人骨8の頭蓋骨の下には、須恵器杯蓋(199)が3片に割られて挟まれており、頭蓋骨が横転しないように置かれていた。この杯蓋は、接合しても約1/2にしかならず、ほかの1/2は出土していない。人骨8の頭蓋骨の下および人骨9の頭蓋骨の東側で、耳環2点(861・862)が出土したが、ともに、10×8cm

程度の木質がその下に残存していた。箱に納めて耳環を副葬した可能性があるが、棺材が耳環の周辺だけ残存した可能性も否定できない。人骨8の体幹骨・長管骨が置かれていた辺りから、刀子(712)が出土した。長管骨に平行するように置かれている。

人骨10は、耳環(859)と耳環(860)が約20cmの間隔を空けて出土し、その間にはわずかな骨片が散乱し、炭化材が腐食して黒ずんでいた。頭蓋骨がこの位置にあったものと推定される。

そのほかに、墓道端近くの33層の初期整地土中より、炭化材の小片が数10点出土した。

(5)出土遺物

土器では、須恵器杯身4点・杯蓋3点・高杯1点・提瓶1点が図化できた。土師器の出土はみなかった。耳環は金環(859・860)と銀環(861・862)の2対が出土した。鉄器は刀子(712)が1点出土しただけである。

杯蓋(195)と杯身(196)は、一揃いの蓋と身として作られたセット関係が認められる。杯蓋(199)を除き、基本的に杯身・杯蓋の底部・天井部は回転ヘラケズリによって調整を行っている。

耳環(861・862)のそれぞれの下から出土した炭化材および人骨10の耳環(859・860)下で出土した炭化材、耳環(862)の接面に挟まっていた木質の4点を樹種同定委託した。耳環(862)の木質は予備鑑定により、小片であることと錆化が進んでいるので鑑定はできないであろうとの回答を得、鑑定を断念した。そのほかの耳環(861)はコウヤマキ、耳環(862)は針葉樹、耳環(859・860)は針葉樹(マキ属、モミ属、ツガ、スギ、ヒノキ科のいずれか)という鑑定結果であった。また、墓道端近くの33層の初期整地土中より出土した炭化材も樹種同定委託を行い、その結果、ヒノキ科と判明した。

(岩松 保)

(6)人骨出土状況

当横穴からは4体の人骨がI面より出土した。全て保存状態は悪い。玄門部の北側壁寄りに人骨10、玄室中央部南側壁寄りの礫敷き上から人骨11、玄室奥の北側壁寄りに2体、北から人骨8・9を検出した。これら4体はそれぞれ重複関係を有さない。人骨8・9が南北方向に隣接し、人骨10・11が東西方向に隣接している。

人骨8は、頭蓋骨・下顎骨・骨種不明の骨片が10点前後遺存していた。頭蓋骨は、いずれの骨片とも重複関係をもたず、右側頭部を下にして横位に検出した。下顎骨は頭蓋骨から約5cm離れており、骨種不明の骨片が下顎骨上やその周辺に集められていた。

人骨9では、頭蓋骨・下顎骨・肋骨・上腕骨・尺骨・足根骨などが、10点前後遺存していた。頭蓋骨は右側頭部を下に横転しており、ほかの骨片とは重複関係を有していなかった。下顎骨は頭蓋骨と約20cm離れていた。頭蓋骨から開口部に向けて約40cm離れて、長管骨が軸を揃えて集められていた。その方向は横穴主軸に平行する。集骨内には、上位に脛骨や大腿骨、下位に腰骨や上腕骨が置かれていた。骨の配置状況から、人骨9は改葬骨と判断される。

人骨10は、歯の破片と下顎骨と判断される骨片が数点遺存しているだけである。これらの骨片の左右に、耳環が1点ずつ見つかった。耳環と耳環の間は18cm離れており、その間に頭部の骨が

遺存していることから、耳環を着装した状態で骨化した可能性が指摘できる。

人骨11は、頭蓋骨・下顎骨・尺骨・中手骨・脛骨・腓骨が10点程度遺存していた。頭蓋骨と下顎骨は同一箇所であり、約40cm離れて長管骨が長軸を揃えて集められていた。頭蓋骨・下顎骨は横穴の開口部側に位置し、長管骨の方向は横穴主軸に平行する。

(上田真一郎)

18. 17号横穴(図版第36～38・200～204)

(1)はじめに

この横穴は天井が残っており、重機により天井をはずして調査を行った。その際の崩落土を除去した後に、土層観察用の畦を設定して、調査に取りかかった。この横穴の特徴としては、初期整地を大幅に行っている点であり、墓道端土坑部で最大約1.5mの厚さで整地を行っている。

18号横穴と近接して造られ、また、軸も一致しているので、2基で小群をなしているものと思われる。

(2)形態と規模

玄室の平面形は均整の取れた杓文字形を呈しており、壁面に残る湾曲の発生位置と閉塞盛土位置、平面形の屈曲位置が合致することから、羨道を有しない横穴と推定できる。

この横穴の特徴としては、初期整地を大幅に行っている点であり、玄門付近では約0.8mの厚さで均質な淡暗黄褐色砂を埋め戻している。横穴の掘形の底面は、墓道部分はほぼ一定の深さであるが、玄門から玄室奥に向けては徐々に浅く斜めに掘削している。そのため、墓道は墓道端から玄門にかけては、ほぼ同じ厚さの整地を行っているが、玄室内は奥壁に向けて徐々にその厚さを減じている。墓道端近くでは、長さ3.7m、深さ65cmにわたって墓道端土坑が掘削されており、内部は淡茶黄色砂礫で埋められている。この土坑の底には、長さ50cm、深さ約20cmの小土坑が穿たれていた。埋土は淡茶黄色砂質土で、極めて緻密な土質で、締まり具合も固いものであった。墓道端土坑の最深部では、通常の整地土の厚さも含めて、約1.5mの厚さで埋め戻している。これらの一連の作業は、均質な砂礫で埋め戻していることから、玄室内の排水を目的とした暗渠施設と推定される。

全長12.5m、玄室長3.9m、整地を行った埋葬面上における玄室幅は奥壁部が最大で2.3m、玄門幅1.4m、玄室の最大幅2.3mを測る。地山面上での玄室幅は奥壁部が最大で2.0m、玄門幅0.9mを測る。墓道長8.6m、墓道上幅2.6mを測る。遺物は3面で出土した。天井までの高さは、壁面に残る湾曲より、1.8～2.0m程度に復原できる。

玄室の奥壁左側には小横穴が穿たれていたが、土層の観察より、横穴の使用が停止して以後、ある程度の時間を経た後に掘削されたものと推測する。

(3)土層堆積状況

1～9層がその土質より、横穴使用停止後に堆積した土層と判断される。人為的な手が加えられているのは、5～7層の小横穴の掘削と4層中より出土した馬の下顎の埋納である。小横穴は

奥壁に掘り込まれており、天井崩落の危険のため、途中で調査を中断したが、約1mにわたって直線的に掘られた後、向かって右側に屈曲して掘られている。この小横穴は8層上面より掘り込まれているが、内部から遺物は全く出土しなかった。8層中には、閉塞土・墓道内に埋められた須恵器大甕片が流入して混じり込んでいるため、横穴廃絶以後の掘り込みと判断される。遺物の出土がないので確言はできないが、女谷B支群12号横穴でも同様の小横穴があり、その横穴では平安時代に再利用されていることから、おそらく平安時代以降の再利用時に掘り込まれたものと判断される。また、その際に、馬骨が安置されたのであろう。1～3層はそれ以後の堆積層で、8・9層は横穴使用停止直後に横穴内に流入・堆積した土層と考える。8層の上面で馬骨を検出した(I面)。

10層より下位が横穴使用時の堆積土と判断するものである。

45～49層は初期整地土で、47層は厚さ0.6m程度で墓道全体を整地し、48・49層は墓道端土坑を埋める土砂である。47層の上には、46層の明茶褐色砂質土が10～30cmの厚さでほぼ墓道全体に整地されており、玄室床面にはそれとは別に、45層の明褐色粘質土を5cm程度の厚さに均質に敷いて、初葬面を構築している。

遺物の出土面は45層上面、21層上面、8・10層上面の3面であるが、Ⅱ・Ⅲ面が横穴を構築した集団の使用に伴うもので、Ⅰ面はいわゆる再利用面と判断される。

閉塞盛土部の縦断土層は、調査手順の不手際から、一部記録をできていないところがあり、やや不明瞭なところがある。閉塞盛土および墓道内の土層を観察すると、少なくとも4回にわたる開口が行われており、10～18層、22～30層、31～37層、38～44層がそれぞれの開口に伴って埋め戻された土砂と考えられる。これらの土砂が玄室内に流れ込んだ土層は、基本的には淡黄褐色砂質土と明褐色砂質土の互層となっている。

10～18層は、古墳時代の横穴使用に伴って、最後に玄室に進入した後に埋め戻した土砂と判断する土層である。この10～18層で埋め戻された進入口は、閉塞部の横断土層B-B'で見ると、両壁の湾曲状況から復原できる天井よりも上位に位置しており、玄門部の天井を大きく壊して玄室へ進入しているようである。そのため、横穴使用停止後に、横穴を再利用するために進入した開口であるかもしれない。

(4)遺物出土状況

玄室内では、3面にわたって遺物の出土を見た。Ⅰ面が8・10層上面に相当し、馬骨を検出した。Ⅱ面は、玄室内が21層上面、墓道内が22層中に相当し、須恵器甕が破碎されて出土した。Ⅲ面は玄室内の45層上面に相当し、多くの遺物とともに人骨を検出した。

Ⅰ面は、玄室の奥壁近くで馬の左下顎骨が出土しただけで、ほかの遺物がないため、その埋納時期は不明である。閉塞土の上を雨水とともに流入して堆積したと判断する8・9層を切り込んでいるので、横穴使用停止後、ある程度の時間の経過があったものと想定できる。

Ⅱ面は、墓道内通路から閉塞部に埋納された須恵器甕片(241)が、玄室内に流入したもので、これ以外に遺物の出土はない。この甕の破片1点がⅢ面で出土しており、Ⅲ面での埋葬に近い時

点で、この甕が墓道に埋納されたことが分かる。

Ⅲ面は、横穴本来の使用に伴うもので、この1面のみが埋葬に伴うものである。人骨12～16の5体の人骨および多数の土器・鉄器が出土した。

遺物は玄門付近の両壁に大きく分かれて出土した。特に右側壁の一群は、多くの完形の土器が正立・横転して折り重なるように出土した。それに対して、奥壁近くにはわずかな土器しか出土していないので、何度かの埋葬後に玄室内の土器が集められて、重ね置かれたものと思われる。鉄鏃(715～717)は奥壁に近接して出土している。

人骨12～16は、遺物が集中して置かれた玄門位置の奥壁側に置かれていた。このうち、人骨12の北側では、墓道内で破碎されて埋納された甕(241)の破片が出土した。

人骨12は、伸展位で、頭を玄門方向に向けていた。頭部付近には杯身2点(218・219)が逆位に置かれており、枕として用いられていたようだ。その近くで耳環1点(865)が出土した。

人骨14の骨の下からは、刀子(713・714)が出土した。人骨15の胸部および頭蓋骨付近では、耳環2点(863・864)が出土した。

墓道内の22層より、須恵器甕(241)の破片が多数出土した。この破片の一部は、玄室内のⅡ面とⅡ面直上の9層中、玄門から墓道にかけての12層からも出土している。また、35層の淡黄灰色礫混土より、須恵器脚付長頸壺(235)が出土した。脚部はきれいに割り取られているが、壺部分は口縁部の一部を残して打ち欠かれている以外はほぼ完形である。18号横穴前面の墓地内通路より出土した破片と接合した。

(5) 出土遺物

この横穴からは多量の遺物が出土した。玄室内出土の器形ごとの点数を掲げると、須恵器杯蓋10点・杯身7点・高杯13点・同蓋1点・平瓶3点・甕1点・提瓶1点、土師器把手付椀1点、刀子2点、鉄鏃3点、耳環3点、墓道内より須恵器脚付長頸壺1点・甕1点出土した。

胎土・焼成より見て、高杯と蓋、杯身・杯蓋には、一揃えのものとして作られたセット関係は認められない。大多数の杯身・杯蓋は回転ヘラケズリで天井部・底部を調整しているが、杯蓋(213)のみ天井部をヘラオコシを行った後に回転ヘラケズリを省略している。

人骨15の胸部および頭蓋骨付近では、耳環2点(863・864)が出土した。耳環(863・864)は対になるものである。耳環(863)には、その接面に白玉(982)が挟まっており、耳環の使用のあり方を示唆するものである。耳環(864・865)は蛍光X線分析を実施し、耳環(865)の材質は鉛であることが判明した。

(岩松 保)

(6) 人骨出土状況

17号横穴では、5体の人骨が遺存しており、全てⅠ面で検出した。玄室の中央北側壁寄りに人骨12、南側壁寄りで4体分の人骨(13～16)が置かれていた。奥壁側から人骨13、人骨14と並び、人骨15と人骨16が南北方向に隣接する。これら5体の人骨は保存状態が悪く、全ての人骨で上肢と下肢の長管骨の骨体を取り上げることができた程度で、そのほかの骨は取り上げ時に大きく破

損するほどに風化が進んでいた。

人骨12は、頭蓋骨・下顎骨・上腕骨・尺骨・橈骨・大腿骨・脛骨・腓骨など10点程度が遺存するが、概して保存状態は悪い。これらの骨は、いわゆる伸展位の状態で検出した。頭部を玄室開口部方向に向け、横穴主軸に平行している。上顎骨は歯の咬合面を上に向けて、頭蓋骨に接していた。頭蓋骨と上顎骨が分離しているかどうかについては、頭蓋骨の破損が著しいために観察できなかった。頭蓋骨と下顎骨は約20cm離れており、頭蓋骨を基準に見ると、下顎骨は解剖学的位置から大きく外れている。腕や脚の骨は、頭蓋骨を基準に見ると解剖学的位置をとどめており、肘関節と膝関節は交連状態を保っていると判断される。また、左の尺骨・橈骨および腓骨は土質・土色の痕跡だけの検出となったが、尺骨と橈骨の位置関係は解剖学的位置関係を肯定するものの、腓骨と判断される痕跡は、本来ならば脛骨の外側にあるべきものが内側に位置していた。つまり左腕は解剖学的位置にとどまっておらず、交連状態にあったと考えられるが、左脚は腓骨が解剖学的位置にないため、腓骨は脛骨と交連していなかった可能性が考えられる。

以上のように、保存状態が悪く、骨が動かされているかどうかの判断はつかなかった。

人骨13は、頭蓋骨・下顎骨・上腕骨・尺骨・大腿骨・脛骨など10点程度が遺存するだけで、保存状態は悪い。上腕骨・尺骨・左大腿骨・脛骨が横穴の主軸方向に沿って、幅約35cmの範囲に長軸を揃えて集められており、その上位に右大腿骨が直交して「エ」の字状に置かれていた。頭蓋骨はこれらの集骨部の奥壁側で検出したが、破損が著しく、詳細は分からなかった。これら長管骨の下位より、肩甲骨・腰骨・手足の骨片が出土した。長管骨が集められていることから、改葬骨と判断される。

人骨14は、人骨13と人骨15・16の間で見つかった一群で、主として長管骨が集められている範囲である。各骨の方向が人骨13・15・16の方向と異なっているため、それらの人骨とは別個の一群と判断し、人骨14としたが、人骨15・16の一部とも考えられる。歯・上腕骨・尺骨・中手骨・大腿骨・脛骨・踵骨など10点程度が残る。腰骨状の骨を検出したが、風化が進行しており正確な判別はできなかった。

人骨15は非常に風化が進行しており、土色・土質の違いだけで頭蓋骨・下顎骨・大腿骨を認めたものである。頭部は玄室開口部側に位置し、変色範囲の方向は横穴主軸に平行する。その配置状況より伸展位に置かれた可能性もあるが、遺存状態が悪いため確言できない。頭部から5cm程度離れて下顎骨の痕跡を検出した。大腿骨は、頭蓋骨を基準に考えると解剖学的位置に近い位置で検出した。

人骨16も人骨15と同じく、土色・土質の違いを認めたものである。頭蓋骨らしき痕跡と大腿骨だけが認められた。頭部は玄室開口部側に位置し、人骨15の頭部に隣接する。大腿骨の方向は横穴主軸に平行する。大腿骨が頭蓋骨と約20cmしか離れていないことから、改葬骨と判断される。

(上田真一郎)

(1)はじめに

女谷B支群の中で、最も西側で検出した横穴で、西北側は女谷A支群に接している。17号横穴と2基で小群をなすものとする。玄室の直上には、近・現代の土坑IVSK01が穿たれており、この横穴に伴う一部の遺物がその中から出土した。

この横穴は、女谷・荒坂横穴群の中で唯一、胡録金具を出土した横穴である。

(2)形態と規模

この横穴の玄室の上位には、瓦や陶磁器などが埋まった土坑IVSK01が掘り込まれていた。ほぼ玄室の位置に重なることと、埋土中より胡録金具片や甕片が出土したことから、天井が陥没した際に玄室から墓道の一部が掘り返されて、玄室内の一部の遺物が動かされたものと思われる。その後、その陥没痕に瓦や陶磁器などが廃棄されたのが土坑IVSK01と考えられる。

全長は11.1mで、平面が撥形の玄室をもつ。玄室長は3.2mで、玄室の幅は奥壁部が最大幅で1.7m、玄門幅が1.1mを測る。平面形や閉塞盛土の位置を見ると、羨道は付設されていないものと推定される。墓道の底面は、縦断面で見るとゆるやかに傾斜して掘られており、墓道端部近くが最も深く、墓道端土坑状を呈していた。墓道長は7.9mで墓道の上幅は最大で1.6m、墓道は最も深いところで1.2mを検出した。

(3)土層堆積状況

玄室の上位に掘り込まれた土坑IVSK01は、土層1～5に対応する。胡録金具片をはじめとして、玄室内が荒らされて、一部の遺物が動かされた際の堆積層が6～8層と判断され、その際に、14層の閉塞土の一部が玄室の奥壁方向に引きずられたためか、層序に若干の不整合が認められる。

初期整地土には4層(23～26層)が認められ、玄室には23・24層の淡黄灰色砂・砂礫が厚さ20cm程度で敷かれている。初期整地土は墓道部にやや厚く、40cm程度の厚さで整地されている。

遺物出土面は1面のみで、23層上面が相当し、この上に配置された遺物の上位には、天井崩落土と判断される淡黄灰色砂質土(9層)が覆っていた。

閉塞部は土坑IVSK01と盗掘の穴で一部壊されており、詳細は分からないが、基本的には14層の明褐色礫混土と15層の淡褐色砂礫土とが閉塞土と判断される。土層の堆積状況より、閉塞盛土と墓道内通路は4回にわたって掘削されたものと判断される。10・11層、12～14層、15～17層、18層がそれぞれの墓道内通路を埋め戻した土砂に相当する。墓道内の19～22層は、初葬終了直後に墓道全体を埋め戻した土砂の残欠と判断されるが、これに対応する閉塞盛土は、縦断面の土層観察では確認できなかった。

(4)遺物出土状況

遺物の出土は1面のみで、奥壁に接して胡録金具および鉄鏃、奥壁右隅には須恵器、土師器がほぼ完形で集められて出土した。玄門近くの左側壁側から耳環と鉄片が出土した。

奥壁に接して、胡録金具(725・726)と鉄鏃6点(718～723)が、ほかに不明鉄製品(724)が胡録金具の間から出土した。胡録金具(726)は裏面を上面にして、短辺の奥壁側が高く、玄門側が低

く、斜めになって出土した。胡籙金具(725)は胡籙金具(726)の奥壁側にあり、胡籙金具(726)よりも低い位置で、鋌の頭側の面が上面になって出土した。これらの胡籙金具の破片が上位の土坑IVSK01内から出土したので、後世にやや動かされていることは間違いなく、これらの遺物の出土位置が玄室内に置かれた時の位置をどれだけ保っているのかは、判断しがたい。胡籙の内部には鉄鏃が納められていたためか、近接して鉄鏃が出土した。現地では比較的整然と鉄鏃が並んでいるのを認めたが、室内で整理すると、完形のは少ないことが判明したので、胡籙金具と同様、鉄鏃も原位置を保っていないと言える。これらの玄門側に須恵器杯蓋(243)・杯身(244)が、うつ伏せの状態で置かれており、枕として利用されたものと推測され、これらの位置関係より、遺骸の頭は奥壁側にあり、その上方に胡籙が置かれたものと復原できる。

また、骨は全く残っていなかったが、玄門側には、耳環2点(866・867)があり、その近くには鉄片が散乱していた。刀などの鍛造の鉄製品が錆化して、ばらばらになったものと思われる。この位置にも1体の埋葬があったとすると、2体の埋葬が復原できる。

奥壁右隅には、須恵器杯蓋(245)・杯身(246)・提瓶(253)や横瓶(254)のほか、高杯6点(247～252)がかためられており、土圧によりひびが入って破片になっているものもあるが、基本的には、直立して据え置かれたままの状態出土した。

墓道内の10・11層の茶褐色土より、須恵器甕(255)が細片となって出土した。玄室直上の土坑IVSK01より、その一部の破片が出土した。この甕はかなり大振りのもので、器壁も厚いため、自然に割れて散らばったとは考えられないものである。そのため、人為的に破碎されて、埋納されたと判断するものである。また、18層の茶褐色砂混土中よりは、土師器甕(256)が細片となって出土しており、時期を違えた埋納土器と判断される。

(5) 出土遺物

玄室からは、須恵器杯蓋・杯身各2点・高杯6点・ミニチュア提瓶1点・横瓶1点、胡籙金具2点、鉄鏃6点、不明鉄製品1点、耳環2点が出土した。墓道内からは須恵器甕1点、土師器甕1点が出土した。玄室内からの土師器の出土はなかった。

杯身・杯蓋、高杯・同蓋が一揃いの組み合わせとして作られて、セットとなるものは全く認められない。杯蓋(243)・杯身(244)は対で枕として置かれていたものであるが、胎土・焼成が異なり、セットとなるものではない。甕(255)は、底部の破片も出土しているものの、接合できないために、その一部が図化できていないが、ほぼ全体に及ぶ破片が出土した。高杯(251・252)は、杯底部から柱部の上半にかけて、横方向のカキメで最終調整が施されている。

胡籙金具(725・726)は、田中新史(1988)の分類によると、横長帯飾金具で、方立部の上縁・下縁を飾るものと考えられている。不明鉄製品(724)は用途不明で、鎌形を呈しているが、刃が作り出されておらず、薄板を鎌状に切り抜いたものである。胡籙金具(725・726)の間から出土しているので、胡籙を飾る金具とも考えられる。

第3節 女谷C支群

1. 支群の概要(図版第41・156-(1)・163-(2)・207)

女谷C支群は、南西方向に開口する谷の南斜面に分布し、8基の横穴から構成されている。この支群の北側には、谷を挟んで女谷A支群が分布する。

女谷C支群の8基の横穴は、その造られている高さの違いより、大きく2群に分けることが可能である。西側の4基の横穴(1～4号)は、丘陵斜面の低い位置に横穴が造られており、東側の4基の横穴(5～8号)は丘陵斜面の中腹に造られている。

これら2群の横穴は、その主軸方向とその近接具合より、1～2基の小群に分けることができる。西から、1・3号、2・4号、5・6号、7号、8号の5小群に分けられる。西群の1～4号横穴は隣接していない横穴同士で小群としている。これについて少し説明すると、横穴の床面の高さを見ると、2号→4号→3号→1号の順にその標高が高くなり、隣接していない2・4号横穴は西群の中でも一段と低い位置に造られている。また、この2・4号横穴では、ヘルメット形をした特徴的な土師器杯が出土している点から、これらの横穴に強い結びつきがあったものと考え、先述のような小群を想定している。

2. 1号横穴(図版第42・43・208・209)

(1)はじめに

この横穴は、平成13・14年度の2か年にわたって調査を実施した。第3次調査では玄室から墓道中央までを調査し、第4次調査において墓道端の調査を実施し、その全貌を明らかにした。

平成11年度の試掘トレンチにより、玄室から墓道が大きく削平を受けており、一部検出できなかったところがある。また、玄室内の横断土層を記録した後に、玄室内埋土を除去している最中に、土層観察用の畦が崩落したために、縦断土層の観察および記録は十分にできていない。このような事情のため、閉塞方法について十分な検討ができなかった。

(2)形態と規模

玄室の平面形態は羽子板形を呈しており、奥壁部分に最大幅があり、玄門に向けて徐々に狭まるものである。玄室中央から墓道にかけての削平が著しく、壁面の残存高が約20cmを測るに過ぎないため、湾曲の発生位置を観察することができなかつたため、羨道の有無はよく分からない。遺物は、玄門もしくは羨門と思われるくびれ位置付近では全く出土しておらず、その位置から奥壁側に1mほどの空間を空けて出土することからみて、1m程度の短い羨道を有していた可能性もある。羨道がないものとして各部長を掲げておく。玄室長は4.0m、玄室幅は奥壁部で2.1m、玄室最大幅は2.15mを測るが、玄門部における玄室幅は測定できない。羨道がある場合には1m内外のものである。全長11.55m、墓道長7.55mを測る。墓道幅の上幅は削平が著しいが、最大で1mが残存している。遺物は1面で出土した。

(3)土層堆積状況

玄室内の土層は細かく見ると8層に分層できるが、大きくは、1～3層の砂質土層、4～6層

の砂礫層、9・10層の砂質土層の3層に分けられる。1～6層は締まりがない砂礫層であることから、横穴の天井がそのまま落盤したものと判断される。それに対して、9層および10層は、締まりが強いもので、人為的に盛り上げられた層と判断され、埋葬面・作業面を造り出すための整地土と考えられる。10層の黄褐色砂は、横穴構築時の初期整地土で、この上面が初葬面となっており、この面で遺物の出土を見た(I面)。9層の暗赤褐色砂質土も、これより上位の土層と比べて土質が密で締まりがあり、ほぼ水平に堆積していることから、この上面で何らかの作業を行うために人為的に盛り上げられた整地土と判断されるが、残存している範囲内では遺物の出土はなかった。10層上面の標高が30.65m、9層上面の標高が30.8mで、約15cmの高低差を有している。

墓道端付近では4層の堆積が見られる。10・11層が初期整地土で、7・8層は墓道の埋め戻し土と判断される。B-B'は第3次調査時のトレンチ壁面の横穴墓道相当部分で、この壁面は試掘時の削平を受けていないため、10層よりも上位の土層まで観察できた。そのため、縦断土層や横穴実測図と整合していないところがある。

(4)遺物出土状況

遺物の出土は1面で確認した。土層観察により、遺物の出土を見なかった9層上面でも何らかの作業を行ったものと判断される。

I面では、玄室奥壁部分と玄室中央付近の左側壁に沿った位置で遺物の出土をみた。また、出土位置とその高さでしか確認できないが、須恵器杯身(258・259)はともに破片で、玄室I面にあったものと判断される。

奥壁部では、須恵器提瓶(264)・平瓶(265)・短頸壺(263)・同蓋(262)各1点、土師器甕1点(270)・高杯2点(267・268)、鉄刀(729)が出土した。

玄室左側壁部では、土師器高杯2点(266・269)、須恵器杯身2点(257・260)・脚部片1点(261)が出土した。土師器高杯(266・269)は、脚部がなく杯のみの出土で、これらは口縁を下にして並べられており、転用枕である可能性がある。耳環(868)は杯身(260)の下から出土し、耳環(869)と対になるものである。刀子2点(727・728)が玄室中央から出土した。

全体的に遺物はさほど散乱しておらず、平瓶(265)と脚部(261)がそれぞれ離れた位置で出土した破片が接合した程度である。また、ほとんどの遺物がほぼ完形に近いもので、玄門に近い位置の杯身(258・259)、脚部(261)が小破片で出土した。

(5)出土遺物

須恵器杯身4点・脚部1点・提瓶1点・平瓶1点・短頸壺および同蓋各1点、土師器高杯4点、甕1点が図化できた。杯身(258)は底部を欠いているので不明確であるが、そのほかの杯身は、回転ヘラケズリによって底部の調整を行っている。短頸壺(263)には、焼成後に体部肩部に径4.2×2.5cmの穿孔がなされている。蓋(262)の天井部には、「×」のヘラ記号が認められる。提瓶(264)の体部には「一」のヘラ記号が認められる。平瓶(265)の体部には、横方向のカキメを施した後に、2条にわたる窪みの列がめぐらされており、この窪み内にはタタキ状の痕跡が認められ、タタキ工具で押さえたものと思われる。この平瓶の口縁端部片は全く認められず、おそらく、意

図的に打ち欠いたものであろう。

土師器高杯(266～269)は、全て柱部が出土しておらず、副葬される時点で取り外されたものと推測される。

鉄器には、釧(731)や鐙・足金具(730)が装着された鉄刀1点(729)、刀子2点(727・728)があり、ほかに耳環2点(868・869)が出土した。

土師器高杯(268)と土師器甕(270)は胎土分析を実施した。

3. 2号横穴(図版第44・45・210・211)

(1)はじめに

女谷C支群4号横穴とともに、ヘルメット形をした特徴的な土師器杯が出土し、4号横穴と2基で小群になるものと考えられる。なお、土層断面B-B'は、第3次調査時のトレンチ壁面における墓道相当部分の実測図であるので、試掘トレンチによる削平を受けていないため、ほかの横穴実測図と整合しないところがある。

(2)形態と規模

杓文字形の玄室に、やや短い墓道が付設する。羨道を構成する壁面の湾曲は認められなかった。玄門部の地山面には、玄室方向に下る約10cmの段が掘り残されているのが認められた。横穴の全長は9.3mを測り、玄室長が3.05m、奥壁部の玄室幅1.8m、玄門部の幅が1.0m、玄室最大幅は玄室中央付近で1.85mを測る。墓道長は6.25mで、墓道幅(上場)が1.65mを測る。遺物は2面で出土した。

(3)土層堆積状況

玄室内堆積の1～9層は締まりのない砂礫層で、横穴廃絶後に天井が陥没した土砂と判断された。また、墓道部分の上位の堆積層である10・11層は、これより下位の堆積層と比べて粘質が強く、横穴使用停止後に墓道上の窪地に雨水によって流されて堆積した土砂と判断される。12層より下が、横穴使用時に堆積した層序と考える。

遺物の出土は2面で検出し、I面が26層上面で、II面が33層上面である。I面の標高は28.9m、II面の標高は28.75mである。遺物の出土はないが、人為的に整地して造られたと判断される作業面が、18・19層上面で認められ、標高は29.1mを測り、玄室掘形の地山面より60cm上位に位置する。

33層は初期整地土で、横穴全体を整地している。この上面が初葬面で、遺物出土のII面にあたる。30～32層は初葬後の閉塞土と墓道の埋め戻し土の残欠で、墓道内の横断土層B-B'では、30層の堆積状況より、1.65mの深さで掘削された墓道を、ほぼその上面近くまで埋め戻したことが窺える。初葬後に玄室内II面に進入する時に墓道内通路が掘削され、それを埋め戻した土砂が29層である。26・27層はI面を造るための整地土で、24・25層の下面は、この時の進入に伴う墓道内通路の掘削で、23～25層はそれを埋め戻した土および閉塞のための土砂である。18～20層は土質が強く、上位の天井崩落土とは異なること、そして、閉塞盛土と判断する15・16層がこの上

に載っている点より、人為的に盛り上げられた整地土層と判断する。18層上面では遺物の出土は全く認められなかったが、人為的に造られている点より、何らかの作業を行った面と判断する。13～16層は、その整地を行った後に、横穴を閉塞し、墓道内通路を埋め戻した土層である。

整地は、この横穴では、I面と作業面を造るための2回行われているが、これらの整地土層は、基本的には上位の砂質土と下位の砂礫層との2層に分かれ、埋葬面・作業面はいわば、きれいな砂質土で化粧されている状況である。

(4) 遺物出土状況

遺物の出土は2面で認められた。

I面では、玄室左側壁部で、須恵器脚付壺(277)が1点出土しただけである。

II面は初葬面にあたり、奥壁に接した位置と玄門付近で遺物が出土した。奥壁に接した遺物は中央部と左側壁の2か所に分かれて集められていた。中央部では、土師器杯5点(278～282)が裏返しに重ねられて、その横に須恵器高杯1点(276)が横位に出土した。左側壁部には須恵器杯蓋1点(271)・杯身3点(272～274)、土師器杯1点(283)が置かれていた。玄門付近では、須恵器高杯(275)のほかに土師器杯(284)が出土した。注目されるのは、土師器杯(284)は、墓道内の33層直上で出土した破片と接合した点である。この33層は、玄室と墓道とともに埋める初期整地土層と判断され、初葬面を造るものである。これらは、層序的には閉塞土や墓道の埋め戻し土・墓道内通路の下位に位置しているので、玄室内で初葬を行った後に、墓道の埋め戻しと玄門の閉塞を行ったものと判断される。

(5) 出土遺物

須恵器杯蓋1点・杯身3点・高杯2点・脚付壺1点、土師器杯7点である。鉄器は全く出土していない。

須恵器杯身・杯蓋(271～274)は、やや小振りのもので、杯身が10cm内外、杯蓋が11cm程度のもので、ヘラオコシ後、ユビナデもしくは回転ヘラケズリを行っていても外周のみで、内周のヘラケズリは省略されている。

土師器杯(278～284)は、ヘルメットを裏返したような特徴的な形態をしており、この横穴以外には、女谷C支群4号横穴で出土しただけである。口縁は横方向に一旦のびた後に、端部はやや上方に折り曲げられて、外面端部に面を有するものである。内面には暗文が施されており、色調は橙褐色～赤褐色を呈し、胎土は砂粒をやや含むものである。焼成はさほど硬いものではない。八幡市狐谷横穴群の2号横穴出土の土師器杯(1～6)は、全体にやや深い印象を与えるものの、横方向に引き伸ばされた口縁を有し、ヘルメット形をした杯と同様の形態を呈している。しかし、その色調は、黄褐色系統のもので、全く違った胎土・色調をなしている。また、奈良県天理市ホリノヲ5号墳でも類似の器形の杯が報告されている。^(注3)

4. 3号横穴(図版第46・47・212・213)

(1) はじめに

試掘トレンチにより、その大半が削平を受けており、玄室部の高さはわずかに40cm弱しか残っていなかった。この横穴も2年度にわたって調査を行ったものである。

1号横穴と2基で小群を構成するものとする。

(2)形態と規模

玄室の平面形は羽子板状を呈しており、奥壁から3.45mの位置で、左側壁にわずかに湾曲の始まりが認められ、この位置より奥壁側が玄室と推定する。この位置は、縦断土層で確認した閉塞盛土の位置とほぼ合致するので、羨道は付設されていないものと推測される。各部長は、全長11.05m、玄室長3.45m、玄室幅は奥壁部が最大で2.05m、玄門部で1.15m、墓道長7.6m、墓道上場の幅は、本来のものから大きく削平されているが、最大で1.05mを測る。遺物は2面で出土した。

(3)土層堆積状況

試掘調査時のトレンチにより大きく削平を受けたため、玄室内で40cm、墓道で最大60cmの高さでしか土層を観察できなかつたため、詳細は不明である。

玄室内の15層と横断面D-D'で認められる16層が、横穴構築時の初期整地土層と判断される。遺物の出土は2面で認められ、15層上面が初葬面でⅡ面にあたり、2・3層は整地土で、この上面がⅠ面である。11層は、縦断面で見ると山形に堆積した土層で、閉塞盛土の基底をなしているものと判断する。また、6～10層、12・13層は、それぞれが別個の墓道内通路と判断されるが、11層の閉塞土残欠との関係はよく分からない。また、横断面D-D'では、13層は14層を切り込んでおり、14層は別個の墓道内通路もしくは初葬直後に墓道を埋め戻した土砂と判断される。

(4)遺物出土状況

遺物は2面で検出し、上位からⅠ面、Ⅱ面で、その高低差は10cm以内である。整地土2・3層は場所によってその厚さが違うため、調査時には層位的に遺物を検出することができなかった。そのため、遺物が出土した高さの違いより、それぞれの遺物が属する遺物出土面を認定した。Ⅰ面がおよそ標高29.35m、Ⅱ面がおよそ標高29.30mである。

Ⅰ面では、玄室中央付近で須恵器提瓶(293)が細片となって出土した。この周囲には拳大よりもやや小さい円礫が敷き詰められていた。玄門に近い位置では、杯身2点(288・289)が逆位で並べられており、枕として用いられたものと推定される。この枕に近接して刀子1点(732)が出土した。

Ⅱ面では、奥壁に近接して遺物が置かれている。杯蓋(285)、杯身(286・287)は近接して出土したが、それぞれが口縁を上にして出土しており、枕に転用された状況ではなかった。やや離れて須恵器高杯(290)と刀子(733)、鉄鏃(734)が出土した。奥壁の右隅では土師器高杯(294)が正立して置かれていた。

墓道内よりは、墓道内通路の埋め戻し土である12層中より、須恵器短頸壺(291)・平瓶(292)が出土した。墓道のほぼ中央で、同一の層中に並べられたように出土したことや、ともに逆位であることなどから、玄室内から墓道に偶然に動かされたというよりも、意図的にそこに置かれたも

のと判断される。

(5) 出土遺物

須恵器杯蓋 1 点・杯身 4 点・高杯 1 点・提瓶 1 点、土師器高杯 1 点、刀子 2 点、鉄鏃 1 点が玄室内より出土し、須恵器平瓶・短頸壺各 1 点が墓道内より出土した。

杯蓋(285)は口径13.2cmであるのに対して、杯身(286~289)は口径10.6~11.0cmで、両者の間には型式的な隔たりが想定できる。提瓶(293)の体部には、焼成時に据え置いた際の土器片が釉着している。

短頸壺(291)は完形であるのに対して、平瓶(292)は、口縁部のみ全周にわたって欠いており、意図的に打ち欠かれたものと推測される。

刀子(733)には、口金具が装着されている。

5. 4号横穴(図版第48・214・215)

(1) はじめに

女谷C支群の1~3号横穴と同様、2年度にわたって調査を行ったものである。試掘時の重機掘削により、横穴壁面の大半が消失してしましたが、その全容を明らかにできた。ヘルメット形をした土師器杯が出土しており、同形の杯は、女谷C支群2号横穴とこの4号横穴でしか出土していない。

横穴が低い位置に造られていることと、ヘルメット形をした杯の出土から、2号横穴と小群をなすものと判断する。

(2) 形態と規模

玄室は最大で60cm程度の高さしか残っておらず、壁面の残り具合は概して悪いが、奥壁から2.3m付近と3.8m付近で、わずかな湾曲が認められること、遺物の出土が奥壁から2.3mの位置までに限られること、平面の形態が奥壁から2.3m付近と3.8m付近でわずかなくびれを有すること、閉塞土の位置が3.8m付近であることから、羨道を有する横穴と判断する。

羨門位置よりやや墓道側から、奥壁に向けて徐々に深く掘られており、約10cmの高低差が認められる。この高低差は、羨道・玄室に初期整地を行うことで解消されて平坦面が形成されている。

一部未調査部分があるが、全長9.6m、玄室長2.3m、玄室幅(奥壁)1.4m、玄室幅(玄門)1.2m、玄室最大幅1.6m、羨道長1.4m、羨門幅0.8m、墓道長5.9m、墓道上場幅0.8~1.0mを測る。

(3) 土層堆積状況

玄室内に堆積している1~14層は砂礫を中心としたもので、横穴使用停止後に天井が陥没した堆積層である。15層より下位が横穴使用に伴う堆積土である。

23層は横穴構築時の初期整地土で、玄室と羨道の範囲だけを23層で整地することで、掘形に認められる約10cmの段差が解消されている。この上面が初葬面(I面)であり、遺物はこの1面だけで出土した。

墓道の中程より墓道端部にかけても、やや深く掘られており、その高低差をなくすように、22

層の暗茶褐色粘質土で埋められている。このように整地を行うのは、初期整地土のあり方であるが、土質が粘質土で通常の初期整地土である砂質土・砂とは異なっている。そして、墓道端では不明鉄製品2点(735・736)がこの層中より出土しており、遺物を含む点も初期整地土には見られないものである。これらの理由のために、22層は初期整地土と確言はできないもので、初葬直後に墓道を埋め戻した土である可能性がある。墓道内に堆積している19～21層は初葬終了後に墓道を埋め戻した土で、これに対応して、羨門位置に閉塞土が盛られていたはずであるが、追葬時の進入の際に取り外されたためか、遺存していない。15～18層は、追葬時の進入に伴う墓道内通路を埋め戻した土砂で、このうち、18層は閉塞土の盛土に相当する。以上のように、土層の観察では、初葬後に玄室内へ1回の進入が認められる。

(4)遺物出土状況

遺物の出土は1面だけである。標高28.85～28.90mである。

玄室中央よりやや東寄りで土師器杯5点(295～299)と鉄刀1点(738)、玄門の左側壁に土師器甕1点(300)が出土した。土師器杯5点はヘルメット形をしたものである。杯(299)のみ逆位で、ほかの4点は口縁を上にして正位で出土した。甕(300)は側壁にもたれかかるように、正立して据えられていた。

墓道端の22層中より、不明鉄製品(735・736)が出土した。また、同一個体もしくは同形のものとして判断される不明鉄製品(737)が、3号横穴の墓道端と4号横穴の墓道端の間から出土した。

(5)出土遺物

土師器杯5点・甕1点、鉄刀1点、不明鉄製品が出土した。ヘルメット形をした土師器杯(298)と甕(300)は胎土分析を行っている。

鉄刀(738)には目釘が遺存しており、釧が装着されている。その上に木質を挟んで足金具が遺存している。

不明鉄製品(735～737)は板状のもので、形状から見て、筭様のものである。

6. 5号横穴(図版第49～51・216～218)

(1)はじめに

この横穴では、多くの遺物とともに3体の人骨を検出したが、そのうちの2体は1か所に集められており、残り具合も良好であったため、改葬骨の実例を詳細に観察することができた。また、遺物の出土がなく時期は不明であるが、奥壁より奥に向けて小横穴が掘削されている。

東側に位置する6号横穴と主軸が揃い、2基で小群をなすものと考えられる。

(2)形態と規模

墓道端が消失していると判断され、本来の規模や墓道端の構造などについては不明である。

右側壁の形状が奥壁から1.85mの位置で、やや狭まって「袖状」を呈しているが、これは地山面における形状で、遺物が出土したI面では、この屈曲は認められない。

奥壁から4mの位置で両側壁に湾曲が認められること、この位置の掘形床面には段差が認めら

れること、平面形のくびれ位置ともほぼ一致することから、この位置近くより奥壁側が玄室であると判断される。土層観察による閉塞盛土の位置は、この玄門位置とほぼ一致するため、羨道は付設されていないものと判断する。

各部長を掲げると、全長は現存で7.75m、玄室長3.25m、玄室幅の最大は奥壁部分で2.2m、玄門幅が0.95m、墓道の現存長が4.5mを測る。墓道の上場幅の最大は2mである。

奥壁の西角には長さ約2.7mの横穴状の穴が穿たれており、約3m先の末端は、径1.7m、深さ1mの井戸状の堅穴(土坑ⅢSK01)となっている。小横穴の埋土中では、奥壁に近い位置でビニール・貝殻片が出土した。盗掘を行うため、堅穴を掘った後に横方向の隧道を掘削した可能性もあるが、遺物の配置は乱されていないこと、約3mにもわたって横方向に隧道を掘削するという非効率的な点で、この考えは肯きがたい。

これらのことを総合的に解釈すると、ある時期に小横穴が穿たれていたのが、現在に極めて近い時期(ビニール以後)に、小横穴の先端部に堅穴が穿たれ、その際に偶然に小横穴の存在に気づき、そこから玄室に向けて小横穴を掘り返して玄室まで到達したが、それ以上の掘削は断念したものと解釈できる。この小横穴の中からはビニール・貝殻以外のものは出土しなかったので、元々の小横穴の掘削時期は不明である。小横穴の規模は、幅0.9m、高さは、一部天井が遺存しており、その位置で1.1m、最大1.35mを測る。遺物や人骨を検出したI面は、この小横穴の底面よりも0.5~0.6m下位に位置している。

(3)土層堆積状況

1~14層は横穴使用停止後の玄室内および墓道内の堆積土と判断するもので、玄室内の堆積層は締まりのない砂礫層を中心とする。

人骨・遺物は25層上面の1面だけで検出した(I面)が、土層の観察では、21層上面と17層上面でも何らかの作業を行うために整地されたものと判断される。25~27層はI面を形成するための初期整地土で、約35cmの厚さで整地を行っている。20・21層はI面に対応する閉塞土であったのが、初葬後に横穴に進入した際に、21層上面の作業面を造るために整地土として転用されたものと考えられる。22~24層は墓道内のみで認められるが、層序から、I面での初葬終了後に墓道を埋め戻した土と判断される。17層上面の作業面は玄室内を17~19層で整地し、この時の進入に際して掘削した墓道内通路と閉塞盛土開口部を埋め戻したのが15・16層と判断される。

21層上面と17層上面の作業面では、全く遺物の出土は見なかった。この両面は、縦断土層で観察すると、横穴への進入と閉塞には通有に見られる方法—墓道内通路の掘削と閉塞盛土の最小限の開口および退出時にはそれらを埋め戻す—を行っているので、横穴を構築した集団が、何らかの作業を行うために、玄室に出入りしたと推測される。このうち、17層上面は、小横穴の底面の高さとはほぼ一致する。この小横穴は、掘削時期を示す遺物の出土がなく、その用途・掘削時期は全く不明である。内部には天井崩落土と判断される5層が詰まっており、その中にビニール・貝殻が混じっていたが、先に述べたように、これらは埋没時期を示すものと判断した。17層上面と小横穴の高さがほぼ揃う点を積極的に評価すると、この作業面を整地した時点で小横穴が掘削さ

れたと考えられる。しかし、後世に玄室内に入り込み、玄室内がほとんど埋まっていなかったために、小横穴を掘削したのがその作業面とほぼ同レベルであったということも十分に想定できる。この場合には、小横穴を穿ったのは、墓道上面で出土した土師器皿(325)の時期である可能性もある。

女谷B支群12・17号横穴でも小横穴が見られるが、12・17号横穴の場合には、平安時代の再利用面が認められ、玄室内に堆積した土砂の上から小横穴を穿っていることなどから、横穴を造った集団以外の人々—後世の人々が小横穴を造った可能性が高いものと思われる。5号横穴の場合には、後世の再利用面がなく、一概にそれらと同じであるとは言えないが、ほかの横穴の小横穴では、横穴を本来の目的で使用した集団が、何らかの目的で穿ったとは考えにくい場合がある。

(4)遺物出土状況

I面は初葬面で、唯一の遺物出土面である。人骨や遺物の配置は、奥壁に沿った東側に杯身・杯蓋などの須恵器が集められており、その前面には人骨19が置かれていた。奥壁の西側には人骨17と人骨18の2体の人骨が集められていた。これら3体の人骨は、ともに、人為的に骨が動かされた状況である。玄門位置では須恵器杯身・杯蓋や高杯が置かれていた。

玄室内の遺物は、須恵器杯蓋4点・杯身6点・有蓋高杯2点・同蓋3点・無蓋高杯1点・壺1点・平瓶2点・提瓶1点・ミニチュア提瓶1点、土師器甕1点・高杯1点・椀1点、鉄鏃3点、耳環2点出土した。

遺物は比較的まとまって出土しており、一部の土器が土圧で割れているものの、大多数の土器は完形である。高杯(314・315)が、玄室内で破片となって散らばっていた程度である。須恵器有蓋高杯蓋(311・312)は、右側壁位置で、正位に並べて置かれており、転用枕として利用されたものと思われる。この枕に近接して耳環(銀環)一対(870・871)が出土した。また、人骨19を見ると、頭蓋骨に近接して須恵器杯身(302)1点が逆位に置かれており、その位置関係から枕として置かれたものと推定されるが、2点を一対として用いていない点で示唆的である。鉄器は鏃3点(739～741)が出土した。

土師器皿(325)は、出土位置を確認できなかったが、墓道内の埋土上面から出土した。そのほか、墓道内からは、須恵器甕片・高杯片が出土した。

(5)出土遺物

須恵器杯身・杯蓋は全て回転ヘラケズリで天井部・底部の調整を行っている。一揃いの組み合わせとして作られた杯身・杯蓋は、杯蓋(301)・杯身(302)、杯蓋(303)・杯身(304)、杯蓋(305)・杯身(306)がそうと判断される。

土師器皿(325)は、位置を確認できなかったが、墓道内の窪地に堆積した流入土に入り込んでいたものと推定され、玄室内の小横穴の掘削時期を示すものかも知れない。全体に手づくねで作られており、口径4.8cm、器高1.1cmで、近世以降のものと思われる。

(岩松 保)

(6)人骨出土状況

3体の人骨(人骨17~19)を検出した。玄室の南西隅で人骨17と人骨18が、玄室の中央付近で人骨19が、それぞれ骨が集められた状態であった。

人骨17と人骨18は、一見すると互いの骨が乱雑に集積しているようであったが、観察と記録を繰り返して取り上げた結果、人骨17の骨は一辺約60cmの範囲に集められているのに対して、人骨18の骨はその南西一角に集中していた。また、人骨18の各骨は、人骨17の上に載り、人骨17の下にはないことから、人骨17が人骨18に先行して置かれたものと判断した。

人骨17は、女谷・荒坂横穴群の一連の調査で検出した人骨の中でもっとも保存状態が良いものである。全身からの骨が出土し、その点数も100点近くに及ぶ。頭蓋骨は微細な骨が失われているが、ほぼ完存している。長管骨も骨端部を欠失しているものが多いが、遺存状態は概ね良好である。頭蓋骨は、人骨17・18の集骨部に隣接しながらも、重複関係は有さずに、別個に正立して置かれていた。玄門東側壁方向を向き、下顎骨とは約15cm離れた位置にあった。上顎骨と下顎骨から遊離した歯は、そのほとんどが、頭蓋骨から離れた位置にある腰骨(人骨17)の下に位置していた。まず最下位には、左右の大腿骨が横穴主軸に平行して「二」の字様に並べられていた。骨盤を形成する左右の腰骨と仙骨は分割されており、そのうちの左右の腰骨が重ねられて大腿骨上に置かれていた。仙骨は両腰骨から10cm程度離れて、別個に置かれていた。大腿骨と腰骨の間には、肋骨・椎骨などの骨が乱雑に置かれていた。腰骨を置いた後に、右上腕骨・左尺骨・右脛骨を大腿骨と同方向に置いている。これと相前後して、肩甲骨・鎖骨・肋骨・椎骨・手足の骨を乱雑に置いた後に、左脛骨・左右の腓骨を左右の大腿骨に直交する方向に並べている。椎骨の遺存点数は多かったが、いずれも交連状態にはなかった。

四肢の長管骨・頭蓋骨・下顎骨・骨盤といった主要な骨は、意識的な配置がなされているようであるが、肩甲骨・鎖骨・肋骨・椎骨・手足の骨といった小さめの骨については意図的に集められた様子はなく、長管骨や骨盤を置く際に、分散して置いているようである。

人骨18も保存状態は良好である。頭蓋骨や長管骨など20点程度が遺存する。頭蓋骨は右側頭部を下にして横転しており、下顎骨の上に載っていた。上顎骨は頭蓋骨と約5cm離れており、破損も著しかった。頭蓋骨の下には下顎骨しかなく、それ以外の骨は頭蓋骨に隣接して集められていた。この集骨の上位には腰骨・長管骨があり、椎骨や肋骨などは、その下に位置していた。長管骨の方向は、概ね横穴主軸に平行する。

人骨17・18はともに、その人骨の配置状況から、改葬骨と判断されるものである。

人骨19は風化が激しく、保存状態は悪い。頭蓋骨や長管骨などが10点が遺存する程度である。頭蓋骨は左側頭部を下にしていた。下顎骨はなかった。頭蓋骨から約15cm離れて、長管骨が集められていた。長管骨の集骨の方向は横穴主軸に平行する。この集骨部の中には、長管骨以外の骨も遺存していたが、風化が著しく、骨種を判別できなかった。長管骨が集められている状況より、当人骨も改葬骨と判断される。

(上田真一郎)

7. 6号横穴(図版第52・53・219・220)

(1)はじめに

横穴の墓道端は削平のためなくなっている。初葬面には須恵器甕が据えられており、その口縁や体部は、調査時にも追葬面であるⅠ面・Ⅱ面で見て取れた。5号横穴に近接して、主軸も一致し、玄室位置も揃っているため、この2基で小群をなすものとする。

(2)形態と規模

横穴の平面形態は杓文字状を呈しており、平面形では明瞭に玄室や羨道の位置を区別できない。奥壁から3.2m付近で壁面に湾曲が発生しており、縦断土層に見える閉塞盛土位置と一致しているため、この位置付近が玄門であると判断した。羨道は付設されていないものと推定する。

全長7.8m(現存)、玄室長4.0m、玄室幅(奥壁)2.0m、玄門幅1.1m、玄室最大幅2.4m、墓道長3.8m(現存)、墓道幅(上場)1.85mを測る。遺物は3面で出土した。

(3)土層堆積状況

1～12層が横穴廃絶後の堆積土で、天井の崩落土や陥没した後の窪地に流入した土砂がある。

遺物の出土は3面で認められ、14層上面(Ⅰ面)、17層上面(Ⅱ面)、20層上面(Ⅲ面)である。Ⅰ面は標高31.1m、Ⅱ面は標高31.0m、Ⅲ面は標高30.8mである。

20層は横穴構築時の初期整地土で、この上面が初葬面であるⅢ面である。Ⅲ面に相当する閉塞土・墓道の埋め戻し土は、18・19層がその残欠にあたる。この上位には、Ⅱ面を整地する際に進入した墓道内通路が掘削されており、15・16層がその埋め戻し土と判断される。17層はⅡ面を造る整地土で、おそらく、Ⅲ面に盛り上げられた閉塞土を玄室内に掻き入れて均したものであろう。14層はⅢ面を構築するための整地土で、その進入の際に掘削した墓道内通路および閉塞開口部を埋め戻した土砂は13層と判断される。

(4)遺物出土状況

遺物は3面で出土した。

Ⅰ面は14層上面で、遺物は右側壁の玄門付近から中央部にかけて出土した。須恵器杯蓋3点(326・330・331)・杯身2点(327・329)・高杯2点(333・334)・平瓶1点(336)、土師器高杯片(339)がある。このうち、土師器高杯は、Ⅱ面出土の破片と接合したため、おそらく、Ⅱ面に元々はあったものが、Ⅰ面に動かされたものと思われる。須恵器杯身(327・329)は、一部重なるように逆位で並べられており、近接して耳環(金環)一对(872・873)が出土したため、枕として用いられたものと推定される。やや離れて杯蓋3点(326・330・331)が1列に並べられているが、杯蓋(331)は口縁を上にして逆位であるのに対して、杯蓋(326・330)は口縁を下にして正位に置かれており、枕として利用された可能性もある。

Ⅱ面は17層上面に相当し、須恵器杯蓋1点(328)・蓋1点(335)・提瓶1点(337)、土師器椀1点(340)・高杯1点(339)が出土した。須恵器杯蓋(328)・蓋(335)、土師器椀(340)は、全て口縁を上にして置かれており、枕に転用された状況ではない。提瓶(337)は口縁端部のみ全周にわたって欠落しており、その破片も出土していないため、意図的に打ち欠かれた可能性がある。

Ⅲ面は初葬面にあたり、20層上面に相当する。ここでは、須恵器杯身1点(332)と甕1点(338)が出土した。玄室の左奥壁隅に、拳大の円礫を並べた上に甕が据えられていたが、この甕の口縁は標高31.35mにあり、Ⅰ面よりも上方に突き出していた。すなわち、埋葬の回数が増えるにつれて、Ⅱ面、Ⅰ面と埋葬面を上につくり上げていったが、当時の人々が、Ⅱ面・Ⅰ面で埋葬を行う際にもこの甕が直立して、口縁が口を開けているのを認めていたと考えられる。内部には、砂礫以外に何も入っていなかった。

(5)出土遺物

身と蓋が一揃えのものとして作られた杯身・杯蓋は2セットが認められる。Ⅱ面出土の杯蓋(328)はⅠ面出土の杯身(329)とセット関係が認められ、杯蓋(326)と杯身(327)がセットとなる。土師器高杯(339)は胎土分析を行った。

耳環(872・873)はともに金環で、中空耳環である。

8. 7号横穴(図版第54・55・221・222)

(1)はじめに

玄室奥壁部の縦断土層は、観察用の壁面が崩落したために記録できていないが、失われた部分は、横穴使用停止後の堆積層である。隣接する8号横穴と軸をやや異にしていること、西隣の6号横穴とはやや空間が空いており、しかも玄室の位置が揃っていないことから、7号横穴1基で小群をなしているものと思われる。

(2)形態と規模

玄室から墓道にかけての平面形態は短冊形をしており、平面的には玄室や羨道を示すものはない。壁面の形状では、奥壁から4.5mの位置で、湾曲が発生しており、この位置が玄門であったものと想定できる。閉塞土の盛り上がりもこの位置で認められることと、羨道を穿ったような別個の湾曲は認められないため、羨道は付設されていないものと考えられる。

墓道の端は、削平によって消失している。現存の墓道端から2.4mにわたっては、約25°東に折れ曲がっている。全長は墓道の折れ曲がりに沿って測ると、現存長で9.8m、玄室長3.0m、奥壁部の玄室幅が1.2m、玄門幅が0.85m、玄室の最大幅は1.3m、墓道長6.8m(現存)、墓道上幅は最大で2.35mを測る。遺物は2面で出土した。壁面に残る湾曲から、天井までの高さは1.8m程度に復原できる。

奥壁から1.7mの玄室右側壁に、地山面から1.2m上位の位置に径約30cmの穴が横方向に穿たれ、東側に隣接して造られている8号横穴の玄室へと繋がっている。この穴の近辺では、地山面から1m程度の高さにまで玄室の湾曲が残存しており、これより上は側壁が持ち送られて、ドーム形の天井をなしていたと復原できる。この穴が、天井が残存している時点で穿たれたとすると、天井のカーブに直交する方向—斜め上方向に穿たれるものと想定される。しかしこの穴は、ほぼ水平方向に穿たれており、本来あったであろう天井の湾曲に直交する方向ではない。天井が崩落した壁面はほぼ垂直に立ち上がっているため、この壁面に直交して穿たれたと考えられる。そうす

ると、この穴は、天井崩落以後、即ち、横穴の本来の機能が終了した後に掘削されたもので、横穴の使用に係わって何らかの目的を持って穿たれたものではないと結論づけられる。

(3)土層堆積状況

1～12層は横穴廃絶後の堆積層と判断するものである。1～3層は土質が強いため、天井崩落後に陥没痕に流入した土と判断され、4～12層は、天井の陥没もしくは壁面が崩落した砂礫層と考えられる。

遺物の出土は2面を確認し、24層上面(I面)と22層上面(II面)である。それぞれ、標高29.7m、29.4m近辺である。24・25層は横穴構築時の初期整地土層で、最大45cmの厚さで整地をし、初葬面であるII面を形成している。II面に伴う閉塞土の盛り上がりは縦断土層で認められないので、玄室内へ掻き入れられて、I面を形成するための整地土である22・23層として用いられたものと想定される。I面での閉塞行為は2回認められ、19～21層が1回目の閉塞土と墓道内通路の埋め戻し土の残欠であり、2回目は13～17層がそれらの埋め戻し土に相当し、先の埋め戻し土の上から墓道内通路を掘削し、それを埋め戻した層序が観察される。

墓道は最大で2.3mの深さにわたって埋め戻されており、土層断面B-B'を見ると、少なくともI面の1回目の墓道内通路を埋め戻した(19・20層)時点では、墓道のほぼ全体の高さ約2mが埋め戻されていたと考えられる。

(4)遺物出土状況

I面では、左奥壁部で、鉄鏃2点(744・747)が出土した。土層観察用の壁面が崩落し、その崩落土を除去した際に、I面相当の標高より、鉄鏃4点(742・743・745・746)が出土した。この崩落は奥壁部に近い位置で生じたので、これらの鉄鏃も奥壁に近い位置に置かれていたと復原できる。人骨20は玄室中央の左側壁に近い位置で検出した。近接して耳環(875)が出土した。やや離れて、耳環(874)が出土したが、対になるものではない。

II面では、人骨21が奥壁左隅に置かれていただけで、遺物の出土は見なかった。

(5)出土遺物

この横穴では鉄鏃6点(742～747)および耳環2点(874・875)が出土しただけで、土器の出土は見なかった。

(岩松 保)

(6)人骨出土状況

人骨20は、I面の玄室中央付近の奥壁寄り、人骨21は、II面の奥壁左隅付近でそれぞれ検出した。両人骨ともに保存状態は悪い。

人骨20は、歯・長管骨・骨種不明骨片が数点遺存していた。長管骨2本が横穴主軸にほぼ平行して置かれており、それに近接して歯が出土した。そのほかの骨は土色や土質に若干の違いを残す程度であった。長管骨が揃えて置かれていることから、改葬されたものと判断される。

人骨21は、長管骨と骨種不明骨片数点がまとまって検出された。残り具合が悪く、詳細は不明である。

(上田真一郎)

9. 8号横穴(図版第56・223・224)

(1)はじめに

女谷C支群の中でも、もっとも平野側に造られた横穴である。この東側は空閑地となっており、丘陵裾をまわった位置に荒坂C支群が分布する。

隣接する7号横穴とは主軸を異にしており、この1基で小群となるものである。

(2)形態と規模

長方形の玄室に墓道が取り付くもので、右袖は明瞭に角を有しているが、左袖についてはやや不明瞭である。平面で見られる袖の位置と側壁で観察される湾曲の位置、土層で確認できる閉塞土の位置がほぼ合致するので、羨道は付設していないと判断される。

全長は墓道端が削平を受けており、主軸上で5.9mが現存している。玄室長は2.75m、玄室の奥壁部での幅が2.0m、玄室の最大幅が2.1m、玄門幅0.8m、墓道長が3.15m、墓道上幅は最大で2.4mを測る。遺物は1面で出土した。

玄室左側壁に穴が横方向に穿たれており、7号横穴の玄室に貫通している。

(3)土層堆積状況

1～9層は横穴廃絶後の玄室内堆積層で、9層は閉塞土が流入した層と判断される。

遺物は22層上面(I面)で出土しただけであるが、土層の観察により、16層上面と13層上面も人為的に整地がなされ、何らかの作業を行った面と認定できる。

21～23層はI面を造るための整地土で、この面に対応する閉塞土は、16層上面の作業面を造るための整地土16～19層に転用されたものと思われる。15層は墓道内通路の埋め戻し土で、この通路は16層上面の作業面を構築するために玄室へ進入した際に掘り込んだものである。13・14層は13層上面の作業面を造るための整地土で、16層上面の作業面の閉塞土を玄室内に掻き入れて、整地したものであろう。この最終段階の閉塞土および進入の際に掘削した墓道内通路の埋め戻し土は、10～12層と判断する。

最終的には、I面から13層上面の作業面までは、約50cmの土砂を盛り上げており、地山面からは3回にわたって、約80cmの厚さの土を入れたこととなる。

24層以下は墓道内にしか堆積しておらず、現地作業時には、初期整地土層と判断していたが、横断面B-B'、C-C'を見ると、I面を造る以前に1～2回にわたって墓道内通路が掘削されている。何度かの埋葬後に、横穴を大きく造り替えた可能性が認められる。

(4)遺物出土状況

I面では、遺物は左側壁近くで、鉄鏃2点(749・750)、刀子1点(748)が出土しただけである。各作業面を造る整地土に乱れが認められないため、盗掘を受けたものとは考えにくく、本来的に、副葬遺物が少ない横穴であったと思われる。

(5)出土遺物

鉄鏃2点(749・750)、刀子1点(748)が出土しただけで、土器の出土は見なかった。

第4節 墓地内通路およびそのほかの遺構

1. 墓地内通路(図版第6・41・57・225~230)

女谷A・B・C支群では、谷底を縫って谷の奥に至る通路遺構を検出した。通路は、女谷A支群と女谷C支群の間の谷から女谷B支群に抜けるもので、平安時代(10世紀中頃~後半)と古墳時代末頃(6世紀後半~7世紀中頃)の2時期のものを検出した。

それぞれの土層で斜線を引いている部分は、いわゆる地山と考えるもので、横穴構築以前の堆積層である。

女谷A・C支群から女谷B支群にかけての谷地形は、最終的には土砂流が厚く堆積して谷地形が埋没している(3~9層)が、それ以前は谷底が徐々に埋まって、その時々通路として用いられていたと推測されるものである。しかし、遺物が出土したのは、古墳時代の路面と土器溜まりⅡS X 09・10だけで、おのおの層の時期については不明である。この上位に堆積している13層の淡暗黄灰色粘質土は、断面「U」字形を呈しており、女谷B支群1・2号横穴の墓道前面では、黒色土器片が集中して出土した(土器溜まりⅡS X 09・10)。その年代観より、10世紀中頃~後半の通路面と判断される。この上位にある12層の淡黄灰色粘質土も断面が「U」字形を呈しており、遺物の出土はないが、13層に近い時期の通路と判断される。この下面の20~22・25層は砂礫が混じり、通行により踏み固められて硬化した面となっている。この層は、特に谷の奥部では、締まりのない軟らかいもので、この谷の奥側を広く開発・伐採したために、ベースの大阪層群中より砂質土が雨水により流れ出し、堆積したものと考えられる。

古墳時代の通路は、女谷B支群の両斜面の間を通過して、16号横穴の前面で一旦調査地外に抜け、断面「U」字形の溝状の通路となって女谷A・C支群の間を抜けて、北東方向に下り、女谷C支群5~8号横穴の前面に回り込む形で検出した(図版第6網部)。女谷B支群3・14号横穴前面では、平安時代の通路より約20cm下位にある。特にB支群の範囲では、谷底部分が石礫で固く締まって、路面が形成されている。谷奥では、自然の地形と判断される、狭い「U」字形の谷底に石礫が固く締って堆積しているのに対して、谷の入り口に近い平坦部では、幅約5mの広さで固く締まっている。この平坦面も全域が砂礫混じり土で固く締っており、踏み固められたものと考えられる。23・24・27・47層がこの路面上の砂礫土である。また、幅50cm、深さ20cm程度の溝ⅡS D 12~14が24mにわたって検出された。土層B-B'の45・46層が溝ⅡS D 14に相当する。この溝は、谷奥部の狭い谷底部分にのびているが、この溝内および谷奥部の谷底部分には、ともに砂礫が入っており、路面と同じく固く締っていた。人為的に掘削された溝ⅡS D 12~14は、路面中央に掘削されていることから、埋め戻されて暗渠排水溝として機能していたと考えられる。溝ⅡS D 12が溝ⅡS D 14に切られているので、数回の造り替えがなされたようである。

女谷B支群からA・C支群の間の谷部では、遺物の出土がなく、時期不明の溝を検出したが、女谷B支群の成果より、平安時代中頃~中世にかけての通路に伴う排水溝と判断した。また、古墳時代の溝ⅡS D 12~14に相当する遺構は検出できなかったが、谷底に礫混じりの暗茶褐色土が分布しており、当時の路面を形成していたものと判断される。

各横穴の墓道は、この墓地内通路とは接合や重複しておらず、若干の空間を空けて、その手前で終えている。

女谷B支群1・2・13・14号横穴前面の路面からは、土器(341～353)、溝ⅡSD14からは、鉄鏃(845)が出土した。また、1号横穴前面付近の路面下には暗茶褐色土が堆積しており、この層より鉄剣(844)が出土した。

2. そのほかの遺構(図版第58・231・232)

女谷B支群および女谷C支群の背後の丘陵上は、ほぼフラットな平坦面をなしており、この丘陵上を中心に、近・現代の遺構を検出した。女谷B支群および女谷C支群の横穴の玄室は、1m程度の高さでしか壁面が残っていないものもあり、これらの横穴に天井を架屋するためには、検出面より最低でも2m程度の高さが必要であると思われる。横穴を構築して以後、この丘陵上はかなりの削平を受けたものと思われ、横穴が造られている時点では、丘陵が高く盛り上がっており、女谷B支群からは平野を見通せなかったものと考えられる。

溝ⅡSD02 女谷B支群の谷部を埋める土砂流を掘削中に検出した溝である。9号横穴の墓道部で検出したが、横穴を検出した時点で消失した。内部より、土師器甕・杯、須恵器杯身・杯蓋片が出土したが、土砂流の上に一部かかっていることから、少なくとも、近世以後のもの判断する。

谷地形ⅡSX03(図版第58・232-(3)・(4)) 女谷B支群の東部、荒坂B支群の谷奥部で検出した溝で、断面「U」字形あるいは箱形の溝である。溝幅は最大で3.2mを測り、平面「V」字形に検出し、南に向けて徐々に浅く、狭くなる。内部からは、遺物は全く出土しなかった。後述の包含層ⅡSX06や女谷B支群の墓地内通路上の堆積土より、埴輪片が出土しているため、当初、古墳の残欠とも考えたが、第3次調査時に荒坂B支群の谷奥部を範囲を広げて調査した結果、谷の最奥部を形成する自然の抉れであることが判明した。

井戸ⅡSE04(図版第58・232-(2)) 女谷B支群12号横穴の東方で検出した土坑で、長径1.8m、短径1.6mのほぼ円形を呈し、掘形の断面は半円状を呈する。深さは約0.8mを測る。内部から遺物の出土はなかった。農作業に伴う水溜め用の井戸と判断する。

土坑ⅡSK05(図版第232-(5)) 女谷B支群11・12号横穴の東方10mで検出した土坑である。当初、方形土坑と判断し調査を進めたが、丘陵上の段差を横から抉るように掘削した土坑と判明した。遺物の出土はなく、土砂採掘土坑と判断される。

包含層ⅡSX06 女谷C支群と荒坂C支群の間で検出した土坑状の遺構で、丘陵平坦部から谷地形に変換する傾斜変換点付近で検出した。土層の観察により、重機により谷部を地山まで掘削した際に、丘陵平坦面上に包含層の一部が土坑状に残ったものを、土坑と認識したことが判明した。内部より、埴輪片が10数点出土した。

土坑ⅡSK07(図版第58・232-(1)) 女谷B支群10号横穴の墓道部分の斜面で検出した土坑で、5.0×3.6m、深さは20cmである。北東部から中央部にかけては、径3cm程度の円礫がレンズ

状に堆積していた。底面近くでは炭層が薄く堆積しており、焼土も若干認められた。内部より、近・現代の播鉢片、瓦片が出土した。竹などを焼却した坑と判断される。

土坑ⅡSK08 女谷B支群10号横穴の玄室の南東部で検出した土坑で、2.2×2.4mの隅丸方形を呈し、検出した深さは最大で1.6mを測る。内部より遺物は出土しなかった。その性格は不明である。

土器溜まりⅡSX09(図版第231-(2)) 女谷B支群2号横穴の墓道端のやや南西側で検出した土器溜まりで、黒色土器が指頭大の大きさに破碎され、小片となって出土した。0.6×0.8mの範囲で出土した。平安時代の通路を埋める13層の淡暗黄灰色粘質土層の上で検出した。

土器溜まりⅡSX10(図版第231-(1)) 女谷B支群1号横穴の墓道端直上で検出した土器溜まりで、1.0×1.8mの範囲で黒色土器片が細片となって多数出土した。土器溜まりⅡSX09とともに、平安時代の通路を埋める13層の淡暗黄灰色粘質土層の上で検出したが、明確な掘形を有しておらず、当時の通路面に散布したものと推定する。

溝ⅡSD12~14(図版第57・225) 女谷B支群の墓地内通路の路面を形成する砂礫層を除去した時点で検出した溝で、女谷B支群15号横穴から14号横穴の前面で検出した。溝ⅡSD14は、溝ⅡSD12に切り勝っている。それぞれの溝の断面は丸い皿状を呈しており、谷奥部分ではやや箱形になっている。内部を埋める土砂は、溝SD12~14の上位を覆う路面とほぼ同じく、砂礫が固く締まっている。

土坑ⅡSK15 女谷B支群2号横穴の墓道端のやや南西側で検出した方形の土坑で、1.0×1.5m、深さはわずかに5cmであるが、黄褐色粘質土をその埋土とする。平安時代の通路を埋める土砂との類似から、平安時代のもものと推測される。

地滑りⅡSX16(図版第232-(6)) 女谷B支群6号横穴の南側で、横穴の有無を確認するために設定したサブトレンチ内の土層で確認したものである。時期は不明である。

土坑ⅡSK17 女谷B支群14号横穴と15号横穴のほぼ中央で検出した土坑で、当初は、その規模より、天井が遺存している横穴の墓道部分と考えていたものである。調査により、全長4m、幅2m、深さ0.1mの土坑であることが判明した。埋土中より遺物は全く出土していない。その位置と形状・方向から、14号横穴と対になる横穴の掘削途中のものとも考えられるが、わずか10cm程度の検出高しかないため、確言はできない。

土坑ⅢSK01(図版第49・232-(7)) 女谷C支群5号横穴の南5mで検出した井戸状の竪坑である。現代の農作業用の溜め井戸と判断され、径1.7m、深さ1mを測る。

土坑ⅣSK01(図版第232-(8)) 女谷B支群18号横穴の玄室直上で検出した土坑で、4.0×5.5mの楕円形を呈する。検出した深さは約1.3mを測り、18号横穴の玄室内に堆積していた土砂を一部攪乱したようで、内部から18号横穴の遺物の一部が出土した。廃棄土坑と判断され、近・現代の瓦や陶磁器類が出土した。

(岩松 保)

第3章 荒坂地区の調査

第1節 荒坂A支群

1. 支群の概要(図版第59・233)

この調査地は、平成14年度に調査を実施したもので、荒坂B支群より直線距離で約500m南に位置している。平成5・11年度には、これより南の丘陵斜面で試掘調査を行ったが、導水施設を検出したに留まり、横穴は確認できなかった。そのため、まず試掘調査を実施して、横穴の有無を確認した。試掘調査では2基の横穴と横穴状の導水施設5基を確認し、それらの調査を行った。

平成5・11年度の試掘調査結果と今回の成果を合わせると、ここで調査をした横穴が、女谷・荒坂横穴群の横穴分布のほぼ南限を示していると思われる。

調査地内では、東から西に向けてのびる谷地形が分布しており、この谷の北・南側の両斜面で、横穴および導水施設を確認した。北側斜面では、横穴2基(23・24号横穴)と横穴状の導水施設3基(導水施設1～3)があり、南側斜面では横穴状の導水施設2基(導水施設4・5)を検出した。

23・24号横穴は主軸を揃えて隣接して造られており、この2基で小群を構成するものと判断される。谷の開口部側の東に位置するものが23号横穴、西側の谷奥に位置するものが24号横穴である。これらの横穴は、導水施設1～3よりも約2m高い位置にある。また、導水施設1～3も軸を揃えて隣接して造られていることから、横穴を導水施設に改造した可能性は否定できない。その場合には、これらの導水施設1～3で1つの小群と把握できよう。

なお、荒坂A支群の横穴のナンバリングと基数について説明を加えておきたい。『八幡市遺跡地図』では、荒坂横穴群として17基の横穴が登録されている。ここでの「荒坂横穴群」という名称は、第二京阪道路建設に伴う横穴調査の成果を取り入れる前の名称で、この報告書で用いている『京都府遺跡地図(第3版)』所載の荒坂A支群に相当する。平成5年度には、荒坂A支群の南端付近で試掘調査を行い、横穴状の遺構を新たに5基確認し、18～22号横穴とした。平成11年度に、このうちの1基の調査を実施した結果、横穴ではなく、導水施設であることが判明し、未調査の横穴状遺構4基も同様の施設であると判断された。平成14年度の試掘調査では、新たに2基の横穴を確認したので、23・24号の番号を付した。

以上のように、1～17号横穴については分布調査による確認だけであるので、横穴・導水施設のいずれであるかは不明である。18～22号横穴の5基については横穴番号が付されているが、実際には導水施設と判断されたものである。そのため、荒坂A支群で実際に横穴と確認されたものは、ここで報告する23・24号横穴の2基だけである。

荒坂A支群は総長約650mで、今回の2基を含めても19基の横穴が確認されているだけで、横穴の分布に粗密があるのかどうか、複数の支群に分かれるのかどうかなど、全くわかっていない

のが実状である。そのため、今後の調査によっては、複数の支群に分かれる可能性がある。

2. 23号横穴(図版第60・234・235)

(1)はじめに

重機掘削により墓道端を消失した。2基の横穴のうち、東側に位置するものである。

(2)形態と規模

墓道端は削平されており、全長5.3mが現存している。玄室は逆台形を呈しており、玄室の幅より狭い墓道が取り付いているため、いわゆる両袖を有する形となっている。玄室の側壁・奥壁には、地山面より約0.6m上位にまで、横穴の湾曲がcaろうじて観察できた。玄室長は2.05mで、玄室幅は奥壁部で2.0m、玄門部で1.1mを測る。玄室の最大幅は2.05mである。

墓道は、地山面と埋土の見極めがつかなかったところがあり、一部分掘りすぎてしまった。そのため、やや不正確なところがあるが、平面形は玄門部から墓道端に向けて、中央付近で一旦やや狭まり、そこから墓道端に向けて、わずかに広がるものである。横穴の平面形および両壁面に残る掘形の湾曲具合と閉塞盛土の位置が一致するので、羨道は有していないと判断される。墓道の現存長は3.25mで、墓道の上幅は最大で1.55mを測り、玄門部における墓道の下幅は95cm、最も狭いところで45cmである。玄室内での遺物の出土は1面のみであった。

(3)土層堆積状況

1～4層は玄室内に堆積した粘質土系の土層で、横穴使用終了後に横穴内の空間に自然に流入・堆積したものと判断する。

玄門部より墓道側で認められた6～12層が、横穴使用時に盛り上げられた閉塞土と判断される。5層については、横断土層A-A'で見ると、ほぼ水平に堆積しており、閉塞土の一部とも考えられる。

遺物は16層上面(I層)で出土した。16層の暗灰色砂質土が横穴構築時の初期整地土であり、玄室から墓道にかけての全面に10～20cmの厚さで敷かれていた。この上面の玄室内では、須恵器杯蓋1点が出土した。13～15層が初葬終了後の墓道の埋め戻し土と判断され、閉塞部の土層観察位置A-A'ではこれらに相当する土層は認められなかった。追葬時に横穴を開口する際に、取り除かれたのであろう。6層、7・8層、9層、11・12層が、それぞれの段階での墓道内通路・閉塞土の開口部を埋めた土砂の残欠と判断される。この推定が正しいとするならば、12層上面と9層上面では遺物の出土は全く認められなかったが、それぞれの進入の際に作業を行った作業面と判断される。12層中の玄門部の墓道側では、土師器壺1点が出土した。10層については、11・12層と同じなのか、9層と同じなのか、もしくは、10層だけで1回の進入路を形成しているのか、判断する材料はない。このように、土層の観察により、初葬の終了後、少なくとも4回にわたって横穴内に進入したものと推定される。

(4)遺物出土状況

I面は16層上面で、玄室内では須恵器杯蓋1点(354)が出土しただけである。杯蓋(354)は、口

縁を上にして出土しており、玄室内であることから副葬されたものと言える。12層の暗灰色砂礫より土師器壺(355)が出土したが、この層は、玄室へ再進入した際に設けられた墓道内通路を埋める土砂である。この土器はほぼ完形で、直立して出土しているので、意図的にこの位置に置かれたことは間違いなからう。墓道内通路を埋め戻す際に、埋め置かれたものと言えよう。

(5)出土遺物

横穴より出土した遺物は、須恵器杯蓋1点と土師器壺1点の2点だけである。鉄器の出土はなかった。

須恵器杯蓋(354)の杯蓋は口径12.0cm、器高4.2cmで、天井部はヘラオコシ後、ナデ調整を行っている。土師器壺(355)は小型の丸底壺とも言えるもので、口径11.0cm、器高8.6cmで、口縁部に一部欠損があるものの、ほぼ完形である。

3. 24号横穴(図版第61・236・237)

(1)はじめに

谷の奥側、23号横穴の西隣に位置する横穴で、23号横穴と2基で小群を構成するものである。

(2)形態と規模

墓道端が削平を受けており、全長は現存長で8.2mを測る。調査終了後の玄室の平面形態は楕円形に近い長方形である。玄室の中央より墓道側は、両側壁ともにやや狭められており、右側壁と左側壁では、その形状がやや異なっている。右側壁がやや崩れたようにも判断されるが、確証はない。両側壁に残る湾曲が発生する地点と、平面形のくびれ位置とがほぼ一致するので、その位置が玄門と判断する。この玄門位置と閉塞盛土位置が一致するので、羨道は取り付いていないと判断される。玄室長は2.8mで、玄室の奥壁部位置での幅は、両隅が丸くなっているので計測できないが、玄門幅は1.0m、最大幅は奥壁から約1mの地点で1.75mを測る。墓道長は5.4mが現存している。墓道の玄門から2.6m付近で、墓道底は段を有して掘削されている。墓道の上幅は、1.0~1.9mである。遺物は1面で出土した。

(3)土層堆積状況

1~7層は横穴使用停止後、横穴内に流入・堆積した土砂と判断されるもので、それらの下位の8~23層は、横穴使用に関わって堆積した土層と判断される。23層の暗黄灰色砂質土は、横穴構築時の初期整地土で、横穴の全面に敷かれており、この上面(I面)の1面だけで遺物が出土した。8~22層は、それぞれの段階の玄室内の整地土および閉塞盛土・墓道内通路の埋め戻し土の残欠で、層序の関係より、閉塞土・墓道内通路は8~10層、11~16層、17・18層、19・20層、21・22層の、都合5回にわたる盛り直しが認められる。このうち、21・22層は、初葬時に伴う閉塞盛土および墓道の埋め戻し土の残欠である。玄室内で作業を行っているのは、初葬面の23層上面以外に、14層上面、18層上面の2面が想定できるが、初葬面以外は遺物の出土は見なかった。

(4)遺物出土状況

遺物の出土は23層上面のI面では、須恵器杯蓋2点(356・357)が、口縁を上にして重なって出

土した。平面的には玄門のやや玄室側に位置し、層位的には初葬時の閉塞土と判断する22層に覆われている。土層の観察と解釈では、初葬面を含めて、3面の作業面を認めたが、この須恵器以外に玄室内より出土した遺物はない。これ以外に、墓道部埋土の13層中より土師器高杯の小片が出土した。

(5) 出土遺物

横穴より出土した遺物で図化できたものは、須恵器杯蓋2点(356・357)だけである。

杯蓋(356)は、口径10.8cm、器高3.65cmで、淡灰色に発色している。完形で、口縁部にやや歪みが認められる。焼成は堅く焼かれており、口縁端部に黄灰色の自然釉が付着している。杯蓋(357)は、口径10.8cm、器高3.4cmで、焼成は軟らかく、黄灰色に発色している。内外面ともに磨減が著しい。

4. そのほかの遺構(図版第238)

導水施設 1～5 丘陵斜面に長さ数mの洞穴状の横穴を穿ち、その前面に幅1m内外の溝を直線的に掘削したもので、地中にしみ込んだ雨水や湿気を集めて、田畑へ水を引き入れるための施設と推測される。その形状・規模は、横穴の形状・規模に近似する。

北側斜面に並ぶ3基の導水施設は、西側の横穴2基よりも床面が2m近く低い位置にあり、主軸を揃えて近接して造られている。南側斜面の2基も含めて、これらの遺構は、開口方向や形状・規模などが横穴に似ているため、調査当初は横穴と考えていた。しかし、これらの遺構の埋土からは、古墳時代後期の須恵器片が少量出土するものの、副葬品が集中するような埋葬面は認められなかった。また、これらの埋土は軟弱な砂礫が主体となっており、通有の横穴に見られるような、人工的に埋め戻された土砂とは判断できないものであった。さらに、導水施設4の底面には竹筒が据えられおり、これらの遺構が埋葬以外の使用に供されたものと考えられた。

これらの遺構は、その形状と、水田面に向いて溝が掘られていること、竹筒が主軸に沿って埋設されていることなどから、田畑に水を引き入れるための導水施設と判断した。とは言っても、特に導水施設1～3は床面の高さや主軸が揃うこと、若干の古墳時代の遺物が出土するので、横穴を近・現代に再掘削して、導水施設に転用した可能性は否定できない。

第2節 荒坂B支群

1. 支群の概要(図版第62・239～243)

女谷・荒坂横穴群のうち、東側の荒坂地区に所在し、独立丘陵の西側斜面に分布するものを荒坂B支群とし、同じ丘陵の東斜面に分布するものを荒坂A支群とした。しかし、その支群の境についてはよく分からないと言うのが実状である。荒坂B支群では、丘陵裾をめぐるように20基の横穴を確認したが、荒坂B支群と荒坂A支群の境近くに位置している18～20号横穴の分布状況は、これより南西側の横穴の分布状況と変わりなく、横穴が密に分布して、そのまま東側に続いていく状況である。そのため、現時点でのA支群、B支群の区別は便宜的なものであり、その境界を

確定する作業は、将来の調査に委ねざるを得ない。

荒坂B支群の横穴は、ほかの支群の横穴と比べて、やや大形の横穴が造られているのが特徴である。また、女谷・荒坂横穴群の中でも早い段階に造られた横穴が集中するようである(第5章第2節参照)。天井が残存している横穴も多く、そのため、残り具合が良いものが多い。一部の横穴には羨道の天井も遺存していた。

荒坂B支群の20基の横穴は、11の小群に分けることができる。隣接する横穴の近接具合や主軸の方向や玄室の造られている位置などから判断して、南側から見ていくと、まず、1号横穴、2・3号横穴、4号横穴、5・6号横穴の4小群に分けることができる。7～9号横穴は主軸が揃って近接しているが、8・9号横穴は7号横穴と比べて規模が小さいこと、造られている高さに3～4mの高低差が認められることから、7号横穴、8・9号横穴と別々の小群と判断する。この北側には、10・11号横穴、12～14号横穴、15～17号横穴が、近接して軸を揃えて造られている。18号横穴と19・20号横穴は、主軸がやや異なり、玄室が造られている位置もやや異なっていることから、それぞれ別の小群と判断される。

2. 1号横穴(図版第63・64・244・245)

(1)はじめに

この横穴は荒坂B支群の中で、最も谷奥に位置し、谷を挟んで荒坂C支群に対峙する。墓道の一部は、後世の削平により失われていたが、墓道端を確認できたことから、その全容が判明した。羨道部の天井が横穴使用時に崩落したため、閉塞位置を玄室側に動かしたものと判断される。北側の2号横穴とは若干の空間が認められ、この1号横穴1基だけで小群になるものと思われる。

(2)形態と規模

1号横穴は天井が残存していなかったが、その平面形態と側壁に残る湾曲の形状や、羨道の右側壁上部に天井の一部が廂状に残っていたことより、玄室の前面に羨道が付設されていると推定される。また、左側壁の天井相当位置では、天井の崩落面が認められたこと、後述のように、閉塞の盛土は羨門位置ではなく、羨道中央部から玄門にかけて位置していることから、横穴の使用時に羨道の天井が崩落したために、その閉塞位置を奥壁側に移動させたものと想定される。

玄室は長さ2.8m、奥壁部の玄室幅が2.0m、最大幅2.3mの隅丸方形を呈しており、玄門幅は0.8mを測る。玄室の前面には、長さ3.3mの羨道が取り付け、羨門幅は1.35mである。その前面に11.9mにわたって墓道が構築され、横穴の全長は18.0mを測る。左右の壁面に残る湾曲具合から、玄室・羨道の天井までの高さは、掘形の底面からそれぞれ1.8m、1.5m程度に復原でき、羨道は、玄室よりもやや低い位置に天井があったものと推定される。

墓道は横断面で見ると、上方がやや開く逆台形を呈している。上幅が0.7～2.5mを測るのに対して、墓道底の幅は最大1.45mで、墓道端近くでは0.6mと狭くなる。墓道の最深部は羨門部に位置し、1.2m程度が現存している。遺物は2面で検出した。

(3)土層堆積状況

1～13層は横穴使用停止後の堆積土と判断するものである。7～12層は砂質・砂礫を主体とし、天井の陥没に起因するものと想定され、1～6層は土質が強いもので、陥没痕に流入した土砂と推定する。14層以下が横穴使用に伴う堆積土である。

33層が横穴掘削直後の初期整地土層で、24・25層は追葬面を形成するための整地土で、これら2面の整地土上面で遺物を検出した。このほかに、土層の観察では、18層上面においても玄室内への進入がなされており、この面においても何らかの作業が行われたものと判断されるが、遺物の出土はない。

閉塞土・墓道については、26～31層が初葬終了直後に盛り上げられた閉塞盛土と墓道の埋め戻し土の残欠と判断するものである。14～17層、20～23層は、追葬などのために玄室内へ進入する際に、閉塞土と墓道内通路を掘削し、それを埋め戻した土砂と考えられるもので、初葬以後、少なくとも2回の進入が認められる。

(4) 遺物出土状況

遺物は玄室内の2面で出土した。I面は24・25層上面で、II面は33層上面である。

I面では、奥壁部分と玄門部の両側壁付近に、大きく3か所に分かれて遺物が置かれていた。左袖部は須恵器長頸壺3点(375・377・378)が集められており、脚付長頸壺(378)・長頸壺(377)は壁にもたれかかりながら、直立していた。長頸壺(375)は横位に転がっていた。右袖部には須恵器杯身(361・368・370・371)・杯蓋(360・362・364～366)および長頸壺蓋(376)が置かれていた。杯身(371)のみ口縁を上にして置かれていたが、ほかはすべて口縁を下にして置かれていた。奥壁部には須恵器高杯2点(372・373)・提瓶2点(379・380)・直口壺1点(374)・杯身1点(367)が置かれていた。高杯(372)は倒立して口縁を下にして、提瓶2点は横位に、杯身(367)は口縁を上にして正位に置かれていた。このほか、玄室中央付近では刀子(751)が出土した。I面では、奥壁部の1群に杯身が混じっているほかは、土器は、それぞれの種類ごとにまとめて置かれているようである。

II面では、玄室中央部の左側壁に近接して須恵器杯身2点(359・369)・杯蓋2点(358・363)が出土した。すべて正位に置かれているが、杯身・杯蓋のそれぞれの口縁が合わせられているものはない。また、高杯(373)の破片が、これらの杯身・杯蓋に近接して出土したが、この高杯はI面でその大半が出土した。この高杯は、もともとII面にあったのが、追葬や後かたづけなどの作業によりI面に動かされたものと思われる。

重機掘削直後で、1号横穴の掘形をまだ検出できる以前に、玄室の奥壁側一帯で、天井の崩落時に陥没したと思われる落ち込み状の穴を認めた。内部には地山とよく似た土が入り込んでいたが、この穴の掘削時に、須恵器杯蓋(671)および杯身(672)が出土した。

(5) 出土遺物

図化できた遺物には、須恵器杯蓋7点・杯身7点・高杯2点・長頸壺および直口壺4点・同蓋1点・提瓶2点で、鉄器では刀子1点がある。土師器は全く出土しておらず、また、鉄器の出土点数は刀子1点だけである。

Ⅱ面では、杯蓋(358・363)、杯身(359・369)4点がかたまって出土しているが、胎土や焼成などから、一揃いで作られたセット関係にあるものと推測されるものは、杯蓋(358)と杯身(359)のみである。

Ⅰ面では杯身・杯蓋が5点ずつ出土したが、胎土・焼成よりセット関係が復原できるものは、杯蓋(360)・杯身(361)に限られる。杯蓋(366)の口縁部には、ヘラ状の工具で縦方向の刻み目が施されているが、いわゆるヘラ記号であるのか、判断しがたい。長頸壺・直口壺は4点出土したが、蓋(376)とセット関係にあるものは認められない。蓋(376)の天井には、つまみが付けられていた痕跡が認められる。長頸壺(375)は、体部下半に焼成後の穿孔がなされている。

杯蓋(671)・杯身(672)は1号横穴外から出土したものであるが、杯と身は一揃えの組み合わせとして作られたもので、荒坂B支群の各横穴内から出土した遺物より、古い一群に相当する。

3. 2号横穴(図版第65・66・246・247)

(1)はじめに

今回の一連の横穴調査の中で、唯一、馬具が副葬された横穴である。また、調査前には玄室・羨道の天井が残存しており、天井の形状を記録できた数少ない横穴の一つである。北側の3号横穴と近接して軸を揃えて造られており、2基で小群となる。

なお、横穴の調査は、天井を重機で取り除いた後に行ったため、横穴の各部・土層の実測図は、基本的には、天井を除去した後のものである。天井部を取り外す前に、天井の形状を記録したので、それを最終の図面と合成して提示している。そのため、各実測図の間で、辻褄が合わないところがある。

(2)形態と規模

玄室の平面形は横長の隅丸長方形を呈しており、細長い羨道が付設する。天井除去前に現存していた玄室および羨道部の天井までの高さは、堆積土上面からそれぞれ、1.35m、0.75m、地山面からそれぞれ2.3m、1.6mを測る。ところが、玄室内では、最終の作業面と判断する14層上面の上に、約60cmの厚さで砂礫が堆積しており、これらは天井から崩落した砂礫層と判断されるので、本来の玄室内の天井の高さは、地山面より1.7m程度と推定される。玄室の天井は、縦断・横断図で見ると、ともに中央部が高いドーム形をなしている。約60cmの厚さで天井が剥落しているが、もともとの天井の形状を残しているものと推定する。

横穴の先端部は削平により、その一部が消失しているものと判断されるほかは、完存している。各部長は、全長は10.6mが残存し、玄室長2.1m、玄室幅(奥壁)2.0m、玄室幅(玄門)1.05m、玄室最大幅2.95m、羨道長1.9m、墓道長(現存)6.6m、墓道幅(上場)0.75~2.4mを測る。遺物は1面で出土した。

(3)土層堆積状況

玄室内に堆積している6~11層は、基本的にその土質は砂礫・砂層で、天井や壁面から崩落した土砂が堆積したものと判断する。また、墓道内に堆積している1~5層は、土質が基本であり、

墓道を人為的に埋め戻した後の窪地に、自然に堆積した流入土と判断する。

遺物の出土は23層上面での1面(I面)だけであるが、土層の観察により、17層上面と14層上面でも何らかの作業を行うために、玄室内に進入し、整地したものと推定される。

初期整地土は23層の暗黄褐色砂で、この上面が初葬面のI面である。土層の縦断面図では、山形の土盛りとしては確認できていないが、初葬に伴う閉塞土・墓道の埋め戻し土(残欠)は、18～22層と判断する。横断面B-B'を見ると、この時点で、墓道の現存高1.35mまでを埋め戻している。

2度目の進入に際する開口および墓道内通路を埋め戻した土(残欠)が、15・16層と判断する。この時点の作業面は17層上面で、17層自体は整地土と考える。初葬時の閉塞土の一部と判断する20層は、追葬時の整地土17層の上位に載っており、堆積順序が逆転している。これは、玄室内の17層で整地を行う際に、整地土の上に閉塞土から若干の土を引き入れて、平坦にしたため、見かけ上逆転しているだけと考える。

3度目の進入時には14層で整地しており、その上面の作業面に対応する閉塞土・墓道内通路の埋め戻し土は、12・13層である。

(4)遺物出土状況

玄室内のI面には、拳大の石を敷き並べて礫床が構築されているが、羨道には礫敷きは認められない。玄室中央の奥壁側で、人骨1体(人骨22)が奥壁に平行に置かれており、頭部を中心に、85×50cmの範囲で朱の痕跡が認められた。人骨の周囲には、鉄鏃(755・756・759)や耳環(876)が出土するものの、土器などは全く置かれていない。このように、朱の分布する範囲を含めて、人骨の周囲には広く遺物が出土していないので、棺や板など、人骨と周囲の土器とを明瞭に区別するものの上に安置されていた可能性も認める。この場合には、鉄鏃(755)は遺骸の上に置かれたと判断してよかろうが、この人骨は改葬骨であるので、当初からこの位置に置かれたのか、改葬の時点で置かれたのかは判断できない。

この人骨の頭部側には刀装具を伴う刀(761～763)および轡(764)、鉄鏃(757)が置かれている。足下には、鞍金具が2点(765・766)、刀子(752・753)が出土しており、鞍が置かれていたのであろう。人骨の西北部の玄門側には土器が多く集められており、玄室内出土の土器はすべてここから出土した。この位置には、須恵器高杯6点(382～387)・同蓋1点(381)・提瓶1点(388)・甕1点(389)、土師器壺1点(391)・甕1点(392)、刀子1点(754)が置かれていた。特に、高杯(382)は完形で正立して出土した。このように、遺物がまとまって出土してほとんどが完形であること、遺物が置かれた配置が整然としていること、人骨22以外にほかの埋葬骨が認められないこと、上位の層に追葬が行われていない点などにより、この横穴への埋葬行為はこの人骨22の1体のみであり、副葬された遺物は当初の配置状況からさほど動かされていないものと思われる。

墓道内の墓道検出面近くでは、須恵器甕(390)が出土しており、層位は確認できなかったが、おそらく、墓道内通路に破碎されて埋められたものと思われる。体部より下の破片は出土していない。そのほか、図化できなかったが、須恵器高杯、土師器甕の小片が出土した。

(5) 出土遺物

須恵器高杯(384～387)は特徴的な形態をしており、口縁部を強くナデて外側に折れ曲げるように引き出している。柱状部には透かしが作られていない高杯(384・386)とヘラで沈線を描くだけの高杯(385)、一段の透かしが作られている高杯(387)がある。蓋(381)と高杯(382)は、焼成や色調から見て、一揃いの蓋と杯として焼かれたものと判断される。

この横穴からは、杯身・杯蓋が全く出土していないことが注目される。先に見たように、横穴内の遺物はほとんど動かされていないと考えられるので、後に横穴外に持ち出された可能性は低く、当初から杯身・杯蓋が副葬されたいなかったと考えられる。このことは、杯身・杯蓋の代わりに高杯で代用されたと考えれば、理解できよう。この横穴では須恵器高杯が6点出土しており、比較的多い数量である。通常は、杯身・杯蓋を用いるのを、例えば、この横穴の被葬者はステイタスが高かったなどの理由のために、高杯を用いたのかも知れない。

土師器壺(391)は、橙褐色を呈しており、内外面ともに磨滅が著しいが、内外面をミガキ・暗文で仕上げる精巧なものである。

鏝(763)は、刀(761)と近接して出土しており、それに着装された状況で出土していない。刀装具(762)は刀(761)の刀身に入らないので、釧ではなく、柄を飾る金具と考えられるものである。

轡(764)、板状の立聞が付く素環鏡板付轡で、立聞には三連の兵庫鎖が付けられている。鏡板には遊環が付けられて、遊環に引手・銜の端環が連結されている。右の引手は、端環で連結されるのではなく、引手の棒を環状に曲げて遊環と連結している。鏡板は、左右ともに長径9.3cm、短径7.8cmで、立聞は幅2.6cm、高さ0.9cm(左)、1.2cm(右)を測る。

鞍金具(765)は、鉸金具の一部が破損しているが、鞍金具(766)と同じ形状のものである。座金具は角が突出した方形を呈しており、中央に方形の孔が穿たれた板である。足金具は断面が長方形で、中程に環を作り、環に鉸具が連結されるものである。鞍金具(765)の各部長は、座金具のタテ×ヨコ×厚は、それぞれ4.0×4.0×0.2cmを測る。輪金は円形で、長さ×幅(最大)×断面は、それぞれ5.9×4.5×径0.6cmを測る。足の長さは4.1cm(現存)で、断面は0.4×1.0cmを測る。鞍金具(766)の各部長は、座金具のタテ×ヨコ×厚は、それぞれ3.9×4.5×0.25cmを測る。輪金は楕円形で、長さ5.9×4.6cm、断面は径0.6×0.7cmを測る。足の長さは5.5cm(現存)、断面は0.5×0.85cmを測る。

(岩松 保)

(6) 人骨出土状況

人骨22は、I面の玄室ほぼ中央部から出土した。頭蓋骨・下顎骨・長管骨・骨種不明骨片などが残る。いずれも保存状態は悪く、完存するものは皆無である。現地調査の段階でも破損が進行していったので、現地での観察以上の観察は行えない。当人骨の頭蓋骨出土位置周辺には朱が敷かれており、頭蓋骨の一部にそれが付着していた。

頭蓋骨は左側頭部を下に横転しており、下顎骨とは約15cm離れる。さらに下顎骨から約20cm離れて長管骨が集められている。長管骨の長軸方向は、横穴主軸に直交する。これらの長管骨の間

には、骨種不明骨片が挟まっていた。長管骨が平行に並べ置かれている状況より、この人骨が改葬骨であることは明らかである。

(上田真一郎)

4. 3号横穴(図版第67～69・248・249)

(1)はじめに

当初から玄室の天井が崩落しており、検出面から順次、玄室を掘り下げていった。と同時に、墓道部の掘削を進めていくと、玄室床面は検出面から約3m下にあることが判明した。そのまま玄室の掘削を進めていくと、壁面が崩落するため、重機により上土を1.5m程度の厚さで除去した。その際の不手際のため、玄室内の土層の一部が記録できていないが、これは天井崩落部分の土層であり、閉塞土・墓道の土層の解釈には影響がない。また、横穴の形状は、調査完了後に記録したため、土層図と横穴実測図とで一部整合していないところがある。南に隣接する2号横穴と2基で小群を構成している。

(2)形態と規模

玄室の平面形は杓文字形を呈しており、右側壁は全面にわたって壁面が崩落しており、玄室・羨道を構成する壁面の掘形は認められなかった。左側壁にはわずかに玄室・羨道の湾曲が認められた。奥壁から3.8m、5.5mの位置に湾曲の始まりが見てとれ、この位置に玄門・羨門があるものと想定された。平面形で見ると、玄門に位置するところは、玄室が狭まった、くびれ部に相当し、羨門に相当する位置は、平面差は認められないが、閉塞土の盛り上げ位置と合致する。

墓道の端は、フラットな状態で終わっており、ほぼ墓道端までを検出できたものと思われる。

各部長を掲げておくと、全長11.35m、玄室長3.8m、玄室幅(奥壁)1.9m、玄門幅1.25m、玄室最大幅は奥壁からやや玄門側で2.55m、羨道長は1.7m、羨門幅1.0m、墓道長5.85m、墓道の上幅は0.8～2.5mを測る。遺物の出土は3面を確認し、それぞれの面で遺物の出土を見た。初葬面では、礫床が構築されている。

(3)土層堆積状況

19層より上位は、横穴使用停止後の堆積層と判断するものである。墓道部分および玄室上位の堆積層は土質で、墓道を埋め戻した後の窪みや玄室天井の陥没痕に雨水とともに堆積した土砂と判断する。

20層より下位が横穴使用時の堆積土である。遺物は3面で出土し、上から、24層上面(I面)、28層上面(II面)、39層上面(III面)である。

38・39層は横穴構築時の初期整地土層で、特に最下層の39層は淡黄灰色砂が固く敷き詰められている。38層は墓道部分のみを整地している。玄室内の39層上面が初葬面にあたり、拳大の円礫が敷き並べられて、礫床が設けられていた。礫床は玄室の全面に造られているのではなく、玄室左側壁側の、5.6×3.0mの範囲だけに石礫があり、その密度も疎らなものである。初葬後の閉塞土および墓道の埋め戻し土は、31～37層と判断する。土層断面B-B'で見ると、約1.2mの高さ

にまで墓道を埋め戻している。この後、3回にわたって墓道内通路が掘削され、閉塞土が開口されている。それぞれの埋め戻し土層は、下位から見ると、29・30層、25～27層、20～23層である。一方、玄室・羨道部には、初葬後、28層と24層を盛り上げて2回にわたって整地をしている。Ⅱ面を構築した直後に埋め戻した閉塞土および墓道内通路は、25～27層で埋め戻されている。24層で整地し、Ⅰ面で埋葬を行った直後の閉塞盛土・墓道内通路の埋め戻し土は、20～23層と判断される。

(4)遺物出土状況

遺物は3面で出土し、Ⅰ面は玄門付近に、Ⅱ・Ⅲ面は玄室奥壁部左側に遺物が集中している。

Ⅰ面では、須恵器杯蓋2点(393・395)・杯身4点(394・397～399)・高杯7点(405・406・408・410・412・414・416)・同蓋5点(409・411・413・415・417)・脚付短頸壺1点(418)・脚付長頸壺1点(419)・脚付広口壺1点(420)・提瓶1点(422)、土師器把手付椀1点(426)が出土した。椀の配置で置かれた杯身・杯蓋などは認められなかった。高杯蓋(415)は羨道より出土しており、出土位置は図示していない。提瓶(422)はこのほかに羨道内Ⅰ面および玄室内Ⅱ面出土の破片と接合した。脚付長頸壺(419)はⅡ・Ⅲ面、高杯(405)はⅡ面および閉塞部23層より出土した破片と接合した。鉄器には、石突(766)および釘(777)が出土した。

Ⅱ面では、須恵器杯蓋1点(396)・杯身1点(400)・高杯2点(404・405)・提瓶4点(421～424)、脚付長頸壺1点(419)が出土した。このうち、提瓶(422)はⅠ面、高杯(405)はⅠ面・閉塞部23層、脚付長頸壺(419)はⅠ・Ⅲ面出土の破片と接合した。提瓶(422)と高杯(405)は、本来、このⅡ面に納められたものであろう。鉄器は鏃8点(768～775)が出土した。

Ⅲ面では、須恵器高杯2点(403・407)・脚付長頸壺1点(419)、土師器甕1点(427)が出土した。脚付長頸壺(419)はⅠ・Ⅱ面でも破片が出土したが、本来はこの初葬面に置かれていたものと判断される。

墓道内よりは、30層の明橙褐色土中より刀子(767)、27層の茶褐色砂礫土中より須恵器甕片が出土した。ともに、追葬時に墓道を掘り返して通路を造り、それを埋め戻した土砂と判断される層で、30層の埋土は27層よりも一段階古い墓道内通路の埋め戻し土と判断する。

閉塞開口部の埋め戻し土である23層中よりは、横瓶片(425)が出土したが、この破片は玄室内では全く見つからない。同じ層中より、高杯片(405)が出土しており、Ⅰ・Ⅱ面出土の破片と接合した。そのほか、出土層位と位置を記録できなかったが、杯身片(401・402)が墓道内より出土した。

(5)出土遺物

杯身は口径11.6～13.0cm、杯蓋は13.5cm前後と、比較的大形のものである。

須恵器には胎土・焼成より、一揃いの蓋と身として作られたと判断されるセット関係が認められ、杯身(394)と杯蓋(393)、高杯(410)と蓋(409)、高杯(412)と蓋(411)、短頸壺(418)と蓋(417)の4セットがある。

土師器把手付椀(426)は精良な胎土でていねいに作られており、胎土分析を行っている。

提瓶(424)には、焼成時に重ねて置かれた土器の口縁が、丸く釉着している。提瓶(421)の口縁部は、約1/2にわたって「U」字形に欠けており、玄室内から破片も出土していないので、意図的に打ち欠かれたものと考えられる。

鉄器石突(776)は、女谷・荒坂横穴群では唯一の出土である。石突の長さは、先端の一部が欠損しているが8.9cmで、最大径は2.1×2.3cmで、鉄板の厚さは0.2cmを測る。

5. 4号横穴(図版第70～72・250・251)

(1)はじめに

丘陵斜面の表土を除去するとすぐに横穴の形状が確認でき、調査を進めていくと、検出面から玄室床面まで約4mの深さとなることが判明した。壁面や土層断面の崩落の危険があったため、検出面より約2.5mの深さまで掘削を行った後に、重機で約3mの厚さで上土を除去した。最終的には、1.5～2m程度の高さで横穴壁面の立ち上がりを確認した。このように、重機による壁面の除去を行ったため、土層の一部を観察できなかった。

また、墓道の端を6mにわたって拡張したが、墓地内通路に相当する平坦面は確認できなかった。この横穴では、唯一、羨門、主軸に直交する方向の溝を検出しており、板戸によって閉塞が行われたものと推定される。この横穴1基のみで小群になるものと推測される。

(2)形態と規模

当初、調査範囲内では墓道の端まで調査できなかったため、トレンチを一部拡張して、調査を行った。一つは墓道端を検出することで、もう一つは荒坂B支群1号横穴の前面で検出した墓地内通路をこの横穴の前面で確認する目的であった。墓道の前面を6mにわたって拡張したが、横穴の墓道端部は確認できたものの、その前面には傾斜面が広がるばかりで平坦面はなく、通路と認定できるような溝も認められなかった。

横穴の全長は18.7mを測り、墓道端は丸く終わる。墓道端底面には、土坑状の掘り込みは認められなかった。玄室の平面形は長方形で、左袖が明瞭に造られているのに対して、右袖は若干の膨らみが認められる程度である。玄室長4.6m、玄室幅2.4m、玄門幅1.3mを測る。羨道も平面形は細長い長方形で、長さ2.4m、羨門での幅が1.05mを測る。墓道長は11.7mで、墓道の上幅3.15mを測る。遺物は1面で出土した。墓道端から玄室に至る地山面はほぼ平坦である。

この横穴で特徴的なのは、羨門部の初期整地土の上面で、長さ1.1m、幅30cm、深さ25cmの溝が、主軸に直交して掘られている点である。この溝は、玄室内から墓道にかけての整地土と判断される70・71層の茶褐色粗砂混土・淡灰褐色粗砂混土の上位より掘られていた。土層の観察では、初葬面に対応する閉塞土の盛り上がりは認められなかった。近隣の狐谷横穴群の調査で報告されているように(久保田1983)、板戸をこの溝に立てて閉塞を行った可能性が指摘できる。板戸閉塞は初葬時のみで、追葬以降の閉塞は、ほかの横穴と同じく、墓道から羨門にかけての位置で、やや土質の強い土砂を盛り上げている。

(3)土層堆積状況

1～36層が横穴の使用停止以後に堆積した土層で、このうち、22～36層は砂礫層が主体で、天井崩落土と判断される。また、1～21層は土質が強く、有機質を多く含むため、横穴の天井が崩落した陥没痕に流入・堆積した土砂と判断する。

遺物の出土は70・74層上面(I面)の1面だけであったが、土層の観察により、整地を行って人為的に造った作業面として、60層上面、42層上面の2面がそうと判断される。

横穴構築後の初期整地土は70～74層が相当し、砂質土から砂が主体となっている。この上面が初葬面にあたる。この時点での閉塞は、羨門部での盛土が認められず、68層で埋まっている溝に板戸を立てて閉塞していた可能性がある。この板戸閉塞に伴って、墓道の埋め戻しを行ったかどうかについては、土層の層序による解釈では判断がつかない。

追葬時以降には、閉塞は土を盛り上げて行っており、37～56層は閉塞盛土および墓道内通路の埋め戻し土と判断される堆積であるが、37～41層、45～56層の2時期の墓道内通路と閉塞部の埋め戻し土が認められる。57～67層は、玄室内では整地を行っており、閉塞部分ではやや盛り上がっているため、閉塞土を整地土に転用したのかもしれない。また、43・44層は、墓道端の掘形を覆う土であるが、墓道内を人為的に埋め戻した土であるのか、横穴使用停止後に自然に堆積した土砂であるのか、判断がつかない。

(4)遺物出土状況

遺物は70・74層の上面の1面だけで出土したが、土層の堆積状況から、42層上面や60層上面でも何らかの作業が行われたものと判断される。

I面では、遺物は大きく2か所に置かれており、奥壁近くの左側と玄門付近の右側壁を中心とした位置である。奥壁に近い1群は、杯蓋(430)と杯身(438)の2点があり、ともに口縁を下にして並べられていた。その配置から、枕として用いられたものと言える。玄門部の1群は、須恵器杯身4点(429・435～437)・杯蓋3点(428・431・433)・高杯2点(441・442)・同蓋2点(439・440)・壺1点(445)がある。これらの出土状況は、蓋(439)と杯身(435)は口縁を上にしており、蓋(440)と杯蓋(431)はともに口縁を下にして出土した。それ以外の杯身・杯蓋は2か所で重ねられており、下から、杯身(429)・杯蓋(428)・杯身(437)が口縁を下にして重なっており、杯蓋(433)の上に杯身(436)が、同じく口縁を下にして重ねられていた。これらの杯身・杯蓋は、その出土状況から、枕として用いられたものではない。

墓道内の45層より杯身(434)が、51層より横瓶(446)が出土しており、墓道内通路を埋め戻す際に埋められたものであろう。高杯(443)は墓道内より出土している。墓道端の前面では、須恵器杯蓋(432)・直口壺(444)が出土した。また、横穴使用停止後の堆積層ではあるが、墓道玄門部の15層中より、土師器皿(447)が出土した。そのほかに、墓道内より、須恵器壺・甕・甕・提瓶、土師器甕などの破片や埴輪片が出土した。

玄室内のI面では、土器とともに人頭大よりやや大きい石が4石出土した。石の配置に規則性は認められない。玄室内で同様の石を検出した横穴には、荒坂B支群5・7号横穴がある。5号横穴では、人頭大の石を用いて閉塞が行われており、その一部の石が玄室内に運び込まれている。

5号横穴以外に多くの人頭大の石を使用している横穴は認められないので、5号横穴の閉塞石の一部が何らかの理由により、4・7号横穴に運び込まれた可能性が高い。5号横穴では、これらの石が人骨の上に置かれた状況で見つかっているため、単なる棺台ではないものと考えられる。

(5) 出土遺物

土師器・鉄器の出土は認められず、すべて須恵器であった。須恵器に一揃いの身と蓋として作られたセット関係が認められ、杯蓋(428)と杯身(429)、高杯(441)と同蓋(440)がセット関係にある。杯身・杯蓋は基本的にヘラオコシ後、ヘラケズリを行っているが、杯蓋(433)のみ、ヘラオコシ後、簡単にナデる程度で、ヘラケズリを省略している。

6. 5号横穴(図版第73～75・252～255)

(1) はじめに

羨道・玄室に天井が残存していたので、重機で天井を外して調査を行った。玄室内の土層は、天井除去作業時に玄室内に入り込んだ土砂を取り除いた後の記録である。

この横穴は唯一、閉塞石を有する横穴であること、玄室・羨道に稠密に礫敷きを設けていること、閉塞石の手前と羨道部に円筒埴輪を置いている点で、特徴的である。また、東南アジア産のムティサラビーンズが出土した。

北側の6号横穴と軸を揃えて造られており、この2基で小群をなしているものと判断される。

(2) 形態と規模

ほぼ方形を呈した玄室に、漏斗状の羨道が取り付けられている。墓道の長さは比較的短く、墓道の端部は北側に湾曲して掘削されている。墓道端では土坑状の窪みは確認できなかった。

玄室部は、ほぼ水平に造られているが、羨道は墓道とともに、やや傾斜をもって掘削されている。壁面に残る湾曲より、玄室・羨道のそれぞれの天井までの高さは1.8m・1.2m程度に復原できる。

全長13.25m、玄室長2.4m、玄室幅は奥壁部が最大で2.8m、玄門幅1.7m、羨道長3.05m、羨門幅0.55m、墓道長7.8m、墓道上幅は最大で3.0mを測る。遺物は1面で出土した。

(3) 土層堆積状況

玄室内には、基本的には砂礫が堆積しており、1～5層および8～11層がそうで、すべて、天井もしくは壁面からの崩落土と判断されるものである。これらの土層の間には6・7層が堆積している。6層は、玄門付近で砂礫層に挟まれて堆積している粘質土である。これらは閉塞盛土の上位から玄室内に向けて斜めに堆積しており、粘質が強く、ほかの砂礫層とは明らかに異なるため、長年月にわたって、土砂が開口部から玄室内に流入して堆積したものと判断する。そのため、この土層より下の8～11層は、横穴使用停止後、さほど時間の経っていない時期の堆積層と判断される。特に8層の灰白色砂は玄室内の遺物・人骨を覆っているため、埋葬後直近の天井崩落土の堆積といえる。

閉塞および墓道の盛り上げについては、12～18層、19～28層の大きく2層に分けられる。

19～28層は、これより上位の層とは違って、細かな単位ではほぼ水平方向に土が積み重ねられており、一続きの作業による盛土と判断される。26層を中心に、閉塞石の横で円筒埴輪2点(476・478)が破碎されていたが、この埴輪片の周囲は色調の違いや土質の違いが認められなかったので、破碎した埴輪片を置いた後に、土砂で埋められたのであろう。このように、19～26層は、初葬時に羨門位置で石により閉塞した後に、墓道を埋め戻した土砂と判断される。また、埴輪片の上に載った状態の閉塞石は一部しかなく、大多数の閉塞石は埴輪片と重複していなかった。このことより、閉塞石を積み上げて閉塞を行った後に、埴輪を破碎してその前面に置いたのが、その後、閉塞石を取り外して横穴に進入した際に閉塞石が若干動かされたため、一部の閉塞石が埴輪片の上に載ったものと推定される。

12～18層は閉塞石を覆う土で、女谷・荒坂横穴群で通有に見られる閉塞盛土と墓道内通路の埋め戻し土である。閉塞石前で破碎された埴輪(476・478)と同一個体の破片が17層中に混じることから、追葬時に墓道内通路を掘削し、閉塞石の一部を取り外して玄室内に進入した際に、閉塞石前の埴輪が掘り返されて、混じり込んだものと推定される。横断面B-B'で見ると、14層が半円状に穿たれていることから、12～14層・15～18層の2時期の閉塞盛土・墓道内通路の埋め戻し土とも考えられる。

磔床は、玄室と羨道の全面にわたって構築されている。玄室には、ほぼ水平に磔が敷かれており、羨道と玄室の境では約30cmの段差を有していた。この段差部分には、やや大振りの石が半ば立てられた状態で貼り付けられていた。羨道は羨門に向けてわずかに下る傾斜を有しており、磔床は玄室とはほぼ同じ密度でいねいに敷かれていた。玄室内の磔床は単層であるが、羨道の玄室側約1/3においては、石磔が2～3層に積まれていた。玄門位置には、閉塞石を転用したと判断される人頭大の石が磔床上の石磔の上で、玄室と羨道の高低差をなくすかのように平積みされていた。完形の円筒埴輪(477)や土師器(472～474)、円筒埴輪(476・478)の破片も、磔床の上に置かれた石磔の上に置かれていた。円筒埴輪の破片は閉塞石前で破碎された埴輪と同一個体のものである。

以上の知見から当横穴の構築・使用を復原すると、地山を掘削する際に、玄室と羨道部に段差を設けて掘削する。その上面を29層の淡灰色砂で整地した上で、拳大の磔を敷き詰めて、磔床を構築する。その際に、玄室と羨道の間段差をなくすように石を敷き並べるのではなく、初期整地土で段差を強調し、その段差のままに石磔を敷き並べる。初葬を行った後、羨門での閉塞は、人頭大の石を積み上げて行う。その後、円筒埴輪2本(476・478)を破碎し、閉塞石の前面に置き、閉塞石の前面に土を盛り上げて墓道を埋め戻す。この時には、細かな単位で土を変えて、水平方向に盛土を行っており、墓道の埋め戻しは少なくとも19層よりも高い位置まで行ったようである。

追葬の段階には、墓道を現存の19層上面の位置まで掘り返して、墓道内通路が構築される。そして、羨門に積み上げられた閉塞石の一部が取り外される際に、その前面に埋められた埴輪片の一部も掘り返される。この時に、土中に埋まっている石もやや動かされて、埴輪片の上に動いたようだ。横穴内部に進入すると、玄室と羨道の段差をなくすように、閉塞石を用いて玄門部に石

が平積みにされる。この平積みの石よりも羨門側の礫床上に、拳大の石礫が部分的に置かれた後に、完形の円筒埴輪(477)や閉塞石前より掘り返された埴輪片(476・478)、土師器壺・高杯(472～474)が置かれる。横穴から退室すると、初葬時のように石を積み上げて閉塞するのではなく、土を盛り上げて閉塞し、墓道内通路を埋め戻している。17層に埴輪片が混じることから、埋め戻しに際しては、まず開口時に掘り返した土砂を用い、上位の埋め戻しには新たに用意した土砂を用いたものと推測される。

(4) 遺物出土状況

玄室・羨道では遺物の出土面をそれぞれ1面で確認した。玄室では礫床上がI面で、羨道では礫床上での遺物の出土はなく、礫床の上に敷かれた石礫の上で遺物が出土した。

玄室内では、右側壁近くに人骨24、左側壁近くには人骨23が置かれており、奥壁側に土器を中心とした遺物が集められていた。土器は、須恵器杯身3点(449・454・455)・杯蓋5点(448・450～453)・高杯1点(456)・短頸壺4点(459～462)・蓋2点(457・458)・脚付長頸壺4点(464・468～470)・同蓋2点(463・467)・壺2点(465・466)・提瓶1点(471)、土師器甕1点(475)がある。鉄器は、刀1点(783)と鎌5点(778～782)がある。耳環(877)は玄室左隅の土器の集積の間から出土しており、人骨の周辺から出土したものではない。これと対になると推測される耳環が杯蓋(450)の下で出土した^(詳5)。また、奥壁左隅では、土器に混じって石鎌(986)が1点出土した。

人骨24の遺存状況はさほど良くなく、四肢骨と判断される骨が大きく2ないし3群に置かれていた。人骨24の東側の礫床上では、わずかに朱の痕跡が認められた。人骨23は、若干の長管骨と腐食した骨片が散らばっており、その北側でガラス玉や管玉が出土した。

玄室内には閉塞石として用いられていたと判断される石が5～6石入り込んでいた(図版255-1)・(3))が、これらの石は人骨24の上に載っており、しかもI面よりもやや浮いた状態で置かれていることから、棺台として利用されたものでないことは明らかである。また、その高さも揃っていなかった。同様の石は、荒坂B支群4・7号横穴でも見つかっており、それらと同じ性格のものであるのかどうかを含めて、その用途は不明である。

羨道では、厳密には礫床上ではなく、その上に置かれた石礫の上で遺物が出土した。礫床の直上で遺物は出土していない。羨道には、土師器高杯(472・473)・脚付小壺(474)および円筒埴輪(476～478)が置かれていた。円筒埴輪(477)は完形のもので、横位に置かれており、転回しないように埴輪片(476)がその下に挟み込まれていた。図版第75の縦断面で見ると、この円筒埴輪は羨門側が浮いた状態にあり、石礫の上に置かれていない。石礫の代わりに、羨門側には土が敷かれていた。閉塞石前面の円筒埴輪(476・478)はこの羨道で出土した埴輪片と接合した。そのほか、墓道内の最上層より、土師器甕小片が出土した。

(5) 出土遺物

本体と蓋とが一揃いの組み合わせとして作られたセット関係にあるものは、杯蓋(448)と杯身(449)、蓋(458)と短頸壺(459)、蓋(467)と脚付長頸壺(468)がそうと復原できる。

土師器高杯2点(472・473)が出土しているが、これらとは別個体と判断される高杯の破片が2

点出土した。

円筒埴輪(476～478)は胎土・焼成・形態が同じものであるが、これらの円筒埴輪がどこから持ち込まれたのかは、よく分からない。埴輪(476)は胎土分析を実施した。

耳環(877)は蛍光X線分析を行い、鉛環であることが分かった。

玉はガラス玉(883～927)、滑石製のもの(929～933)があり、玉(891・892・894)など、赤く発色しているのは、東南アジア産と言われているムティサラビーンズで、計8点出土した^(注6)。そのほか、緑色凝灰岩製の管玉5点が出土している。

(岩松 保)

(6)人骨出土状況

2体の人骨を確認した。人骨23は玄室玄門付近西寄り、人骨24は玄室中央部の東側壁寄りで検出した。両人骨ともに保存状態は悪く、風化の進行が著しいため完存する骨はない。現地での調査段階でも破損が進行し、現地での取り上げ前の段階以上に観察は行えない。

人骨23では、四肢の長管骨と思われるものと、骨種不明の骨片とがある。遺存している長管骨は大きく2方向に分かれ、一つは横穴主軸に近い方向で、一つはそれに直交するような方向である。これらは互いに重複していない。これ以外の骨については、遺存状態が悪いため観察できず、検出時に土色・土質に違いが認められた程度で、詳細は分からなかった。長管骨の集石状況より、改葬骨と判断される。

人骨24では、頭蓋骨と上腕骨・下肢長管骨および長管骨と思われる骨片と骨種不明の骨片とがある。各骨の配置状況は、頭部を奥壁側に向けたいわゆる伸展位の状況にあり、その方向は横穴主軸にほぼ平行する。上腕骨・下肢長管骨の位置は、頭部を基準に見ると、解剖学的位置に近いところにあり、伸展位として配置された可能性が認められる。下肢の長管骨と思われる一群内からは、ほかの骨は出土しておらず、上腕骨などの上肢長管骨周辺に不明骨片が集中して出土した。遺存状態が悪く、各関節部での交連を確認することはできなかった。

(上田真一郎)

7. 6号横穴(図版第76・77・256・257)

(1)はじめに

全長21.3mを測る、女谷・荒坂横穴群中で最大規模の横穴である。玄室より出土する遺物の数が極端に少ないこと、閉塞土を盛り上げた層序に乱れが認められることから、盗掘を受けたものと判断される。

玄室の天井部が残存していたので、調査時の危険回避のため、重機により天井を外した。そのため、調査終了後に記録を行った横穴図と調査時に随時記録を行った土層図とでは、一部で整合していないところがある。

南側の5号横穴と近接して、軸を揃えて造られており、これら2基で小群を構成しているものと判断される。

(2)形態と規模

一部トレンチを拡張して全長を確認した結果、全長21.3mを測り、最も全長の長い横穴である。玄室は長方形を呈しており、平面形が一旦くびれた後に、ほぼ同じ幅の羨道が取り付くものである。玄室は縦断で見ると、奥壁から1.4m付近のところで、約20cmの段差を有して掘削されている。この段差を平坦に埋める形で、初期整地がなされている。

玄室の平面形は、初葬面と地山面とでやや異なっている。奥壁と左側壁の2辺が、地山面の方が20~30cm狭くなる。これは、横断で見ると、奥壁と左側壁が底面とで造るコーナーが、初葬面より下で内側に斜めに掘られているためである。そのため、地山面と初葬面で規模の違いが顕著に現れている。地山面と初葬面での各部の幅を見ておくと、玄室長は3.2mと3.3mで、奥壁部の玄室幅が1.4mと1.7m、最大幅1.75mと2.1m、玄門幅が1.25mと1.6mを測る。壁面に残る湾曲より、玄室と羨道の天井までの高さは、1.6~1.8m、1.4~1.6m程度に復原できる。羨道より墓道側は地山面と初葬面との規模がほぼ一致しており、羨道長は2.2mで、幅が1.3mを測る。

墓道端より1/3辺りで、墓道は大きく段を有して掘削されており、高低差約1.2mの段差である。この段より墓道端側はほぼ水平に掘削されており、この段差は砂礫を主体とした初期整地土で埋め戻されている。墓道の端はわずかに掘り込まれて終わっている。墓道長は15.9mを測り、墓道の上幅の最大は3.0mで、深さは墓道の検出面より最大で2.3mである。

(3)土層堆積状況

土層の乱れが認められるのは、羨門から玄室にかけてである。通常の閉塞盛土のあり方は、閉塞部から玄室奥に向けてなだらかに下る傾斜面を形成しているが、この横穴では、閉塞盛土と判断される47・51層が玄室の内側から抉り取られているような状況が観察できた。床面から浮いて、37層中から須恵器杯身(482)が出土したが、盗掘時に動かされたものと判断される。

このように考え、横穴使用停止後に堆積もしくは動かされた土層を42層より上位の土層と判断し、43層より下位は横穴使用時の土層をそのまま残しているものと考えた。

53~62層は、横穴構築時の初期整地土層で、玄室から墓道の端までを整地している。玄室内の段差は、この整地土によって平坦となり、この上面が初葬面でI面にあたる。また、墓道端近くでは、高低差約1.2mの段を残して掘削されており、基本的には砂礫および砂質土で最大で1.3mの厚さの整地を行っている。女谷B支群の横穴で顕著にみられた、墓道端土坑と同種のものと考ええる。

初葬時の閉塞土・墓道内埋め戻し土は、48~52層がその残欠で、その後、46・47層、43~45層の2度にわたる墓道内通路が掘削されて埋め戻されている。

(4)遺物出土状況

I面では、横穴に納められた時点の原位置を保って出土した遺物は少なく、須恵器杯身(481)と提瓶(483)各1点がそうと判断されるだけである。玄室奥に置かれていた遺物は盗掘によりきれいに抜き取られたのであろう。須恵器杯身(479)は閉塞部分の下位から出土したが、出土層位の確認ができておらず、55層の上位もしくは、51・52層中より出土したもので、玄室内I面に相

当する可能性がある。

盗掘時に掘り返したために、閉塞土が動かされたと判断される37層中から須恵器杯身(482)が出土した。また、墓道内の端部に近い最上層の44層中からは、杯身(480)が出土しており、追葬時に掘削された墓道内通路を埋め戻した土の中に入り込んだものと判断される。甕(484)は、出土層位を確認できなかったが、墓道内から出土したものである。このほか、墓道内を掘削中に須恵器横瓶片・脚付壺片、須恵質の埴輪片が出土した。鉄器や耳環などは、全く出土しなかった。

(5)出土遺物

この横穴から出土した遺物は、須恵器杯身4点(479～482)・提瓶1点(483)・甕1点(484)の6点が図化できた。

8. 7号横穴(図版第78～80・258・259)

(1)はじめに

玄室内で人頭大の石が6石置かれていた。玄室内に石を配置するのは、ほかには、荒坂横穴B支群4・5号横穴で認められるだけで、女谷地区の各支群の横穴では全く認められない。

北側の8号横穴、9号横穴とは高さを異にし、南側の6号横穴とは軸をやや異にしているため、この1基だけで小群となるものである。

(2)形態と規模

横長の隅丸方形の玄室に短い羨道が取り付き、羨門には、それよりやや幅の広い墓道が取り付いている。羨門部の地山面には、5cm程度のわずかな段が掘り残されている。墓道は調査地外にのびていくが、墓道幅は狭くなりつつあるので、現状より、さほど大きくはのびないものと思われる。

玄室の天井の高さは、壁面に残る湾曲より、地山面より1.8～2.0m程度に復原できる。それに対して、羨道の天井の高さは1.4m程度に復原でき、現存の閉塞土が盛り上げられた高さにはほぼ一致する。

全長は16.8mを検出し、玄室長2.4m、玄室幅(奥壁)3.4m、玄門幅1.4m、玄室の最大幅4.1m、羨道長1.3m、羨門幅1.1m、墓道長は現存で13.1m、墓道の上幅は最大で2.7mを測る。遺物は1面で出土した。

(3)土層堆積状況

1～26層は横穴使用停止後に堆積したもので、3～8層が天井の崩落土で、ベースとなる大阪層群の砂礫・砂質土である。1・2層は天井崩落後に、その陥没穴に流入した土砂と判断される。墓道に堆積している9～13層は、その下位の土層と比べて土質が強いため、横穴使用の最終段階の墓道内通路を埋め戻した後に、その窪みに自然に堆積した土砂と判断する。特に11層は有機質を多く含み、横穴使用停止後に長く表土をなしていたものと推測される。閉塞部から墓道、そして玄室内に堆積している14～26層は、玄室に空間が保たれている段階に、閉塞盛土の上部から玄室内に雨水とともに流入した土砂と判断され、それぞれ茶褐色混暗黄茶色土と黄茶色礫混土が互

層になって筋状に流入しており、25層の暗灰褐色砂礫の中に入り込んで、消失している。27層以下が横穴使用時の堆積土と判断するものである。

39・40層が初期整地土で、39・40層上面が初葬面（I面）である。標高26.7m付近に相当する。遺物の出土はこの初葬面の1面だけで、土層の観察によってもこれ以外に作業を行った面は認められない。この最初の段階の閉塞土は残っていないが、この時点の墓道の埋め戻し土として、横断面に38層が認められる。横断面C-C'で、38層を切り込んでいる34・36・37層が、最初の追葬時に掘削された墓道内通路を埋め戻した土砂と判断され、当初の墓道底面を下方方向に大きく掘り抜いて墓道内通路が設けられている。閉塞部分により近い横断面B-B'や閉塞部の断面A-A'では、この墓道内通路は横穴の横幅全体にまで及んでいる。これらのことより、初葬後の最初の開口は、初葬時の閉塞盛土を徹底的に取り除いて、墓道の形状を変えるぐらいまでの、かなり大規模なものであったことが窺われる。

30～33層、27～29層はそれぞれが、それ以後に、墓道内通路と閉塞開口部を埋め戻した土砂と判断する。このように、初葬埋葬後に閉塞土や墓道に土を盛り上げた後に、閉塞土を開口して玄室に進入した回数は3回程度が識別できる。

(4) 遺物出土状況

玄室内のI面では、須恵器のみが出土した。これらは、右側壁に近接して出土した。杯蓋4点(485・487・489・491)・杯身5点(486・488・490・492・493)・短頸壺1点(494)・提瓶2点(495・496)がある。奥壁近くでは、杯蓋(487)と杯身(488)がともに口縁を上にして、一部が重なって出土した。その西側では、杯蓋(491)と杯身(492・493)が口縁を下にして置かれていた。側壁近くでは、杯蓋(489)と杯身(486)が重なって、杯蓋(485)と杯身(490)が接して出土した。これらはすべて口縁を上にして置かれていた。やや離れて、短頸壺(494)が底部を上にして、提瓶(495・496)は横転して出土した。

I面では、須恵器などの副葬遺物とともに、人頭大よりやや大きな石が据え置かれていた。全部で6石が見つかり、それぞれ角張った自然石であるが、平坦面を水平に置くのではなく、頂部や辺を上に向けて置かれていた。玄門側の4石は、石の方向もほぼ揃って、一直線に並んでいるのに対して、奥壁側の2石は、軸の方向が不揃いである。玄門側の石列のうち、右側の3石はほぼ等間隔で、石の頂部の高さも標高26.90～26.95mと揃っているが、左端の一石は標高26.85mとやや低い位置にある。奥壁側の2石の高さは、標高26.85m付近である。この石が置かれている内側には、遺物の出土はみられない。このことから、この石の上に何らかの構造物が置かれていた可能性があるが、荒坂B支群5号横穴では人骨の上に石が置かれているので、人骨を安置することとはまた違った用途に用いられていたのかも知れない。このほか、墓道掘削中の表土近くより土師器甕片(497)が出土した。

(5) 出土遺物

この横穴からは鉄器の出土はなく、土器ばかりの出土である。しかも、玄室内からは須恵器のみが出土し、土師器は墓道内から出土しただけである。

杯身・杯蓋のうち一揃いのセットとして作られているものには、杯蓋(485)と杯身(486)、杯蓋(487)と杯身(488)、杯蓋(489)と杯身(490)がある。これら3セットのうち、2セットの杯身・杯蓋には、同形のヘラ記号が記されている。

提瓶(495)は、口縁部の約4/5が欠いており、意図的に打ち欠かれたものと思われる。土師器甕(497)は胎土分析を実施した。

9. 8号横穴(図版第81・260・261)

(1)はじめに

天井が残存しており、重機により天井を除去した後に調査を行った。北隣に位置する9号横穴とともに、ほかの横穴よりも3～4m程度高い位置に横穴が造られていること、小形の横穴であることが共通する。そのため、9号横穴と2基で小群をなすものとする。

(2)形態と規模

玄室の平面形態は撥形を呈しており、相対的に短い墓道が取り付く。壁面の湾曲が発生する位置と、閉塞土の位置が一致することから、羨道を有していない横穴と判断する。玄室と墓道の境付近の地山面には、わずかな段差が認められる。墓道端の両側壁は、徐々に低くなって終わっており、墓道の端部はさほど削平を受けていないものと思われる。墓道の端は、一旦、掘り込まれて始まるのではなく、ほぼ水平に掘られて、段差をもたずに始まっている。

天井が残存していたので、玄室壁面に残る湾曲は明瞭で、それを元に復原すると、天井の高さは地山面より1.6m程度の高さに復原できる。

各部の計測長は、全長8.0m、玄室長4.1m、玄室幅(奥壁)2.0m、玄室幅(玄門)0.75m、玄室最大幅2.1m、墓道長3.9m、墓道幅(上場)1.3mを測る。人骨・遺物は1面で検出した。

(3)土層堆積状況

1～5層は横穴の使用停止後に玄室内に堆積した土砂で、1層は玄室全体に広がっている点から、天井もしくは壁面より崩落した土砂と判断される。2～4層は、閉塞土の上位から斜めに堆積していることと、土質が強いことから、横穴の使用停止後に、閉塞土をつたわって雨水とともに玄室内に流れ込んで堆積した土砂と判断する。5層は、閉塞土の上の窪地に堆積した土砂と考えられる。

12層は横穴を掘削した直後の初期整地土で、その範囲は地山上で掘り残された段差よりも墓道側に限られる。玄室内には初葬面を形成するための整地はなされておらず、地山面が初葬面にあたり、遺物出土はこの1面(I面)だけである。

閉塞土は数層に分層できるが、その違いはわずかである。9～11層は、初葬後に、墓道を閉塞位置から墓道端部に至るまで全面にわたって埋め戻した土砂と考えられるが、追葬もしくは改葬のために墓道内通路と閉塞土が掘削され、それらを埋め戻した土砂(6～7層)と考えられる。横断土層C-C'の6層には、礫が多く含まれているのに対して、8層には礫が少なく、6層を切り込んでいる状況であるので、6層の通路に先行する墓道内通路の可能性はある。

また、閉塞部に盛られている7・9層にはほとんど石礫が混じっていないのに対して、墓道内通路の埋め戻し土である6層には、石礫が多く混じっていた。閉塞部の埋め戻し土には石礫が混じらず、墓道部の埋め戻し土には石礫が多く混じるという傾向は、ほかの多くの横穴でも認められるところである。これは、石礫を除去した土で閉塞部を盛り上げるのに対して、取り除かれた石礫は捨てられるのではなく、墓道内通路の埋め戻し土として利用されたためと解釈できる。

(4)遺物出土状況

玄室内での人骨・遺物の検出はわずかで、人骨25、刀子1点(784)と土師器椀(498)を検出しただけである。人骨25は、玄室のほぼ中央で検出したが、骨片がまとまりなく散らばっている状況であった。この骨片は埋葬面よりも15cm程度上位に位置している1層の淡黄褐色砂質土層の上面から見えだしたが、最終的には、I面上に載ったものとなった。西側に近接して刀子(784)が1点出土した。玄門部の12層直上では、土師器椀(498)が置かれていた。12層は横穴構築時の初期整地土と判断されるもので、この土器は、初葬時の閉塞土と判断される10層に覆われていた。この出土位置は、平面的には玄室内にあたることから、初葬時に副葬されたものと判断される。

追葬時に掘削された通路を埋め戻した土砂と判断する6層の淡褐色礫混土中より、土師器甕(499)がほぼ完形の状態で出土し、通路を埋め戻す際に埋められて、何らかの儀礼行為が行われたものと判断される。

(5)出土遺物

土器の出土は土師器だけで、しかも、椀(498)・甕(499)各1点だけである。土師器甕(499)は体部外面に黒斑が認められるものである。椀(498)・甕(499)はともに、胎土分析を実施した。

(岩松 保)

(6)人骨出土状況

人骨25は、玄室ほぼ中央から右側壁寄りで見出した。頭蓋骨らしき骨片と長管骨および骨種不明の骨片が数点残るだけである。保存状態は悪く、完存する骨は皆無で、詳細な観察は行いえなかった。

頭蓋骨らしき破片は奥壁側にあり、長管骨の集骨部とは約20cm離れる。長管骨の長軸方向は、横穴主軸に平行する。骨種不明の骨片は、長管骨の集骨内に挟まっていた。長管骨が頭蓋骨の前面に束ね置かれている状況より、改葬骨と判断される。

(上田真一郎)

10. 9号横穴(図版第82・262・263)

(1)はじめに

重機で表土を剥ぎ取った後に、人力により平面形の検出を行ったところ、玄室の天井が残存することが判明した。再度、重機を入れて、天井を取り外した後に調査を行った。

8号横穴と同じく、ほかの横穴よりも3～4mほど高い位置に横穴が造られていること、ほかの横穴と比べて全体に小形のものであることから、同一の小群になるものと判断される。玄室で

は、2面で遺物が出土した。

(2)形態と規模

横穴の平面形態は杓文字状を呈しており、細長い墓道が取り付く。玄門は両壁が狭まり切った位置で、壁面に残る湾曲とも一致する。この壁面の湾曲位置と土層に見る閉塞盛土位置とが一致することから、羨道はなかったものと推測される。墓道端は斜めに切られたようになっていることから、幾分かは削平を受けているものと判断される。全長は現存で7.4m、玄室長は3.35m、玄室幅は奥壁近くが最大で1.55m、玄門幅0.6m、墓道長は現存で4.05m、墓道上幅が1.0mを測る。壁面の湾曲の残りが良く、地山面から天井までの高さは、玄門近くで1.2～1.3m、奥壁近くでは1.4m程度に復原できる。

(3)土層堆積状況

1層は有機質を多く含む暗茶色土で、墓道の窪地に堆積した流入土と判断される。2層は玄室の天井や側壁が崩落した土砂で、3・4層以下が横穴の使用時に堆積した土層である。遺物は2面で出土し、7層上面(I面)と10層上面(II面)である。

初期整地土は9・10層で、玄室部分には10層の明褐色砂質土が、墓道部分には9層の明茶褐色土(礫混)と異なった土砂で整地している。初葬面は10層の直上で、II面にあたる。標高は28.4m付近である。初葬直後の閉塞土と墓道の埋め戻し土は、8層がその残欠と判断される。7層は玄室内の整地土で、追葬面であるI面を造っている。標高は28.45m付近で、II面との高低差は最大で10cm程度である。玄室の横断土層で観察すると、中央部をわずかに盛り上げただけのもので、ていねいに整地をしたものではない。この整地を行う際に掘削された墓道内通路は、5・6層で埋め戻されており、最終的には、3・4層を玄門部の上位から玄室内に向けて斜めに入れ込むことで閉塞を行っている。以上のように、初葬を含めて、2度にわたって横穴内に進入していると考えられる。

(4)遺物出土状況

I面では、奥壁近くの左隅で、須恵器直口壺1点(507)の出土を見ただけである。II面の初葬面では、玄門付近の右側壁に沿って、須恵器杯蓋1点(500)・杯身1点(501)・低脚高杯2点(503・505)・同蓋3点(502・504・506)が集められていた。これらのうち、杯身(501)と低脚高杯(505)は正立していたが、低脚高杯(503)は横位に転がっていた。杯蓋・高杯蓋は、すべて口縁を上にして、逆位で出土した。

(5)出土遺物

杯身(501)・杯蓋(500)は、低脚高杯の脚および蓋のつまみを外した形態のものである。杯身(501)と杯蓋(500)、蓋(502)と高杯(503)、蓋(504)と高杯(505)が、胎土・焼成・色調から見て、一揃いの組み合わせとして作られたセット関係にあるものと思われる。

11. 10号横穴(図版第83・84・264・265)

(1)はじめに

墓道端は調査地外にのび、全体を調査できなかったが、幅広の墓道が一直線に穿たれた横穴である。墓道の掘削土量は概算で35m³を越えるものである。

北側の11号横穴と2基で小群となるものである。

(2)形態と規模

墓道端は調査地外にのびており、その全長は確認できていないが、総長17.0mにわたって検出した。玄室は長さ4.0mで、1.1mの短い羨道が取り付く。玄室の平面形は杓文字形を呈しており、逆台形の羨道が取り付いている。玄室幅(奥壁)は1.9m、玄門幅1.25mで、玄室最大幅は中央付近で2.1mを測る。羨道長は1.1m、羨門幅は1.0mで、墓道長は現存で11.9mを測る。墓道幅は上幅で3.25mで、検出高は最大で1.8mを測る。遺物は2面で出土した。

(3)土層堆積状況

墓道内堆積層の1～6層、玄室内堆積層の7～12層が横穴使用停止後の堆積層で、13層以下が横穴使用時の堆積層と判断する。墓道内の堆積層1～6層は、下位の堆積層と比べて土質に富んでおり、雨水に流されて窪地に堆積した土砂と判断される。玄室内堆積層の7～12層は、天井からの陥没土砂である。遺物は2面で出土した。I面は24・27層上面で、II面は地山上面で、初葬面にあたる。

墓道内通路およびその埋め戻し土は3回あり、14～18層、19～23層、25～28層がそれぞれ別個の墓道内通路と判断される。

通常の横穴では、墓道最下面の29層は横穴構築時の初期整地土と判断される砂礫層であるが、この横穴では、その土質が砂質でないので、初期整地はなされていないものと判断される。そのため、29層は初葬直後の墓道内埋め戻し土と判断される。

(4)遺物出土状況

I面では、奥壁および玄門部で遺物が出土した。奥壁では、須恵器長脚有蓋高杯4点(513・516～518)・同蓋2点(514・515)・低脚無蓋高杯1点(509)・横瓶1点(525)・提瓶1点(524)、鉄鏃2点(785・786)が出土した。玄門付近では、短頸壺1点(522)と低脚無蓋高杯1点(510)が出土した。この面で出土した遺物は、正立しているものはなく、すべて横転したり、逆位に置かれている。

II面では玄門付近と玄室中央で遺物が出土した。この面では、須恵器長脚有蓋高杯1点(519)・無蓋高杯3点(508・511・512)・脚付長頸壺1点(520)・甕(523)、耳環1点(878)が出土した。脚付長頸壺(520)は正立していたが、高杯(519)は倒立しており、低脚無蓋高杯(508)と甕(523)は横転していた。高杯(511・512)は、脚部が割り取られて杯のみが出土した。高杯(512)は口縁を上にして置かれていたが、高杯(511)はやや離れて、口縁を下にして出土した。高杯(512)に近接して耳環(878)が出土しており、高杯の脚部を外されていることを重視すると、高杯(511)とともに枕として使用されたものが動かされたのかも知れない。

墓道内の15層中より、壺(521)が出土した。また、墓道内より、土師器甕小片が出土している。

(5)出土遺物

土器の出土は須恵器のみで、土師器の出土は、小片以外には認められない。また、通有に認められる杯身・杯蓋の出土もなく、代わりに、高杯が10点出土している。これらのうち、高杯(511・512)は脚部が外されて、枕として用いられた可能性がある。蓋(515)・高杯(516)は一揃えで作られたセットになるものとする。高杯(517・518)はともに、柱部が横方向のカキメで調整されている。提瓶(524)には、「┌十」状のヘラ記号が施されている。

12. 11号横穴(図版第85・86・266・267)

(1)はじめに

玄室・羨道の天井が残存しており、重機により、天井を除去した後に調査を行った。そのため、土層図と横穴図で壁面の一部に整合しないところがある。

南に位置する10号横穴と軸が揃い、同一の小群になるものと判断される。

(2)形態と規模

全長14.85mを測る横穴で、玄室の平面形態は長方形を呈する。壁面では、奥壁から3.6mの位置で湾曲が発生しており、平面形を見ると3.4m付近で左側壁がくびれているので、ほぼこの位置が玄門であると判断され、玄室長は3.6m程度である。玄室幅は奥壁部が最大で1.8mを測り、わずかに狭まりつつ、玄門幅が1.2mである。羨道は、壁面の湾曲の観察より、その長さ2.1mに復原できる。羨道の平面形は玄室と同じく、わずかに狭まって羨門に至り、その幅0.9mを測る。墓道の端は約3.5mの長さにわたって約10cmと、わずかに深く掘られている。墓道の長さは9.15m、墓道の上幅は最大で1.45mである。

玄室・羨道では、それぞれ地山面から、最大で1.0m～0.9m程度までの高さまで湾曲が観察され、その湾曲具合により、それぞれの天井の高さは、1.2m、1.6～1.8m程度に復原できる。閉塞位置での盛土は、地山面より1.2～1.4m程度の高さを確認でき、ほぼ、羨道の天井の高さと一致する。遺物は1面で出土した。

(3)土層堆積状況

1～11層は締まりのない砂礫層で、横穴使用停止後に玄室・羨道の天井が崩落したものと判断される。12層以下が横穴使用時の堆積土と判断する。

初期整地は、玄室・羨道部は31層の暗茶褐色砂質土、墓道部は33層の赤褐色粘質土、墓道端部は32層の黄灰褐色細砂で整地をしており、玄室・羨道部と墓道および墓道端で異なった質の土砂を用いている。墓道端の整地土は、墓道端土坑を通有に充たす砂と同様の砂であり、墓道端土坑を穿つ意識の反映かも知れない。

遺物は、初期整地土である31層上面の1面(I面)だけで検出した。標高26.15m付近に位置する。初葬時の閉塞土と墓道の埋め戻し土は、30層がその残欠と判断され、閉塞部から墓道端に至るまでを埋め戻している。その後、追葬時には、30層の上位から墓道内通路が掘削されており、それを埋め戻した土が24～29層と判断される。16～22層は、その後、横穴への進入に伴って掘削された墓道内通路が埋め戻された土砂である。最終的な進入口は12～15層で埋め戻されている。

23層は、これだけで1回の墓道内通路となるのか、先・後の墓道内通路のいずれかに属する埋め戻し土であるのかは、決め手がない。このように、土層の観察により、初葬終了後、少なくとも玄室に3回にわたって進入したことが認められる。

(4)遺物出土状況

I面での遺物の配置は、羨道部の右側壁部に土器が集中しており、玄室奥壁部と玄門付近に鉄器がある。

奥壁に接しては、鉄鏃5点(789・792～794・796)が出土し、土器の出土は見なかった。玄室中央の右側壁付近では、刀1点(797)、刀子1点(787)、鏃2点(791・795)および須恵器有蓋高杯蓋1点(528)が出土した。有蓋高杯蓋(528)は、破片となって大きく3か所に分かれて出土したが、特に鏃(791・795)に近接して出土した3点の破片は、その配置が女谷B支群16号横穴人骨8の頭蓋骨の下で出土した須恵器片の配置と近似している。人骨8の場合には、須恵器杯蓋1/2を3片に割り、頭蓋の下に挟み入れて、頭蓋骨が転回しないように枕として使用していた。

玄室左側壁近くには、杯蓋1点(526)が破片となっており、それに近接して刀子(788)と鏃(790)が1点ずつ出土した。

羨道には、右側壁に沿って多くの土器が集められていた。有蓋高杯蓋(528)の破片以外に、高杯3点(527・529・531)・同蓋1点(530)・提瓶1点(534)・平瓶1点(533)・長頸壺1点(532)、土師器高杯2点(535・536)が、ほぼ完形で出土した。蓋(530)は口縁を上にして逆位にあることをはじめとして、ほかの土器も正立しているものではなく、乱雑に集められたかのような様相を呈している。

(5)出土遺物

須恵器有蓋高杯(529)と同蓋(528)は、口径が微妙に合わないが、胎土・色調・焼成は全く同じで、一揃えのものとして杯と蓋が作られた、セットにあるものと判断する。また、高杯(531)と同蓋(530)もセット関係にある。平瓶(533)と提瓶(534)は、器形こそ違うが、胎土・色調のほか、調整もよく似ており、同一人物の手になるものと思われる。

鉄刀(797)には、木質が付着しており、鏹が装着されている。

13. 12号横穴(図版第87・88・268・269)

(1)はじめに

この横穴は、本調査に先立つ試掘時の重機掘削により、それまで完存していた玄室天井部が崩落したものである。

調査は墓道の半ば程度しか行えていないが、上幅が最大で4.3m、検出した深さが最大で2.3mと、一連の横穴調査の中でも、特に大規模な墓道を有するものである。この横穴の奥壁の右隅には、東隣の13号横穴の玄室に繋がる穴が掘削されていた。

東側に位置する13号横穴、14号横穴と軸を揃えて造られており、これら3基で小群をなすものとする。

(2)形態と規模

玄室の平面形は長方形で、その前面に漏斗状の羨道が付設するものである。

壁面の観察では、奥壁より3.3m、4.85m、7.2mの位置で、異なった3か所の湾曲が見てとれた。これらが、それぞれ異なった径で横穴が掘削されたためとすると、玄室と羨道の間、いわゆる前室が造られていた可能性があるが、平面形ではそのような部屋の形跡は認められない。平面形では、狭く掘削されている墓道が大きく広がり始める位置と、奥壁から3番目の湾曲が発生する位置とが合致する。また、1番目と2番目の湾曲の境付近では、平面形がややくびれていることから、この位置の奥と手前で上部構造に違いがあったものと推定できる。実際、玄室内の遺物は、この位置より奥壁側に置かれていた。土層断面で見ると、閉塞位置は、奥壁から3つ目の湾曲部の中央あたりに位置しているため、先の遺物の配置状況と併せて、後の2者を羨道と考えたい。

玄室内の天井の高さは、壁面の湾曲より推定して、地山面より最大でも2m程度である。

奥壁の右隅には、13号横穴に通じる穴が掘られていた。この穴は径50cm程度で、地山面から約2.0～2.5mの高さにあり、ほぼ水平方向に掘削されている。玄室の天井高の復原では、天井の高さよりも高い位置にあたることから、この穴は、天井がある程度崩落した後に空けられたものの一横穴使用停止後のものと判断する。

各部長は、全長(現存)11.75m、玄室長3.3m、玄室幅は奥壁部が最大で2.0m、玄門幅1.6m、羨道長3.9m、羨門幅0.5mを測る。墓道長は現存で4.55m、上幅が最大で4.3m、検出した深さが最大で2.3mと、大規模な墓道が付設されているのを特徴とする。墓道は玄室に至るまではほぼ水平に掘削されている。遺物は2面で出土した。

(3)土層堆積状況

遺物は2面で出土した。I面は58層上面で、II面は61層上面である。I面の標高は24.2～24.3m、II面の標高は24.3～24.4mで、10数cmの高低差がある。

1～34層は、横穴使用停止後の堆積土と判断され、特に5層より上は、試掘調査時に崩落した天井を構成していた土砂と判断される。また、閉塞部分には、玄門上方から玄室内に向けて筋状に堆積した層が観察され、雨水とともに玄室内に流入した土砂と判断される。また、墓道内の9層は、有機質を多く含む淡黒褐色を呈しており、ある時点の旧表土と判断される。34層は追葬面の遺物を覆う粗砂で、天井からの崩落土と判断される。そのため、34層より上位の層は、横穴使用停止後の堆積土層と判断される。35層より下位の土層は、横穴使用時の堆積・埋め戻し土と判断するものである。

墓道内通路としては、横断面B-B'の観察から、砂質の56層、砂礫が多く含まれる54・55層、やや土質の強い44層、礫を多く含む37・38層と4時期にわたる通路状の掘り込みが観察される。これを基に、以下、土層を解釈する。

59～61層は初期整地土で、横穴全面にわたって、黄褐色系統の砂礫を敷き、墓道部分には玄室とほぼ水平になるように、59層の茶褐色砂を敷いている。玄室内におけるこの初期整地土61層の

上面がⅡ面で、初葬面にあたる。この面に相当する閉塞土および墓道の埋め戻し土は、57層がわずかに残るのみである。追葬時には、この上位より墓道内通路が掘削され、閉塞土の盛り直し土とともに埋め戻されている。それぞれの墓道内通路を埋め戻した土砂が56層、46～55層、39～45層、35～38層と判断される。56層で埋め戻された墓道内通路で進入した際に、58層で玄室内を整地し、Ⅰ面を形成している。墓道端に近い横断面C-C'の52層は、ある時点の墓道内通路を埋め戻した土砂と判断されるが、それ以前に墓道を埋め戻した土砂を上位から掘り込んだ形跡が観察されないこと、溝幅がほかの場所よりも大きく広がっていることから、この墓道内通路を設ける際には、本来の墓道を大きく拡幅した可能性がある。

(4) 遺物出土状況

Ⅰ面では、奥壁近辺と、玄門付近の2か所で遺物が集中して出土した。

玄門付近の1群には、須恵器杯身3点(540・542・546)・杯蓋2点(539・541)・甕1点(552)・壺1点(551)がある。杯蓋(539・541)は伏せられており、その上に杯身(540・542)が載っていた。杯身(540)は伏せられ、杯身(542・546)は正立しており、杯身と杯蓋が口を合わせて出土したものはない。

奥壁部には、須恵器杯蓋(537・543)・杯身(538・548)・提瓶(554)が集められていた。中央寄りでは、刀子1点(798)が出土した。杯身(538)は大きく二つに割れ、離れた位置で出土した。

Ⅱ面では、玄門近くで遺物が出土した。須恵器杯身(545・547)・杯蓋(544)・壺(550)・提瓶(553)が集められていた。杯蓋(544)は杯身(547)の上に被せられていたが、胎土・焼成からみても、セット関係にあるものではない。杯身(545)、壺(550)は、ともに正立して置かれていた。

墓道内より須恵器甕小片が出土しているが、図化できなかった。横穴埋土中より壺(549)が出土している。

(5) 出土遺物

出土遺物は、須恵器だけで、土師器の出土はない。鉄器は刀子1点が出土した。耳環は出土しなかった。

杯身・杯蓋のセット関係は、杯蓋(537)と杯身(538)、杯蓋(539)と杯身(540)が胎土や焼成から、一揃いの身と蓋として作られたセットに復原できる。杯蓋(541)と杯身(542)は、セットの可能性はある。

杯身・杯蓋はすべて、底部・天井部をていねいな回転ヘラケズリで仕上げしており、杯蓋は口径14.5cm程度、杯身は13cmを越えるものが多い。杯身(548)の底部には、ヘラ記号「一」がある。

刀子(798)は接合関係にはないが、同一か所から出土しており、同一個体と判断される。

14. 13号横穴(図版第89・90・270・271)

(1) はじめに

天井が遺存しており、重機により天井を外してから調査を実施した。玄室の両側壁に穴が穿たれており、両隣の横穴と繋がっている。

東・西隣に位置する14号横穴、12号横穴と3基で小群をなすものとする。

(2)形態と規模

玄室・羨道の平面形は、長方形に細長い三角形がとり付いた杓文字形を呈している。奥壁から4.5mの位置と、その前面の1.5m程度の範囲の2か所に湾曲が見られ、羨道が付設されているものと判断される。この羨門位置は、閉塞土の位置と矛盾しない。横穴の全長は、墓道端が消失しているため、現存で12.65mを確認できる。奥壁の玄室幅は最大幅で1.9m、玄門幅は0.9m、羨門の幅は0.6mである。墓道は6.65mを確認し、墓道を横断面で見ると段を有して掘削されており、上幅は最大で2.0mを測る。遺物は1面で出土した。また、壁面に残る湾曲から、玄室・羨道の天井までの高さは、それぞれ、1.7m・1.0m程度に復原できる。

玄室奥壁近くの右側壁、左側壁に、それぞれ床面から0.7m、0.4mの高さに、40×40cm、40×60cmの穴が掘られており、両隣の14号横穴、12号横穴の玄室に通じている。12号横穴では、この穴は天井が崩落した後に穿たれたものと推定されることから、この横穴でも、おそらく埋葬などの使用停止後に掘削されたものと思われる。その性格については不明である。

(3)土層堆積状況

1層は重機で天井を外した際の崩落土で、3・4層の砂礫層は横穴使用停止後に堆積した天井崩落土と判断する。墓道上の2層は、下位の土砂と比べて土質が強く、墓道内の窪地に雨水とともに堆積した土砂と判断する。5層以下が横穴使用時の堆積土と考える。

17層が横穴構築時の初期整地土で、この上面が初葬面(I面)で、礫床が造られている。遺物はこの1面で出土しただけである。土層の観察では、8・9層がその土質と水平堆積していることより整地土と判断され、約20cmの厚さで盛り上げられて、この上面で何らかの作業が行われたものと推定される。15・16層が初葬後の閉塞土および墓道の埋め戻し土の残欠で、この後、10～14層、5～7層の2回にわたって墓道内通路が掘削されて、埋め戻されたことが観察される。

(4)遺物出土状況

I面の初葬面には、玄室の奥壁側の約1.6mの範囲だけに、平面形がほぼ正方形に近い礫床が造られている。玄室内のその前面には、疎らに石礫が散乱しているだけである。

玄室I面より出土した遺物は、礫床の上からの出土はなく、玄門近くで出土した。須恵器杯身(556)・杯蓋(555)・高杯(557)・脚付長頸壺(558)が出土した。杯身・杯蓋はともに口縁を下にして出土しており、高杯は正立して据えられていた。また、羨道部の16層と13層の間からは、鉄釘1点(799)が出土した。13層の墓道内通路の埋め戻し土中に埋められたものと推定される。墓道内では、須恵器甕小片が出土した。

(5)出土遺物

土師器の出土はなく、須恵器杯身・杯蓋・高杯・脚付長頸壺各1点、鉄釘1点が出土しただけで、出土量は概して少ない。

杯身(556)・杯蓋(555)は、胎土・焼成からみて、一揃いに作られセットとなるものである。

鉄器は、鉄釘1点(799)が出土した。

15. 14号横穴(図版第91～94・272・273)

(1)はじめに

墓道端は現代の用水路により削平を受けているため、全体の調査はできていない。土層の観察により羨道の天井の一部が残存していることを確認した。

玄室内よりガラス玉が出土しており、女谷・荒坂横穴群の一連の横穴調査のうち、荒坂B支群5号横穴とこの横穴の2例しかない。また、墓道内より多量の遺物が出土し、玄室内出土の土器と接合関係があることを確認した。

西隣の12・13号横穴と軸が揃って等間隔に造られており、3基で小群となるものである。

(2)形態と規模

全長は現存で13.3m、墓道長は7.3m分を確認した。壁面には2つの湾曲が観察され、平面形のくびれ位置と、地山上に掘り残された段差の位置とがほぼ合致している。閉塞盛土の位置は、この段差の位置にあり、羨道が付設されているものと考えられる。玄室の平面形は長方形でやや幅の狭い長方形を呈した羨道が取り付いている。また調査時には、羨道の天井の一部が残存しており、地山面からこの天井までの高さは、1.05mを測るに過ぎない。玄室の天井までの高さは、壁面の湾曲からせいぜい2m程度と推定される。

玄室は両袖を有し、羨門位置の地山面には約10cmの段差が設けられている。玄室長は3.45m、玄室幅は奥壁部で1.7m、玄門幅1.4m、玄室最大幅が1.95mを測る。羨道長は2.55mで、羨門位置はわずかに狭くなり、羨門部の幅が1.1mとなる。墓道底面の端部近くでは、約1.2mの長さになたって、約10cmの深さで土坑状の窪みを検出した。この土坑は31層で埋められており、墓道端土坑状のものと判断される。墓道の上幅は2.25～3.0mである。遺物は2面で出土した。

玄室の左側壁には、床面から50cm程度上に、径50cm程度の穴が穿たれ、西隣の13号横穴と繋がっている。約2mの長さで穿たれていた。その掘削された時期を特定する遺物は出土していない。12・13号横穴を繋ぐ小穴が横穴使用停止後に掘削されたと推定されることから、この小穴も同時期に掘削された可能性が高い。その性格は不明である。

(3)土層堆積状況

1層は羨道に遺存していた天井で、ほぼ羨門に相当する位置にあたる。2～9層は、砂礫が厚く堆積しており、天井が陥没して玄室内に堆積した土砂と判断される。10・11層は、羨門の上方から斜め下に堆積しているため、横穴使用停止後に、横穴内に雨水とともに流入し堆積した土砂と判断するが、最終閉塞に伴う閉塞土の一部の可能性もある。横穴使用に伴う堆積層は、12層以下がそうと判断するが、10層以下である可能性がある。

初期整地土は、玄室部分では29層の暗茶褐色砂質土、墓道部分では31層の淡灰色砂礫で、玄室と墓道でその土質を変えているものと思われる。

遺物は2面で出土し、29層上面がⅡ面で初葬面にあたり、25・26層上面がⅠ面で追葬面にあたる。27・28層は初葬時の閉塞盛土の残欠と判断され、この上位には、20～24層、18・19層、12～17層を埋土とする墓道内通路が3回にわたって掘削されている。

最終段階に開口した範囲は、縦断土層図で見ると羨門部天井から16・17層下面までと判断され、50～60cmの高さでしか進入口を開けていない。

(4)遺物出土状況

I面では、奥壁部の左隅部と玄門付近、および玄室中央よりやや奥壁側で遺物が出土した。奥壁の1群は、須恵器杯身(566)・杯蓋(561)・蓋(569)および鉄刀(808)、刀装具(809)が集められていた。これら須恵器類は完存するもので、すべて口縁を上にして出土した。玄門付近は、遺物は疎らで、須恵器蓋2点(571・574)・甕1点(591)・杯蓋1点(563)が出土した。蓋(571)は完形で口縁を上にして逆位で出土した。蓋(574)の破片はII面出土の破片と接合し、ほぼ完形になった。甕片(591)は、墓道内出土の破片と接合した。玄室中央よりやや奥では、耳環2点(881・882)とその奥壁側でガラス玉が出土した。ガラス玉は、耳環との位置関係より、首の周りを彩っていたものと推定される。一部、取り上げ時に破損したため、遺物実測図を掲げていないものがある。それらについては、出土状況図に色名を表記してある。

II面では、玄室内の奥壁に近い位置と羨門に近い位置の2か所で遺物が出土した。杯蓋2点(559・564)・杯身3点(560・562・565)・高杯5点(573・575・577・581・584)・同蓋4点(567・568・572・574)・甕1点(590)・長頸壺蓋1点(586)、土師器脚付壺1点(592)が出土した。鉄器では、鏃残欠8点(800～807)、刀装具(810)、耳環2点(879・880)がある。奥壁近くの遺物出土状況を見ると、奥壁右側には、杯身(562・565)はともにうつ伏せで並べて置かれており、枕として使用された状況である。高杯(573)は脚部を外されて、杯部のみ逆位に置かれており、杯蓋(559)も逆位に置かれていた。杯身(560)は奥壁に立てかけてあった。奥壁左側の土器の1群は、高杯(575)は杯部を外されて脚部のみ正立して置かれ、蓋(567・574)はともに口縁を上にして並べられていた。奥壁の左隅には、鉄器が集められており、鏃残欠8点のほか、刀装具(810)、鉄片多数が出土した。鉄片は原形を留めないもので、薄くバラバラになっていた。土師器脚付壺(592)はこの位置で出土した。羨道出土の遺物を見ると、蓋3点(568・572・586)はすべて口縁を上にして置かれており、高杯(573)は脚だけが正立して置かれており、高杯(575)は杯部のみ口縁を下にして置かれていた。接合関係が認められるものには、高杯(573・575)が奥壁と羨道とに分かれて出土した。高杯(584)や甕(590)も、やや離れた位置の破片が接合関係を有していた。また、右奥壁部で出土した杯身(562)は、I面出土の杯蓋(561)と一揃いのものとして焼かれたセット関係を有するもので、杯蓋(561)はII面からI面に動かされたものと思われる。また、羨門部出土の長頸壺蓋(586)は、墓道内出土の脚付長頸壺(587)とセット関係を有するものである。このように、I面出土の土器はほぼ完形であるのに対して、II面出土の土器は破片になっているものがあり、近接して接合関係にあるものや、奥壁部と羨道部出土の破片の間で接合関係が認められた。何回かの作業を行ったために、土器が破片となり移動したものと想定される。

墓道内の12層暗灰色粘質土中より、須恵器高杯8点(576～580・582・583・585)・同蓋1点(570)・脚付長頸壺3点(587～589)・甕1点(591)、土師器脚付小壺1点(593)が出土した。これらの土器は、墓道内通路を埋め戻す際に埋納されたものと判断される。これらの中には、甕

(591)や高杯(577)のように、玄室・羨道出土の破片と接合関係を有するものがある。また、接合関係は認められないが、羨道部出土の高杯(581)と墓道内出土の高杯(580)は、胎土・色調・調整が近似しており、同一個体と考えられるものである。これら以外にも、接合関係がなく、同一個体の判定ができなかった多くの土師器片、須恵器甕片・高杯片・長頸壺片・壺片が出土しており、さらに多くの土器が埋納されていた可能性がある。

(5) 出土遺物

Ⅱ面の右奥壁部で出土した杯身(562)は、Ⅰ面出土の杯蓋(561)と胎土・焼成より、一揃いの身と蓋として作られたセットと判断されるが、セット関係にない杯身(565)と対で枕として用いられている。杯蓋(559)と杯身(560)も、セット関係にあるものである。

羨道部出土の高杯(581)と墓道内出土の高杯(580)、墓道内出土の高杯(578・579)は、ともに接合関係は認められないが、胎土・色調・調整が近似しており、それぞれ、同一個体と考えられるものである。また、蓋(572)と高杯(573)、蓋(574)と高杯(575)がセット関係をもつものである。高杯(577・578)の杯内面には、タタキの当て具状の痕跡が見てとれる。脚付長頸壺(587)と蓋(586)は、セット関係が復原できるものである。土師器脚付壺(592・593)は、玄室Ⅱ面と墓道内で出土したものであるが、ともに、脚底部の端部内面が黒斑状を呈しており、焼成後にこの位置で剝離した可能性がある。

鉄刀(808)は、鏝・釧が装着されており、柄には木質が遺存する。これに近接して、刀装具(809)が出土した。形状からは、責金具と考えられるが、刀本体から遊離して出土したもので、刀本体に装着されているものではなく、鞘に着けられていたものであろう。不明鉄製品(810)は、ソケット状を呈しており、兜金などの刀装具と考えられる。

ガラス玉(940~981)は50点近くの出土を確認したが、取り上げ時や土砂の洗浄中に破損したため、42点の実測図を掲げてある。

16. 15号横穴(図版第95・96・274・275)

(1) はじめに

玄室の前面に羨道が取り付いており、14号横穴などとともに、調査時には、その天井の一部が残存していた。墓道の中程より、現代用水路により削平を受けている。

16号横穴、17号横穴と主軸が一致しており、これら3基で小群をなすものと考えられる。

(2) 形態と規模

全長は、墓道中程より削平を受けているため、現存長で8.15mを測る。玄室の前面に羨道が取り付いており、調査時にはその天井の一部が残存していた。その高さは、地山面より1.05mの高さしかなかった。玄室の天井は落盤しており、全く残っていなかった。わずかに残る壁面の湾曲より、羨道部分よりやや高く、1.5~1.7m程度に天井の高さを復原できる。玄室は長方形で、逆台形の羨道が取り付くもので、全体的には杓文字形を呈する。玄室長は3.1m、玄室幅は奥壁部・中央部ともに1.9m、玄門幅が1.3mを測る。羨道を造る壁面の湾曲の長さは2.2mを測るが、

両側壁の壁面の掘削状況から、実際の天井が発生する地点は、0.5m程度玄門側と推測される。湾曲の発生する地点を羨門とした場合の羨門幅は1.0mである。墓道内の底面は、わずかな段を残して掘削されており、平面的にはその位置でくびれている。この位置での地山面の幅は0.55m、墓道長は現存で2.85m分を確認できた。墓道上幅は最大で2.9m、検出高は最大で1.4mを測る。遺物は2面で出土した。

(3)土層堆積状況

図版第95の縦断土層図の墓道端側約1mは、墓道の中軸から東側にずれて実測した図と合成しているため、縦断・横断土層の一部が整合していない。

遺物は2面で出土し、上からI面が20層上面で、II面が地山上面および23層上面である。

初期整地土は23～25層で、砂層・砂礫層を主体としており、玄室の奥壁側は整地されていない。これは、玄室内の地山面上は墓道側に向けてゆるやかに下るように掘削されており、その高低差をなくして平坦にするためであろう。初葬に対応する閉塞土と墓道の埋め戻し土は21・22層で、21層は直径2～5cmの円礫が約20cmの高さで盛り上げられている。この21層の下位には、初葬に伴うと判断される土器群が置かれていた。横断面B-B'で見ると、初葬終了後には、墓道は現存の深さ1.4mの上端付近まで埋め戻されている。追葬に伴う墓道内通路と開口部を埋め戻した土層は、16～18層が相当する。羨門の天井と18層下面の間はわずか50cmしかなく、追葬時に閉塞土を開口するのは、身体が入るだけの、必要最小限であることがわかる。

玄室内の20層はI面を造るための整地土である。20層の上位に堆積している1～15層のうち、1～3層はその質より天井からの崩落土と判断されるが、それ以外については自然の堆積土と思われる。墓道内に堆積している9・10層は、断面「U」字形の溝状に堆積しているので、16～18層の墓道内通路に後出する最終段階の墓道内通路を埋めた土砂の可能性はある。

(4)遺物出土状況

I面は20層の上面に相当し、奥壁および玄門付近で、鉄器が出土した。土器の出土はなかった。奥壁では、鉄鏃が9点(814～822)が出土し、やや離れて刀子(813)が出土した。玄室中央の左側壁に近接して刀子(812)がある。玄門付近で出土した鉄釘2点(824・825)は、この位置の真下のII面で鉄釘2点(823・826)が出土していることから、II面にあった鉄釘がI面に動かされたものと判断される。

II面は、地山および23層上面で、羨道部左側壁に沿って土師器高杯や須恵器杯身・杯蓋が出土した。土師器高杯(602)は正立して据えられていたのに対して、高杯(603・604)は口縁を下にしてうつ伏せに置かれていた。杯身・杯蓋は、杯蓋(599)のみ側壁に立てかけられていたが、そのほかはすべて正位に置かれていた。右側壁近くには、拳大の石が疎らに集められていたが、検出した時点では、その範囲も不定形であったので、礫床とは認識できなかった。このほか、図化できなかったが、須恵器甕片が出土した。

羨門の墓道側の23層上面では、土師器高杯(601)が細片に破碎されて出土した。この高杯は、初葬面であるII面出土の高杯(602～604)と同形のものである。23層は初期整地土と判断する土層

であるので、この土器は初葬時の儀礼に伴って埋め置かれたものと思われる。

(5) 出土遺物

玄室・羨道から出土した土器はすべてⅡ面からの出土で、須恵器杯蓋5点(594・596～599)・杯身1点(595)・壺1点(600)、土師器高杯3点(602～604)がある。墓道の23層上面からは土師器高杯(601)が出土した。

杯蓋(594)と杯身(595)は焼成・胎土から、一揃いのものとして作られたセット関係にあるもので、ヘラオコシ後、外周部のみをヘラケズリし、中央部はヘラケズリして、中央部はヘラオコシのまま、若干のナデを行っている。土師器高杯(601～604)は精良な胎土で、内外面とも暗文を施している。刀子(811～813)には、すべて鹿角が遺存する。鉄鏃は9点(814～822)、鉄釘は4点(823～826)出土している。

17. 16号横穴(図版第97・276・277)

(1) はじめに

墓道端は現代用水路によって破壊されており、その全容は不明である。

東・西隣の15号横穴、17号横穴の3基で小群を構成しているものと判断される。

(2) 形態と規模

杓文字形の玄室に、やや幅の狭い羨道が取り付く横穴である。奥壁には、玄室を造っていた湾曲は認められなかったが、側壁には、玄室と羨道を造る湾曲が認められた。羨門位置には、閉塞の土盛りが認められた。墓道の北半は現代用水路によって破壊されており、横穴の現存長は9.1mを測る。玄室長は4.5m、羨道長は1.85mを測り、墓道長は2.75mが残存していた。玄室幅は、奥壁部が最大幅で1.7m、玄門幅が0.9m、羨門幅は0.8mである。墓道の上幅は最大で1.7m、深さは最大で1.2mである。遺物は1面で出土した。

(3) 土層堆積状況

1～12層は砂礫層が主体であり、横穴の天井を構成していた砂礫層が崩落して堆積した土砂と判断されるものである。その重複関係より、まず、羨道の天井が陥没した後に、玄室の天井が落盤したものと判断される。

遺物の出土は25層上面の1面だけで、初葬面(Ⅰ面)に相当する。これ以外では、遺物の出土は認められなかった。閉塞盛土との関連およびその土質の違いから、16層が人為的に盛られた整地土層と判断され、この上面で何らかの作業がなされたものと推測される。この16層は厚さ10cm弱で、奥壁から玄室全面、そして閉塞盛土の斜面の上にまで盛られている。

横穴構築時の初期整地土は25・26層で、玄室・羨道には25層の淡黄灰色砂、墓道には26層の暗褐色砂質土と、その土質を代えているようである。玄室内のこの上面が初葬面に相当する。初葬直後の墓道埋め戻し土・閉塞土は22～24層が相当し、横断面C-C'で見ると、墓道は少なくとも約1.2mの高さにまで埋め戻されている。玄室へ再入室した際の墓道内通路およびその埋め戻し土が17～21層で、追葬2回目の進入に際しては、14・15層の下面に相当する墓道内通路を掘削

している。入室すると、玄室内を16層で整地し、何らかの作業を行ったものと推定される。玄室から退室すると、墓道内通路は13～15層で埋め戻されたものと推測される。

墓道内通路の埋め戻し土である13・14層、19層は、羨門側と比べて墓道端側に多くの砂礫が含まれているが、漸次的に変化しているため、層を分けることはできない。おそらく、墓道内通路を埋め戻す際に、砂礫を選別した上で、選択的に砂礫を墓道側に埋め、閉塞土には土だけを用いたであろう。

(4) 遺物出土状況

I面では、奥壁に接して遺物が置かれていた。奥壁左には、土師器甕(609)が置かれていた。奥壁右隅には、須恵器杯蓋(605)は口縁を上にして逆位にあり、その横で、短頸壺(607)が正立して置かれていた。やや離れて杯身(606)は口縁を上にして正位に置かれ、その横で提瓶(608)が倒立して出土した。これら以外に遺物の出土は見なかった。

(5) 出土遺物

杯身(606)と短頸壺(607)には、ともに外面に「×」のヘラ記号が記されている。提瓶(608)は外面をていねいにナデている。

18. 17号横穴(図版第98・99・278・279)

(1) はじめに

墓道の端部側は、現代の用水路によりそのほとんどが壊されていたが、用水路の下位では、墓道は深さ約20cm程度がかろうじて残存していた。墓道は現在の道路敷きの下にのびていく。調査時には、羨道の天井の一部が残存していた。

この横穴に隣接して軸を揃えて、15・16・18号横穴が造られているが、18号横穴は約2m高い位置に造られていること、玄室の位置が揃わないことから、18号横穴は、15～17号横穴とは別個の小群を構成しているものと判断され、15～17号横穴の3基で一小群と判断される。

(2) 形態と規模

横穴の底面は、2か所で段を有して掘削されており、側壁に残る2か所の湾曲の位置とほぼ合致するので、それぞれの位置が玄門と羨門であったと判断される。羨道の天井の一部が残存しており、その天井の高さは、地山面から1.25mと低いものであった。玄室の天井は全く残っておらず、しかも壁面の残存高も低いいため、壁面の湾曲から天井の高さを推定することはできない。

全長は検出長で12.2m、玄室は長方形を呈しており、長さ4.35m、玄室幅が1.8m、玄門幅1.4mを測る。羨道は玄室よりやや幅が狭く、長さ2.85m、羨門の幅は1.0mを測る。墓道長は5.0mしか確認できず、墓道の幅は1.5mを測る。遺物は2面で出土した。

また、調査手順の手違いにより、縦断土層の一部が記録できていない。

(3) 土層堆積状況

玄室・羨道内には厚く砂礫が堆積しており、1～11層は天井の崩落土と判断されるものである。墓道内の12～14層は、有機質を含んだ褐色系統の色調であることから、長く地表にさらされて、

雨水に流されて堆積した土砂と判断される。しかし、横断面C-C'に見るように、その断面の形状が溝状になっていること、特に12層には砂礫が多く含まれていることから、墓道内通路として人為的に埋め戻された可能性もある。

遺物は2面で出土した。I面は23・24層上面が相当し、II面は初葬面で、地山面上に相当する。I面は、初葬面の上に23・24層で整地を行って、埋葬面を造り出している。それぞれの遺物出土面は、奥壁では30cm、羨道部では10cm程度の高低差を有している。

35～38層は砂質土・砂礫土で、横穴構築時の初期整地土と判断され、玄門より墓道側を整地し、玄門と羨門に掘り残された2か所の段を平坦にしている。初葬終了後の閉塞土および墓道の埋め戻し土(残欠)は、33・34層がそれと判断され、横断面C-C'で見るとその状況から、墓道を少なくとも1.1mの高さにまで埋め戻していたようである。

土層の観察により、追葬のために3回程度の玄室への進入がなされているのを確認した。横穴の開口に伴う閉塞部・墓道内通路の埋め戻し土は、15～22層、25・26層、27～32層がそれと判断されるが、15～22層はさらに数度に分かれるかも知れない。また、横断土層B-B'で見ると、最終の入室に伴い閉塞部を開口した高さは、わずかに90cm程度である。

(4)遺物出土状況

I面では玄門付近に遺物が置かれていたが、その出土量は少ない。右側壁に近接して、須恵器杯身1点(616)が正位に置かれていた。近接して、拳大の石が20個程度集められており、その上面で鉄鏃残欠2点(829・831)を検出した。左側壁近くでは、鏢1点(832)、刀子1点(827)が出土した。

II面は、地山面上にあたり、奥壁に接して遺物が集中していた。須恵器は杯身3点(611・613・615)、杯蓋3点(610・612・614)が、すべて口縁を上にして、重ねられた状態で置かれていた。この西側に近接して、拳大よりやや大振りな石が10数個集められており、この上で須恵器壺(617)が横転して出土した。玄室中央部では、鉄鏃の残欠2点(828・830)が出土した。

(5)出土遺物

杯身・杯蓋で一揃いの組として作られたセットが3組認められ、杯蓋(610)と杯身(611)、杯蓋(612)と杯身(613)、杯蓋(614)と杯身(615)がそうである。先の2組には、天井部・底部の外面に「一」状のヘラ記号が描かれている。これらはすべて、II面の初葬面出土である。杯身(616)は、口径が小さく、立ち上がりも長いもので、型的にやや古いものである。初葬面に後出するI面から出土しているが、完形であるので、包含層などからの紛れ込みとは考えにくい。

鉄器では、刀子(827)と鏃(828～831)、鏢(832)がある。刀子(827)は鹿角装のもので、その上に木質が付着している。鏃(828～831)は残欠で、完存するものはない。鏢(832)は単体の出土で、刀や刀装具は出土していない。

19. 18号横穴(図版第100・101・280～282)

(1)はじめに

墓道端は現代の用水路により削平されている。この横穴では人骨26・27を検出し、特に人骨26の遺存状態が良かったため、各部の骨の配列を詳細に検討できた。

18号横穴の両隣には、17号横穴、19号横穴があるが、ともに玄室の位置が揃わないこと、17号横穴とは造られている高さに約2mの差があること、19号横穴とはやや間隔を空けて造られていることから、18号横穴1基で、小群をなすものと判断される。

(2)形態と規模

奥壁から約1.4mの位置で、地山面が約20cmの段を掘り残して掘削されている。この段は、初期整地の時点で低い側に土を盛ることで平坦に均されている。玄室の平面形は短冊形を呈しており、玄門や羨門を示唆する形状は認められないが、壁面の観察により、湾曲が2か所で認められるので、玄室の前面に羨道が付設されているものと推定される。この羨門位置と土層にみられる閉塞盛土位置とは矛盾しない。

各部長を掲げると、全長12.7m(現存長)、玄室長3.4m、玄室幅は奥壁が最大で1.85m、玄門幅1.35m、玄室最大幅1.85m、羨道長3.0m、羨門幅0.7m、墓道長6.3m(現存)を測る。墓道の上幅は削平を受けているためか、ほかの横穴に比べて極端に狭く、0.9mである。遺物・人骨は2面で検出したが、この上位に1面の作業面があったものと推定される。

(3)土層堆積状況

試掘調査時に、重機で閉塞部から墓道部分にかけてを大きく削り取ってしまったため、閉塞盛土および玄室内の土層の関連については、詳細に観察できなかった。

玄室内の1～11層は、締まりのない砂礫層で、天井崩落土と判断される。これより下位が横穴使用に伴う堆積土と判断する。

人骨・遺物の出土は2面で確認し、I面が16・17層上面で、II面は18層上面である。

横穴構築時の初期整地土は24層で、この整地土で玄室内の地山面上にある段差を消している。羨門位置には、14・15層、19～21層など、細かな層が盛り上げられているのが認められ、これらが閉塞土の一部と判断される。これらの閉塞土は、初期整地土の24層上面から盛り上げられているので、遺物や骨の出土は全く見られなかったが、この24層上面および奥壁側の地山面が本来の初葬面であったと判断される。ほかの横穴でも認められるように、下位の埋葬面から上位の埋葬面へ土器が動かされる場合があるので、この横穴でも初葬面から上位の埋葬面に土器などの副葬品が動かされたために、遺物の出土が認められなかったのであろう。この初葬面における閉塞土・墓道の埋め戻し土は22・23層がそれと判断される。追葬に伴う墓道内通路が2回認められ、その埋め戻し土は19～21層、14・15層が推定される。玄室内の整地は、18層、16・17層の2回が認められ、I面を構築後に14・15層で墓道内通路・閉塞開口部が埋め戻されている。

(4)遺物出土状況

人骨・遺物の出土は2面で確認し、16・17層上面では人骨26・27、18層上面では須恵器が出土した。

I面では、玄室のほぼ中央の右側壁側で人骨26・27を検出した。玄門側に人骨26が、主軸に平

行して置かれている。頭は玄門側に、脚は奥壁側に位置している。ほぼ全身におよぶ骨があり、残り具合は非常に良いものである。人骨27は、人骨26の足下^(注7)にあり、数点の長管骨が遺存しているだけであった。I面では、土器の出土はなく、刀子2点^(注7)が出土しただけである。

II面は、人骨検出面より約10cm低い位置にあり、羨道に土器が置かれていた。すべて須恵器で、土師器はなかった。左側壁には長頸壺(622)があるだけで、ほかはすべて右側壁に近接して置かれていた。杯身2点(619・620)、杯蓋2点(618・621)と短頸壺2点(623・624)、平瓶1点(625)がある。短頸壺(624)・平瓶(625)は正立して置かれており、短頸壺(623)はやや傾いて置かれていた。杯身(619・620)・杯蓋(618)は口縁を上、杯蓋(621)は口縁を下にして出土した。

初葬面と判断する24層上面では、遺物は全く出土しなかった。

そのほか、墓道の検出面を精査中に、須恵器壺片が出土した。

(5)出土遺物

杯身(619)・杯蓋(618)は、ともに内面に「十」のヘラ記号がなされており、胎土・焼成も似ており、一揃いの蓋と身として作られたセットである。杯蓋(621)は、壺の蓋とも想定されるが、杯身(619・620)と型的に連続もしくは同時期に出現するものであるため、杯蓋と考えるものである。短頸壺(623・624)は底部外面にヘラ記号があり、短頸壺(624)は「×」であるが、短頸壺(623)は「十」に「十」を組み合わせたもので、杯蓋(618)・杯身(619)のヘラ記号と異なるものである。平瓶(625)の体部には、焼成時に据え置くための支えに用いた須恵器の破片が粘着している。

(岩松 保)

(6)人骨出土状況

2体の人骨をI面で検出した。人骨26は、玄室ほぼ中央付近の東側壁寄り、人骨27は人骨26出土箇所^(注7)の奥壁側に隣接していた。人骨26には伸展位様の箇所と、多種の骨が集められた箇所とがあった。人骨27は20cm程度の幅の中に集められていた。

人骨26の頭蓋骨は、出土範囲全体の最も開口部側に位置し、頭頂部を西側壁に、頭蓋前面を奥壁方向に向けて横転していた。下顎骨とは約15cm離れる。頭蓋骨に接するように、体幹骨や四肢骨の集骨部が認められる。集骨部の下位には、上肢長管骨・鎖骨・肩甲骨・椎骨・肋骨などが乱雑に置かれていた。これらの骨の中には、わずかであるが、交連状態を保っているものがあつた。椎骨では、隣接する2個で交連が見られる程度であるが、右手中手骨と基節骨とはほぼ完全に交連していた。この上位に、左右の脚の骨が伸展した状態で置かれている。足下から頭を見た場合、左側に右脚が、右側に左脚が位置している。さらに、骨盤を形成する左右の腰骨と仙骨は各骨に分割され、右大腿骨の上に重ね置かれた状態であつた。

左右の脚の状況は、右脚については脛骨と腓骨および距骨とが交連および解剖学的な位置関係を有していた。しかし、大腿骨と脛骨とは、脛骨以下が前後反転しており解剖学的な位置関係にはなかった。すなわち、大腿骨の上面が前面であり、脛骨以下は上面が後面であつた。ところが、大腿骨と脛骨の間には膝蓋骨が遺存していたので、本来は膝関節でも交連していたのが、脛骨以

下が自然に反転もしくは人為的に反転させられた可能性が考えられる。左脚については、大腿骨・脛骨・腓骨・距骨が解剖学的な位置にあり、さらに、距骨から中足骨の一部までも解剖学的な位置にあり、左脚全体が交連していたものと推定される。ただし、左脚全体に、上面が後面であるので、左右の脚の前・後の関係が自然な位置関係ではない。左右の脚全体を意図的に入れ替えた可能性も考えられるが、仰臥の位置関係で両脚が置かれた後に、右脚は脛骨以下が、左脚は大腿骨以下が全体に外側に反転したと考えれば、検出した状況と辻褃が合う。

以上をまとめると、両脚および集骨内の上肢長管骨の方向は、横穴の主軸方向にほぼ平行するが、椎骨・肋骨などには特に意図的な配置は見られず、無作為に置かれたと考えられる。また、両脚が交連状態を保ったままであるのに対して、ほかの骨は細かな骨にまで分割されて置かれているので、遺骸が骨化したといっても、まだ腱や靭帯が残存して骨の関節が繋がっている時点で、体幹骨や上肢骨は意図的にバラバラにされたものと推定される。まず、これらの骨が集められ、次いで交連状態を保った両脚がその上に並べられたのであろう。そして、骨盤が分割されて、大腿骨の上に置かれるのであるが、頭蓋骨がどの時点で据えられたのかは、よく分からない。

人骨27の保存状態は非常に悪く、全体的に風化の進行が著しい。上肢長管骨らしきものが数点と、歯が数個遺存していた。長管骨の並びには、特定の方向性は認められない。歯が長管骨の直下から出土した。

(上田真一郎)

20. 19号横穴(図版第102・103・283・284)

(1)はじめに

荒坂B支群の東端に近い位置にあるもので、玄室を完掘したのものとしては、最も東端にある横穴である。天井が残存しており、重機で天井を外して調査を行った。墓道の一部は用水路により破壊されている。東隣の20号横穴と2基で小群をなすものとする。

(2)形態と規模

墓道端が現代用水路によって破壊されているため、全長は現存長で9.45m、墓道長も現存で3.55mを測る。玄室は長方形を呈し、前面にはやや狭い羨道が付設し、全体としては杓文字形を呈している。玄室長は3.4m、玄室幅は奥壁部が最大幅で1.9m、玄門幅1.3mを測る。羨門位置の地山面で10cm弱の段差が認められる。羨道長は2.5m、羨門幅0.95m、墓道内で最も狭くなっているところで0.7mを測る。墓道の上幅は2.9m、羨門部分で約2mの高さの側壁が残っている。天井の高さは、玄室内で1.8～2.0m程度、羨道部で1.4～1.5m程度に復原できる。

(3)土層堆積状況

遺物は31層上面の1面(I面)のみで出土した。遺物の出土はなかったが、整地をして造ったと判断される作業面を1ないし2面が認められた。作業面は19層上面と12層上面がそれと判断されるが、平坦面が形成されていることと、閉塞土と判断される土層がこれらの作業面の上より盛り上げられていることからの推測である。4～6層は締まりのない砂礫層で、天井崩落土と判断す

るものである。

I面に対応する閉塞土および墓道の埋め戻し土は、23～30層で、横断土層B-B'を見ると、墓道の現存高のほぼ上端までの約2mの高さを埋め戻している。追葬時の墓道内通路および閉塞部の開口は、14～18層で埋められている。この時に、玄室内を19～22層で整地している。土層の形状より、18層だけで1回の墓道内通路であった可能性があり、この場合には、18層で墓道内通路を埋め戻す前に、玄室内を19～22層で整地した層序となっている。この整地層は砂礫を主体とするもので、ほかの横穴に見られるような、粘質土系統のものとは異なる。天井からの崩落土砂を利用して、追葬面を形成したのかも知れない。

12層上面も作業面である可能性があるが、この面の閉塞土と判断される8～10層は粘質が強いため、人為的な閉塞土ではなく、雨水によって流されて堆積した可能性がある。

(4)遺物出土状況

遺物は玄室から羨道にかけて出土した。須恵器だけの出土で、土師器は出土していない。玄室内では、須恵器杯蓋5点(626～629・631)・杯身6点(632～637)・高杯2点(638・639)・脚付長頸壺1点(640)が出土した。また、玄門部の土層観察用畦除去中に杯蓋(630)が出土した。

玄室の玄門寄りの右側壁側では、杯蓋(626・628)が、ともにつまみを上にして正位で、約15cmの間隔を空けて出土した。近接して拳大の石が2個置かれており、頭部を安定させるための枕として用いられた可能性がある。この奥壁側には、鉄刀(834)が横穴の主軸に平行して、切っ先を奥壁側に向けて出土した。人骨28は、この鉄刀の下で検出したもので、椎骨を1点確認しただけである。

左側壁近くの玄門部から羨道にかけて、遺物が集中して出土した。ほとんどの土器が完形で出土したが、高杯(639)のみ、数片に割れて、離れて出土した。ここで出土した杯身・杯蓋は、すべて口縁を上にして置かれていた。なお、高杯(638)は玄室内掘削中に出土した破片と接合して完形に近いものとなったが、その破片の出土位置を記録できていないので、元々、完形に近い配置にあったのか、大きく離れて出土したのかどうか、判断できない。

(5)出土遺物

玄室内より杯身・杯蓋各6点が出土したが、一揃いのものとして作られたセットと判断できるものはない。すべて、杯身のかえりがなくなり、杯蓋に宝珠つまみとかえりが付くものばかりで、その中でも、杯身(637)は、やや新しい型式のものである。杯身(635・636)のゆがみは顕著で、特に杯身(635)のゆがみは著しく、へそ皿のように、口縁を両端から押さえてつぶしているものである。

鉄器は、刀(834)が出土した。鞘の残欠の木質が遺存しており、足金具2点が鞘口金具の上に残っており、その下に釦が装着されている。刀子(833)は墓道内の中層から出土したものである。

(6)人骨出土状況

人骨28の保存状態は非常に悪く、椎骨が1点遺存していたのみである。詳細は不明である。

21. 20号横穴(図版第104・285)

(1)はじめに

一連の調査の中で、荒坂B支群の最も東に位置する横穴である。最終的に道路計画が一部変更され、破壊から免れたため、墓道部分の調査だけに留まった。19号横穴と2基で小群となるものと判断される。

(2)形態と規模

18号横穴よりも東側は、当初、開発対象の境界付近にあたり、18号横穴を調査している際に、まず横穴分布の有無を確認するため重機により表土を除去した。その結果、19・20号横穴を検出し、19号横穴については天井を外して調査を実施した。20号横穴は計画の変更により、破壊から免れることとなったため、墓道の一部を調査し、横穴であることを確認して調査を終了した。

調査では、平面で土坑状の色の違いを認めたため、西側1/2を掘削した。この土坑は、南側の丘陵斜面にトンネル状に続いて行き、しかも土砂が厚く堆積していたことから、天井が完存した横穴で、その中の玄門もしくは、羨門から墓道付近を調査しているものと判断した。掘削中に、鉄鍬(836)、刀子(835)を検出した。

北側の墓道は現代の用水路により削平を受けて消失しており、残存しているのは墓道の中でも閉塞部分に近い位置から玄室側である。墓道を3.85mにわたって検出し、その幅は2.5mを測る。

第3節 荒坂C支群

1. 支群の概要(図版第105・286)

荒坂地区の谷地形で、左岸に分布する支群で、2基の横穴より構成されている。谷奥から順に1号横穴、2号横穴である。この横穴群が造られた丘陵斜面は、女谷C支群と同じ丘陵の東側斜面に位置する。

2基の横穴は近接して造られているが、その主軸を異にしている。墓道端では約7mの間隔で造られているのに対して、玄室はほぼ接した位置に造られており、平面的に見ると「ハ」の字形をなしている。そのため、近接して造られているが、それぞれの横穴で別個の小群をなしているものと判断される。

横穴の前面では、墓地内通路を検出した。この通路は、1号横穴の墓道端を埋めた土砂を掘削して造られていた。また、2号横穴の墓道端では、横穴に先行する土坑ⅢSX02を検出した。

2. 1号横穴(図版第106・107・287・288)

(1)はじめに

この横穴の玄門付近の土層は、平成11年度に実施した試掘調査トレンチにより削平を受けたために、十分な観察ができていない。調査時には、玄室の天井が残存しており、玄室内の天井部の観察を行った後に、安全確保のため重機で天井を除去して調査を行った。

(2)形態と規模

玄室内に堆積しているのは、基本的には粘質土系で、天井や側壁・奥壁に由来すると思われる砂礫は堆積していない。そのため、玄室の崩落はほとんどなく、その形状は当初の形態に近いものと判断される。

玄室の横断形は、五角形状のアーチ型を呈している。奥壁はほぼ直に立ち上がり、天井は玄門に向けてわずかに低くなるように、直線的に掘られている。

地山面から天井までの高さは1.6～1.8mであるが、地山面には10～20cmの整地を行って初葬面を造るので、横穴使用時には1.5m強しか天井の高さがなかったものと推定される。実際、調査着手時には、奥壁部付近のわずかな範囲で、高さが1.3m程度の空間が認められただけである。

玄室の平面形態は長方形を呈し、漏斗状に狭まりつつ墓道となる。この玄門位置で閉塞盛土が認められるので、羨道は有していないものと判断する。墓道は、玄門から1.6m付近までは漏斗状に狭まっており、そこより墓道側は40cmの幅でほぼ平行に細長く掘削されている。奥壁から6.8mの位置で、墓道の底面は約20cmの段差を有して掘削されている。

墓道端は、谷地形のためにわずかに削平を受けている。この横穴の墓道の埋土を切る形で、墓地内通路が設けられていることが、土層の観察により明らかとなった。

各部長を掲げると、全長は現存長で13.05m、玄室長は3.05m、玄室幅は奥壁部分が最大幅で2.1m、玄室玄門部の幅は1.6m、墓道長は現存で10.0m、墓道の上幅は最大2.8mを測る。遺物は1面で出土した。

(3)土層堆積状況

1～8層については、1～5層が粘質の強い土層で、閉塞土のように細かな堆積単位となっていないことより、横穴使用停止以後に玄室内へ流入した土と判断される。

遺物は、35・36層の上面の1面(I面)で出土した。I面の下位の35～39層は砂質混じりのもので、横穴構築時の初期整地土層と判断する。遺物は全く出土していないが、8層上面は水平に堆積しているので、人為的に盛られて、この面でも何らかの行為が行われた可能性がある。閉塞部分の土層はわずかな高さしか残っていないため、詳細に観察できないが、玄門部分に土を盛り上げているのが観察でき、土盛りにより閉塞を行っている。

この横穴の墓道直上には、荒坂B支群と荒坂C支群を分ける谷の土砂が厚く堆積している。上位には細かな水平堆積層が認められ、下位には比較的大きな単位で斜めの堆積が認められることから、15・17層より下位が墓道内の堆積土と判断する。

墓道内の堆積土は10層近くの土層に分かれる。初葬後に閉塞を行い墓道を埋め戻して以後、何回かにわたって、墓道内通路を掘削し、閉塞土を開けて玄室内に進入したことが分かるが、閉塞部の土層の大半が失われているため、詳細は不明である。

10～14層は、荒坂C支群の前面で検出した墓地内通路の埋土である。少なくとも、墓道内の堆積土である16～18層を切り込んで造られていることから、1号横穴を構築した以後に通路が造られたものと言える。

(4)遺物出土状況

I面では、須恵器・土師器がまとまって出土した。

須恵器は、杯蓋5点(641・643～646)・杯身2点(642・648)・甕1点(660)・高杯7点(649～655)・脚付長頸壺3点(656・657・659)・同蓋1点(658)が出土した。高杯(650・651・653・655)は横転しており、高杯(649・652・654)は口縁を下にして倒立して置かれていた。杯蓋(645・646)は、うつ伏せで並べて置かれており、枕として利用された可能性がある。杯蓋(643)・杯身(648)・蓋(658)は口縁を上にして、杯蓋(641・644)・杯身(642)は、口縁を下にして出土した。

墓道端においては、墓道内通路の埋め戻し土と判断される17層中より、須恵器杯身(647)が出土した。そのほか、同じく墓道内通路を埋める土砂である15層中より、鉄器破片や須恵器・土師器・埴輪の小片が出土した。

(5)出土遺物

出土遺物は須恵器のみで、土師器や鉄器は出土していない。

杯蓋(641)・杯身(642)は、身と蓋が一揃えで作られたセットに復原できるものである。また、脚付長頸壺(659)と蓋(658)がセットとなるものである。蓋(658)は杯蓋とも考えられるが、それに対応する杯身が認められないこと、口径がやや小さいこと、焼成および釉の付着具合が脚付長頸壺(659)と似ることから、同壺の蓋と認識している。

3. 2号横穴(図版第108・109・289・290)

(1)はじめに

1号横穴の北に位置し、1号横穴と同じく、試掘トレンチにより玄門から墓道にかけて大きく削平されている。そのため、土層の観察を詳細に行えなかった。また、玄室に天井が残存しており、事前に観察を行った後に、重機により天井を外して調査を行った。

(2)形態と規模

平成11年度の試掘調査で、玄門から墓道にかけてを大きく掘削した直後には、閉塞部には土盛りが認められ、1号横穴と同じ状況を呈していた。この時点では、玄室内に自然堆積した土砂と考え、閉塞土の重要性を認識していなかったために、人力により、それらの土砂を除去した。そのため、閉塞盛土の土層は観察できていない。

天井を除去する前には、玄室内の堆積土から天井までは、約1.6mの空間を有していた。玄室内の堆積土層には、天井由来の砂礫層がほとんど認められないので、本来の玄室の形状をよく留めているものと判断された。

玄室の形状は椀状を呈しており、奥壁と比べて、中央部分がやや広くなる。墓道は、奥壁から4.5m付近で北側にやや屈曲して掘削されている。玄室の縦断の立面を見ると、奥壁はやや外側に向けて湾曲しながら立ち上がり、天井の高さは、奥壁から1mの地点が最も高く、地山面から1.8mを測る。その位置から玄門に向けては徐々に低くなり、最も低い所では1.45mである。玄門部では、おそらく1.2m程度の高さしかなかったと推定される。玄室の横断は、両側壁が中央に向けて内傾しながら立ち上がるものである。

平面に見る玄門部と、閉塞盛土と判断される細かな堆積土層との位置が一致しているので、羨道は付設されていないものと判断される。

全長13.3m、玄室長3.6m、玄室幅は奥壁部が1.75m、玄門部幅が0.9m、玄室最大幅1.95m、墓道長は9.7m、墓道の上幅は最大1.45mを測る。遺物は1面で出土した。

(3)土層堆積状況

この横穴の縦断土層では、1号横穴とは違って、谷内で堆積した砂礫は明瞭には認められない。そのため、墓道内で堆積した土砂とそれ以外の土層の判断は難しいが、11・12層にはともに腐植土が混じっており、長期間にわたって表土を形成していたものと判断される。そのため、この土層より下位の土層が、横穴使用時に堆積した土砂と判断する。この11・12層の位置する高さは、墓道の側壁の残存高にほぼ合致する。

この旧表土と判断される11・12層より下位の墓道端には、墓地内通路13～15層が認められ、これらの堆積土は、墓道内の堆積土の上位に堆積している。14・15層の下面は硬化しており、通行によるためと判断される。

1～4層は、横穴使用停止後に玄室内の堆積土と判断するものである。

41～45層は横穴構築時の初期整地土と判断され、遺物は41層上面(I面)の1面で検出した。閉塞部分の土層はほとんどが消失しているため、詳細は分からない。11・12層より下位の墓道内の堆積土は、10数層に分かれ、墓道内通路が複数回にわたって掘削されているものと思われるが、詳細は分からない。

(4)遺物出土状況

遺物の出土量は少なく、玄室内より3点の遺物が出土しただけである。須恵器高杯(662)・脚付長頸壺(665)、土師器高杯(667)がある。墓道内より須恵器杯身(661)・高杯(663・664)、土師器椀(666)が出土した。また、墓道端の南2m付近を掘削中に、刀子片(837)、鉄鏃片(838～840)などのほか、埴輪小片が出土した。

(5)出土遺物

高杯(663)は口径と器高がやや大きいため、高杯の杯と判断する。高杯(664)は、脚部に横方向のカキメが施されており、同様の手法の高杯は、荒坂B支群10・14号横穴でも出土している。

第4節 墓地内通路およびそのほかの遺構

1. 墓地内通路(図版第105・291・292)

荒坂地区の調査では、B支群の1号横穴前とC支群の1・2号横穴前面で、墓地内通路を検出した。

荒坂C支群では、1・2号横穴の前面で溝状の通路を検出した。墓地内通路の溝は、土坑ⅢSX02と1号横穴の墓道の上位から造られている。2号横穴では、墓道端を埋める土砂の上に、墓地内通路の埋土が載っていた。通路は、幅35cmの断面「U」字形を呈しており、丘陵斜面を最大0.9mの幅でカットして造られている。底面では、茶褐色粗砂混土が固く踏み固められた状況で

堆積していた。約20mにわたって検出したが、谷奥では、掘形が不明瞭になって終わっている。他方、谷の低い位置では、2号横穴の北側約3mの位置で、通路は谷地形の中に消失している。通路の一部は、この谷の斜面に沿って、下るような状況であることを認めたので、谷地形によって後世に削平を受けたのではなく、谷の中に降りて行くような道筋を採ったものと思われる。

この通路状遺構は墓地内を行き来するために、人為的に造られたものと判断されるが、この通路は1号横穴の墓道端の上を横切って造られており、横穴を築造した後に通路が整備された状況が窺われる。とは言っても、墓道は初葬後すぐに埋め戻されるので、1号横穴と墓地内通路の整備の間に長い時間の経過を想定する必要はなく、1号横穴構築後すぐに通路が造られた可能性は否定できない。また、2号横穴と墓地内通路の関係は、通路が墓道を明瞭に切り込んで造られているような状況ではなく、2号横穴の墓道が埋められて以後に通路内の堆積がなされたという状況である。

荒坂B支群にあっては、1号横穴の前面で、通路状の溝状の窪地を確認した。幅1.6～2.0mで、深さ10～20cm程度の浅い溝状を呈し、底面は砂礫が踏み固められた状況であった。4号横穴や7号横穴の前面を一部拡張して、通路の検出に努めたが、自然地形の斜面を検出したに留まった。1号横穴の前面で検出した通路は、谷地形に隣接した平坦面上に位置しているため、おそらく、4号横穴や7号横穴の前面で拡張したトレンチは、そこにまで到達していなかったためであろう。これらの通路は、荒坂地区の各支群を束ねて、女谷地区・集落に通じていたと考えられる。

2. 谷地形(図版第293～297)

荒坂B支群と荒坂C支群の間では谷を検出した。荒坂C支群の南側では急激に浅くなり、2方向に分かれ、丘陵斜面を挟んで、丘陵上に上がっていく。西側に分かれる谷地形が丘陵上にのびていった末端は、谷地形ⅡS X03となっている。また、2方向に分かれたうちの南へのびる谷地形は、丘陵上に上がって行き、平成14年度の荒坂B支群の試掘調査で検出した溝S D01に連なっていくものと思われる。

この谷の内部は砂礫が厚く堆積しており、遺物はほとんど混じっておらず、土師器皿(673)および若干の埴輪片が出土しただけである。墓地内通路がこの谷の横に造られているので、横穴が造られて使用されている際には、この谷は埋没していなかったと思われる。土師器皿(673)がこの流路内の上層から出土しており、埋没の年代を示すものと考えられる。この皿は、小森・上村の編年(小森・上村1996)によると、Ⅳ期古段階に相当し、その年代観より11世紀前半頃のものと思われる。

3. そのほかの遺構

土坑ⅢS X01(図版110・298)

荒坂B支群13号横穴と14号横穴の間で検出した土坑で、13号横穴の墓道に近接して造られていた。北半部は、現代用水路の擁壁により削平されている。南北2.0m(現存)、東西1.95m、検出

高は最大で70cmを測る。内部には、東西方向のほぼ中央に鉄剣1点(842)、東壁に沿って筭1点(843)、その北側に刀残欠(841)が、長軸方向に平行して置かれていた。

土坑Ⅲ S X 02(図版110・299)

荒坂C支群2号横穴の墓道端で検出した土坑で、墓地内通路と2号横穴に重複している。検出面で平面的な切り合い関係を認めたため、少なくとも横穴や通路が造られた時点では、この土坑は埋まっていたと言える。平面的な形状は、これらの遺構により削平を受けているが、4.6×4.0mの隅丸方形形状を呈している。掘形の壁面は、ゆるやかに立ち上がるものである。検出した深さは、最大で約0.7mで、土坑内の6層の茶灰色土層中より土師器甑(670)と甕(669)、須恵器甕(668)が破片となって出土した。この下位より遺物は出土しなかった。底面では、長さ1.5m、幅30cm、深さ15cmの溝状の土坑を検出したが、その性格は不明である。

(岩松 保)

第4章 平成14年度の調査

第1節 はじめに

八幡市南部から京田辺市にかけて丘陵裾には、横穴が稠密に分布することが知られている。この丘陵を横切って、第二京阪道路および京都南道路の建設が予定され、『八幡市遺跡地図』には同道路建設予定地の北側に隣接して女谷横穴群が、南側に隣接して荒坂横穴群が分布しており(図版第1～4)、丘陵上では荒坂遺跡が周知の遺跡として知られていた。

そのため、平成11・12年度の2か年にわたって、女谷横穴群と荒坂横穴群の拡がりおよび荒坂遺跡の性格を確認することを目的として試掘調査を実施した。その結果、女谷横穴群と荒坂横穴群とに挟まれた道路予定地内に、横穴が稠密に分布していることが判明し、両横穴群は同一の横穴群と考えられた。両横穴群は、平成12・13年度の2か年にわたって合計45基の横穴を調査した。

平成14年度には、八幡市域の荒坂遺跡、女谷・荒坂横穴群、京田辺市域では御毛通遺跡の調査を実施した(図版第3)。

荒坂遺跡では、平成4年度に古墳や時期不明の掘立柱建物跡を検出しており、その地点の北・西側にトレンチを設定して調査を行ったが、顕著な遺構は確認できなかった。

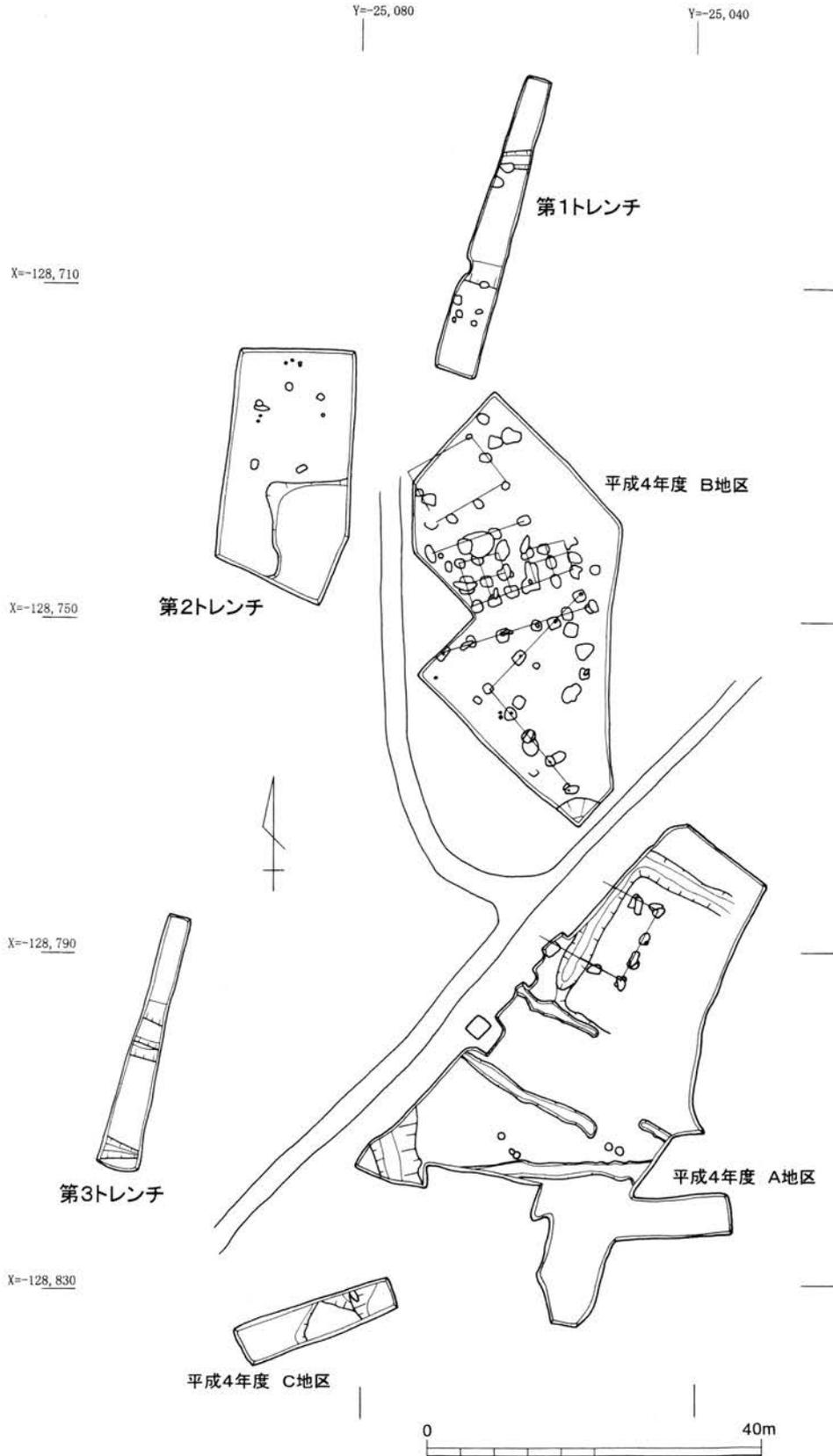
御毛通遺跡は、女谷・荒坂横穴群の中の荒坂A支群の分布する丘陵斜面に接した平野に位置している。遺物の散布地として知られているだけであるので、まず試掘トレンチを設定して調査を実施したが、水性堆積層を確認しただけで、顕著な遺構は確認できなかった。

女谷・荒坂横穴群では、女谷地区1か所、荒坂地区2か所で調査を行った。女谷地区では、女谷B支群の4基の横穴と女谷A・C支群で横穴の墓道を調査した。荒坂地区では、昨年度調査したB支群の横穴が造られた斜面の背後にあたる丘陵部とA支群の南限近くで調査し、A支群では2基の横穴を確認した。

調査は、調査第2課課長補佐兼第3係長奥村清一郎、同主任調査員岩松保、同調査員中村周平、第2係主任調査員小池寛、同専門調査員黒坪一樹、同調査員中川和哉、第1係調査員村田和弘が担当した。

今回の調査は日本道路公団関西支社の依頼を受けて、第二京阪道路(一般国道1号)の建設工事に伴う事前調査として実施した。調査にあたって、京都府教育委員会・八幡市教育委員会・京田辺市教育委員会をはじめ、日本道路公団関西支社京都工事事務所・国土交通省近畿地方整備局浪速国道工事事務所には、ご指導・ご協力を頂いた。なお、調査終了後、本報告書刊行までの間に『京都府遺跡地図(第3版)』が刊行され、女谷横穴群、荒坂横穴群は一続きの横穴群と認められて、女谷・荒坂横穴群と名称が変更された。そのため、各遺跡の調査については、変更された名称で記述することとする。

(岩松 保)



第3図 荒坂遺跡 調査トレンチ配置図

第2節 ^{あらさか} 荒坂遺跡

1. 調査経過

荒坂遺跡は、平成4年度に発掘調査が実施され、弥生時代の土坑や一辺約21mを測る5世紀初頭の方墳、時期不詳の掘立柱建物跡群が確認されている。今回の調査地点は、平成4年度の調査地に隣接しており、関連する遺構・遺物の検出が期待された(第3図)。なお、第1トレンチでは当初より約400㎡の面的な調査を行ったのに対して、第2・3トレンチでは約200㎡の試掘トレンチを設定して、まず遺構・遺物の拡がりを確認することから始めた。

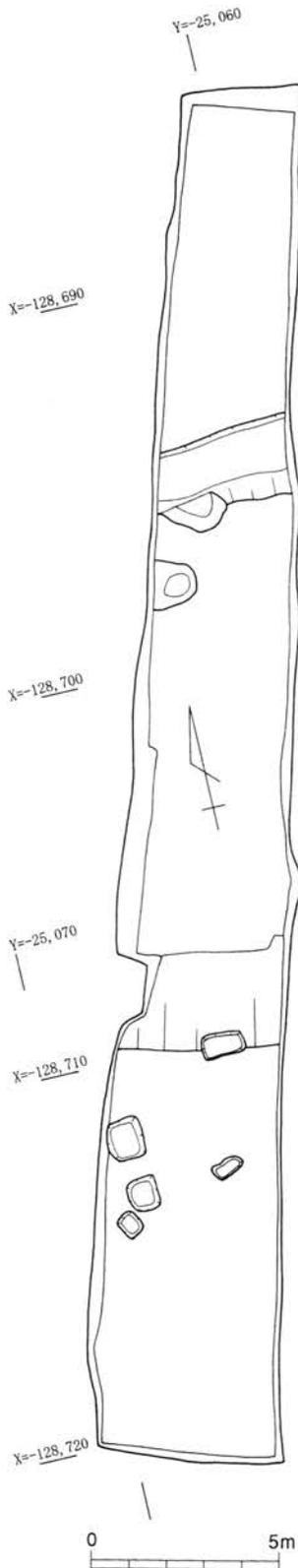
調査地は、八幡市大字美濃山小字荒坂・御毛通に所在し、調査第2課課長補佐兼調査第3係長奥村清一郎、第2係主任調査員小池寛、第1係調査員村田和弘が調査を担当した。調査は平成14年4月10日～5月16日までの期間を要し、調査面積は約700㎡である。

2. 調査概要

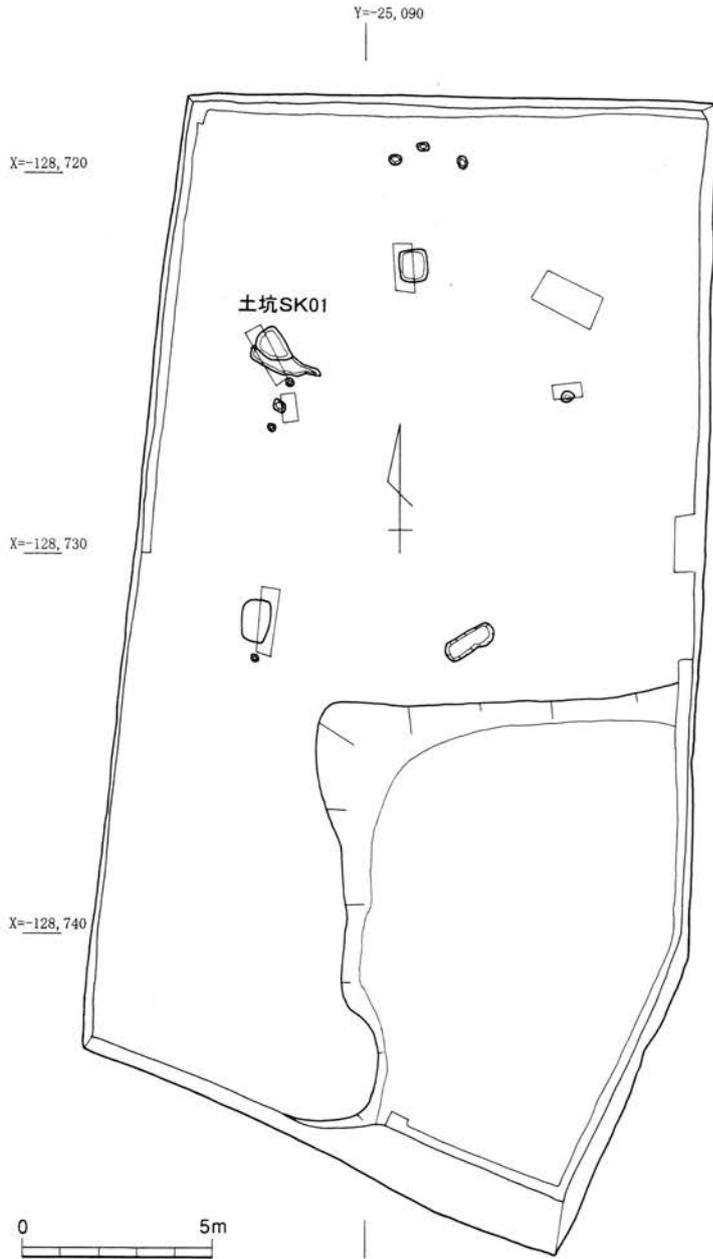
第1トレンチでは、主軸が真東西方向と一致する時期不詳の溝と近世～近代にかけての土坑を検出した(第4図)。このトレンチは、平成4年度に調査を実施したA地区の北側に隣接するが、関連する遺構・遺物はなかった。

第2トレンチは、平成4年度の調査地の西側に位置している。このトレンチでは、サヌカイトの母岩1点が出土した土坑SK01を1基検出するとともに、この土坑と同質の埋土が堆積している数基の土坑を確認した(第5図)。これらの土坑からは、サヌカイトの母岩1点(第7図)以外の遺物は全く出土していないため、明確な時期を特定することはできないが、サヌカイトの母岩の形状から、縄文時代に帰属する可能性もある。

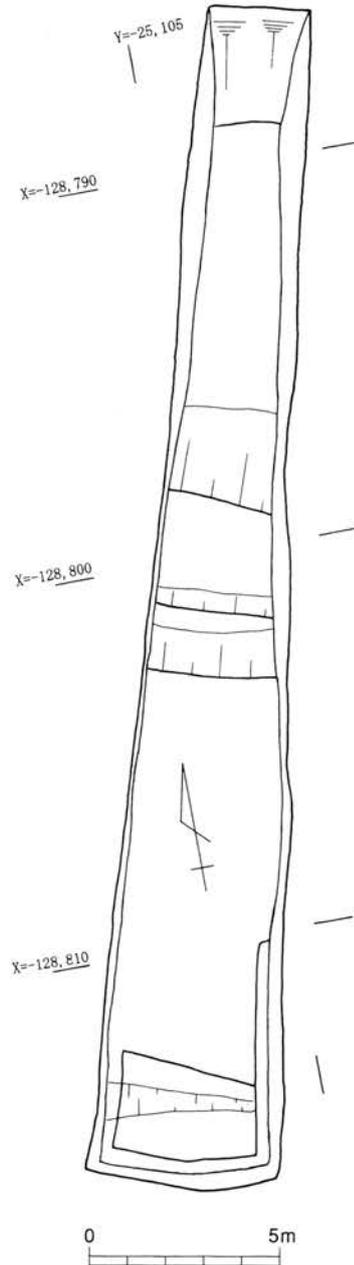
第3トレンチは、第1トレンチの南方に位置する谷地形上に設定したトレンチである。このトレンチでは、トレンチ北端で埋没した谷を検出したものの、明確な遺構は検出できなかった(第6図)。この谷内から遺物は出土しておらず、埋没時期などの詳細は不明である。また、遺物は、包含層中より、近世後期の染付磁器片などが出土したのみである。



第4図 荒坂遺跡
第1トレンチ平面図



第5図 荒坂遺跡 第2トレンチ平面図



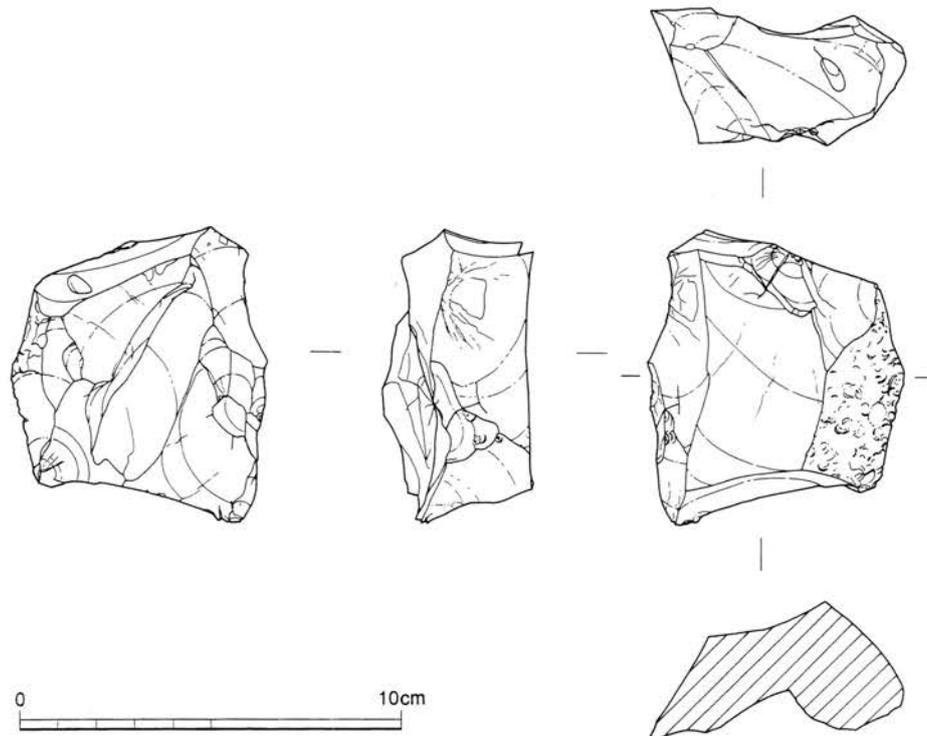
第6図 荒坂遺跡 第3トレンチ平面図

3. まとめ

今回の調査成果としては、まず、縄文時代の可能性が認められる土坑を検出した点があげられる。縄文時代の集落に類する遺構は、周辺では確認されていないが、サヌカイトの母岩を含む土坑は、落とし穴である可能性も視野に入れておきたい。

平成4年度に確認された掘立柱建物跡については、柱間の長さより、奈良時代の郷家跡に関連する建物の可能性が指摘されている。しかし、その隣接地である第1・2トレンチでは関連する遺構・遺物が全く認められず、また、隣接する谷部から、同時期の遺物が出土していない点から、奈良時代に限定して解釈することについては、再考する必要がある。

今回の調査では以上の成果を得ることができたが、周辺域での歴史的環境を考える上で、重要



第7図 荒坂遺跡 出土遺物実測図(第2トレンチ土坑S K01出土サヌカイト)

な要素を含んでいると言えよう。

(小池 寛)

第3節 ^{ごけどおり}御毛通遺跡

1. 調査経過

御毛通遺跡は、京田辺市と八幡市との市境にまたがって分布しており、遺物の散布地として周知されているが、これまでに発掘調査が実施されたことがなく、その性格については不明であった。調査地は丘陵裾に近接する谷部の水田面に位置している。今回の調査地の西側に広がる丘陵の東側斜面には、荒坂A支群が分布することから、それに関連する遺構・遺物の発見が期待された。また、丘陵裾からやや離れた平坦地では、横穴を営んだ人々の生活関連遺構が発見できる可能性も認められた。そのため、この遺跡の性格を知るために、試掘トレンチを設定して調査に着手した。調査の結果、後述のように顕著な遺構は確認できなかった。

調査地点は、京田辺市大字松井小字梅谷に位置する。現地調査は、調査第2課課長補佐兼調査第3係長奥村清一郎、第2係調査員中川和哉が担当し、調査期間は平成14年4月10日～5月10日までを要した。試掘調査面積は約400㎡を測る。

2. 調査の概要

発掘調査は、横穴の墓道端が検出できる可能性がある丘陵裾部に沿って、長さ約80m、幅4mのトレンチを設定し、その中央部に長さ20m、幅4mのトレンチを「T」字形に設定した。

調査の結果、地表下20cmまでが耕作土、その下には部分的に床土が認められたが、それ以下の土層はシルト、砂、礫がラミナ状の堆積で、これらは河川内で堆積した土層と判断された。湧水のため、地表下1.5～2 mまでしか面的には調査できなかったが、この掘削深度内では遺物・遺構ともに全く認められなかった。なお、部分的に地表下4 mまで重機により掘削したが、安定した生活面は認められなかった。また、横穴が見つかる可能性のある丘陵裾部についても、丘陵裾が急激に旧谷部に落ち込むためか、調査区内の掘削深度内では、横穴が造れるほどに安定したベース面を確認することさえできなかった。

数点の出土遺物は、全て表土層、床土層からの出土であり、その下位の土層より遺物は全く出土しておらず、水性堆積土の堆積年代を推測することはできなかった。出土遺物には、須恵器片、染付片などがあるが、須恵器片は著しく磨滅しており、原位置から遠く離れてもたらされたと考えられる。すなわち、調査地の現地形が安定した時期を染付の年代観が示しているものと想定できる。

(中川和哉)

第4節 女谷・荒坂横穴群(女谷B支群)

調査経過と概要

女谷・荒坂横穴群の女谷B支群の調査は、第二京阪道路(一般国道1号)の建設に伴い、平成11年度から実施している。平成11・12年度には、女谷・荒坂横穴群の中央部における横穴の有無とその範囲を確認することを目的として試掘調査を実施し、平成12・13年度には、隣接する荒坂B・C支群を含めて、総計45基の横穴を調査した。今回の女谷B支群の調査は、平成12年度の調査地の北西部に位置し、女谷B支群の4基の横穴と女谷C支群の1～4号横穴の墓道および女谷A支群の横穴の墓道端2基を調査し、あわせて墓地内の通路を確認した。

調査地は、八幡市大字内里小字女谷に所在し、現地調査は、調査第2課課長補佐兼調査第3係長奥村清一郎、主任調査員岩松保、調査員中村周平が担当し、調査期間は平成14年4月10日～6月27日までを要した。調査面積は約700m²である。

なお、本調査の詳細については、本報告書第2章を参照されたい。

(岩松 保)

第5節 女谷・荒坂横穴群(荒坂A・B支群)

1. 調査経過

女谷・荒坂横穴群が所在する南山城地域には、舌状に延びる丘陵の裾部に横穴が数多く分布している。平成11～13年度には、道路建設予定地内の試掘調査と発掘調査を実施し、従来の女谷横穴群と荒坂横穴群との間で、総計45基の横穴を調査した。

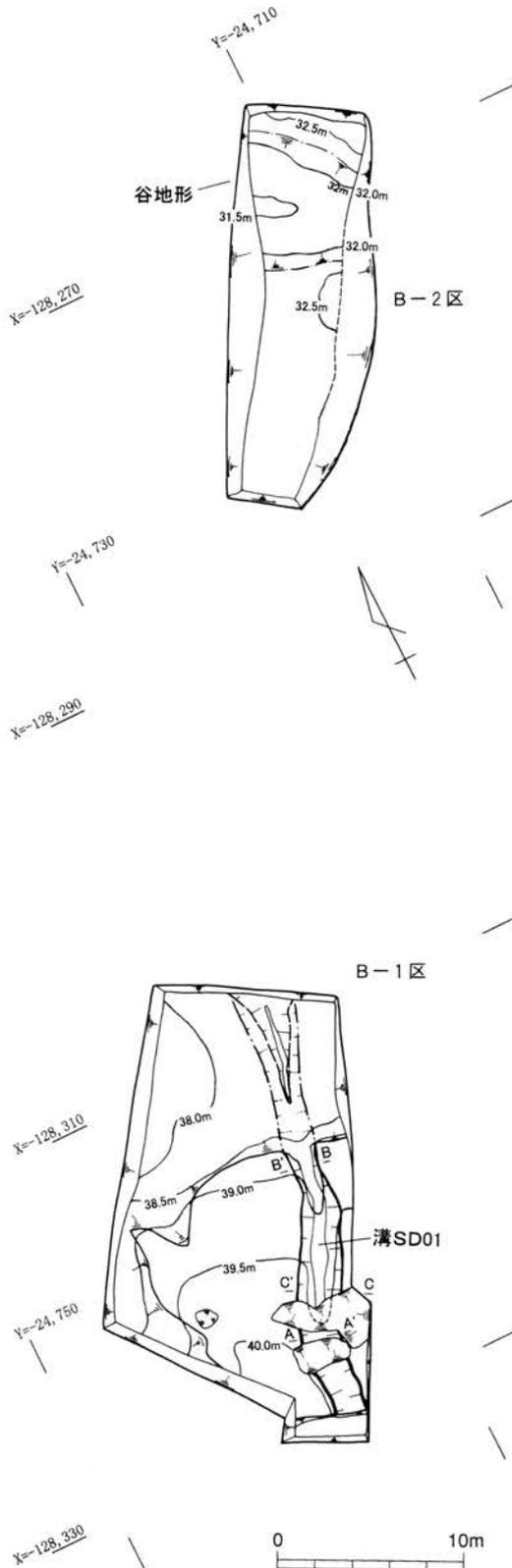
平成14年度における女谷・荒坂横穴群の荒坂地区の調査は、荒坂A支群(従来の遺跡地図所載の荒坂横穴群)と荒坂B支群の2か所で調査を行った。A支群では、横穴が分布する南端部付近

の丘陵斜面1か所で試掘調査を実施した結果、古墳時代後期の横穴2基と近・現代の所産と推測される導水施設5基を検出し引き続いてこれらの遺構を完掘した。B支群の調査は、B支群の背後の丘陵上で2か所の試掘調査を実施して、古墳や横穴、そのほかの遺構の確認に努めた。

調査地は、八幡市大字美濃山小字荒坂・御毛通に所在し、調査第2課課長補佐兼調査第3係長奥村清一郎、第2係専門調査員黒坪一樹、第1係調査員村田和弘が現地調査を担当した。

A支群における調査地が約680㎡で、平成14年4月15日～6月27日までを要した。B支群内の調査地は面積約360㎡を測り、平成14年4月25日～5月21日までを要した。

(村田和弘)



第8図 荒坂B支群 調査トレンチ配置図

2. 調査概要

(1) 荒坂A支群

今回の調査は、荒坂A支群の南端部近くでまず試掘調査を行い、試掘調査で確認した2基の横穴と横穴状の導水施設5基の調査を行った。

調査地内では、西側に入り込む谷地形を確認した。この谷の北・南側斜面において、横穴および導水施設を確認した。谷地形の北側斜面では、横穴2基(23・24号横穴)と横穴状の導水施設3基(1～3)があり、南側斜面では横穴状の導水施設2基(4・5)を検出した。

本調査の内容については、本報告書第3章を参照されたい。(岩松 保)

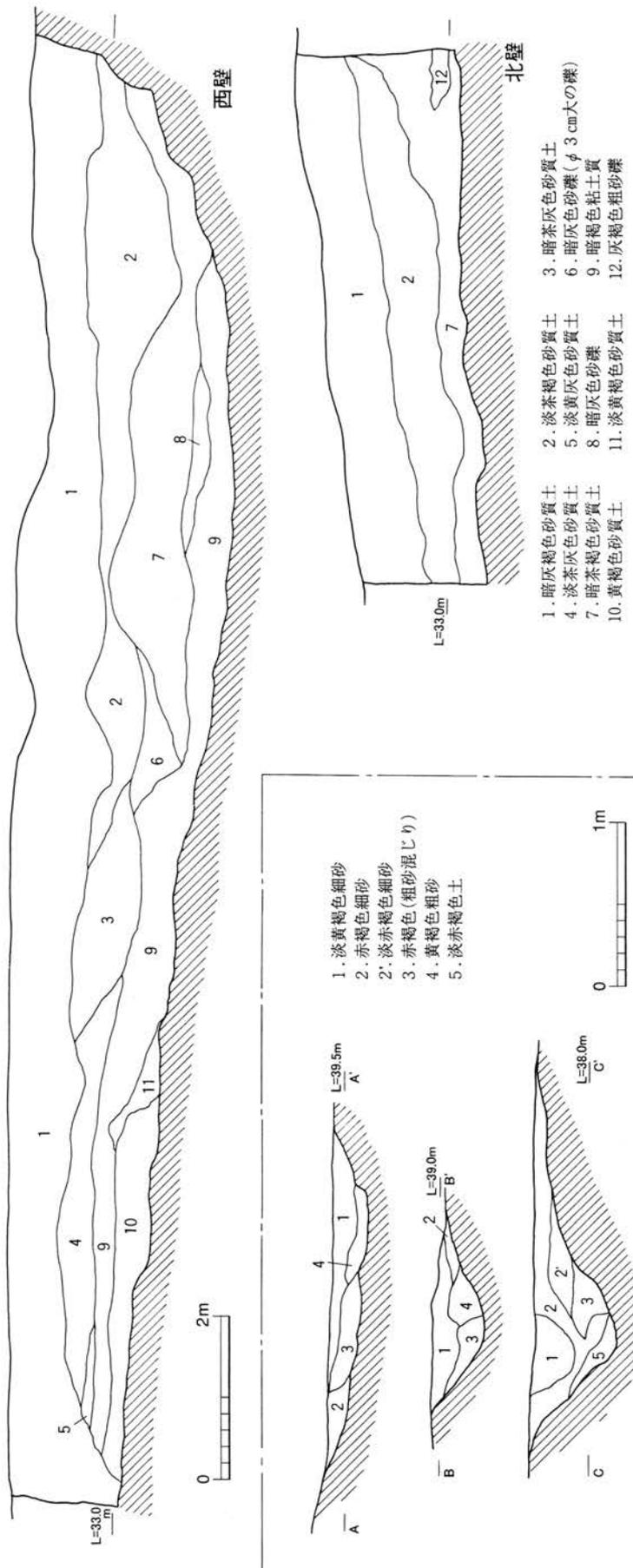
(2) 荒坂B支群

荒坂B支群の試掘地点は、横穴が分布する丘陵斜面の背後に位置する丘陵上である。平成13年度に京都府教育委員会がこの丘陵上で試掘調査を実施した。この結果、古墳状隆起と思われる高まりとそれに隣接して埴輪片を含む溝を確認し、丘陵上に古墳が存在する可能性が指摘された。そのため、今回は、この試掘トレンチを拡張し、古墳の有無を確認することを目的とし、あわせて、丘陵

上に認められる谷地形内に、横穴が造られていないかどうかを確認した。

丘陵頂部で2か所のトレンチを設定し、南側のトレンチをB-1区、北側のトレンチをB-2区とした(第8図)。B-1区は、平成13年度に京都府教育委員会が試掘調査を実施し、埴輪片を含む溝を確認したトレンチを拡張したものである。今回の調査により、この溝(SD01)は埴輪片を含むものの瓦器椀片も包含することが判明した。溝はほぼ南北方向に走り、瓦器椀の年代観より、13世紀末~14世紀にかけての溝と判明した。溝以外には、顕著な遺構は確認できず、試掘調査時に古墳状の隆起と思われた高まりは、竹林の造成に伴う盛土と判断される。

B-2区では、8×20mのトレンチを谷部を横断するように設定し、幅7.5m、地表下最大で3mの谷地形を検出した。狭い範囲の調査であるが、土色・土質の違いも認められないことに加え、谷の規模も小さく、



第9図 荒坂B支群 土層図(B-1溝SD01、B-2区西・北壁)

遺物も全く認められないことから、この谷内には、横穴は存在しないものと判断した。

(黒坪一樹)

3. まとめ

荒坂A支群では、横穴2基と導水施設5基を検出した。今回の調査地はA支群の範囲の南端付近に位置し、過去の調査ではこれより南側で横穴を確認していない。そのため、今回調査した地点がA支群の南端である可能性が高い。

横穴状の導水施設については、近・現代に造られた導水施設であると判断した。しかしながら、北側斜面の導水施設に関しては、開口方向が同一方向であることや形状・規模が横穴と似ていること、さらに埋土から横穴と同時期と考えられる須恵器の小片が出土していることから、横穴を後世に導水施設に改変した可能性も考えられる。

荒坂B支群では、丘陵頂部で2か所のトレンチを設定し調査を行ったが、中世の溝のみで古墳や横穴が存在する兆候はまったく認められなかった。とは言っても、その溝内より埴輪片が出土しているため、横穴を造る際に古墳が破壊されたか、後世に削平された可能性は否定できない。

この溝を北に延長すると、荒坂B支群とC支群を隔てる谷部へ連なる。荒坂B・C支群の調査時には、この谷部の奥は、溝状となって、丘陵斜面を真っ直ぐに上がってのびていくことを認めており、今回のB-2区の溝S D01は、おそらくその谷奥にあたるものと思われる。

(岩松・黒坪・村田)

第5章 まとめ

第1節 女谷B支群18号横穴出土の胡籙金具

1. はじめに

今回報告する胡籙金具は女谷B支群18号横穴より出土したもので、金銅製の带状金具1点および鉄製带状金具1点が、須恵器や鉄鏃、不明鉄製品とともに玄室内より見つかった。以下、胡籙金具に関して詳しく見ていくことにしたい。

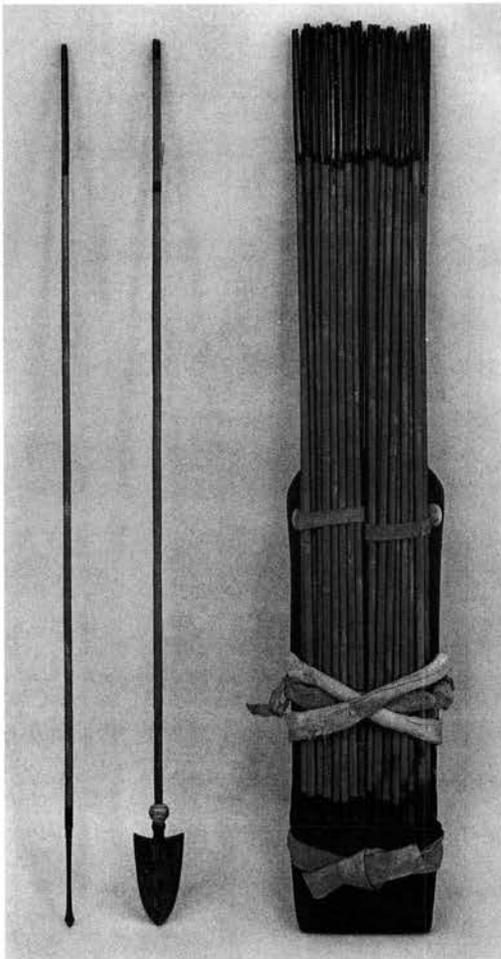
2. 胡籙の出土状況

胡籙金具と思われる出土品は、女谷B支群18号横穴の玄室内より、鉄鏃6本分(うち長頸式鉄鏃5本、平根式鉄鏃1本)とはほぼ平行な形で出土した。金銅製金具の一部と鉄製带状金具は近・現代の攪乱土坑内からも出土しており、当時の詳しい埋納状況は不明である。また、すぐ横から須恵器、不明鉄製品、耳環が出土している。人骨やその他のほかの装飾品、甲冑、馬具などは出土していない。金銅製金具は3/4辺りの所で2つに割れており、鉄製金具の方は全体を5つに分ける形で破損して出土した。

3. 胡籙の形状

金銅製带状金具と鉄製带状金具各1点がある。金銅製带状金具は全長35.9cm(29cm+6.9cm)、幅4.1cm、厚さの平均は0.2~0.25cmである。表面には銀板を巻いた鉄鍔を2列に打ち込んでおり、その鉄鍔の両側に列点波状文があり、両端にそれぞれ平行線文、中央に列点平行文をもつ。鍔と鍔の間は各1cm、上端から最初の平行線文までは0.2cm、上端から波状文上方までは0.5cm、そこから1列目の鍔までは約0.2cm、鍔から平行線文までは約0.2cmある。鍔から中央の列点平行文までは平均2cmを数える。この文様をちょうど中央の列点平行文上で反対側に折り返したような形になっている。中央の平行文は円形であるが、鍔の両側に走る平行線文は、幅0.07~0.1cm程度の二等辺三角形を横向にした形をしている。表面には金板が貼られているが、所々剥離しており、裏面には、漆を塗ったと思われる布を2~3枚貼った繊維痕がみられ、一部に木肌が付着している。繊維と木質の材質は不明である。鍔の大きさは全て同じであり、横一列に平行に打たれたものが2段になっていて、小さいものと大きいものが混じっているということはない。鍔頭は0.4cm、高さ0.2cm、鍔針を刺した金板の厚みは平均0.1cmである。

一方、鉄製带状金具の方は残存長28cm、幅2.1cm、厚さが鍔針状で0.7cm、平面部分で0.3cmである。鍔は1列に約3cm間隔で打ち込んでいる。鍔の中心から端までは1cmで、鍔頭の幅は1.5cm、鍔針の幅は1.2cmで両面に繊維痕があり、裏面には少なくとも2枚の布を重ねてあった。



第10図 奈良時代の胡籙(正倉院御物)
 (『正倉院寶物』4 中倉I 正倉院事務所編
 毎日新聞社刊 1994)

繊維の材質は不明であるが、金銅製带状金具と同じ
 ものであると考えられる。表面に金板などの付着は
 肉眼では確認できなかった。

4. 胡籙金具の成立と分化の流れ

胡籙とは、歩兵が腰に装着する矢筒のことである。^(注8)
 日本の古墳時代の盛矢具は、矢筒式の鞞(ユキ)と方
 立式の胡籙(矢立式：コロク)の二種に大別できる。
 矢筒式は鏃を上に向けて矢の大部分をその器具の中
 に収納したもので、方立式は鏃を下に向け、矢の一
 部だけを収納し、末永雅雄氏によれば、“その古い
 姿には大陸的な要素を認めざるを得ない”ものであ
 るという。胡籙は織物に漆を塗って作ったものが多
 く、矢羽を上にして矢を収納するのが特徴である。
 よく知られているのは正倉院御物のものであり、現
 存しているのは、葛胡と呼ばれる縦長で筒状のもの
 (第10図)と、平胡と呼ばれる幅広で全体的に平らな
 ものの2種類がある。

これら盛矢具の源流は中国にあると考えられてい
 る。矢筒式の盛矢具は戦国時代に起源をもち、北朝
 鮮平安南道楽浪漢墓の石巖里219号墳や、中国新疆
 ウィグル自治区尼雅の藤店1号墳で出土例がみられる。
 鏃の収納方法は日本の鞞と共通している
 が、壺胡籙とは異なる。このタイプは朝鮮半島や日本ではみられないことから、移入されなかつ
 たと考えられる。

一方、矢立式は春秋後期に中国湖北省江陵沙塚1号墳で出土したのを初めとし、殷代の箛、漢
 代の籙、蘭(一部籙丸を含む)などが知られているが、こうした盛矢具の中でも籙は“胡籙”とも
 いい、日本の正倉院の胡籙に近い形をしている。漢代、五胡十六国の混乱期を経て、中国遼寧省
 袁台子石槨墓壁画や4世紀中国新疆維吾爾自治区アスターナ第六区第3号墓、北朝の陶備などに
 みられるタイプである。

中国において“胡禄”という言葉が使われ始めるのは秦漢代よりもずっと後の唐代になってか
 らであるが、これは唐が西域との交渉において、当時、西域で流行していた箭筒が唐に伝わった
 ものであると考えられているためである。形状はやや裾広がり長筒形で、頂部に半筒形の蓋が
 付くもので、李賢唐墓や李重潤唐墓の壁画でその姿をみることができる。こちらも、どちらかと
 いうと正倉院御物のものに近い形状をしている。しかしながら、日本における胡籙は、古墳時代
 においては、正倉院御物とは形状が少し異なっており、腰に金属のベルト状のものを下げ、その



第11図 高句麗古墳にみられる盛矢具(安岳第3号墳大行列図 部分拡大図)
 (『高句麗古墳壁画』朝鮮画報社出版部編 朝鮮画報社刊 1985)

先に植物の繊維で編んだポシエットのようなものを提げるタイプのものである。一方、正倉院御物は、ほとんどすべてが繊維質でできており、腰に提げるベルトにも金属を使用しない。そのため古墳時代の盛矢具は、こうした中国の盛矢具とも直接は結びつかない。形状的によく似通っているのはむしろ朝鮮半島出土のものである。

おそらくは中国漢代における矢立式の盛矢具のどれかが、3世紀末の夫餘族の南下とともに高句麗へ移入されて、北朝鮮平安南道安岳3号墳(第11図;左腰着装)や北朝鮮平安南道舞踏塚・中国吉林省長川1号墳(右腰着装のA型盛矢具)^(注9)、北朝鮮平安南道薬水里古墳・同双楹塚・同徳與里(方立式、右腰)、中国吉林省麻線溝1号墳(V2類金具)にみられるように分化を遂げ、高句麗の南遷に従って伽耶地域へ広まったものと考えられる。4世紀に金海周辺で馬具が出現するようになると、それに伴って、百済にも初期馬具の拡散がみられるようになった時期である。百済でも伽耶地域と同様、4世紀末から韓国忠清南道天安城南龍院里遺跡出土例のように矢立式盛矢具の出土例が確認され始める。ただ盛矢具に関しては百済での出土時期の方が伽耶より早く、申敬澈氏の北方飛來說にはあてはまらない。百済では韓国忠清南道龍院里遺跡を始めとして、同論山茅村里、忠清北道清州新鳳洞古墳、全羅南道羅州大安里9号墳己棺、全羅北道益山笠店里古墳、忠清南道公州宋山里1号墳などから矢立式の盛矢具、つまり日本の古墳時代の胡録とほぼ同じものが出土している。

なお、忠清南道華城馬霞里木槨墓からも盛矢具の一部が出土していると報告されているが、①湾曲度が小さい点、②鋌の長さが1.5～2cm前後と過度に長い、③鉄鏃が共伴しない、④残存片

の長さが60cmを超える、という点から、李尚律氏のように盛矢具とするには問題があるのではないか、むしろ盛矢具というよりは、鞍の外輪に挿入する木板の下縁外側についた内輪金具である可能性が高い。という意見もあり、盛矢具かどうかははっきりしていない。

このうち、おそらくは韓国慶尚南道東萊福泉洞22号墳(A型-V a類、5世紀前葉)に代表されるような形のものが日本へと伝播し、福岡県の月ノ岡古墳(A型-V a類、5世紀中葉)のタイプが、A型-V b類、5世紀後葉へと変化発展する一方、B型、E型のようなタイプがC型、D型へと変化をし、6世紀前半には、B型以下の形式が盛行し、6世紀後半に衰退したものと考えられる。一方、A型の盛矢具は5世紀後半に流行したが、6世紀には衰退していった。

5. 日本の盛矢具

日本での先行研究には、末永雅雄氏による研究を始めとして、千家加比古氏、北郷泰道氏、田中新史氏による分類研究、八賀晋氏による帯状金具の分類研究、早乙女雅博氏による分類研究などがある。

こうした先行研究を踏まえると、日本の古墳時代の盛矢具の姿は次のようなものになる。

早乙女分類によるA～E型の盛矢具では、中に納める矢鏃の数は、平均して13～50本くらいであり、30本前後のものが多い。50本を超えるのは奈良時代からである。大別すると、千葉県山王山古墳出土例(20数本、幅30cm以上)のような平胡籙系統のものと、岡山県八幡大塚2号墳出土例(約30本)のような壺胡籙系統のものに分けることができる。出土位置は、遺骸の足元の壁に近い所から発見される例が多く見受けられる。副葬品として置かれる位置もあらかじめ決まっていたようである。例えば、木棺直葬の場合、土壇のテラス面に置かれたことが分かっている。こうした例は、岡山県法連40号墳、浅間山1号墳で見受けられる。日本とほぼ形状を同じくする朝鮮半島のものと比較するならば、中に納められる矢鏃は20～30本が普通であり、数本と少ない場合もある。また、副葬位置に関しては特に決まりがなく、石室、あるいは石槨内の頭、腰、足元より出土している。

6. 女谷B支群18号横穴出土例との比較

出土状況については先に述べたが、表面には銀鋌を2列に打ち込んでおり、銀鋌の両側に列点波状文が、両端にそれぞれ平行線文、中央に列点平行文をもつ、金銅製帯状金具と鉄製帯状金具の形状から、奈良県二子山南古墳、長野県畦地1号墳、奈良県ミノヤマ12号墳、兵庫県西宮山古墳、愛媛県経ヶ岡古墳、千葉県富士見塚古墳、奈良県市尾墓山古墳、岡山県四ツ塚1号墳、大分県飛山23号横穴墓、岡山県四ツ塚13号墳、大阪府長原七ノ坪古墳、佐賀県龍王崎1号墳、奈良県新沢千塚50号墳、愛知県豊田大塚古墳での出土例の形状と類似しているが、玄室内より、鉄鏃6本分(うち長頸式鉄鏃5本、平根式鉄鏃1本)とほぼ平行な形での出土状況なども考え合わせると、横帯飾金具、千葉県山王山古墳出土例や栃木県星の宮神社古墳に代表される横長帯飾金具か、または底板責金具のいずれかであると考えられる。女谷・荒坂横穴群の造営時期が、6世

紀後半～7世紀中頃であると考えれば、6世紀前葉に盛行した倭を代表する横帯飾金具か、6世紀中葉の短期間に盛行し、大和で集中して出土が多く見られる横長帯飾金具としてその姿を復原できるであろう。また、6世紀後半代には、日本での古墳からのこうした胡籙出土はほとんど見られなくなる。従って、女谷出土の胡籙は、それ以前の6世紀後半以前に製作されたものと考えられる。

謝辞：この稿をまとめるにあたり、特に、次の方にお世話になりました。ここに感謝の辞いたします。西谷正教授(九州大学名誉教授)、田中俊明助教授(滋賀県立大学)、成正鏞助教授(京都大学研究員)、吉井秀夫助教授(京都大学)、高正龍助教授(立命館大学)、太田絵美氏(龍谷大学院生)

(有澤明子)

第2節 横穴の築造順位

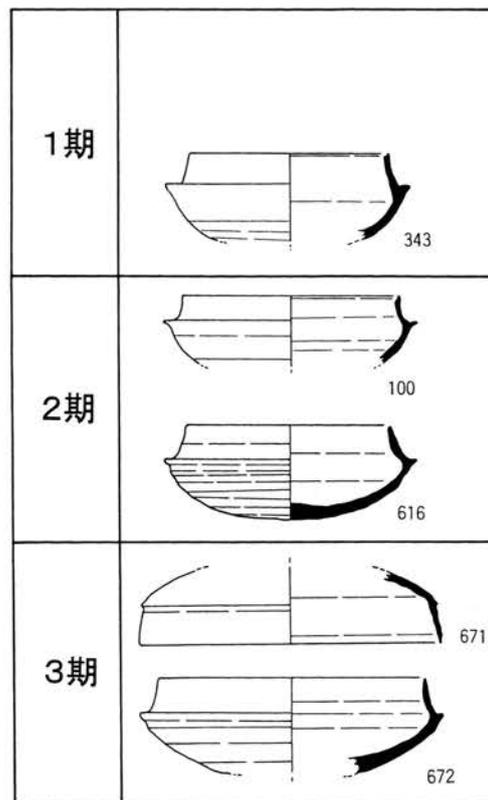
1. 時期区分

女谷・荒坂横穴群の横穴の分析を行うために、まず、田辺編年(田辺1966)と中村編年(中村1984)を参考に、女谷・荒坂横穴群から出土した須恵器・杯身で時期区分を行い、時間軸を設定したい(第12・13図)。

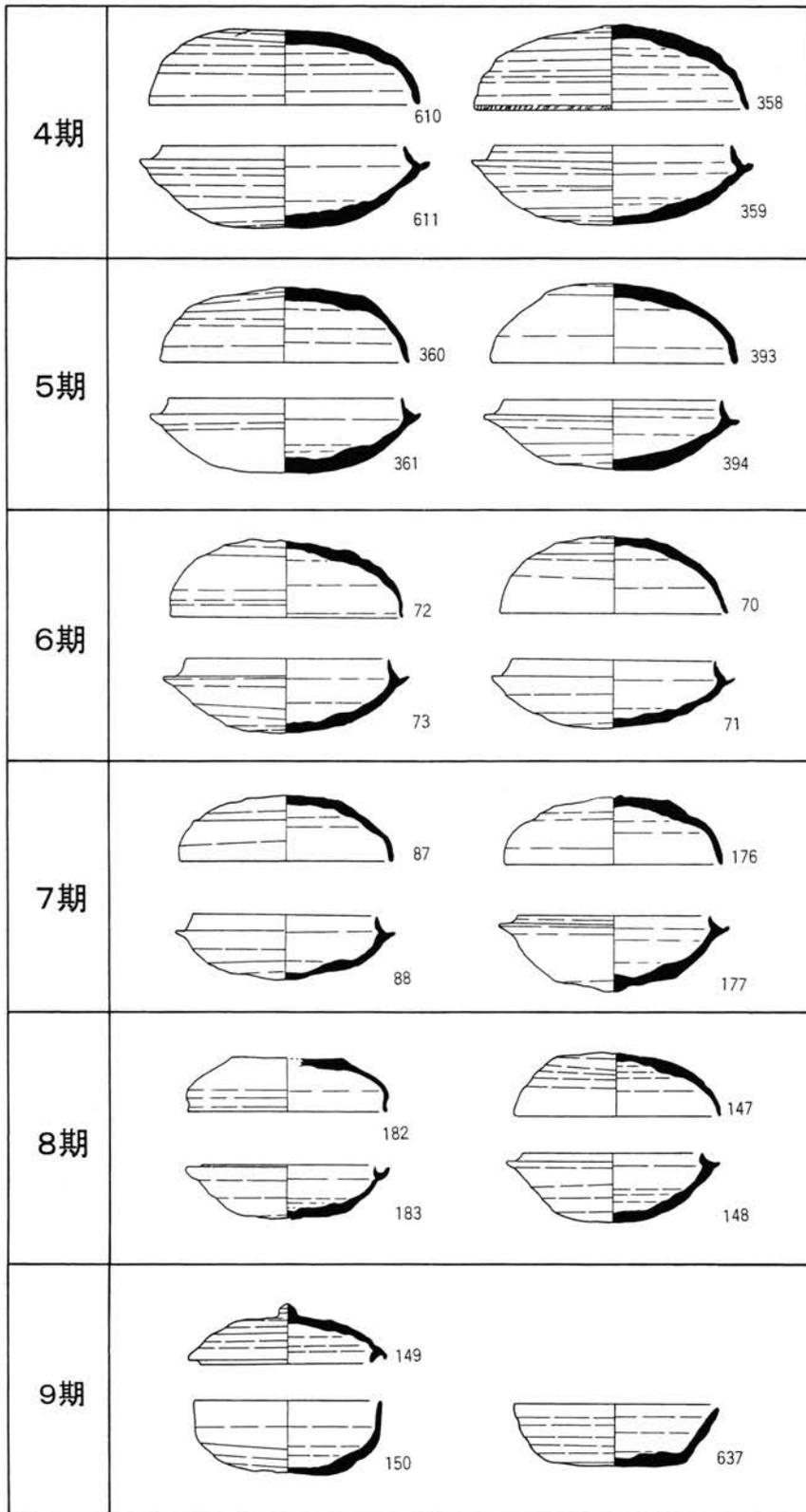
1期 TK47、I型式5段階に相当する。この段階の土器を出土する横穴は認められないが、女谷B支群の通路内より散発的にこの段階の遺物の出土を見る。杯身(343)は、口縁端部内面に段が見られる点や、口径が小さい点などから、中村編年のI型式5段階に相当するものと判断する。また、甕か壺かの区別をつけがたいが、報告番号349～352の土器を甕とした場合、球形の体部に比較的短い頸部が付き、体部が全体に占めるプロポーションが大きい点、頸部径が大きい点から、I型式の段階に収まるものと思われる。

2期 MT15～TK10、II型式1・2段階に相当する。女谷B支群9号横穴の墓道内埋土の杯身(100)および荒坂B支群17号横穴の玄室から杯身(616)が出土している。立ち上がりは、前段階に比べて内傾化している。杯身(100)は、口縁端部内面に段を有するのに対して、杯身(616)は、口縁端部内面に段を有さない点で、杯身(100)よりも後出する型式である。

3期 TK10、II型式3段階に相当する大形の器形である。杯蓋は天井部と体部の間に沈線がめぐり、口縁端部内面は強くナデられて、かつて段が付設されていたなごりが認められる。杯身は上方に長い立ち上が



第12図 杯身・杯蓋の時期分類I



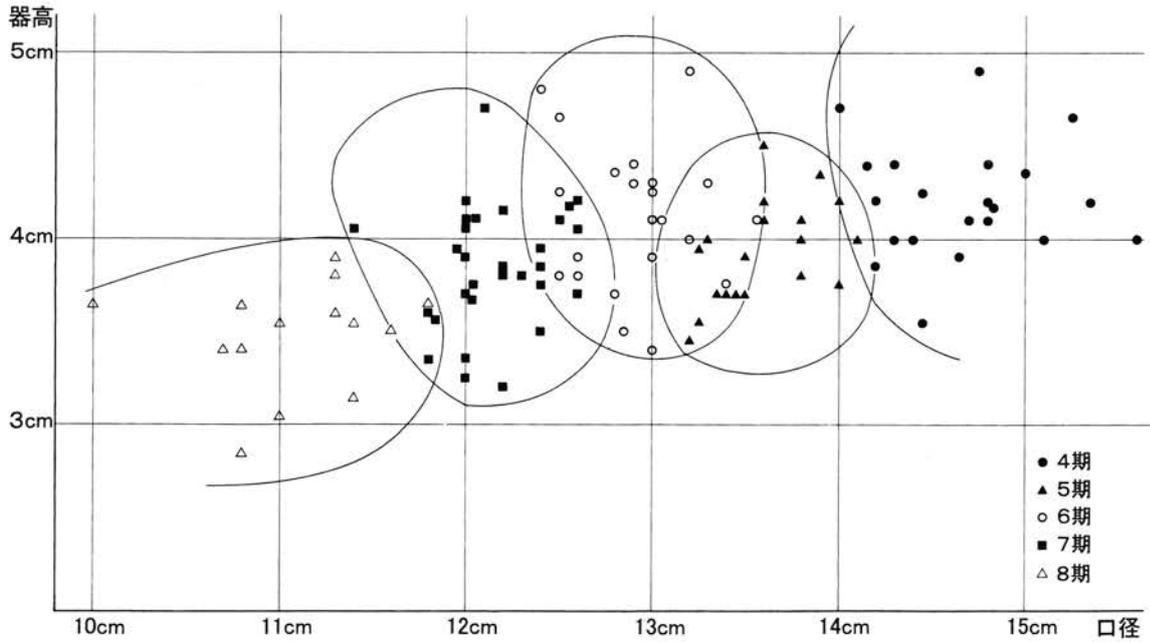
第13図 杯身・杯蓋の時期分類Ⅱ

りが付されている。この時期の土器は、荒坂B支群1号横穴の近辺で出土しているだけである。

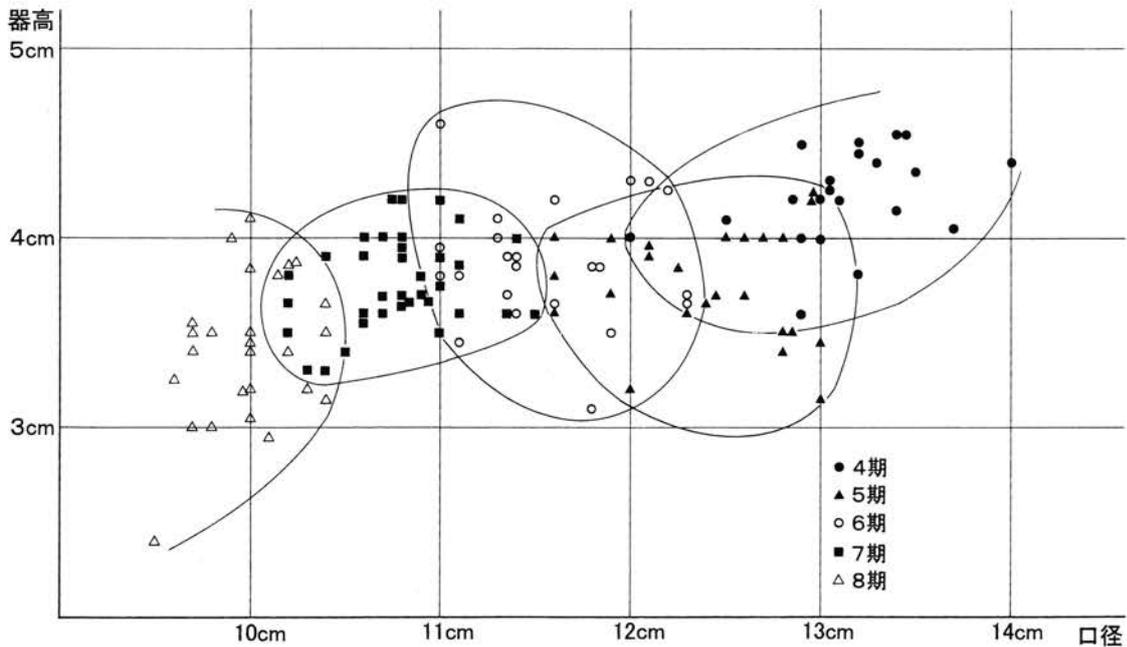
4期 TK43、Ⅱ-4段階に相当し、杯身・杯蓋の口縁端部内面に稜線が認められず、比較的口径が大きく、器高も高く、やや深い印象を与えるものである。杯身で口径13cm、杯蓋では口径14cmをこえ、ともに器高は3.5cmをこえ、大半のものが4cm以上である。この型式以降の土器が、荒坂B支群の横穴で、玄室内から出土する。

5期 TK209でも古い様相を示すもので、Ⅱ型式4段階から5段階の過渡的なものとする。Ⅳ期に比べて、杯身・杯蓋の口径はやや小さくなり、それぞれ、11.5~13.0cm、13.5cm前後である。天井部・底部もやや丸く作られている。

6期 TK209でも新しい様相を示すもので、Ⅱ型式5段階に相当し、杯蓋天井部は丸く作られており、杯身底部は丸く作られているものと台形状を呈するものがある。口径は前段階よりも小さくなり、杯蓋が12.5~13.5cm、杯身が11~12cm程度となる。この段階以降の土器が、荒坂



第14図 杯蓋 口径/器高比率



第15図 杯身 口径/器高比率

B支群以外のほかの支群から出土するようになる。

7期 TK217でも古い様相を示し、Ⅱ型式5段階から6段階への過渡的な型式とする。杯身・杯蓋の口径は10.0~11.5cm、12cm前後で、杯身には短い立ち上がりが付く。

8期 TK217、Ⅱ型式6段階に相当し、杯身・杯蓋の小形化が最も進み、それぞれの口径は10.5cm以下、12cm以下となる。杯身の立ち上がりはわずかである。天井部は丸く仕上げられている。ほとんどのものがヘラオコシ後、未調整である。

9期 TK217のうち、杯と蓋の形態が逆転したもので、Ⅲ型式の1・2段階に相当する。蓋のかえりは、口縁端部よりも下方にのびている点より、Ⅲ型式1段階と判断される。杯身も杯蓋

と同時期と判断されるが、杯身(637)のみ、やや斜めに直線的にのびる口縁を有しており、Ⅲ型式2ないしは3段階と言えよう。

第14・15図は、杯身・杯蓋の口径/器高の相関図である。杯蓋は杯身と比べて、まとまりがよく、重複もわずかである。杯身は各期で大きな重複が認められるが、時期を経るに従って、口径/器高の分布が図の左側に動いていく傾向が認められる。巨視的に見れば、口径/器高の分布に杯身の時期が対応するが、ミクロに見た場合、杯蓋ほどにはストレートに反映していない。これは、杯身には受け部や立ち上がりなどがあり、杯蓋よりも器形が複雑なために、口径/器高以外のさまざまな所に型式上の変化が分散して表象されるからであろう。

2. 小群の構成

それぞれの支群を構成する小群を見ておきたい。ここでいう小群とは、支群の下位レベルにおけるグループで、互いに有機的な関係をもって造られている横穴群のことである。遺構平面図上で、横穴主軸の方向が一致して揃っているか、それぞれの横穴が近接して造られているかなどに着目して群別したい。女谷・荒坂横穴群の各支群では、小群は1～3基程度の横穴で構成されている。

まず、女谷B支群18基の横穴は、11の小群に分けられる。1・16横穴、2号横穴、3号横穴、4～6号横穴、7号横穴、8・9号横穴、10・11号横穴、12・13号横穴、14号横穴、15号横穴、17・18号横穴である。1・16～18号横穴は近接して主軸を揃えて分布しており、一つの小群のようにまとまっているが、横穴の構築順位に16号横穴→1号横穴、17号横穴→18号横穴という二系列が認められるので、それぞれ別個の小群と捉えるのが妥当であると考えられる。

女谷C支群の8基の横穴では、大きく、1～4号横穴の西群と5～8号横穴の東群に分かれる。西群の2・4号横穴では、ヘルメット形をした特徴的な土師器の杯が出土している点から、隣り合う横穴どうしではなく、一つおきに造られた1・3号横穴、2・4号横穴が小群としてまとまるものと判断される。また、これらの横穴の床面の高さを見ると、2号横穴→4号横穴→3号横穴→1号横穴の順に高くなっており、隣接していない2・4号横穴は西群の中でも一段と低い位置に造られていることから、1・3号横穴、2・4号横穴の関連性が強いことが窺われる。東群は、横穴の主軸と配置より、5・6号横穴、7号横穴、8号横穴に分けられ、女谷C支群全体としては5小群に分けられる。

女谷A支群の2基の横穴は、墓道端だけの検出であるので、詳細は不明である。やや間隔を空けているが、ここでは、2基で一小群をなすものと考えておく。

荒坂B支群の20基の横穴は、谷奥から、1号横穴、2・3号横穴、4号横穴、5・6号横穴がそれぞれ小群としてまとまっている。4号横穴は2・3号横穴と軸を揃えて等間隔にあるが、玄室の造られている高さに約3mの高低差が認められるため、別個の小群と判断される。7～9号横穴は主軸を揃えて近接して造られているが、8・9号横穴は、7号横穴よりも3～4m高い位置に造られた小振りの横穴であるので、7号横穴と別個の小群と考える。これより北側は、10・

11号横穴、12～14号横穴、15～17号横穴が、ほぼ主軸を揃えて均等な間隔で造られており、それぞれ小群と認定できる。18号横穴は、19・20号横穴と主軸を異にしており、玄室が造られている位置もやや奥まった位置にあることから、別個の小群と判断される。以上のように、荒坂B支群の横穴は、11小群に分類可能である。

荒坂C支群は、2基の横穴で構成されている。それぞれの横穴は近接して造られているが、その主軸を異にしている。墓道端では約7mの間隔で離れているのに対して、玄室部分はほぼ接した位置にあり、平面的を見ると「ハ」の字形をなしている。そのため、この2基は、それぞれが1基ずつで別の小群を形成していると判断される。

荒坂A支群の2基の横穴は、23・24号横穴が主軸を揃えて隣接して造られているため、一つの小群と認定できる。

以上のように、女谷・荒坂横穴群の6支群52基の横穴は、31小群に分けることができる。

3. 小群と横穴の築造順位

第16図は、1. において設定した時期区分に従って、各横穴からどの段階の杯身・杯蓋が出土しているかを示したものである。横穴のグルーピングは、2. で分けた小群ごとにまとめてある。

それぞれの小群の中の横穴の築造順位を見ると、各横穴は同時に造られているのではなく、やや時期を異にして継時的に造られている。例えば、女谷B支群4～6号横穴では、4号横穴→5・6号横穴であり、12・13号横穴では、12号横穴→13号横穴の順に造られている。このように、ある一つの小群内の横穴は、順次、新たに横穴を造っていったその集積と捉えることができる。新たな横穴を構築すると、それまで使用していた横穴は速やかにその使用が停止されたために、そのようになるのであろう。とは言っても、厳密には土器編年の精度の問題もあり、考古学的にはその使用期間に時間的な重複が認められる場合が多い。

横穴が主軸を揃えて、近接して、等間隔に造られるためには、最初の段階で、数基の横穴を順次造っていくための範囲を分割し、それらを別々の集団が占有した上で、その境界を隣接して占有する集団と相互に承認し合う必要がある。そうすることで、横穴群内の各所で一斉に横穴を造り始めたとしても、最終的に数基ずつの横穴が主軸を揃えて等間隔に並ぶことが可能となる。複数の集団が、随時的に、乱雑に、計画無く横穴を造ったとしたならば、小群のように、ある単位のまとまりは認められないであろう。このように考えると、小群のまとまりは、ある一つの集団が計画的に、そして継時的に横穴を造営していった累積と判断されるのである。そして、数多くのそういった集団が参画して、女谷・荒坂の横穴墓地が経営されていたために、横穴配置図で見られるような、小群を単位としたまとまりが認められるのであろう。そういった集団は、血縁集団—当時の横穴式石室墳を主体的に造営した家父長的な家族と考えられ、ある家族が墓所を継時的に造営したという時間的な内容が空間的に記録されている単位が小群と判断されるのである。そして、継時的に累積した横穴群＝小群を造営したのは、家父長的家族が時間的に連続したところのもの、すなわち、一つの家系と言えよう。

地区	支群	小群	横穴	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期
女 谷 地	A	1	9									
			10									
	1	2	1									
			16									
	B	2	17									
			18									
	3	4	2									
			3									
	5	6	4									
			5									
	7	8	6									
			7									
	9	10	8									
			9									
	11	12	10									
			11									
	13	14	9									
			12									
	15	16	10									
			14									
17	18	11										
		15										
C	1	1										
		3										
2	3	2										
		4										
4	5	5										
		6										
5	6	7										
		8										
路面												
荒 坂 地 区	A	1	23									
			24									
	1	2	1									
			2									
	B	3	3									
			4									
	4	5	5									
			6									
	6	7	7									
			8									
	8	9	9									
			10									
	11	12	11									
			12									
	13	14	13									
			14									
	15	16	15									
			16									
	17	18	17									
			18									
19	20	19										
		20										
C	1	1										
		2										
その他												

第16図 横穴出土の土器(時期別)

各支群の造墓活動の時期に目を転じると、4期の段階に荒坂B支群でほかの支群の横穴に先行して造墓されている。そして、荒坂B支群南半では、6期で横穴の造営がほぼ終焉を迎え、代わって、女谷地区の各支群、荒坂A・C支群で横穴の造営が新たに開始される。これらの横穴は、7・8期にその最盛期を迎え、9期に続くものはわずかである。このように、女谷・荒坂横穴群の各々の支群で横穴が一斉に造られ始めたのではなく、まず、荒坂B支群で時期的に先行して横穴が造られ、その後、全支群の各所で横穴が造られるようになったと言える。

荒坂B支群での造墓が時期的に先行し、ほかの支群ではやや遅れて横穴が造られた理由の一つは、荒坂B支群の位置が横穴を造営するための適地と認識されていたためであろう。言い換えると、ほかの支群の場所は、横穴を造営するのに適した場所とは考えられていなかったためであろう。女谷地区、特にB支群は平野からやや奥まった谷部に位置するため、集落のある平野を望みにくい場所である。荒坂C支群は、荒坂B支群と谷を隔てた対岸にあり、条件的には荒坂B支群とさほど変わらないが、その丘陵斜面が狭いため、多くの横穴を造ることができず、適地と認識されていなかったのであろう。荒坂A支群は丘陵の東側斜面に分布しており、北側に広がる平野を見渡せないという点で墓所として適していなかったのであろう。理由の2として、横穴を造営する家系が増加したことが考えられる。そのため、横穴造営に適していないところであっても、横穴を造らざるを得なかったのであろう。4～6期では荒坂B支群で8小群が造墓しており、6～9期では女谷・荒坂横穴群のすべての支群を合わせると23小群で横穴が造られており、約3倍の数の家族が横穴を造るようになっている。横穴を造る家族がそれだけ多くなっているの、いわば、墓地の需要が増大したために、ある程度不適な地であっても横穴を造らざるを得なかったとも考えられる。

女谷・荒坂横穴群の造墓活動の特徴をまとめると、

- ①荒坂B支群は、4期に始まって6期で終わる
- ②そのほかの支群は、6期以降に造墓が始まる
- ③9期には、ほとんどの横穴が使われなくなる

である。小群を一家族が横穴を継時的に造っていた集積と考え、以上の3点を規準とすると、遺物の出土を見ない横穴の造営時期を推定し、同時期の土器が出土しているために、先後関係の分からない隣り合う横穴の先後関係を復原することが可能である。これを図示すると、第17図となり、それぞれの横穴の築造順位および小群の形成過程が復原できる。

4. 支群と小群の経営母体

女谷・荒坂横穴群の横穴墓地は、各家族が自律的に小規模な造墓を行うことで、結果的に今見るような大規模な墓地となったのではない。横穴一支群は小群というまとまりで構成されている。そして、この小群というまとまりが認められるがゆえに、ある家族が予め数基の横穴を造るために一定の範囲を占有したこと、そして、そういった家族が数多く参画して墓地内の諸所で造墓していたことが想定されるのである。6期の段階に、造墓主体は8家族から23家族に増加し、造墓

地区	支群	小群	横穴	3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期	築造順位		
女 谷 地 区	A	1	9										
			10										
	B	1	1										
			16									16号→1号	
		2	17										
			18										17号→18号
		3	2										
		4	3										
		5	4										
			5										
			6										4号→5号→6号
		6	7										
		7	8										
	9											8号→9号	
	8	10											
		11										10号→11号	
	9	12											
		13										12号→13号	
	10	14											
	11	15											
	C	1	1										
			3									3号→1号	
		2	2										
4											4号→2号		
3		5											
	6										5号→6号		
4	7												
5	8												
路面													
荒 坂 地 区	A	1	23										
			24									23号→24号	
	B	1	1										
			2										
		2	2										
			3										2号→3号
		3	4										
			5										
		4	6										
			7										5号→6号
		6	8										
			9										8号→9号
		7	10										
	11											11号→10号	
	8	12											
		13											
	9	14											
		15											
	10	16											
		17										17号→16号→15号	
	11	18											
		19											
	20											20号→19号	
C	1	1											
		2											
その他													

第17図 横穴の築造順位(復原)

の範囲も広範囲に広がっているため、少なくとも6期の段階には、横穴墓地が極めて計画的に広範囲にわたって造成されたと考えられる。このことを視点を変えて、墓地内通路と横穴築造過程を見ることで検討したい。

女谷・荒坂横穴群では、横穴の前面で通路状の遺構を確認している。女谷A～C支群では、通路は谷底部分が石礫で固く締まって、路面となっている。この路面の下には、幅50cm、深さ20cm程度の溝が24mにわたって検出でき、意図的に埋め戻された暗渠排水溝と考えられる。

荒坂B支群では、1号横穴の前面で通路状遺構を確認しただけで、それ以外は調査地外のために検出できなかった。荒坂C支群では、墓地内通路は1号横穴の墓道端を横切って造られており、横穴を築造し墓道が埋まった後に墓地内通路が整備された状況であった。“墓道端を横切っていた”といっても、次節で見るように、横穴の墓道は初葬直後に直ちに埋め戻されるので、横穴使用停止後に通路が整備されたということにはならない。横穴の使用時(初葬・追葬および儀礼)には、この墓地内通路を利用したと考えるのが自然であり、1号横穴を構築し、その初葬直後に通路が整備されたのであろう。実際、2号横穴の墓道は墓地内通路の直前で終わっているため、2号横穴構築以前には、墓地内通路が整備されていたものと考えられる。

このように、墓地内通路は各支群で認められ、墓域内を葉脈状に配置されたのであろう。このような通路は、女谷・荒坂横穴群の各所で横穴が一斉に造られる段階、すなわち6期の時点で整備されたと考えられる。そのためには、墓域の範囲、すなわち、横穴を造ってもよい場所が決められていることを前提としており、墓地内通路の整備は、大規模に墓域を造成したと表裏一体であったと考えられる。

また、各横穴の墓道の端は、墓地内通路に重複して掘削されるのではなく、わずかな空間を空けて、通路に直交して掘削されている。このような横穴墓道と墓地内通路との関係は、各支群の横穴で共通して認められるものである。この配置関係が認められ、横穴が造られるためには、横穴が造られる以前に墓地内通路が造られている必要がある。こういった点からも、横穴の築造に先行して墓地内通路が整備されたと判断される。

4～6期においては、荒坂B支群南半では8家族が墓所としていた。6期には荒坂B支群での空闲地がなくなり、他所に横穴用地を求めざるを得なくなった。この時期に相前後して、横穴を造る家族が増えたので、荒坂B支群を中心に、その周辺を広範囲に墓域として整備し、それぞれの家族に2～3基の横穴を造れるだけの土地を割り当てたのであろう。

さて、第二京阪道路に係わる一連の調査では、女谷・荒坂横穴群で52基の横穴を調査した。先に見たように、4～6期では8小群で造墓されており、6～9期では23小群で造墓されている。これら以外にも、数多くの横穴が、女谷・荒坂横穴群に分布している。

女谷A支群では、『八幡市遺跡地図』に8基の横穴が登録されているが、今回確認した2基が未登録のものであるのかどうかの判断はつかないが、このほかに、少なくとも6～8基の横穴が存在していることは確かである。

荒坂A支群では、今回の調査以前に、17基の横穴が確認されている。しかし、荒坂B支群20号

横穴から荒坂A支群の23・24号横穴までの範囲に、荒坂B支群と同じ密度で途切れることなく横穴が分布しているとすると、総長600mの間に、100基以上の横穴が造られていることとなる。

このように、今回、女谷・荒坂横穴群で調査した横穴の2倍程度の横穴が、周辺の未調査地域に分布しているとすると、その中には4～6期の横穴も存在している可能性はあるが、6～9期には総数70～80の小群に分かれているものと推定でき、それと同数の家族がこの地に墓所を設けていたこととなる。

近隣の狐谷横穴群では、横穴が11基確認されており、これらが、一つの斜面に並んで造られている。いわば、女谷B支群の南斜面・北斜面や女谷C支群の横穴のあり方に近い形状である。女谷・荒坂横穴群の横穴の数は、少なくとも狐谷横穴群の10倍以上と判断される。

狐谷横穴群の10数基の横穴が群集するというあり方が、1集落の墓地のあり方であるとする、女谷・荒坂横穴群は、複数の集落の墓地のあり方と言えるのではなかろうか。女谷・荒坂横穴群という広い範囲を一気に造成できたのも、複数の集落によって開発がなされたと考えることで、より理解できよう。

違った観点でこのことを検討すると、女谷B支群では、墓地内通路の路面より1期の土器片が出土し、路面下の横穴を構築する以前の包含層中より鉄剣が出土している。また、各支群の横穴埋土や包含層中より埴輪片が出土し、2期の遺物が横穴より散発的に出土する。こういった遺物が出土することから、女谷・荒坂横穴群が造られる以前には、埴輪を樹立した古墳がこの近辺にあり、それを破壊して横穴を造るための墓域が造成された可能性が指摘できる。女谷・荒坂横穴群の近辺には、荒坂古墳や内里池南古墳があり、この地に古墳が造営されていた可能性が十分に^(注10)ある。

このように、古墳を破壊して横穴墓地を造成したとすると、この行為は、一集落の首長の権限を超えていたものと考えられる。『日本書紀』の顕宗天皇二年には、顕宗天皇が父の仇を晴らすために、雄略天皇の陵を壊そうとするのを「而るを忍びて陵墓を壊たば、誰を人主としてか天の靈に奉へまつらむ」と皇太子が諫めて、やめさせている。少なくとも、墓を壊すことは良くないことであり、人の上に立つものが私怨によって行うような行為ではないと認識されているようだ。また、時代はやや下るが、持統七年二月十日「造京司衣縫王等に詔して、掘せる尸を収めしむ」と、京を造る際に発見した人骨を収集させている。『続日本紀』の和銅二年十月十一日には「癸巳。勅造平城京司。若彼墳隴。見発掘者。隨即埋斂。勿使露棄。普加祭醑。以慰幽魂。」と、都城の造営工事の最中に、不時に古墳を暴いた場合には、丁重にまつりごとをするように指示している。これらの記載より、古墳を壊す行為は、少なくとも好んで行われるような行為ではなく、それを成す人々に負の感情を与える行為であった。

以上のように、古墳を破壊することは、一集落の独断で行えることではなく、それを行うにあたっては、周辺集落や地域全体の同意や承認、そして、そういった同意を確認するための慰霊祭祀が執り行われる必要があったであろう。このような慰霊儀礼に際して用いられた土器や、古墳に埋納されていた土器が、女谷・荒坂横穴群から出土するI～III期の土器や埴輪の実態なのであ

ろうか。そして、複数の集落で墓地を造成し、それを共同で利用するという行為は、地域内の複数の集落で古墳の破壊を確認し合うことと表裏一体であったのであろう。

同時期の集落遺跡については、ほとんど分かっていない。集落構造と横穴の群集のあり方との比較は、今後の課題と言わざるを得ない。

第3節 横穴の閉塞と追葬

1. 横穴の閉塞・追葬の方法

横穴は、横穴式石室墳と同じく、何回もの埋葬に用いられるもので、通常、埋葬を行う時以外は、その入り口は石を盛り上げたり、板戸で塞いだりして、閉じられていたと考えられている(白石1975)。南山城地域の横穴においては、八幡市狐谷横穴群の発掘調査で、玄門部の床面に主軸に直交する方向で幅約40cmの溝が掘られている横穴が確認され、板戸をはめ込んで閉塞した痕跡と推定されている(久保田1982・1983)。今回の調査では、板戸閉塞と判断される事例(荒坂B支群4号横穴)および石による閉塞(荒坂B支群5号横穴)を1例ずつ確認したが、基本的にすべての横穴は、玄門部・羨門部に土を盛り上げて閉塞していた。

ここでは、横穴の閉塞方法について、荒坂B支群1号横穴を例に具体的に見てみたい。

まず、大阪層群を掘り込んで玄室・羨道、および墓道を構築する。1号横穴の場合、長さ2.8m、幅2.3mの隅丸形状を呈した玄室に、3.3m程度の羨道が取り付く。11.9mにわたって墓道が構築され、全長18.0mを測る。壁面の湾曲具合から、玄室内、羨道部の天井までの高さは、掘形底面からそれぞれ1.8m程度、1.5m程度に復原できる。墓道底の幅は最大1.45mで、墓道端近くでは0.6mと狭くなる。墓道の最深部は羨門部で、1.2m程度の壁面が現存している。墓道の掘削は、横断で見ると、上方がやや開く逆台形を呈している。この横穴は、その使用時の早い段階に羨道の天井が崩落したようで、奥壁に向かって左側には天井の一部が廂状に残っていたのに対して、右側には天井の崩落面が認められた。そのため、閉塞土が盛り上げてある位置も、羨門部ではなくて、玄門部に位置している。

横穴掘削後に、5～10cm程度の整地を羨道・玄室床面全体に行い、初葬として玄室内に遺骸の安置と副葬品の配置を行う。その後、土を玄門部の天井近くまで山形に盛り上げて、横穴の閉塞を行う。と同時に、通路である墓道部分も、ほぼ墓道全体が見えなくなるぐらいにまで埋め戻している。横断面B-B'で見ると、初葬終了後に墓道を埋め戻した土は、少なくとも1.4m程度の高さであったことが観察できる。荒坂B支群19号横穴では、2m程度の高さまで埋め戻している。初葬後に墓道を埋め戻す際に、埋土中に土器を埋めることもしている(第5節参照)。

その後、追葬もしくは、ほかの作業のために横穴に進入する時には、墓道内通路—横穴に至るための通路—を墓道上に掘り返し、閉塞部の盛土部分も身体が入る程度に土を除去する。横断面B-B'で見ると、墓道内通路(20・23層)は上幅約1m、下幅約0.5m、深さ0.8m程度の逆台形を呈している。横穴内での作業を終えた後に、再度、閉塞部に土を盛った上で、墓道上の通路を埋め戻している。この時、荒坂B支群8号横穴や16号横穴で認められるように、墓道内通路には

石礫が多く混じっているのに対して、閉塞土にはほとんど石礫が混じっていない。こういった事例が多く認められるので、石礫を取り除いた土砂を閉塞土に用い、除去した石礫は墓道内通路を埋める土砂に混ぜているものと推定される。この後、横穴に入り込む際には、再び、墓道上に通路を掘削し、閉塞土の除去を行った上で玄室内に入り込み、玄室内での作業終了後、再々度、閉塞部と墓道内通路を埋め戻すこととなる。この墓道上の通路内の埋め戻し土中に土器を埋納している例も散見されるが、閉塞土内には土器がほとんど混じらない。

基本的に、女谷・荒坂横穴群では、上述のように土を羨門・玄門部に盛り上げて横穴の閉塞を行い、あわせて墓道も埋め戻していると判断されるが、先述のように土を盛り上げる方法以外の閉塞も荒坂B支群4・5号横穴で2例だけ確認できた。ところが、これら別の閉塞方法を行ったのは、それぞれの横穴での初葬時もしくはそれに近い段階までで、それらの閉塞の上には、盛土による閉塞が行われており、ある時点で閉塞方法を変更しているようだ。女谷・荒坂横穴群の横穴においては、板戸閉塞と判断される事例や石による閉塞は全く行われなかったとは言えないが、その頻度はかなり少なかったと言える。

2. 玄室空間とその出入り

上述のように、横穴の閉塞・開口プロセスを復原すると、横穴への進入は、通常、我々が開口した横穴式石室、例えば奈良県石舞台古墳の石室に出入りするやり方とは大きく違ったものとなる。結論をまず述べると、追葬もしくは、ほかの作業のために横穴に進入する時には、直立して出入りができるほど大きく開口するのではなくて、閉塞部は必要最小限にしか開けられない。しかも、墓道のほとんどは埋められているので、玄室へは閉塞部上方から下方へ潜り込む形となる。玄室内はかなり狭い空間しかなく、一度に数人しか入れないものである。玄室空間について具体的に見ていきたい。

荒坂B支群17号横穴では、羨門の天井の一部が残存しており、その高さは地山面から約1.25mと低いものであった。また、その土層の堆積状況の観察より、最後の入室に伴って閉塞部を開口した高さは、わずか90cm程度でしかなかった。荒坂B支群14・15号横穴でも、実際の天井部が残存しており、閉塞部における掘削面から天井までの高さは1.05mを測るに過ぎず、最終時の閉塞開口部は、高さわずかに50~60cmしか認められなかった。また、天井が残っていない横穴についても、壁面に残る湾曲から羨道の高さを復原した場合、大きく見積もっても1.5m程度しかなく、しかも床面には整地土が敷かれていることを考えると、開口する際に開けた穴の大きさは、通常、我々が暗黙的に考えるほどには大きなものではないようである。

初葬後には、玄門もしくは羨門に閉塞土が盛り上げられて、墓道は埋め戻されてしまう。玄室に進入する時には、閉塞土に身体が入る程度の最小限の穴しか開けられない。そのため、閉塞土から玄室へは、埋め戻された墓道の上から玄室内に向けて、斜め下方に開口されることとなる。玄室へ進入する人間は、横穴の開口部から地中に潜るように入り込むこととなる。

羨道の高さと同様、玄室における天井の高さも、さほど高いものではない。荒坂C支群1号横

穴では天井が遺存しており、玄室の立面形態が観察できた数少ない横穴である。玄室内に堆積している土砂は基本的には粘質土系で、天井や側壁・奥壁に由来すると思われる砂礫は堆積していなかった。そのため、玄室の天井の崩落はほとんどなく、その形状は当初の形態に近いものと判断された。玄室内の地山面から天井までの高さは1.6~1.8mであるが、地山上には10~20cmの整地を行って初葬面を造るので、横穴使用時には1.5m強しか天井の高さがなかったと推測される。実際、調査着手時には、玄門部には閉塞土が盛られていたので、奥壁部のわずかな範囲に限って、天井の高さが1.3m程度の空間が認められただけであった。荒坂B支群2号横穴でも天井が遺存しており、天井の形状を記録することができた。この横穴では、玄室における天井までの高さは、地山面より2.3mであったが、玄室内には約60cmの厚さで砂礫層が堆積しており、これを天井からの崩落土と考え、本来の天井までの高さは1.7m程度となる。女谷B支群12号横穴でも、調査時に天井の一部を確認しており、地山面から1.6m、Ⅱ面、Ⅲ面からは、それぞれ1.1m、1.5mであった。これら以外の、天井が遺存していない横穴では、壁面の湾曲よりその高さを復原すると、大きく見積もっても1.8~2.0m程度で、これに整地土が10~数10cmの厚さで盛られるため、実際の玄室の高さは、せいぜい1.5m強しかなかったことになる。当時の人々が玄室内で作業を行う時には、少なくとも中腰になる必要があった。

しかし、それだけではない。横穴は何度かの埋葬後に、玄室に土を入れて20cm程度の整地を行い、新たな埋葬面を造っている。今回の横穴調査では、通常、2面程度で遺物や人骨の出土が認められることが多い。そして、一つの横穴を用いて葬送を繰り返していくと、結果として、玄室内を何度か整地して、玄室空間を土砂でほとんど埋めてしまう場合が出てくる。女谷B支群14号横穴では、遺物が出土したのは3面あり、それぞれ地山面から、Ⅲ面が約10cm、Ⅱ面が約45cm、Ⅰ面が約55cm上位に位置する。遺物の出土は見なかったが、初葬面は5cm上位にある。このように、この横穴では、最終的には55cm厚さの整地を行っており、もし天井の高さが先の推定通り1.8m程度とすると、最終面のⅠ面では、せいぜい1.2m程度の高さしかなかったこととなる。

加えて、人骨や遺物の出土は全く認められないが、人為的に玄室内を整地して、その上面で何らかの作業を行ったとしか判断できない土層面が認められる。現象的には、玄室内に水平に堆積した土層と自然の営力で堆積したと思われる土層と土質が異なること、閉塞盛土がこの堆積層の上から盛り上げられているのが認められるのである。例えば、女谷C支群5号横穴では、21層上面・17層上面では全く遺物の出土は見なかったが、縦断土層の観察より、それぞれの面に閉塞盛土の一部と判断される20層、16層が山形に堆積している。このように閉塞盛土が盛り上げられている点より、21層上面と17層上面は人為的に整地して作られた面と判断され、このことよりこの上面で何らかの作業が行われたことが想定できる。第7節で見るように、横穴内に進入するのは、遺骸を玄室内に安置する時だけではなく、横穴内に安置した遺骸の骨を動かす時にも出入りする、必ずしも土器や鉄器がその面で出土する必要はないのである。また、実際には、土器や鉄器を副葬されることなく、安置された遺骸もあったであろう。そうすると、玄室内には遺物が出土しない作業面があり、これを含めると、玄室内には3~4面程度の作業面・埋葬面が認められる場合

がある。

先の女谷C支群5号横穴では、17層上面まで約0.9mの厚さで整地しており、天井までは1m内外しかない。荒坂B支群19号横穴では、遺物の出土は一面だけであるが、これより約0.5m上位に位置する12層上面が作業面である可能性があり、もしこれが作業面であるとすれば、地山面から約0.7m上位に位置し、その時の空間は1.1～1.3mの高さでしかないこととなる。女谷C支群8号横穴では、作業面と判断される面まで、約0.8mの厚さで土砂を入れている。

羨道・玄室の高さは、実際に残っている横穴では1.05m、1.7mの例が認められるが、天井が残っていない横穴については、壁面の湾曲から推定すると、大きく見積もっても1.5m、1.8m程度しかなく、整地土がその上に数10cmあるので、実際には、この高さよりも低いものとなり、玄室内はかなり狭い空間であったと復原できる。玄室は整地を繰り返しているため、ますます狭くなるのは、先に見たとおりである。そのため、玄室内は、せいぜい一度に数人が入れる程度の広さであり、その中で行われる葬送儀礼も自ずとその内容が制限されるものとなる。

以上のように、どのように玄室に出入りするかを推定し、あわせて、玄室・羨道の天井までの高さ、および、横穴使用時の玄室空間がどの程度であるのかを推定した。ここで検討した内容は、従来、漠然と考えられていた、横穴の閉塞と開口のあり方と全く違ったものである。また、玄室空間も、暗黙的に想定しているよりもかなり狭いものである。この内容が女谷・荒坂横穴群でだけ認められるのか、ほかの地域でも認められるものであるのか、今後の検討課題である。

第4節 初期整地と初葬時の閉塞土・横穴構築時の儀礼

1. 初期整地と墓道端土坑

この節では、横穴構築時の初期整地土とそれに伴う遺物の出土状況についてまとめたい。

横穴の墓道と玄室・羨道を掘削すると、初葬を行う前に、まず、横穴の床面全体に10～数10cmの厚さで整地が行われる。これを追葬時に玄室内で埋葬面を造っていくための整地土と区別して、初期整地と呼称したい。

この初期整地は、基本的には黄色系統の砂もしくは砂礫を用いて行っている。一つには、横穴掘削面である地山面の凸凹を解消したり、見栄えよく化粧する目的があったと考えるが、もう一つの大きな目的としては、排水もしくは湿気抜きの目的があったと思われる。

第3節の横穴の閉塞と追葬で見たように、閉塞部には土を盛り、墓道は土で埋め戻すので、玄室内の水や湿気は抜けにくいものとなる。そのため、横穴掘形の直上に、砂礫を敷くことで、玄室内部の湿気や水分が抜けることを期待したのであろう。

初期整地土と同様、水抜きのための施設として、墓道端土坑がある。荒坂B支群1・2・4・5・7・11・12号横穴など、古い段階の横穴では、明瞭な墓道端土坑は認められないので、系譜的には、この初期整地土が墓道端土坑に発展していくものと思われる。

墓道端土坑は、女谷B支群9号横穴や10号横穴で明瞭に見られるように、墓道端が土坑状に一段と深く掘られており、それが黄褐色砂および茶褐色の礫混土で埋め戻されている。この土坑の

壁面が風化していないことや埋土が均質な砂・砂礫であることから、この土坑は掘削後、すぐに埋め戻されたと推定される。この土坑は墓道底を深く掘られているが、その底は砂礫などの透水層に達しているわけではなく、貯水槽的なものと思われる。

この初期整地土・墓道端土坑の最も顕著であるのが、女谷B支群17号横穴で、約80cmの砂を墓道から玄室にかけて敷いている。

以上のように、初期整地土を水抜きのための施設と理解し、その機能が発展した形態として墓道端土坑を理解したい。このように理解すると、その中間に位置するさまざまな形状をこの視点で理解することが可能である。

荒坂B支群11号横穴では、墓道の端部近くが約3.5mの長さにならなわって、約10cmとわずかに深く掘られているのも、水抜きを効果的に行うためのものと考えられよう。墓道端土坑ほどしっかりと掘削されていないが、墓道端をわずかに深く掘削し、砂層・砂礫層で埋める例は、女谷C支群1・4号横穴、荒坂B支群1・14・15号横穴など、顕著な墓道端土坑を有していない横穴のほとんどで認められるものである。

初期整地を玄室・羨道部分と墓道部分とで、その土質を変えている例も散見される。荒坂B支群14号横穴では、玄室部分には暗茶褐色砂質土、墓道には淡灰色砂礫が整地土として用いられ、16号横穴では、玄室・羨道部分には淡黄灰色砂、墓道には暗褐色砂質土を整地土としている。荒坂B支群11号横穴では、玄室・羨道部は暗茶褐色砂質土、墓道部は赤褐色粘質土、墓道端部は黄灰褐色細砂で整地をしている。このように、玄室・羨道部と墓道および墓道端で異なった質の土砂を用いて整地を行う横穴が認められるが、これは、遺骸を置くための玄室・羨道をよりきれいに見せるための化粧としての意識が反映しているものと思われる。

横穴の掘削時に、意図的に床面の一部を掘り残して、初期整地を行うことで平坦にならずということも行われている。荒坂B支群6号横穴では、縦断面で見ると、奥壁から1.4m付近のところで、約20cmの高低差の段差を有して掘削されている。この段差を平坦に埋める形で初期整地がなされている。同様のことは、荒坂B支群6・14・18・19号横穴などでも認められる。

さらに、荒坂B支群6号横穴では、墓道端から約6mの位置で、底面が約1.2mの段差を有して掘り残されており、この部分より墓道端側には砂礫を主体とした整地土で埋め戻されている。こういった施設も墓道端土坑と同様の意図をもって構築されたと判断される。

2. 初葬時の閉塞土

第3節で見たように、初葬終了後には閉塞部に土を盛り、墓道を埋め戻しているが、初葬を行う際にはすでに閉塞土が盛られ、墓道が埋め戻されていたのであろうか。すなわち、初葬時には追葬時と同じく、閉塞部の斜め上から下に向けて潜り込んだのであろうか、それとも、何も盛られていない墓道・閉塞部を通過して玄室内に入り込んだのであろうか。それを推測する手がかりとして、女谷C支群2号横穴を見てみたい。

この横穴では、土師器杯(284)の大半が33層直上より出土しているが、玄室内出土の破片とも

接合した。墓道内の破片は標高28.66m、玄室内のものは標高28.68mで出土しており、レベル的にはほぼ同じで、33層直上に相当する。この33層は、玄室と墓道をともに整地する初期整地土層で、初葬面を造るものである。33層は、墓道内では閉塞土や初葬直後の墓道を埋め戻した土の下に位置することから、これらの土器は閉塞および墓道の埋め戻しを行う以前に置かれたものといえる。この事例より、初葬を玄室内で行って副葬品を並べた時には、墓道は埋められていなかったものと判断されるのである。この土師器杯(284)はヘルメット形をした特徴的なもので、同形の杯が、玄室内で完形品6点が出土していることから、副葬品として持ち込まれた土器の中から1点を破碎して、墓道の上の初期整地土上に置いたものと思われる。

この事例から、初葬時には閉塞土は盛られておらず、墓道も土砂で埋め戻されていなかったものと推測される。平坦な墓道と羨道を通して、遺骸は玄室内に納められたのであろう。次いで、墓道の初期整地土の上に土器が置かれている例を見てみたい。

3. 初葬時の土器埋納と横穴構築時の儀礼

女谷C支群2号横穴では、初葬時に、墓道の初期整地土上に遺物が埋置されているが、ほかの横穴でも同様の状況で遺物が出土している。これらの遺物は、閉塞土や初葬直後の墓道埋め戻し土の下に位置することから、玄室内に置かれた副葬用の土器とは違って、横穴を初めて用いた時点の祭祀として埋め置かれたものと判断される。

女谷C支群2号横穴以外では、女谷B支群5号横穴で、墓道部の玄門近くで須恵器壺(42)が正立して据えられた状態で出土している。現地では、出土層位の観察はできなかったが、出土レベルより、横穴構築時の整地層と判断される黄褐色細砂の直上に置かれていたものと復原できる。荒坂B支群15号横穴の羨門の墓道側では、初期整地土と判断する23層上面より、土師器高杯(601)が細片に破碎されて出土した。この高杯は、初葬面であるⅡ面出土の高杯(602~604)と同形のもので、女谷C支群2号横穴と同じく、初葬時の副葬のために用意した土器の一つを破碎して、墓道内に置いた可能性が高い。女谷B支群13号横穴では、墓道の玄門部近くにおいて土師器甕(175)が出土しており、初回の埋葬直後に、墓道を埋め戻す土砂の中に埋置されたと判断されるものである。この甕は、完形で、口縁を上にして、ほぼ直立して置かれていた。

女谷C支群2号横穴や荒坂B支群15号横穴の例で見ると、墓道内に置かれた土器は、玄室内にもそれと同じ形態の土器が納められているので、初葬行為と相前後して、墓道内に土器が置かれたものと推定できる。

墓道内の整地土下より、遺物が出土する場合がある。土器の出土は認められないが、いくつかの横穴より、炭化材が出土している。女谷B支群10・11・16・17号横穴では、墓道内の初期整地土、特に墓道端土坑内の砂層より、炭化材が出土している。女谷B支群11号横穴では、その出土状況が観察でき、横穴掘形の底面に貼り付くような状況であった。また、女谷B支群4号横穴では、形状を特定できなかったが、有機質が初期整地土中より出土した。これらの整地土層は、初葬を行う以前に敷き詰められているので、初葬時に墓道の初期整地土上に置かれた土器に先行し

て埋め置かれたことは間違いない。そのため、整地土層の上に置かれた土器とは、一概に同じ性格の祭祀とは言えず、横穴構築時に何らかの祭祀を行ったのであろう。ちなみに、理化学分析の結果、これらの有機質は、女谷B支群10・16号横穴がヒノキ科、11号横穴がスギであった。

以上のように、儀礼の内容についてはよく分からないが、遺物の出土状況の違いより、横穴構築時の儀礼と初葬時の儀礼が、埋葬に伴う儀礼以外に執り行われたものと考えられる。

第5節 墓道内出土の土器について

1. 土器を墓道に埋めること

追葬時に玄室内に進入する際には、墓道内通路を墓道上に掘削し、玄室から退出した後で、その通路を埋め戻すが、その埋め戻した土砂の中から土器が出土する場合がある。土器は完形であったり、細片に割れたものや小破片であったりする。こういった土器については、墓道内通路に何らかの意図をもって埋められたもの、もしくは、玄室内の土器や墓地内通路上の土器が偶然に入り込んだもの、の2種が想定できる。

これらを厳密に区別をするのは難しいが、大形品が破碎されてまとまって出土する場合や、完形品が出土する場合、破片であっても多数の器種が出土する場合など、偶然に紛れ込んだと考えにくい場合には、意図的に埋め置かれたものと判断してよからう。

土器が細片に割られて埋められている例には、女谷B支群5・14・17・18号横穴がある。これらの横穴の墓道では、大形の甕が破碎されて細片となり、比較的1か所に集中して出土している。大形の甕の器壁は厚く、人為的に破碎されなければなり得ないほどの細片となっているので、意図的に割られて埋め置かれたと判断できるものである。女谷B支群18号横穴では、須恵器甕の下位の層で、土師器甕が破碎されており、これなども墓道内に埋置されたと判断してよからう。

一方、荒坂B支群14号横穴では、完形に近いものから細片に近いものまでが墓道内から出土しており、須恵器高杯8点・同蓋1点・脚付長頸壺3点・甕1点、土師器脚付壺1点が出土した。これらがすべて偶然に墓道内通路に入り込んだとは考えられないものである。

また、完形品もしくは完形に近い形状のものが、単独で出土する場合も、意図的に埋め置かれたものと判断できよう。女谷C支群3号横穴では、墓道内通路の埋め戻し土中より、須恵器短頸壺と平瓶が出土した。短頸壺は完形であるのに対して、平瓶は口縁部を意図的に打ち欠かれた状態で、墓道の同一の層中で逆向きに並べられたように出土している。このような出土状況から、偶然に紛れ込んだものではなく、意図的にそこに置かれたものと判断される。荒坂B支群8号横穴では、墓道内通路を埋め戻した土砂である6層中より土師器甕(499)がほぼ完形の状態で出土している。女谷B支群17号横穴では、破碎されて埋納された須恵器大甕の下位の土層から、脚付長頸壺が脚を外されて出土している。脚がきれいに外されているので、この脚付長頸壺も埋置されたと考えてよいであろう。

破片であっても、複数の器種の土器が1か所に集中して出土する場合も、意図的に埋置された可能性が高い。女谷B支群1号横穴では、断面土層位置を確認しただけであるが、須恵器杯蓋

(2)・高杯(13・14)が破片で出土している。

以上のように、横穴内で埋葬もしくは作業をした後にも、墓道内通路に土器を埋納して何らかの儀礼を行っている。前節で見た「初葬時の儀礼」は、見方を変えれば、墓道を埋め戻す際に土器を埋納することであり、追葬後の埋葬に伴って墓道内通路に土器を埋め置くのと同じ性格であると言える。

これら墓道内通路に埋め置くための土器は、一般的には、その目的のために特別に用意したと考えられるが、玄室内に納められていた土器を持ち出して、墓道に埋めたと考えられる例も認められる。先に初葬時の儀礼で見た、女谷C支群2号横穴や荒坂B支群15号横穴では、副葬品として持ち込んだ土器の一部を墓道内に置いている。

荒坂B支群14号横穴では、墓道に埋置した土器の破片が、玄室・羨道内のI・II面から出土している。この14号横穴の場合は、土器は墓道内の同一層のほぼ同一箇所から出土しているため、ほぼ同時に埋置されたと考えられる。それに対して、玄室内のI・II面は、その間に整地土層を挟み、幾ばくかの時間的な隔たりが想定できる。そのため、14号横穴の墓道内に埋められていた土器が、玄室I面とII面のそれぞれに入り込んだとは考えにくいものである。また、予め墓道内通路に埋める土器が決められており、墓道に埋める前にその一部を打ち欠いて、玄室内に置いた可能性は想定できるが、その場合でも、玄室のI面とII面にそれぞれ破片が置かれることとなり、その可能性は低いものと思われる。

おそらく、玄室内で作業を行った後に、玄室内に置かれていた副葬遺物を持ち出して、墓道内通路に埋め込んだものと考えられる。I・II面出土の土器片が墓道内出土の土器と接合するのは、持ち出された土器は、横穴内の下位の面から上位の面に動かされており、土器の一部が、それぞれの埋葬面に取り残されていたからであろう。

2. 横穴外に土器を持ち出すこと

荒坂B支群14号横穴以外に、玄室に納められている土器を意図的に持ち出している例を見ておきたい。

女谷B支群14号横穴では、I面出土の須恵器杯蓋が墓道内の38層より出土した破片と接合し、III面出土の須恵器杯身・杯蓋が墓道内から出土した破片と接合した。女谷B支群13号横穴では、I面から出土した杯身が墓道から出土した破片と接合した。このように、玄室と墓道から出土した土器片に接合関係を有するものは、荒坂B支群14号横穴の事例を敷衍すると、玄室内に納められていた土器を意識的に持ち出して、墓道内通路に埋め置いたものと言えよう。

また、玄室や羨道から、須恵器や土師器の小片が出土する例も認められる。女谷B支群14号横穴では、墓道内の28層中より須恵器杯身(185)、29層中より須恵器高杯(187)、11層中より須恵器杯身(184)、図化できないが、そのほかに杯身・杯蓋・高杯片が10点近く出土している。女谷B支群9号横穴では、図化できたものとは別個体の須恵器杯身もしくは杯蓋の破片、土師器高杯の小片、土師質埴輪片などが出土している。これらの破片は、偶然に埋め戻し土中に混じり込んだ

ものもあろうが、その一部は玄室から持ち出されたものと想定できる。一旦、横穴内に納められた土器が、その後に横穴外に持ち出された際に、一部の破片が墓道内に取り残されたものと考えられる。

以上のように、玄室内に納められた副葬品が横穴外に持ち出されることは、日常的に行われた行為であったと思われる。

最後に、玄室内から土器を持ち出した例ではないが、墓道内出土の土器が、その横穴とは違う位置で出土した破片と接合する例を見ておきたい。女谷B支群14号横穴では、脚付壺が墓道内11層より出土した破片と墓道端前面で出土した破片とが接合している。女谷B支群12号横穴では、墓道内通路を埋め戻した土砂である25層中より、須恵器甕片および横瓶体部片が出土した。須恵器甕片は、女谷B支群13号横穴の墓道内に埋置された須恵器甕(173)と接合し、横瓶の体部片は女谷B支群6号横穴の墓道前面の墓地内通路上から出土した破片と接合した。こういった土器は、玄室内から意図的に持ち出したものとは言えないが、少なくとも、墓道内に埋められたものが持ち出された、もしくは墓道内に埋め置くための土器の一部が他所に置かれたものと言えるであろう。こういった行為も、何らかの儀礼に伴った可能性は否定できない。

第6節 葬送儀礼の一事例—杯身・杯蓋の転用枕—

小林行雄は、「黄泉戸喫」の中で、杯身や高杯の中に、食物が納められている例を引き、死者に供えた食物を置くためのものとして、副葬の土器を捉えた(小林1976)。今回の横穴の調査では、そういった使用方法以外に、遺骸の頭の下に杯身・杯蓋もしくは高杯の杯部を2個うつ伏せにして並べて、枕として利用しているものがある。

女谷B支群16号横穴では、人骨11を磔床の上で検出した。人骨11では、玄門側に杯蓋2点(197・198)が伏せて置かれており、その上に頭蓋骨片があった。女谷B支群17号横穴で検出した人骨12は、頭部付近には杯身(218・219)が逆位に置かれて、枕として用いられている。その近くで耳環(865)が1点出土した。これらの例のように、人骨の頭蓋位置に一对の杯身・杯蓋がうつ伏せに置かれて、枕として利用されている。

人骨は遺存していないが、一对の杯身・杯蓋と近接して耳環が出土するものも、頭蓋が枕の上に置かれていたと判断される。この事例には、女谷C支群5号横穴の須恵器有蓋高杯蓋2点(311・312)と耳環一对(870・871)、女谷B支群6号横穴の須恵器杯身(52)と杯蓋(51)と耳環2点(849・850)、女谷C支群6号横穴の須恵器杯身(327・329)と耳環一对(872・873)があり、これらも枕として用いられたものと思われる。

耳環の出土はないが、一对の杯身・杯蓋がうつ伏せに置かれているものも多く認められる。数例をあげると、女谷B支群6号横穴の須恵器杯身(53・54)はともに逆位に並べて置かれており、女谷B支群5号横穴では須恵器杯身(33)・杯蓋(32)が、それぞれ逆位・正位で並べて置かれていた。女谷B支群16号横穴では、胡録金具の前面に、須恵器杯身(244)・杯蓋(243)がうつ伏せの状態で置かれている。こういったものも、偶然にそのような配置になった可能性も否定できないが、

枕として用いられたものと考えられる。

しかし、こういった枕は、一对の杯身・杯蓋を用いるだけではない。女谷C支群5号横穴で検出した人骨19では、頭蓋骨に近接して須恵器杯身1点(302)が逆位に置かれていた。頭蓋の位置と杯身の位置関係から、杯身は枕として利用されていたと判断される。また、女谷B支群16号横穴の人骨8の頭蓋骨の下には、須恵器杯蓋が3片に割られて挟まれており、頭蓋骨が横転しないように置かれていた。この杯蓋は、接合しても、約1/2にしかならず、ほかの1/2は見つかっていない。荒坂B支群11号横穴では、有蓋高杯蓋(528)の破片が3点出土しており、その配置が、女谷B支群16号横穴人骨8の頭蓋骨の下で出土した須恵器片の配置とよく似ており、頭蓋骨が転回しないように使用した可能性がある。

こういった枕はどのように用意されるのかを考えてみたい。女谷B支群9号横穴では、一揃いに作られたセット関係にある杯蓋(85)と杯身(86)が対となって枕として用いられているが、これは希な例であって、ほとんどの枕はセット関係にない土器を対にして置かれている。少なくとも、枕の対は、セット関係を意識して作られたものではなく、特別な“対”として、事前に準備された可能性は低いものと言える。

示唆的な例として、女谷C支群6号横穴がある。この横穴I面では、杯身(327・329)が枕として用いられているが、杯身(329)はII面出土の杯蓋(328)と胎土・焼成よりセット関係が認められるものである。杯身(329)は杯蓋(328)と一揃いで作られたものであるもので、本来なら、ともにII面出土すべきものであるのに、杯身(329)はI面で、セット関係にない杯身と対になって枕として用いられている。これは、セットとなる土器を別々の時期に横穴内に入れたとも考えられるが、下位の面から上位の面に土器が動かされる例は、多々認められるので、II面にあった土器を枕用として選び出し、整地をした上で、I面で枕として用いたのではないだろうか。

以上のように考えると、枕として用いた杯身・杯蓋などは、副葬用として用意した遺物の中から適当に選び出したり、すでに副葬品として納められていた土器の中から選び出したのであろう。

以上、須恵器杯身・杯蓋などが枕に転用された例とその調達の方法を見てきたが、実際の人骨の出土例を見ると、頭蓋の下に必ず枕を置くものではない。明瞭に頭蓋骨が遺存していた荒坂B支群2号横穴の人骨22や荒坂B支群18号横穴の人骨26では、枕様のものは置かれていなかった。女谷B支群16号横穴の人骨10では、耳環2点が約20cmの間隔で出土し、その間に、わずかな骨片と有機質が腐植して黒ずんだ状態で、頭蓋骨がこの位置にあったものと推定されるが、枕様のものは出土していない。また、荒坂B支群14号横穴のI面では、耳環2点(881・882)がガラス玉と近接して出土しており、ガラス玉と耳環との位置関係より、頭蓋骨が近接して置かれていたと推定されるが、枕の出土は見なかった。

このように、頭の下には必ずしも枕を置く必要がなかったため、この点より、枕という道具立ては、葬送儀礼の中でさほど大きな意味をもつものではなかったと想定される。そのため、こういった枕は、玄室内にすでに副葬されて置かれていた土器を転用してもよかったのであろう。

第7節 葬送儀礼の諸段階—改葬を中心に—

1. 出土人骨の概要と改葬骨のタイプ

女谷B・C支群、荒坂B支群の調査においては28体の古墳時代人骨が出土した^(注11)。そのうち、人骨の安置状況が分かるものが21体あり、7体については遺存状態の悪さから詳細は不明である。人骨が出土した横穴は13基あり、単数の人骨が出土した横穴が5基、複数の人骨を検出した横穴が8基である。

各人骨を安置する方向は、東西南北の方位を意識しているものではなく、個々の横穴の主軸に規制されているようである。また、玄室のどの位置に置かれるのかについては、埋葬人数が単数、複数に係わらず、定まった位置にあるとは言い難い。ただ、横穴の主軸線上に人骨を置くものは認められず、いずれかの側に寄せられている。

人骨の集積タイプは2タイプに分類できる。便宜上、集骨Aと集骨Bと呼称すると、集骨Aは、四肢の長管骨を束ね揃えて、体幹骨とともに1か所に置き、それとは別に頭蓋骨を置いているものである。このタイプが大半を占め、17体を確認した。これらは、骨格全体にわたって関節部に交連をほとんど残さず、各箇所が解剖学的位置をとどめないこと、長管骨はその長軸を揃えて積み重ねられていることが共通する。骨の配置状況より、明らかに改葬されたものである。

一方、集骨Bは、手脚の関節部に交連が認められたり、手脚の配置に解剖学的な関係が認められて、一見すると全体的に伸展位に安置されているものである。ところが、これら交連した骨の下位や周辺には、ほかの多くの骨が外されてバラバラになっており、ある時点で骨が動かされたことは間違いない。このタイプは4例が認められるが、骨の保存状況が良く、上記のように細かな状況が観察されるのは1例しかなく、ほかの3例に普遍化できるかは確証はないが、一応、このタイプの特徴と考えたい。

集骨Aの場合、長管骨の方向は横穴の主軸に平行ないし直交する方向にある。17体のうち、11体は横穴主軸に平行し、3体が直交と平行とが混在し、3体では判別できなかった。また、頭蓋骨は12体で遺存しており、頭蓋骨は長管骨が集められている箇所から離れた位置に置かれているものが11体ある。頭蓋骨と長管骨の位置関係は、頭蓋骨が長管骨の奥壁側もしくは玄門側に置かれており、両側壁側になる例はなく、横穴主軸を意識して置かれていると言える。頭蓋骨と下顎骨が遺存している場合には、この両者も離して配置される傾向が強く、9体中6体でその状態を確認した。この場合、それぞれの位置関係に、特に一定の傾向は見られない。とは言っても、遺存する頭蓋骨の多くは、破損ないしは横転しており、安置時の原位置を特定できないのが実状である。

長管骨については、まず上肢長管骨と下肢長管骨を選別せずに同一箇所に混在して置く場合と、選別した上で別々に置く場合とがある。集骨Aの17体のうち、10体で長管骨の出土状況の詳細が観察でき、そのうち8体が前者のタイプである。この場合には、2段程度に重ね置くものと、平面的に並べるだけのものがある。これらは、上肢と下肢、左右を分類しないで、長管骨の長軸の方向だけを合わせる傾向にあるが、重ね置くもののなかには、直交方向に置いている例も認め

られる。また、平面的に配置する例は2例しかなく、もともとは重ね置かれていたものが、崩れ落ちた可能性もある。一方、上肢と下肢の長管骨を選別して、異なる場所に置く例は、2例が認められる。上肢長管骨の群と下肢長管骨の群を、横列に配置するものと、縦列に配置するものがある。

集骨Bは、伸展位様の状態を呈するもので、手脚の各部の関節に交連状態が見られることや、全体的な骨の配置に解剖学的な位置関係が認められることが共通する。ただし、4体の出土例すべてにおいて、骨の配置に解剖学的位置にないものや関節が交連していないで、バラバラになっているものを含んでおり、この点で自然に骨化したママの伸展位とは言えない。人為的に骨を動かし置いているものである。このタイプは4例認められ、すべて横穴主軸にほぼ平行して置かれていた。いずれもどちらかの側壁に寄っている。女谷B支群17号横穴では、5体中2体がこのタイプと考えられ、それぞれ異なる側壁に近接しておかれていた。このタイプの人骨は、すべて複数の人骨が出土している横穴で見ついているが、すべてほかの人骨と重複関係を有さない。

集骨A・Bに共通して、改葬される際に、集められる骨の種類は選別されていないようである。骨の遺存状態の悪さのために、骨の同定・観察が困難な場合を除き、概ね全身に及ぶ各骨が集骨されているからである。改葬に際して、肋骨・椎骨などの細かな骨を省いて、頭蓋骨や四肢骨・骨盤の骨を選別する例^(注12)もあるが、当横穴群ではそのような状況は見られない。

その中でも、骨盤を形成する両腰骨には、特別な意識が働いたような印象を受ける。両腰骨が遺存していた例は、全28体中2体しかないが、そのいずれも左右の腰骨に分けて、大腿骨の上に重ね置いていた。とは言っても、片側の腰骨のみが遺存する例の中には、長管骨の下から出土した例もあり、一括りに言えない可能性もある。

また、頭蓋骨および下顎骨においては、臼歯が釘植しているのに対して、切歯・犬歯が遊離したり、損失している場合が多い。これについては、抜歯などの生前の風習である可能性も考えられる。しかし、生前に歯が欠落した場合には1年程度でその歯槽は閉鎖するが、歯槽にはそのような状態は見られないので、死亡後に欠落したものと言えよう。実際、欠落している歯が遊離歯として出土する場合もあるので、死後に欠落したものであろう。

2. 改葬の諸段階と魂の浄化

女谷・荒坂横穴群の出土人骨は、その残り具合が悪いものもあり、不明瞭なものも認められるが、解剖学的な位置を身体全体の各骨に保っているような人骨は全く検出されていない。すなわち、横穴内に遺骸を納め置いて、そのまま骨化したママのものは、全く認められないのである。

人骨の集積状況を大別すると、次の2タイプに分類できた。

集骨A 四肢の長管骨を束ねたり、並べ置き、それとやや離れた位置に頭蓋骨を置くもの。多くの場合、そのほかの骨はその長管骨の下位に置いている^(注14)。

集骨B 一見すると人骨の配置は伸展位様を呈しているが、脚などの一部で関節した状況を残すものの、体幹骨などの大多数の骨は人為的にその関節が外されているもの。

これら両タイプは、人骨の配置が解剖学的な位置から大きくずれているので、いずれも人為的に骨が動かされていることは間違いない。また、これらの骨は、たまたま動かされて、偶然にそのような配置になったものでもなかろう。集骨Bについては類例が少なく、判然としない点はあるが、両タイプとも、ある一定の範型の基づいた骨の配置を指向しており、この点に人骨を動かした人々の意図を読みとることができるからである。そのため、これら両タイプとも、一連の葬送儀礼の中のある段階で、意図的に改葬されたものと言うことができよう。

集骨Aと集骨Bが、女谷B支群17号横穴や荒坂B支群5号横穴の同一埋葬面で見つかっていることから、それぞれが風習を異にする別個の形式の改葬方法とは考えられず、一連の葬送儀礼の中で執り行われる改葬の段階差と捉えることができる。この場合、骨を動かす大きさの違いから、集骨Bから集骨Aへと、横穴内での儀礼が進行したことは疑い得ない。

集骨Bから集骨Aへの改葬は、人骨26の例を参考にすると、まず、上位の下肢長管骨を外し、下位のバラバラに置かれている体幹骨・上肢骨の中から上肢長管骨を選びだす。これらの長管骨だけ軸を揃えて束ねて、残余の体幹骨の上に置いたのであろう。頭蓋骨もおそらく正立させて、体幹骨の集骨に近接して置き直しているのであろう。このように考えると、集骨Bから集骨Aへとスムーズに骨を置き替えることができ、これら2タイプの違いは、葬送儀礼の段階差と捉えることができる。

そうすると、集骨Bへと改葬が行われる以前に、遺骸はどこに安置されていたのであろうか。可能性としては、横穴内に置いて骨化させた場合と、横穴外で骨化させて横穴へ移動した場合とが考えられるが、残念ながら、いずれかを特定する材料は得られなかった。人骨17や人骨26では、全身におよぶ骨が、細かなものに至るまで遺存していた。もし、横穴外で骨化させて、収骨した場合には、こういった細かな骨までは拾わないと思われるものまで出土しているので、横穴内に遺骸を置いて骨化させた可能性が高い。もし、横穴外で骨化させているのなら、板戸などの上で遺骸を骨化させて、そのまま慎重に横穴内に運び込んだ場合が推測されるが、第3節で見たように、横穴の進入口はさほど広く開けられるものではないので、この可能性は低いものと思われる。このように考えると、人骨26で見られたように、靱帯や腱が残存している段階で遺骸がバラバラに解体された可能性も、横穴内に遺骸を安置して、所定の日数を経た後に横穴に入り込んだ時に、肉体の腐敗がたまたま進んでいなかったために、儀礼上の必要に迫られて解体したと言えまいか。

以上、想像を交えた所もあるが、葬送儀礼の流れをまとめると、死骸を横穴内に一定期間、さほど長くはない期間にわたって置いた(=殯)後に、再び横穴内に進入し骨を動かし置く(集骨B)。そして、ある期間を経た後に、頭蓋骨を別個に据えて、その前面に長管骨を揃え置くという、集骨Aへと改葬を行ったのであろう。田中良之はこういった骨を動かし置くという行為を、大分県上ノ原横穴群の例を引き、埋葬後数年を経た後、横穴を再開して飲食物供献を行い、脚を二次的移動していると考え、死霊の再生阻止儀礼と捉えた(田中1995)。今回の事例では、“埋葬後数年を経た後”に、“飲食物供献を行った”かどうかの決め手はないが、集骨Bが骨を動かし置い

て、故人の再生を阻止するための儀礼として執り行われたものと思われる。

(a)死→(b)腐敗(横穴内?)→(c)改葬(集骨B)→(d)改葬(集骨A)

五来重は、敏達天皇、用明天皇、舒明天皇など古代天皇や船首王後が改葬されている例を引き、「死者の靈魂が子孫の供養によってきよめられ、神として祭られるという(日本;引用者注)固有信仰の一変形と考えられる。この『きよめ』がすまぬ間は、死者=ほとけは祖先の神靈に仲間入りができなかったのである。」(五来1994)と述べており、横穴に見る改葬の実例もまた、こういった意識の反映であったのではなからうか。この文脈に沿って上の図式を解釈するならば、(b)についてはよみ返りの希求、(c)についてはよみ返りの否定と靈の鎮魂・浄化、(d)にいたって初めて祖霊との同化が果たされ、子孫を守護する存在へと昇華したと意識されたのではないだろうか。

また、興味深い例として、一旦、横穴の使用を停止して、ある期間をおいて再度、横穴が使用されている場合がある。荒坂B支群6号横穴では、6期で、ほぼ追葬などが終わったにもかかわらず、9期の遺物が出土している。こういったものは、祖霊に対する儀礼、現在で言うところの追善供養的なものではなからうか。

第8節 横穴の再利用とその時期

女谷・荒坂横穴群においても、ほかの横穴や古墳と同様、この横穴を造営・経営した集団以後に再利用されているものがある。

第2・3章の横穴の調査の記述では、“盗掘”という表現を用いているが、実際には、副葬遺物を盗むことを目的として横穴に進入した場合は少ない。というのは、異なった時期の遺物が玄室から出土して、明らかに再利用された場合であっても、玄室が掘り返されて、遺物が持ち出されていない例があるからである。例えば、女谷B支群11号横穴や12号横穴では、I面では平安時代の遺物や骨が納められているが、その下位のII面で当時のままに遺物が出土している。

付表2は、再利用がなされている横穴もしくは、後世に何らかの人為的な行為が加えられた横穴、異なった時期の土器が出土した横穴を一覧にしてある。

再利用の具体的な内容を示す例として、先述の女谷B支群11・12号横穴がある。これらの横穴では、人骨片とともに土器や鉄器・貨銭が出土しており、9世紀中頃～後半にかけて墓として利用されている。

女谷B支群17号横穴では、遺物の出土がなく時期は分からないが、馬骨が横穴内に置かれていた。これらの横穴では、下位にある古墳時代の埋葬面の土器や鉄器は、当時のままにあるものと判断され、外部に持ち出されていない—いわゆる盗掘を受けていない—と判断できる。

それに対して、明らかに盗掘を受けたと判断される例も認められる。女谷B支群7号横穴では、横穴使用停止後、2時期にわたって玄室内への進入がなされている。残された土器より、9世紀中頃～後半と12世紀末頃の2回と判断されるが、古墳時代の遺物としては、耳環とわずかな須恵器だけが出土しており、ほとんどの遺物が横穴外に持ち出されたと判断できる。荒坂B支群6号

付表2 再利用された横穴一覧

支群	横穴	埋葬面の盗掘	再利用Ⅰ		再利用Ⅱ	
			時期	内容	時期	内容
女谷 B支群	1号	無	10世紀中頃	墓道端に黒色土器		
	2号	有	10世紀中頃	遺物の出土は皆無。墓道端に黒色土器		
	3号	有	11世紀前半	遺物の出土は3点。玄室埋土から土師器皿		
	7号	有	9世紀中～後	須恵器杯、土師器杯	12世紀末	瓦器椀
	11号	無	9世紀中～後	人骨、土師器杯、黒色土器椀・杯、須恵器壺		
	12号	無	9世紀中～後	人骨、土師器杯・皿、黒色土器椀、須恵器平瓶。小横穴		
	17号	無	不明	馬骨。小横穴		
	18号	無	近代	天井陥没痕に土器等廃棄。玄室内遺物は一部動かされる		
女谷 C支群	5号	無	近世～近代	小横穴が穿たれる		
	7号	無	不明	穴が穿たれる		
	8号	無	不明	穴が穿たれる		
荒坂 B支群	4号	無	11世紀前半	墓道内より土師器皿		
	6号	有	不明	玄室内に土層の乱れ。遺物少		
	12号	無	不明	穴が穿たれる		
	13号	無	不明	穴が穿たれる		
	14号	無	不明	穴が穿たれる		

横穴は遺物の出土量が少ない上に、玄室内堆積土の層序に乱れが認められることから、盗掘を受けたことは間違いない。女谷B支群2・3号横穴では、ほかの横穴と比べて遺物の出土量が極端に少なく、盗掘を受けたためと推定される。3号横穴の玄室埋土上層より、土師器皿が出土しており、この土器の年代観より、11世紀前半頃に盗掘を受けたと推定される。2号横穴は盗掘の時期を直接示すものはないが、墓道端の埋土の上位より、10世紀中頃の黒色土器片が破碎されて出土している。

玄室の奥壁に小横穴が設けられている例がある。小横穴に遺物が伴って出土していないので、その掘削時期や目的は不明である。そのため、どのような目的で穿たれたのかは不明であるが、何らかの目的のために穿たれた小横穴であることは間違いない。

女谷B支群12号横穴では、土砂の堆積順序より、小横穴は9世紀後半以降に埋まっている。17号横穴では、玄室内にある程度自然堆積した土砂を切り込んで、小横穴が掘削されていた。女谷C支群5号横穴では、古墳時代の作業面と判断される高さに小横穴の掘削面が揃っているため、この点を評価すると古墳時代に掘削された可能性があるが、近世以降と判断される土師器皿が墓道内より出土しており、小横穴の掘削時期を示すものかも知れない。

小横穴が穿たれる位置を見ると、奥壁左隅という共通点が認められる。もし、それぞれの横穴の小横穴が、異なった時期に、異なった目的のために穿たれたとしたら、共通の位置に穿たれるものではないだろう。そのため、共通の位置に掘削されている点を重視すると、これらの小横穴は共通の意識・目的で穿たれたと考えることが可能で、それゆえ、これらの小横穴は同時期にな

された所産と言えるであろう。そうすると、横穴に盛んに出入りしている時期は、横穴を築造・使用した集団の古墳時代後期、もしくは、付表に見るように平安時代前～中期の2者の可能性がある。このいずれかの時期に小横穴が穿たれたと考えられる。女谷B支群17号横穴では、閉塞土の上を雨水とともに流入して、堆積したと判断される土砂の上から切り込んで、小横穴が穿たれているのが観察できた。このことから、横穴使用停止後、ある期間を経て小横穴が穿たれたものと推測され、先の2時期のうちの後者、平安時代前～中期に小横穴が穿たれたと推定される。

奥壁ではなく、玄室の側壁に穴が穿たれている例も認められる。荒坂B支群12～14号横穴では、玄室の側壁に穴が掘られており、この3基の横穴が小穴を介して横に繋がっている。12号横穴では、径50cm程度の穴で、地山面から2.0～2.5mの高さにあり、ほぼ水平方向に掘削されていた。玄室の天井の復原高とほぼ一致する高さで、本来は天井が丸く湾曲している位置にあたる。このような湾曲している位置に、水平方向に穴を掘削することは困難であることから、天井が崩落した後に開けられたもの、横穴廃絶後のものと判断される。同様の例は、女谷C支群7・8号横穴でも認められ、先のものと同じく、天井が崩落した後に掘削されたものと推定される。これらの小穴の掘削時期は、天井が崩落した後、すなわち横穴使用停止後であること、側壁に小穴を穿つ例は女谷C支群と荒坂B支群で2例認められ、偶然に開けられたものではないであろうこと、側壁に小穴を穿つ行為は、奥壁に小横穴を穿つ行為と類似していることから、小横穴と同じく、平安時代前～中期に行われた行為と考えたい。

これら、小横穴・小穴を穿つ行為で注意しなければならないのは、下位の古墳時代の埋葬面は全く荒らされていない点である。これは、人骨が出土した女谷B支群11・12号横穴でも言えることである。盗掘目的として玄室に入ったものではない。

上記以外の横穴を概観すると、女谷B支群18号横穴では、玄室が陥没した痕を廃棄土坑として利用した状況で、その際に、わずかに、遺物が荒らされた程度であった。荒坂B支群4号横穴では、墓道内より土師器皿が出土しただけで、墓道上の窪みに混入しただけの可能性がある。この2基の横穴は、偶然に遺物が混じったり、玄室内が荒らされたと言えよう。女谷B支群1号横穴は、墓道端で黒色土器の破片が散らばっている。これは、2号横穴と同じ状況であるが、1号横穴は盗掘を受けていない。1号横穴の場合は、墓道が大きく削平されているので、墓道上に何らかの構造物があったのであろうか。

以上を整理すると、

①盗掘を受けているもの

- ①-1 盗掘時の遺物が残るもの(女谷B支群7号横穴)
- ①-2 盗掘時の遺物が認められないもの(女谷B支群2・3号横穴、荒坂B支群6号横穴)

②盗掘を受けていないもの

- ②-1 遺物や骨が残るもの(女谷B支群11・12・17号横穴)
- ②-2 遺物が残らないもの(女谷C支群5・7・8号横穴、荒坂B支群12～14号横穴)

③偶然に玄室が荒らされたり、土器が混じったもの

女谷B支群18号横穴、荒坂B支群4号横穴

④不明

女谷B支群1号横穴

となる。③・④は偶然の所産、不明であるので、以下、①・②について見ていきたい。

まず、②-2は、基本的に小横穴や小穴を穿つ例である。女谷B支群12・17号横穴は小横穴が穿たれているが、骨や遺物が出土しているので②-1に分類している。

小横穴や「穴」を穿つ例は、すべて盗掘を伴っておらず、②-1の横穴を墓所として用いる場合と同じである。盗掘以外の、何らかの明確な目的を有していたことは間違いない。その時期は、墓所として横穴を利用する時期と同じで、平安時代前～中期と判断した。女谷B支群12・17号横穴では、小横穴を穿つ行為と人骨や馬骨を置く行為と重複しており、墓所として利用する行為と小横穴・小穴を穿つ行為は、互いに排他的な行為ではなく、同じ範疇に入る、同様の行為であったと理解できる。小横穴・小穴を穿つ行為は具体的に何を目的とし、埋葬行為とどのように関連したのかは分からないが、少なくとも、平安時代前～中期には、横穴は、墓およびそれに類するものとして利用したと言えるであろう。

①-2については、まず、女谷B支群7号横穴を検討したい。この横穴のみ、2時期の再利用が認められ、その時期は平安時代前～中期と平安時代末である。この横穴では、Ⅱ面の平安時代前～中期の土器が、Ⅰ面の平安時代末の土器と混じって出土しているので、少なくともⅠ面の時点で玄室内が荒らされて、盗掘を受けたことは間違いない。そのため、Ⅱ面では埋葬がなされたのが、Ⅰ面の時点で玄室を掘り返して、荒らしたと考えることも可能である。7号横穴については、2時期で、異なった行為がなされたものと理解したい。

ほかの、盗掘を受けている横穴は1回だけの再利用で、女谷B支群7号横穴では瓦器碗が入れられており、3号横穴の玄室埋土からは、わずかな遺物が出土している。女谷B支群2号横穴の墓道端では、黒色土器が破碎されてばらまかれている。このような土器を入れ込む行為は、玄室内より遺物を取り去ることの、代償行為と考えることが可能である。盗掘行為は平安時代中期に集中して行われており、②-2の埋葬行為とは別の行為ではあるが、埋葬行為がなされた時期と連続しており、埋葬行為と盗掘行為は一続きの目的をもった行為と理解することが可能である。

荒坂B支群6号横穴では、盗掘に伴うような遺物の出土は見られず、可能性としては、同じ時期になされた場合と全く別の時期になされた場合とが考えられるが、決め手はない。

以上のように、横穴の再利用は平安時代前～中期に集中しており、その前半では、墓や小横穴を開けたりして、玄室内の遺物を荒らすようなことはしていない。ところが、後半では、玄室内の遺物を掘り返して持ち去り、その代償行為として、若干の土器を置いている。この平安時代前～中期には、横穴という過去に造られた歴史的な構築物を、人々は、墓やそれに類するものとして利用し、後半にはいわゆる盗掘行為を行うことで、何らかの目的を成し遂げるための資源として利用したのであろう。

(岩松 保)

第9節 女谷・荒坂横穴群の地域的様相

1. はじめに

これまでの発掘調査によって、女谷・荒坂横穴群で検出された横穴は50基以上に及ぶ。このように大規模な横穴群が形成される背景には、どのような要因が存在するのか。それには、時代背景や地理的環境・立地条件などの要因が考えられる。これらの要因が、女谷・荒坂横穴群の形成においてどのような影響を与えたのか、地域に残る地名や伝承なども含めて考えてみたい。

2. 横穴墓の分布

畿内における横穴墓の分布は、極めて限定された分布を示している。たとえば、奈良盆地の東の南北に位置する笠置山の一峰、龍王山の西斜面に、横穴式石室墳279基と一体となって292基の横穴墓が所在する龍王山古墳群や、生駒山の南端に位置する149基の高井田横穴群、金剛山の北端に位置する33基の西群と、22基の東群よりなる玉手山横穴群などが比較的規模の大きな横穴墓群である。そのほかには、赤井谷横穴群や中尾谷横穴群、龍寺山横穴群などが点在している。京都府内においては、丹後地域と南山城地域の木津川左岸に集中して分布している(付表3)。

南山城地域においては、左岸域の八幡市南西部から京田辺市北西部にかけての丘陵に横穴が集中し、八幡市に所在する美濃山横穴群や女谷・荒坂横穴群、狐谷横穴群があり、京田辺市には松井横穴群・堀切谷横穴群などが所在している。これらの横穴群は、群のあり方によって2つに分けることができる。一つは、古墳(横穴式石室墳)と混在して存在するものである。たとえば、奈良県天理市に所在する龍王山古墳群内に混在して存在する横穴群では、石室墳279基・横穴墓292基と基数がほぼ拮抗している例がある。そして、南山城地域の京田辺市に所在する堀切谷横穴群においても、同じような状況を示している。谷を挟んだ北側および東側斜面に穿って2群に分かれて10基の横穴群が存在し、南北にのびる2か所の丘陵上には6基の古墳が存在する。横穴の時期は出土した土師器などから6世紀末～7世紀前葉と考えられ、6世紀代と考えられる堀切谷古墳群から考えると、横穴式石室墳から横穴へと推移していったと思われる。一方、八幡市に所在する女谷・荒坂横穴群、狐谷横穴群や京田辺市の松井横穴群などは、古墳と混在しない横穴墓単独の群をなしている。

3. 女谷・荒坂横穴群の立地

南山城地域では、後期の大型古墳や大規模な群集墳が未発達であり、横穴式石室墳が数基から10数基程度のまとまりで散在していることは木津川流域を通じた様相であるが、左岸域には数多くの横穴が存在しているのが顕著な特色といえる。なかでも、八幡市南西部から京田辺市北西部にかけての丘陵に横穴が集中している(第18図)。この地域一帯は、当時から交通の要所として重要な場所であったといえる。北には水運の拠点であった巨椋池と淀川、西は丘陵を谷筋に沿って抜けると河内国樟葉(枚方)に至り、東は木津川と古代の幹線道路であった古山陰道が通る重要な場所である。

付表3 丹後・南山城地域の横穴一覧

丹 後 地 域

久美浜町								
名称	所在地		基数	調査有無	出土遺物	時期	現状	備考
	大字	小字						
長柄横穴群	長柄	城の丘	7			古墳	?	
王の宮横穴群	須田	東側	11			古墳	完存・半壊	
下西谷横穴	金屋	下西谷	1			古墳	?	
白川横穴群	奥三谷	白川・マガリ	4			古墳	完存・半壊	
谷横穴	谷		1			古墳	?	
網野町								
三反田横穴群	下岡	三反田	10	?	土師器・須恵器	古墳	半壊	
弥栄町								
住地横穴	溝谷	住地	1	?	須恵器	古墳後期	全壊	
飛谷横穴群	堤	飛谷	2			古墳	全壊	
峰山町								
舟泉寺横穴群	荒山	松谷	3	1951	金環・土師器・須恵器	古墳	消滅	
丸山横穴	古殿	丸山	1	?	金環・鉄刀・須恵器	古墳	全壊	
目谷横穴群	新治	目谷	8			古墳	全壊	
船山横穴	二箇	相之目	1	?	須恵器	古墳	消滅	
下山横穴群	五箇	船岡	11	1980・1994	玉類・金銅金具・刀子・土師器・須恵器・人骨	古墳後期	消滅	
脇谷横穴	五箇	脇谷	2	?	須恵器	古墳	全壊	
筏ヶ鼻横穴群	五箇	新宮	5			古墳	全壊	
高尾坂横穴	橋本	高尾坂	1			古墳	完存	
八幡山横穴	杉谷	寺替	1	?	須恵器	古墳後期	全壊	
大宮町								
エノボ横穴群	口大野	エノボ	2	1994・1996	土師器・須恵器・銭貨	古墳・中世	消滅	半地下式
裾谷横穴群	口大野	裾谷	2	1995	土師器・須恵器・動物形土製品・焼骨	飛鳥～奈良	消滅	
丸山横穴群	上常吉	丸山	?	?	須恵器	古墳	半壊	
大谷西横穴群	谷内	山ノ口・大谷	5			古墳	完存	
有明横穴群	三坂	有明	9	1985・1993	土師器・須恵器・鉄滓・鉄鏃・陶器・人骨	古墳後期	消滅	
大田鼻横穴群	三坂・周积	新田・セイゴ	30	1985・1987	土師器・須恵器・金環・鉄鏃・人骨	古墳後期～飛鳥	消滅	
猫山横穴	周积	猫山	1	?	土師器・須恵器	?	全壊	

左坂B横穴状遺構	周枳	左坂	2	1991		中世	消滅	横穴状遺構
左坂C横穴状遺構	周枳	幾坂	2	1991		近世以降?	消滅	横穴状遺構、貯蔵穴か
左坂D横穴状遺構	周枳	四十田ほか	2	1991		?	消滅	横穴状遺構
左坂A横穴群	周枳	左坂	6	1992・1996	土師器・須恵器・金環・鉄製品・人骨	飛鳥・奈良	消滅	A1・2号は未調査(平安・中世に再利用)
左坂B横穴群	周枳	左坂	13	1994	土師器・須恵器・金環・鉄製品・鉄滓・人骨	飛鳥・奈良	消滅	(平安・中世に再利用)
左坂C横穴群	周枳	幾坂	2				半壊	
里ヶ谷横穴群	周枳	幾坂	6	1992	土師器・須恵器・金環・刀子・人骨	古墳後期・飛鳥	消滅	
彦四郎横穴	久住	彦四郎	1			古墳	全壊	
伊根町								
小泊横穴	泊	小泊	1	?	須恵器・人骨	?	?	洞穴を利用? 組合式木棺
岩滝町								
城山横穴	岩滝	城山	1	?	土師器	古墳	半壊	
野田川町								
古屋敷横穴群	三河内	古屋敷	3				半壊・完存	
加悦町								
こもり穴横穴	温江	百合	1	?	土師器	古墳中期	半壊	
入谷横穴群	明石	入谷	2	?	人骨	?	半壊	

南山城地域

八幡市								
美濃山横穴群	美濃山	大塚	6	?	金環・切子玉・刀子・土師器・須恵器	古墳後期後半	?	1・6号を調査?
荒坂A支群	美濃山	御毛通	23	2001～2002	18号より土管、23・24号から須恵器・土師器	古墳後期後半	半壊?	18号は近世の導水施設
荒坂B支群	美濃山	御毛通	20	2002	金環・馬具・ガラス玉・土師器・須恵器・埴輪・人骨	古墳後期後半	消滅	19・20号は地下保存
荒坂C支群	美濃山	御毛通	2	2002	土師器・須恵器	古墳後期後半	消滅	
女谷A支群	内里	女谷	4				半壊?	1基陥没時発見
女谷B支群	内里	女谷	15	1999～2002	金環・鉄器・土師器・須恵器・人骨	古墳後期後半	消滅	
女谷C支群	内里	女谷	8	2002	金環・鉄器・土師器・須恵器・人骨	古墳後期後半	消滅	

狐谷横穴群	美濃山	狐谷	11	1983	金環・土師器・須恵器・人骨	古墳後期後半	地下保存	1・10・11号は未調査
京田辺市								
松井横穴群	松井		19	?	金環・土師器・須恵器	古墳後期後半	半壊?	9基開口
堀切谷横穴群	薪	堀切	10	1979	金環・土師器・須恵器・人骨	古墳後期後半	消滅	
飯岡横穴群	飯岡	久保田	2	1978	土師器・須恵器・瓦器・陶磁器	古墳後期後半	完存	
山城町								
北谷横穴群	北河原	北谷	2	?	須恵器	古墳後期	完存	

調査以前、この丘陵部一帯は、これまで竹藪であったことや、崩落しやすい大阪層群の地質によって地形の変化が著しいこと、丘陵の谷部分が埋没していたことから、横穴の実数を把握することは困難であった。しかしながら、近年の発掘調査の成果によって南山城地域最大の横穴群集地帯であったことが分かってきた。

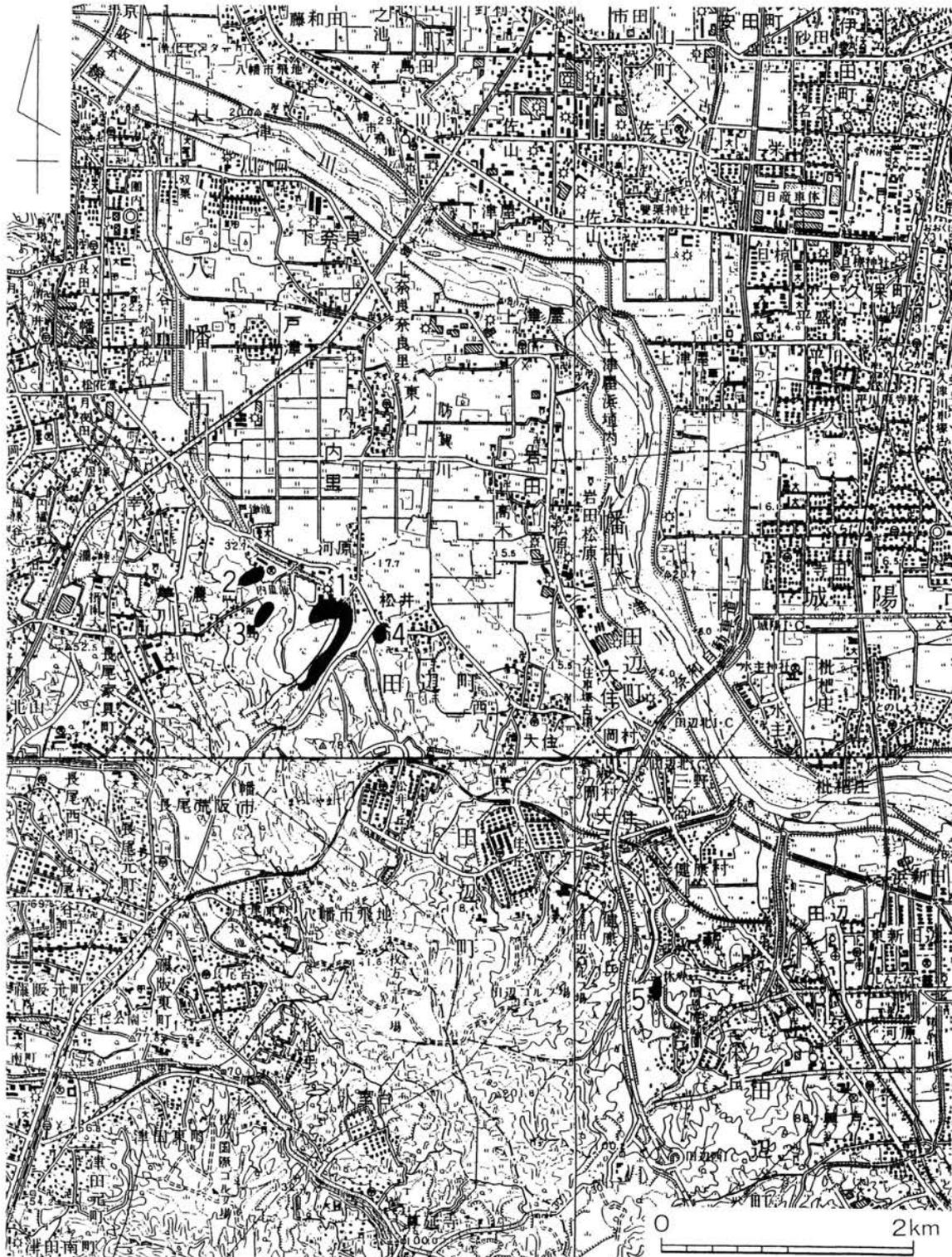
4. 歴史的背景—大住隼人との関係—

南山城地域で横穴が集中する木津川左岸の八幡市南西部から京田辺市北西部にかけての丘陵一帯は、大隅隼人の伝承地として知られている。隼人が奈良朝以前の勅令により、舞人として移住させられた先がこの地域である。大隅隼人の移住先は大住村に、薩摩隼人は薪(たきぎ)村に、日向隼人は松井村に移住したとされる。これらの村は、京田辺市の町名として今も残っている。大住という地名は、10世紀前半の分類体の漢和辞書『和名類聚抄』に記す「大住郷」の大住で、南九州の大隅国の大隅に由来する。後に大住荘と呼ばれるようになるのも、このあたりには南九州の大隅隼人などの人々が居住したことに基づいている。大住荘内には隼人司領が存在し、大隅隼人の移住地は、山城国綴喜郡大住郷(京田辺市)が唯一の場所とされている。そのほかには、山城国綴喜郡田原郷(宇治田原町)、丹波国桑田郡佐伯郷(京都府船井郡八木町氷所)に隼人司領があった。八木町氷所は、阿多隼人の移住地の一つで、亀岡市の北西部に隣接する平野部と、山間の境に位置する八木町の地域である。また、畿内では、近江国栗太郡龍門(滋賀県大津市大石龍門周辺)・近江国滋賀郡古市郷(滋賀県大津市膳所、石山周辺)・河内国萱振保(大阪府八尾市萱振町周辺)・大和国宇智郡阿陀郷(奈良県五條市阿田地区周辺)の移住地がある。鹿児島県人のことを薩摩隼人と呼称するが、元々の隼人とは阿多隼人・大隅隼人などのことで、薩摩隼人は後世にでてきた名称である。隼人は古くから朝廷などに仕え、畿内には、多数の阿多隼人が移住していた。平安京に都が移った際も、綴喜郡内では、阿多隼人と大隅隼人は、宇治方面(宇治川)と京田辺方面(木津川)とに、勢力を二分するような形で駐屯していたといわれる。

また、阿多隼人・大隅隼人は、隼人司や、左右の衛門府に仕えて御所を守り、色々な行事などの先導役や警護役として働いたとされている。そして隼人司に所属した人々には、歌舞の隼人と

油絹や竹器の製作にあたった作手(さくて)の隼人がいたようである。このように大住には隼人に係わる伝承・地名・文献が多岐にわたって残されている。

隼人は、6世紀頃に薩摩半島南部から畿内の各地に移住して、大和朝廷のさまざまな儀式に奉



第18図 木津川左岸の横穴分布(国土地理院1/50,000京都東南部・同西南部・大阪東北部・奈良)

- | | | |
|-------------|-----------|----------|
| 1. 女谷・荒坂横穴群 | 2. 美濃山横穴群 | 3. 狐谷横穴群 |
| 4. 松井横穴群 | 5. 堀切谷横穴群 | |

仕した。文献で「大隅隼人」が登場するのは、『日本書紀』卷第二十九の天武十一(682)年に「隼人多く来たり、方物を貢す。是日、大隅隼人、阿多隼人朝廷に相撲す」「秋七月の壬辰の朔甲午に、隼人、多に来て、方物を貢れり。是の日に、大隅の隼人と阿多の隼人と、朝廷に相撲る。大隅の隼人勝ちぬ。(中略)戊午に、隼人などに明日香寺の西に饗たまふ」とある。これは天武朝のころと考えられ、隼人が多く来て方物を献上し、大隅の隼人と阿多の隼人が相撲をとり、さまざまな楽を奏したと書かれている。また、天武天皇十四(685)年六月、大隅直(おおすみのあたえ)に忌寸(いみき)の姓を与えたと記載されている。大隅直は大隅隼人の首長の氏である。正倉院文書の「隼人計帳」には、大住郷の計帳断簡で、76名の隼人の名が列ねられている。

南九州の隼人の朝貢が制度化されたのは和銅2(709)年の10月であるが、その貢上の期間を6年交替にしたのは霊龜2(716)年の5月である。これらの貢上隼人は「今来(いまき)の隼人」と呼ばれたが、畿内およびその周辺に定住した隼人の人々もいた。『延喜式』や中原康富の日記『康富記』には、山城・大和・摂津・河内・和泉・近江・丹波・紀伊に隼人が居住していたことが記されている。

この地域には、まだ特記すべき伝承がある。それは「筒城宮」についてであり、二つの伝承が残る。一つは、仁徳天皇の皇后磐之媛の伝承に関するものであり、いま一つは継体天皇の筒城宮である。これは、北国に興った継体天皇が河内国樟葉で即位し、20年の後、大和国磐余宮に入るまで、山背国筒城宮、さらに弟国宮と遷宮を重ねたというものであり、この地が継体擁立の主要な勢力として活躍したことを思わせる伝承である。

5. ま と め

これまで、南山城地域の_{大住}地域周辺に広がって分布する横穴を、「隼人の墓」であると考えられる説が強く存在する。それは、これらの地名伝承や文献史料中の隼人にまつわる記載などが、この地域での埋葬施設として横穴を採用した一つの要因と結びつけられている。また、横穴の形態が南九州地方の地下式横穴の影響を受けていることも、隼人と関連付けてこの説が支持されている理由である。

また、大住の南方に位置する京田辺市薪の堀切谷7号墳から出土した、武人を表す人物埴輪の顔に刺青の線刻がある。その特異な風俗から隼人との関連性が注目されており、この地域一帯に住んでいたとされる隼人の墓ではないか考えられている。

文献などによって、この地域に隼人が移住してきたことを読み取ることはできよう。しかしながら、これまでの調査では、横穴から隼人の墓であると示すような特徴的な遺物などの手がかりは出土していない。ましてや、現時点において隼人が住んでいたとされる集落の特定もできていない状況である。状況証拠は揃っているが、確実なものが存在せず推測の域を出ないのも現状である。また、横穴が穿たれた大阪層群の地質は、砂と礫の互層になっており、非常にもろく崩れやすい地層であるのにも係わらず、なぜ、この地に50基以上の横穴を造る必要があったのか。この地域に横穴が造られた要因について、今後も検討が必要である。

今後の発掘調査によって、南九州地域の特徴をもつ遺構・遺物などの発見や、近隣の同時期の集落跡との関連についての検討が進めば、隼人との関係についてもより明確になって行くのではないだろうか。

(村田和弘)

第6章 総括

今回の女谷・荒坂横穴群の調査により、南山城地域の横穴に関して新たな知見が得られ、従来の考えに変更をもたらすものとなった。

まず、横穴はその保存状況が非常に良く、横穴の構造がよく分かるようになった。また、女谷B支群のように、平野に面しない谷の両斜面に横穴が造られており、こういったあり方は、今までに知られていないものである。また、玄室に通じる墓道には、水抜きのための土坑が掘られたり、底面に砂を敷いたりして、雨水の処理に気を配ったものであった。玄室の閉塞・開口方法についても、一定の理解が得られるようになった。加えて、玄室内の空間が極めて狭いこと、玄室に進入する際の開口も極めて小さいことも、判明したことのひとつである。そして、人骨の改葬のあり方から、当時の葬送儀礼の一端を明らかにでき、当時の人々の他界観念を理解するための一助となろう。

支群内の横穴の分布を見ると、1～4基で一つの単位となっており、そういった単位は、一家族が継時的に横穴を造っていったその集積の結果と理解した。女谷・荒坂横穴群では、まず、荒坂B支群の南半で造墓が始まり、その後、墓域が整備されて、全支群で造墓が行われるようになったが、この時点で横穴を造れる家族数が飛躍的に増大している。

横穴は、北側の女谷横穴群、南側の荒坂横穴群と切れ目なく続いていることが明らかとなった。そのため、この周辺の丘陵裾は、総長400m以上にわたって50基以上の横穴が造られて、一つの大きな墓地であることが判明した。そうすると、その分布の密度と範囲より、未調査地を含めると200基近くの横穴が分布しているものと推定でき、その基数の多さより、一集落の墓地ではなく、複数の集落がこの一帯を墓地として利用していたと判断した。そして、それぞれの集落が無秩序に横穴を造ったのではなくて、小群ごとに横穴の主軸を揃えて整然と造られている点より、小群を作る集団一家族を単位として、ある一定の空間が予め“占有”されていたことを想定せしめた。そのためには、この地を墓域として選定した当初から、広範囲に墓地の範囲が決められて造成されている必要性を認め、小群や支群を繋ぐような通路が存在している点や古墳を壊して墓地を造成している可能性などから、そういった広範囲の墓地を必要とし、それを実際に造れるような社会的条件がこの地域に実現していたのであろう。こういった点より、ある計画のもとに墓地の造成がなされたものと考えられ、強力な地域権力により束ねられていたのであろう。

最後に、大住隼人と横穴の関係について一言触れておかねばならないであろう。今回の一連の横穴調査の結果、大住隼人と積極的に結びつけるような事実は認められなかった。従来、言われているような、地下式横穴墓は全くなく、すべて、丘陵斜面に横方向の坑を穿ち、その前面に羨道や墓道を付設するものであった。とは言っても、これらの横穴が大住隼人が造った可能性まで

も否定するものではなく、少なくとも、この地に移住させられた大住隼人が彼の地で営んだ地下式横穴墓を造らなかったと言えるだけである。この地で横穴を造るように“強制”されて横穴を造った可能性は否定できない。隼人と横穴の関係については、未だ決着がつかないというところで、今後の検討課題と言わざるを得ない。

(岩松 保)

- 注1 独立行政法人奈良文化財研究所人骨鑑定研修履修 石崎調査員の現地での鑑定による。その後、人骨の破損が著しく、詳細は不明である。
- 注2 久保田(1983)および八幡市教育委員会保管の遺物を実見。
- 注3 『天理市石上・豊田古墳群Ⅰ 奈良県文化財調査報告書』第20集 奈良県教育委員会 1975
- 注4 耳環(876)は、実測・写真を終えていたので、報告書には掲載してあるが、整理作業中に紛失してしまった。
- 注5 玄室内の調査時に、雨水の水抜き作業を行ったところ、耳環1点と若干の玉を紛失した。
- 注6 京都大学大賀克彦氏のご教示による。大賀(2001)参照。
- 注7 人骨の再整理中に、腐食した人骨の塊から刀子2点が出土した(未実測)。
- 注8 中国、朝鮮半島ともに、盛矢具を身につけるのは騎馬人物ではなく、武装した歩兵であることがこれまでの先行研究で分かっているが、日本でも馬具や馬が伴う出土例は確認できなかったため、現在のところ歩兵が身につける矢鏃入れとして盛矢具を考えている。胡籙もまた同様のものとしてここでは考えている。
- 注9 胡籙の編年に関しては、早乙女雅博「東アジアの盛り矢具」(『東京国立博物館紀要』第23号 東京国立博物館) 1988を参考にした。
- 注10 女谷B支群の谷を埋める土砂の花粉分析を行ったが、花粉化石の遺存状態がよく無く、横穴墓地以前の土地利用状況はよく分からなかった(付編Ⅱ-2参照)。
- 注11 現地調査および人骨の整理作業においては、京都大学人類学研究所片山一道先生に多大なご助言・ご教示をいただき、骨の取り扱い方から骨の同定および死亡推定年齢、生前の身体的特徴に至るまで、専門的な指導を受けた。
- 注12 片山一道先生ご教示による。
- 注13 春成秀爾「哀悼抜歯」(『国立歴史民俗博物館研究紀要』第83集 国立歴史民俗博物館) 2000
- 注14 タイプ①に対するものとして、前稿(岩松2002a, p.8)では“後かたづけ”や“(奥壁)集積”と表現したが、その後の発掘調査および整理の結果、本文中のように考えるに至ったものである。現時点では、通常使われる意味での後かたづけ—追葬を行うためのスペースを空けることを目的として、複数個体の骨を奥壁部に乱雑に集積させたものは、女谷・荒坂横穴群の一連の調査では全く認められない。

参考文献

- 崔鐘圭「盛矢具考」(『博物館研究論集1』釜山市立博物館) 1992
- 李賢淑「百濟盛矢具に対する検討—天安龍院里遺跡出土品を中心として—」(『百濟文化』28 公州大学校百濟文化研究所) 1999
- 全五年「東萊福泉洞第22号墳出土胡籙金具を通じてみた胡籙の復原」(『伽耶通信』第11・12合輯号)

1985

釜山大学校博物館『東萊福泉洞古墳群Ⅰ』 1983

赤松一秀・榊井豊成「上奈良遺跡発掘調査概報」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第16集 八幡市教育委員会) 1994

赤松一秀「女郎花遺跡第2次発掘調査概報」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第21集 八幡市教育委員会) 1996

赤松一秀・山田康雄・榊井豊成「女郎花遺跡(第2次)発掘調査概報(遺物編)」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第23集 八幡市教育委員会) 1997

赤松一秀「上奈良遺跡第2次発掘調査概報」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第22集 八幡市教育委員会) 1997

赤松一秀「上奈良遺跡第3次発掘調査概報」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第24集 八幡市教育委員会) 1998

荒川史「内里八丁遺跡 第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡・新田遺跡)昭和63年度・平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第38冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

伊賀高弘「荒坂遺跡 京都南道路関係遺跡平成4年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第56冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

池上悟『考古学ライブラリー6 横穴墓』 ニュー・サイエンス社 1984

池上悟『考古学選書 日本の横穴墓』 雄山閣 2000

岩松保「女谷横穴(B支群)第2次調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第80号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

岩松保・柴暁彦「女谷横穴群 第二京阪道路関係遺跡平成12年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第101冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

岩松保 a 「荒坂横穴 B・C 支群の調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第83号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002

岩松保 b 「女谷横穴群 第二京阪道路関係遺跡平成13年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第105冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002

岩松保 c 「荒坂横穴群 第二京阪道路関係遺跡平成13年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第105冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002

岩松保 d 「荒坂遺跡 第二京阪道路関係遺跡平成13年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第105冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002

岩松保 e 「女谷横穴群(B支群)」(『京都府埋蔵文化財情報』第85号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002

岩松保・上田真一郎「八幡市女谷・荒坂横穴群における改葬の実例」(『京都府埋蔵文化財情報』第87号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003

大賀克彦「インド洋の紅い風 mutisalah beadsの東伝」(『2001年度企画展 古代の技術を考えるⅡ ガラスのささやき 古代出雲のガラスを中心に』 鳥根県立八雲立つ風土記の丘) 2001

岡崎研一「新田遺跡第6次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第94冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000

奥村清一郎「南山城の横穴」『京都考古』27 1982

奥村清一郎「八幡地区圃場整備事業関係遺跡 昭和58年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』

- (1984) 京都府教育委員会) 1984
- 北郷泰道「地下式横穴出土の胡録金具」『宮崎考古』第6号 1980
- 久保田健士「狐谷横穴群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第5冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- 久保田健士「狐谷横穴群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第8冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 小池寛「荒坂遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第85号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002
- 小林行雄「黄泉戸喫」(『古墳文化論考』 平凡社) 1976
- 小森俊寛「土師器・黒色土器・瓦器」(『平安京提要』(財)古代学協会・古代学研究所編集 角川書店) 1994
- 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」(『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所) 1996
- 五来重『日本人の死生観』 角川選書 1994 p.219
- 佐藤虎雄「美濃山の横穴」(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第10冊 京都府) 1929
- 早乙女雅博「東アジアの盛り矢具」(『東京国立博物館紀要』第23号 東京国立博物館) 1988
- 柴暁彦 a 「荒坂遺跡 第二京阪道路関係遺跡平成12年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第101冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 柴暁彦 b 「荒坂横穴群 第二京阪道路関係遺跡平成12年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第101冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 白石太一郎「ことどわたし考」(『橿原考古学研究所論集 創立35周年記念』吉川弘文館) 1975
- 末永雅雄『日本上代の武器』 1941
- 鈴木重治・真鍋昌宏・大竹弘之ほか「京都府綴喜郡田辺町 古屋敷遺跡・飯岡横穴発掘調査報告書」(『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第1集 田辺町教育委員会) 1980
- 平良泰久「南山城の後期古墳と氏族」(『京都考古』14) 1975
- 高橋美久二「堀切横穴群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1969)』 京都府教育委員会) 1969
- 高橋美久二「女谷横穴について」(『京都考古』2) 1974
- 高野陽子・森島康雄ほか『佐山遺跡 京都府遺跡調査報告書』第33冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003
- 竹井治雄・筒井崇史「新田遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第94冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- 竹原一彦・荒川史「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡)平成2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第41冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 竹原一彦「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第46冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 竹原一彦「内里八丁遺跡 第二京阪道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第51冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 竹原一彦・筒井崇史「内里八丁遺跡 京都南道路関係遺跡平成4年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第56冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 竹原一彦 a 「内里八丁遺跡 京都南道路関係遺跡平成5年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第61冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

- 竹原一彦 b 「荒坂横穴群 京都南道路関係遺跡平成 5 年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第 61 冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 竹原一彦 c 「内里八丁遺跡 第二京阪自動車道関係遺跡平成 6 年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第 67 冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 竹原一彦・森下衛『内里八丁遺跡 I 京都府遺跡調査報告書』第 26 冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999
- 田中新史「古墳出土の胡籙・靱金具」(『井上コレクション弥生・古墳時代資料図録』小川貴司編 言叢社) 1998
- 田中良之「古墳被葬者の親族関係」(『古墳時代の親族構造の研究』 柏書房) 1995
- 田辺郷土史会編『田辺町郷土史・古代篇』 1959
- 田辺昭三『陶邑古窯址群』 I 平安学園考古学クラブ 1966
- 都出比呂志「古墳時代首長系譜の継続と断絶」(『待兼山論叢』第 22 号 大阪大学文学部) 1988
- 中村周平・竹原一彦ほか『佐山尼垣内遺跡 京都府遺跡調査報告書』第 31 冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001
- 中村浩『和泉陶邑窯の研究』 柏書房 1981
- 西田直二郎『京都府綴喜郡 大住村史』 京都府綴喜郡大住村 1951
- 林正ほか「京都府田辺町堀切古墳群調査報告書」(『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第 11 集 田辺町教育委員会) 1989
- 林巳奈夫『中国殷周時代の武器』 京都大学人文科学研究所 1972
- 榊井豊成「女郎花遺跡発掘調査概報」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第 17 集 八幡市教育委員会) 1995
- 村田和弘「女谷横穴 C 支群」(『京都府埋蔵文化財情報』第 82 号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 村田和弘「荒坂横穴群(A・B 支群)」(『京都府埋蔵文化財情報』第 85 号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002
- 村田太平編『京都府田辺町史』 1968
- 森下衛「内里八丁遺跡 第二京阪自動車道関係遺跡平成 7 年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第 73 冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 森下衛「内里八丁遺跡 第二京阪自動車道関係遺跡平成 8 年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第 78 冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- 森下衛「内里八丁遺跡 第二京阪自動車道関係遺跡平成 9 年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第 84 冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- 森下衛・柴暁彦「内里八丁遺跡 第二京阪道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第 90 冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 森下衛・柴暁彦『内里八丁遺跡 II 京都府遺跡調査報告書』第 30 冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001
- 森島康雄・近江俊秀ほか「瓦器椀」(『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社) 1995
- 八十島豊成 a 「女郎花遺跡発掘調査概報(第 4 次)」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第 27 集 八幡市教育委員会) 1999
- 八十島豊成 b 「女郎花遺跡発掘調査概報(第 3 次・第 5 次)」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第 28 集

八幡市教育委員会) 1999

横山浩一「手工業生産の発展 土師器と須恵器」(『世界考古学大系 日本Ⅲ 古墳時代』第3巻 平凡社) 1959

『京都府遺跡地図(第2版)』第5分冊 京都府教育委員会 1985

『京都府遺跡地図(第3版)』第1分冊 京都府教育委員会 2001

『京都府遺跡地図(第3版)』第3分冊 京都府教育委員会 2003

『八幡市誌』第1巻 八幡市誌編纂委員協議会 1986

『八幡市遺跡地図』 八幡市教育委員会 1990

付編 自然科学的方法による分析結果

I. 古墳時代出土人骨の観察

上田 真一郎

1. 女谷B支群1号横穴出土人骨(人骨1・2)

保存状態

人骨1では頭蓋骨、下顎骨、肋骨、椎骨^{ついきつ}、上腕骨^{しやうこんつ}、尺骨、腰骨、大腿骨、脛骨^{けいこつ}、腓骨^{ひこつ}、および手足の骨が残る。これらの骨はいずれも保存状態が悪く、完存するものは皆無である。取り上げの段階でも破損が進行していき、現地での取り上げ前の段階以上に観察は行えない。

人骨2は、歯が1個と骨種不明の骨片が数点残るのみである。全体的に風化が進行しており、観察は行えない状況である。

(1)人骨1

頭蓋骨

頭蓋骨は破損が著しく、頭蓋底の一部と上顎の歯以外は遺存していない。歯は、右の中切歯、側切歯、第2小白歯、第1および第2大臼歯、左の第1および第2大臼歯が遺存している。

下顎骨には右の第1・2大臼歯が釘植しており、その周辺の歯槽部が遺存している。また、小白歯が3個と大臼歯が1個遺存するが、遊離歯であり歯種は判別できない。

体幹骨

肋骨の遺存状態は悪く、骨体のみが遺存する。ほとんどが細片で、詳細は分からない。

椎骨は1個体だけが確認できるが遺存状態は悪く、詳細は分からない。

上肢骨

上腕骨は左右ともに遺存する。右は両端部を損失しており、左は骨体の一部が残存する。

尺骨は1個体遺存する。遺存状態は非常に悪く、詳細は分からない。

手骨については、中手骨と思われる骨体が1個体遺存するが詳細は分からない。

下肢骨

腰骨の遺存状態は悪く、その形状から右の腸骨の一部と思われるが、詳細は分からない。

大腿骨は左右ともに遺存する。どちらも両端を損失し、骨体のみが残存する。

脛骨は左右ともに遺存する。右は顆間隆起^{かかんりゅうき}周辺部が残存するが、下端部は失われている。左は両端部が損失しており、骨体中央部だけが残存する。

腓骨は左右ともに遺存する。どちらも両端を損失し、骨体のみが残存する。

性別・死亡年齢・身体特徴

いずれも不明であるが、上顎歯と下顎骨に釘植していた大白歯の咬耗から判断するのならば、まだ咬耗がエナメル質内で留まるため、死亡年齢を壮年(25~40歳程度)前半あたりの段階に考えられる可能性もある。

(2)人骨 2

頭蓋骨

歯はエナメル質片のみ遺存する。破損が著しく詳細は分からない。

そのほか

骨種不明の骨片が数点遺存する。長管骨の骨体の破片である可能性が高いが、遺存状態が悪く詳細は分からない。

性別・死亡年齢・身体特徴

いずれも不明である。

2. 女谷B支群9号横穴出土人骨(人骨3)

保存状態

歯が1個残る。保存状態は悪い。

頭蓋骨

歯はおそらく大白歯であり、歯冠部のみが遺存している。歯種は判別できない。

性別・死亡年齢・身体特徴

いずれも不明である。

3. 女谷B支群11号横穴出土人骨(人骨4・5)

保存状態

人骨4としては頭蓋骨、上肢長管骨、下肢長管骨、骨種不明の骨片が、人骨5としては歯、骨種不明の骨片が残る。保存状態は兩人骨ともに悪く、詳細な観察は行いえない。遺存点数も人骨4で10点程度、人骨5で数点程度である。

(1)人骨 4

頭蓋骨

頭蓋骨は、左側頭骨と後頭骨を中心とした部分が遺存する。細片となっているものは、おそらくはその周辺箇所のものと思われる。側頭骨では乳様突起が、後頭骨では外後頭隆起がそれぞれ遺存しており、性別の判定に用いた。

上肢骨

遺存している骨体の特徴から、上肢長管骨と考えられる骨が2個体程度あるが、破損が著しいため詳細は分からない。

下肢骨

遺存している骨体の特徴から、下肢長管骨と考えられる骨が2個体程度あるが、破損が著しい

ため詳細は分からない。

性別

性別の判定には頭蓋骨を用いた。乳様突起、外後頭隆起の発達を確認できることから、当人骨が男性骨である可能性が高い。

死亡年齢・身体特徴

いずれも不明である。

(2)人骨 5

頭蓋骨

頭蓋骨は全く遺存していない。歯は大白歯の歯冠部2個が判別できるが、ほかはエナメル質の破片のみが遺存している。ともに歯種は判別できない。

そのほか

骨片が遺存するが、骨種不明で詳細は分からない。

性別・死亡年齢・身体特徴

いずれも不明であるが、大白歯の歯冠部の咬耗を観察する限りでは、深く象牙質まで咬耗が到達しているため、死亡年齢を壮年後半以降に考えられる可能性がある。

4. 女谷B支群11号横穴出土人骨(人骨 6)

保存状態

骨種不明の骨片と歯のエナメル質が遺存。保存状態は悪く、詳細な観察は行えない。

頭蓋骨

歯のエナメル質が遺存するのみで、詳細な観察は行えない。

そのほか

骨種不明の骨片があるが、破損が著しいため詳細は分からない。

性別・死亡年齢・身体特徴

いずれも不明である。

5. 女谷B支群15号横穴出土人骨(人骨 7)

保存状態

頭蓋骨、下顎骨、肋骨、椎骨、上腕骨、尺骨、橈骨^{とうこつ}、大腿骨、脛骨、腓骨、および手足の骨など、遺存する骨はほぼ全身に及ぶ。遺存している骨は概ね保存状態は良いと言えるが、完存するものは皆無である。

頭蓋骨

頭蓋骨は、前頭骨の眼窩上縁部から頭頂骨と後頭骨にかけて遺存しているが、側頭骨は左右ともに失われている。頭蓋底や顔面頭蓋は全く遺存していない。上顎骨は出土していないが、上顎の大白歯(歯種不明)が1個遺存する。

下顎骨は、右の筋突起、関節突起、および左の筋突起、下顎角から下顎枝^{かがくし}を損失している。歯は、右の犬歯、第2小白歯、第1大白歯、左の側切歯、犬歯、第1小白歯、第1および第2大白歯が釘植している。そのほかの切歯および右第1小白歯は歯根のみが釘植している状態で、歯冠部は壊れている。左第3大白歯の萌出は、下顎枝周辺を欠いているために確認できない。右第3大白歯は歯槽が閉鎖している。

体幹骨

肋骨の遺存状態は極めて悪く、骨体と判断される骨片のみが数点残り、詳細は分からない。左の第1肋骨だけ遺存状態が良好で、骨頭から骨体にかけて残存する。

椎骨は2個体遺存する。遺存状態は悪いが、頸椎と腰椎とにそれぞれ同定できる。

上肢骨

鎖骨は左だけが遺存する。骨体のみが残存し、肩峰端^{けんぽう}付近の下面部において異常骨増殖らしき突出部位が観察できる。

肩甲骨は左だけが遺存する。関節窩^{かんせつか}の周辺部のみが残存する。

上腕骨は左右ともに遺存する。右は骨体中央部と上腕骨頭の一部が残存し、左は両骨端部を損失する。

尺骨は左右ともに遺存する。ともに肘頭部はほぼ完形をとどめるが、骨頭は損失している。

橈骨は右だけが遺存する。骨体から茎状突起^{けいじょうとつき}にかけて残存するが、粗面より上は損失している。

手骨については、右の第4中手骨が遺存する。端部を若干損失するのみで、ほぼ完存している。

下肢骨

腰骨の遺存状態は非常に悪い。おそらく腸骨の一部と考えられるが、詳細は分からない。

大腿骨は左右ともに遺存する。どちらも両端を損失し、骨体のみが残存する。右側では頸部の一部も残存する。

脛骨は左右ともに遺存する。右脛骨は顆間隆起から骨体下部に至る部分が残存するが、下端部は損失している。左脛骨は骨体が残存するのみである。

足根骨は、右距骨^{きよこつ}と左立方骨が出土した。距骨は下半部が、立方骨は右半部が壊れている。右第1中足骨も遺存しており、遺存状態は良好でほぼ完存する。

性別

性別の判定には頭蓋骨を用いた。眉間の隆起、外後頭隆起が発達することから、男性骨と推測できる。また、骨格全体に骨太な印象を与えることも、男性骨であるという判断を肯定する。

死亡年齢

どの長管骨も骨端部を損失しているため、骨端部での癒合状態を観察することができない。頭蓋骨は冠状縫合と矢状縫合^{しじょう}が内板で癒合しているのに対して、外板は矢状縫合の一部で癒合が見られ、そのほかの部分は開放したままである。これらの点から、死亡年齢を壮年段階後半と考えることができる。さらに、左第2大白歯の咬耗が象牙質に達していることも、その年齢と矛盾し

ない。総合的に判断すると、その段階で死亡した可能性が高いと思われる。

身体特徴

上腕骨で三角筋粗面の発達を観察することができる。この部分の発達は上腕部の筋肉の発達を意味することから、生前頑強な上腕部の持ち主であったと推測できる。大腿骨は、殿筋粗面が発達し、柱状性が著しいことから、下肢筋がよく発達していた可能性が高い。全体的に見て体格の良い人物であったと判断されよう。身長は不明である。

また、左右の脛骨の骨体断面積に顕著な差が認められ、右側のほうが一回り近く太い。その原因については不明である。

6. 女谷B支群16号横穴出土人骨(人骨8～11)

保存状態

当横穴出土の人骨は4体ともに保存状態が悪い。人骨8では頭蓋骨、下顎骨、骨種不明の骨片があり、人骨9では頭蓋骨、下顎骨、肋骨、上腕骨、尺骨、足根骨がある。人骨10は歯の破片と下顎骨しか残っておらず、人骨11は頭蓋骨、下顎骨、尺骨、中手骨、脛骨、腓骨が残る。人骨8および人骨9の下顎骨は取り上げ後にもまだ原形をとどめていたが、ほかの骨は取り上げ時に大きく破損するほどに風化が進んでいた。遺存点数も人骨10で数点程度しかなく、ほかの3体も10点前後にとどまる。

(1)人骨8

頭蓋骨

頭蓋骨は、左半部と前面がすべて失われており、右側頭骨と後頭骨の一部のみが遺存する。上顎骨は遺存しないが、頭蓋骨の内側から切歯と小臼歯が1点ずつ出土している。歯種は判別できない。

下顎骨は、左右の筋突起、下顎枝を損失するものの完形に近い。歯は両中切歯のみ失われているが、ほかは釘植している。第3大臼歯は左右ともに萌出した痕跡は認められない。

そのほか

骨種不明の骨片が数点遺存するが、詳細は分からない。

性別・死亡年齢・身体特徴

性別・身体特徴は不明である。下顎の第3大臼歯が未萌出であることと、第1・2大臼歯の咬耗がエナメル質内でとどまっていることから、死亡年齢は20歳前後であったかもしれない。

(2)人骨9

頭蓋骨

頭蓋骨の遺存状態は悪く、右顔面頭蓋と右前頭骨および右後頭骨の一部が遺存するのみである。左半部は完全に失われ、右側頭部も土にその痕跡を残すのみである。上顎骨も遺存状態は悪く、釘植している歯もかろうじて判別できる程度である。それらは右第2小臼歯、第1および第2大臼歯であると思われる。

下顎骨は、左右の筋突起、下顎枝を損失するものの完形に近い。歯はすべて釘植している。左の第3大臼歯は正位に萌出しておらず、右のように完全に萌出していない。また、大臼歯の咬耗は右の方が進行している。

体幹骨

椎骨は1個体遺存するが、遺存状態は非常に悪いため詳細は分からない。

上肢骨

肩甲骨は1個体遺存する。遺存状態は悪く、詳細は分からない。

上腕骨は1個体遺存する。骨体の一部が残存するが、詳細は分からない。

尺骨は1個体遺存する。骨体の一部が残存するが、詳細は分からない。

基節骨らしき骨体が3個体程度遺存する。破損が著しく詳細は分からない。

下肢骨

腰骨は右だけ遺存する。大坐骨切痕と寛骨臼周辺のみが残存するだけである。

大腿骨は左右ともに遺存する。骨体の一部が残存するが、詳細は分からない。

脛骨は左右ともに遺存する。骨体の一部が残存するが、詳細は分からない。

中足骨らしき骨も1個体遺存する。骨体の一部が残存するが、詳細は分からない。

(3)人骨10

頭蓋骨

頭蓋骨は遺存していないが、歯の破片と下顎骨らしき骨片が遺存する。歯はエナメル質の細片で、詳細は分からない。下顎骨らしき骨片についても破損が著しいため、詳細は分からない。

性別・死亡年齢・身体特徴

いずれも不明である。

(4)人骨11

頭蓋骨

頭蓋骨は頭蓋底と側頭骨、後頭骨周辺の骨片が遺存する。骨片の遺存点数は多いが、遺存状態の悪さから復原はできず、詳細な情報は得られない。

下顎骨は左の下顎角周辺部分が遺存する。歯槽も一部残存しており大臼歯が1本釘植しているが、隣接する歯が遺存していないため、これが第2大臼歯もしくは第3大臼歯かの判別はできない。そのほかの歯は遺存していない。

上肢骨

上肢長管骨としては、尺骨もしくは橈骨の骨体部が遺存する。風化・破損が著しいため詳細は分からない。

手骨としては、中手骨が1個体遺存する。骨体部のみが残存するが、詳細は分からない。

下肢骨

下肢長管骨らしい骨は3個体程度遺存するが、風化・破損が著しいため詳細は分からない。

性別・死亡年齢・身体特徴

いずれも不明であるが、下顎骨歯槽に釘植していた大白歯の咬耗を観察すれば、おおよそ象牙質まで到達していることが分かる。このことから判断するなら、死亡年齢を壮年後半と考えることもできる。しかし、これが第2・3大白歯のいずれであるかが分からないので、これが第2大白歯で、第3大白歯の未萌出段階(25歳程度まで)で死亡した可能性もあり、注意を要する。

7. 女谷B支群17号横穴出土人骨(人骨12~16)

保存状態

当横穴出土の人骨は、5体ともに保存状態が悪い。人骨12では頭蓋骨、下顎骨、上腕骨、尺骨、橈骨、大腿骨、脛骨、腓骨が残る。人骨13では頭蓋骨、下顎骨、上腕骨、尺骨、大腿骨、脛骨が残る。人骨14では歯、上腕骨、尺骨、中手骨、大腿骨、踵骨しょうこつが残る。人骨15では頭蓋骨、下顎骨、大腿骨が残る、人骨16では頭蓋骨と大腿骨のみが残る。

すべての人骨で上肢と下肢の長管骨の骨体に取り上げられた程度で、そのほかの骨は取り上げ時に大きく破損するほどに風化が進んでいた。遺存点数は人骨15・16で数点程度、ほかの3体がそれぞれ10点前後である。

(1)人骨12

頭蓋骨

頭蓋骨の遺存状態は非常に悪い。土色・土質の違いがほとんどで、頭蓋骨らしき骨片が数点遺存するのみである。上顎骨は歯槽部がわずかに遺存している程度で、そこには右第2小白歯、第1および第2大白歯がかろうじて釘植している。

下顎骨は歯列のみが遺存する。右第1および第2小白歯、左第1および第2大白歯が残存する。左第2小白歯は遊離して出土している。

上肢骨

現地で左の肩甲骨らしき痕跡を検出しているが、骨は遺存していない。

上腕骨は左右ともに遺存する。左右とも骨体の一部が残存するが、詳細は分からない。

尺骨および橈骨は、左のみ痕跡を検出している。遺存状態は非常に悪く、詳細は分からない。

下肢骨

大腿骨は左右ともに遺存する。右は骨体の頸部側半分が残存し、左は両端部を損失している。

脛骨は左右ともに遺存する。右は骨体の一部が残存し、左は両端部を損失している。

腓骨は左だけ痕跡を検出している。遺存状態は非常に悪く、詳細は分からない。

性別・死亡年齢・身体特徴

いずれも不明であるが、上顎と下顎に釘植していた大白歯の咬耗の観察から判断するのならば、まだ咬耗は象牙質に到達しない程度に弱く、死亡年齢を壮年前半あたりと考えられようか。

(2)人骨13

頭蓋骨

頭蓋骨の遺存状態は非常に悪い。土色・土質の違いがほとんどで、頭蓋骨らしき骨片が数点遺

存するのみである。そのほか詳細は分からない。

下顎骨には左側切歯、犬歯、第2および第3大臼歯が釘植している。下顎骨自体は、釘植箇所
の歯槽部がかろうじて遺存するのみである。

体幹骨

椎骨は1個体遺存する。遺存状態は悪く、詳細は分からない。

上肢骨

肩甲骨は1個体遺存する。遺存状態は悪く、詳細は分からない。

上腕骨は1個体遺存する。骨頭から骨体の中ほどまで残存するが、破損が著しく詳細は分から
ない。

尺骨は1個体遺存する。骨体が一部残存するが、詳細は分からない。

手骨については、基節骨らしき骨片が2個体程度遺存する。破損が著しく詳細は分からない。

下肢骨

腰骨は1個体遺存する。おそらくは腸骨の一部であるが、詳細は分からない。

大腿骨は左右ともに遺存する。右は両端部を損失し、左は骨体の一部が残存するのみである。

脛骨は左右ともに遺存する。どちらも骨体の一部が残存するのみである。

足骨については、中足骨が1個体遺存するが、破損が著しく詳細は分からない。

性別・身体特徴

いずれも不明である。

死亡年齢

死亡年齢の推定についても、どの骨も遺存状態が悪いことから、それを明瞭に判断する材料を
得なかった。下顎骨において第3大臼歯の萌出が確認できることから、少なくとも20代後半に達
していた可能性が高い。また、第2・3大臼歯の咬耗の観察から判断すれば、まだ咬耗は弱いた
め、壮年前半あたりの年齢で死亡したと考えられる。よって、20代後半～30代前半あたりに死亡
年齢を考えることができようか。

(3)人骨14

頭蓋骨

下顎骨の大臼歯が1個遺存するが、歯種の判別はできない。

上肢骨

上腕骨は左だけ遺存する。骨頭から骨体にかけて残存するが、破損が著しく詳細は分からない。

尺骨は1個体遺存する。破損が著しく詳細は分からない。

手骨については、中手骨が1個体遺存する。破損が著しく詳細は分からない。

下肢骨

大腿骨は左だけ遺存する。骨体の一部のみ残存する。

脛骨は右だけ遺存する。両端部を損失しており、破損が著しく詳細は分からない。

足根骨については、左の踵骨が遺存する。各部に損失が見られ、半分程度が残存する。

性別・死亡年齢・身体特徴

いずれも不明である。

(4)人骨15

頭蓋骨

頭蓋骨、下顎骨ともに土色・土質の違いが残るだけであり、詳細は分からない。

下肢骨

大腿骨は1個体遺存する。破損が著しく詳細は分からない。

性別・死亡年齢・身体特徴

いずれも不明である。

(5)人骨16

頭蓋骨

頭蓋骨は遺骸による土色・土質の違いが残るだけであり、詳細は分からない。

下肢骨

大腿骨は左だけ遺存する。骨体の一部が残存するのみである。

性別・死亡年齢・身体特徴

いずれも不明である。

8. 女谷横穴C支群5号横穴出土人骨(人骨17~19)

保存状態

人骨17は当横穴出土人骨中でもっとも保存状態が良く、全身からの骨が出土し、その点数も100点近くに及ぶ。頭蓋骨は微細な骨が失われているが、ほぼ完存している。長管骨も遺存状態は概ね良好であるが、骨端部を損失しているものが多い。

人骨18も保存状態は良好である。頭蓋骨や長管骨など20点程度が遺存する。

人骨19は風化が激しく保存状態は悪い。頭蓋骨や長管骨など10点程度が遺存する。

(1)人骨17

頭蓋骨

頭蓋骨は頭頂骨の一部を損なう以外はほぼ完形で残る。頭蓋底や鼻腔内の微細な骨は、取り上げ後の復原作業中に壊れたものも多い。上顎骨の歯槽には左右の第2小臼歯から第2大臼歯に至る3本ずつの歯が釘植する。左右の第3大臼歯と左の側切歯は遺存しておらず、それ以外は遊離した状態で出土している。歯槽の観察から、第3大臼歯の萌出の痕跡は認められる。

下顎骨には左右の第1および第2大臼歯と、左の第2小臼歯が釘植する。第3大臼歯は萌出しておらず、レントゲン撮影の結果、歯杯の形成をみない。左右の第1小臼歯は、遊離して出土している。

体幹骨

肋骨は20個体程度を確認したが、すべて破損しており詳細は分からない。

椎骨は19個体が残りに、仙骨も遺存する。遺存状態は良好で、頸椎、胸椎、腰椎のいずれもが同定できる。

上肢骨

鎖骨は左右ともに遺存する。左右ともに骨端部を損失している。

肩甲骨は左右ともに遺存する。左右ともに関節窩周辺の厚みのある部分を中心に残存するが、破損が著しく詳細は分からない。

上腕骨は左右ともに遺存する。右は骨頭の一部が損失しているのみで、ほぼ完存している。骨頭端から骨滑車端まで288mmある。左の遺存状態は悪く、骨頭周辺が残存するのみである。

尺骨は左右ともに遺存する。右は骨頭部を損失しており、左は鈎状突起より上と骨頭部を損失する。左尺骨の骨体中ほどに重度の骨折の自然治癒痕が認められる。

橈骨は左右ともに遺存する。右は骨体中ほどが残存する。左も同様であるが、尺骨の骨折に対応する箇所に重度の骨折の治癒痕跡が認められる。

手根骨では右手の舟状骨が遺存する。ほぼ完存している。中手骨では右第2および左第3中手骨が遺存する。両者ともにほぼ完存している。指骨では左手の第2基節骨と第4中節骨が遺存する。前者は骨体だけが残存し、後者はほぼ完存している。

下肢骨

腰骨は左右ともに遺存する。右は坐骨と恥骨部分が壊れるが、それ以外の部分は残存している。左は寛骨臼と腸骨の厚みのある部位が残存する。

大腿骨は左右ともに遺存する。左右ともに両端部を損失している。

脛骨は左右ともに遺存する。右は内側顆と内果部分を損失するが、顆間隆起の先端から内果端まで315mmである。左は内果から骨体の中ほどまでが残存している。

腓骨は左右ともに遺存する。右は骨体のみが残存している。左は骨頭と外果部分を損失する。

足根骨は右の距骨、左右の踵骨、左右の立方骨、左の舟状骨が遺存する。すべて一部が損失しているが、概ね遺存状態は良好である。中足骨および趾骨は、右第4中足骨と左の第1～4中足骨、それに右第1基節骨が遺存する。中足骨は骨端の損失が見られるが、基節骨はほぼ完存している。

性別

腰骨、頭蓋骨、大腿骨において性別を判定した。腰骨は大坐骨切痕部が鋭角に深く切れ込んでいる。頭蓋骨は、外後頭隆起、乳様突起、眉間隆起が強く突出する。大腿骨は頸体角が大きい。以上の特徴から、当人骨は男性骨である可能性が高い。

死亡年齢

鎖骨については、左右ともに骨端部を損失しており、死亡年齢の推定資料とはなりえなかった。頭蓋骨の縫合は、冠状縫合では内板での癒合が完了していない。人字縫合では内板は癒合しているようだが、外板は開放したままである。人字縫合から矢状縫合に向かっては、内板での癒合が観察できるが外板は開放したままである。以上の特徴から壮年(25～40歳程度)後半の段階で死亡

した者の骨と考えるのが妥当であろう。歯の咬耗はすべての大臼歯で象牙質に到達しており、このことからその段階での死亡が考えられる。

身体特徴

長管骨はほぼ全てが骨端部を損失していたが、右脛骨の最大長から安藤式により生前の身長を推定してみたところ、約150cmの数値を得た。この脛骨は完形ではなく、最大長は概測でしかないため、おおよその推定である。

上肢では、上腕骨の三角筋粗面はあまり発達せず尺骨粗面の発達も弱い。下肢では、大腿骨の殿筋粗面から粗線にかけての部位は華奢で柱状性も弱い。脛骨のヒラメ筋線はやや発達しているのが認められる。以上のことから、下半身はそれなりに頑強ではあるが、上半身は下半身ほどには頑強でない体形が推測できる。

左の尺骨、橈骨に見られた骨折痕跡は、現在なら外科的な処置が必要なほどであり、非常に重度のものであったと考えられる。尺骨、橈骨の骨折箇所の治癒痕跡は、本来なら直線的な部分であるが、骨折部分で食い違った状態のまま癒合している。尺骨において左右の骨の長さを比較したところ、骨折した左の方が1cm程度短くなっている。また、食い違った骨同士が完全に癒合している度合いから見て、この骨折は青年期以前の段階であった可能性が高い。

(2)人骨18

頭蓋骨

頭蓋骨は、左半部が全て失われている。右側の眼窩上縁部は、遺存するが、顔面頭蓋は失われている。上顎骨の歯槽の一部も残り、左の中切歯、側切歯、第2小臼歯、第1大臼歯が釘植している。

下顎骨には左右の中切歯から第2小臼歯まで、合計8本の歯が釘植している。左右ともに大臼歯は萌出しておらず、第1大臼歯は歯槽内にとどまり、第2大臼歯は歯杯形成の段階である。

体幹骨

肋骨は、第1肋骨だけが遺存するが、詳細は分からない。そのほかにも肋骨の骨片が数点遺存する。

椎骨は、計6個体遺存する。頸椎、胸椎各3個ずつに同定できる。

上肢骨

鎖骨は左側だけ遺存する。遺存状態は良好でほぼ完存している。

下肢骨

腰骨の一部が遺存する。遺存状態が悪く詳細は分からない。

大腿骨は1個体遺存する。骨体の一部が残存する。

脛骨は右だけ遺存する。顆間隆起から骨体下半部にかけて残存する。

性別・死亡年齢

死亡年齢は歯の萌出状況から推定した。下顎骨に釘植する全ての歯が乳歯であること、また左右ともに第1大臼歯が未萌出であることが観察できた。この状況は、概ね5歳程度までの特徴で

あり、死亡年齢を5歳までの段階に考えることができよう。また、それは第2次性徴期(10代半ば)に達していない段階であるため、各骨に性差を示す特徴は現れず、性別の判定はできない。

身体特徴

不明である。

(3)人骨19

頭蓋骨

頭蓋骨は左半部だけが遺存しており、眼窩、前頭骨の一部と頭蓋底は損失している。上顎骨の歯槽の一部も残り、左第2小臼歯から第3大臼歯に至る4本が釘植する。第3大臼歯は歯槽内にとどまり、未萌出であることが分かる。

そのほか

おそらくは肩甲骨ないしは腰骨と思われる骨と、四肢の長管骨がそれぞれ数点ずつ遺存する。すべて風化の進行が激しく、詳細は分からない。長管骨としては大腿骨が1個体確認できるが、これについても詳細は分からない。

性別・身体特徴

いずれも不明である。

死亡年齢

死亡年齢は歯の萌出状況から推定した。上顎骨に釘植する第3大臼歯が未萌出であることから、25歳程度までに死亡した可能性が高い。また、第3大臼歯の形成状況から、15歳程度以上で死亡したと考えられる。

9. 女谷横穴C支群7号横穴出土人骨(人骨20・21)

保存状態

人骨20では歯、長管骨、骨種不明骨片が、人骨21では長管骨と骨種不明骨片が遺存している。両人骨ともに保存状態は悪い。遺存点数もそれぞれ数点程度である。

(1)人骨20

頭蓋骨

頭蓋骨は全く遺存していないが、歯が2個残る。1個は大臼歯の歯冠部であるが、歯種は判別できない。もう1個も歯冠部と思われるが、エナメル質の破片が遺存するのみで、詳細は分からない。

そのほか

長管骨、骨種不明骨片ともに遺存状態が悪く、詳細は分からない。

性別・死亡年齢・身体特徴

いずれも不明であるが、大臼歯の歯冠部の咬耗を観察する限りは、死亡年齢を壮年段階に考えられる可能性もある。

(2)人骨21

そのほか

長管骨は骨体のみが遺存する。そのほかにも骨体らしき箇所が遺存するが、破損が著しいため詳細は分からない。

性別・死亡年齢・身体特徴

いずれも不明であるが、長管骨を下肢のものと判断できる可能性があり、その場合には非常に小さな個体となるため、死亡年齢を10歳前後の段階に考えられよう。

10. 荒坂B支群2号横穴出土人骨(人骨22)

保存状態

頭蓋骨、下顎骨、上肢・下肢長管骨、骨種不明骨片などが残る。いずれも保存状態は悪く、完存するものは皆無である。取り上げの段階でも破損が進行していき、現地での取り上げ前の段階以上に観察は行えない。

頭蓋骨

頭蓋骨は、右眼窩、頬骨、上顎歯槽、前頭骨、側頭骨、後頭骨、頭蓋底、および左側頭骨の一部が不完全ながらもそれぞれ遺存する。歯槽には右の小白歯と大白歯が合計3本釘植している。しかし、風化の進行が著しく、取り上げ時に大きく破損したため詳細は分からない。

下顎骨には右第1小白歯から第2大白歯までが釘植している。しかし、これもまた風化の進行が著しく、取り上げ時に大きく破損したため詳細は分からない。

そのほか

上肢および下肢の長管骨と考えられるものが数個体あるが、遺存状態の悪さから詳細なことは分からない。そのほかの骨種不明の骨片も同様である。

性別・死亡年齢・身体特徴

いずれも不明である。

11. 荒坂B支群5号横穴出土人骨(人骨23・24)

保存状態

人骨23では四肢の長管骨と思われるものと、骨種不明の骨片とがある。人骨24では頭蓋骨、上腕骨は確認できるが、ほかには四肢のいずれかの長管骨と思われるものと、骨種不明の骨片とがある。両人骨ともに保存状態は悪い。風化の進行が著しく、完存するものは皆無である。取り上げの段階でも破損が進行していき、現地での取り上げ前の段階以上に観察は行えない。

(1)人骨23

そのほか

長管骨と思われる骨が数点と、骨種不明の骨片が数点遺存する程度であり、それぞれに風化・破損が著しく詳細は分からない。

性別・死亡年齢・身体特徴

いずれも不明である。

(2)人骨24

頭蓋骨

頭頂骨と思われる骨片が数点と、土に若干の痕跡が遺存する程度である。

上肢骨

上腕骨は1個体遺存する。骨頭から骨体が残存するが、詳細は分からない。

そのほか上肢の長管骨と思われる骨が数個体遺存するが、詳細は分からない。

下肢骨

下肢の長管骨と思われる骨が数個体遺存するが、詳細は分からない。

性別・死亡年齢・身体特徴

いずれも不明である。

12. 荒坂B支群8号横穴出土人骨(人骨25)

保存状態

頭蓋骨らしき骨片と長管骨、および骨種不明の骨片が数点残るだけである。保存状態は悪く、完存するものは皆無で、全てにおいて詳細な観察は行えない。

頭蓋骨

おそらくは頭頂部付近の骨片であると思われるが、破損が著しいため詳細は分からない。

そのほか

長管骨が数個体と骨種不明の骨片が数点あるが、いずれも詳細は分からない。長管骨はその外観から、おそらくは上肢のものと考えられよう。

性別・死亡年齢・身体特徴

いずれも不明である。

13. 荒坂B支群18号出土人骨(人骨26・27)

保存状態

人骨26はほぼ全身からの骨が出土し、保存状態も概ね良好なものが半数以上を占め、遺存点数は100点を越える。取り上げ作業の段階で破損したものも少なくないが、全体的な観察に支障をきたすものではなかった。

人骨27の保存状態は非常に悪く、全体的に風化の進行が著しい。上肢長管骨らしきものが数点と、歯が数個遺存していた。

(1)人骨26

頭蓋骨

頭蓋骨は左の側頭骨と眼窩、頬骨を損失するのみで、そのほかは遺存している。検出した段階では良好に形状をとどめていたが、全体的に脆く取り上げの段階で大きく破損した。上顎骨の歯

槽には、右の犬歯から第2大臼歯までと、左の側切歯から第1大臼歯までが釘植する。左右の中切歯は遊離して頭蓋骨の下から出土している。左の第2大臼歯は釘植していないが、ほぼ原位置を留めている。右の側切歯は出土していない。

下顎骨は左右の筋突起、下顎枝と歯槽の一部が失われている。歯槽には右の犬歯から第2大臼歯までと、左の第1小臼歯から第2大臼歯までが釘植する。第3大臼歯の萌出、未萌出は歯槽が遺存していないため確認できない。

体幹骨

肋骨は20個体程度を確認したが、完形で残るものは全く無く、詳細は分からない。

椎骨は13個体が残りに、仙骨も遺存する。遺存状態は概ね良好で、頸椎、胸椎、腰椎のいずれもほぼ同定できる。胸椎と腰椎でそれぞれ1か所ずつ交連が認められる。

上肢骨

鎖骨は左右ともに遺存する。左右ともに骨端部を損失している。

肩甲骨は左右ともに遺存する。左右ともに関節窩周辺の厚みのある部分を中心に残存するが、破損が著しく詳細は分からない。

上腕骨は左右ともに遺存する。右は骨頭部が遊離してはいるものの、接合すればほぼ完形となる。左は上腕骨滑車部分から骨体中ほどまでが残存する。

尺骨は左右ともに遺存する。右は骨頭部を損失するのみでほぼ完存する。左は骨頭部と肘頭の一部を損失している。

橈骨は右側だけ遺存する。茎状突起を損失するのみでほぼ完存する。

下肢骨

腰骨は左右ともに遺存する。右は坐骨、恥骨、腸骨それぞれが部分的に損失し、寛骨臼周辺の厚みのある部分が残存する。左は腸骨部分のみが残存する。

大腿骨は左右ともに遺存する。右は両端部を若干損失する程度であるが、左は両端部と頸部を損失している。

脛骨は左右ともに遺存する。右は内果周辺部から骨体にかけて残存しており、左は内外側顆周辺部から骨体にかけて残存する。

腓骨は左右ともに遺存する。どちらも骨体のみが残存する。

性別

腰骨、頭蓋骨、大腿骨において性別を判定した。腰骨は大坐骨切痕部が鋭角に深く切れ込んでいる。頭蓋骨は、外後頭隆起、乳様突起、眉間隆起が強く突出する。大腿骨は頸体角が大きい。以上の特徴から、当人骨は男性骨である可能性が高い。

死亡年齢

鎖骨については、左右ともに骨端部を破損しており、死亡年齢の推定資料とはなりえなかった。頭蓋骨の縫合は、冠状縫合では内板での癒合が完了していない。人字縫合では内板は癒合しているようだが、外板は開放したままである。人字縫合から矢状縫合に向かっては、内板での癒合が

表1 女谷・荒坂横穴群古墳時代出土人骨一覧

番号	支群	横穴	出土状況	同定可能な残存骨				性別	身体的特徴	死亡年齢	タイプ	
				頭蓋骨	体幹骨	上肢骨	下肢骨					
人骨1	女谷B	1号	上肢と下肢の長管骨が別々。頭蓋骨は下顎骨と分離。下肢長管骨の集骨内に肋骨や手足の骨がある。腰骨はこの集骨に隣接	頭蓋底の一部、上顎骨・下顎骨とそれに釘植する歯	肋骨、椎骨(遺存状態悪く、詳細不明)	左右上腕骨、尺骨1、中手骨? 1	右腸骨(?)、左右大腿骨、左右脛骨	不明	不明	壮年(25~40歳程度)?	A	
人骨2	女谷B	1号	歯の破片と骨種不明骨片が1か所で出土	歯はエナメル質片のみ		長管骨(?)骨体。骨種不明骨片数点		不明	不明	不明	不明	
人骨3	女谷B	9号	正位に置かれた須恵器杯蓋内の土の上より歯1点	大臼歯?の歯冠部				不明	不明	不明	不明	
人骨4	女谷B	11号	頭部、上肢長管骨群、下肢長管骨群の順に並ぶ	左側頭骨から後頭骨		上肢長管骨(?) 2	下肢長管骨(?) 2	男性	不明	不明	A	
人骨5	女谷B	11号	人骨4に隣接して、細片の骨。歯は奥壁側に位置	大臼歯の歯冠部2個とエナメル質の破片				不明	不明	壮年後半以降か	不明	
人骨6	女谷B	11号	骨片が2か所に分かれて出土。歯のエナメル質が遺存	歯のエナメル質が遺存				不明	不明	不明	不明	
人骨7	女谷B	15号	上位に頭蓋骨、中位に長管骨・下顎骨、最下位に肩甲骨・肋骨・椎骨・手足の骨。長管骨は上肢と下肢が1か所に集骨され、左脛骨のみ交差。右橈骨は最下層	前頭骨の眼窩上縁部から頭頂骨と後頭骨。上顎および下顎とそれに釘植する歯	肋骨骨体数点、椎骨2	左鎖骨・肩甲骨、左右上腕骨・尺骨、右橈骨・第4中手骨	腰骨(腸骨?)、左右大腿骨・脛骨、右距骨、左立法骨	男性	全体に体格の良い人物。身長は不明。脛骨の骨体断面積は右側のほうが一回り近く太い	壮年段階後半	A	
人骨8	女谷B	16号	頭蓋骨は右側頭部を上下に横位で出土。下顎骨とは約5cm離れる。骨種不明の骨片が下顎骨上やその周辺より出土	右側頭骨と後頭骨の一部、ほぼ完形の下顎骨、歯は両中切歯以外が釘植				不明	不明	20歳前後か	A	
人骨9	女谷B	16号	頭蓋骨は右側頭部を下ににして、下顎骨と約20cm離れる。頭蓋骨と約40cm離れて長管骨等が集骨。集骨内には、最上位に脛骨・大腿骨、下位に腰骨・上腕骨	右顔面頭蓋と右前頭骨および右後頭骨の一部。上顎骨および下顎骨とそれに釘植する歯	椎骨1	肩甲骨1、上腕骨1、尺骨、基節骨(?)骨体3程度	腰骨、大腿骨、脛骨、中足骨?					A

人骨10	女谷B	16号	歯の破片と下顎骨(?)に近接して耳環2点	歯の破片と下顎骨(?)				不明	不明	不明	不明
人骨11	女谷B	16号	隣床上で、頭蓋骨・下顎骨が同1か所に置かれ、約40cm離れて長管骨が集骨	頭蓋底と側頭骨、後頭骨周辺の骨片、左の下顎角周辺部分	尺骨もしくは橈骨骨体部	下肢長管骨?	不明	不明	不明	不明	不明
人骨12	女谷B	17号	伸展位様に出土。上顎骨は頭蓋骨に接するが、下顎骨は約20cm離れる。腕や脚の骨は頭蓋骨を基準に見ると解剖学的位置にある。肘関節・膝関節は交連の位置にあり、尺骨と橈骨の位置関係も解剖学的な位置を示すが、腓骨の痕跡は脛骨と解剖学的位置にない	頭蓋骨(?)骨片数点、上顎骨・下顎骨には若干の歯	左右上腕骨、左尺骨・橈骨	左右大腿骨・脛骨、左腓骨	不明	不明	不明	不明	B
人骨13	女谷B	17号	上腕骨・尺骨・左大腿骨・脛骨が集められ、その上位に右大腿骨が直交してある。下位に肩甲骨・腰骨・手足の骨片がある。頭蓋骨はこの集骨の奥壁側	頭蓋骨片が数点、下顎骨は歯槽部のみ	肩甲骨1、上腕骨1、尺骨1遺存。基節骨(?)骨片2	腸骨(?)1、左大腿骨・脛骨、中足骨1	不明	不明	不明	不明	A
人骨14	女谷B	17号	人骨13と人骨15・16の間で長管骨が集められており、方向がそれらの人骨と異なっている。別個の人骨と判断。大腿骨・脛骨・上腕骨・尺骨・腰骨状の骨	下顎骨の大臼歯が1個遺存	左上腕骨、尺骨1、中手骨1	左大腿骨・踵骨、右脛骨	不明	不明	不明	不明	A
人骨15	女谷B	17号	土色・土質の違いが認められるのみ。頭部から5cm程度離れて下顎骨があり、大腿骨は、頭蓋骨を基準に考えると解剖学的な位置近くにある。	頭蓋骨・下顎骨ともに土色、土質の違いが残るのみ		大腿骨1	不明	不明	不明	不明	B
人骨16	女谷B	17号	土色、土質の違いだけで、頭蓋骨らしき痕跡と大腿骨を認める。大腿骨は頭蓋骨と約20cm離れて出土	遺骸による土色、土質の違いが残るのみ		左大腿骨骨体	不明	不明	不明	不明	A

番号	横穴群	横穴	出土状況	同定可能な残存骨				性別	身体的特徴	死亡年齢	タイプ
				頭蓋骨	体幹骨	上肢骨	下肢骨				
人骨17	女谷C	5号	人骨18に先行。頭蓋骨は下顎骨と約15cm離れて正立し、隣接して骨が集まる。最下位に左右の大脚骨、その上に左右の腰骨、その上に右腕骨・左尺骨・右肘骨・左尺骨・右腕骨・左尺骨・右肘骨が直交。肩甲骨・鎖骨・肋骨・椎骨・手足の骨等は、長管骨や骨盤の間より出土。椎骨に交連しているものはない	頭蓋骨はほぼ完形で残り、上顎骨および下顎骨には一部の歯が釘植	肋骨20個、椎骨19個、仙骨	左右鎖骨・肩甲骨・上腕骨・尺骨・橈骨、右第2・3中手骨、左第2・3中手骨、左第4中手骨、右第1～第4中足骨、右第1～第4中足骨、右第1～第4中足骨、右第1～第4中足骨	男性	身長約150cm。下半身はそれなりに頭強だが、上半身はそれほどには頭強でない。左の尺骨、橈骨に骨折痕跡がある。骨折は青年期以前か	壮年(25～40歳程度)後半段階	A	
人骨18	女谷C	5号	人骨17に後出。頭蓋骨は下顎骨の上に載り、上顎骨は約5cm離れる。その他の骨は、頭蓋骨に隣接して集められ、上位に腰骨・長管骨、下位に椎骨や肋骨がある	右側の眼窩上縁部、上顎骨および下顎骨とそれに釘植する歯	第1肋骨、肋骨骨片数点、頸椎3、胸椎3	左鎖骨	不明	不明	5歳までの段階	A	
人骨19	女谷C	5号	頭蓋骨は左側頭部を下にして出土し、約15cm離れて大腿骨などの長管骨が集められている。長管骨以外の骨も残るが、風化の進行が激しく判別できない	頭蓋骨左半部が遺存。上顎骨には左第2小臼歯から第3大臼歯に至る4本が釘植		肩甲骨ないしは腰骨片数点、長管骨数点	不明	不明	15歳程度以上25歳程度まで	A	
人骨20	女谷C	7号	長管骨が平行して置かれ、間から歯が出土。その他の骨は、土色・土質に違いを残す程度	大臼歯の歯冠部、歯冠部と思われるエナメル質の破片			不明	不明	壮年段階	A	
人骨21	女谷C	7号	長管骨と骨種不明骨片がまともに出土			長管骨の骨体	不明	不明	10歳前後?	不明	
人骨22	荒坂B	2号	頭蓋骨は下顎骨とは15cm離れ、下顎骨から約20cm離れて上肢・下肢の長管骨が集められる。骨種不明骨片が長管骨の間から出土。頭蓋骨出土位置周辺に朱	右眼窩・頬骨・上顎歯槽・前頭骨・側頭骨・後頭骨・頭蓋底および左側頭骨の一部		上肢および下肢の長管骨?数個	不明	不明	不明	A	

人骨23	荒坂B	5号	長管骨が横穴主軸方向とそれに直交する方向の二群に分かれて出土。その他の骨は遺存状態が悪く観察不可				不明	不明	不明	不明	A
人骨24	荒坂B	5号	骨の並びは伸展位の状態。上腕骨・下肢長管骨は頭部に解剖学的位置に近い。下肢の長管骨はなと判断される一群内に他の骨は不明骨片が出土。各関節部での交連状況を確認できない	頭頂部と思われる骨片が数点			不明	不明	不明	不明	B
人骨25	荒坂B	8号	頭蓋骨と判断される破片から約20cm離れた長管骨が集骨部内から出土	頭頂部付近(?)の骨片			不明	不明	不明	不明	A
人骨26	荒坂B	18号	頭蓋骨は下顎骨と約15cm離れる。頭蓋骨に接して、上肢長管骨・鎖骨・肩甲骨・椎骨・肋骨などがバラバラに置かれていたが、一部の椎骨と右手手骨・基節骨に交連が認められた。この上に両脚が置かれ、関節に交連が認められる部分がある。左脚と右脚の位置関係は解剖学的な位置にはない。骨盤を形成する左右の腰骨と仙骨は各骨に分割され、右大腿骨の上に置かれる	頭蓋骨は左の側頭葉、眼窩、頬骨を欠くのみで、ほぼ完全。上顎骨および下顎骨に歯が釘植	肋骨20程度、椎骨13。胸椎と腰椎で1か所ずつの交連がある。仙骨	長管骨? 数点 上肢の長管骨? 数個	不明	不明	不明	不明	B
人骨27	荒坂B	18号	人骨26の奥壁側に隣接。幅20cm程度の幅の中に長管骨・歯が集めらる	大臼歯と思われる歯冠部数個	上肢(?)長管骨	上肢の長管骨? 数個	不明	不明	不明	不明	A

観察できるが外板は開放したままである。以上の特徴から壮年後半の段階で死亡した者の骨と考えるのが妥当であろう。歯の咬耗はすべての大臼歯で象牙質に到達しており、このことからその段階での死亡が考えられる。

身体特徴

四肢の長管骨は概ね良好に遺存していたが、それぞれ端部の損失などで全長を計測することはできず、身長は推定は行えなかった。

上肢では、上腕骨の三角筋粗面の発達も弱く、尺骨粗面の発達も弱い。下肢では、大腿骨の殿筋粗面から粗線にかけての部位は華奢で柱状性も弱い。脛骨は遺存している骨体が脆く、詳細な観察ができない。また、骨格全体に華奢な印象を受ける。以上のことから、生前は上下半身ともに華奢な体格の持ち主であったと推測できる。

(2)人骨27

頭蓋骨

頭蓋骨はまったく遺存していないが、大臼歯と思われる歯冠部が数個遺存する。破損が著しいため歯種の判別はできない。

そのほか

検出時の状況から、おそらくは上肢の長管骨だと思われるが、風化・破損が著しいため詳細は分からない。

性別・死亡年齢・身体特徴

いずれも不明である。

14. 荒坂B支群19号横穴出土人骨(人骨28)

保存状態

鉄刀の下から椎骨と長管骨が出土しただけで、ほかの骨は全く検出できなかった。

そのほか

椎骨1および長管骨の骨体が出土している。

性別・死亡年齢・身体特徴

いずれも不明である。

Ⅱ. 理 化 学 分 析

1. 理 化 学 分 析 概 要

女谷・荒坂横穴群の調査により、炭化材の樹種同定、花粉分析、蛍光X線マッピング、胎土分析を実施した。

それぞれの理化学分析によって、どういった点を明らかにすることを目的としたか、概略を述べたい。

(1)花粉分析

資料を採集したのは、女谷B支群1号横穴の北側の壁面である。第2次調査時の調査地壁面を利用して、墓地内通路を中心に試料を採取した。この谷内に堆積した土砂中の花粉を調べることにより、周辺の土地利用の変遷が追えないかを眼目とした。具体的には、

①横穴を造るための墓域が古墳時代後期にこの地に選定された際に、墓地にあたる広域な範囲が開発されたと推定するが、前後の層の植生の違いより、その推定が認められないか。

②横穴以前の土地利用形態が分からないか。

③平安時代中頃に至るまでの間、この周辺の植生がどのように変化しているのか、そこに人間の係わる要素、たとえば、畑作などが花粉から認められないかどうか。

④谷を大きく埋める土砂がどういった要因であるのか、例えば、乱開発による土砂流などであるのか、がわからないか。

結果的には、花粉化石の遺存状況が良くなく、こういった疑問に答えることはできなかった。

(2)樹種同定

発掘調査により、多くの横穴から炭化材が出土した。それらは微細なものが多く、本来の形状やその用途など、不明と言わざるを得ないものばかりである。そのため、樹種同定を行うことにより、その理解の一助になるかと考えた。

試料は大きく、5種に分けられる。

①耳環の下および下位から出土した炭化材(試料2～5)。

耳環の周辺および下には、炭化材が残っている場合が認められた。特に、この4点は、比較的遺存状況がよく、試料4・5は、10×8cm程度の炭化材が耳環の下に残っており、耳環が木箱に入れられていた可能性もあり、注目された。

②玄室から出土した炭化材(試料1・8・9)。

試料1は、女谷B支群15号横穴の玄門付近で出土した炭化材で、30×80cmの比較的大きなものであった。横穴を閉塞するのに板戸を用いた場合、その板戸が倒れて、炭化した可能性がある。試料8・9は、玄室内より、土器などの遺物とともに出土した炭化材である。

③墓道端部の土坑内を中心とした、初期整地土内から出土した炭化材(試料10～12)。

女谷B支群で特に顕著に見られた墓道端土坑を掘削中に、炭化材が出土する場合がある。また、

墓道の初期整地土よりも、わずかながら、炭化材が認められる場合がある。これらは、横穴の構築時に伴う儀礼に伴うもの、もしくは水抜きなどのために設置された構造物が腐食した可能性がある。

④墓地内通路から出土した炭化材(試料13)。

⑤耳環の接面に挟まっていた木質(試料6・7)。

女谷B支群1号横穴出土の耳環(847)の接面に挟まっていた木質(987)および女谷B支群16号横穴玄室内出土の耳環(862)の接面に挟まっていた木質の2点である。通常、耳環は耳たぶに挟んで用いたと考えられているが、接面に木質が遺存しており、耳たぶに耳環を直接挟み込んだものばかりではない可能性が認められた。予備鑑定では、酸化が進みすぎており、十分な鑑定はおそらく不可であろうとの回答を得たため、断念した。そのため、樹種同定結果の試料番号は、欠番となっている。

(3)胎土分析

胎土分析は、土師器を中心に行い、埴輪についても数点実施した。

土師器は大きく3タイプに分けられる。

①赤褐色を呈し、砂粒を含まない精製された土が使用されている土器。

②赤褐色を呈するが、胎土・焼成は①と比べて軟らかく、砂粒が多いもの。

③黄色を呈し、甕や甔などの日常に使用されたと思われる土器。

①は器表面が暗文で施文されて、ていねいな作りがなされており、②にはヘルメット形をした特徴的な形の杯があり、在地で焼かれたものであるのか、搬入品であるのか、よく分からないものである。それに対して、③は日常に使用されている器形が中心であるので、在地で作られたと判断されるものである。そこで、③を対照試料として、①・②がどのような位置づけであるのかを明らかにすることを目的とした。

また、埴輪については、荒坂B支群5号横穴では、東海系の円筒埴輪が完形で出土しており、その出自が注目される。一方、横穴群内の通路や谷の堆積土の中から破片が出土しており、これは、元々は埴輪を樹立した古墳があったのが、横穴の造営によりそれが破壊されたためと想定される。そこで、これらの埴輪片を上記の東海系の埴輪の対照試料として胎土分析を実施することにより、胎土レベルでその違いがあるかどうかを明らかにできるものと期待された。

試料10は、分析依頼時には土師器壺と判断していたが、その後の整理により、朝顔形埴輪であることが判明したので、付表の該当項目をそのように変更し、文章中の該当項目にも変更を加えたが、それ以外の本文の内容には影響がないものと判断し、修正を加えていない。土師器の試料は、基本的に、器形が分かるものを分析に出したが、埴輪については小片ばかりで、図示できるものはほとんどない。そのため、これらの試料は図示していないが、基本的に土師質のもので、硬質のもからやや軟質のものまでを選んだ。

(4)耳環の蛍光X線分析

耳環には、金環・銀環のほか、鉛環や錫環、銅環などがあるが、その材質が一見しただけでは

分からないものが、今回出土した耳環の中に認められた。そのため、蛍光X線による成分分析を行い、その材質を確定することを主眼とした。併せて、金環・銀環と判断できる耳環も対照試料として、分析した。

耳環1点につき、数点の定量分析とマッピングを行った。その結果、金色に発色した金環であっても、金色、赤銅色、黒みがかった金色など、金環ごとに色調が異なる場合があるが、これは金・銀・銅の比率が異なっているためであることが分かった。また、1つの耳環でも箇所によって、それらの比率が異なっており、発色もそれに応じて異なっている可能性が認められた。特に問題となるのが、金環の内側だけに銅を多く含有し、肉眼で観察すると、その部分だけいわゆる赤銅色を呈しているものである。これらについては、耳環の製作技法と関連する可能性もあるが、今回の分析では、何に由来するのかまでは、分からなかった。

(5) 胡籙金具の蛍光X線分析

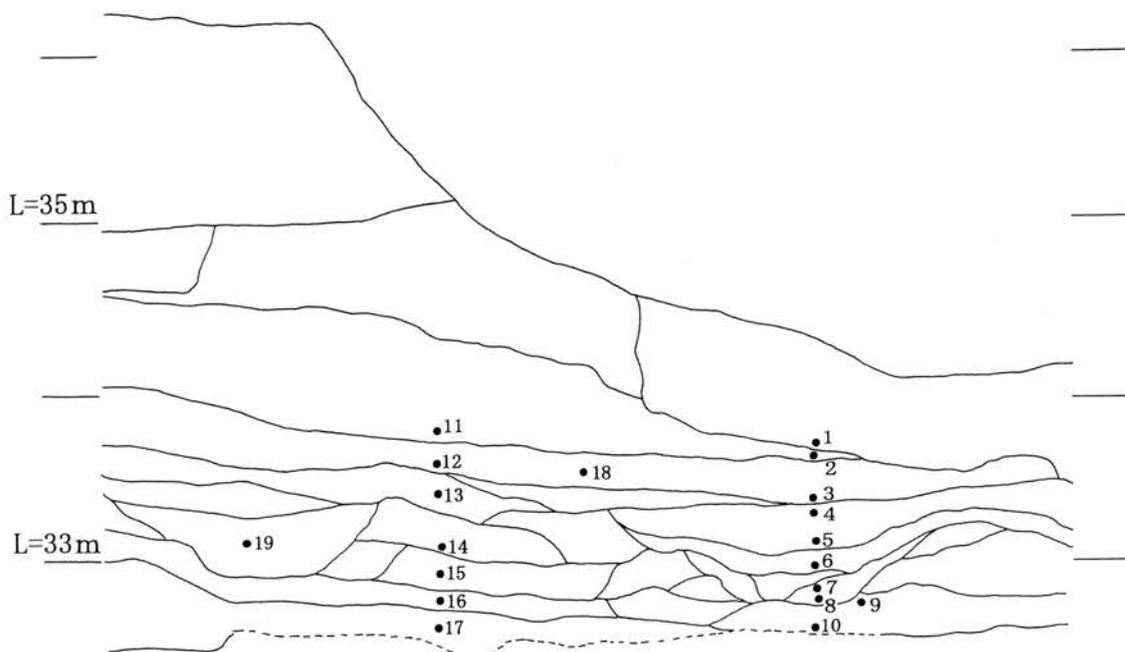
女谷B支群18号横穴より出土した胡籙金具も耳環同様、定量分析と蛍光X線マッピングを行い、詳細な観察をしていただいた。マッピングにより、胡籙金具の鉾は、鉄鉾に銀板が巻かれたものであることが判明した。

(岩松 保)

2. 女谷B支群の花粉化石群集

(1) はじめに

女谷・荒坂横穴群は、京都府八幡市大字内里小字女谷、大字美濃山小字荒坂・御毛通に所在し、甘南備丘陵の一面に位置する。本横穴群の第2次調査では、女谷B支群を調査し、谷底を縫って谷の奥に至る墓域内の通路状遺構が確認された。この通路は、平安時代(10世紀中頃～後半)と古



第1図 試料採取地点の土層断面図と試料採取層準

墳時代末頃(6世紀末~7世紀前半)の2時期に分類できると考えられている。ここでは、本遺跡周辺の古墳時代後期以前~近世以後の植生変遷を推定する目的で花粉化石群集の検討を行った。

(2) 試料

花粉化石群集の検討は、通路状遺構およびその周辺の埋土より採取された合計19試料(試料1~19)について行った。以下に、各試料の簡単な記載を示す。なお、試料の採取地点および採取層準については、第1図を参照して頂きたい。

試料1・2・11

近世以後の土砂流。女谷B支群の谷を一気に埋める。試料1はにぶい黄橙色砂質シルト、試料2はにぶい黄褐色シルト(砂礫少ない)、試料11はにぶい黄褐色~黄褐色の礫混じり粘土質砂。

試料3・12・13・18

平安時代後期~近世に至る堆積層。それぞれの時期は不詳。試料3はにぶい黄橙色シルト、試料12はにぶい黄褐色~黄褐色の砂礫混じりシルト、試料13はにぶい黄褐色の砂礫混じりシルト、試料18はにぶい黄褐色の砂礫混じり粘土。

試料4・5

平安時代中頃の通路内堆積土(通路が使用されている際に堆積した埋土)。試料4・5ともに、にぶい黄褐色粘土。

試料6~8

古墳時代後期~平安時代の通路内堆積土(通路が使用されている際に堆積した埋土)。試料7・8は、横穴が使用されている際の堆積土。試料6はにぶい黄褐色礫混じりシルトで草本の茎かと思われる植物遺体が少し混じる。試料7はにぶい黄褐色礫混じりシルト、試料8は褐色および、にぶい黄褐色の礫混じりシルト。

試料19

時期不詳(古墳時代後期~平安時代中頃か)の通路内堆積土。にぶい黄褐色粘土質砂で礫を多く

表2 花粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
樹木																				
ツガ属	<i>Tsuga</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	1	-
マツ属榊類管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	4	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	<i>Ainus</i>	6	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	2	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-	2
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-
サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-
ツツジ科	<i>Ericaceae</i>	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	3	-	-	-	-	5	2
草本																				
イネ科	<i>Gramineae</i>	35	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	-	-	-	-	6	2
他のタデ属	other Polygonum	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカサ科~ヒユ科	<i>Chenopodiaceae - Amaranthaceae</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ナデシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属	<i>Haloragis</i>	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	1	1	2	-	-	-	-	5	1
キツネノマゴ属	<i>Justicia</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	8	-	-	-	-	1	1
シダ植物																				
単室型胞子	<i>Monolete spore</i>	18	6	12	-	8	8	1	8	16	15	11	4	5	7	3	1	5	6	1
三葉型胞子	<i>Trilete spore</i>	8	1	1	1	1	-	1	1	1	-	-	2	-	-	-	-	4	-	-
樹木花粉																				
樹木花粉	<i>Arboreal pollen</i>	28	3	0	0	2	0	0	0	0	0	1	1	20	0	0	0	0	11	4
草本花粉	<i>Nonarboreal pollen</i>	46	4	2	0	0	0	1	0	0	0	1	2	18	0	0	0	0	14	5
シダ植物胞子	<i>Spores</i>	26	7	13	1	9	8	2	9	17	15	11	4	7	7	3	1	5	10	1
花粉・胞子総数	<i>Total Pollen & Spores</i>	100	14	15	1	11	8	3	9	17	15	13	7	45	7	3	1	5	35	10
不明花粉																				
不明花粉	<i>Unknown pollen</i>	13	13	3	1	5	1	0	1	0	0	1	7	16	1	0	0	0	12	12

含む。

試料9・10・16

横穴群構築時の旧表土層。試料9はにぶい黄褐色砂礫混じりシルト、試料10は褐色礫混じりシルト、試料16は黒褐色砂礫混じり粘土。

試料14・15

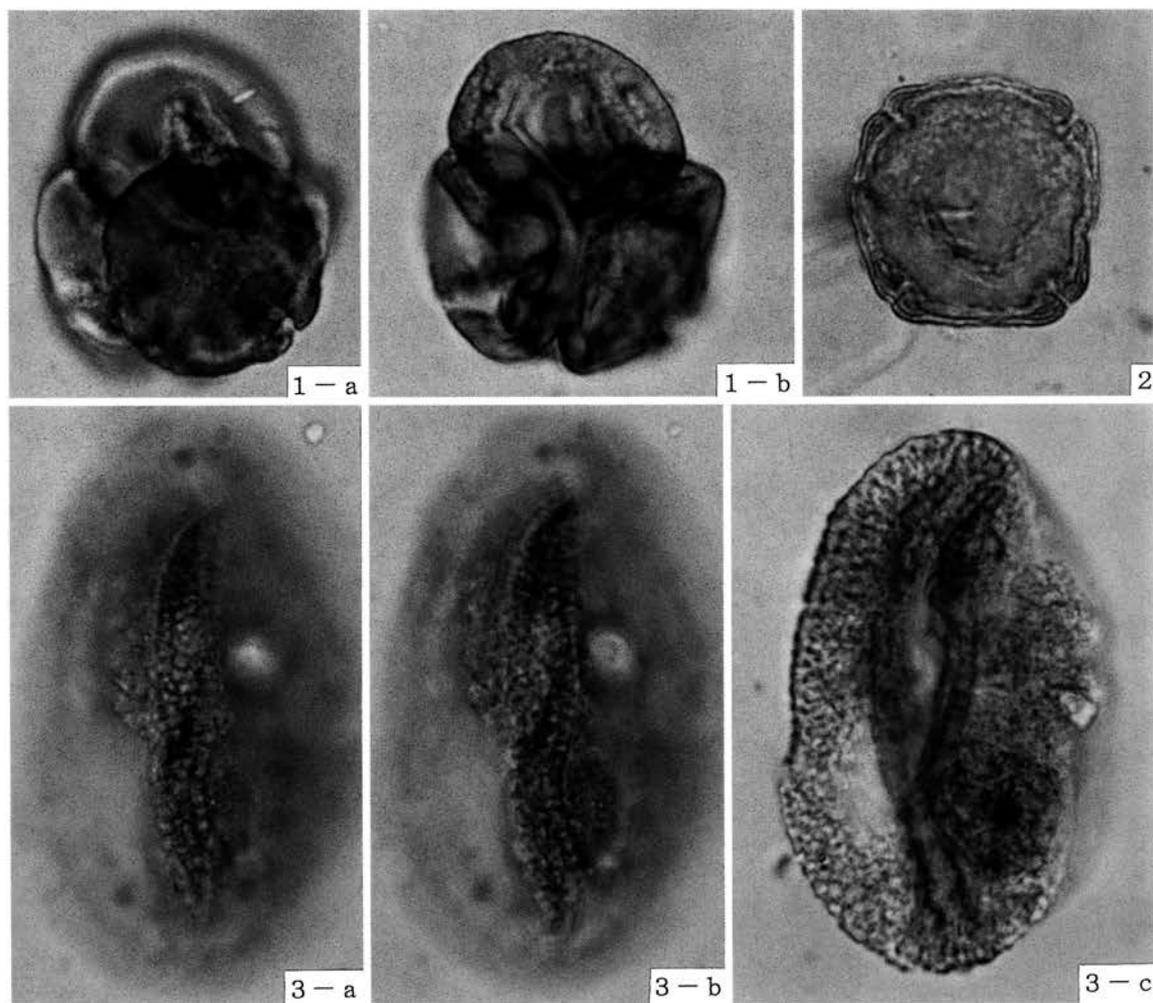
通路の外側に堆積した土層。試料14は古墳時代後期～平安時代中頃、試料15は古墳時代後期。試料14は褐色および、にぶい黄褐色の砂礫混じり粘土質シルト、試料15はにぶい黄橙色礫混じりシルト。

試料17

古墳時代後期以前の堆積層。褐色砂礫混じりシルト。

(3)方法

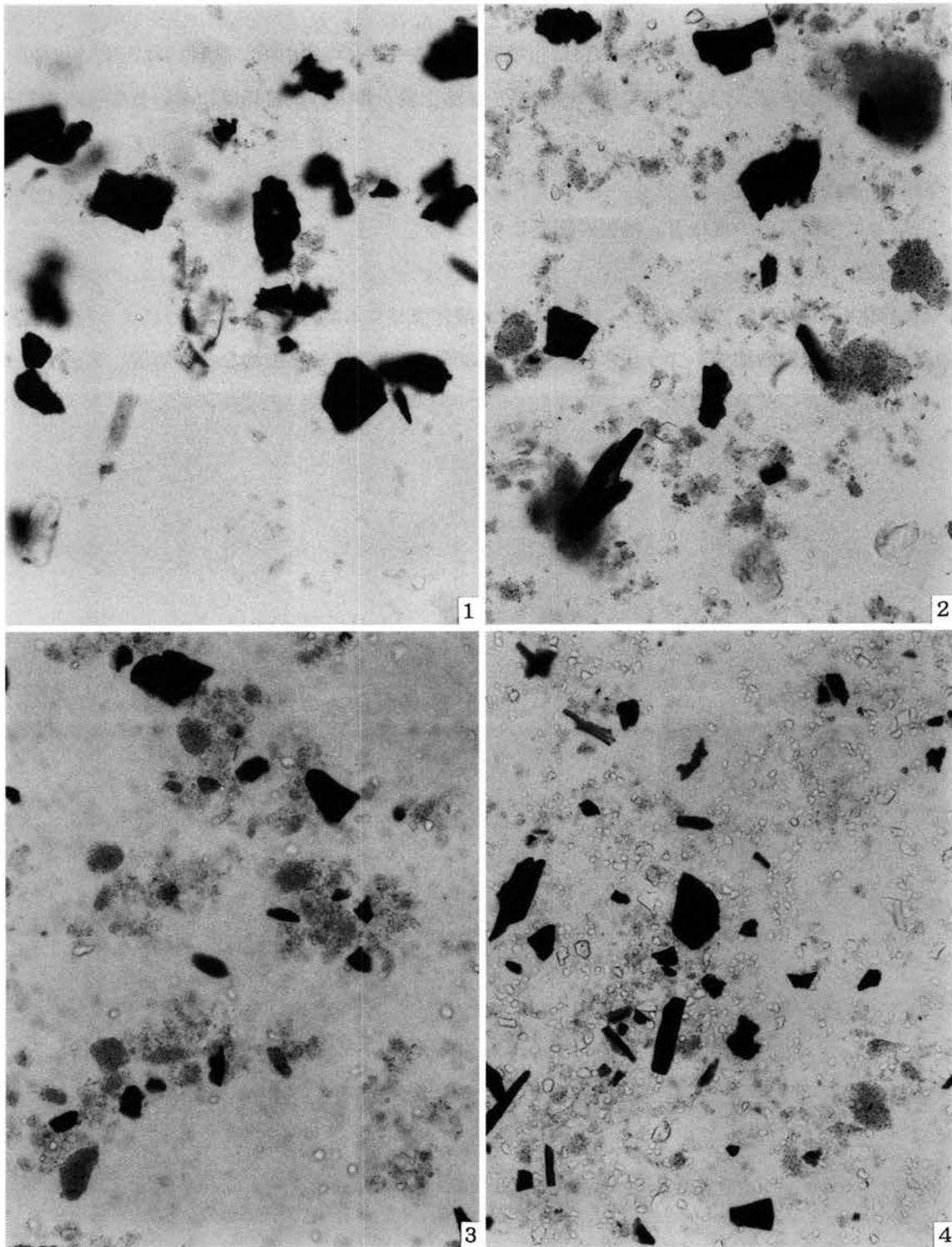
花粉化石の抽出は、試料約2～4gを10%水酸化カリウム処理(湯煎約15分)による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理(約30分)による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシ



第2図 産出した花粉化石(sale bar:10 μ m)

1. ツツジ科、試料18、PAL.MN 1545 2. アリノトウグサ属、試料13、PAL.MN 1544
3. ソバ属、試料7、PAL.MN 1543

ス処理(水酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分)の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離(臭化亜鉛を比重2.1に調整)による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査



第3図 プレパラートの状況(scale bar:50 μ m)

1. 試料2 2. 試料5 3. 試料7 4. 試料9

し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

(4)花粉化石群集の記載

全試料で同定された分類群数は、樹木花粉11、草本花粉10、形態分類で示したシダ植物孢子2である。いずれの試料も十分な花粉化石が産出せず、花粉化石分布図として示すことはできなかった。稀に産出した花粉化石の保存状態は悪いものが大半であった。産出したのは、樹木花粉では、ツガ属、マツ属複維管束亜属、マツ属(不明)、スギ属、カバノキ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、サンショウ属、モチノキ属、ツツジ科であり、ツツジ科は比較的多くの試料から産出した。草本花粉では、イネ科、ソバ属、ほかのタデ属、アカザ科ーヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、アリノトウグサ属、キツネノマゴ属、ヨモギ属、ほかのキク亜科が産出し、イネ科、アリノトウグサ属、ほかのキク亜科が比較的多くの試料から産出した。シダ植物孢子は大半の試料から産出した。

(5)考察

検討したいずれの試料も十分な花粉化石が産出しなかったため、植生変遷の推定はできなかった。試料中には、第2・3図に示したように黒色の炭化物片(燃焼により炭化した植物片)が比較的多く見られ、人為が係わった堆積物であることが予想される。花粉化石は、水成堆積物である場合には良好に保存されるが、土壌などの酸化条件下では、分解・消失し、更に細菌による腐蝕も受ける。検討した試料のうち、通路内堆積土(試料4～8・19)、旧表土層(試料9・10・16)から採取された試料などは、土壌化などにより花粉化石が分解・消失したと推定される。また、そのほかの試料についても産出した花粉化石の保存状態から、土壌化などを受けた堆積物であって水成堆積物の可能性は低く、少なくとも水成環境で安定して堆積したものではないと考えられる。なお、注目される分類群としてソバ属が試料7から産出した。試料7は、古墳時代後期～平安時代の通路内堆積土であるが、試料採取地点付近でソバ栽培が行われていた可能性が考えられる。

補記 本分析については、株式会社パレオ・ラボに委託した。

3. 京都府女谷・荒坂横穴群における樹種同定

(1)はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

(2)試料

試料は、女谷・荒坂横穴群より出土した炭化材11点である。試料の一覧を表3に示す。

(3)方法

表3 女谷・荒坂横穴群における炭化材試料一覧

試料番号	支群名	横穴	出土地点	層位	内容	備考
1	女谷B支群	15号	玄室	初葬面	玄門部板状の炭化材	
2	女谷B支群	16号	玄室	初葬面	耳環859・860下の炭化材	
3	荒坂B支群	14号	玄室	初葬面	耳環881周辺の炭化材	
4	女谷B支群	16号	玄室	初葬面	耳環862の下の炭化材	
5	女谷B支群	16号	玄室	初葬面	耳環861の下の炭化材	
6	女谷B支群	1号	玄室	初葬面	耳環847の接面に挟まっていた木質(987)	鑑定不可
7	女谷B支群	16号	玄室	初葬面	耳環862の接面に挟まっていた木質	鑑定不可
8	荒坂B支群	14号	玄室		玄室内土砂洗浄	
9	女谷B支群	13号	玄室	初葬面	炭化材	
10	女谷B支群	16号	墓道	初期整地土層(33層)		
11	女谷B支群	11号	墓道	初期整地土層(26層下面)		
12	女谷B支群	10号	墓道	初期整地土層(41層)		
13	女谷B支群	—	谷内7区	古墳時代通路面		

試料を割折して新鮮な基本的三断面(木材の横断面、放射断面、接線断面)を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(4) 結果

結果を表4に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科(第4図1)

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科(第4図2)

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで、晩材部の幅は狭い。

放射断面：放射柔細胞の、分野壁孔は窓状である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。

以上の形質よりコウヤマキに同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ30m、径80cmに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靱、

表4 女谷・荒坂横穴群における樹種同定結果

報告番号	樹種名(和名/学名)	
1	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don
2	針葉樹(マキ属、モミ属、ツガ、スギ、ヒノキ科のいずれか)	conifer
3	針葉樹(マキ属、モミ属、ツガ、スギ、ヒノキ科のいずれか)	conifer
4	針葉樹	conifer
5	コウヤマキ	<i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
8	タケ亜科	Bambusoideae
9	コナラ属コナラ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>
10	ヒノキ科	Cupressaceae
11	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don
12	ヒノキ科	Cupressaceae
13	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don

耐朽、耐湿性も高い。特に耐水湿材として用いられる。

ヒノキ科 upressaceae

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅が狭い。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、1分野に2個存在するものが多く、小型であるが、その型は不明瞭である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりヒノキ科に同定される。ヒノキ科には、ヒノキ、サワラ、アスナロなどがあり、いずれも常緑高木である。

針葉樹(マキ属、モミ属、ツガ、スギ、ヒノキ科のいずれか) conifer

横断面：部分的ではあるが、仮道管と単列の放射組織が見られる。

放射断面：部分的ではあるが、放射柔細胞の分野壁孔は、小型のものが見られる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より針葉樹に同定される。なお本試料は、小型の分野壁孔が存在する事などから、マキ属、モミ属、ツガ、スギ、ヒノキ科のいずれかである。

針葉樹 conifer

横断面、放射断面、接線断面ともに保存状態が悪く、針葉樹の特徴を示すが、それ以上の同定は困難であった。なお本試料は、樹脂細胞の存在が確認できたのでスギまたはヒノキ科の可能性が高い。

コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科(第4図3)

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は、やや急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。



横断面 : 0.4mm



放射断面 : 0.1mm



接線断面 : 0.2mm

1. 試料番号11 スギ



横断面 : 0.2mm



放射断面 : 0.1mm



接線断面 : 0.1mm

2. 試料番号5 コウヤマキ



横断面 : 0.2mm



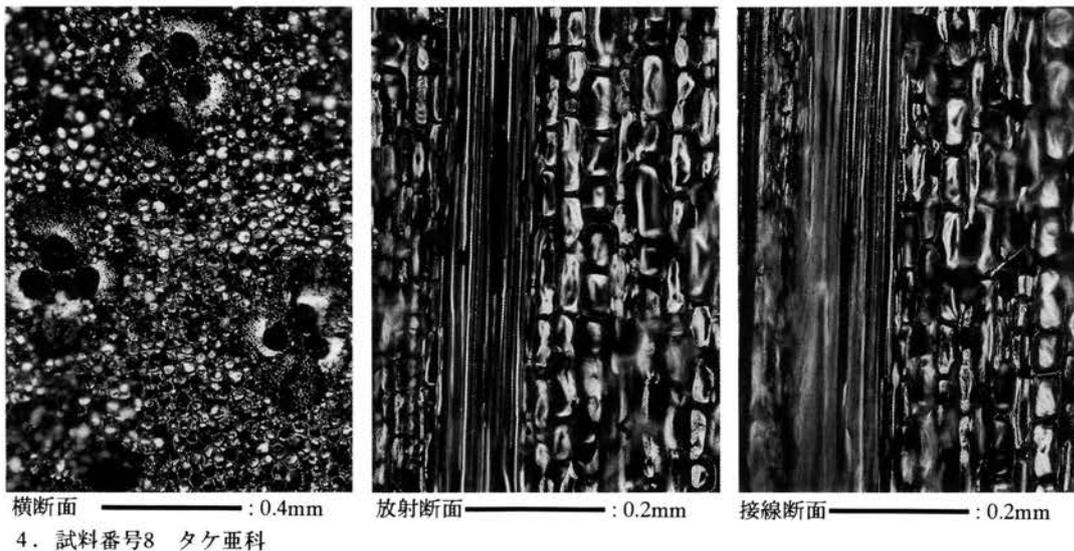
放射断面 : 0.2mm



接線断面 : 0.2mm

3. 試料番号9 コナラ属コナラ節

第4図 女谷・荒坂横穴群の炭化材I



第5図 女谷・荒坂横穴群の炭化材Ⅱ

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靱で弾力に富み、建築材などに用いられる。

タケ亜科 Bambusoideae イネ科(第5図4)

横断面：基本組織である柔細胞の中に並立維管束が不規則に分布する。並立維管束は木部と師部からなり、その周囲に維管束鞘が存在する。

放射断面および接線断面：柔細胞および維管束、維管束鞘が桿軸方向に配列している。

以上の形質よりタケ亜科に同定される。

(5)所見

女谷・荒坂横穴群より出土した炭化材は、スギ3点、コウヤマキ1点、ヒノキ科2点、針葉樹(マキ属、モミ属、ツガ、スギ、ヒノキ科のいずれか)2点、針葉樹1点、コナラ属コナラ節1点、タケ亜科1点であり、全体に針葉樹が多い。これらの炭化材が埋葬施設に使われていたとしたら、スギ、ヒノキ科、コウヤマキなどの針葉樹材が主であったと推定される。なお、近畿地方中央部では木棺材にコウヤマキが使われる傾向が多いようである。

参考文献

佐伯浩・原田浩(1985)「針葉樹材の細胞」(『木材の構造』 文永堂出版) pp.20-48.

佐伯浩・原田浩(1985)「広葉樹材の細胞」(『木材の構造』 文永堂出版) pp.49-100.

島地謙・伊東隆夫(1988)『日本の遺跡出土木製品総覧』 雄山閣 p.296

補記 本分析については、株式会社古環境研究所に委託した。

4. 女谷・荒坂横穴群出土土師器・埴輪の胎土分析

(1)はじめに

京都府八幡市に所在する女谷・荒坂横穴群は、京都市南西方の宇治川と木津川の合流点にほど近い、木津川左岸に広がる丘陵斜面に構築されている。過去4次にわたる発掘調査では、約50基の横穴が調査され、多量の土器が出土している。

出土した土器の中でも、土師器については、赤褐色を呈する土器、赤褐色を呈し、さらに砂粒を含まない精製された土が使用されているとみられる土器、および在地と考えられる黄色を呈する日常雑器の土器の3種類が、比較的明瞭に識別されている。これらのうち、赤褐色を呈し、砂粒を含む土器の中には、ヘルメット形をした特徴的な形の杯が認められており、また、赤褐色を呈する精製土の土器は、器表面が暗文で施文されており、ていねいな作りがなされている。発掘調査の所見によれば、在地と考えられる黄色土器との違いから、これらの赤褐色を呈する土器は、他地域からの搬入品の可能性もあるとされている。

一方、荒坂B支群5号横穴では、東海系とされる円筒埴輪が完形で出土している。横穴群における埴輪の多くは、横穴群内の通路や谷の堆積土の中から破片として出土しており、これは、埴輪の樹立していた古墳が、横穴の造営により破壊されたことを示すと考えられている。したがって、完形かつ東海系とされる上記の埴輪は、その由来が非常に注目されている。

本報告では、上述した土師器の3種類の違い、および東海系とされる埴輪とほかの埴輪との違いについて、土器の材質すなわち胎土の特性における違いの有無とその内容を明らかにし、横穴出土の土師器の製作と供給とに係わる資料を作成する。

(2)試料

試料は、女谷横穴および荒坂横穴より出土した土師器片18点(試料番号1～9・11～19)と埴輪片8点(試料番号10・20～26)の合計26点である。土師器試料のうち、赤褐色を呈する精製土器は、試料番号1～5の5点、赤褐色を呈するが砂粒も含む土器は、試料番号6～9の4点、在地とされる黄色を呈する日常雑器の土器は、試料番号11～19の9点である。なお、試料番号7はヘルメット形の杯であり、試料番号25は東海系とされた円筒埴輪である。

各試料の器形・特徴・出土位置などは、表5に示す。

(3)分析方法

胎土分析には、現在さまざまな分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉碎による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。土師器や埴輪のように比較的粗粒の砂粒を含む土器胎土の分析では、前者の方法の方が、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。さらに前者の方法の中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物および岩石片の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。

この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか(1999)の方法がある。これは、

表5 女谷・荒坂横穴群胎土分析用試料一覧

番号	報告番号	種別	器形	特長	支群	横穴	出土層位	色調	胎土	焼成
1	498	土師器	椀	赤・精製	荒坂B	8号	I面	橙褐色	密	軟
2	426	土師器	把手付椀	赤・精製	荒坂B	3号	I面	橙褐色	密	堅
3	24	土師器	壺	赤・精製	女谷B	3号	I面	橙褐色	密	堅
4	46	土師器	長頸壺	赤・精製	女谷B	5号	I面	赤茶褐色	密	堅
5	48	土師器	高杯	赤・精製	女谷B	5号	墓道内	橙褐色	密	やや軟
6	174	土師器	杯	赤・砂粒	女谷B	13号	I面	橙褐色	やや粗	やや軟
7	298	土師器	杯・ヘルメット	赤・砂粒	女谷C	4号	I面	橙褐色	良	やや軟
8	339	土師器	高杯	赤・砂粒	女谷C	6号	I・II面	茶褐色	良	やや軟
9	175	土師器	甕	赤・砂粒	女谷B	13号	墓道内	淡橙褐色	やや粗	やや軟
10	113	埴輪	朝顔	黄	女谷B	9号	墓道前面	橙褐色	やや粗	軟
11	300	土師器	甕	黄	女谷C	4号	I面	淡黄褐色	密	堅
12	497	土師器	甕	黄	荒坂B	7号	墓道内	淡褐色	良	やや軟
13	669	土師器	甕	黄	荒坂C	ⅢSX02		黄茶褐色	やや粗	軟
14	270	土師器	甕	黄	女谷C	1号	I面	黄褐色	良	やや堅
15	499	土師器	甕	黄	荒坂B	8号	墓道内6層	黄橙褐色	密	軟
16	268	土師器	高杯	黄	女谷C	1号	I面	淡黄褐色	やや粗	やや軟
17	667	土師器	高杯	黄	荒坂C	2号	I面	黄褐色	密	やや軟
18	50	土師器	甌	黄	女谷B	5号	墓道内	黄褐色	良	やや堅
19	670	土師器	甌	黄	荒坂C	ⅢSX02		黄褐色	良	やや軟
20		埴輪	円筒埴輪		女谷B	ⅡSX06		淡黄褐色	やや密	堅
21		埴輪	円筒埴輪		荒坂B	4号	墓道内	淡橙褐色	やや密	軟
22		埴輪	円筒埴輪		荒坂C	2号	墓道内	黄褐色	やや密	軟
23		埴輪	円筒埴輪		女谷B		墓道内通路	灰白色	やや密	良
24		埴輪	円筒埴輪		荒坂C	1号	墓道内	淡灰色	やや密	堅
25	476	埴輪	円筒埴輪	東海系	荒坂B	5号	羨門	灰褐色	やや粗	やや堅
26	681	埴輪	蓋		荒坂C	1号	墓道内	淡橙褐色	粗	軟

胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。

今回の分析で対象とする土師器や埴輪も、同一の地質分布範囲内で作られた可能性もあるため、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは、試料間の胎土の区別ができないことが予想される。このことを考慮し、本分析では松田ほか(1999)の方法を用いる。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的手法を用いて観察し、胎土中に含まれる砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を明らかにした。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法によりプレパラート全面で計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩

石別出現頻度、孔隙・砂粒・基質の割合、砂粒の粒径組成を求めた。

(4)結果

分析結果を表6～12に示す。この結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度を棒グラフにして第6～14図に示し、孔隙・砂粒・基質の割合を第15図、砂粒の粒径組成を第16～18図に示す。これらの結果において、前述した試料の分類(土師器と埴輪、土師器の分類など)を当てはめると、分類ごとに胎土の特徴が異なることが見出された。以下に胎土の特徴を述べる。

a. 赤褐色精製土器

石英、カリ長石、斜長石からなる砂粒の主体の粒径は、細粒砂以下の粒径が圧倒的に多い。特に女谷横穴出土の試料番号3・4は粗粒シルトと中粒シルトが主体を占め、「精製土を用いている」という所見がよく現れている。荒坂横穴出土の試料番号1と2および女谷横穴出土の試料番号5の3点は、細粒砂も比較的多く、粒径組成の上では、次に述べる赤褐色で砂粒を含む土器との差はあまりない。

赤褐色精製土器の胎土の特徴はまた、少量ながらも火山ガラスを伴うことである。後述するように黄色土器および埴輪にはほとんど含まれていないことから、赤褐色精製土器の特徴と言える。火山ガラスの形態は、曲率を持った平板状のバブル型が多く、粒径は中粒砂から中粒シルトまで幅広い。さらに、各試料ともに微量であるが角閃石を伴うことも特徴である。

なお、荒坂横穴出土試料は、微量の花崗岩類の岩片を伴うが、女谷横穴出土試料には、それは認められないという違いはある。

b. 赤褐色で砂粒を含む土器

石英、カリ長石、斜長石からなる砂粒の主体の粒径は、上述の精製土器と同様に細粒砂以下の粒径が圧倒的に多い。ただし、試料番号9では中粒砂も比較的多く含まれる。上述のように粒径組成においては、精製土器との差は大きくない。

また、上述の女谷横穴出土の精製土器においては石英、カリ長石、斜長石のほかは角閃石と火山ガラスが含まれるのみであったが、赤褐色で砂粒を含む土器では、同じ女谷横穴出土でも、試料によっては、白雲母やチャートあるいは花崗岩類なども含まれる。特に試料番号9を除く3点は、いずれも微量の角閃石と火山ガラスを伴うが、試料番号9には火山ガラスが含まれず、少量の花崗岩類の岩片が含まれる。

なお、ヘルメット形の杯とされた試料番号7は、上述のように試料番号6や8とほぼ同様の胎土である。むしろ、今回の赤褐色で砂粒を含む土器の中では、試料番号9の方がほかの試料に比べるとやや異質である。

c. 黄色土器(日常雑器)

石英、カリ長石、斜長石からなる砂粒の主体の粒径は、比率から言えば極細粒砂や粗粒シルトの比率が最も高く、粒径の淘汰度も一様ではないが、いずれの試料も中粒砂および粗粒砂の比率が、上述の赤褐色精製土器および赤褐色で砂粒を含む土器に比べると明らかに高い。すなわち、胎土中の砂粒の粒径組成において、赤褐色土器と黄色土器とは明らかな違いがある。

また、石英、カリ長石、斜長石以外の砂粒では、少量または微量の黒雲母の鉱物片、チャートおよび花崗岩類の岩片を伴うことが特徴であり、赤褐色土器で認められた火山ガラスは、ほとんどの試料において含まれない。ただし、女谷横穴出土の甕である試料番号14のみは、黒雲母、チャート、花崗岩類に加えて火山ガラスも少量含み、ほかの試料とはやや異質であるといえる。

器種による胎土の違いは、それほど明瞭ではない。甕の試料5点(試料番号11~15)のうち、試料番号15を除く4点の粒径組成に、極細粒砂と粗粒シルトが突出する傾向が認められる程度である。

d. 埴輪

砂粒全体の粒径組成は、粗粒シルトから粗粒砂までを主体とし、非常に淘汰度が悪い。石英、カリ長石、斜長石からなる砂粒の主体の粒径組成において中粒砂や粗粒砂の割合が比較的高いことに加えて、中粒砂以上の粒径の岩石片も比較的多いことが、上述の砂粒全体の粒径組成の特徴の要因となっている。この中粒砂以上の岩石片の内訳は、チャート、結晶片岩、多結晶石英および花崗岩類の4者である。

ただし、東海系とされた試料番号25には結晶片岩および多結晶石英は認められず、チャートと花崗岩類のみである。また、この試料では砂粒の主体においても石英の量比が突出していることが指摘できる。

(5) 考察

土師器について

分析結果より、赤褐色土器と黄色土器とは、胎土中の砂粒の粒径組成および石英、カリ長石、斜長石以外の少量伴われる碎屑物の種類構成において比較的明瞭な違いが認められた。これは、赤褐色土器と黄色土器とは、粘土および砂の選択段階から異なる材料であったことを示唆する。ただし、どちらの土師器も、主体となる砂の組成は石英、カリ長石、斜長石の3者であることや、それ以外の鉱物および岩石片においても角閃石、黒雲母、白雲母、チャート、多結晶石英、花崗岩類、火山ガラスのわずか7種類程度に限定されることなどから、粘土や砂の採取地は共通の地質学的背景を有する地域内にある可能性が高い。

ここで、女谷・荒坂横穴群の位置する八幡市周辺の地質学的背景を日本の地質「近畿地方」編集委員会(1987)などから概観する。横穴の構築されている丘陵は、京阪奈丘陵とよばれ、第四紀更新世前期の砂泥層、砂礫層からなる大阪層群下部層により構成されている。また、大阪層群中には、火山ガラスからなるテフラ層が多数狭在している。丘陵の前面に広がる木津川の沖積低地には、木津川とその支流の流域に分布する地質に由来する碎屑物が堆積している。流域に分布する主な地質のうち、木津川の左岸側の笠置山地には、白亜紀~古第三紀にかけて形成された領家帯と呼ばれる地質が広く分布している。

領家帯を構成する岩石は、花崗岩や花崗閃緑岩、石英閃緑岩などの花崗岩類であり、また変成岩である片麻岩も分布している。花崗岩類を構成する鉱物は、石英、カリ長石、斜長石であり、種類によって角閃石、黒雲母、白雲母を含む。一方、木津川の右岸側の山地には、中生代の泥質岩や砂岩およびチャートにより構成される丹波帯と呼ばれる地質が分布している。以上述べた地

質に由来する碎屑物が、八幡市周辺域の木津川の低地を構成している。

したがって、上述した土師器胎土中に含まれる碎屑物の種類構成は、多結晶石英も花崗岩類の岩片と考えれば、赤褐色土器も黄色土器もいずれも出土地の地質学的背景と異質なものはない。すなわち、胎土の碎屑物の種類構成は異なるものの、いずれも出土地周辺の粘土や砂が使用されている可能性が高い。

前述のように発掘調査所見では、赤褐色土器については、搬入品の可能性もあるとされているが、現時点では、搬入品であったとしても木津川流域を出るものではないと考えられる。また、赤褐色土器と黄色土器との違いは、製作地の違いではなく、同じ製作地において、意識的に素材を変えて2種類の土師器を作っていたという可能性もある。なお、赤褐色土器のうち、精製土器には、荒坂横穴出土試料と女谷横穴出土試料との間に粒径組成と微量含まれる岩石片の違いが認められたが、この違いは意識的なものではないと考えられる。したがって、製作者(地)の違いが反映されたものである可能性もある。いずれにしても、土師器の製作事情の解明には、今後、発掘調査において周辺域における両種の土師器のさまざまな出土状況を総合的に捉えた上で検討されるべきものであろう。

埴輪について

埴輪の胎土中に含まれる砂粒は、上述の土師器のそれとは粒径組成において異なるものの、種類構成は黄色土器と類似している。したがって、横穴から出土した埴輪の材料となった粘土や砂も出土地周辺域で採取された可能性が高い。ここで、黄色土器との種類構成における違いとしては、結晶片岩の存在があげられる。これは、主に石英粒からなる片状組織の認められた微小な碎屑物を便宜上結晶片岩(石英片岩)としたものであり、今回のような試料の場合には、その由来として、領家帯内に分布する片状組織を有する石英閃緑岩なども想定される。

今回の分析の課題とされた試料番号25については、前述のように、ほかの埴輪とは、若干異なる特徴が捉えられた。しかし、砂粒の種類構成からは、木津川流域と異質な碎屑物はなく、現時点で東海地域産であることを積極的に示す要素は認められない。ただし、認められた岩石片であるチャートも花崗岩類も、例えば濃尾平野の後背の地質に分布しており、東海地域産であることを否定するものでもない。今後、東海地域で出土した円筒埴輪を実際に多数分析することができれば、今回の試料の検証も可能であると考えられる。

参考文献

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高(1999)「瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察—岩石学的・堆積学的による—」『日本文化財科学会第16回大会研究発表要旨集』 p.120-121.

日本の地質「近畿地方」編集委員会(1987)『日本の地質6 近畿地方』 共立出版 p.297

補記 本分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

表6 薄片観察結果(1)

試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成																合計									
		鉱物片								岩石片																	
		石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	緑廉石	ざくろ石	ジルコン	不透明鉱物	チャート	泥岩	砂岩	凝灰岩		デイサイト	安山岩	ホルンフェルス	結晶片岩	多結晶石英	花崗岩類	火山ガラス	植物珪酸体	
1	砂	細礫																									0
	極粗粒砂			1																							1
	粗粒砂			1																			1				2
	中粒砂	2																						2			4
	細粒砂	6	2	6		2	1																				17
	極細粒砂	3	5	4																					2		14
	粗粒シルト	5	4	5																				1			15
	中粒シルト		1	1																							2
	基質																									117	
	孔隙																									9	
2	砂	細礫																									0
	極粗粒砂																							1			1
	粗粒砂													1									1				2
	中粒砂	6	2	7																					1		16
	細粒砂	16	4	10		1																			6		37
	極細粒砂	7	2	10																					1		20
	粗粒シルト	7	3	7																					3		20
	中粒シルト	2	1	2																					1		6
	基質																									273	
	孔隙																									12	
3	砂	細礫																									0
	極粗粒砂																										0
	粗粒砂																										0
	中粒砂																								1		1
	細粒砂	1				2																					3
	極細粒砂	3	4	2		1																			1		11
	粗粒シルト	7	5	13																					2		27
	中粒シルト	5	3	9																					1		18
	基質																									242	
	孔隙																									23	
4	砂	細礫																									0
	極粗粒砂																										0
	粗粒砂	1																									1
	中粒砂																										0
	細粒砂	3	1	2																							6
	極細粒砂	5	4	2																							11
	粗粒シルト	8	9	8		2				1																1	28
	中粒シルト	6	7	7																					1		21
	基質																									167	
	孔隙																									8	

表7 薄片観察結果(2)

試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成																合計										
		鉱物片										岩石片																
		石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	緑廉石	ざくろ石	ジルコン	不透明鉱物	チャート	泥岩	砂岩	凝灰岩		デイサイト	安山岩	ホルンフェルス	結晶石英	多結晶石英	花崗岩類	火山ガラス	植物珪酸体		
5	砂	細礫																									0	
	極粗粒砂																										0	
	粗粒砂	2																									2	
	中粒砂	3																									3	
	細粒砂	11	2	6																							19	
	極細粒砂	11	3	5		1																		2			22	
	粗粒シルト	12	1	4																				1			18	
	中粒シルト	3		2																							5	
	基質																											129
	孔隙																											10
6	砂	細礫																									0	
	極粗粒砂																							1			1	
	粗粒砂																										0	
	中粒砂	1																									1	
	細粒砂	5	5	10		1																					21	
	極細粒砂	7	5	16		1							1											1			31	
	粗粒シルト	13	10	17																					1		40	
	中粒シルト	2	4	2																							8	
	基質																											249
	孔隙																											11
7	砂	細礫																									0	
	極粗粒砂																										0	
	粗粒砂																										0	
	中粒砂	2	1	1																							4	
	細粒砂	9	1	5																							15	
	極細粒砂	7	3	6		2																					18	
	粗粒シルト	7	6	8		1	1																	2			25	
	中粒シルト	3	2	3																							8	
	基質																											134
	孔隙																											13
8	砂	細礫																									0	
	極粗粒砂																										0	
	粗粒砂																							1			1	
	中粒砂	1		1												1								1			4	
	細粒砂	12	2	11		3	1			1														1			31	
	極細粒砂	11	4	14		2	1																	1			33	
	粗粒シルト	9	4	16																					1		29	
	中粒シルト	3	3	3																							9	
	基質																											305
	孔隙																											35

表8 薄片観察結果(3)

試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成																合計								
		鉱物片								岩石片																
		石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	緑廉石	ざくろ石	ジルコン	不透明鉱物	チャート	泥岩	砂岩	凝灰岩		デイサイト	安山岩	ホルンフェルス	結晶片岩	多結晶石英	花崗岩類	火山ガラス	植物珪酸体
9	砂 細礫																									0
	極粗粒砂	1																					1			2
	粗粒砂	2														3							1			6
	中粒砂	6	4	2												1							2			15
	細粒砂	18	3	7		1																	1			30
	極細粒砂	26	7	14			1					1	1													50
	粗粒シルト	16	4	17			3																		4	40
	中粒シルト	3	2	2																					6	7
	基質																									233
孔隙																										19
10	砂 細礫																									0
	極粗粒砂																									0
	粗粒砂	5	1																			2	4			12
	中粒砂	12	3	6																		1	5			27
	細粒砂	7		7																						14
	極細粒砂	4	8	11																						23
	粗粒シルト	7	6	18																						31
	中粒シルト	2	2	4																						8
	基質																									219
孔隙																										18
11	砂 細礫																									0
	極粗粒砂																									0
	粗粒砂		3	1																			1			5
	中粒砂	2	1																							3
	細粒砂	7	3	4			1																			15
	極細粒砂	15	6	14			1	1			1															38
	粗粒シルト	9	6	19																					1	34
	中粒シルト	2	2	2																					1	6
	基質																									154
孔隙																										13
12	砂 細礫																									0
	極粗粒砂															1										1
	粗粒砂	4	2	1								1				2						1	3			14
	中粒砂	2	1									1											3			7
	細粒砂	1					1	3																		5
	極細粒砂	6	3	5				5																		19
	粗粒シルト	18	4	20				3			1														2	46
	中粒シルト	6	1	12																						19
	基質																									188
孔隙																										4

表9 薄片観察結果(4)

試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成																合計										
		鉱物片								岩石片																		
		石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	緑廉石	ざくろ石	ジルコン	不透明鉱物	チャート	泥岩	砂岩	凝灰岩		デイサイト	安山岩	ホルンフェルス	結晶片岩	多結晶石英	花崗岩類	火山ガラス	植物珪酸体		
13	砂	細礫																									0	
	極粗粒砂	1																									1	
	粗粒砂		3																				2				5	
	中粒砂	4	1																								5	
	細粒砂	4	1	2																							7	
	極細粒砂	5	7	9				2																			23	
	粗粒シルト	10	12	9																					1		31	
	中粒シルト	2	3	2																						2		7
	基質																											74
	孔隙																											5
14	砂	細礫																									0	
	極粗粒砂																										0	
	粗粒砂											3															3	
	中粒砂	1	2																1		1						5	
	細粒砂	2		1																				3			6	
	極細粒砂	10	2	3		1		1	1															2			20	
	粗粒シルト	6	5	15		1						1													2		28	
	中粒シルト	3	2	2																					2		7	
	基質																									22	116	
	孔隙																									1	6	
15	砂	細礫																									0	
	極粗粒砂																							3			3	
	粗粒砂	3	1	5																				4			13	
	中粒砂	6	2	5																				4			17	
	細粒砂	11	6	10				1																			28	
	極細粒砂	16	6	7								1												1	1		31	
	粗粒シルト	10	10	9																					1		29	
	中粒シルト	1	2	1																							4	
	基質																										167	
	孔隙																										13	
16	砂	細礫																									0	
	極粗粒砂																							1			1	
	粗粒砂	2																						1			3	
	中粒砂	14		1				1				1											2				19	
	細粒砂	26	5	7				1			1																40	
	極細粒砂	15	2	5								1	1														24	
	粗粒シルト	2	4	9																					2		15	
	中粒シルト		1	2																					1		3	
	基質																										114	
	孔隙																										14	

表10 薄片観察結果(5)

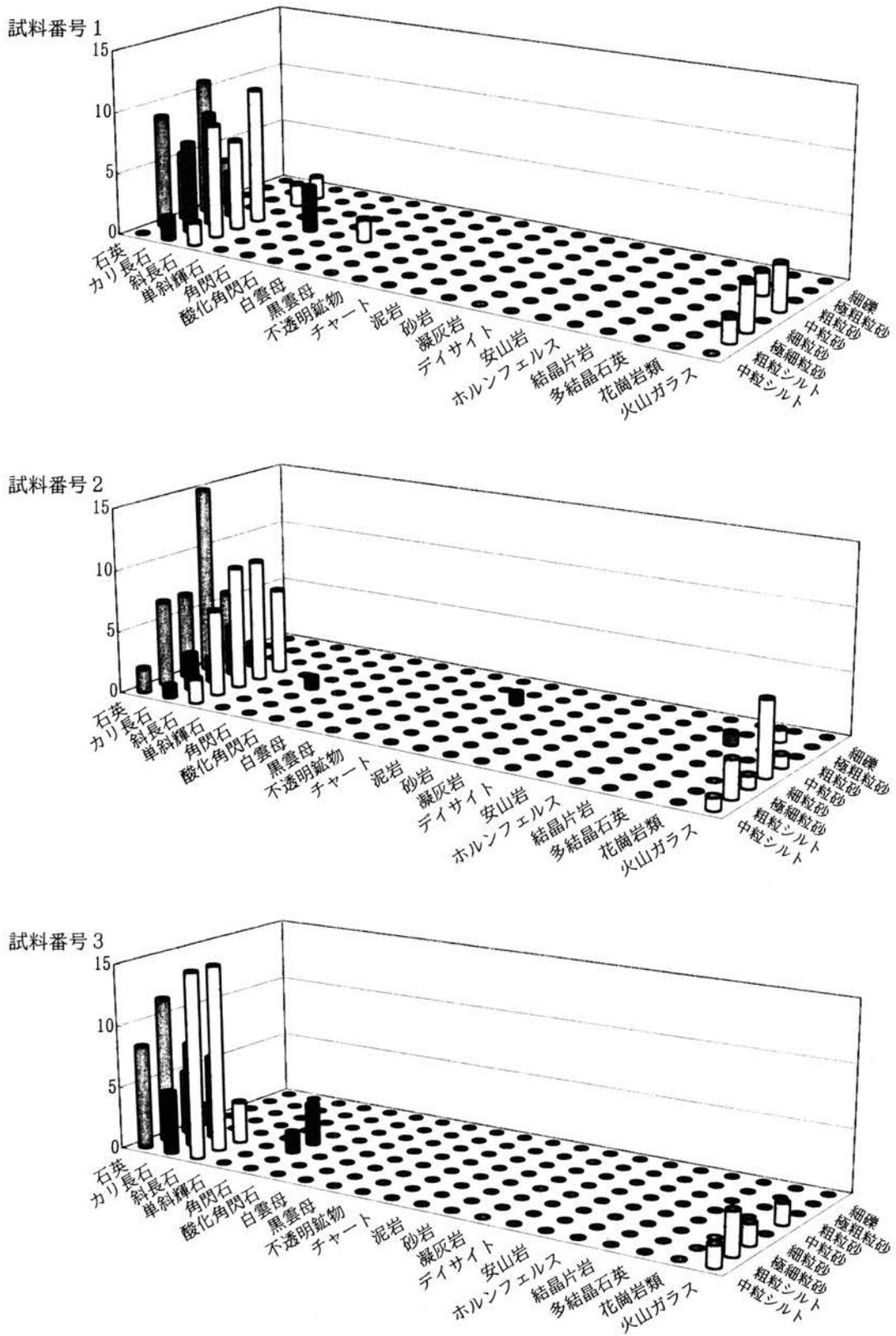
試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成																合計									
		鉱物片								岩石片																	
		石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	緑廉石	ざくろ石	ジルコン	不透明鉱物	チャート	泥岩	砂岩	凝灰岩		デイサイト	安山岩	ホルンフェルス	結晶片岩	多結晶石英	花崗岩類	火山ガラス	植物珪酸体	
17	砂	細礫																									0
	極粗粒砂																										0
	粗粒砂	1						1					1										1			4	
	中粒砂	8	3	3												1							1			16	
	細粒砂	16	5	6				1					1	1	1							1				32	
	極細粒砂	21	6	12			1	1					1		1											43	
	粗粒シルト	16	13	13		1						1													1	44	
	中粒シルト	3	10	6																					1	19	
	基質																									222	
孔隙																									9		
18	砂	細礫																									0
	極粗粒砂																										0
	粗粒砂	2											2									2	3			9	
	中粒砂	2																				1				3	
	細粒砂	10	4	4				1																		19	
	極細粒砂	11	9	7		1		2																		30	
	粗粒シルト	9	15	17																					2	41	
	中粒シルト	2	9	6																						17	
	基質																									368	
孔隙																									23		
19	砂	細礫																									0
	極粗粒砂	1																									1
	粗粒砂	3	1																				1			5	
	中粒砂	7	2	2			1	1														1	1			15	
	細粒砂	14	4	8				1															1			28	
	極細粒砂	12	7	6			1		1																	27	
	粗粒シルト	9	7	11			1																		1	28	
	中粒シルト		6	1																						7	
	基質																									190	
孔隙																									8		
20	砂	細礫																									0
	極粗粒砂	1																					1			2	
	粗粒砂	7	3	1									2									4	1			18	
	中粒砂	4	3	2																						9	
	細粒砂	11	6	3									1										2			23	
	極細粒砂	10	7	10																						27	
	粗粒シルト	5	9	11																						25	
	中粒シルト	4	2	2																						8	
	基質	カリ長石の熔融化が認められる。																								197	
孔隙																									8		

表11 薄片観察結果(6)

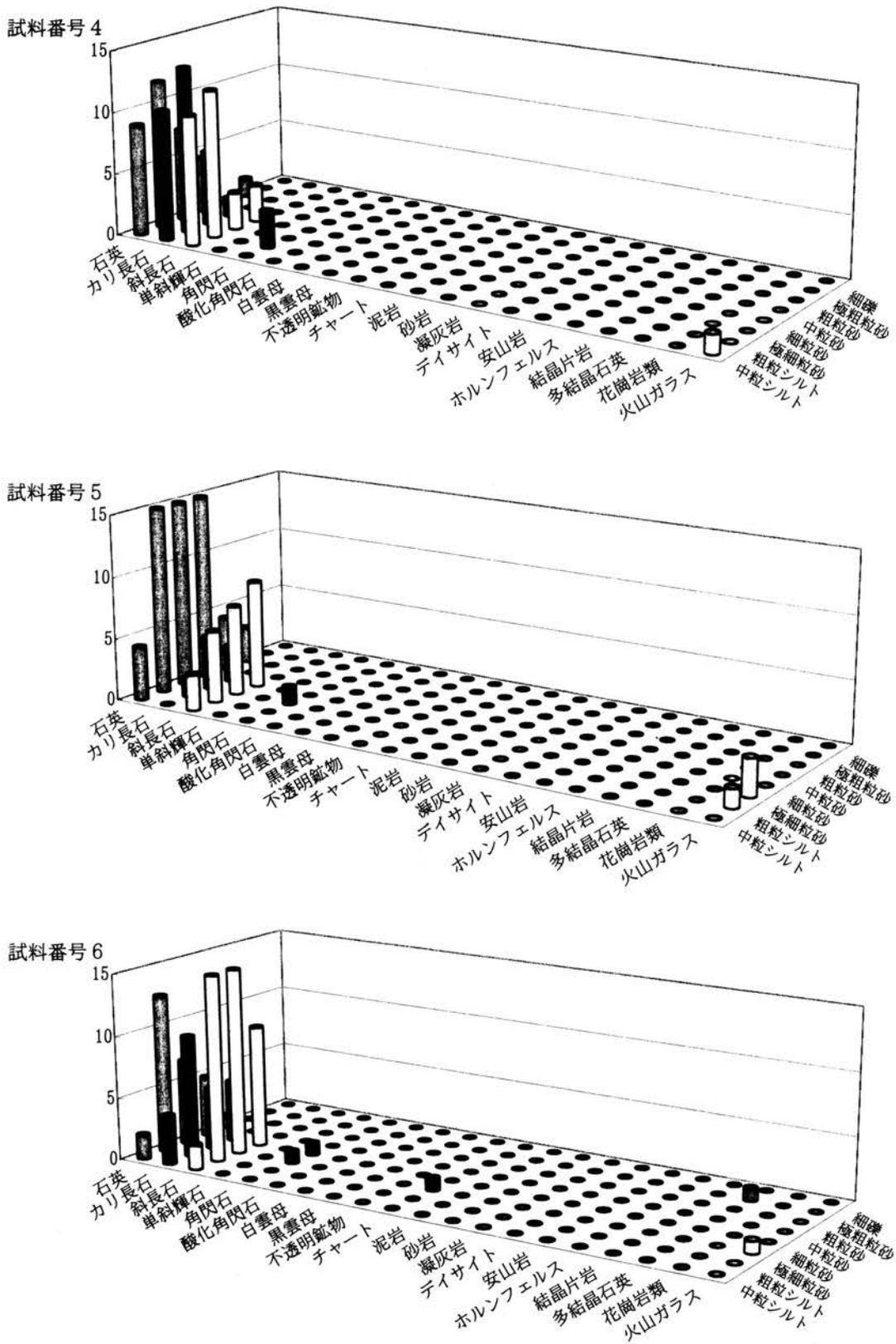
試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成																合計								
		鉱物片										岩石片														
		石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	緑廉石	ざくろ石	ジルコン	不透明鉱物	チャート	泥岩	砂岩	凝灰岩		デイサイト	安山岩	ホルンフェルス	結晶片岩	多結晶石英	花崗岩類	火山ガラス	植物珪酸体
21	砂 細礫																									0
	極粗粒砂	3	1											1												5
	粗粒砂	12	2										2								1	2				19
	中粒砂	11	4	1																	1	1				18
	細粒砂	15	9	3																						27
	極細粒砂	8	2	4																						14
	粗粒シルト	3	7	3																						13
	中粒シルト	2	2	2																						6
	基質																								116	
孔隙																								16		
22	砂 細礫																									0
	極粗粒砂	2	1										2								1	2	2			10
	粗粒砂	10	2	1									3									1	2			19
	中粒砂	5	6	1									4								1	1				18
	細粒砂	10	7	8																						25
	極細粒砂	8	9	8																						25
	粗粒シルト	10	11	7																						28
	中粒シルト	1	2	1																						4
	基質	カリ長石の弱い熔融化が認められる。																							247	
孔隙																								18		
23	砂 細礫																						1			1
	極粗粒砂	5	1																							6
	粗粒砂	13	1	1																		7	8			30
	中粒砂	20	2	2																		3	2	2		31
	細粒砂	18	2	7									1									1				29
	極細粒砂	8	4	9																						21
	粗粒シルト	3	3	3									1												1	10
	中粒シルト	1		1																						2
	基質																								248	
孔隙																								21		
24	砂 細礫																				1		1			2
	極粗粒砂	1	1										1										1	1		5
	粗粒砂	6	2									6									3	2	2			21
	中粒砂	8	1																			2	2	2		15
	細粒砂	6	1	9									3													19
	極細粒砂	4	4	7																						15
	粗粒シルト	4	10	6																					2	20
	中粒シルト	1	3	2																						6
	基質																								264	
孔隙																								15		

表12 薄片観察結果(7)

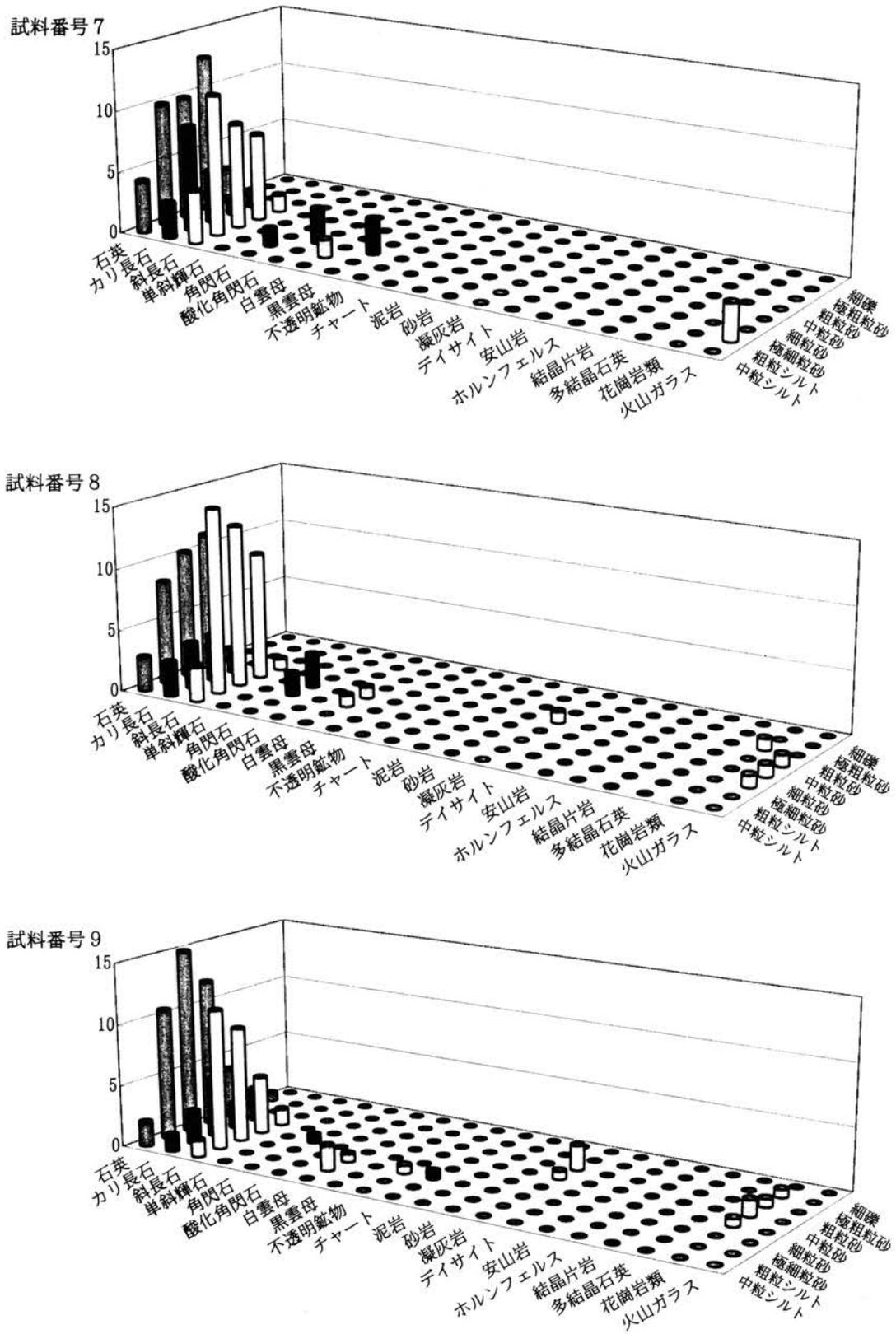
試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成																合計									
		鉱物片								岩石片																	
		石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	緑廉石	ざくろ石	ジルコン	不透明鉱物	チャート	泥岩	砂岩	凝灰岩		デイサイト	安山岩	ホルンフェルス	結晶片岩	多結晶石英	花崗岩類	火山ガラス	植物珪酸体	
25	砂	細礫																									0
	極粗粒砂	3	1																					1			5
	粗粒砂	6											1														7
	中粒砂	4	1	1												1											7
	細粒砂	7																									7
	極細粒砂	7	1	2																							10
	粗粒シルト	8	1	4																							13
	中粒シルト	1		1																							2
	基質	カリ長石は著しく熔融化している。斜長石にも結晶表面部に熔融化が認められる。																							29		
孔隙																								8			
26	砂	細礫																									0
	極粗粒砂	1																1					1	1			4
	粗粒砂	6	3																				1	1			11
	中粒砂	6	3	2									2									1	1				15
	細粒砂	3		5									1										1				10
	極細粒砂	2	3	7		1																					13
	粗粒シルト	7	3	6																							16
	中粒シルト	1	2	2																							5
	基質																								95		
孔隙																								13			



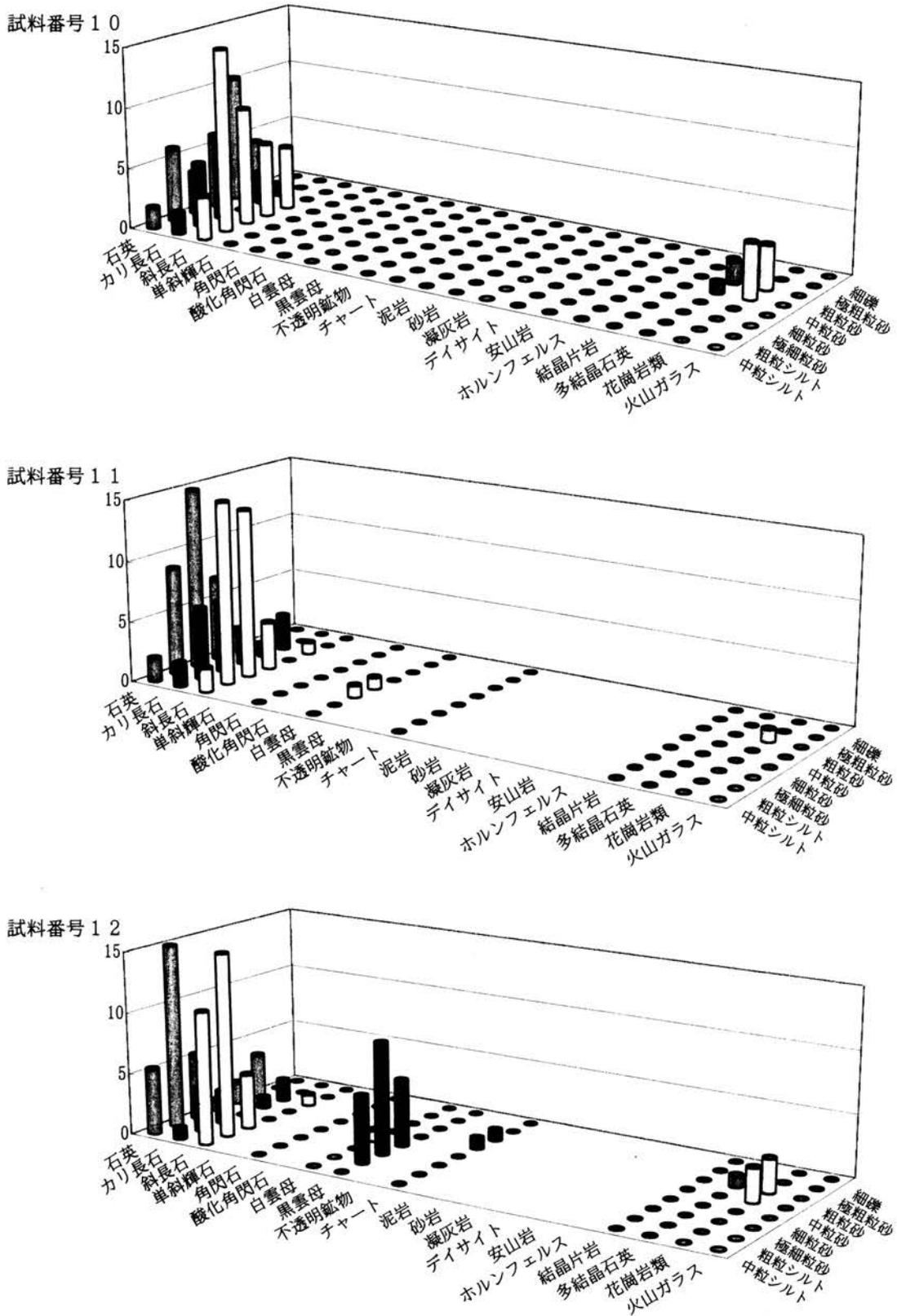
第6図 各粒度段階における鉱物・岩石出現頻度(1)



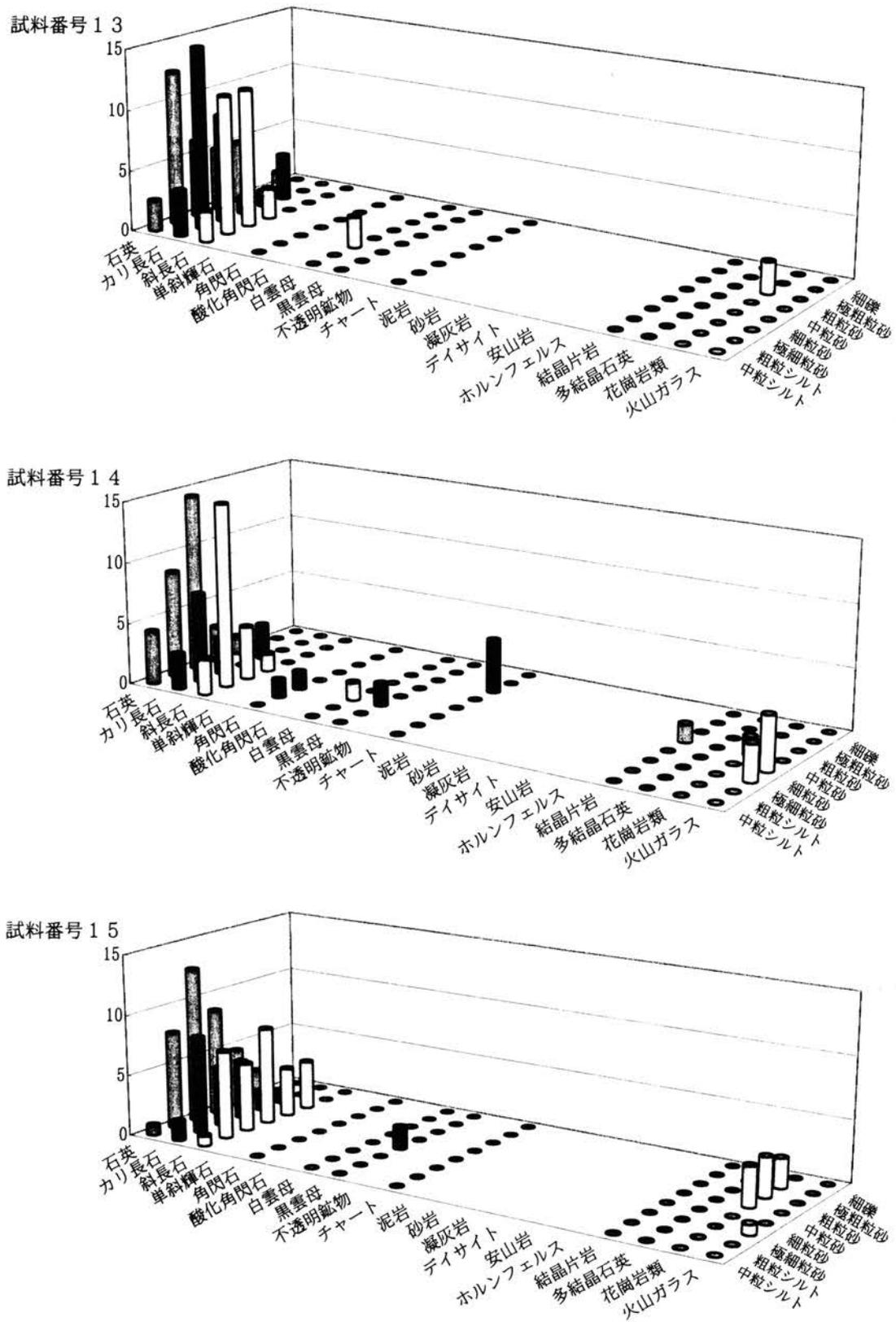
第7図 各粒度段階における鉱物・岩石出現頻度(2)



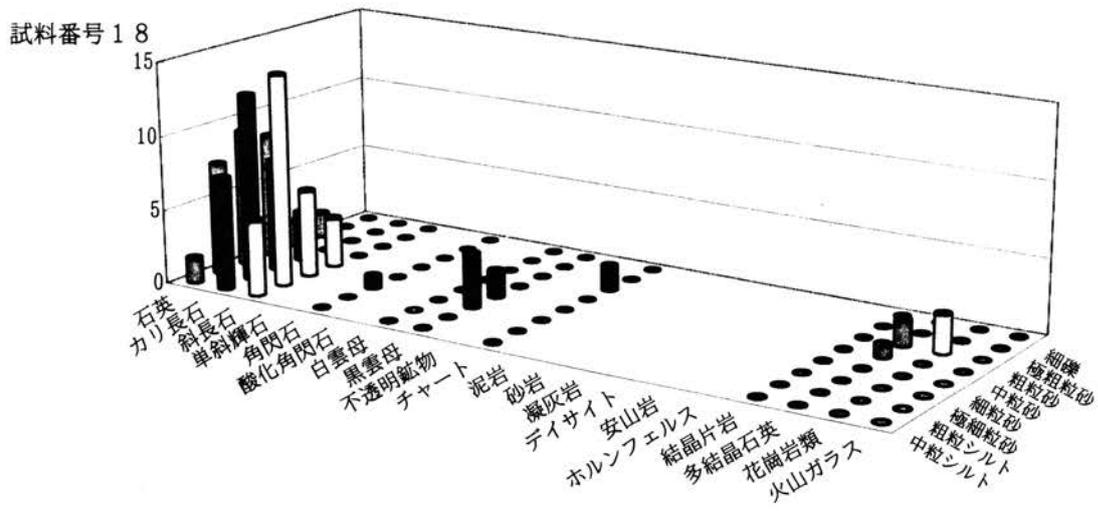
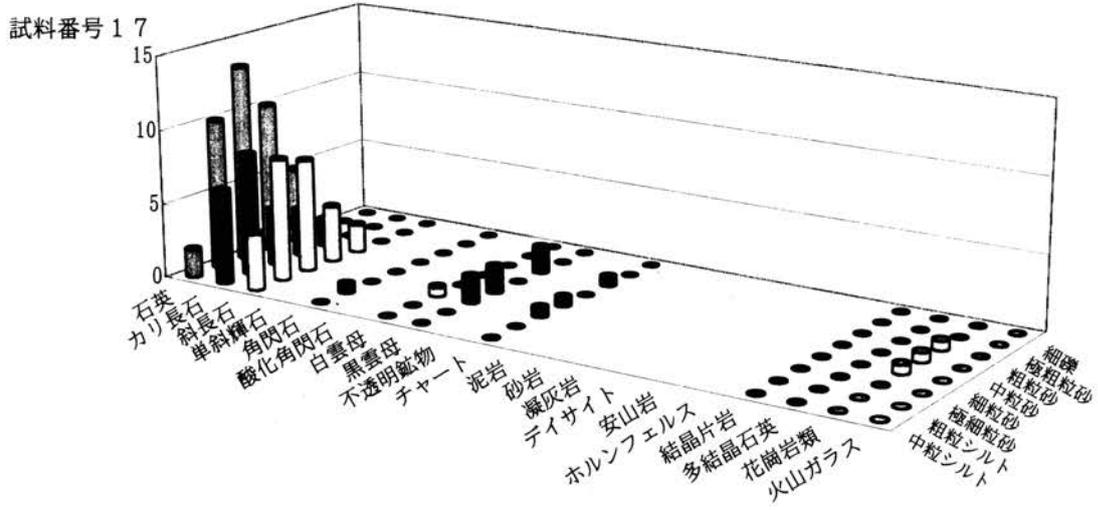
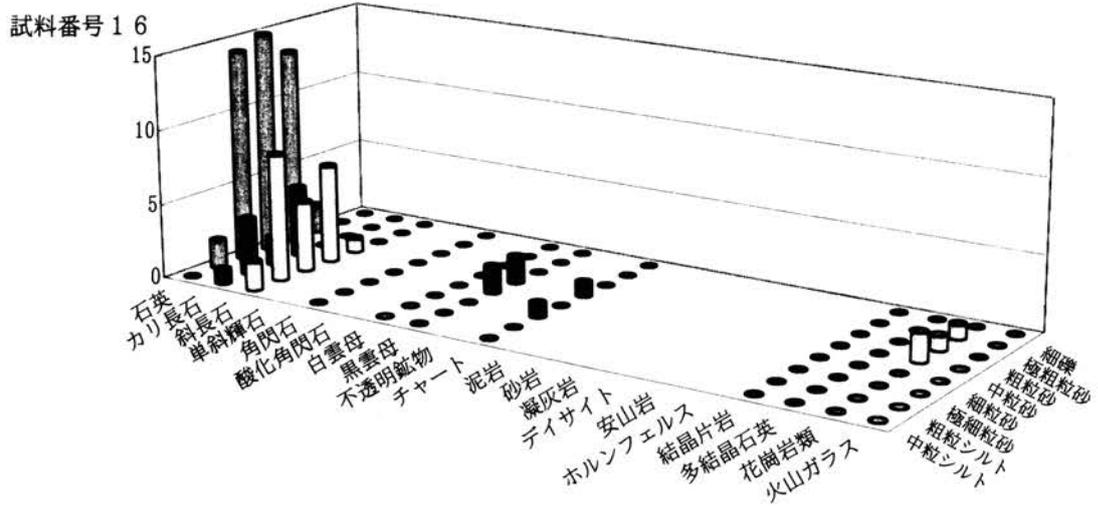
第8図 各粒度段階における鉱物・岩石出現頻度(3)



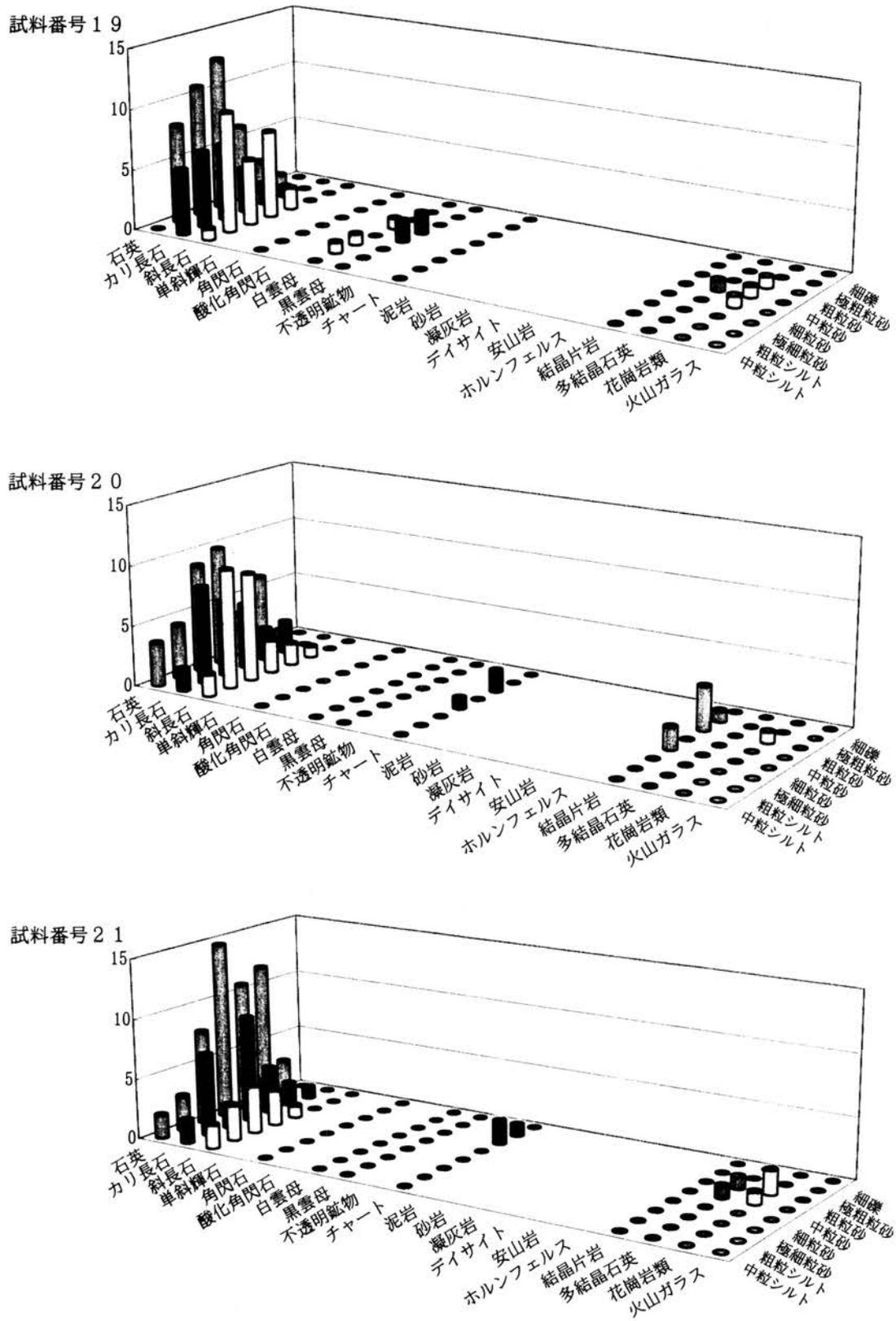
第9図 各粒度段階における鉱物・岩石出現頻度(4)



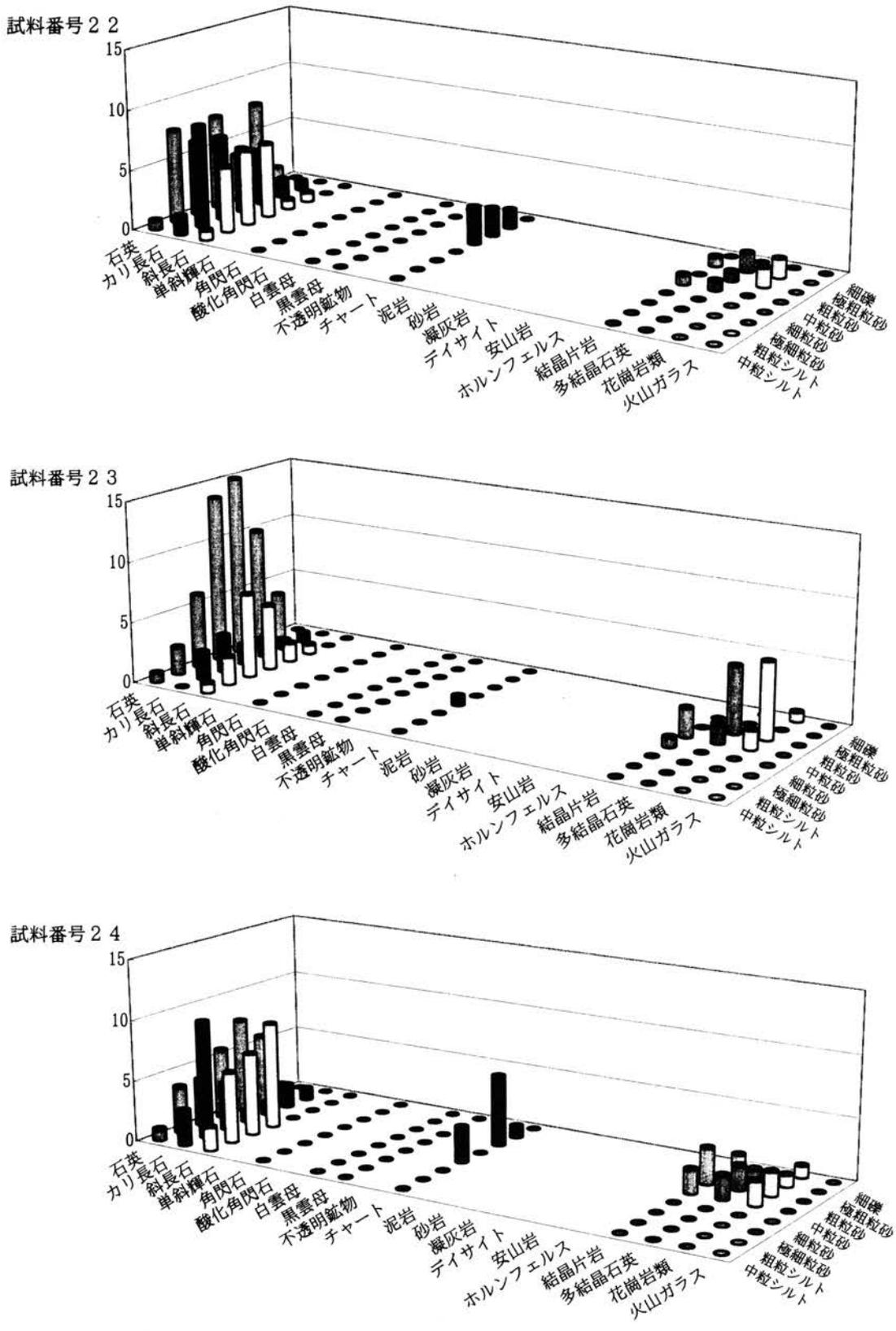
第10図 各粒度段階における鉱物・岩石出現頻度(5)



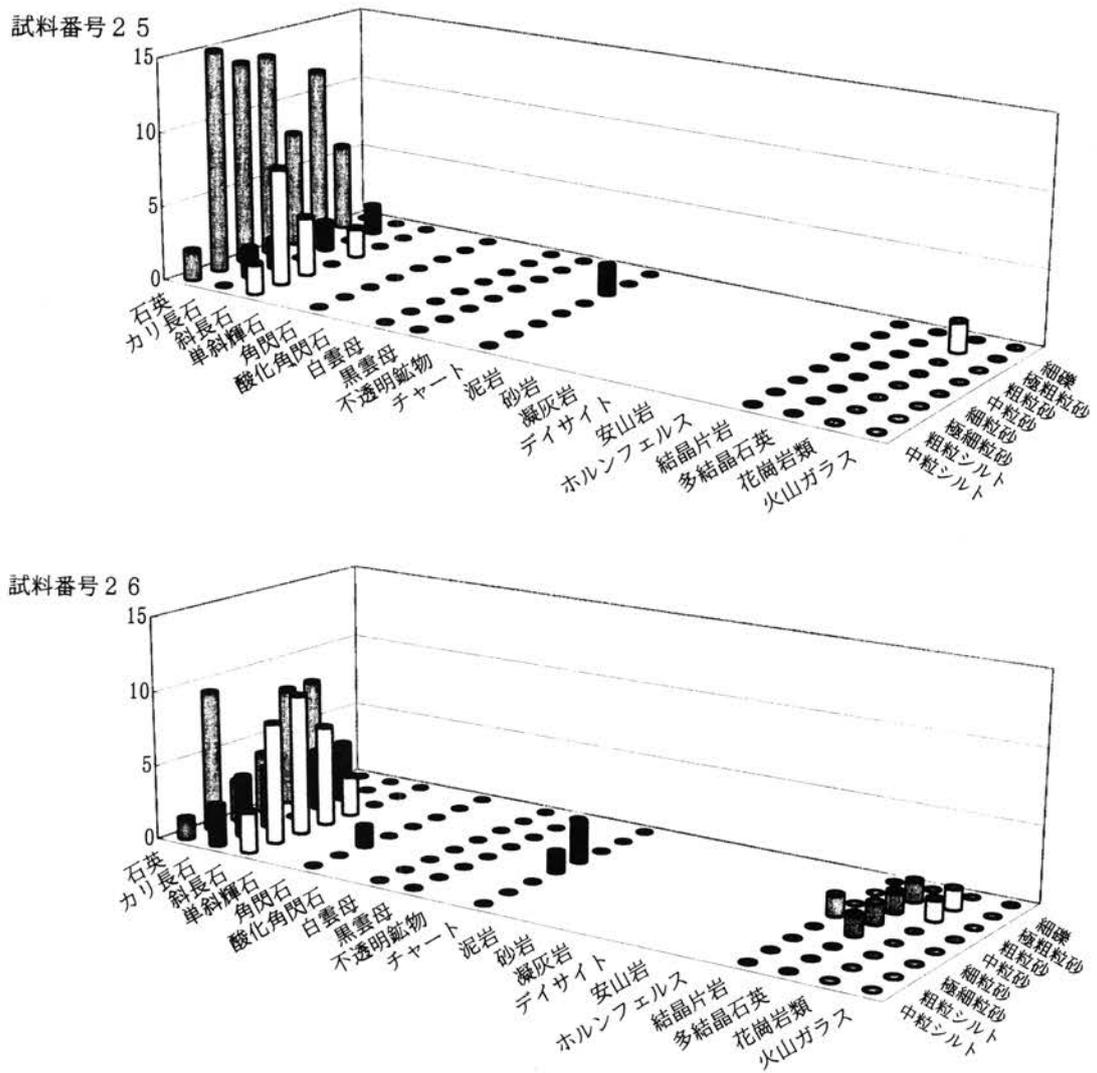
第11図 各粒度段階における鉱物・岩石出現頻度(6)



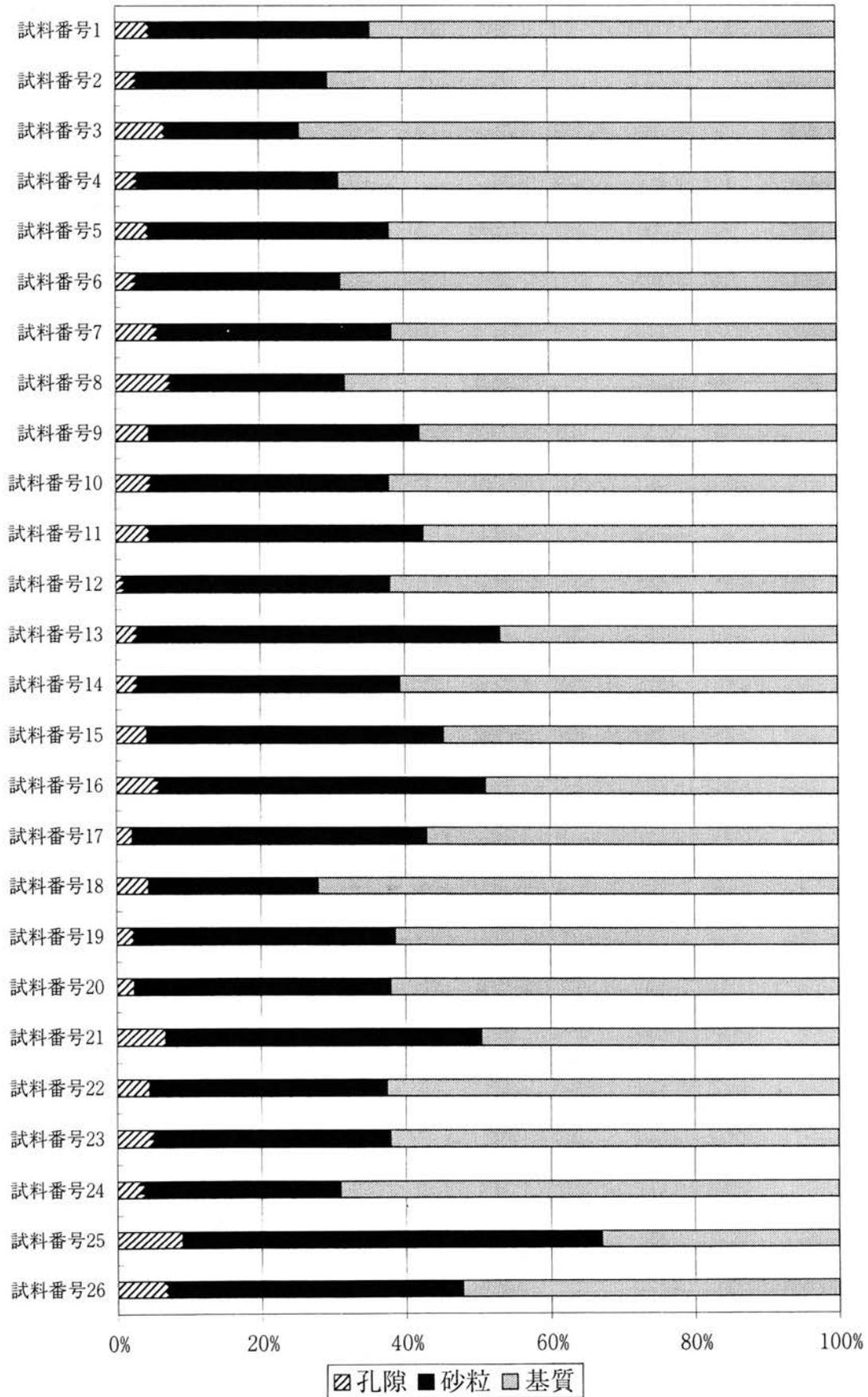
第12図 各粒度段階における鉱物・岩石出現頻度(7)



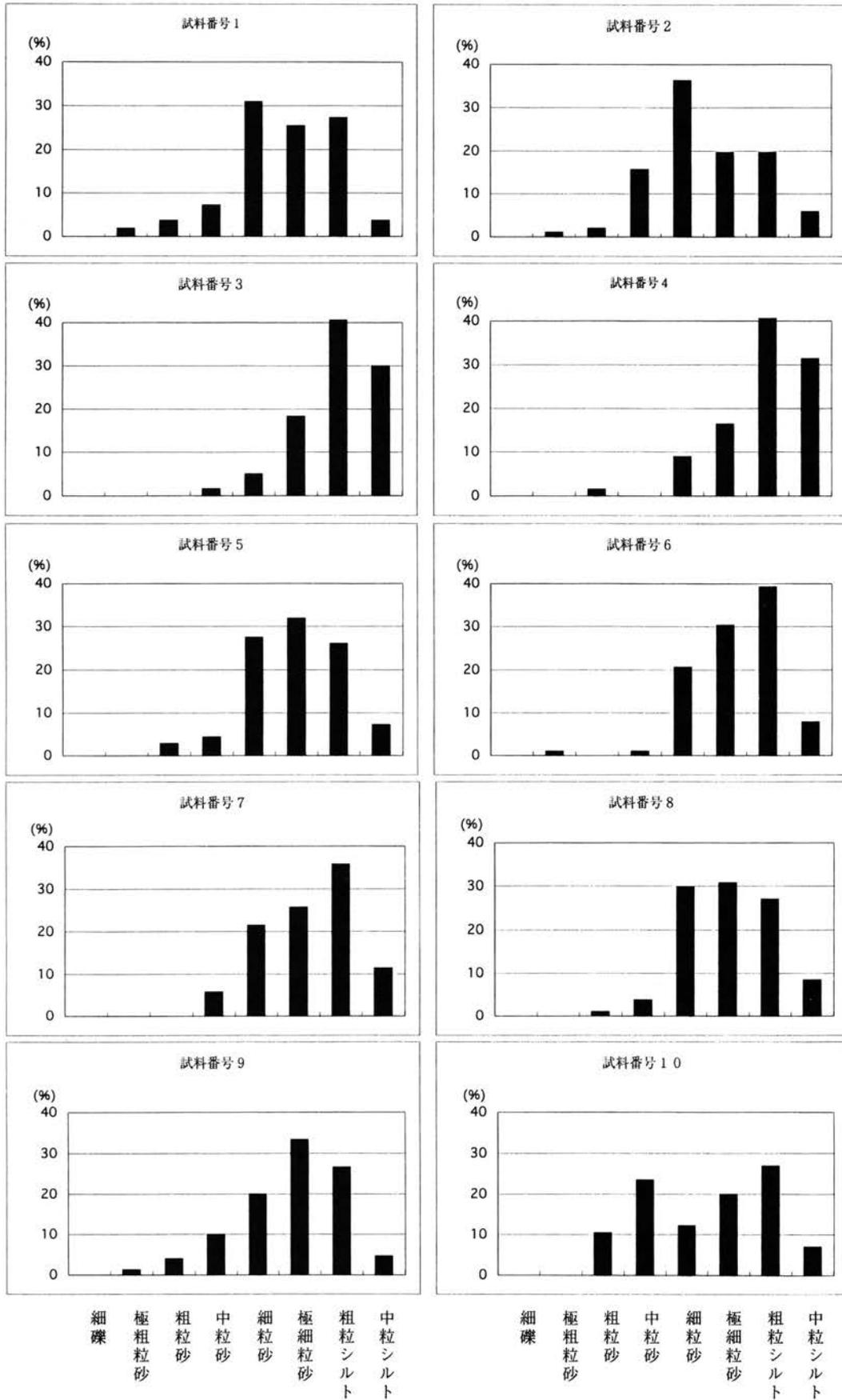
第13図 各粒度段階における鉱物・岩石出現頻度(8)



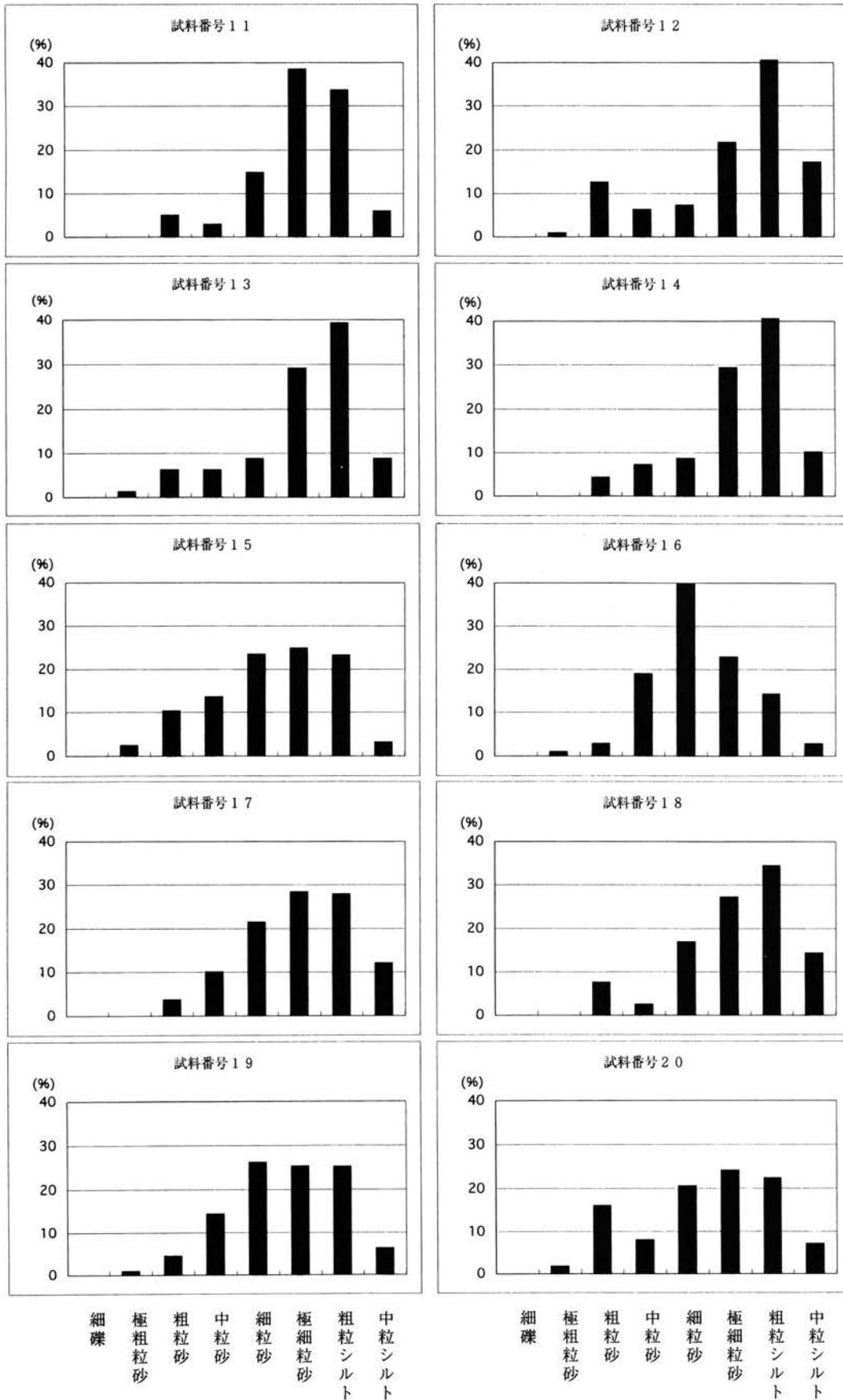
第14図 各粒度段階における鉱物・岩石出現頻度(9)



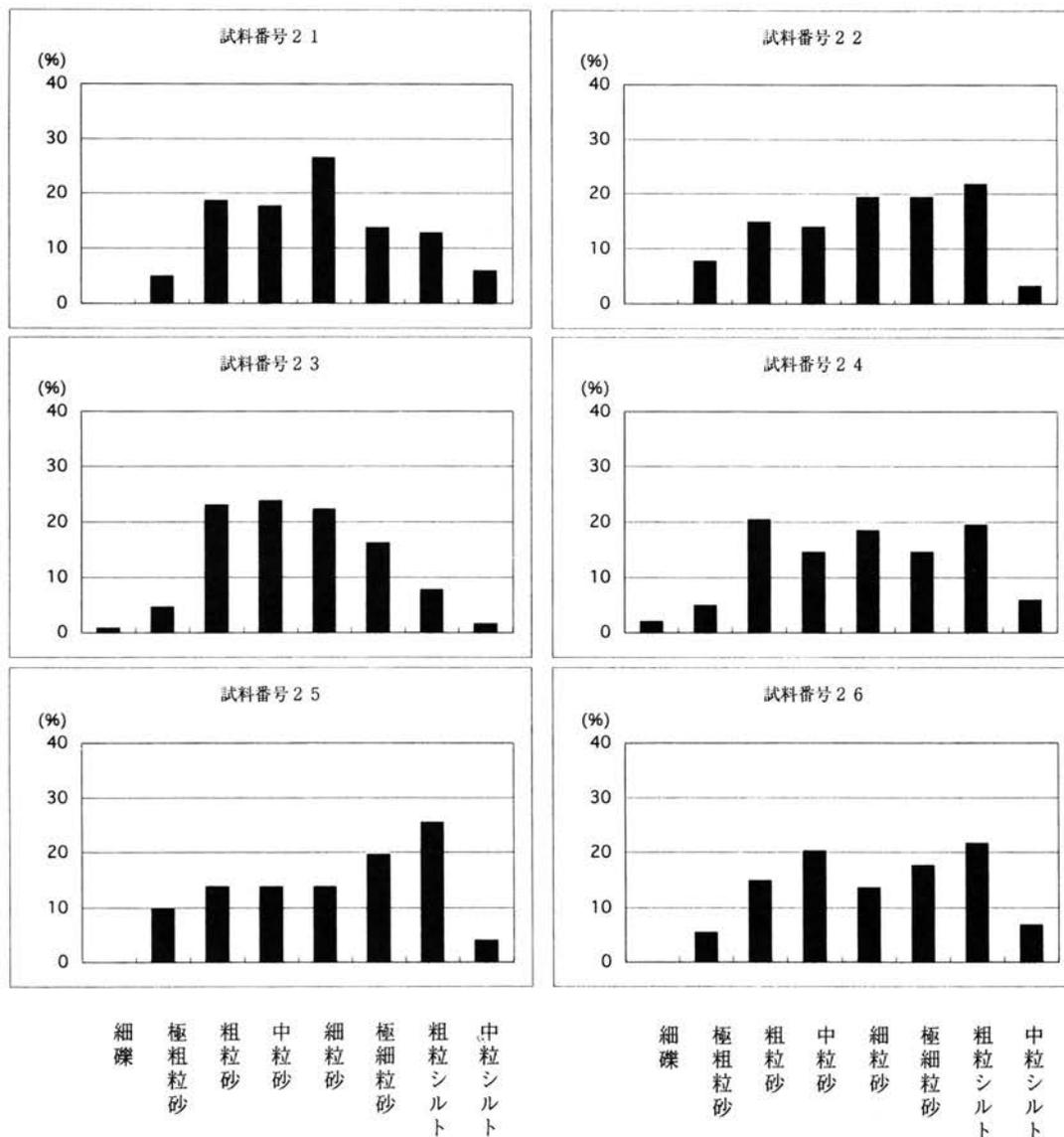
第15図 孔際・砂粒・基質の割合



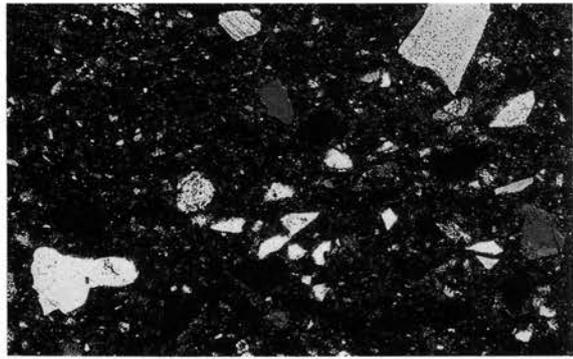
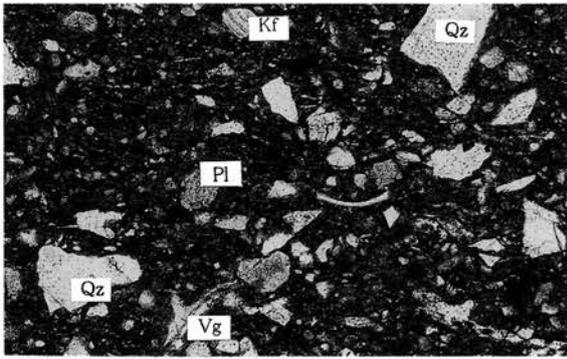
第16図 胎土中の砂の粒径組成(1)



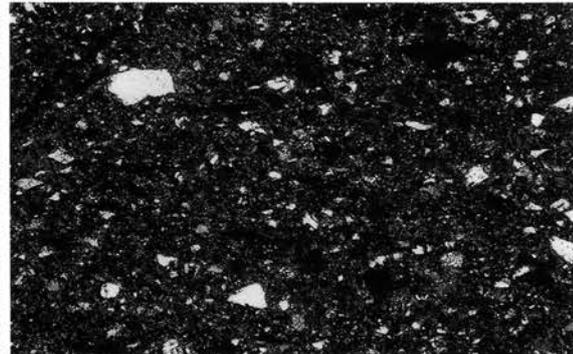
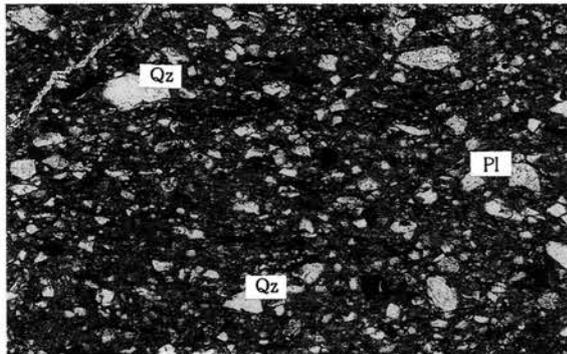
第17図 胎土中の砂の粒径組成(2)



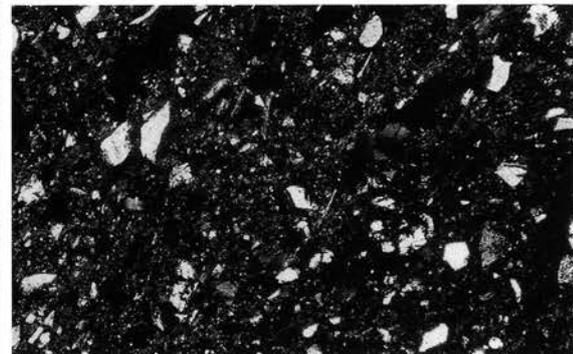
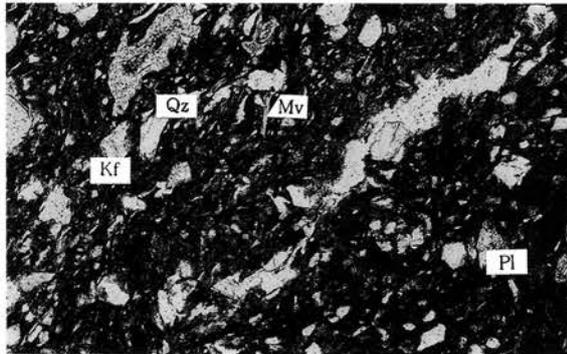
第18図 胎土中の砂の粒径組成(3)



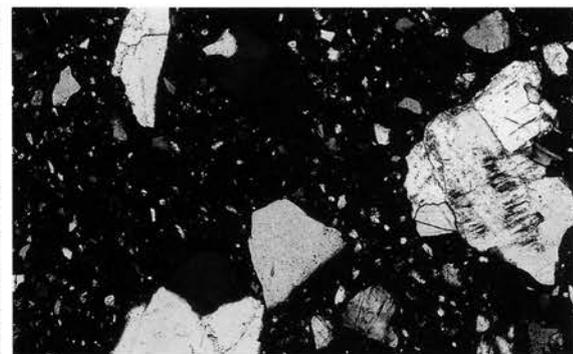
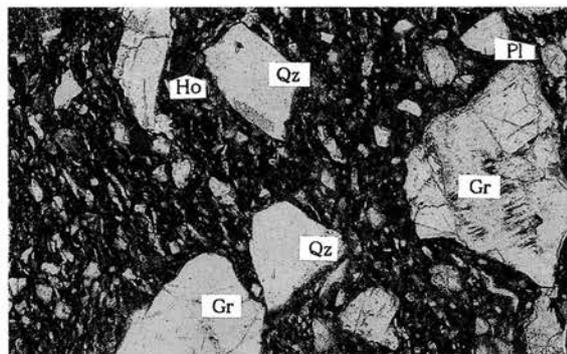
試料番号 2 (426 : 土師器把手付椀、赤・精製、荒坂B-3号)



試料番号 4 (46 : 土師器長頸壺、赤・精製、女谷B-5号)



試料番号 7 (298 : 土師器杯ヘルメット形、赤・砂粒、女谷C-4号)



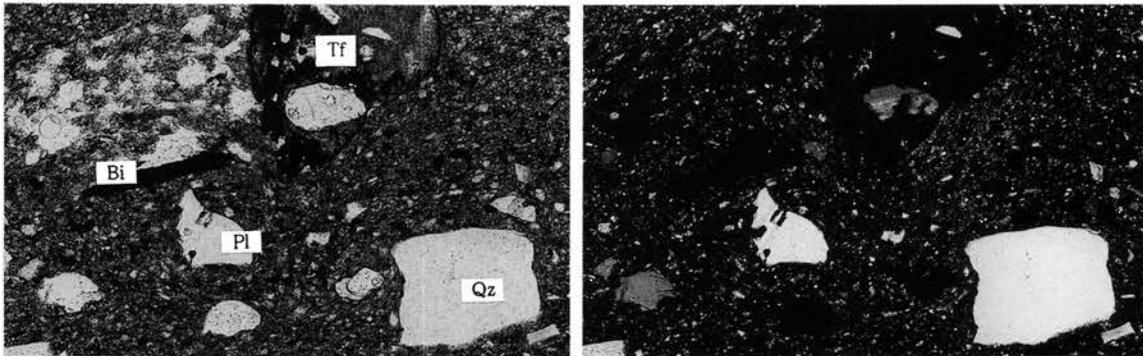
試料番号 10 (113 : 朝顔形埴輪、黄・日常、女谷B-9号)

0.5mm

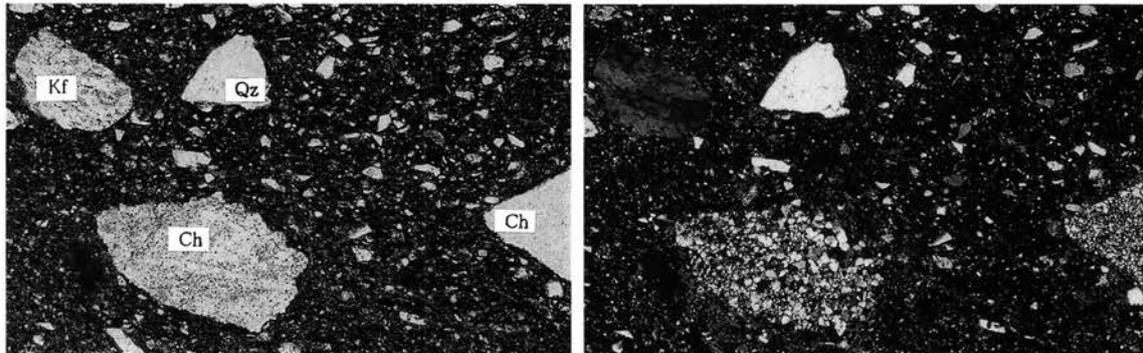
第19図 胎土薄片(1)

Qz : 石英 Kf : カリ長石 Pl : 斜長石 Mv : 白雲母 Ho : 角閃石 Gr : 花崗岩
 Vg : 火山ガラス

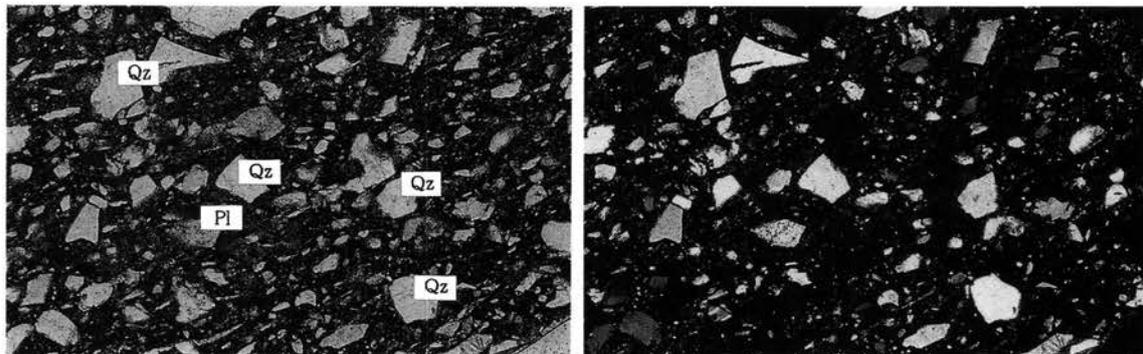
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。



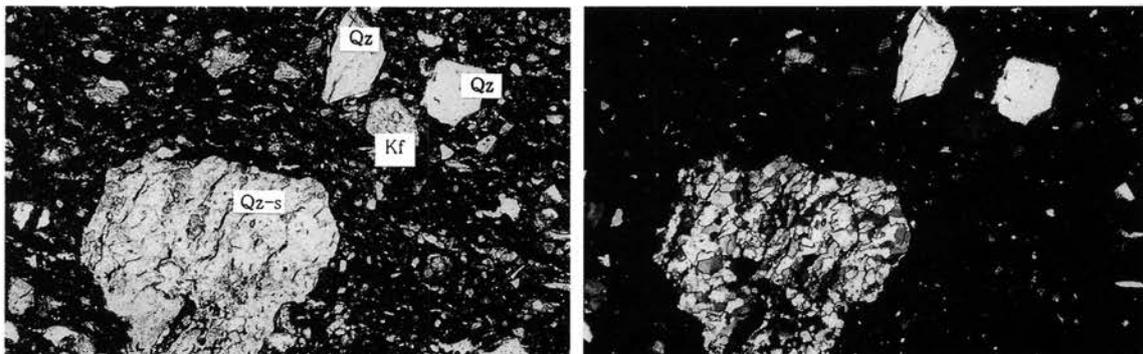
試料番号 12 (497 : 土師器甕、黄・日常、荒坂 B-7 号)



試料番号 14 (270 : 土師器甕、黄・日常、女谷 C-1 号)



試料番号 16 (268 : 土師器高杯、黄・日常、女谷 C-1 号)

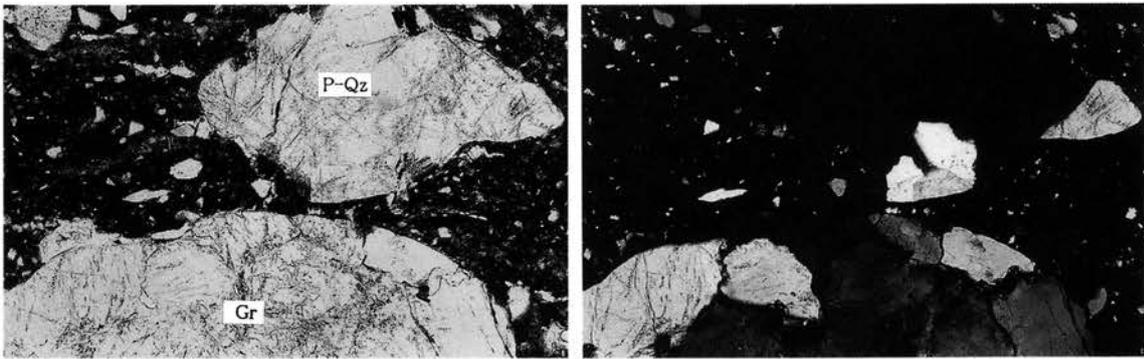


試料番号 20 (円筒埴輪、土師質、女谷 B-SX06)

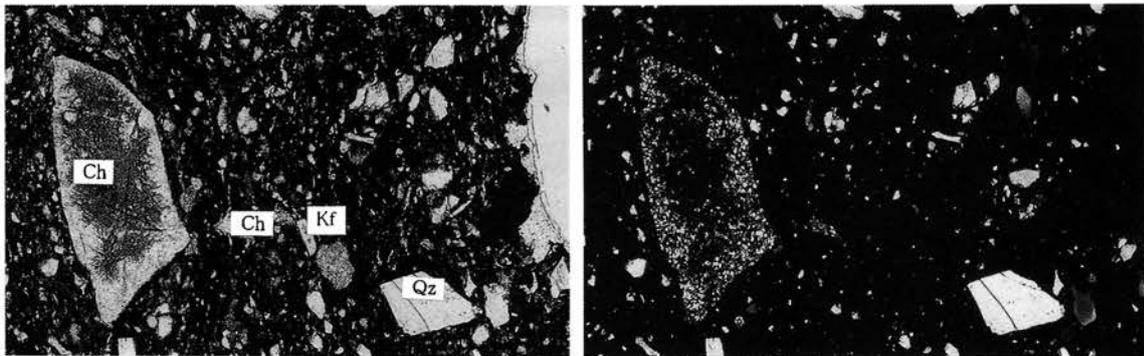
0.5mm

第20図 胎土薄片(2)

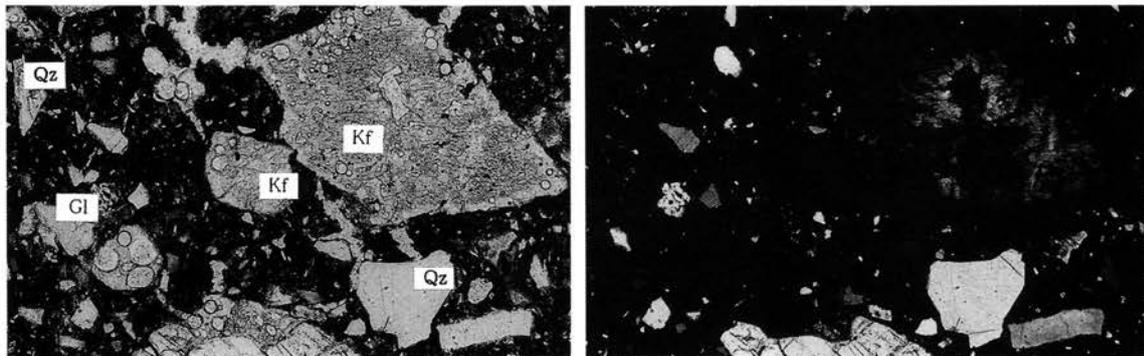
Qz : 石英 Kf : カリ長石 Pl : 斜長石 Bi : 黒雲母 Ch : チャート
 Tf : 凝灰岩 Qz-s : 石英片岩 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。



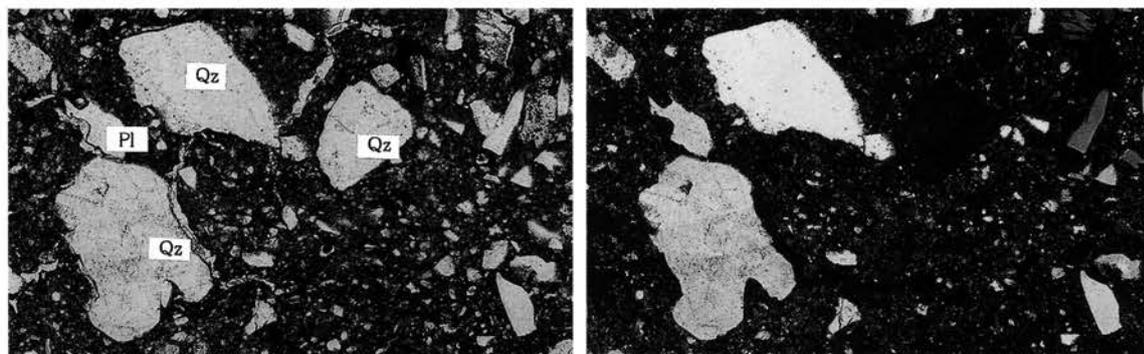
試料番号 23 (円筒埴輪、土師質、女谷B)



試料番号 24 (円筒埴輪、土師質、荒坂C-1号)



試料番号 25 (476 : 円筒埴輪、東海系、荒坂B-5号)



試料番号 26 (681 : 蓋形埴輪、土師質、荒坂C-1号)

0.5mm

第21図 胎土薄片(3)

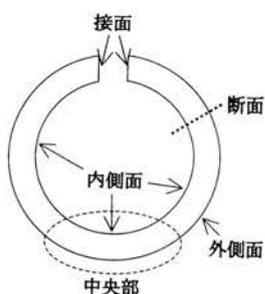
Qz : 石英 Kf : カリ長石 Pl : 斜長石 Ch : チャート Gr : 花崗岩
 P-Qz : 多結晶石英 Gl : 溶解ガラス 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

5. 女谷・荒坂横穴群出土耳環の蛍光X線分析

(1) はじめに

今回、女谷・荒坂横穴群より出土した耳環5点の蛍光X線分析を行い、各耳環の材質について検討した。

(2) 試料と方法



第22図 耳環を構成する部分の呼称 (渡辺、1997を参考)

試料は、耳環5点である(表13)。形状などについては、巻頭図版9・10に各耳環の全体と接面、特徴的な接面部位の写真を掲載したので参照戴きたい。

耳環を構成する部分の呼称については、渡辺(1997)を参考にした。第22図に耳環の模式図を示す。耳環の中央付近を中央部、側面のうち外側を外側面、内側を内側面、耳朶に接する部分を接面とする。

分析は、まず耳環の各部位の色や状態を肉眼観察し、特徴的な箇所を顕微鏡で写真撮影を行った。その後、耳環全体を蛍光X線分析でマッピング分析を行い、元素の種類とその分布状況を確認した上で、肉眼観察での状況と比較検討を行った。また、数か所をポイント分析し、そこから検出された元素をファンダメンタルパラメータ法(FP法)で合計100%となるよう定量計算した。各試料には、土壌などが付着残っていたが、脆く繊細なため、ブロワーで試料に風を当て、表面の付着物を軽く飛ばす程度とした。分析装置は、(株)堀場製作所製のX線分析顕微鏡XGT-2700である。X線管球のロジウム(Rh)である。ポイント分析で測定する際のX線の照射径は100 μ mである。

(3) 分析結果および考察

試料ごとに以下にまとめる。

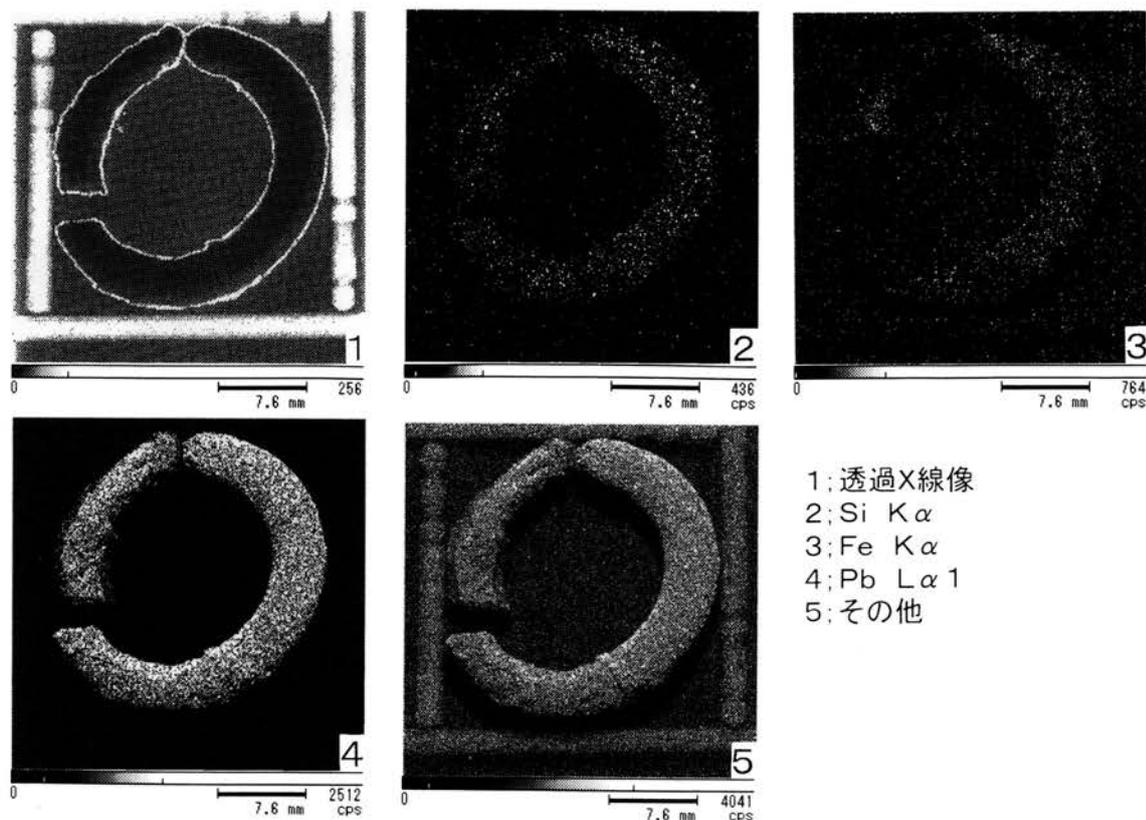
試料1 (巻頭図版9-1・2)

試料1は、耳環の右側半分は風化による剥離があまりなく、淡茶褐色を呈しているのに対して、左側半分は風化が進んで、表面がかなり剥落している(巻頭図版9-1)。左側接面付近では、白色の内部が観察される。試料1は、二分していたので、断面を観察することができた。断面では、灰色に一部赤色の混じった、比較的堅牢な部分が確認された(巻頭図版9-2)。接面は風化のため形状も仕上げ方法も不明である。

第23図は、試料1から検出された各元素のマッピング画像である。「透過X線像」の耳環の周囲にある4本の棒は、耳環固定用に使用したつまようじで、耳環とは関係がない。上方からX線が照射され、試料を載せた台が左右に動いて全体を測定するので、本来、試料はテープなどで固

表13 耳環蛍光X線分析試料

試料番号	報告番号	横穴群	横穴番号	出土面	特徴
1	865	女谷B支群	17号	Ⅲ面	白色・粉状
2	877	荒坂B支群	5号	I面	径2.6 程度の細い管
3	864	女谷B支群	17号	Ⅲ面	金色
4	880	荒坂B支群	14号	Ⅱ面	金色～黒色
5	882	荒坂B支群	14号	I面	黒褐色



第23図 試料1 各元素のマッピング画像

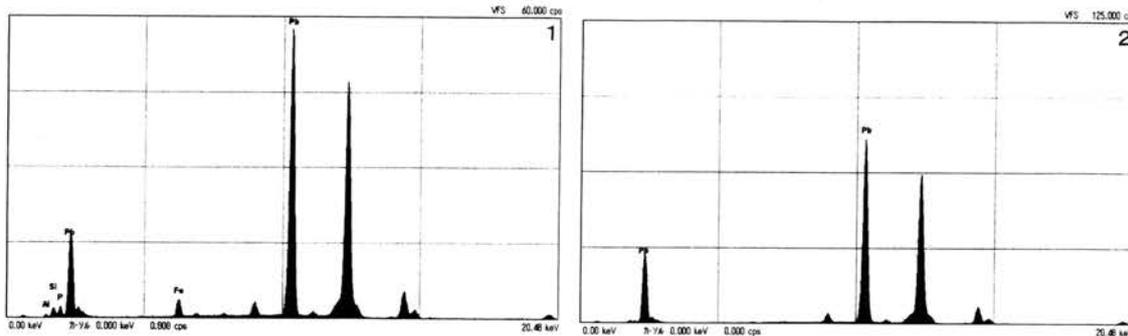
定するのだが、この試料1は特に風化が激しく、触ると白色の粉末が付着するほど脆くなっているため、テープの使用を避けた。そのため、つまようじで固定した画像となった。試料2～5の耳環も繊細なものなので、テープによる固定は行わずに測定した。そのため、測定中に試料が少し動いて、画像が中央にきれいに収まっていないものもあるが御了承いただきたい。画像「その他」は検出された元素以外の元素など、主にバックグラウンドを示し、蛍光X線スペクトル図の下部にある微小ピークの集まりで、特定元素を示すものではない。

第23図を見ると、圧倒的に鉛(Pb)の検出が多く、ケイ素(Si)や鉄(Fe)もわずかに検出されている。鉛は、耳環表面全体および耳環内部からも検出されているのに対し、ケイ素や鉄は耳環表面が残存している部分から、より多く検出されている。耳環表面は土壤の汚染を最も受けやすいので、検出された鉄やケイ素は土壤に由来するものと思われる。

また、ポイント分析による定量分析を2か所で行った(巻頭図版9-1・2)。測定箇所は耳環表面の淡茶褐色部(番号1)と耳環断面の赤色部(番号2)である。第24図・表14にポイント分析による蛍光X線スペクトル図と定量分析結果を示す。

番号1では、鉛が90.25%、アルミニウム・ケイ素・リン・鉄がそれぞれ2%前後であった。

番号2では、鉛しか検出されなかった。番号1・2ともに鉛の純度は高いが、耳環表面は耳環断面と異なり、鉛以外にアルミニウム・ケイ素・リン・鉄が検出されており、耳環表面が土壤により汚染されていることが窺える。一般に、鉛は風化すると白色になるが、この白色は顔料でいう鉛白(2PbCO₃・Pb(OH)₂)に、耳環断面に見る赤色部分は、鉛丹(Pb₃O₄)に化学組成が該当するも



第24図 試料1 各測定部のスペクトル図

表14 試料1 各測定部の分析値(単位：%)

番号	測定部	Al	Si	P	Fe	Pb
1	表面層の淡茶褐色部	2.71	3.33	2.18	1.52	90.25
2	断面の赤色部	—	—	—	—	100.00

のと思われる(馬淵編2000)。

試料2 (巻頭図版9-3~5)

試料2の耳環は、表面全体が灰色である(巻頭図版9-3)。中央部左側の外側面付近の表面は、一部剥離して黒色の内部が観察される(巻頭図版9-4)。接面の形状は風化のため分かりにくいですが、一部に切断した痕跡ではないかと思われる細かい筋が観察された(巻頭図版9-5)。耳環の断面は、耳環が破損していないので観察できず、その状態は不明である。

第25図に、試料2から検出された各元素のマッピング画像を示す。試料2からは、銀(Ag)が耳環表面全体および内部から明瞭に検出されている。臭素(Br)は耳環表面全体で検出されているが、内部ではあまり検出されていない。ケイ素はごくわずかに耳環表面全体で検出されている。

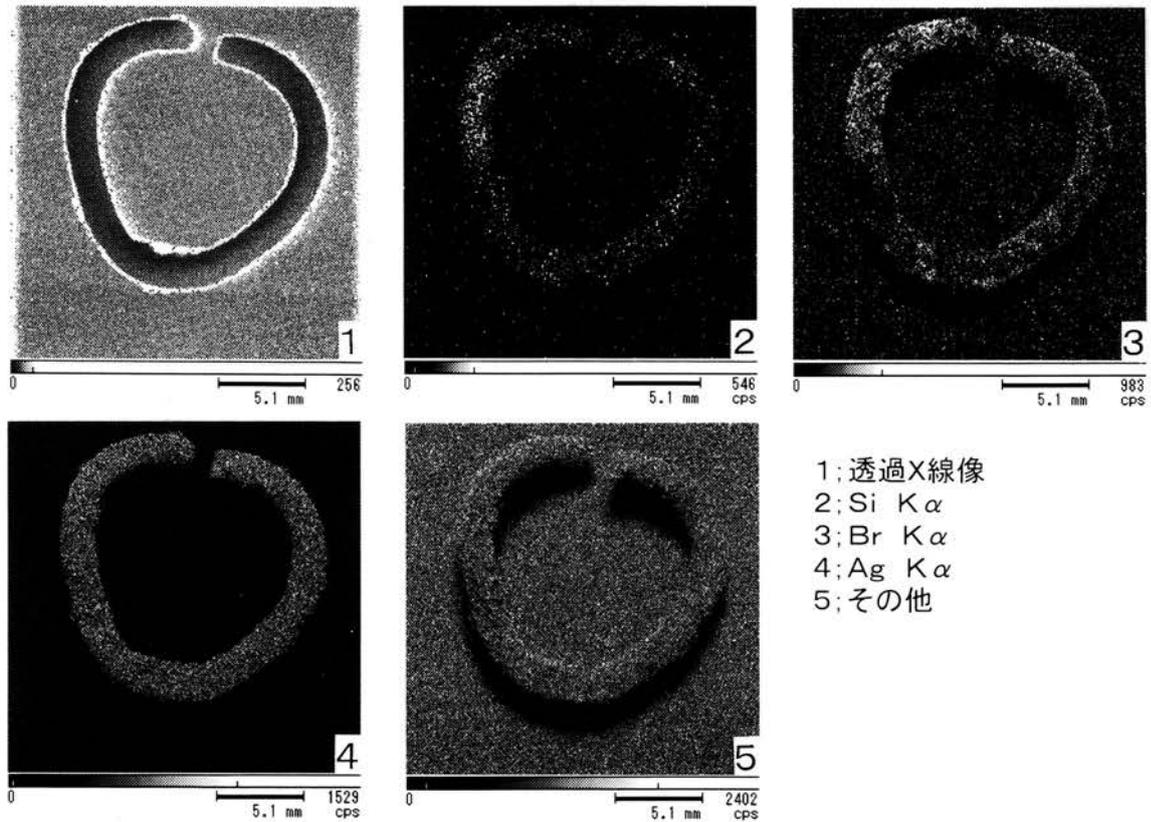
ポイント分析による定量分析を2か所で行った(巻頭図版9-3)。測定箇所は、耳環表面の灰色部(番号1)と内部の黒色部(番号2)である。第26図・表15にポイント分析による蛍光X線スペクトル図と定量分析結果を示す。

番号1では、銀81.48%、ケイ素8.66%、塩素7.76%、鉄1.38%、臭素0.72%であった。

番号2では番号1と同じ元素が検出されており、銀94.55%、ケイ素0.61%、塩素4.57%、鉄0.20%、臭素0.07%であった。耳環表面・内部ともに銀の純度は高いが、表面は内部より銀以外のケイ素・塩素・鉄・臭素の分析値が高く、表面の汚染や腐食が進んでいることが窺える。

なお、定量分析では、銀の分析値はほかの元素に比べて信頼性が低いことを述べておく。これは分析装置の定量分析に関するプログラムの設定が、X線管球のロジウム(Rh原子番号45、約20KeV)以降の原子番号の元素をK線ではなく、L線で測るようになっているためである。例えば、第24図の番号1のスペクトル図では、銀のピークが大きく2か所にあり、右側のピークがK線で左側のピークがL線である。L線はK線より強度が低いので、定量計算では、銀は実際より低い分析値が出てしまう。定量計算は合計100%になるよう設定されているので、銀の分析値が低くなると、銀以外の各元素の分析値は実際より高く補正されるのである。

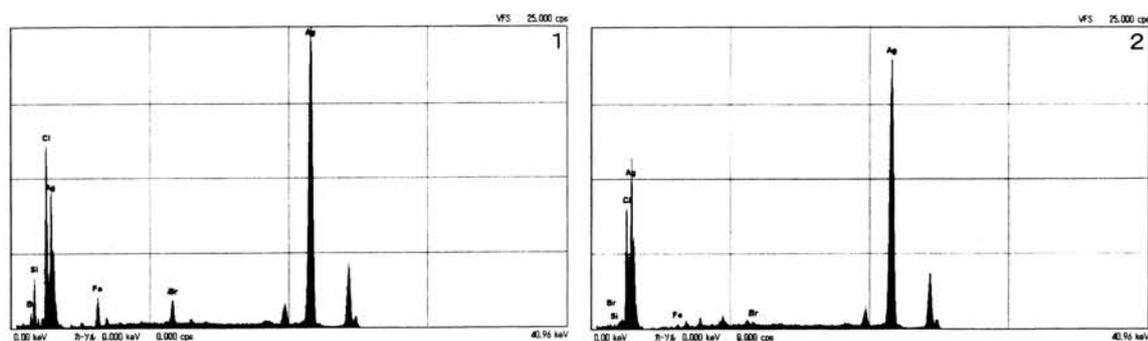
銀は+1価が安定で、ハロゲン化銀(AgCl、AgBr、AgI)や硝酸銀AgNO₃が一般的な化合物とされ



第25図 試料2 各元素のマッピング画像

る(馬淵編2000)。また、出土金属製品に見られる錆のうち、塩化銀(AgCl)は鉱物名が角銀鉱で、特徴として黒褐色で薄層状～皮殻状を呈する錆とされる(沢田1997)。試料2の表面は薄層状～皮殻状という表現に該当しており、表面は主に塩化銀で構成されていると考えられる。

臭素はあまり聞きなれない元素であるが、静岡県袋井市団子塚9号墳出土の空玉の分析で、そのいくつかに臭素が検出されたことが報告されている(渡辺1994)。また、大阪府羽曳野市の古市古墳群南西部に位置する峯ヶ塚古墳出土銀製品が分析され、花籠付兵庫鎖や空玉、鉄鏃付近の鋳、三叉形垂れ飾り歩揺、座金で臭素が検出されたことが報告されている(平尾1999)。これらのことから、臭素は銀製品の遺物に固有に確認される元素のようである。臭素と銀は結合しやすいが、臭素が最初から銀に含まれていたのか、土中に埋まっているうちに蓄積されたのかについては不明である。



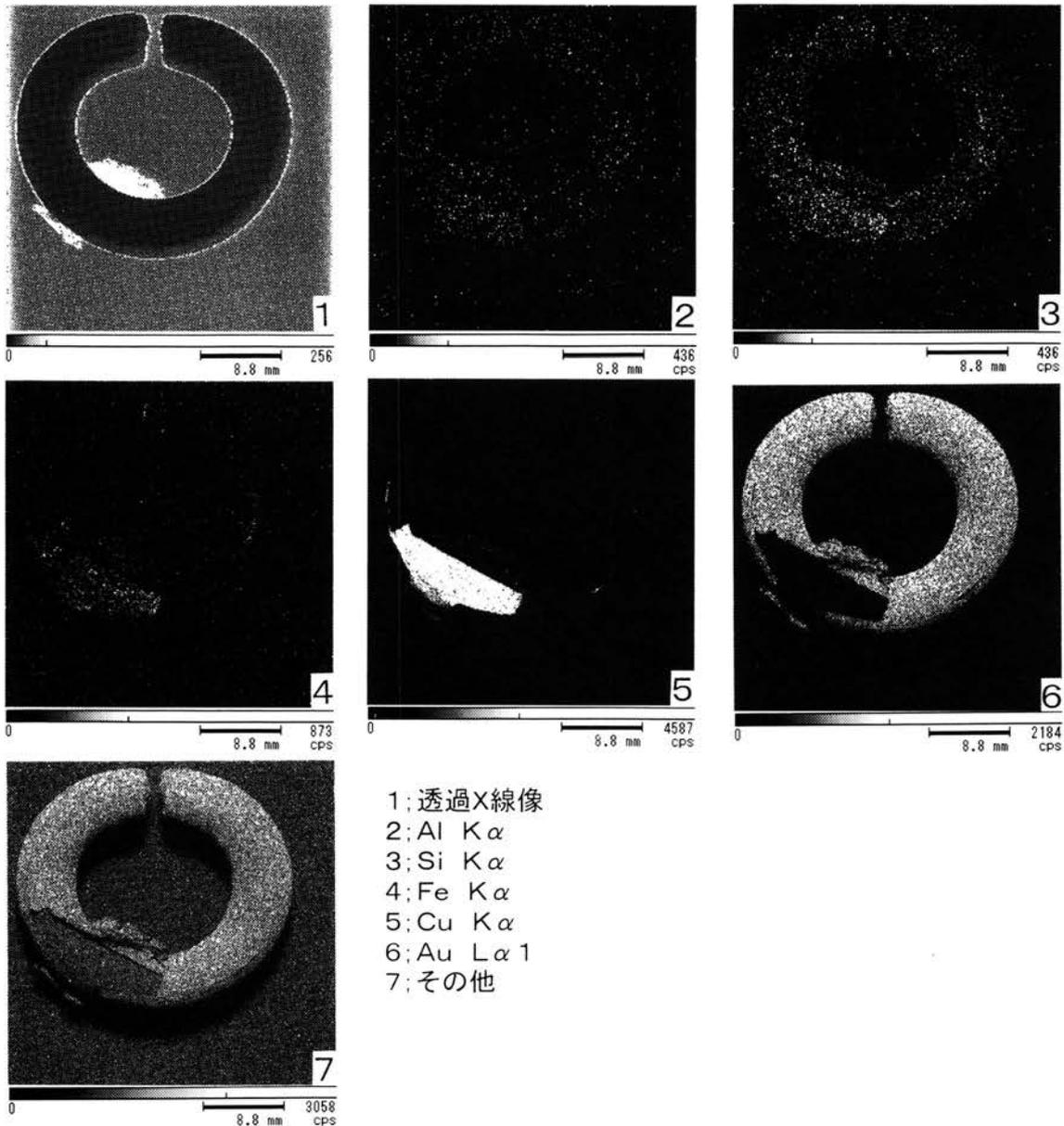
第26図 試料2 各測定部のスペクトル図

表15 試料2 各測定部の分析値(単位：%)

番号	測定部	Si	Cl	Fe	Br	Ag
1	表面の灰色部	8.66	7.76	1.38	0.72	81.48
2	内部の黒色部	0.61	4.57	0.20	0.07	94.55

試料3 (巻頭図版9-6~8)

試料3は、表面全体が見事な金色に発色している(巻頭図版9-6)。中央部左付近の金色の箔がめくれあがった部分は、通有のアルミ箔のような軟らかいものではなく、多少押しても変形しない頑丈なものである。かなりの厚みがあるものと推定され、板という表現が適している。この板の厚さは不明である。この金色の箔がめくれあがった裏側には、わずかに黒色部が確認される(巻頭図版9-7)。また、この裏側は表面と同じ金色ではなく、全体に少し赤味が加わった赤銅色に発色しており、一部金色の部分がある。金板が剥がれた内部(芯部)の表面には、土壌が付着



第27図 試料3 各元素のマッピング画像

した緑灰色部が観察される。接面の形状は、表面の金色の板の端部が、接面中央に向かってたみこまれているのが観察された(巻頭図版9-8)。内側面および外側面では、金板を接合した痕跡は確認されなかった。断面は、破損がないので観察できず、内部の状態は不明である。

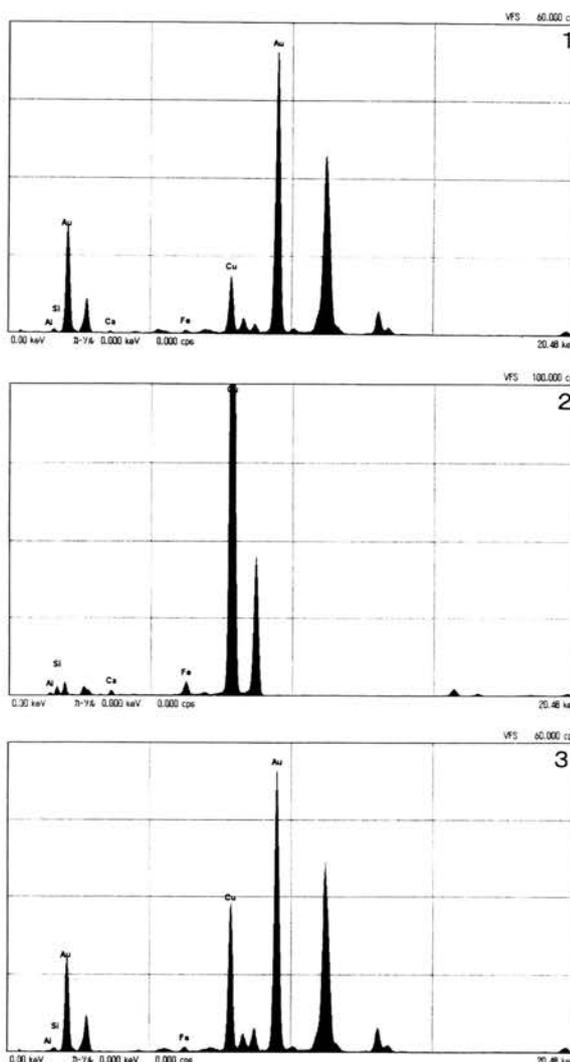
第27図は試料3から検出された各元素のマッピング画像である。第27図では、金(Au)が表面全体、銅(Cu)が芯部から明瞭に検出されている。ケイ素と鉄は、耳環表面全体から検出されているが、とりわけ、芯部の緑灰色部に集中する。アルミニウムはごくわずかであるが、耳環表面全体から検出されている。

ポイント分析による定量分析は、3か所で行った(巻頭図版9-6)。測定箇所は、耳環表面の金色部(番号1)と耳環芯部の緑灰色部(番号2)、金板部裏側の黒色部(番号3)である。第28図・表16にポイント分析による蛍光X線スペクトル図と定量分析結果を示す。

番号1では、金94.18%のほかにアルミニウム0.81%、ケイ素0.37%、カルシウム0.85%、鉄0.18%、銅3.61%であった。金が94.18%と純度が高いが、銅も3.61%あり、銅を少し混ぜた合金だった可能性もある。

番号2では、銅78.82%のほかにアルミニウム8.71%、ケイ素10.49%、カルシウム1.36%、鉄0.61%で、純度の高い銅であることが分かった。アルミニウムやケイ素がそれぞれ約10%と比較的高い分析値だったが、これは付着した土壌によるものと思われる。

番号3では、金88.48%のほかにアルミニウム1.37%、ケイ素0.99%、鉄0.35%、銅8.82%であった。番号1の耳環表面の金色部より銅が5.21%高いが、これは、金板が芯部の銅と接触して、銅が若干付着した可能性がある。金板の裏側全体が金色ではなく、赤銅色に発色しているのも銅の影響ではないだろうか。黒色部を測定したものの、番号1と異なるような元素は検出されな



第28図 試料3 各測定部のスペクトル図

表16 試料3 各測定部の分析値(単位: %)

番号	測定部	Al	Si	Ca	Fe	Cu	Au
1	表面の金色部	0.81	0.37	0.85	0.18	3.61	94.18
2	内部の緑灰色部	8.71	10.49	1.36	0.61	78.82	—
3	表面の金色部裏側の黒色部	1.37	0.99	—	0.35	8.82	88.48

った。実体顕微鏡で観察すると非常に薄く、接着剤などに使用される漆や膠のような有機物には見えず、無機質であるとの印象を受けた。試料を採取し、FT-IR分析を行おうとしたが、薄すぎて採取できなかった。そのため、この黒色部が何であるかは分からなかった。

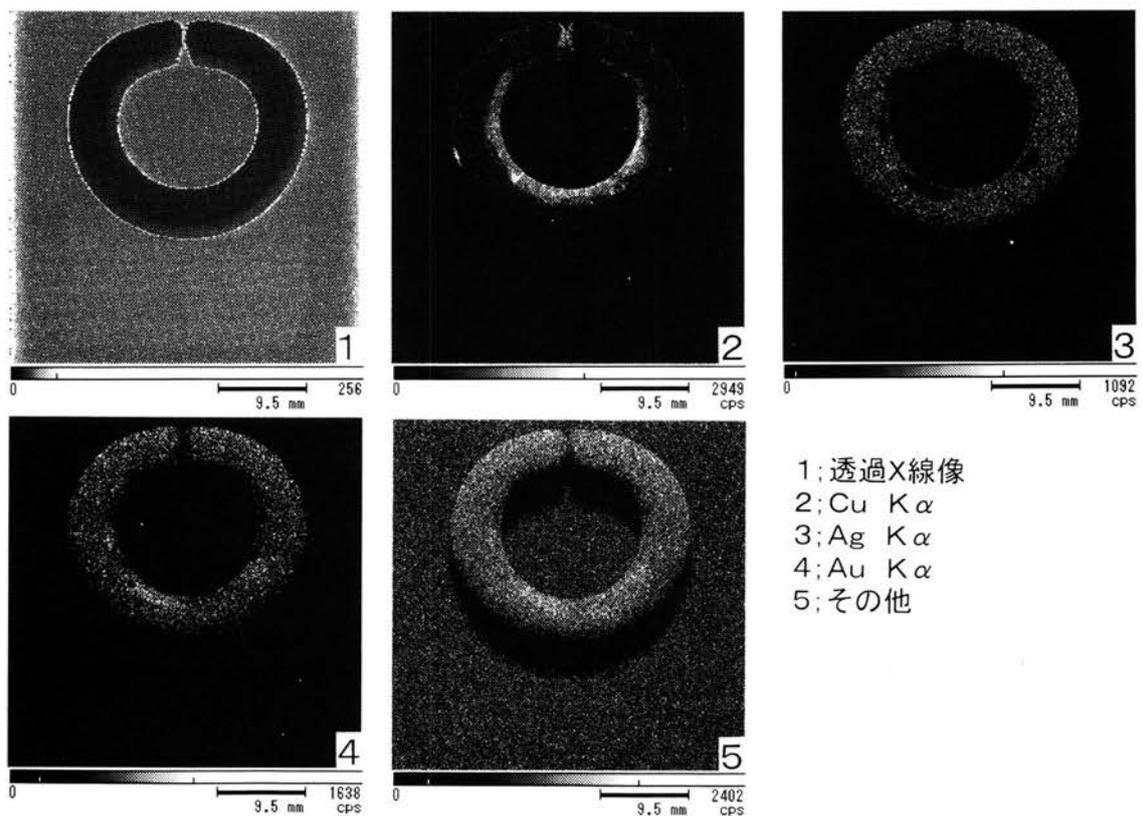
試料4 (巻頭図版10-1~3)

全体写真は傾けてやや上方から撮影したもので、内側面を見やすくしている(巻頭図版10-1)。色は全体に黒灰色で、中央部付近および内側面に金色が確認され、その金色の上に色が似ているので見分けにくい。更に薄い赤銅色がある(巻頭図版10-2)。また、黒灰色の板がところどころ剥離または破損している内部(芯部)は緑灰色である。接面の形状は平面ではなくやや尖っている。接面は黒灰色の板の端部をたたみ込んでおり、金色に発色している(巻頭図版10-3)。内側面および外側面では、表面の黒灰色の板を接合した痕跡は確認されなかった。耳環に破損がないので、断面は確認できず、内部の状態は不明である。

第29図は、試料4から検出された各元素のマッピング画像である。第29図を見ると、銀と金が耳環全体で、銅は、緑灰色部および内側面の赤銅色部と接面で明瞭に検出されている。意図的に内側面のみ銅の多い合金を塗ったのか貼ったのかは定かではないが、注目される。

また、ポイント分析による定量分析を3か所で行った(巻頭図版10-1)。測定箇所は、耳環表面の黒灰色部(番号1)と内側面の赤銅色部(番号2)と芯部の緑灰色部(番号3)である。第30図・表17にポイント分析による蛍光X線スペクトル図と定量分析結果を示す。

番号1では、銀65.22%のほか金32.13%、銅2.65%が検出された。銀の分析値は、先ほど試



第29図 試料4 各元素のマッピング画像

料2の分析結果で述べたように、実際より低い分析値がでることから、おおよそ銀70%、金30%程度の合金であったと予想される。

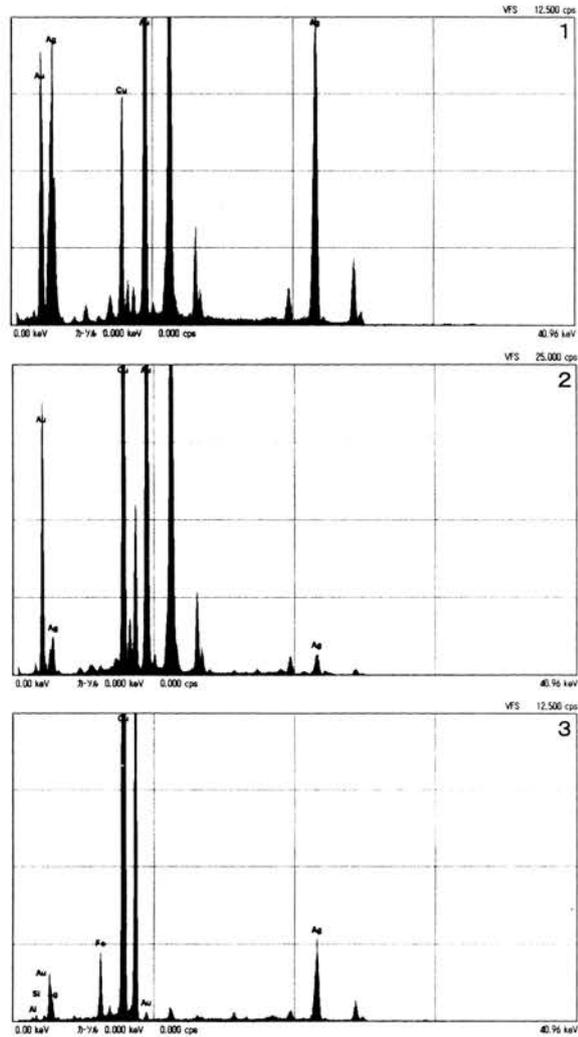
番号2では、金が72.10%で、銅が18.30%、銀が9.60%で、金・銀・銅が含まれていることが分かった。色調が赤銅色を呈しているが、銅よりも金の分析値が高い。この銀の分析値も実際より低く現れることから、おおよそ、金70%、銅15%、銀15%程度の合金であったと推測される。

番号3では、銅91.11%、アルミニウム2.89%、ケイ素2.37%、鉄1.19%、銀0%、金2.44%で、純度の高い銅であることが分かる。なお、銀が0%になっているが、スペクトル図では銀のK線がはっきり出ているので、銀も実際には数%が存在すると考えられる。

耳環表面の金色部は、ポイント分析していないので分析値は不明であるが、番号1と番号2の定量分析結果を見ると、金・銀・銅の含有量に差が見られることから、耳環本体の銅芯の上に、少なくとも2種類の合金を使用していたものと推定される。

試料5 (巻頭図版10-4~5)

この耳環は、全体に暗灰色で、所々にうっすらと金色部が観察される(巻頭図版10-4)。接面付近および中央部にある3つの白く丸いものは、実測するための固定用の練り消しで、耳環とは全く関係ない。耳環は、暗灰色の板が一部破損し、めくれた内部には、緑灰色部が観察される。このめくれた暗灰色の板の断面は触れると硬く、箔ではなく板という表現が適当と思われる。この板の厚さは不明である。また、中央部内側面では、3本のしわが観察された(巻頭図版10-5)。これは耳環を作る際に、一本の棒を「C」形に曲げたときに生じたものと思われる。接面の形状は、両面が近接し過ぎており、しかも風化が著しいために十分な観察ができず、仕上げ方法は不明である。内側面および外側面では、表面の暗灰色の板を接合した痕跡は確認されなかった。断



第30図 試料4 各測定部のスペクトル図

表17 試料4 各測定部の分析値(単位：%)

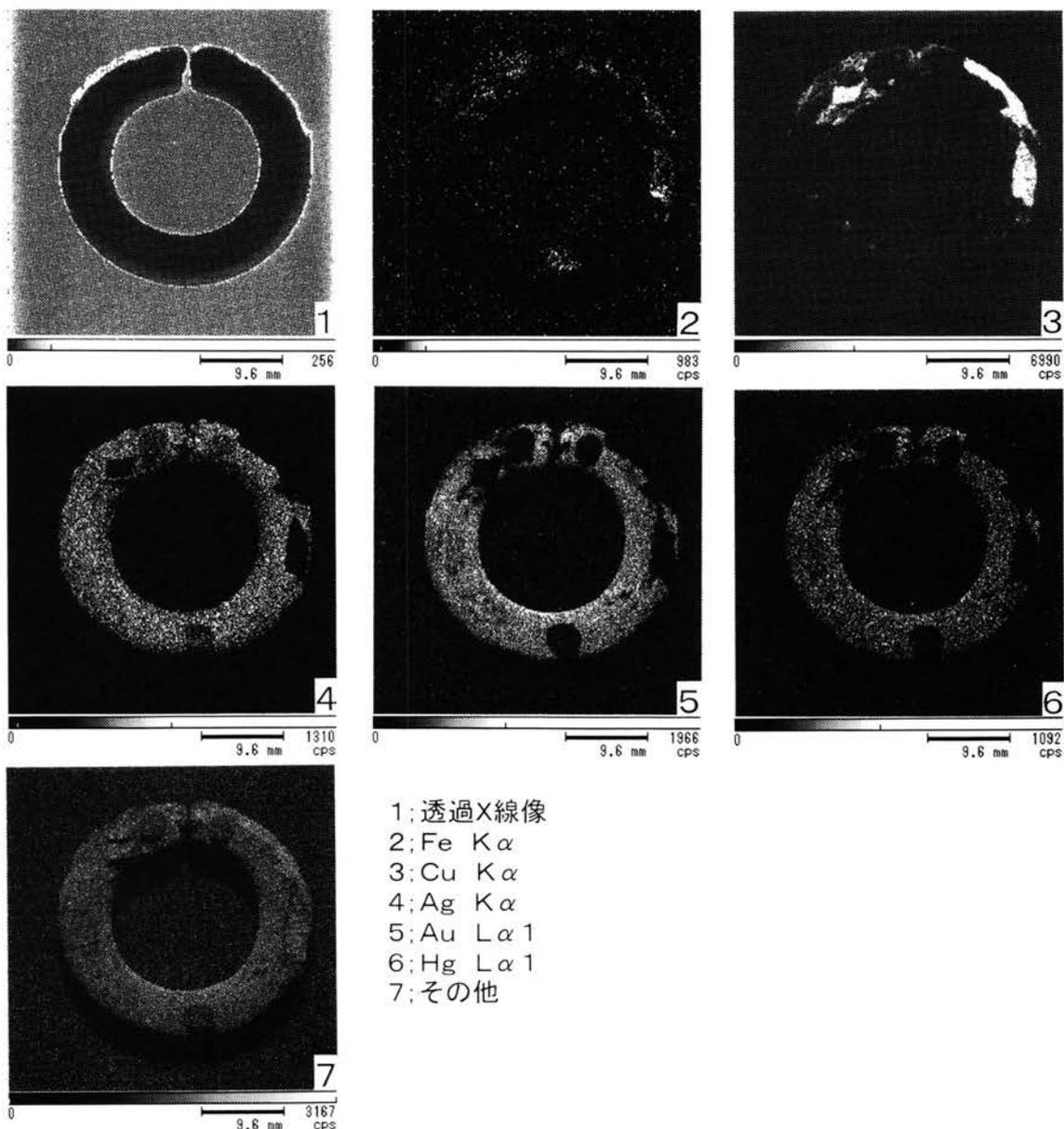
番号	測定部	Al	Si	Fe	Cu	Ag	Au
1	表面の黒灰色部	—	—	—	2.65	65.22	32.13
2	内側面の赤銅色部	—	—	—	18.30	9.60	72.10
3	内部の緑灰色部	2.89	2.37	1.19	91.11	0.00	2.44

面は、耳環が破損していないため、観察できず、内面の状態は不明である。

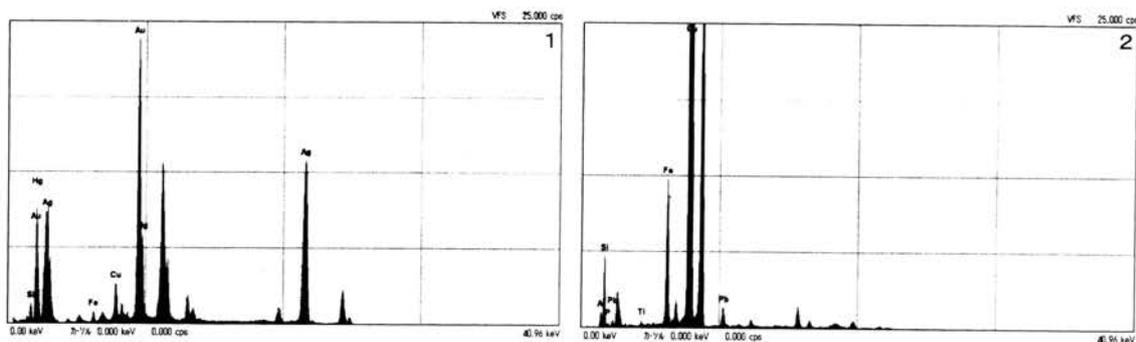
第31図には、試料5から検出された各元素のマッピング画像を示す。第31図より、表面全体から水銀が検出され、水銀の分布と金の分布が類似していることから、金は水銀を用いてメッキされていたと考えられる。銀の分布も水銀や金の分布と同じく、耳環表面全体に広がるが、暗灰色部が破損している部位の周辺では、銀と金・水銀の分布は異なり、銀は破損部位の直近まで検出されている。銀を金・水銀と一緒に混ぜてメッキしている可能性もあるが、金メッキの微細な隙間の下にある銀を検出している可能性もある。

また、ポイント分析による定量分析を2か所で行った(巻頭図版10-4)。測定箇所は、耳環表面の暗灰色部(番号1)と耳環内部の緑灰色部(番号2)である。第32図・表18にポイント分析による蛍光X線スペクトル図と定量分析結果を示す。

番号1では、銀55.84%、金31.26%、水銀9.01%、ケイ素2.55%、鉄と銅が1%以下で、銀が



第31図 試料5 各元素のマッピング画像



第32図 試料5 各測定部のスペクトル図

表18 試料5 各測定部の分析値(単位：%)

番号	測定部	Al	Si	P	Ti	Fe	Cu	Ag	Au	Hg	Pb
1	表面の暗灰色部	—	2.55	—	—	0.39	0.95	55.84	31.26	9.01	0.00
2	内部の緑灰色部	9.58	18.72	0.44	0.13	1.93	66.13	—	—	—	3.06

主体であることが確認された。銀については、金と一緒に水銀に混ぜてメッキしたほかに、金メッキの隙間の下にあった銀を検出している可能性がある。

番号2では、銅66.13%のほかにアルミニウム9.58%、ケイ素18.72%、リン0.44%、チタン0.13%、鉄1.93%、鉛3.06%となり、銅が主体であることが確認された。鉛が確認されたのは今回分析した試料の中で試料5のみである。ケイ素やアルミニウムについては土壤に由来するものと考えられる。

引用・参考文献

渡辺智恵美(1997)「耳環小考—製作技法、材質からみた分類—」『元興寺文化財研究所創立30周年記念誌』元興寺文化財研究所 pp.73-83.

馬淵久夫編(2000)『元素の事典』朝倉書店 p.304

沢田正昭(1997)『文化財保存科学ノート』近未来社 p.212

渡辺智恵美(1994)「金・銀の分析」『団子塚9号墳出土遺物保存処理報告書』袋井市教育委員会 pp.141-145.

平尾良光(1999)『古代青銅の流通と铸造』pp.126-136.

補記 本分析については、株式会社パレオ・ラボに委託した。

6. 女谷横穴B支群18号横穴出土胡籙金具の蛍光X線分析

(1) はじめに

今回、女谷B支群18号横穴より出土した胡籙金具の蛍光X線分析を行い、胡籙金具の材質について検討した。

(2) 試料と方法

試料は、胡籙金具1点である。縦約4.0cm、横約9.0cm、厚さ約2mmの板状である。茶褐色ないし暗褐色の板の上に黒色の板があり、更にその上が金色の板で覆われて、文様が彫られている。表面の鍔は2列に平行に並んでおり、鍔部は赤褐色の錆で盛り上がり、その一部が剥落している

(巻頭図版10-6)。裏面は、所々に鋳の先端が確認される。端部は、黒色の板の端を少し曲げた上で、茶褐色ないし暗褐色の板に引っ掛けて重ねていることが観察される(巻頭図版10-8の黒矢印部参照)。

まず、肉眼観察で各部位の色や状態を観察し、マイクロスコープで写真撮影した後、胡籙金具の表面と裏面全体を蛍光X線分析でマッピング分析を行った。マッピング分析により、どの部位にどのような元素が存在するのかを分析し、肉眼観察での状況との比較検討を行った。さらに、数か所でポイント分析し、そこから検出された元素をファンダメンタルパラメータ法(FP法)で合計100%となるよう定量計算した。胡籙金具には土壌などが付着残存していたが、脆く繊細なため、ブローで試料に風を当てて表面の付着物を軽く飛ばす程度にした。分析装置は、(株)堀場製作所製のX線分析顕微鏡XGT-2700である。X線管球のロジウム(Rh)である。ポイント分析で測定する際のX線の照射径は100 μ mである。

(3)分析結果および考察

表面と裏面ごとに以下にまとめておく。

表面

第33図には表面から得られた各元素のマッピング画像を示す。画像の「その他」は、検出された元素以外の元素をさし、主にバックグラウンドを示す。バックグラウンドとは、蛍光X線スペクトル図の下部にある微小ピークの集まりで、特定元素ではない。

検出された元素は、鉄、銅、銀、金、水銀、ケイ素などである。水銀が検出されたことから、水銀を用いたメッキがなされていたことが確認された。

鉄は、鋳部の赤褐色の錆部と、金板部の剥がれた茶褐色ないし暗褐色の一番下の板などから検出される。鉄の検出されない中央部は、金板の部分である。銀は、鋳部分から検出された。このことから、鋳は鉄と銀を主成分とすることが確認された。肉眼観察では、鋳部の錆化が激しく、鉄と銀の違いは見出せなかった。また、一番下の茶褐色ないし暗褐色の板は、鉄を主体とすると考えられる。

銅、金、水銀は、鋳を除いた表面全体から検出されるが、金板・黒板の剥がれた部位にある、茶褐色ないし暗褐色の板からは検出されない。ケイ素は、うっすらと全体から検出される。ケイ素については特定の部位に集中して検出されず、検出強度も低いことから、土壌などに由来するものと考えられる。

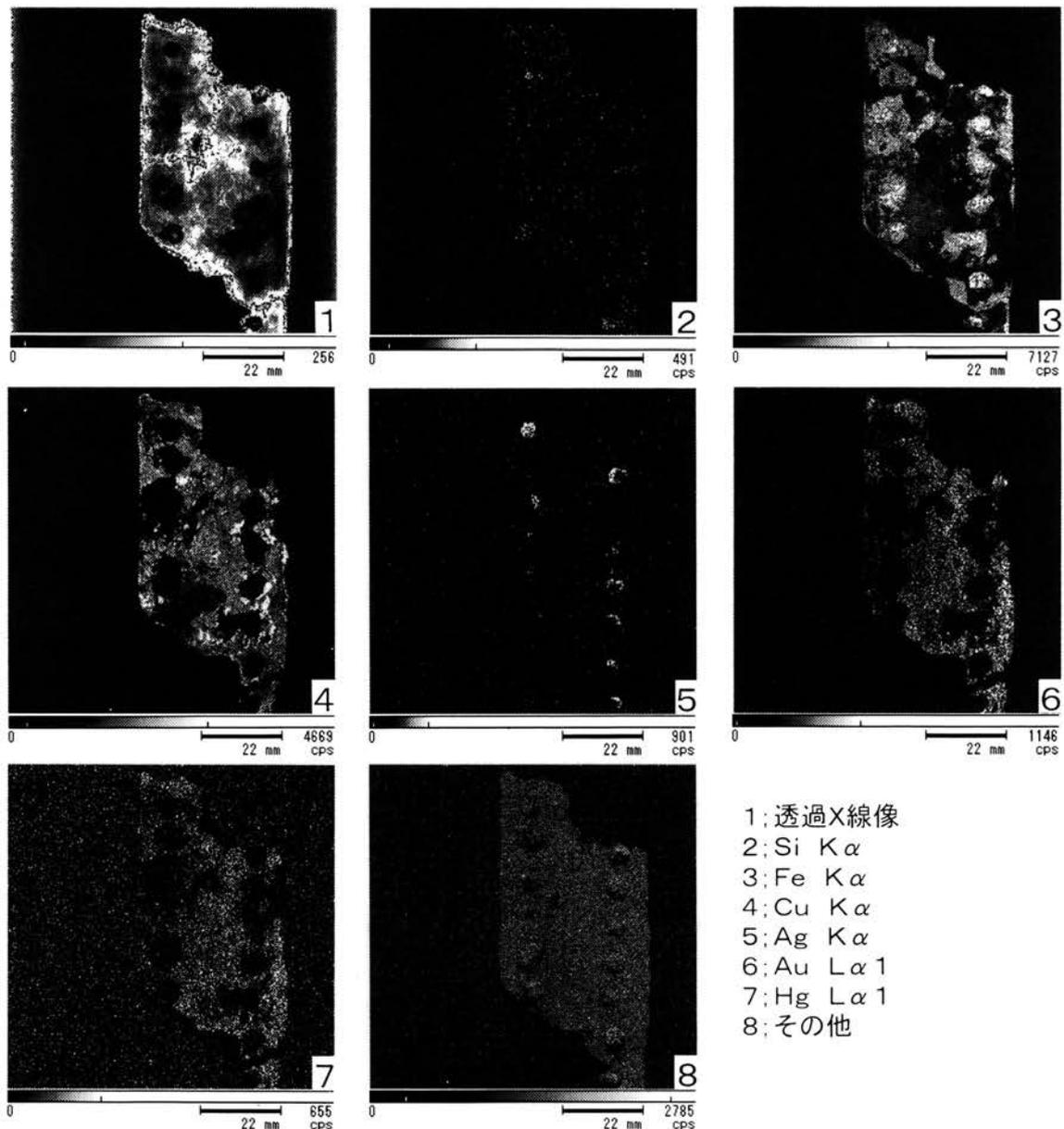
銅と金のマッピング画像を比較すると、銅の集中する部分は金が薄く、金の集中する部分は銅が薄い傾向がある。水銀のマッピング画像は、銅より金のマッピング画像と分布が類似する。このことから、水銀を用いた金メッキがなされたと考えられる。銅も金と一緒に混ぜて、水銀を用いてメッキした可能性がある。また、このほかに、金メッキに微細な隙間があるなどの場合は、X線が金を透過して、下の銅板の銅を検出した可能性もある。

また、ポイント分析による定量分析を2か所で行った(巻頭図版10-6)。測定箇所は、鋳部(番号1)と金色部(番号2)である。第34図・表19に蛍光X線スペクトル図と定量分析結果を示す。

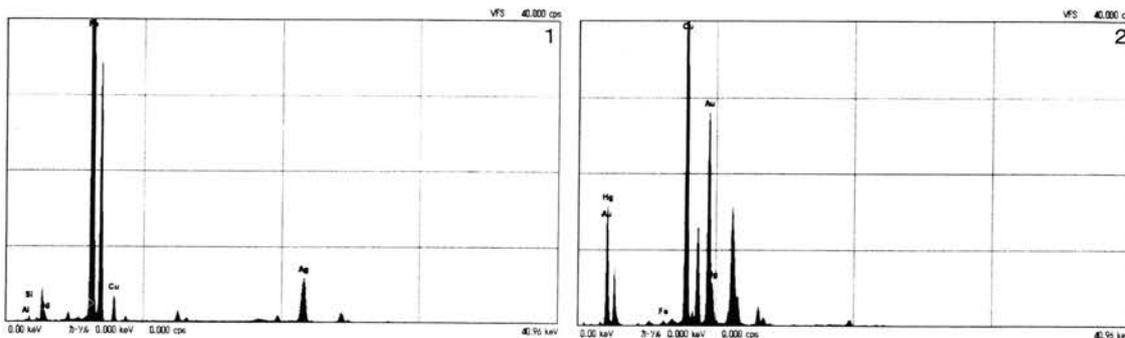
番号1では、鉄が91.81%、アルミニウム2.79%、ケイ素2.25%、銅3.15%、銀0%であった。この分析結果のうち、銀の分析値については信頼性が低い。原子番号45のロジウム(約20keV)以降の原子番号の元素は、K線ではなくL線で定量分析するようプログラムされているためである。例えば、第34図の番号1のスペクトル図では、右側の銀のピークがK線で、左側のピークがL線である。L線はK線に比べて強度が低いので、分析値は実際の値より低くなってしまふことになる。分析値は合計100%になるよう計算されるので、銀の分析値が下がると、銀以外の元素の分析値は上がるということになる。

このことから、番号1の銀は0%であったが、スペクトル図には銀が検出されているので、実際に存在することは確かである。しかし、銀のピークは鉄のピークに比べるとわずかなので、鉄より含有量が低いことは確かである。

番号2では、金62.58%、銅26.09%、水銀11.16%、鉄0.16%と金を主体とするが、銅の量が



第33図 表面 各元素のマッピング画像



第34図 表面 各測定部のスペクトル図

表19 表面 各測定部の分析値(単位：%)

番号	測定部	Al	Si	Fe	Cu	Ag
1	鍔	2.79	2.25	91.81	3.15	0.00
番号	測定部	Fe	Cu	Au	Hg	
2	金色部	0.16	26.09	62.58	11.16	

26.09%と多いことが確認された。これについても、最初から金色部が銅と金を混ぜた合金のメッキであった可能性や、金メッキに微細な隙間があったために、X線が透過して下の銅板の銅を検出してしまった可能性がある。

裏面

第35図には、裏面から得られた各元素のマッピング画像を示した。検出された元素は鉄、ケイ素、銅、銀などである。

鉄は、茶褐色ないし暗褐色の板のほぼ全面から検出され、この板は鉄を主成分とすることが分かった。鍔の先端からは鉄が検出されているが、銀は検出されていない。銀は1か所で検出されているが、この部分は胡籙金具の端にあたり、鉄の板が剥がれて表面の鍔が見える箇所にあたるので、表面の鍔の銀を検出したと考えられる。このことから、鍔は鉄を主成分としていることが分かる。先ほどの第33図の表面のマッピングでは、鍔部から鉄と銀が検出され、合金であるのか銀を鉄鍔に貼っているのか不明であった。裏面の鍔の先端からは鉄だけが検出され、銀は検出されないことから、鍔は鉄と銀の合金ではなく、鉄製の鍔の表面に銀を貼るなどして装飾していた可能性が高い。

富山県氷見市朝日長山古墳と京都府長岡京市井ノ内稲荷塚古墳出土の胡籙金具は、ともに鉄地金銅装で、鍔には銀を被せていたと報告されている(小村ほか2002)。また、胡籙金具ではないが、滋賀県大通寺古墳出土の7世紀初頭の剣菱型杏葉1対は鉄地金銅張で、鍔には銀の薄板が巻かれていると報告されており(村上1995)、鍔に銀を被せる、または巻くという事例が確認される。

銅は金具の端部を縁取るように検出されている。この部分は、鉄板の上に、黒色の板の端を少し曲げて、鉄板に引っ掛けて重ねていることが観察される箇所である(巻頭図版10-8の黒矢印部参照)。このほかに、胡籙金具の端部で鉄板が剥離して、その上の板が観察される部分からも銅が検出されている。表面でのマッピングの結果と合わせると、黒色の板は銅板で、鉄板の上には

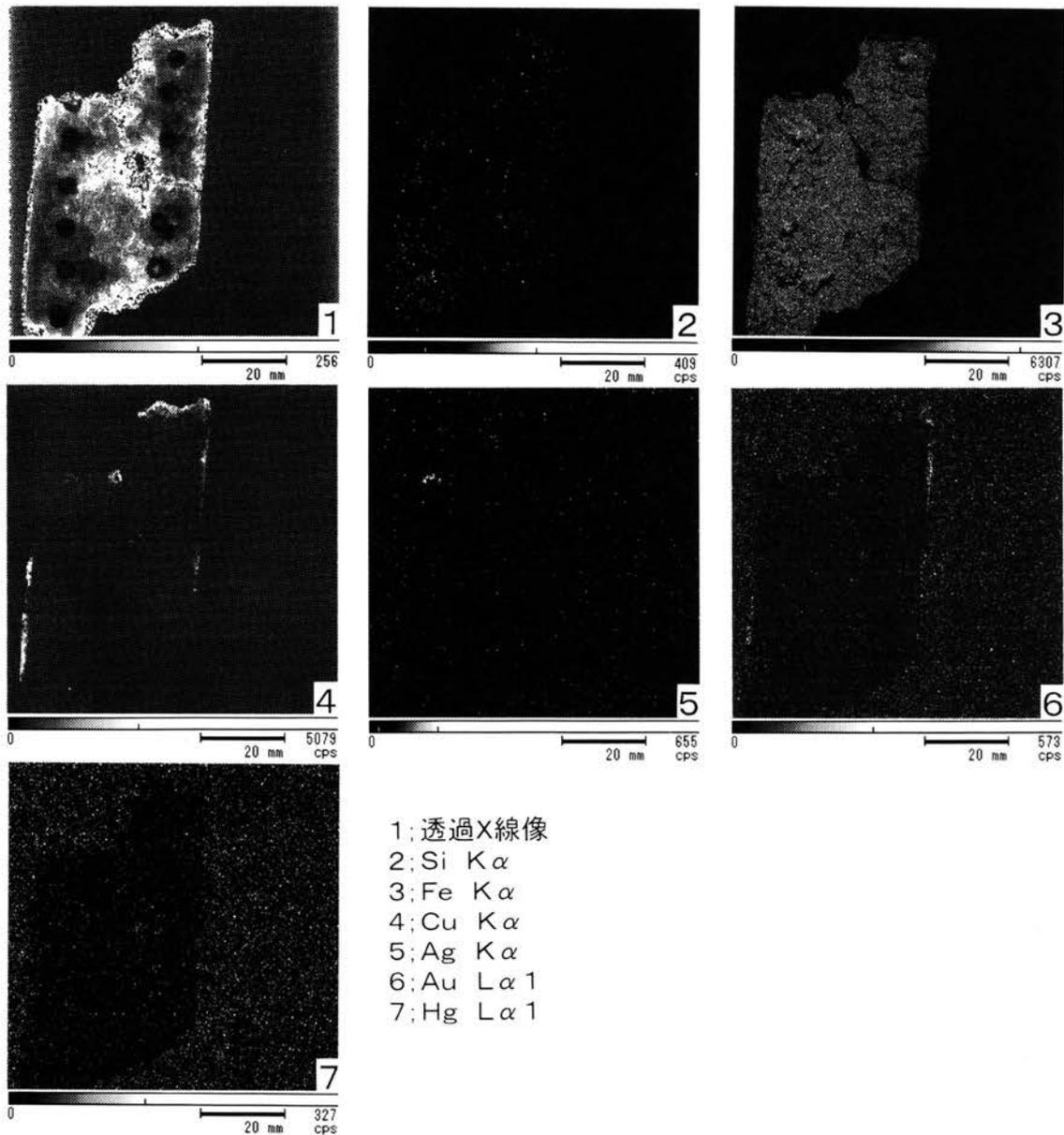
銅を主成分とする板が重ねられていたことが確認される。

第35図のマッピング画像では、銅のみが裏面全体に分布しているのに対して、金は銅板が折つてある部分の中でも、特に端の表面に近い部分にわずかに確認される程度である。ケイ素は、土壌に由来するものと考えられる。

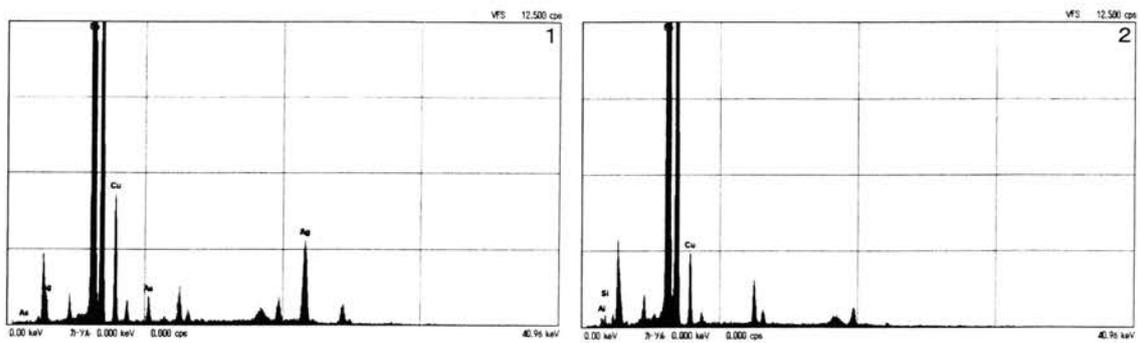
また、ポイント分析による定量分析を2か所で行った(巻頭図版10-7)。測定箇所は、鋳部(番号1)と鉄板部(番号2)である。第36図・表20に蛍光X線スペクトル図と定量分析結果を示す。

番号1では、鉄94.07%、銅5.08%、ヒ素0.81%、銀0.04%であった。マッピング画像で銀が検出された部位を測定したが、実際の銀の含有量が分析値より高い数%としても約90%近くは鉄で構成されていることが分かる。銅5.08%は鉄板の上に重なる銅板の成分をわずかに検出したのではないかと思われる。

番号2では、鉄92.97%、アルミニウム3.27%、ケイ素1.55%、銅2.20%で、鉄が90%以上を



第35図 裏面 各元素のマッピング画像



第36図 裏面 各測定部のスペクトル図

表20 裏面 各測定部の分析値(単位：%)

番号	測定部	Al	Si	Fe	Cu	As	Ag
1	鋌	-	-	94.07	5.08	0.81	0.04
2	鉄板部	3.27	1.55	92.97	2.20	-	-

占めることが分かった。アルミニウムとケイ素については、土壌に由来するものと考えられる。銅が2.20%とわずかに含まれているが、もとから鉄板に含まれていたか、もしくは鉄板に重ねられた銅板の銅が影響したのではないかと思われる。

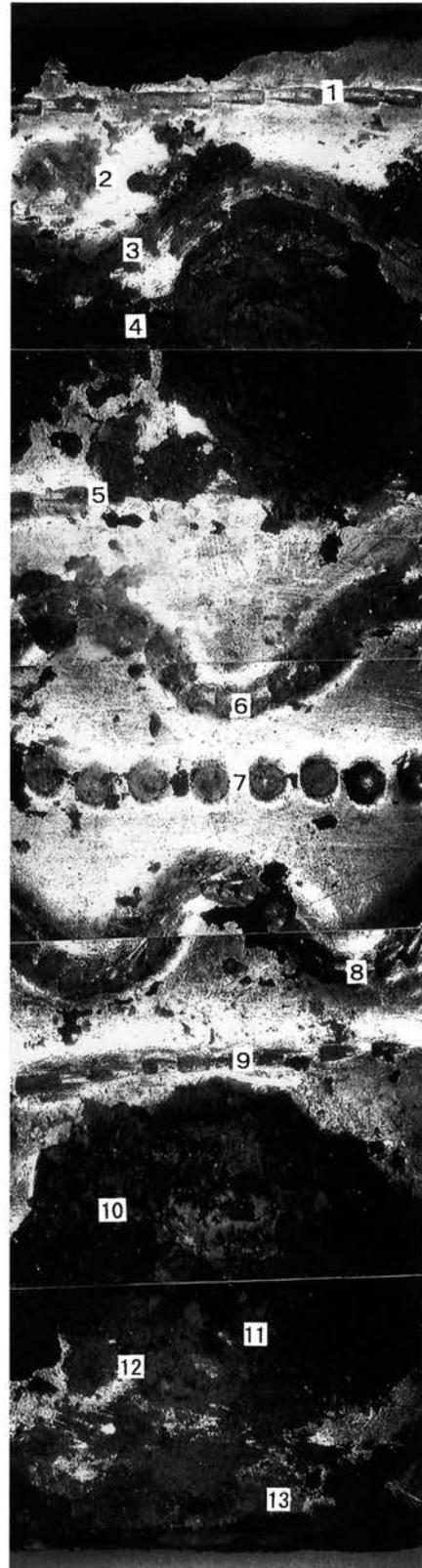
胡籙金具の文様、布の痕跡について

この胡籙金具に彫られていた文様について記載しておく。第37図は、第35図の胡籙金具の中央付近を縦に拡大したものである。彫り跡は2種類あり、○タイプと△タイプである。この形状の違いから、彫金にはキリやノミのような工具を2種類使用したのではないかと推定される。直線や波線の文様は、○や△の点を狭い間隔で連続して彫ったものである。1条の線は、○か△のどちらかに統一されており、○と△を混在させているものはない。第37図では、文様の位置に1～13の番号を付しており、それぞれの文様が○・△のいずれかを示した。Na7の○の直線を軸にして対称に文様が彫られている。また△の向きは上部と下部で異なっているのが観察され、これは、彫金を行った方向が上部と下部で異なっていることを示しており、工人の作業工程の一端が窺える。本遺跡から近隣の京都府木津町白山古墳から鉄地金銅張の胡籙金具が出土している(木津町史1991)。実測図を見る限りでは、文様などの細工は女谷B支群18号横穴出土の胡籙金具の方が数段優っている印象を受ける。

また、第38図は、今回分析した胡籙金具の別破片である。この裏面の端(第38図の黒矢印あたり)には、平織りと思われる布の痕跡が確認される(第39図)。この布が何の糸で織られているのかは不明である。富山県氷見市朝日長山古墳と京都府長岡京市井ノ内稲荷塚古墳出土の鉄地金銅製の胡籙金具では裏面に用いられた平絹について述べられており(小村ほか、前掲)、胡籙金具の裏面には絹が使用される場合があることが分かる。平絹は平織りの絹という意味である。今回、蛍光X線分析した胡籙金具の裏面にも布の痕跡があるようにも観察されるが、はっきりと分かるものは確認されなかった。

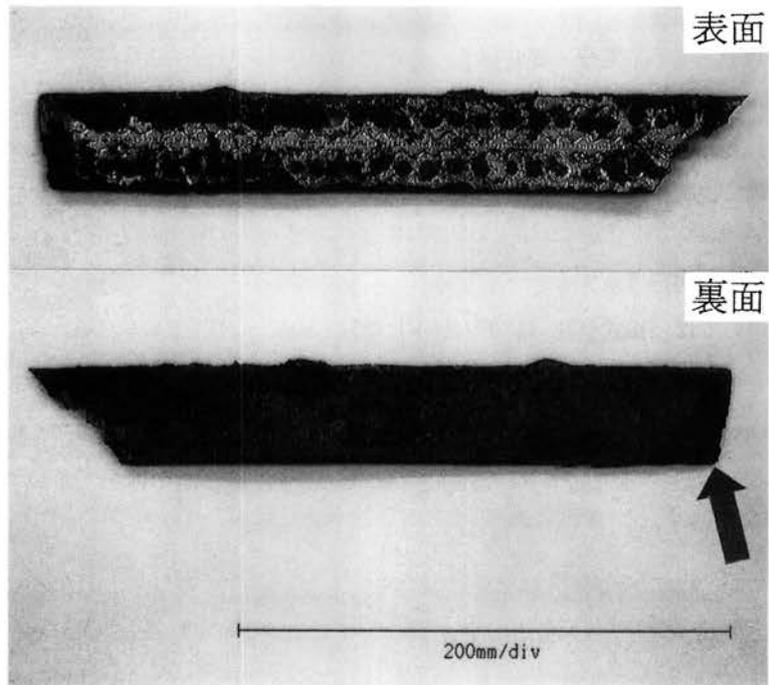
引用文献

- 小村真理・井上美知子・尼子奈美枝・菅井裕子・大野究(2002)
 「胡籙製作に用いられた平絹」『日本文化財科学会第19回大会研究
 発表要旨集』 pp. 232・233.
- 村上隆(1995)「古代に挑戦する自然科学」『クバプロ』
 pp. 117・118.
- 木津町史編さん委員会(1991)『木津町史 本文篇』 p. 35
 補記 本分析については、株式会社パレオ・ラボに委託した。

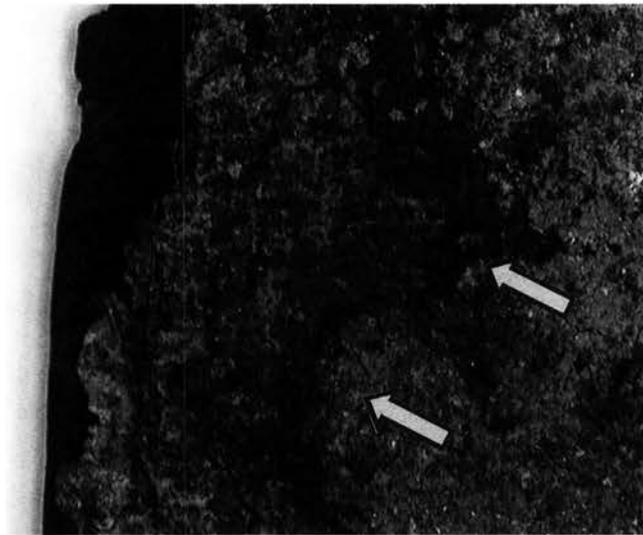


第37図 表面の文様

- | | | | |
|--------|--------------------------|--------|--------|
| 1 : ◁ | 2 : ○ | 3 : ◁ | 4 : ○ |
| 5 : ◁ | 6 : ▷ | 7 : ○ | 8 : ▷ |
| 9 : ▷ | 10 : ○ | 11 : ▷ | 12 : ○ |
| 13 : ▷ | ※10は錯で確認できなかったが、ほかの箇所であり | | |



第38図 胡録金具別破片



第39図 裏面の布の痕跡

付表4 土器観察表

凡例 器種：須=須恵器 土=土師器 黒=黒色土器 瓦=瓦器 器高：()=残存高
 調整：ユビ=ユビオサ ハケ=ハケ ヨコ=ヨコナデ 回転ケ=回転ケズリ オコシ=ヘラオコシ
 残存率：全体に対する比率(%)の略 単位：cm

番号	器種	器形	支群	横穴	層位	口径	底径	器高	色調 (内面/ 外面)	胎土	焼成	調整(内面/ 外面)	残存 率	備考
1	須	杯蓋	女谷B	1号	Ⅲ面	12.0		4.05	淡灰	密	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 天井；オコシ 後ナデ	95	ヘラ記号
2	須	杯蓋	女谷B	1号	墓道 10層	11.8		3.6	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井；回転ケ 後ナデ	80	
3	須	杯身	女谷B	1号	Ⅲ面	10.2		3.8	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部；オコシ 後ナデ	100	ヘラ記号
4	須	杯身	女谷B	1号	墓道	10.7		3.6	淡黄灰	密	軟	ヨコ・ユビ/ ヨコ・底部； 回転ケ	95	全体に磨滅
5	須	杯身	女谷B	1号	Ⅲ面	10.2		3.5	青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部；回転ケ 後ナデ	100	外面にヘラ記 号。6の杯身 と対で枕
6	須	杯身	女谷B	1号	Ⅲ面	10.8		3.7	暗灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部；回転ケ	100	内面にヘラ記 号。5の杯身 と対で枕
7	須	蓋	女谷B	1号	Ⅲ面	13.4		4.7	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井；回転ケ 後ナデ	95	8の高杯と セット
8	須	高杯	女谷B	1号	Ⅲ面	12.3	13.8	16.3	暗灰/ 暗青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部；回転 ケ後ナデ	90	柱部内面~杯 底部に自然 釉。7の蓋と セット。2段 2方向すかし
9	須	高杯	女谷B	1号	I・ II・ Ⅲ面	10.5	12.6	15.1	暗青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部；回転 ケ後ナデ	80	2段方向2す かし
10	須	高杯	女谷B	1号	Ⅲ面	11.8		(4.3)	青灰/ 暗青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ	30	11と同一の土 器
11	須	高杯	女谷B	1号	Ⅲ面		13.2	(6.7)	暗青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ	25	外面に自然 釉。10と同一 の土器。2方 向すかし
12	須	高杯	女谷B	1号	Ⅲ面	11.65	12.2	11.6	淡灰、 柱部； 明赤灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部；回転 ケ後ナデ	100	2段2方向す かし
13	須	高杯	女谷B	1号	墓道 11層		13.0	(10.8)	暗黄灰 ~白灰	密	軟	ヨコ/ヨコ	30	2段2方向す かし
14	須	高杯	女谷B	1号	墓道 10層	10.5		(4.75)	淡青灰	密	やや 軟	ヨコ/ヨコ	25	
15	須	高杯	女谷B	1号	墓道 11層	13.8	10.8	11.5	淡灰/ 淡茶灰 ~淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部；回転 ケ	85	2段2方向す かし。上部未 貫通
16	須	脚付 長頸 壺	女谷B	1号	Ⅲ面			(15.0)	暗青灰	やや 粗	堅	ヨコ/ヨコ・ 壺底部；回転 ケ後ナデ	60	脚部の2か所 にすかしの痕 跡。外面に自 然釉
17	須	平瓶	女谷B	1号	I・ Ⅲ面	6.3		12.7	淡灰~ 明橙褐	密	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ カキメ	100	
18	須	平瓶	女谷B	1号	Ⅲ面	5.05		12.9	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 回転ケ	100	外面に自然釉
19	須	提瓶	女谷B	1号	Ⅲ面			(19.1)	暗灰~ 淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ ケズリ後ヨコ	90	外面に自然釉
20	須	提瓶	女谷B	1号	Ⅲ面	7.6		23.15	明茶褐	やや 粗	堅	ナデ・ヨコ/ ヨコ・カキメ	95	外面体部上半 に自然釉

21	須	高杯	女谷B	2号	墓道	12.3		(3.4)	灰白	密	堅	ヨコ/ヨコ	20	反転復原
22	須	短頸壺	女谷B	3号	I面	6.6		6.9	青灰~白灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・カキメ・ケズリ	85	
23	土	杯	女谷B	3号	I面	10.9		4.0	橙褐	密	堅	ヨコ・暗文・ミガキ/ヨコ・ケズリ後ユビ	98	
24	土	壺	女谷B	3号	I面	9.2		12.1	橙褐	密	堅	ヨコ・ユビ後ナデ/ヨコ・ケズリ・暗文	95	底部剥離著しい。胎土分析
25	土	皿	女谷B	3号	埋土上層	9.4		(0.85)	淡褐	密	やや軟	ヨコ/ヨコ・ユビ	40	反転復原
26	須	杯蓋	女谷B	4号	I面	12.8		4.35	淡黄灰	やや粗	やや軟	ヨコ/ヨコ・天井;オコシ後ナデ	100	27の杯身とセット
27	須	杯身	女谷B	4号	I面	11.1		3.8	淡黄灰/淡茶灰	やや粗	やや軟	ヨコ/ヨコ・底部;オコシ後ナデ	100	26の杯蓋とセット
28	須	杯蓋	女谷B	4号	I面	12.5		4.65	淡黄灰	やや粗	やや軟	ヨコ/ヨコ・天井;オコシ後ナデ	95	29の杯身とセット
29	須	杯身	女谷B	4号	I面	11.0		3.8	淡黄灰	密	やや軟	ヨコ/ヨコ・底部;オコシ後ナデ	100	28の杯蓋とセット
30	須	提瓶	女谷B	4号	I面	4.0		14.8	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・カキメ・回転ケ	100	
31	土	甕	女谷B	4号	I面	15.7		18.8	黄褐	良	堅	ヨコ・ハケ/ヨコ・ケズリ・ハケ	100	底部に黒斑
32	須	杯蓋	女谷B	5号	II面	12.0		4.1	淡青灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・天井;オコシ後ナデ	100	34の杯身とセットか。33の杯身と対で枕
33	須	杯身	女谷B	5号	II面	11.5		3.6	暗灰/暗茶灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・底部;外周回転ケ・中央ナデ	100	32の杯蓋と対で枕。外面に自然釉
34	須	杯身	女谷B	5号	墓道	10.8		4.2	青灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ後ナデ	100	32の杯蓋とセットか
35	須	杯身	女谷B	5号	II面	10.4		3.5	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・底部;オコシ後ナデ	95	
36	須	蓋	女谷B	5号	墓道	14.4		(2.1)	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ	10	残存率は口縁部
37	須	高杯	女谷B	5号	I面	12.4	11.0	16.5	黄茶灰	密	軟	ヨコ/ヨコ	90	2段3方向すかし
38	須	高杯	女谷B	5号	II面	12.8	14.1	17.7	淡黄褐/淡橙褐	密	軟	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ後ナデ	100	2段2方向すかし
39	須	高杯	女谷B	5号	I面	13.3	14.7	18.7	淡橙褐	密	軟	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ後ナデ	95	2段2方向すかし
40	須	高杯	女谷B	5号	I面	14.5	17.0	19.7	橙褐	密	軟	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ後ナデ	95	2段3方向すかし
41	須	高杯	女谷B	5号	墓道		10.4	11.9	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ	70	2段2方向すかし
42	須	壺	女谷B	5号	墓道	8.0		12.65	淡灰	密	堅	ナデ/ヨコ・回転ケ	90	
43	須	脚付長頸壺	女谷B	5号	I面	8.1	14.7	32.2	橙褐	密	軟	ヨコ/ヨコ・ケズリ	100	3方向に方形すかし

遺物観察表

44	須	提瓶	女谷B	5号	Ⅱ面	6.2		19.1	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ケズリ後カキメ	100	体部外面へラ記号
45	須	甕	女谷B	5号	墓道	22.4		46.1	淡黄灰	密	堅	ヨコ・同心円文/ヨコ・タタキ後カキメ	95	外面に自然釉
46	土	長頸壺	女谷B	5号	I面	10.0		19.4	赤茶褐	密	堅	ナデ/ヨコ・ケズリ・暗文	100	胎土分析
47	土	高杯	女谷B	5号	Ⅱ面	16.5	10.2	13.4	橙褐	良	堅	ヨコ/ヨコ・ユビ・柱部;ケズリ後ナデ	90	
48	土	高杯	女谷B	5号	墓道	15.4	9.8	12.5	橙褐	密	やや軟	ヨコ/ヨコ	50	胎土分析
49	土	高杯	女谷B	5号	Ⅱ面	15.9	10.4	12.0	橙褐	密	やや軟	ヨコ・ナデ・ユビ/ヨコ・ユビ・柱部;ケズリ後ナデ・底部外面横方向ハケ	70	
50	土	甌	女谷B	5号	墓道	23.8		(35.6)	黄褐	良	やや堅	ヨコ・ハケ/ヨコ・ハケユビ・体部下半ケズリ	50	反転復原。胎土分析
51	須	杯蓋	女谷B	6号	Ⅱ面	12.6		4.2	淡黄灰	密	やや堅	ヨコ/ヨコ・天井;回転ケ後ナデ	100	52の杯身と対で枕
52	須	杯身	女谷B	6号	Ⅱ面	10.8		3.95	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ	100	51の杯蓋と対で枕
53	須	杯身	女谷B	6号	I面	10.2		3.8	淡灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・底部;オコシ後ナデ	100	54の杯身と対で枕
54	須	杯身	女谷B	6号	I面	10.0		3.2	淡茶灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・底部;オコシ後ナデ	100	53の杯身と対で枕。外面に自然釉
55	須	杯身	女谷B	6号	I面	10.9		3.7	白灰/灰白	密	軟	ヨコ/ヨコ・底部;オコシ後ナデ	100	
56	須	高杯	女谷B	6号	I面	11.1		(3.8)	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ	25	反転復原
57	須	高杯	女谷B	6号	Ⅱ面	11.2	9.8	12.55	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ	70	杯内面および柱部外面に自然釉
58	須	高杯	女谷B	6号	I面	12.7	14.5	17.2	淡黄灰	密	軟	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ後ナデ	100	2段2方向すかし
59	須	脚付長頸壺	女谷B	6号	I面	9.4	12.5	23.8	青灰	密	堅	ヨコ・ケズリ後ナデ/ヨコ・壺底部;回転ケ後ナデ	90	
60	須	壺	女谷B	6号	Ⅱ面	5.4		11.7	淡青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・カキメ	100	
61	須	平瓶	女谷B	6号	I面	5.4		13.6	白灰	密	堅	ヨコ/ナデ・カキメ・回転ケ	100	
62	須	平瓶	女谷B	6号	I面	4.8		10.3	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・カキメ後ナデ・底部;外周回転ケ・中央ナデ	100	
63	土	高杯	女谷B	6号	I面	16.0		(4.9)	赤褐	良	軟	ヨコ/ヨコ・ユビ	30	反転復原。磨滅著しい
64	須	高杯	女谷B	7号	埋土上面		13.6	(6.3)	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ	10	反転復原。2方向のすかし
65	須	杯身	女谷B	7号	Ⅱ面	13.8		3.7	淡黄灰	密	軟	ヨコ/ヨコ・底部;オコシ後ナデ	100	

66	土	杯	女谷B	7号	Ⅱ面	15.4		2.6	淡橙褐	密	堅	ヨコ／ヨコ・ユビ	30	口縁部にスス。反転復原
67	土	杯	女谷B	7号	Ⅱ面	13.0		2.9	橙褐	密	やや堅	ユビ後ヨコ／ヨコ・ユビ後ナデ	100	
68	瓦	椀	女谷B	7号	Ⅰ面	15.0		5.65	淡灰	良	堅	ヨコ・ミガキ・暗文／ヨコ・ミガキ・ユビ	70	
69	瓦	椀	女谷B	7号	Ⅰ面	14.9		5.6	暗灰	密	やや堅	ヨコ・ミガキ・暗文／ヨコ・ミガキ・ユビ	95	
70	須	杯蓋	女谷B	8号	Ⅲ面	12.9		4.3	白灰	良	軟	ヨコ／ヨコ・天井；外周回転ケ・中央ナデ	85	71の杯身とセット
71	須	杯身	女谷B	8号	Ⅲ面	11.4		3.85	白灰	やや粗	軟	ヨコ／ヨコ・底部；外周回転ケ・中央ナデ	100	70の杯蓋とセット
72	須	杯蓋	女谷B	8号	Ⅲ面	12.9		4.4	白灰	やや粗	軟	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ	100	全体に磨滅著しい。73の杯身とセット
73	須	杯身	女谷B	8号	Ⅲ面	11.3		4.1	淡黄灰	やや粗	軟	ヨコ／ヨコ・底部；回転ケ後ナデ	100	72の杯蓋とセット
74	須	杯蓋	女谷B	8号	Ⅱ面	12.5		4.1	淡青灰	良	堅	ヨコ／ヨコ・天井；オコシ後ナデ	100	75の杯身とセット
75	須	杯身	女谷B	8号	Ⅱ面	11.4		3.6	淡青灰	良	堅	ヨコ／ヨコ・底部；外周回転ケ・中央ナデ	95	74の杯蓋とセット
76	須	杯蓋	女谷B	8号	Ⅱ面	13.0		4.1	淡黄灰／淡青灰	良	軟	ヨコ／ヨコ・天井；オコシ後ナデ	50	反転復原
77	須	杯蓋	女谷B	8号	Ⅱ面	12.4		4.8	淡灰	やや粗	やや軟	ヨコ／ヨコ・天井；オコシ後ナデ	100	
78	須	杯身	女谷B	8号	Ⅲ面	11.0		3.95	白灰	やや粗	軟	ヨコ・不明／ヨコ・不明	100	磨滅著しい
79	須	杯身	女谷B	8号	Ⅲ面	11.3		4.0	白灰	やや粗	軟	ヨコ／ヨコ・底部；回転ケ	100	
80	須	高杯	女谷B	8号	Ⅱ面	11.2	9.7	14.1	淡灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・杯底部；回転ケ後ナデ	95	2段2方向すかし
81	須	高杯	女谷B	8号	Ⅱ面	11.6	14.0	15.3	柱部；暗茶灰、杯部；淡黄灰	やや粗	やや軟	ヨコ／ヨコ・杯底部；回転ケ後ナデ	95	2段2方向すかし
82	須	高杯	女谷B	8号	Ⅱ面	11.4	13.2	15.6	暗灰	良	堅	ヨコ・ナデ／ヨコ・杯底部；回転ケ後ナデ	95	2段2方向すかし
83	須	提瓶	女谷B	8号	Ⅱ面	4.5		15.0	淡灰	やや粗	堅	ヨコ／ヨコ・カキメ・回転ケ	100	
84	須	提瓶	女谷B	8号	Ⅱ面	7.0		19.8	青灰	やや粗	堅	ヨコ／ヨコ・回転ケ後ナデ	100	
85	須	杯蓋	女谷B	9号	Ⅱ面	11.95		3.95	淡青灰	やや粗	堅	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ	100	86の杯身とセット。86の杯身と対で枕か

遺物観察表

86	須	杯身	女谷B	9号	II面	10.6		4.0	淡灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ	100	85の杯蓋とセット。85の杯蓋と対で枕か
87	須	杯蓋	女谷B	9号	II面	12.0		3.7	暗青灰/淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井;回転ケ	100	88の杯身とセット。89の杯蓋と対で枕
88	須	杯身	女谷B	9号	II面	10.2		3.65	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ後ナデ	100	87の杯蓋とセット
89	須	杯蓋	女谷B	9号	II面	12.6		3.9	淡緑灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井;回転ケ	100	90の杯身とセット。87の杯蓋と対で枕
90	須	杯身	女谷B	9号	II面	11.4		3.6	淡緑灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ	100	89の杯蓋とセット
91	須	杯蓋	女谷B	9号	墓道前面	11.4		3.55	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・天井;オコシ後ナデ	85	
92	須	杯蓋	女谷B	9号	墓道前面	11.8		3.65	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井;外周回転ケ・中央ナデ	90	
93	須	杯蓋	女谷B	9号	II面	12.6		4.2	淡灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・天井;回転ケ	100	96の杯身と対で枕か
94	須	杯蓋	女谷B	9号	II面	12.6		3.7	青灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・天井;回転ケ後ナデ	100	
95	須	杯身	女谷B	9号	II面	11.0		3.9	灰白	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・底部;オコシ後ナデ	100	
96	須	杯身	女谷B	9号	II面	10.9		3.8	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・底部;オコシ後ナデ	95	93の杯蓋と対で枕か
97	須	杯身	女谷B	9号	II面	10.2		3.4	白灰	良	軟	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ後ナデ	100	外面磨減
98	須	杯身	女谷B	9号	I面	9.8		3.0	青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・底部;外周部回転ケ・中央のみナデ	100	
99	須	杯身	女谷B	9号	II面	11.5		4.0	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ	100	
100	須	杯身	女谷B	9号	墓道埋土	10.4		(3.7)	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ	20	体部外面に自然釉
101	須	蓋	女谷B	9号	II面	13.2		4.7	淡青灰/暗灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・天井;(回転ケ後?)ヨコ	100	102の高杯とセット。外面に自然釉
102	須	高杯	女谷B	9号	II面	11.4	13.0	14.9	淡青灰	堅	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ	100	2段2方向すかし。内外面の一部に自然釉。101の蓋とセット
103	須	蓋	女谷B	9号	II面	13.0		4.8	淡青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・天井;回転ケ後ナデ	100	104の高杯とセット
104	須	高杯	女谷B	9号	II面	11.0	12.6	14.6	淡青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ後ナデ	100	2段2方向すかし。103の蓋とセット。柱部一部および・外面に自然釉
105	須	高杯	女谷B	9号	II面	11.6	12.6	14.3	淡灰	密	やや堅	ヨコ/ヨコ	95	2段2方向すかし
106	須	高杯	女谷B	9号	II面	11.3	12.8	14.3	灰白~暗灰	密	やや堅	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ・柱部;カキメ	100	2段2方向すかし

107	須	高杯	女谷B	9号	II面	11.8	11.0	13.4	淡茶灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ後ナデ	100	2段2方向すかし。外面に自然釉
108	須	脚付長頸壺	女谷B	9号	II面	8.5	12.6	27.4	淡灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・壺底部;回転ケ	100	1段2方向方形すかし。内外面一部自然釉
109	須	フラスコ形瓶	女谷B	9号	II面			(20.0)	暗灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・カキメ	90	外面と口縁内部に自然釉。腹径12.3×14.5cm
110	須	提瓶	女谷B	9号	II面	5.0		14.9	暗灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・カキメ後一部ナデ	100	ヘラ記号。外面に自然釉
111	土	杯	女谷B	9号	II面	12.0		4.6	口縁部;淡黄灰、体部~底部;暗灰	やや粗	やや軟	ヨコ/ヨコ・ユビナデ	100	
112	土	杯	女谷B	9号	墓道9層	11.6		3.8	橙褐	密	やや堅	ヨコ/ヨコ・ユビ	100	
113	埴輪	朝顔形	女谷B	9号	墓道前面	21.8		(9.4)	橙褐	やや粗	軟	ナデ/ヨコ・ハケ	25	反転復原。胎土分析
114	須	杯身	女谷B	10号	I面	11.8		3.1	暗赤茶	密	堅	ヨコ/ヨコ・底部;外周回転ケ・中央ナデ	100	
115	須	杯身	女谷B	10号	I面	10.8		3.9	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ後ナデ	100	
116	須	杯蓋	女谷B	11号	II面	12.1		4.7	暗灰	やや粗	やや堅	ヨコ/ヨコ・天井;オコシ後ナデ	100	
117	須	杯身	女谷B	11号	II面	11.1		4.1	淡茶灰/淡青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・底部;外周回転ケ・中央ナデ	100	
118	須	杯身	女谷B	11号	II面	10.8		4.0	青灰	密	堅	ヨコ・底部;回転ケ後ナデ	100	
119	須	高杯	女谷B	11号	II面	14.6	16.8	20	橙茶褐~黄灰	密	軟	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ・柱部;カキメ後ナデ	100	2段3方向すかし
120	須	高杯	女谷B	11号	II面	11.5	11.4	13.9	青灰	良	やや堅	ヨコ/ヨコ	100	2段2方向すかし。未貫通
121	須	壺	女谷B	11号	II面	6.25		6.2	淡灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ後ナデ	100	外面に自然釉
122	須	平瓶	女谷B	11号	II面	6.0		12.8	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・カキメ・回転ケ	95	体部外面に自然釉
123	須	平瓶	女谷B	11号	II面	5.5		11.4	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・カキメ後ケズリ	90	体部外面に自然釉
124	土	高杯	女谷B	11号	II面	18.2	11.2	13.9	橙褐	良	堅	ナデ・ユビ・暗文/ナデ・ハケ・タタキ	100	
125	土	杯	女谷B	11号	I面	14.4		3.8	黄褐	密	堅	ナデ/ナデ・ユビ	95	
126	土	杯	女谷B	11号	I面	14.9		3.75	黄褐	良	堅	ナデ/ヨコ・ユビ	100	
127	黒	椀	女谷B	11号	I面	14.7		4.05	暗黒/淡黄褐~橙褐	密	堅	ヘラミガキ/ヨコ・ケズリ	90	

遺物観察表

128	黒	皿	女谷B	11号	I面	14.4		2.95	暗黒/ 橙褐～ 黄灰	密	堅	回転ナデ・ヘ ラミガキ/回 転ナデ・ケズ リ	100	ヘラ記号
129	須	壺	女谷B	11号	I面	5.0	5.2	12.9	淡黄灰	密	軟	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転糸 切り	100	
130	須	杯蓋	女谷B	12号	Ⅲ面	12.0		3.35	淡青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ	100	
131	須	杯蓋	女谷B	12号	Ⅲ面	12.0		3.9	淡青灰/ 黒灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ	100	
132	須	杯身	女谷B	12号	Ⅲ面	9.7		3.55	青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;オコシ 後ナデ	100	
133	須	杯身	女谷B	12号	Ⅲ面	10.6		3.55	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;オコシ 後ナデ	100	
134	須	蓋	女谷B	12号	Ⅲ面	12.3		4.3	白灰	良	軟	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ 後ナデ	100	ヘラ記号
135	須	蓋	女谷B	12号	Ⅲ面	13.8		4.25	青灰	やや 粗	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ 後ナデ	80	
136	須	高杯	女谷B	12号	Ⅲ面	11.85	13.4	14.3	灰白/ 淡灰	密	やや 軟	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	100	2段2方向す かし
137	須	高杯	女谷B	12号	Ⅲ面	12.3	13.2	14.3	灰白	密	軟	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ	100	2段2方向す かし
138	須	高杯	女谷B	12号	Ⅲ面	11.6	9.7	13.8	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	100	2段2方向す かし
139	須	高杯	女谷B	12号	Ⅲ面	11.4	11.2	12.8	淡灰～ 灰白	良	堅	ヨコ/ヨコ	90	2段2方向す かし。杯内面 および柱部外 面下部に自然 釉
140	須	脚付 長頸 壺	女谷B	12号	Ⅲ面	5.6	8.1	16.4	暗灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 壺底部;回転 ケ後ナデ	95	2段3方向す かし。外面に 自然釉
141	須	平瓶	女谷B	12号	Ⅲ面			(10.8)	灰白	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ	90	ヘラ記号
142	須	平瓶	女谷B	12号	Ⅱ面	6.0	7.0	10.2	白灰	良	堅	ヨコ・ナデ/ 回転ケ・ナデ	80	外面体部上半 に自然釉
143	土	椀	女谷B	12号	Ⅲ面	12.3		5.1	淡橙褐	やや 粗	やや 軟	ヨコ/ヨコ・ ハケ	100	底部磨滅。外 面約1/2にわ たって黒斑
144	土	皿	女谷B	12号	Ⅱ面	14.2		1.6	橙褐	密	軟	ナデ・ハケ/ ユビ後ナデ	60	外面底部磨滅 著しい。反転 復原
145	土	杯	女谷B	12号	Ⅱ面	13.6		3.05	淡橙褐	密	軟	ヨコ/ヨコ・ ユビ	95	
146	黒	椀	女谷B	12号	Ⅱ面	16.2		4.1	暗黒/ 橙褐	密	やや 軟	ヨコ・ミガキ /ヨコ・ユビ 後ナデ	75	
147	須	杯蓋	女谷B	13号	I面	11.6		3.5	淡灰	密	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;オコシ 後ナデ	100	148の杯身と セットの可能 性あり。153 の杯身と対で 枕か
148	須	杯身	女谷B	13号	I面	10.0		3.85	淡青灰	良	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;オコシ 後ナデ	100	147の杯蓋と セットの可能 性あり
149	須	杯蓋	女谷B	13号	I面	9.5		3.35	淡青灰/ 淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ	100	

150	須	杯身	女谷B	13号	I面	10.5		4.15	白灰	良	軟	ヨコ/ヨコ・天井；外周回転ケ・中央ナデ	95	
151	須	杯身	女谷B	13号	I面	10.4		3.15	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・底部；オコシ後ナデ	80	
152	須	杯身	女谷B	13号	I面	10.0		4.1	淡灰	良	やや軟	ヨコ/ヨコ・底部；オコシ後ナデ	95	底部外面生焼けて焼成軟、色調淡黄色
153	須	杯身	女谷B	13号	I面	10.1		2.95	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・底部；オコシ後ナデ	100	ヘラ記号。147の杯蓋と対で枕か
154	須	杯身	女谷B	13号	I面	10.2		3.85	淡青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・底部；オコシ後ナデ	100	ヘラ記号
155	須	杯身	女谷B	13号	I面	10.0		3.2	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・底部；オコシ後ナデ	100	外面に自然釉
156	須	杯身	女谷B	13号	I面 墓道	9.7		3.5	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・底部；外周回転ケ・中央ナデ	70	
157	須	杯身	女谷B	13号	I面	10.0		3.5	青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・底部；回転ケ後ナデ	100	
158	須	杯身	女谷B	13号	I面	10.0		3.05	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・底部；オコシ後ナデ	100	ヘラ記号
159	須	杯身	女谷B	13号	I面	10.0		(3.4)	暗灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・底部；オコシ後ナデ	45	反転復原
160	須	杯身	女谷B	13号	I面	10.0		3.45	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・底部；オコシ後ナデ	100	
161	須	杯身	女谷B	13号	I面	9.6		3.25	灰白	良	やや堅	ヨコ/ヨコ・底部；オコシ後ナデ	100	外面に自然釉。ヘラ記号
162	須	杯身	女谷B	13号	I面	10.3		(2.3)	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部；オコシ後ナデ	10	反転復原
163	須	杯身	女谷B	13号	墓道 22層	10.3		(2.5)	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ	10	反転復原
164	須	蓋	女谷B	13号	I面	13.2		4.6	灰白	やや粗	軟	ヨコ/ヨコ・天井；回転ケ	100	165の高杯とセット
165	須	高杯	女谷B	13号	I面	11.4	12.0	13.8	灰白	良	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部；回転ケ	100	すかし無し。164の蓋とセット
166	須	蓋	女谷B	13号	I面	13.6		4.9	灰白	やや粗	軟	ヨコ/ヨコ・天井；回転ケ	100	167の高杯とセット
167	須	高杯	女谷B	13号	I面	11.8	12.7	14.0	灰白	良	軟	ヨコ/ヨコ・杯底部；回転ケ	100	すかし無し。166の蓋とセット
168	須	高杯	女谷B	13号	I面	11.6	10.5	11.35	灰白	やや粗	軟	ヨコ/ヨコ・杯底部；回転ケ後ナデ	100	すかし無し
169	須	高杯	女谷B	13号	I面	11.5	9.8	11.8	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部；回転ケ後ナデ	95	すかし無し
170	須	高杯	女谷B	13号	I面	9.8	7.0	7.9	青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部；回転ケ	95	すかし無し
171	須	平瓶	女谷B	13号	I面	5.3		10.8	淡青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・底部；回転ケ	90	
172	須	平瓶	女谷B	13号	I面	4.8		10.4	淡青灰 ～赤灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・カキメ・回転ケ	90	

遺物観察表

173	須	甕	女谷B	13号	墓道 22層	18.8		(41.3)	淡青灰	密	密	ヨコ・同心円 文/ヨコ・タ タキ後一部カ キメ	70	12号墓道出土 の破片と接 合。外面の口 縁～体部に自然 釉
174	土	杯	女谷B	13号	I面	16.2		5.9	橙褐	やや 粗	やや 軟	ヨコ・暗文/ ヨコ・ミガキ	95	内外面とも磨 減著しい。胎 土分析
175	土	甕	女谷B	13号	墓道	18.8		24.0	淡橙褐	やや 粗	やや 軟	ヨコ・ハケ/ ヨコ・ケズ リ・ハケ	95	口縁から体部 上半に黒斑。 胎土分析
176	須	杯蓋	女谷B	14号	Ⅲ面 墓道	12.2		3.85	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;オコシ 後ナデ	85	177の杯身と セット
177	須	杯身	女谷B	14号	Ⅲ面	10.75		4.2	淡灰	やや 粗	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;オコシ 後ナデ	100	176の杯蓋と セット
178	須	杯蓋	女谷B	14号	墓道 36層	12.4		(3.5)	白灰	密	軟	ヨコ/ヨコ・ 回転ケ	10	反転復原。 179の杯身と セットの可能 性有り
179	須	杯身	女谷B	14号	Ⅲ面 墓道 36層	10.25		3.2	白灰	良	軟	ヨコ/ヨコ・ 底部;外周回 転ケ・中央ナ デ	70	178の杯蓋と セットの可能 性有り
180	須	杯蓋	女谷B	14号	I面 墓道 38層	11.4		(3.1)	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ	20	反転復原。 181の杯身と セット
181	須	杯身	女谷B	14号	Ⅲ面	10.9		3.7	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;外周回 転ケ・中央ナ デ	95	180の杯蓋と セット
182	須	杯蓋	女谷B	14号	I・ Ⅲ面	11.0		3.05	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;オコシ 後ナデ	25	反転復原。 183の杯身と セット
183	須	杯身	女谷B	14号	Ⅱ・ Ⅲ面	9.7		3.0	淡灰	やや 粗	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;オコシ 後ナデ	90	182の杯蓋と セット
184	須	杯蓋	女谷B	14号	墓道 11層	11.4		3.15	白灰	やや 粗	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;外周回 転ケ・中央ナ デ	80	
185	須	杯身	女谷B	14号	墓道 28層	9.8		3.5	黄茶灰	密	堅	ヨコ・工具に よるナデ/ヨ コ・底部;オ コシ後ナデ	90	外面に自然釉
186	須	杯身	女谷B	14号	墓道 前面	10.8		(2.8)	淡褐	密	軟	不明/不明	40	内外面とも剥 離・磨減のた め、調整不明
187	須	高杯	女谷B	14号	墓道 29層 ほか	10.9	10.5	14.9	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ	70	2段3方向す かし。上部は 未貫通。杯外 面、柱部の 内・外面に自然 釉
188	須	脚付 壺	女谷B	14号	墓道 11 層・ 墓道 前面	11.0	10.8	18.3	淡灰～ 暗灰	良	やや 堅	ヨコ・ナデ/ ヨコ・カキ メ・ケズリ	90	
189	須	短頸 壺	女谷B	14号	I面	7.0	10.8	8.55	淡青灰	やや 粗	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ	100	
190	須	提瓶	女谷B	14号	Ⅱ面	8.0		20.1	青灰	良	堅	ナデ/ヨコ・ カキメ・回転 ケ	100	口縁部～体部 の外面に自然 釉

191	須	杯蓋	女谷B	15号	Ⅱ面	10.0		3.65	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井；回転ケ後ナデ	100	
192	須	杯蓋	女谷B	15号	Ⅱ面	10.7		3.4	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井；外周回転ケ・中央ナデ	100	
193	須	杯蓋	女谷B	15号	Ⅱ面	10.8		2.85	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井；外周回転ケ・中央粘土充填後ナデ	95	
194	須	杯蓋	女谷B	15号	Ⅱ面	11.0		3.55	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井；オコシ後ナデ	100	ヘラ記号
195	須	杯蓋	女谷B	16号	Ⅰ面	13.0		4.25	白灰	密	軟	ヨコ/ヨコ・天井；回転ケ	100	196の杯身とセット
196	須	杯身	女谷B	16号	Ⅰ面	11.4		3.9	白灰	密	軟	ヨコ/ヨコ・底部；回転ケ	100	195の杯蓋とセット
197	須	杯蓋	女谷B	16号	Ⅰ面	12.8		3.7	白灰	密	軟	ヨコ/ヨコ・天井；回転ケ	100	198の杯蓋と対で枕
198	須	杯蓋	女谷B	16号	Ⅰ面	13.0		4.3	淡灰	密	やや軟	ヨコ/ヨコ・天井；回転ケ	100	外面一部淡黄灰色。197の杯蓋と対で枕
199	須	杯蓋	女谷B	16号	Ⅰ面	13.3		4.3	淡茶褐/灰白	密	やや軟	ヨコ/ヨコ・天井；オコシ後ナデ	45	
200	須	杯身	女谷B	16号	Ⅰ面	11.6		3.65	白灰	密	やや軟	ヨコ/ヨコ・底部；回転ケ	55	
201	須	杯身	女谷B	16号	Ⅰ面	11.8		3.85	淡黄灰	密	軟	ヨコ/ヨコ・底部；回転ケ	100	
202	須	高杯	女谷B	16号	Ⅰ面	10.9	10.7	14.5	淡灰	やや粗	やや軟	ヨコ/ヨコ・杯底部；回転ケ後ナデ	95	2段2方向すかし
203	須	提瓶	女谷B	16号	Ⅰ面	6.4		19.7	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・カキメ	90	外面上部に自然釉
204	須	杯蓋	女谷B	17号	Ⅲ面	13.6		4.1	灰白	良	堅	ヨコ/ヨコ・天井；回転ケ	100	歪み著しく、最小口径12.6cm
205	須	杯蓋	女谷B	17号	Ⅲ面	12.4		3.5	淡青灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・天井；回転ケ	100	外面の一部に自然釉
206	須	杯蓋	女谷B	17号	Ⅲ面	11.4		4.05	明茶褐	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井；回転ケ	100	外面に自然釉
207	須	杯蓋	女谷B	17号	Ⅲ面	12.0		3.25	白灰	密	やや軟	ヨコ/ヨコ・天井；回転ケ	100	
208	須	杯蓋	女谷B	17号	Ⅲ面	12.4		3.85	白灰	密	軟	ヨコ/ヨコ・天井；回転ケ	95	
209	須	杯蓋	女谷B	17号	Ⅲ面	12.4		3.95	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井；回転ケ	100	外面一部暗灰色
210	須	杯蓋	女谷B	17号	Ⅲ面	12.2		3.2	暗青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井；回転ケ	100	
211	須	杯蓋	女谷B	17号	Ⅲ面	11.8		3.35	明茶褐	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井；回転ケズリ後ナデ	100	
212	須	杯蓋	女谷B	17号	Ⅲ面	11.8		3.6	淡緑灰	密	やや堅	ヨコ/ヨコ・天井；回転ケ	100	
213	須	杯蓋	女谷B	17号	Ⅲ面	12.4		(3.75)	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井；オコシ後ナデ	40	外面に自然釉。反転復原
214	須	杯身	女谷B	17号	Ⅲ面	12.2		4.25	暗灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・底部；回転ケ	98	
215	須	杯身	女谷B	17号	Ⅲ面	10.3		3.3	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・底部；回転ケ	100	外面一部に自然釉
216	須	杯身	女谷B	17号	Ⅲ面	10.8		3.7	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・底部；回転ケ	95	歪み著しい。口径10.8~11.5cm

遺物観察表

217	須	杯身	女谷B	17号	Ⅲ面	11.4		4.0	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ	100	内面全体と外面の一部に自然釉
218	須	杯身	女谷B	17号	Ⅲ面	10.8		3.65	橙灰/ 白灰	密	軟	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ	95	219の杯身と対で枕
219	須	杯身	女谷B	17号	Ⅲ面	12.3		3.65	暗青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ	100	218の杯身と対で枕。内面と受け部に自然釉
220	須	杯身	女谷B	17号	Ⅲ面	12.0		4.3	白灰	良	軟	ヨコ・不明/ ヨコ・不明	95	
221	須	蓋	女谷B	17号	Ⅲ面	12.6		4.35	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ 後ヨコ	100	ヘラ記号
222	須	高杯	女谷B	17号	Ⅲ面	12.4	14.4	16.8	白灰	密	軟	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	100	2段2方向すかし。磨滅著しい
223	須	高杯	女谷B	17号	Ⅲ面	12.8	14.2	18.5	淡黄灰	密	軟	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	100	2段2方向すかし
224	須	高杯	女谷B	17号	Ⅲ面	11.7	14.3	17.0	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ・不 明	95	2段3方向すかし。柱部内面~杯底部に自然釉
225	須	高杯	女谷B	17号	Ⅲ面	12.4	15.2	18.7	灰白~ 暗青灰	密	やや 軟	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ	100	2段3方向すかし
226	須	高杯	女谷B	17号	Ⅲ面	12.3	14.4	19.3	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	95	柱部内面から杯底部に自然釉。2段3方向すかし
227	須	高杯	女谷B	17号	Ⅲ面	13.5	15.4	19.2	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	100	2段2方向すかし。杯底部と柱部内面に自然釉
228	須	高杯	女谷B	17号	Ⅲ面	11.0	9.2	13.0	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	100	2段2方向すかし
229	須	高杯	女谷B	17号	Ⅲ面	10.8	9.3	13.7	暗灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	95	底部一部欠。2段2方向すかし。内・外面共に自然釉
230	須	高杯	女谷B	17号	Ⅲ面	10.7	9.6	13.1	暗灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	100	2段2方向すかし。上段の一方、未貫通。杯部内外面・柱部外面に自然釉
231	須	高杯	女谷B	17号	Ⅲ面	10.8	9.0	5.8	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ	100	
232	須	高杯	女谷B	17号	Ⅲ面	10.8	8.8	5.7	淡灰	やや 粗	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	100	
233	須	高杯	女谷B	17号	Ⅲ面	11.0	8.6	5.5	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	100	
234	須	高杯	女谷B	17号	Ⅲ面	10.45	8.9	5.55	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ	100	
235	須	脚付 長頸 壺	女谷B	17号	墓道 35層 通路	8.6		(17.5)	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 壺下半部;回 転ケ	60	
236	須	平瓶	女谷B	17号	Ⅲ面	8.3		13.2	淡灰	やや 粗	堅	ヨコ/ヨコ・ 回転ケ	95	外面体部上半に自然釉

237	須	平瓶	女谷B	17号	Ⅲ面	6.4		15.8	淡青灰	密	堅	ヨコ・ユビ/ ヨコ・カキメ	95	体部外面に自然釉
238	須	平瓶	女谷B	17号	Ⅲ面	4.6		12.3	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ カキメ	100	把手に刻み目あり。外面体部下半に自然釉
239	須	甕	女谷B	17号	Ⅲ面	11.0		13.55	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部；不定方向ナデ・一部布目痕	95	
240	須	提瓶	女谷B	17号	Ⅲ面	7.0		17.15	白灰	密	軟	ヨコ/回転 ケ・ヨコ	90	磨滅著しい
241	須	甕	女谷B	17号	Ⅱ・Ⅲ面 墓道	18.2		(37.0)	淡灰～ 灰白	密	堅	ヨコ・同心円 文/ヨコ・タ タキ後カキメ	70	
242	土	把手付 椀	女谷B	17号	Ⅲ面	14.1		8.0	橙褐	密	堅	ヨコ・暗文/ ヨコ・ミガ キ・ケズリ	100	
243	須	杯蓋	女谷B	18号	I面	12.6		4.05	青灰/ 暗灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井；オコシ 後ナデ	100	244の杯身と対で枕
244	須	杯身	女谷B	18号	I面	10.4		3.9	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部；回転ケ	100	243の杯蓋と対で枕
245	須	杯蓋	女谷B	18号	I面	8.0		2.35	淡灰	密	堅	ヨコ/釉のため 不明	100	外面全体自然釉
246	須	杯身	女谷B	18号	I面	9.5		3.8	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部；回転ケ	100	
247	須	高杯	女谷B	18号	I面	13.4	12.6	17.3	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部；回転 ケ後ナデ	90	2段3方向すかし
248	須	高杯	女谷B	18号	I面	13.65	16.5	19.1	淡青灰 ～暗青 灰	良	やや 軟	ヨコ/ヨコ・ 杯底部；回転 ケ	95	2段3方向すかし。柱部内面と杯底部に自然釉
249	須	高杯	女谷B	18号	I面	12.2	14.1	16.2	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部；回転 ケ	100	2段2方向すかし。外面に自然釉
250	須	高杯	女谷B	18号	I面	12.4	13.7	15.4	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部；回転 ケ後ナデ	95	外面に自然釉
251	須	高杯	女谷B	18号	I面	13.1	12.6	14.3	淡茶褐 /淡青 灰～青 灰	密	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部から柱 部；カキメ	95	2段2方向すかし
252	須	高杯	女谷B	18号	I面	12.6	12.6	15.0	淡茶褐 /淡青 灰～青 灰	密	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部から柱 部；カキメ	95	2段2方向すかし
253	須	提瓶	女谷B	18号	I面	5.4		11.85	茶灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ ユビ・回転ケ	100	
254	須	横瓶	女谷B	18号	I面	9.0		17.5	淡青灰	良	堅	ヨコ/カキ メ・口縁；ヨ コ	95	外面に自然釉
255	須	甕	女谷B	18号	墓道 10・ 11層	34.7		(62.5)	茶灰/ 暗灰	密	堅	ヨコ・同心円 文/ヨコ・ハ ケ・タタキ後 カキメ	75	口縁内面および口縁～肩部外面に自然釉
256	土	甕	女谷B	18号	墓道 18層	13.9		15.4	淡黄褐	密	堅	ヨコ・ハケ目 /ヨコ・ハケ 目後ナデ	80	外面、口縁から体部上半にかけて黒斑
257	須	杯身	女谷C	1号	I面	12.3		3.7	淡橙灰 /灰白	良	軟	ヨコ/ヨコ・ 底部；回転ケ	98	
258	須	杯身	女谷C	1号	I面	11.6		(2.4)	淡灰	良	やや 堅	ヨコ/ヨコ	20	

遺物観察表

259	須	杯身	女谷C	1号	I面	10.3		(3.35)	淡灰/ 淡青灰	やや 粗	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;外周回 転ケ	30	
260	須	杯身	女谷C	1号	I面	11.1		3.6	暗灰/ 淡灰	やや 粗	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ	95	外面底部に自然 釉
261	須	脚部	女谷C	1号	I面		13.6	(4.5)	青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ	10	長頸壺の脚部 か
262	須	蓋	女谷C	1号	I面	10.2		3.3	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ	100	内面および外 面口縁の一部 に自然釉。ヘ ラ記号。263 の短頸壺と セット
263	須	短頸 壺	女谷C	1号	I面	9.2		8.1	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;外周回 転ケ	100	焼成後に穿 孔。外面底部 に自然釉。 262の蓋と セット
264	須	提瓶	女谷C	1号	I面	5.8		17.7	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 回転ケ・ナデ	100	口縁内部およ び外面側面に 自然釉。ヘラ 記号
265	須	平瓶	女谷C	1号	I面		20.4	(14.8)	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ後 カキメ・タタ キ	90	体部上半に自 然釉。底径は 最大腹径
266	土	高杯	女谷C	1号	I面	13.05		(5.05)	黄橙褐	良	やや 軟	ヨコ・ナデ/ ヨコ・杯底 部;ナデ	50	磨減著しい。 269の高杯と 対で枕か
267	土	高杯	女谷C	1号	I面	14.1		(4.7)	黄橙褐 ~赤橙 褐	良	軟	ヨコ・ナデ/ ヨコ・杯底 部;ハケ後ナ デ	50	磨減著しい
268	土	高杯	女谷C	1号	I面	13.3		(4.9)	淡黄褐	やや 粗	やや 軟	ヨコ・ユビ後 ナデ/ヨコ・ ケズリ・ナデ	50	胎土分析
269	土	高杯	女谷C	1号	I面	13.8		(5.2)	淡黄褐	やや 粗	やや 軟	ヨコ・ユビ後 ナデ/ヨコ・ ケズリ・ナデ	50	266の高杯と 対で枕か
270	土	甕	女谷C	1号	I面	14.0		15.9	黄褐	良	やや 堅	ヨコ・ハケ・ ナデ/ヨコ・ ハケ・底部; ケズリ	95	胎土分析
271	須	杯蓋	女谷C	2号	II面	11.3		3.6	青灰	やや 粗	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;オコシ 後ナデ	100	
272	須	杯身	女谷C	2号	II面	9.7		3.4	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;オコシ 後ナデ	100	外面全体自然 釉
273	須	杯身	女谷C	2号	II面	10.2		3.85	淡灰	やや 粗	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;オコシ 後ナデ	100	
274	須	杯身	女谷C	2号	II面	10.4		3.65	淡灰	やや 粗	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;外周回 転ケ・中央ナ デ	100	
275	須	高杯	女谷C	2号	II面	10.4	8.8	11.9	淡青灰/ 淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	50	外面・側面に 自然釉
276	須	高杯	女谷C	2号	II面	10.8	9.5	11.8	淡青灰	良	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	95	
277	須	脚付 壺	女谷C	2号	I面	10.8	13.0	18.0	淡灰~ 暗灰	やや 粗	堅	ヨコ/ヨコ・ カキメ・壺底 部;回転ケ後 ナデ	100	
278	土	杯	女谷C	2号	II面	13.8		3.4	橙褐	密	やや 堅	ヨコ・ユビ・ ミガキ/ヨ コ・ユビ	100	

279	土	杯	女谷C	2号	Ⅱ面	13.4		3.9	橙褐	密	やや堅	ヨコ・ユビ・ミガキ/ヨコ・ユビ	100	
280	土	杯	女谷C	2号	Ⅱ面	13.5		3.6	橙褐	密	やや堅	ヨコ・ユビ・ミガキ/ヨコ・ユビ	100	
281	土	杯	女谷C	2号	Ⅱ面	13.5		3.4	橙褐	密	堅	ヨコ・ユビ・ミガキ/ヨコ・ユビ	100	
282	土	杯	女谷C	2号	Ⅱ面	13.4		3.9	橙褐	良	堅	ヨコ・ユビ・ミガキ/ヨコ・ユビ	100	
283	土	杯	女谷C	2号	Ⅱ面	13.6		3.65	橙褐	密	堅	ヨコ・ユビ・ミガキ/ヨコ・ユビ	100	
284	土	杯	女谷C	2号	Ⅱ面、墓道33層上面	13.4		3.8	赤褐	良	軟	不明/不明	100	内外面とも磨減著しい
285	須	杯蓋	女谷C	3号	Ⅱ面	13.2		4.9	灰白	やや粗	軟	ヨコ/ヨコ・天井;回転ケ	100	
286	須	杯身	女谷C	3号	Ⅱ面	11.0		4.2	灰白	良	軟	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ後ナデ	100	
287	須	杯身	女谷C	3号	Ⅱ面	10.6		3.9	灰白	やや粗	軟	ヨコ/ヨコ・回転ケ後ナデ	100	
288	須	杯身	女谷C	3号	I面	11.0		3.75	灰白	良	軟	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ	100	289の杯身と対で枕
289	須	杯身	女谷C	3号	I面	10.7		4.0	灰白	良	やや軟	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ	100	288の杯身と対で枕
290	須	高杯	女谷C	3号	Ⅱ面	10.7	9.4	14.2	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ後ヨコ	95	2段2方向すかし
291	須	短頸壺	女谷C	3号	墓道12層	6.4		7.65	淡灰白	密	堅	ヨコ/ヨコ・回転ケ	100	外面底部に自然釉
292	須	平瓶	女谷C	3号	墓道12層	不明		(13.9)	淡青灰	良	やや堅	ヨコ/カキメ・回転ケ	90	
293	須	提瓶	女谷C	3号	I面	(頸径)5.5		(21.4)	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・カキメ・ナデ	55	外面肩部に自然釉
294	土	高杯	女谷C	3号	Ⅱ面	12.3	11.1	7.1	黄橙褐	良	やや堅	ヨコ/ヨコ・杯底部;ケズリ・ナデ	95	杯底部に指紋
295	土	杯	女谷C	4号	I面	13.2		3.3	橙茶褐	良	軟	ヨコ・ユビ・不明/ヨコ・ユビ・不明	100	全体に磨減
296	土	杯	女谷C	4号	I面	13.0		3.3	橙茶褐	良	軟	ヨコ・ユビ・不明/ヨコ・ユビ	100	
297	土	杯	女谷C	4号	I面	13.3		3.5	橙茶褐	良	軟	ヨコ・ユビ・不明/ヨコ・ユビ	100	全体に磨減
298	土	杯	女谷C	4号	I面	13.6		3.45	橙褐	良	やや軟	ヨコ・ユビ・不明/ヨコ・ユビ	100	全体に磨減。胎土分析
299	土	杯	女谷C	4号	I面	13.6		3.15	橙茶褐	良	軟	ヨコ・ユビ・ミガキ/ヨコ・ユビ	100	
300	土	甕	女谷C	4号	I面	14.0		15.3	淡黄褐	密	堅	ヨコ・ハケ・ユビ/ヨコ・ハケ・ケズリ	100	胎土分析
301	須	杯蓋	女谷C	5号	I面	13.2		4.0	淡茶灰/淡灰	良	やや堅	ヨコ/ヨコ・天井;回転ケ	95	302の杯身とセット

遺物観察表

302	須	杯身	女谷C	5号	I面	11.8		3.85	淡灰	密	やや堅	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ	100	301の杯蓋とセット。人骨19の枕
303	須	杯蓋	女谷C	5号	I面	12.2		4.15	淡青灰~暗青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・天井;外周回転ケ・中央ナデ	100	304の杯身とセット
304	須	杯身	女谷C	5号	I面	11.1		3.85	暗灰~暗青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ	100	303の杯蓋とセット
305	須	杯蓋	女谷C	5号	I面	12.6		3.8	暗灰/淡青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・天井;回転ケ	100	306の杯身とセット
306	須	杯身	女谷C	5号	I面	11.4		3.9	暗灰~青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ	100	305の杯蓋とセット
307	須	杯蓋	女谷C	5号	I面	12.5		4.25	暗灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井;回転ケ	70	
308	須	杯身	女谷C	5号	I面	10.7		3.7	暗灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ後ナデ	100	外面に一部自然釉
309	須	杯身	女谷C	5号	I面	12.1		4.3	灰白	良	軟	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ	100	
310	須	杯身	女谷C	5号	I面	11.6		4.2	灰白/橙白	密	軟	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ後ナデ	100	
311	須	蓋	女谷C	5号	I面	14.8		(5.0)	黒灰	密	軟	ヨコ/ヨコ・不明	90	磨滅著しい。312の蓋と対で枕
312	須	蓋	女谷C	5号	I面	15.2		5.2	淡黄褐/黒灰	密	軟	ヨコ/ヨコ・不明	100	外面磨滅著しい。311の蓋と対で枕
313	須	蓋	女谷C	5号	I面	13.3		4.3	白灰/淡黄灰	やや粗	軟	ヨコ/ヨコ	100	
314	須	高杯	女谷C	5号	I面	12.7	13.0	16.5	灰白	良	軟	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ後ナデ	95	2段2方向すかし
315	須	高杯	女谷C	5号	I面	12.6	11.0	13.0	灰白	密	軟	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ	80	2段2方向すかし
316	須	高杯	女谷C	5号	I面	11.2	9.8	14.2	淡黄灰	良	やや軟	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ後ナデ	100	2段2方向すかし
317	須	壺	女谷C	5号	I面	11.7		13.0	淡黄灰	良	やや軟	ヨコ/	95	
318	須	平瓶	女谷C	5号	I面	5.1		14.2	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・カキメ・体部中心部;ナデ	100	
319	須	平瓶	女谷C	5号	I面	4.5		14.2	淡灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・カキメ	90	
320	須	提瓶	女谷C	5号	I面	2.9		8.2	暗灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ケズリ後ナデ	100	303・307の下から出土のため出土状況図なし。体部上半に自然釉
321	須	提瓶	女谷C	5号	I面			(21.2)	赤茶灰	良	堅	ヨコ・ナデ/ヨコ・カキメ	95	焼成時に土器片附着(焼成時の台)。肩部~胴下半部にかけて自然釉
322	土	高杯	女谷C	5号	I面	13.8	9.6	9.4	淡黄褐	良	軟	ヨコ・ナデ/ヨコ・杯底部;ハケ後ナデ	100	
323	土	甕	女谷C	5号	I面	12.8		14.0	淡黄褐	密	やや堅	ヨコ・ハケ・体部下半から底部;ケズリ	100	外面体部の一部に黒斑有り

324	土	椀	女谷C	5号	I面	12.0		4.5	黄橙褐	粗	軟	ヨコ・ユビ後 ナデ/ヨコ・ ユビ後ナデ	100	内面に炭化物 付着。4条の 粘土継目。磨 減著しい
325	土	皿	女谷C	5号	墓道 上面	4.8		(1.1)	黄橙褐	やや 粗	やや 軟	ナデ/ユビ後 ナデ	50	
326	須	杯蓋	女谷C	6号	I面	11.3		3.9	淡灰/ 淡青灰	粗	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ 後ナデ	100	327の杯身と セット。330 の杯蓋と対で 枕か
327	須	杯身	女谷C	6号	I面	9.9		4.0	淡青灰	やや 粗	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ 後ナデ	100	326の杯蓋と セット。329 の杯身と対で 枕
328	須	杯蓋	女谷C	6号	II面	12.3		3.8	淡青灰 ~淡灰	やや 粗	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;外周回 転ケ・中央ナ デ	100	329の杯身と セット
329	須	杯身	女谷C	6号	I面	10.6		3.6	淡灰	やや 粗	やや 軟	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ	100	328の杯蓋と セット。327 の杯身と対で 枕
330	須	杯蓋	女谷C	6号	I面	12.0		3.7	淡灰	やや 粗	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;オコシ 後ユビナデ	100	口縁部内面に 木の葉の圧 痕。326の杯 蓋と対で枕か
331	須	杯蓋	女谷C	6号	I面	11.3		3.8	淡灰	やや 粗	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ 後ヘラ調整	100	
332	須	杯身	女谷C	6号	III面	11.0		3.5	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;外周回 転ケ・中央ナ デ	100	
333	須	高杯	女谷C	6号	I面	11.6	10.4	10.4	淡青灰	良	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	95	すかし無し。 杯内面および 外面・柱部内 面に自然釉
334	須	高杯	女谷C	6号	I面	11.8	11.4	13.0	灰白/ 淡灰	密	やや 軟	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	80	
335	須	蓋	女谷C	6号	II面	10.0		3.7	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ	100	外面に自然釉
336	須	平瓶	女谷C	6号	I面	6.4		11.55	淡灰	やや 粗		ヨコ・ナデ/ ヨコ・底部; 回転ケ後ナデ	100	外面上半およ び口縁内部に 自然釉
337	須	提瓶	女谷C	6号	II面			(22.1)	淡灰~ 暗灰	密	堅	ヨコ・ナデ/ ナデ・カキメ	90	外面に自然釉
338	須	甕	女谷C	6号	III面	19.8		40.9	暗灰	良	堅	ナデ・同心円 文/タタキ・ カキメ	100	口縁部と外面 肩部に自然釉
339	土	高杯	女谷C	6号	I・ II面	14.2	9.6	11.6	茶褐	良	やや 軟	ヨコ・指オサ エ後ナデ/ヨ コ・杯部;指 オサエ後ナ デ・柱部;ケ ズリ後ナデ	60	外面および柱 部に黒斑付 着。胎土分析
340	土	椀	女谷C	6号	II面	11.8		5.1	淡橙茶 褐/黄 橙褐	やや 粗	やや 軟	ヨコ・ナデ/ ヨコ・ハケ	100	
341	須	杯身	女谷B	墓地 通路	路面	11.9		4.2	青灰	やや 粗	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ	70	
342	須	杯蓋	女谷B	墓地 通路	路面	13.2		(3.4)	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ	15	外面に自然 釉。反転復原
343	須	杯身	女谷B	墓地 通路	路面	10.4		(4.6)	淡青灰	良	やや 軟	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ	40	反転復原

遺物観察表

344	須	高杯	女谷B	墓地 通路	路面		10.0	(5.3)	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ	20	4方向すかし 有り。反転復 原
345	須	脚付 壺	女谷B	墓地 通路	路面	5.4		(8.4)	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 壺底部；回転 ケ	20	外面体部上半 に自然釉。口 径は頸部径。 反転復原
346	須	脚付 長頸 壺	女谷B	墓地 通路	路面	18.4		(8.4)	淡灰/ 暗青灰	良	堅	ヨコ・ユビ/ ヨコ・カキ メ・壺底部； 回転ケ	15	口径は最大復 径
347	須	直口 壺	女谷C	墓地 通路	路面	7.0		10.4	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部；カキメ	30	外面上半部に 自然釉
348	須	臙	女谷B	墓地 通路	路面	10.2		(5.0)	灰白	密	堅	ヨコ/ヨコ	10	
349	須	臙	女谷B	墓地 通路	路面	6.5		(12.4)	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ	25	口径は頸部径
350	須	臙	女谷B	墓地 通路	路面	10.0		(12.6)	淡青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ	40	口縁内面から 外面体部上半 に自然釉
351	須	臙	女谷B	墓地 通路	路面	6.4		(7.7)	淡青灰	密	堅	ヨコ・ヘラに よる調整/ヨ コ	25	口径は頸部径
352	須	臙	女谷B	墓地 通路	路面	8.0	12.3	(10.2)	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ カキメ・壺体 部・腹部；櫛 描列点文の後 にナデ消す	30	口径は頸部 径。底径は腹 径。内・外面 に自然釉
353	須	甕	女谷B	墓地 通路	路面	14.2		(2.6)	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ	15	残存率は口縁 部の割合
354	須	杯蓋	荒坂A	23号	I面	12.0		4.2	淡灰	密	軟	ヨコ/ヨコ・ 天井；オコシ 後ナデ	100	
355	土	壺	荒坂A	23号	墓道 12層	11.0		8.6	淡黄褐	やや 粗	軟	ナデ・ユビ/ ハケ・ヨコ	95	
356	須	杯蓋	荒坂A	24号	I面	10.8		3.65	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井；オコシ 後ユビナデ	100	外面口縁端部 に自然釉
357	須	杯蓋	荒坂A	24号	I面	10.8		3.4	黄灰	密	軟	ヨコ・磨滅の 為不明/ヨ コ・磨滅の為 不明	60	内外面共に磨 滅
358	須	杯蓋	荒坂B	1号	II面	15.25		4.65	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井；回転ケ 後ナデ	100	359の杯身と セット
359	須	杯身	荒坂B	1号	II面	13.3		4.4	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部；回転ケ	100	358の杯蓋と セット
360	須	杯蓋	荒坂B	1号	I面	14.0		4.2	淡黄灰	やや 粗	軟	ヨコ/ヨコ・ 天井；回転ケ	100	磨滅著しい。 361の杯身と セット
361	須	杯身	荒坂B	1号	I面	13.0		4.2	淡黄灰	良	軟	ヨコ/ヨコ・ 不明	100	磨滅著しい。 360の杯蓋と セット
362	須	杯蓋	荒坂B	1号	I面	13.9		4.35	灰白	やや 粗	軟	ヨコ/ヨコ・ 天井；回転ケ	90	磨滅著しい
363	須	杯蓋	荒坂B	1号	II面	14.8		4.2	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井；回転ケ 後ナデ	100	外面に自然釉
364	須	杯蓋	荒坂B	1号	I面	14.7		4.1	淡黄灰/ 灰白	良	軟	ヨコ/ヨコ・ 天井；回転ケ	100	
365	須	杯蓋	荒坂B	1号	I面	14.8		4.1	黄灰/ 灰白	良	軟	ヨコ/ヨコ・ 天井；回転ケ	100	内面磨滅著し い
366	須	杯蓋	荒坂B	1号	I面	13.8		3.8	灰白	良	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 天井；回転ケ	100	口縁端部に篋 描沈線。ヘラ 記号か
367	須	杯身	荒坂B	1号	I面	12.8		3.5	淡黄褐	粗	軟	ヨコ/ヨコ・ 底部；回転ケ	100	

368	須	杯身	荒坂B	1号	I面	12.35		3.65	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ	100	
369	須	杯身	荒坂B	1号	II面	12.9		4.0	淡青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ	95	外面に自然釉
370	須	杯身	荒坂B	1号	I面	13.2		3.8	淡黄灰	密	軟	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ	95	
371	須	杯身	荒坂B	1号	I面	12.5		4.0	黄灰	粗	軟	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ	90	磨滅著しい
372	須	高杯	荒坂B	1号	I面	11.7	12.2	16.5	淡灰~ 赤灰	良	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	100	2段3方向す かし
373	須	高杯	荒坂B	1号	I・ II面	12.95	7.1	8.1	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ	95	柱部と杯部の 中心がずれる
374	須	直口 壺	荒坂B	1号	I面	9.4		12.6	灰白	良	軟	ヨコ/ヨコ・ カキメ・回転 ケ	95	
375	須	長頸 壺	荒坂B	1号	I面	9.0		16.1	淡茶灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 回転ケ	100	底部に焼成後 の穿孔あり
376	須	蓋	荒坂B	1号	I面	7.1		2.8	淡灰/ 淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ 後ナデ	60	
377	須	長頸 壺	荒坂B	1号	I面	8.8		17.7	暗灰	良	やや 軟	ヨコ/ヨコ・ 回転ケ後ナデ	100	
378	須	脚付 長頸 壺	荒坂B	1号	I面	9.8	13.4	24.5	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 壺底部;カキ メ	100	3方向すかし
379	須	提瓶	荒坂B	1号	I面	5.6		21.2	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ カキメ	95	
380	須	提瓶	荒坂B	1号	I面			(18.1)	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ カキメ	90	
381	須	蓋	荒坂B	2号	I面	15.4		5.6	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ 後ナデ	98	外面に自然 釉。382の高 杯とセット
382	須	高杯	荒坂B	2号	I面	13.0	13.6	23.6	淡青灰 ~暗青 灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	100	2段3方向す かし。381の 蓋とセット
383	須	高杯	荒坂B	2号	I面	12.5	11.4	19.05	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	100	内面全体と柱 部外面に自然 釉。2段3方 向すかし
384	須	高杯	荒坂B	2号	I面	14.0	9.0	11.75	青灰~ 暗青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	100	内面全体と外 面柱部に自然 釉。ヘラ記号
385	須	高杯	荒坂B	2号	I面	14.3	9.0	10.85	暗灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	100	3方向に筋状 のすかし。未 貫通
386	須	高杯	荒坂B	2号	I面	14.15	9.7	10.9	暗青灰 ~暗灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	100	柱部外面に自 然釉
387	須	高杯	荒坂B	2号	I面	13.7	10.0	13.4	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	100	1段3方向す かし
388	須	提瓶	荒坂B	2号	I面	7.1		18.3	灰白	密	堅	ヨコ/ヨコ・ カキメ・回転 ケ	100	ヘラ記号
389	須	甕	荒坂B	2号	I面	14.8		18.0	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 回転ケ後ナデ	100	内面に自然釉
390	須	甕	荒坂B	2号	墓道	23.0		(10.6)	暗灰	良	堅	ヨコ・同心円 文/ヨコ・タ タキ後カキメ	35	口縁部内面~ 外面肩部に自 然釉。反転復 原
391	土	壺	荒坂B	2号	I面	9.8		11.8	橙褐	密	軟	ヨコ・口縁 部;ミガキ・ ナデ/ヨコ・ ユビ・体部; ミガキ	100	磨滅著しい

遺物観察表

392	土	甕	荒坂B	2号	I面	10.8		13.0	淡黄茶	密	堅	ヨコ・口縁部；ハケ・体部；ケズリ／ヨコ・ユビ後ハケ	100	磨減著しい
393	須	杯蓋	荒坂B	3号	I面	13.6		4.5	淡黄灰～淡灰	粗	堅	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ	70	394の杯身とセット
394	須	杯身	荒坂B	3号	I面	12.1		3.9	淡灰	やや粗	堅	ヨコ／ヨコ・底部；回転ケ後ナデ	100	外面底部に自然釉。393の杯蓋とセット
395	須	杯蓋	荒坂B	3号	I面	13.4		3.7	淡灰	やや粗	堅	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ	100	
396	須	杯蓋	荒坂B	3号	II面	13.0		3.4	淡灰	良	堅	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ	100	外面一部に自然釉
397	須	杯身	荒坂B	3号	I面	12.7		4.0	淡茶灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・底部；回転ケ	100	外面の一部に自然釉
398	須	杯身	荒坂B	3号	I面	11.6		4.0	淡茶灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・底部；回転ケ	100	底部外面に自然釉
399	須	杯身	荒坂B	3号	I面	11.6		3.8	淡灰	密	やや軟	ヨコ／ヨコ・底部；回転ケ	70	
400	須	杯身	荒坂B	3号	II面	12.8		3.4	淡茶灰／淡灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・底部；回転ケ	100	外面全体自然釉。底部歪み有り
401	須	杯身	荒坂B	3号	墓道	12.8		3.5	淡灰	やや粗	堅	ヨコ／ナデ・底部；回転ケ	30	反転復原
402	須	杯身	荒坂B	3号	墓道	13.0		3.15	淡灰	やや粗	堅	ヨコ／ヨコ・回転ケ	60	
403	須	高杯	荒坂B	3号	III面	13.8		(4.4)	灰白	良	やや堅	ヨコ／ヨコ・回転ケ	30	反転復原
404	須	高杯	荒坂B	3号	II面	12.1	12.0	17.7	淡青灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・回転ケ	90	
405	須	高杯	荒坂B	3号	I・II面閉塞部23層	12.5	11.6	16.5	淡灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・杯底部；回転ケ後ナデ	60	反転復原。柱部外面に自然釉。2段2方向すかし
406	須	高杯	荒坂B	3号	I面	11.6		(14.8)	黒灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・杯底部；回転ケ後ナデ	70	2段3方向すかし
407	須	高杯	荒坂B	3号	III面	11.9	13.3	14.5	淡茶灰	良	堅	ヨコ／ヨコ・杯底部；回転ケ後ナデ	100	2段3方向すかし。杯部内面および外面に自然釉
408	須	高杯	荒坂B	3号	I面	12.6	10.2	14.1	茶灰～青灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・杯底部；回転ケ後ナデ	100	2段2方向すかし
409	須	蓋	荒坂B	3号	I面	13.1		4.7	淡灰	良	やや軟	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ後ナデ	100	410の高杯とセット
410	須	高杯	荒坂B	3号	I面	11.2	14.4	16.05	淡灰	良	やや堅	ヨコ／ヨコ・杯底部；回転ケ	100	2段2方向すかし。杯底部から柱部全体に自然釉。409の蓋とセット
411	須	蓋	荒坂B	3号	I面	13.2		5.3	淡灰／青灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ後ナデ	80	412の高杯とセット
412	須	高杯	荒坂B	3号	I面	12.0	15.0	16.4	淡青灰	良	堅	ヨコ／ヨコ・杯底部；回転ケ後ナデ	100	2段2方向すかし。411の蓋とセット
413	須	蓋	荒坂B	3号	I面	14.4		4.7	淡灰／暗灰	良	堅	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ	50	外面一部に自然釉
414	須	高杯	荒坂B	3号	I面	11.85	14.6	15.45	暗黄灰	密	軟	ヨコ／ヨコ・杯底部；回転ケ後ナデ	95	底部一部欠。2段2方向すかし

415	須	蓋	荒坂B	3号	I面	15.8		3.7	淡灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ	25	反転復原。羨道より出土。出土図なし
416	須	高杯	荒坂B	3号	I面	14.6	13.8	14.4	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部；回転ケ後ナデ	80	2段2方向すかし
417	須	蓋	荒坂B	3号	I面	7.3		3.4	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井；回転ケ	95	418の短頸壺とセット
418	須	脚付短頸壺	荒坂B	3号	I面	4.8	12.1	18.7	淡灰	密	やや堅	ヨコ/ヨコ・壺底部；回転ケ後ナデ	95	2段3方向すかし。417の蓋とセット
419	須	脚付長頸壺	荒坂B	3号	I・II・III面	11.0	14.0	(26.9)	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・壺底部；回転ケ	80	外面に自然釉。2段3方向すかし
420	須	脚付広口壺	荒坂B	3号	I面	10.8	13.0	19.9	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・壺底部；回転ケ後ナデ	85	1段3方向すかし。口縁内部と外面肩部に自然釉
421	須	提瓶	荒坂B	3号	II面	5.3		18.2	青灰	良	堅	ナデ/ヨコ・カキメ	75	
422	須	提瓶	荒坂B	3号	I・II面	7.5		20.9	淡黄灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・回転ケ	70	焼成時にほかの土器が釉着。I面・羨道出土の破片と接合
423	須	提瓶	荒坂B	3号	II面	5.5		20.1	青灰～淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・カキメ	95	
424	須	提瓶	荒坂B	3号	II面	7.2		20.2	淡青灰/淡青灰	良	堅	ヨコ・ナデ/ヨコ・回転ケ	80	焼成時に台として用いた土器片が胴部に付着。外面に自然釉
425	須	横瓶	荒坂B	3号	閉塞部23層			(8.5)	青灰	やや粗	堅	ヨコ/回転ケ・回転ナデ	10	
426	土	把手付椀	荒坂B	3号	I面	10.8		6.8	橙褐	密	堅	ヨコ・ミガキ/ヨコ・ミガキ・ユビ・ケズリ	95	胎土分析
427	土	甕	荒坂B	3号	III面	11.6		14.1	淡橙褐	やや粗	やや軟	ヨコ・ハケ・ケズリ/ヨコ・ユビ・ハケ	90	底部磨滅著しい
428	須	杯蓋	荒坂B	4号	I面	14.45		4.35	白灰	密	やや堅	ヨコ/ヨコ・天井；回転ケ後ナデ	100	429の杯身とセット
429	須	杯身	荒坂B	4号	I面	13.05		4.3	白灰/淡灰	密	やや堅	ヨコ/ヨコ・底部；回転ケ後ナデ	100	428の杯蓋とセット
430	須	杯蓋	荒坂B	4号	I面	14.15		4.4	暗灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・天井；回転ケ	100	438の杯身と対で枕
431	須	杯蓋	荒坂B	4号	I面	14.2		3.85	淡黄灰/白灰～青灰	密	やや堅	ヨコ/ヨコ・天井；回転ケ	100	
432	須	杯蓋	荒坂B	4号	墓道前面	13.8		4.0	淡黄灰	良	堅	ヨコ・タタキ当具/ヨコ・天井；回転ケ	40	反転復原
433	須	杯蓋	荒坂B	4号	I面	13.25		3.55	淡灰/青灰	良	やや堅	ヨコ/ヨコ・天井；オコシ後ナデ	100	
434	須	杯身	荒坂B	4号	墓道45層	12.95		4.2	淡灰	やや粗	やや堅	ヨコ/ヨコ・底部；回転ケ	80	
435	須	杯身	荒坂B	4号	I面	12.95		3.45	淡灰	密	やや堅	ヨコ/ヨコ・底部；回転ケ	100	
436	須	杯身	荒坂B	4号	I面	12.3		3.6	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・底部；回転ケ	90	

遺物観察表

437	須	杯身	荒坂B	4号	I面	12.45		3.7	淡灰/ 淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ	90	
438	須	杯身	荒坂B	4号	I面	11.35		3.7	暗灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ	100	430の杯蓋と 対で枕
439	須	蓋	荒坂B	4号	I面	15.6		5.6	淡青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ	100	
440	須	蓋	荒坂B	4号	I面	15.75		5.05	淡青灰	良	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ	100	441の高杯と セット
441	須	高杯	荒坂B	4号	I面	14.05	14.3	18.7	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	90	2段3方向す かし。440の 蓋とセット
442	須	高杯	荒坂B	4号	I面	13.9	14.4	17.5	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ	100	2段3方向す かし。歪み著 しい。杯外面 および脚部に 自然釉
443	須	高杯	荒坂B	4号	墓道	11.6		(13.8)	淡青灰 ~暗青 灰	やや 粗	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	30	2段2方向す かし。杯外面 および脚部に 自然釉
444	須	直口 壺	荒坂B	4号	墓道 前面	5.0		(5.8)	淡青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ	25	外面肩部に自 然釉
445	須	壺	荒坂B	4号	I面	17.0		24.3	淡灰~ 淡青灰	良	堅	ヨコ・ナデ/ ヨコ・カキ メ・底部;ケ ズリ後カキメ	95	
446	須	横瓶	荒坂B	4号	墓道 51層			(17.7)	淡青灰 ~黒灰	やや 粗	堅	ヨコ・ユビ/ ヨコ・回転 ケ・ナデ	50	
447	土	皿	荒坂B	4号	玄門 部15 層	16.0		3.55	淡褐	密	やや 軟	ヨコ/ナデ・ ユビ	20	
448	須	杯蓋	荒坂B	5号	I面	14.75		4.9	灰白/ 淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ	100	449の杯身と セット
449	須	杯身	荒坂B	5号	I面	13.5		4.35	淡灰~ 灰白色	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ 後ナデ	100	448の杯蓋と セット
450	須	杯蓋	荒坂B	5号	I面	15.0		4.35	淡青灰	密	堅	ヨコ・ヘラ調 整/ヨコ・天 井;回転ケ	100	
451	須	杯蓋	荒坂B	5号	I面	14.8		4.4	淡青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ	100	ヘラ記号
452	須	杯蓋	荒坂B	5号	I面	14.2		4.2	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ 後ナデ	100	外面に自然釉
453	須	杯蓋	荒坂B	5号	I面	13.8		4.1	青灰	やや 粗	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ	100	外面に自然釉
454	須	杯身	荒坂B	5号	I面	13.4		4.55	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ	100	
455	須	杯身	荒坂B	5号	I面	14.0		4.4	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ 後ナデ	100	
456	須	高杯	荒坂B	5号	I面	12.4	10.5	18.5	淡青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ	100	2段3方向す かし
457	須	蓋	荒坂B	5号	I面	9.95		3.2	暗灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ	100	外面体部上半 に自然釉
458	須	蓋	荒坂B	5号	I面	11.0		3.5	青灰/ 淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ	100	459の短頸壺 とセット
459	須	短頸 壺	荒坂B	5号	I面	8.3		8.8	淡青灰	密	堅	ヨコ・ナデ/ ヨコ・カキ メ・回転ケ	100	体部~肩部の 外面に自然 釉。458の蓋 とセット
460	須	短頸 壺	荒坂B	5号	I面	7.8		7.9	淡青灰	密	堅	ヨコ・ヘラ調 整/ヨコ・回 転ケ	100	

461	須	短頸壺	荒坂B	5号	I面	7.5		10.0	淡灰	密	堅	ヨコ・ナデ／ヨコ・ケズリ後一部ナデ	100	体部上半部分に自然釉
462	須	短頸壺	荒坂B	5号	I面	7.6		9.15	淡灰	良	堅	ヨコ／ヨコ・回転ケ	100	口縁部歪み著しい。体部～肩部に自然釉
463	須	蓋	荒坂B	5号	I面	6.4		3.8	淡灰～赤灰	良	やや堅	ヨコ／ヨコ	100	
464	須	脚付長頸壺	荒坂B	5号	I面	9.2	12.4	26.6	赤灰	良	やや軟	ヨコ／ヨコ・壺底部；回転ケ後ナデ・カキメ	100	1段3方向すかし
465	須	壺	荒坂B	5号	I面	16.6		24.0	淡茶灰	良	堅	ヨコ・ナデ・同心円文／ヨコ・タタキ後カキメ	98	
466	須	壺	荒坂B	5号	I面	18.2		27.6	淡青灰	密	堅	ヨコ・ナデ・同心円文／ヨコ・タタキ後ケズリ・底部；タタキ	100	
467	須	蓋	荒坂B	5号	I面	4.2		2.95	淡灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ	100	外面に自然釉。468の脚杯長頸壺とセット
468	須	脚付長頸壺	荒坂B	5号	I面	11.1	13.0	26.65	淡灰～淡茶灰	良	堅	ヨコ／ヨコ・壺底部；回転ケ	100	外面部・体部に自然釉。1段3方向すかし。467の蓋とセット
469	須	脚付長頸壺	荒坂B	5号	I面	9.5	13.3	30.45	青灰～暗青灰	良	堅	ヨコ／ヨコ・壺底部；回転ケ	95	1段3方向すかし
470	須	脚付長頸壺	荒坂B	5号	I面	8.4	14.2	28.8	淡灰～青灰	良	堅	ヨコ／ヨコ・壺底部；回転ケ・ナデ	100	2段3方向すかし。下段は三角形
471	須	提瓶	荒坂B	5号	I面	6.9		16.4	暗灰	良	堅	ヨコ／ヨコ・カキメ・ケズリ	100	
472	土	高杯	荒坂B	5号	I面	12.0	9.7	10.8	淡橙褐	粗	軟	ヨコ／ヨコ・杯底部；ユビ後ナデ	90	磨滅著しい
473	土	高杯	荒坂B	5号	I面	11.1	9.4	10.0	橙褐	粗	軟	ヨコ・ナデ／ヨコ・ユビ・ナデ	90	磨滅著しい
474	土	脚付小壺	荒坂B	5号	I面	6.9		(13.2)	淡黄橙褐	やや粗	やや軟	ヨコ／ヨコ・ナデ・ユビ	90	脚部端欠か
475	土	甕	荒坂B	5号	I面	10.9		13.4	淡黄褐～淡橙褐	良	やや軟	ヨコ・口縁部；ハケ・体部；ケズリ／ヨコ・ハケ	100	
476	埴輪	円筒	荒坂B	5号	I面	31.2	23.2	49.6	灰褐	やや粗	やや堅	ヨコハケ・ユビ／タタキ・タテハケ後ヨコハケ・ヨコ	60	円形すかし4。胎土分析
477	埴輪	円筒	荒坂B	5号	I面	30.0	21.4	49.0	灰茶	やや粗	やや堅	ヨコハケ・ナデ／タテハケ後ヨコハケ・タタキ・ヨコ	100	円形すかし4
478	埴輪	円筒	荒坂B	5号	I面	30.3	19.3	50.3	灰茶	やや粗	やや堅	ヨコハケ・ナデ／タテハケ後ヨコハケ・タタキ・ヨコ	95	円形すかし4
479	須	杯身	荒坂B	6号	閉塞部下位	12.9		3.6	淡茶褐	やや粗	軟	ヨコ／ヨコ・底部；回転ケ	25	反転復原。全体に磨滅・剝離著しい
480	須	杯身	荒坂B	6号	墓道44層	12.0		4.0	淡黄灰	やや粗	堅	ヨコ／ヨコ・底部；回転ケ	30	

遺物観察表

481	須	杯身	荒坂B	6号	I面	11.9		3.5	橙褐/ 淡黄灰	良	軟	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ 後ナデ	100	
482	須	杯身	荒坂B	6号	玄室 37層	11.95		4.45	灰白	密	軟	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ 後ナデ	90	
483	須	提瓶	荒坂B	6号	I面			(16.1)	淡灰	やや 粗	堅	ヨコ/ヨコ・ ナデ	70	外面の肩部から 底部にかけて自然釉
484	須	甕	荒坂B	6号	墓道			(13.1)	淡青灰 ~暗青 灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ ナデ	60	口縁部内面~ 外面体部上半 に自然釉
485	須	杯蓋	荒坂B	7号	I面	14.0		4.7	淡緑灰 ~暗緑 灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ	90	ヘラ記号。 486の杯身と セット
486	須	杯身	荒坂B	7号	I面	12.5		4.1	暗緑灰 ~暗青 灰	やや 粗	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ	100	外面にヘラ記 号。485の杯 蓋とセット
487	須	杯蓋	荒坂B	7号	I面	14.65		3.9	淡青灰 ~淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ	95	著しい歪み。 ヘラ記号。外 面全体に自然 釉。488の杯 身とセット
488	須	杯身	荒坂B	7号	I面	13.05		4.25	青灰~ 淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ	80	ヘラ記号。 487の杯蓋と セット
489	須	杯蓋	荒坂B	7号	I面	14.1		4.0	淡青灰 ~淡緑 灰	やや 粗	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転 ケ・	100	490の杯身と セット
490	須	杯身	荒坂B	7号	I面	12.1		3.95	淡灰~ 淡緑灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ	100	489の杯蓋と セット
491	須	杯蓋	荒坂B	7号	I面	13.35		3.7	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ	100	外面一部に自 然釉
492	須	杯身	荒坂B	7号	I面	13.0		4.2	淡青灰	やや 粗	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ	100	
493	須	杯身	荒坂B	7号	I面	13.2		4.5	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ	100	
494	須	短頸 壺	荒坂B	7号	I面	7.4		9.1	淡青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 壺底部;回転 ケ	100	
495	須	提瓶	荒坂B	7号	I面			19.5	暗黄灰 ~淡黄 灰	良	堅	ヨコ・ナデ/ ヨコ・カキメ	80	
496	須	提瓶	荒坂B	7号	I面	6.65		23.85	灰白	良	軟	ヨコ・ユビ/ ヨコ・カキメ	95	磨滅著しい
497	土	甕	荒坂B	7号	墓道 部表 土下 磔	12.05		7.5	淡褐	良	やや 軟	ヨコ・ハケ・ ケズリ/ヨ コ・ハケ	30	胎土分析
498	土	椀	荒坂B	8号	I面	11.8		6.4	橙褐	密	軟	不明/不明	60	内外面とも磨 滅著しい。胎 土分析
499	土	甕	荒坂B	8号	墓道 6層	14.2		15.3	黄橙褐	密	軟	ヨコ・ユビ/ ヨコ・ハケ	75	体部外面一部 に黒斑。胎土 分析
500	須	杯蓋	荒坂B	9号	II面	9.0		2.5	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 自然釉付着の 為調整不明	100	外面に自然 釉。501の杯 身とセット
501	須	杯身	荒坂B	9号	II面	9.9		4.3	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ 後ナデ	100	実測番号500 の杯蓋とセッ ト
502	須	蓋	荒坂B	9号	II面	9.1		3.2	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 自然釉付着の 為調整不明	100	外面上部に自 然釉付着。 503の高杯と セット

503	須	高杯	荒坂B	9号	Ⅱ面	9.8	8.5	7.5	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ後ナデ	100	502の蓋とセット。外面に自然釉
504	須	蓋	荒坂B	9号	Ⅱ面	8.5		3.0	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井;回転ケ	100	外面の天井部に自然釉。505の高杯とセット
505	須	高杯	荒坂B	9号	Ⅱ面	10.9	8.5	8.4	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ後ナデ	100	504の蓋とセット
506	須	蓋	荒坂B	9号	Ⅱ面	8.4		2.65	淡灰	やや粗	やや軟	ヨコ/ヨコ	95	外面に自然釉
507	須	直口壺	荒坂B	9号	Ⅰ面	5.7		12.1	青灰~淡灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・回転ケ	90	体部上半に自然釉
508	須	高杯	荒坂B	10号	Ⅱ面	9.9	7.4	6.6	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ後ナデ	100	外面に自然釉
509	須	高杯	荒坂B	10号	Ⅰ面	9.6	5.6	6.9	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ	100	3方向すかし
510	須	高杯	荒坂B	10号	Ⅰ面	9.3	7.0	8.5	白灰	良	軟	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ後ナデ	90	磨滅著しい
511	須	高杯	荒坂B	10号	Ⅱ面	10.0		(4.0)	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ	50	
512	須	高杯	荒坂B	10号	Ⅱ面	10.6		(4.2)	白灰	密	軟	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ	50	口縁歪みあり。口径9.2~10.6cm
513	須	高杯	荒坂B	10号	Ⅰ面	12.0	13.5	18	暗灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ後ナデ	100	杯内面、柱部下半分に自然釉。2段3方向すかし
514	須	蓋	荒坂B	10号	Ⅰ面	14.0		5.1	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井;回転ケ	100	
515	須	蓋	荒坂B	10号	Ⅰ面	16.0		4.9	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ	100	516の高杯とセット
516	須	高杯	荒坂B	10号	Ⅰ面	13.9	16.7	18.4	淡青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ後ナデ	100	外面に自然釉。2段3方向すかし。515の蓋とセット
517	須	高杯	荒坂B	10号	Ⅰ面	13.5	15.2	16.0	白灰	密	軟	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ後ナデ・柱部;カキメ	95	2段3方向すかし
518	須	高杯	荒坂B	10号	Ⅰ面	14.45	15.35	17.8	灰白	粗	軟	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ後ナデ・柱部;カキメ	100	
519	須	高杯	荒坂B	10号	Ⅱ面	14.4	16.1	18.0	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ後ナデ	95	2段3方向すかし
520	須	脚付長頸壺	荒坂B	10号	Ⅱ面	10.4	14.8	27.0	淡灰~暗灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・カキメ	100	外面に自然釉。3方向すかし
521	須	壺	荒坂B	10号	墓道15層	7.7		10.1	灰白~淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・底部;オコシ後ユビナデ	80	口縁内面~体部上半に自然釉。ヘラ記号
522	須	短頸壺	荒坂B	10号	Ⅰ面	7.3		9.5	淡灰~淡黒灰	良	堅	ヨコ・ナデ/ヨコ・カキメ・回転ケ	100	外面底部から体部にかけて自然釉
523	須	臚	荒坂B	10号	Ⅱ面	14.7		18.5	灰白~暗灰	密	良	ヨコ/ヨコ・カキメ後ナデ	100	
524	須	提瓶	荒坂B	10号	Ⅰ面	7.6		20.7	青灰	良	堅	ヨコ・ナデ/ヨコ・回転ケ・ナデ	100	ヘラ記号

遺物観察表

525	須	横瓶	荒坂B	10号	I面	8.7		19.7	暗灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・カキメ	100	体部上半に自然釉
526	須	杯蓋	荒坂B	11号	I面	14.3		4.4	淡青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・天井; 回転ケ後ナデ	70	
527	須	高杯	荒坂B	11号	I面	11.7	10.8	16.1	淡青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部; 回転ケ後ナデ	100	内・外面、柱部の一部に自然釉。2段2方向すかし
528	須	蓋	荒坂B	11号	I面	14.4		4.45	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井; 回転ケ後ナデ	100	529の高杯とセット
529	須	高杯	荒坂B	11号	I面	12.4	14.6	17.0	青灰~淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部; 回転ケ後ナデ	100	2段2方向すかし。528の蓋とセット
530	須	蓋	荒坂B	11号	I面	14.2		4.2	青灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・天井; 回転ケ後ナデ	100	531の高杯とセット
531	須	高杯	荒坂B	11号	I面	12.55	13.7	16.3	暗青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部; 回転ケ後ナデ	95	2段3方向すかし。530の蓋とセット
532	須	長頸壺	荒坂B	11号	I面	9.0		17.8	灰白~淡青灰	密	良	ヨコ/ヨコ・回転ケ	100	
533	須	平瓶	荒坂B	11号	I面	3.9		11.3	灰白~淡青灰	やや粗	やや堅	ヨコ/ヨコ・カキメ後ナデ	100	
534	須	提瓶	荒坂B	11号	I面	3.95		12.55	灰白~淡灰	良	やや軟	ヨコ/ヨコ・カキメ・回転ケ	100	口縁歪み(3.5~3.95cm)
535	土	高杯	荒坂B	11号	I面	17.8	11.4	14.0	橙褐	良	堅	ヨコ・ハケ後ナデ/ヨコ・杯底部; ハケ・柱部; ナデ	100	
536	土	高杯	荒坂B	11号	I面	17.2	10.9	13.0	橙褐	密	やや軟	ヨコ・指オサエ後ナデ/ヨコ・杯部および柱部; ユビ後ナデ	90	
537	須	杯蓋	荒坂B	12号	I面	14.45		3.55	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井; 回転ケ	100	538の杯身とセット
538	須	杯身	荒坂B	12号	I面	12.85		4.2	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・底部; 回転ケ	100	537の杯蓋とセット
539	須	杯蓋	荒坂B	12号	I面	15.6		4.0	淡黄灰	やや粗	軟	ヨコ/ヨコ・磨滅著しく調整不明	95	磨滅著しい。540の杯身とセット
540	須	杯身	荒坂B	12号	I面	13.7		4.05	白灰	粗	軟	ヨコ/ヨコ・底部; 回転ケ	100	539の杯蓋とセット
541	須	杯蓋	荒坂B	12号	I面	13.2		3.45	暗灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・天井; 回転ケ	100	542の杯身とセットの可能性あり
542	須	杯身	荒坂B	12号	I面	11.6		3.6	暗青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・底部; 回転ケ	100	541の杯蓋とセットの可能性あり
543	須	杯蓋	荒坂B	12号	I面	14.3		4.0	青灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・天井; 回転ケ	100	
544	須	杯蓋	荒坂B	12号	II面	14.4		4.0	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井; 回転ケ	100	
545	須	杯身	荒坂B	12号	II面	13.1		4.2	淡青灰/淡黄灰	良	やや堅	ヨコ/ヨコ・底部; 回転ケ	100	
546	須	杯身	荒坂B	12号	I面	13.4		4.15	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・底部; 回転ケ	100	外面に自然釉
547	須	杯身	荒坂B	12号	II面	13.0		4.0	淡黄灰	密	やや堅	ヨコ/ヨコ・底部; 回転ケ	100	
548	須	杯身	荒坂B	12号	I面	12.8		4.0	淡青灰	やや粗	やや堅	ヨコ/ヨコ・底部; 回転ケ	100	ヘラ記号

549	須	壺	荒坂B	12号	埋土	8.9		11.1	淡灰	密	堅	ヨコ・ケズリ・ユビ／ヨコ・カキメ・ケズリ・タタキ	90	口縁部から体部にかけての外面に自然釉。内面一部に朱の痕跡
550	須	壺	荒坂B	12号	Ⅱ面	9.95		9.0	青灰／淡灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・回転ケ	100	
551	須	壺	荒坂B	12号	Ⅰ面	12.6		17.8	白灰	良	堅	ヨコ／ヨコ・カキメ・タタキ後カキメ・回転ケ	100	
552	須	甕	荒坂B	12号	Ⅰ面	13.8		16.65	淡灰／暗灰	密	堅	ヨコ・ナデ／ヨコ・ナデ・回転ケ	100	内面全体および外面の体部一部に自然釉
553	須	提瓶	荒坂B	12号	Ⅱ面	6.4		17.1	淡青灰	良	堅	ヨコ・ナデ／ヨコ・カキメ・回転ケ	90	
554	須	提瓶	荒坂B	12号	Ⅰ面	8.2		26.1	白灰～青灰	密	良	ヨコ／ヨコ・カキメ	100	口縁から体部外面にかけて自然釉
555	須	杯蓋	荒坂B	13号	Ⅰ面	13.3		4.0	灰白～淡青灰	密	良	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ	100	556の杯身とセット
556	須	杯身	荒坂B	13号	Ⅰ面	12.0		3.2	灰白～淡青灰	密	良	ヨコ／ヨコ・底部；回転ケ	100	555の杯蓋とセット
557	須	高杯	荒坂B	13号	Ⅰ面	11.8	10.0	14.15	淡青灰～暗灰	良	堅	ヨコ／ヨコ・杯底部；回転ケ後ナデ	100	2段2方向すかし。上段に未貫通のものあり
558	須	脚付長頸壺	荒坂B	13号	Ⅰ面		13.0	(26.5)	青灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・壺底部；回転ケ後ナデ	95	体部上半に自然釉。2段3方向すかし
559	須	杯蓋	荒坂B	14号	Ⅱ面	13.5		3.7	青灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ	100	560の杯身とセット
560	須	杯身	荒坂B	14号	Ⅱ面	11.85		4.0	青灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・底部；外周回転ケ	100	559の杯蓋とセット
561	須	杯蓋	荒坂B	14号	Ⅰ面	13.6		4.1	青灰／淡青灰	密	密	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ	100	562の杯身とセット
562	須	杯身	荒坂B	14号	Ⅱ面	11.9		3.7	暗灰／淡青灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・底部；回転ケ	100	561の杯蓋とセット。565の杯身と対で枕か
563	須	杯蓋	荒坂B	14号	Ⅰ面	13.6		(3.9)	淡茶灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ	25	
564	須	杯蓋	荒坂B	14号	Ⅱ面	13.45		3.7	淡灰～淡茶灰	密	やや堅	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ後ナデ	55	
565	須	杯身	荒坂B	14号	Ⅱ面	12.6		3.7	暗灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・底部；外周回転ケ・中央ナデ	95	562の杯身と対で枕か
566	須	杯身	荒坂B	14号	Ⅰ面	12.25		3.85	淡緑灰／淡青灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・底部；オコシ後中央ナデ	95	外面一部に自然釉
567	須	蓋	荒坂B	14号	Ⅱ面	17.35		5.05	暗灰／青灰	良	堅	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ	100	
568	須	蓋	荒坂B	14号	Ⅱ面	16.9		5.4	淡灰	密	堅	ヨコ・タタキ／ヨコ・天井；回転ケ	95	
569	須	蓋	荒坂B	14号	Ⅰ面	16.4		5.3	淡青灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ	100	
570	須	蓋	荒坂B	14号	墓道12層	16.6		4.8	淡灰	良	堅	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ	100	天井部に歪み
571	須	蓋	荒坂B	14号	Ⅰ面	13.5		5.0	橙灰	密	軟	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ	95	

遺物観察表

572	須	蓋	荒坂B	14号	Ⅱ面	16.4		5.5	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井; 回転ケ後ナデ	95	573の高杯とセット
573	須	高杯	荒坂B	14号	Ⅱ面	14.5	16.0	17.1	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・柱部; カキメ	90	底部一部欠。572の蓋とセット。2段3方向すかし
574	須	蓋	荒坂B	14号	I・Ⅱ面	15.7		4.8	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井; 回転ケ	100	575の高杯とセット
575	須	高杯	荒坂B	14号	Ⅱ面	13.4	16.0	16.4	青灰	やや粗	良	ヨコ/ヨコ・杯底部; 回転ケ後ナデ・柱部; カキメ	75	574の蓋とセット。反転復原。2段3方向すかし
576	須	高杯	荒坂B	14号	墓道12層	13.7	14.8	18.5	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部; 回転ケ	100	柱部の外面に自然釉。2段2方向すかし
577	須	高杯	荒坂B	14号	Ⅱ面、墓道12層	14.8	17.8	17.9	青灰	密	堅	ヨコ・タタキ当具/ヨコ・杯底部; 回転ケ後ナデ	85	2段3方向すかし
578	須	高杯	荒坂B	14号	墓道12層	15.8		(10.8)	淡灰~青灰	密	堅	ヨコ・タタキ当具/ヨコ・杯底部; 回転ケ後ナデ	40	2段3方向すかし。579の高杯と同一個体か
579	須	高杯	荒坂B	14号	墓道12層		17.0	(11.1)	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ	40	反転復原。2段3方向すかし。578の高杯と同一個体か
580	須	高杯	荒坂B	14号	墓道12層	15.9		(4.5)	淡青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部; 回転ケ	25	反転復原。3方向すかし。581の高杯と同一個体か。出土図なし
581	須	高杯	荒坂B	14号	Ⅱ面		18.6	(8.0)	暗青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ	20	2段3方向すかし。580の高杯と同一個体か
582	須	高杯	荒坂B	14号	墓道12層	13.1	14.4	16.05	暗青灰	密	堅	ヨコ・杯底部; 回転ケ後ナデ	95	2段2方向すかし。上段一方未貫通
583	須	高杯	荒坂B	14号	墓道12層	14.6	13.8	17.0	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部; 回転ケ後ナデ	95	2段2方向すかし
584	須	高杯	荒坂B	14号	Ⅱ面	13.2		(5.1)	青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ	25	
585	須	高杯	荒坂B	14号	墓道12層		11.0	(8.0)	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ	35	2段2方向すかし。出土図なし
586	須	蓋	荒坂B	14号	Ⅱ面	6.5		3.1	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井; 回転ケ	95	外面に自然釉。587の脚杯長頸壺とセット
587	須	脚付長頸壺	荒坂B	14号	墓道12層	8.2	13.7	26.6	淡青灰~青灰	密	堅	ヨコ・ナデ/ヨコ・壺底部; 回転ケ	85	2段3方向すかし。586の蓋とセット
588	須	脚付長頸壺	荒坂B	14号	墓道12層	7.8	14.2	30.2	淡青灰~淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・壺底部; 回転ケ後ナデ	60	2段3方向すかし
589	須	脚付長頸壺	荒坂B	14号	墓道12層	8.3	12.8	24.75	淡灰~暗灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・壺底部; 回転ケ後ナデ	100	2段3方向すかし
590	須	臚	荒坂B	14号	Ⅱ面	15.0		16.8	淡青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・回転ケ・底部; 不定方向ケズリ	90	口縁部1/4欠。外面半面に自然釉

591	須	甕	荒坂B	14号	I面、 墓道 12層	29.4		(20.0)	淡灰	良	堅	ヨコ・同心円 文/ヨコ・タ タキ後カキメ	25	口縁～肩部の 外面に自然 釉。反転復原
592	土	脚付 小壺	荒坂B	14号	II面	5.4	6.2	8.95	橙褐	やや 粗	やや 軟	ヨコ・ミガ キ・ユビ/ヨ コ・ミガキ・ ユビ	100	脚部の端面は 剥離か
593	土	脚付 小壺	荒坂B	14号	墓道 12層	5.7	6.2	8.8	淡橙褐	良	やや 軟	ヨコ/ヨコ	70	内外面共に磨 減著しい。脚 内面底部に黒 斑状の生焼 け。脚部の端 面は剥離か
594	須	杯蓋	荒坂B	15号	II面	13.0		3.9	淡緑灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井；外周回 転ケ・中央ユ ビ	100	595の杯身と セット
595	須	杯身	荒坂B	15号	II面	11.0		4.6	白灰/ 淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部；外周回 転ケ・中央ユ ビ	100	底部歪み著し い。594の杯 蓋とセット
596	須	杯蓋	荒坂B	15号	II面	13.25		3.95	灰白	良	軟	ヨコ/ヨコ・ 天井；回転ケ	100	
597	須	杯蓋	荒坂B	15号	II面	13.5		3.9	灰白	密	やや 軟	ヨコ/ヨコ・ 天井；回転ケ 後ナデ	100	
598	須	杯蓋	荒坂B	15号	II面	13.05		4.1	灰白	良	軟	ヨコ/ヨコ・ 天井；回転ケ	100	
599	須	杯蓋	荒坂B	15号	II面	13.6		4.2	灰白	密	軟	ヨコ/ヨコ・ 天井；外周回 転ケ・中央ヘ ラ調整	100	
600	須	壺	荒坂B	15号	II面	18.8		(13.4)	暗茶灰/ 淡茶 褐～暗 茶褐	良	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 底部；回転ケ 後ナデ	80	口径は最大腹 径
601	土	高杯	荒坂B	15号	墓道 23層	12.6	9.0	7.4	橙褐	密	やや 軟	ヨコ・ナデ・ 暗文/ヨコ・ ナデ	40	
602	土	高杯	荒坂B	15号	II面	13.5	8.8	7.8	橙褐	密	良	ヨコ・ナデ・ 暗文/ヨコ・ 暗文・杯底 部；ユビ後ナ デ	95	
603	土	高杯	荒坂B	15号	II面	13.55	8.4	7.85	橙褐	密	やや 軟	ヨコ・ナデ・ 暗文/ヨコ・ 暗文・杯底 部；ユビ後ナ デ	95	
604	土	高杯	荒坂B	15号	II面	13.45	9.1	7.7	橙褐	密	やや 軟	ヨコ・ナデ・ 暗文/ヨコ・ 暗文・杯底 部；ユビ後ナ デ	100	
605	須	杯蓋	荒坂B	16号	I面	15.1		4.0	淡青灰	密	堅	ヨコ・タタキ 当具/ヨコ・ 天井；回転ケ 後ナデ	100	
606	須	杯身	荒坂B	16号	I面	12.9		4.5	青灰	やや 粗	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部；回転ケ	100	ヘラ記号
607	須	短頸 壺	荒坂B	16号	I面	6.3		8.8	白灰～ 淡青灰	やや 粗	堅	ヨコ/ヨコ・ 底部；回転ケ 後ナデ	100	ヘラ記号
608	須	提瓶	荒坂B	16号	I面	8.4		23.3	淡青灰	やや 粗	やや 堅	ヨコ・ユビ・ ナデ/ヨコ・ 回転ケ・ナデ	95	

遺物観察表

609	土	甕	荒坂B	16号	I面	13.3		12.2	淡黄褐	良	堅	ハケ・ケズリ・ユビ／ナデ・ユビ・ハケ	100	
610	須	杯蓋	荒坂B	17号	II面	14.8		4.2	青灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ後ナデ	100	外面に自然釉。ヘラ記号。611の杯身とセット
611	須	杯身	荒坂B	17号	II面	13.45		4.55	青灰／淡灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・底部；回転ケ後ナデ	100	外面一部に自然釉。ヘラ記号。610の杯蓋とセット
612	須	杯蓋	荒坂B	17号	II面	15.35		4.2	青灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ	100	ヘラ記号。外面一部に自然釉。613の杯身とセット
613	須	杯身	荒坂B	17号	II面	13.2		4.45	青灰	良	堅	ヨコ／ヨコ・底部；回転ケ	100	ヘラ記号。612の杯蓋とセット
614	須	杯蓋	荒坂B	17号	II面	14.0		3.75	暗青灰	良	堅	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ	95	615の杯身とセット
615	須	杯身	荒坂B	17号	II面	12.55		4.0	淡青灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・底部；回転ケ	100	614の杯蓋とセット
616	須	杯身	荒坂B	17号	I面	10.8		5.0	淡赤灰	良	軟	ヨコ／ヨコ・底部；回転ケ	100	
617	須	壺	荒坂B	17号	II面	12.9		16.75	青灰	良	堅	ヨコ／ヨコ・カキメ・底部；回転ケ後ナデ	100	口縁歪み有り
618	須	杯蓋	荒坂B	18号	II面	12.0		4.1	淡青灰～青灰	良	堅	ヨコ／ヨコ・天井；外周回転ケ後ナデ・中央ユビ	100	内面に619の杯身と同様のヘラ記号。619の杯身とセット
619	須	杯身	荒坂B	18号	II面	10.5		3.4	淡青灰～淡灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・底部；外周回転ケ後ナデ・中央ユビ	100	内面に618の杯蓋と同様のヘラ記号。618の杯蓋とセット
620	須	杯身	荒坂B	18号	II面	9.45		2.4	暗青灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・底部；回転ケ	100	
621	須	杯蓋	荒坂B	18号	II面	9.4		2.8	淡青灰	良	堅	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ	100	
622	須	長頸壺	荒坂B	18号	II面	7.4		19.9	淡赤灰～白灰	やや粗	堅	ヨコ／ヨコ・底部；回転ケ後ナデ	100	体部上半の外面に自然釉
623	須	短頸壺	荒坂B	18号	II面	8.2		6.65	青灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・底部；回転ケ	100	ヘラ記号
624	須	短頸壺	荒坂B	18号	II面	7.8		5.95	淡青灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・底部；回転ケ	100	ヘラ記号
625	須	平瓶	荒坂B	18号	II面	5.3		15.3	淡灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・カキメ・底部；ユビ	95	口縁から体部に自然釉。体部に土器片付着
626	須	杯蓋	荒坂B	19号	I面	9.5		2.9	淡青灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ	100	外面一部と内面に自然釉。628の杯蓋と対で枕か
627	須	杯蓋	荒坂B	19号	I面	10.0		3.3	淡灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・天井；回転ケ後ナデ	100	外面に自然釉
628	須	杯蓋	荒坂B	19号	I面	9.7		3.1	淡青灰	密	堅	ヨコ／ヨコ	100	外面に自然釉。626の杯蓋と対で枕か
629	須	杯蓋	荒坂B	19号	I面	9.8		3.2	青灰	密	堅	ヨコ／ヨコ・自然釉のため調整不明	100	外面に自然釉

630	須	杯蓋	荒坂B	19号	玄門部埋土	9.6		3.15	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ	80	
631	須	杯蓋	荒坂B	19号	I面	9.0		2.8	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井;カキメ	45	反転復原。外面に自然釉
632	須	杯身	荒坂B	19号	I面	9.7		3.7	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ	90	
633	須	杯身	荒坂B	19号	I面	9.8		4.6	白灰	密	やや軟	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ	80	口縁歪みあり
634	須	杯身	荒坂B	19号	I面	11.0		5.6	暗灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ	100	内面および外面の側面の一部に自然釉
635	須	杯身	荒坂B	19号	I面	10.0		4.1	淡青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・天井;回転ケ後ナデ	100	ゆがみ著しい。口径最大12.65cm
636	須	杯身	荒坂B	19号	I面	11.1		4.0	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ後ナデ	100	口縁著しく歪む。口径11.1~11.6cm
637	須	杯身	荒坂B	19号	I面	11.4		3.5	淡黄灰/淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ後ナデ	100	内面と外面の一部に自然釉
638	須	高杯	荒坂B	19号	I面	11.4	9.0	12.0	青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ後ナデ	85	
639	須	高杯	荒坂B	19号	I面	12.45	11.4	15.0	淡青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部;回転ケ	85	杯および柱部外面に自然釉。2段2方向すかし
640	須	脚付長頸壺	荒坂B	19号	I面	8.4	11.5	22.8	淡灰~淡青灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・壺底部;回転ケ	95	脚部に穿孔2孔。体部上半~脚部に自然釉
641	須	杯蓋	荒坂C	1号	I面	12.85		3.5	緑灰/暗灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・天井;回転ケ後ナデ	100	642の杯身とセット
642	須	杯身	荒坂C	1号	I面	11.05		3.45	暗灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・底部;外周回転ケ・中央ユビ	100	外面に自然釉。ヘラ記号。641の杯蓋とセット
643	須	杯蓋	荒坂C	1号	I面	13.4		3.75	淡緑灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・天井;外周回転ケ・中央ユビ	100	
644	須	杯蓋	荒坂C	1号	I面	12.5		3.8	淡緑灰	粗	やや堅	ヨコ/ヨコ・天井;外周回転ケ・中央ナデ	100	外面の一部に自然釉。ヘラ記号
645	須	杯蓋	荒坂C	1号	I面	12.0		3.7	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・天井;回転ケ・中央;ナデ	100	外面一部に自然釉。646の杯蓋と対で枕か
646	須	杯蓋	荒坂C	1号	I面	12.2		3.8	緑灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・天井;外周回転ケ・中央ナデ	100	645の杯蓋と対で枕か
647	須	杯身	荒坂C	1号	墓道17層	10.4		3.3	青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・底部;外周回転ケ・中央ナデ	100	
648	須	杯身	荒坂C	1号	I面	10.0		3.4	淡青灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・底部;回転ケ	100	ヘラ記号
649	須	高杯	荒坂C	1号	I面	11.3	9.6	7.0	淡青灰~暗青灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部;カキメ	100	
650	須	高杯	荒坂C	1号	I面	11.6	8.8	6.65	淡灰~青灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・杯底部;カキメ	90	

遺物観察表

651	須	高杯	荒坂C	1号	I面	11.5	9.0	5.8	淡青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;カキ メ	100	外面に自然釉
652	須	高杯	荒坂C	1号	I面	11.4	9.0	5.8	淡灰~ 青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;カキ メ	100	
653	須	高杯	荒坂C	1号	I面	11.6	9.5	6.5	淡灰~ 青灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;カキ メ	100	底部歪み著しい
654	須	高杯	荒坂C	1号	I面	11.0		(5.5)	暗灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;カキ メ	70	
655	須	高杯	荒坂C	1号	I面	11.4	10.8	13.7	淡灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	75	外面柱部に自然釉。2段2方向すかし
656	須	脚付 長頸 壺	荒坂C	1号	I面	10.0	13.2	29.4	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 壺底部;回転 ケ	95	2段2方向すかし。口縁内面および口縁から体部上半、脚部外面に自然釉
657	須	脚付 長頸 壺	荒坂C	1号	I面	7.1		(21.7)	暗茶灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 壺底部;回転 ケ	75	体部上半に自然釉。脚部に4方向に穿孔
658	須	蓋	荒坂C	1号	I面	8.2		3.0	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 天井;回転ケ 後ナデ	100	外面に自然釉。659の脚杯長頸壺とセット
659	須	脚付 長頸 壺	荒坂C	1号	I面	9.0	13.2	27.8	淡青灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・ 壺底部;回転 ケ	100	外面に自然釉。すかしなし。658の蓋とセット
660	須	臚	荒坂C	1号	I面	12.0		13.9	青灰~ 暗青灰	やや粗	堅	ヨコ/ヨコ・ カキメ	80	穿孔時の粘土塊が内部に有り
661	須	杯身	荒坂C	2号	墓道	10.6		(2.7)	淡灰	やや粗	やや軟	ヨコ/ヨコ・ 底部;回転ケ	30	反転復原
662	須	高杯	荒坂C	2号	I面	10.55	7.45	8.85	暗灰	密	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ	95	口縁の内面と口縁から柱部にかけての外面の一部に自然釉
663	須	高杯	荒坂C	2号	墓道	13.4		(3.3)	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ	20	反転復原
664	須	高杯	荒坂C	2号	墓道	12.4		(8.4)	淡灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ後ナデ・柱 部;カキメ	30	反転復原
665	須	脚付 長頸 壺	荒坂C	2号	I面	8.6		(22.1)	白灰~ 暗灰	良	堅	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;回転 ケ	90	
666	土	椀	荒坂C	2号	墓道	12.7		(4.1)	淡黄褐	やや粗	やや軟	ヨコ/ヨコ・ 底部;ケズリ	25	反転復原
667	土	高杯	荒坂C	2号	I面	12.5	10.5	7.4	黄褐	密	やや軟	ヨコ/ヨコ・ 杯底部;ユビ 後ナデ	60	胎土分析
668	須	把手 付甕	荒坂B	Ⅲ SX02		24.0		26.7	淡青灰	密	堅	ナデ・同心円 文/ナデ・タ タキ	50	反転復原
669	土	甕	荒坂C	Ⅲ SX02		20.0		39.5	黄茶褐	やや粗	軟	ナデ・ケズリ /ナデ・ハケ	80	剝離・磨滅著しい。体部に黒斑。胎土分析
670	土	甌	荒坂C	Ⅲ SX02		23.8		35.3	黄褐	良	やや軟	ヨコ・ナデ/ ヨコ・ハケ・ ユビ	80	底部に4か所の穿孔。胎土分析

671	須	杯蓋	荒坂B	1号 東側	暗赤 黄色 粘質 土	15.8		(4.0)	淡青灰	粗	やや 堅	ヨコ/ヨコ	30	
672	須	杯身	荒坂B	1号 東側	暗赤 黄色 粘質 土	14.0		(5.1)	暗灰	粗	やや 堅	ヨコ/ヨコ・ 回転ケ	25	
673	土	皿	荒坂B		谷堆 積	9.0		(1.0)	淡橙褐	密	堅	ヨコ・ユビ/ ナデ・ユビ	25	反転復原
674	埴 輪	円筒 埴輪	女谷B	II SX06				(4.5)	橙褐/ 暗橙褐	やや 粗	堅	ヨコハケ/部 分的にタテハ ケ後ヨコハケ		
675	埴 輪	円筒 埴輪	女谷B	II SX06				(5.9)	橙褐/ 暗橙褐	やや 粗	堅	ヨコハケ後ユ ビ/ヨコハケ 後タテハケ		
676	埴 輪	円筒 埴輪	女谷B	II SX06				(13.4)	橙褐/ 暗橙褐	やや 粗	堅	ヨコハケ後ユ ビ/ヨコハケ 後タテハケ		
677	埴 輪	円筒 埴輪	女谷B	II SX06				(15.3)	橙褐/ 暗橙褐	やや 粗	堅	ヨコハケ後ユ ビ/ヨコハ ケ・タテハケ 後ヨコハケ		
678	埴 輪	円筒 埴輪	女谷B	II SX06				(13.7)	橙褐/ 暗橙褐	やや 粗	堅	ヨコハケ後ユ ビ/ヨコハ ケ・部分的に タテハケ後ヨ コハケ		
679	埴 輪	円筒 埴輪	荒坂C	1号	墓道 18層			(7.2)	橙褐/ 暗橙褐	密	堅	ヨコハケ/タ テハケ後ヨコ ハケ		ヘラ記号か
680	埴 輪	円筒 埴輪	荒坂C	1号	墓道 18層			(11.6)	橙褐	良	やや 軟	ヨコハケ後ユ ビ/タテハケ 後ヨコハケ		
681	埴 輪	蓋	荒坂C	1号	墓道 埋土			(10.2)	淡橙褐	粗	軟			内外面共磨 減。胎土分析

付表5 鉄器観察表

※刃部があるものは刃部の断面、()は現存の長さ。単位cm

番号	器形	支群	横穴	層位	全長	断面※		頸部		茎部		残存率 (%)	備考
						縦	横	断面		断面			
								縦	横	縦	横		
682	鏃	女谷B	1号	Ⅱ面	22.9	0.3	1.0	0.4	0.4	0.25	0.3	100	
683	鏃	女谷B	1号	Ⅲ面	(5.6)	0.4	0.8	0.25	0.4			20	
684	鏃	女谷B	1号	Ⅲ面	11.3	0.35	3.0	0.3	0.5	0.35	0.3	90	
685	鏃	女谷B	1号	Ⅲ面	(9.6)	0.3	2.8	0.4	0.6	0.3	0.25	90	
686	鏃	女谷B	2号	I面	(4.6)					0.2	0.6	20	木質残存
687	釘	女谷B	2号	I面	(8.0)	0.65	0.65					80	
688	釘	女谷B	2号	I面	10.2	0.5	0.8					100	
689	釘	女谷B	2号	I面	(7.6)+ (3.3)	0.6	0.75					90	
690	釘	女谷B	2号	I面	(7.95)	0.85	0.8					80	
691	釘	女谷B	2号	I面	(7.8)	0.6	0.5					80	
692	鏃	女谷B	5号	I面	(5.3)					0.8	0.7	20	
693	刀	女谷B	8号	I面	(37.6)	2.5	0.5			2.1	0.4	90	
694	鞘尻 金具	女谷B	8号	I面	4.2	3.0	1.7					100	
695	足金 具	女谷B	8号	I面	—	—	—					30	採寸不能
696	足金 具	女谷B	8号	I面	—	—	—					30	採寸不能
697	足金 具	女谷B	8号	I面	0.2	3.9	1.7					100	全長は厚さ
698	鏹	女谷B	8号	I面	1.5	(2.8)	1.5					80	
699	釘	女谷B	8号	Ⅱ面	(7.9)	0.4	0.8					90	
700	刀子	女谷B	9号	Ⅱ面	(2.8)+ (5.0)	0.9	0.3			0.9	0.4	50	
701	刀子	女谷B	9号	I面	(6.1)					1.2	0.3	30	
702	鏃	女谷B	9号	Ⅱ面	(11.1)					0.35	0.4	60	ほか破片あり
703	鏃	女谷B	9号	Ⅱ面	19.0	0.25	1.1	0.35	0.6	0.3	0.45	100	
704	刀子	女谷B	11号	Ⅱ面	(6.9)	0.9	0.35			0.75	0.4	50	
705	刀子	女谷B	12号	墓道 検出面	(7.0)	0.85	0.3					40	
706	刀子	女谷B	12号	Ⅲ面	(7.2)	1.05	0.3			0.6	0.2	40	
707	鏃	女谷B	12号	Ⅲ面	10.8	0.1	3.6			0.3	0.35	100	
708	鏃	女谷B	12号	Ⅲ面	(7.0)	0.2	0.7	0.4	0.5			60	
709	槍状	女谷B	12号	Ⅱ面	(21.05)	0.2	2.3			2.5	0.25	90	0.4×0.8の 穿孔あり
710	刀子	女谷B	13号	I面	(8.2)	1.2	0.2					40	そのほか破 片あり
711	刀子 装 具?	女谷B	13号	玄室 埋土	—	—	—					—	採寸不能
712	刀子	女谷B	16号	I面	(13.3)	1.3	0.6			0.9	0.4	90	
713	刀子	女谷B	17号	Ⅲ面	(11.0)	1.1	0.4			0.8	0.3	90	鹿角装
714	刀子	女谷B	17号	Ⅲ面	(9.0)	1.2	0.5			0.65	0.3	60	茎と刃部の 境は推定
715	鏃	女谷B	17号	Ⅲ面	(12.0)	0.3	2.3	0.3	0.6	(0.5)	0.9	90	
716	鏃	女谷B	17号	Ⅲ面	(11.4)	0.4	0.9	0.4	0.5			60	
717	鏃	女谷B	17号	Ⅲ面	(20.9)	0.25	0.6	0.35	0.4	0.25	0.3	90	
718	鏃	女谷B	18号	I面	(7.1)	0.3	0.9	0.25	0.45			40	

719	鍬	女谷B	18号	I面	(7.2)+(2.35)	0.15	1.2	0.1	0.45	(0.35)	0.5	60	
720	鍬	女谷B	18号	I面	(2.7)+(6.0)	0.5	1.2	(0.15)	0.4	0.6	0.5	50	
721	鍬	女谷B	18号	I面	17.3	0.35	(0.7)	0.25	0.6	0.6	0.6	100	
722	鍬	女谷B	18号	I面	(3.7)+(2.0)+(11.0)	0.65	1.0	0.4	0.45	0.7	0.6	80	
723	鍬	女谷B	18号	I面	19.55	0.3	0.9	0.25	0.4	0.45	0.5	100	
724	不明	女谷B	18号	I面	(16.3)	3.2	0.1						
725	胡籜	女谷B	18号	I面 IV SK01	(28.0)	2.1	0.2					90	残存率は推定
726	胡籜	女谷B	18号	I面 IV SK01	(9.2)+(29.0)	4.2	0.2					90	残存率は推定。蛍光X線分析
727	刀子	女谷C	1号	I面	(2.8)+(7.2)	1.0	0.4			1.3	0.6	80	
728	刀子	女谷C	1号	I面	(9.0)					1.05	(0.5)	50	
729	刀	女谷C	1号	I面	41.2	3.05	0.55			1.5	0.2	100	鍬・鏑など装着
730	足金具	女谷C	1号	I面	-	-	-					30	採寸不能
731	鍬	女谷C	1号	I面	1.2	3.6	1.6					100	
	鏑	女谷C	1号	I面	0.7	5.4	3.7					100	全長は厚さ
732	刀子	女谷C	3号	I面	(1.6)+(10.1)	1.1	0.4			0.7	0.6	80	
733	刀子	女谷C	3号	II面	(2.0)+(11.8)	1.05	0.15			0.9	0.5	80	
734	鍬	女谷C	3号	II面	(6.5)+(2.2)			0.4	0.6	0.25	0.4	60	
735	不明	女谷C	4号	墓道端	(6.1)	0.2	1.1					-	
736	不明	女谷C	4号	墓道端	(6.5)	0.1	1.0					-	
737	不明	女谷C	3・4号の間		(7.7)	0.3	0.9					-	
738	刀	女谷C	4号	I面	59.9	2.5	0.5			1.2	0.4	100	刀装具付
739	鍬	女谷C	5号	I面	(20.9)	0.1	0.8	0.35	0.4	0.7	0.65	90	木質残存
740	鍬	女谷C	5号	I面	(5.1)+(3.6)	0.2	0.9	0.4	0.6			60	
741	鍬	女谷C	5号	I面	(10.6)	0.15	3.0			0.5	0.6	90	
742	鍬	女谷C	7号	I面	(9.1)	0.25	0.9	0.4	0.4			60	崩落土除去中出土
743	鍬	女谷C	7号	I面	(5.3)	0.15	0.8	0.3	0.4			30	崩落土除去中出土
744	鍬	女谷C	7号	I面	11.85			0.4	0.6	0.7	0.9	100	木質残存。錆著しい
745	鍬	女谷C	7号	I面	13.35	0.1	(1.3)			0.7	0.75	100	木質残存。崩落土除去中出土
746	鍬	女谷C	7号	I面	11.1	0.3	1.3	0.35	0.65	0.7	0.8	100	木質残存。崩落土除去中出土
747	鍬	女谷C	7号	I面	(9.75)			0.4	0.5	0.4	0.4	60	
748	刀子	女谷C	8号	I面	12.3	0.5	0.25			1.2	0.7	90	
749	鍬	女谷C	8号	I面	(11.9)	0.15	0.9	0.45	0.5			80	
750	鍬	女谷C	8号	I面	12.0	0.25	2.3			0.9	0.9	100	木質残存
751	刀子	荒坂B	1号	I面	(14.5)	1.0	0.35			1.1	0.9	90	鹿角装
752	刀子	荒坂B	2号	I面	(3.05)					0.35	0.9	30	
753	刀子	荒坂B	2号	I面	(2.1)					0.4	0.8	20	
754	刀子	荒坂B	2号	I面	12.1	1.4	0.4			1.1	0.65	100	鹿角装

遺物観察表

755	鎌	荒坂B	2号	I面	15.5	0.15	2.4			0.35	0.4	90	
756	鎌	荒坂B	2号	I面	(8.25)	0.3	1.6	0.3	0.7			70	
757	鎌	荒坂B	2号	I面	(6.95)	0.2	(2.2)	0.1	0.8			50	
758	鎌	荒坂B	2号	I面	(10.05)	0.15	2.6			0.45	0.55	70	
759	鎌	荒坂B	2号	I面	10.4	0.15	2.1			0.5	0.6	90	
760	鎌	荒坂B	2号	I面	(3.65)					0.35	0.9	30	出土地点不詳
761	刀	荒坂B	2号	I面	70.9	2.9	0.5			1.7	0.6	100	
762	鞘金具	荒坂B	2号	I面	1.9	4.0	2.9					100	鍔では刀身が入らない
763	鐔	荒坂B	2号	I面	0.6	7.45	6.0					100	全長は厚さ
764	轡	荒坂B	2号	I面								100	本文参照
765	鞍	荒坂B	2号	I面								90	本文参照
766	鞍	荒坂B	2号	I面								80	本文参照
767	刀子	荒坂B	3号	玄門部上層	(4.1)					(1.1)	(0.4)	20	
768	鎌	荒坂B	3号	II面	(17.8)	0.15	0.8	0.35	0.4	0.8	0.8	90	木質残存
769	鎌	荒坂B	3号	II面	(9.1)			0.35	0.5	0.6	0.6	50	
770	鎌	荒坂B	3号	II面	7.9	0.3	2.15	0.25	0.55	0.5	0.5	100	
771	鎌	荒坂B	3号	II面	(11.65)	0.4	2.5	0.35	0.9	0.8	0.7	90	
772	鎌	荒坂B	3号	II面	11.4	0.25	1.8	0.5	0.6	0.5	0.4	100	
773	鎌	荒坂B	3号	II面	(6.1)	0.25	2.4	0.3	0.8			40	
774	鎌	荒坂B	3号	II面	(10.2)	0.3	2.0	0.3	0.6	0.8	0.8	80	
775	鎌	荒坂B	3号	II面	11.3	0.5	2.2			0.7	0.7	100	
776	石突	荒坂B	3号	I面	(8.9)	2.3	2.1					90	
777	釘	荒坂B	3号	I面	6.1	0.4	0.8					100	
778	長頸鎌	荒坂B	5号	I面	15.7	0.25	0.9	0.35	0.7	(0.7)	(0.6)	90	木質残存
779	鎌	荒坂B	5号	I面	(15.55)	0.4	0.9	0.4	0.6	0.7	0.65	90	
780	鎌	荒坂B	5号	I面	14.4	0.15	0.9	0.35	0.6	0.7	0.8	100	
781	鎌	荒坂B	5号	I面	(18.5)	0.3	1.7	0.3	0.5	0.7	0.7	90	木質残存
782	鎌	荒坂B	5号	I面	(17.3)	0.3	1.1	0.35	0.6	0.8	1.0	90	木質残存
783	刀	荒坂B	5号	I面	(25.4)	1.7	0.3			1.1	0.7	90	
	鍔	荒坂B	5号	I面	1.5	2.0	0.7						
784	刀子	荒坂B	8号	I面	(11.45)	1.1	0.4			0.8	0.6	90	
785	鎌	荒坂B	10号	I面	(17.4)	0.3	0.8	0.35	0.5	0.3	0.4	90	
786	鎌	荒坂B	10号	I面	(10.4)	0.2	2.5	0.3	0.5	(0.5)	0.6	80	
787	刀子	荒坂B	11号	I面	(12.8)	1.8	0.9			0.7	0.7	70	
788	刀子	荒坂B	11号	I面	(5.8)	1.2	0.1					50	
789	鎌	荒坂B	11号	I面	14.3	0.25	2.8			0.4	0.45	100	
790	鎌	荒坂B	11号	I面	(8.9)			0.4	0.8	0.4	0.5	50	
791	鎌	荒坂B	11号	I面	(10.4)			0.35	0.5			60	
792	鎌	荒坂B	11号	I面	14.9	0.2	0.9	0.45	0.5	(0.6)	(0.6)	100	木質残存
793	鎌	荒坂B	11号	I面	14.85	0.2	0.9	0.45	0.5	0.6	0.6	100	木質残存
794	鎌	荒坂B	11号	I面	(12.3)	0.2	0.8	0.35	0.45	0.4	0.45	90	

795	鍔	荒坂B	11号	I面	(12.2)	0.2	1.05	0.4	0.5			90	
796	鍔	荒坂B	11号	I面	(19.0)	0.3	1.0	0.3	0.55	0.3	0.3	90	
797	刀	荒坂B	11号	I面	(37.1)	2.3	0.35			1.5	0.4	90	装具付
	鍔	荒坂B	11号	I面	1.8	2.5	2.2						
798	刀子	荒坂B	12号	I面	(6.1)+(4.7)	1.3	0.45			1.2	0.55	60	鹿角装
799	釘	荒坂B	13号	I面	7.9	0.5	0.55					100	木質付着
800	鍔	荒坂B	14号	II面	(5.1)	0.4	2.5					50	
801	鍔	荒坂B	14号	II面	11.1	0.1	2.0	0.3	0.8	0.3	0.3	100	
802	鍔	荒坂B	14号	II面	13.7	0.1	1.1	0.3	0.5	0.3	0.3	100	木質残存
803	鍔	荒坂B	14号	II面	14.5	0.2	1.2	0.35	0.65	0.5	0.6	100	
804	鍔	荒坂B	14号	II面	15.5	0.3	1.6	0.3	0.65			100	
805	鍔	荒坂B	14号	II面	14.3	0.25	1.0	0.3	0.45	0.45	0.45	100	木質残存
806	鍔	荒坂B	14号	II面	(3.1)					0.45	0.5	30	
807	鍔	荒坂B	14号	II面	(3.8)					0.4	0.55	30	
808	刀	荒坂B	14号	I面	61.2	2.2	0.6			1.5	0.3	100	鍔・鍔付
	鍔	荒坂B	14号	I面	1.0	2.6	2.0					100	
	鍔	荒坂B	14号	I面	1.1	5.1	4.5					100	全長は厚さ
809	刀装具	荒坂B	14号	I面	0.4	5.0	3.9					100	全長は厚さ
810	刀装具	荒坂B	14号	II面	2.4	2.8	3.2					100	ソケット状
811	刀子	荒坂B	15号	II面	16.3	1.1	0.3			1.65	(1.2)	90	鹿角装
812	刀子	荒坂B	15号	I面	(8.8)	1.35	0.5					60	鹿角装
813	刀子	荒坂B	15号	I面	9.2	0.7	0.35			1.85	0.85	90	鹿角装
814	鍔	荒坂B	15号	I面	(6.5)	0.25	2.4					60	方形の穴
815	鍔	荒坂B	15号	I面	(6.9)	0.3	2.25	0.4	0.6			70	
816	鍔	荒坂B	15号	I面	(3.65)	0.1	1.8					40	
817	鍔	荒坂B	15号	I面	(4.6)	0.3	0.5	0.5	0.5			30	
818	鍔	荒坂B	15号	I面	12.6	0.3	1.3	0.3	0.5	0.3	0.35	100	
819	鍔	荒坂B	15号	I面	13.2	0.15	0.7	0.25	0.3	0.2	0.2	100	
820	鍔	荒坂B	15号	I面	(6.3)			0.35	0.5			50	
821	鍔	荒坂B	15号	I面	(2.2)					0.35	0.4	10	
822	鍔	荒坂B	15号	I面	(3.9)			0.35	0.8	0.9	0.9	20	桜皮
823	釘	荒坂B	15号	II面	(6.15)	0.5	0.75					90	木質残存
824	釘	荒坂B	15号	I面	6.85	0.4	0.8					100	木質残存
825	釘	荒坂B	15号	I面	(8.35)	0.25	0.6					80	木質残存
826	釘	荒坂B	15号	II面	(10.5)	0.3	0.8					90	木質残存
827	刀子	荒坂B	17号	I面	(10.7)	1.3	0.25			1.05	1.1	60	鹿角装
828	鍔	荒坂B	17号	II面	(5.2)	0.2	2.05					60	
829	鍔	荒坂B	17号	I面	(2.5)	0.1	0.7					20	
830	鍔	荒坂B	17号	II面	(6.5)			0.5	0.65	0.4	0.5	40	
831	鍔	荒坂B	17号	I面	(2.0)					0.4	0.4	10	
832	鍔	荒坂B	17号	I面	0.3	7.5	6.4					100	全長は厚さ
833	刀子	荒坂B	19号	墓道内 中層	(9.7)	1.2	0.6					50	刃部・基部 不明
834	刀	荒坂B	19号	I面	57.3	2.6	0.8			1.3	0.3	100	鞘の木質付着。 鞘に足金具残存

遺物観察表

834	鍬	荒坂B	19号	I面	2.2	3.2	1.6					100	全長は厚さ
	足金具	荒坂B	19号	I面	0.6	(4.0)	2.1					80	全長は厚さ
	鞘口金具	荒坂B	19号	I面	4.0	3.3	1.7					75	足金具・鍬の間に装着
835	刀子	荒坂B	20号	墓道埋土	(7.2)					1.0	0.6	40	木質付着。刃部・茎部不明
836	鍬	荒坂B	20号	墓道埋土	(9.2)	0.2	2.9	0.2	0.7			80	
837	刀子	荒坂C	2号	墓道前面	(6.25)+(4.1)	1.3	0.2					60	
838	鍬	荒坂C	2号	墓道前面	(6.1)			0.5	0.7	0.6	0.6	30	
839	鍬	荒坂C	2号	墓道前面	(2.2)					0.4	0.45	10	
840	鍬	荒坂C	2号	墓道前面	(2.7)+(7.75)			0.4	0.5	0.3	0.3	50	
841	刀	荒坂C	Ⅲ SX01		(10.25)	2.2	0.4			0.7	0.3	30	
842	剣	荒坂C	Ⅲ SX01		(53.7)	3.8	0.8			2.3	0.6	80	
843	筭	荒坂C	Ⅲ SX01		11.25	0.2	0.9					90	
844	剣	女谷B	路面	下層包含層	(30.2)	2.4	0.25					90	
845	鍬	女谷B	Ⅱ SD14		(2.4)			0.3	0.6			10	

付表6 耳環観察表

(単位cm)

番号	支群	横穴	材質	層位	縦	横	厚さ	残存率 (%)	備考
846	女谷B	1号	金環	Ⅲ面	2.38	2.57	0.57	100	847と対
847	女谷B	1号	金環	Ⅲ面	2.39	2.61	0.57	100	846と対。987の木片が接面に挟まる
848	女谷B	1号	金環	Ⅲ面	2.67	2.84	0.64	100	
849	女谷B	6号	金環	Ⅱ面	2.80	3.1	0.60	100	
850	女谷B	6号	金環	Ⅱ面	2.95	3.1	0.75	100	
851	女谷B	7号	銀環	Ⅲ面	2.8	3.15	0.7	100	
852	女谷B	7号	銀環	Ⅲ面	2.45	2.65	0.6	100	
853	女谷B	9号	銀環	Ⅱ面	2.55	2.8	0.7	100	854と対。一部金に発色
854	女谷B	9号	銀環	Ⅱ面	2.55	2.8	0.7	100	853と対。一部金に発色
855	女谷B	11号	銀環	Ⅱ面	2.7	3.1	0.6	100	
856	女谷B	11号	銀環	Ⅱ面	2.85	3.25	0.8	100	
857	女谷B	11号	金環	Ⅱ面	2.85	3.05	0.5	100	
858	女谷B	13号	金環	Ⅰ面	2.7	3.1	0.9	100	
859	女谷B	16号	金環	Ⅰ面	2.52	2.66	0.44	100	860と対
860	女谷B	16号	金環	Ⅰ面	2.43	2.81	0.5	100	859と対
861	女谷B	16号	銀環	Ⅰ面	2.48	2.69	0.52	100	862と対
862	女谷B	16号	銀環	Ⅰ面	2.34	2.6	0.48	100	861と対
863	女谷B	17号	金環	Ⅲ面	2.7	3.03	0.63	100	864と対
864	女谷B	17号	金環	Ⅲ面	2.7	3.05	0.7	100	863と対。蛍光X線分析
865	女谷B	17号	鉛環	Ⅲ面	2.47	2.51	0.43	90	2つに割れる。蛍光X線分析
866	女谷B	18号	金環	Ⅰ面	2.18	2.36	0.48	100	867と対
867	女谷B	18号	金環	Ⅰ面	2.11	2.31	0.48	100	866と対
868	女谷C	1号	金環	Ⅰ面	2.7	3.05	0.7	100	869と対
869	女谷C	1号	金環	Ⅰ面	2.6	2.7	0.5	100	868と対
870	女谷C	5号	銀環	Ⅰ面	2.99	3.36	0.83	100	871と対
871	女谷C	5号	銀環	Ⅰ面	3.02	3.3	0.87	100	870と対
872	女谷C	6号	金環	Ⅰ面	2.97	3.15	0.67	100	873と対。中空耳環
873	女谷C	6号	金環	Ⅰ面	2.95	3.05	0.74	100	872と対。中空耳環
874	女谷C	7号	金環	Ⅰ面	2.55	2.75	0.5	100	
875	女谷C	7号	金環	Ⅰ面	2.8	3.05	0.7	100	
876	荒坂B	2号	銀環	Ⅰ面	2.15	2.35	0.4	100	整理作業中に紛失
877	荒坂B	5号	鉛環	Ⅰ面	1.53	1.58	0.26	100	蛍光X線分析
878	荒坂B	10号	銀環	Ⅱ面	2.4	2.7	0.55	100	
879	荒坂B	14号	金環	Ⅱ面	2.4	2.6	0.7	100	880と対
880	荒坂B	14号	金環	Ⅱ面	2.45	2.6	0.7	100	879と対。蛍光X線分析
881	荒坂B	14号	銀環	Ⅰ面	2.71	2.95	0.54	100	882と対
882	荒坂B	14号	銀環	Ⅰ面	2.95	3	0.7	100	881と対。蛍光X線分析

備考 材質は、蛍光X線分析で測定すると、金・銀・銅の合金である場合があるが、黄金色・白銀色のいずれに近い発色であるかを肉眼で判定して示している。

付表7 玉観察表

(単位cm)

番号	支群	横穴	層位	径	孔径	高	材質	色調	備考
883	荒坂B	5号	I面	0.75	0.2	0.62	ガラス	青紺	
884	荒坂B	5号	I面	0.77	0.2	0.58	ガラス	青紺	
885	荒坂B	5号	I面	0.69	0.25	0.42	ガラス	藍	
886	荒坂B	5号	I面	0.65	0.25	0.40	ガラス	青紺	
887	荒坂B	5号	I面	0.24	0.08	0.18	ガラス	黄	
888	荒坂B	5号	I面	0.27	0.07	0.21	ガラス	黄	
889	荒坂B	5号	I面	0.27	0.09	0.23	ガラス	黄	
890	荒坂B	5号	I面	0.32	0.06	0.26	ガラス	黄	
891	荒坂B	5号	I面	0.27	0.1	0.14	ガラス	赤	ムティサラ
892	荒坂B	5号	I面	0.29	0.12	0.14	ガラス	赤	ムティサラ
893	荒坂B	5号	I面	0.28	0.11	0.24	ガラス	黄	
894	荒坂B	5号	I面	0.29	0.15	0.16	ガラス	赤	ムティサラ
895	荒坂B	5号	I面	0.23	0.09	0.15	ガラス	黄	
896	荒坂B	5号	I面	0.39	0.13	0.21	ガラス	緑	
897	荒坂B	5号	I面	0.40	0.13	0.20	ガラス	淡青	
898	荒坂B	5号	I面	0.41	0.15	0.26	ガラス	緑	
899	荒坂B	5号	I面	0.50	0.25	0.31	ガラス	緑	
900	荒坂B	5号	I面	0.40	0.15	0.25	ガラス	緑	
901	荒坂B	5号	I面	0.44	0.15	0.22	ガラス	緑	
902	荒坂B	5号	I面	0.40	0.13	0.21	ガラス	淡緑	
903	荒坂B	5号	I面	0.45	0.18	0.25	ガラス	緑	
904	荒坂B	5号	I面	0.42	0.13	0.30	ガラス	緑	
905	荒坂B	5号	I面	0.45	0.1	0.31	ガラス	緑	
906	荒坂B	5号	I面	0.51	0.2	0.35	ガラス	緑	
907	荒坂B	5号	I面	0.43	0.13	0.34	ガラス	緑	
908	荒坂B	5号	I面	0.44	0.1	0.33	ガラス	緑	
909	荒坂B	5号	I面	0.43	0.13	0.32	ガラス	緑	
910	荒坂B	5号	I面	0.41	0.12	0.35	ガラス	緑	
911	荒坂B	5号	I面	0.45	0.13	0.38	ガラス	緑	
912	荒坂B	5号	I面	0.40	0.13	0.35	ガラス	緑	
913	荒坂B	5号	I面	0.51	0.18	0.32	ガラス	深緑	
914	荒坂B	5号	洗浄土	0.28	0.08	0.16	ガラス	赤	ムティサラ
915	荒坂B	5号	洗浄土	0.29	0.1	0.13	ガラス	赤	ムティサラ
916	荒坂B	5号	洗浄土	0.28	0.15	0.17	ガラス	赤	ムティサラ
917	荒坂B	5号	洗浄土	0.31	0.1	0.19	ガラス	赤	ムティサラ
918	荒坂B	5号	洗浄土	0.32	0.07	0.22	ガラス	黄	
919	荒坂B	5号	洗浄土	0.33	0.1	0.19	ガラス	黄	
920	荒坂B	5号	洗浄土	0.28	0.08	0.18	ガラス	黄	
921	荒坂B	5号	洗浄土	0.31	0.08	0.23	ガラス	黄	
922	荒坂B	5号	洗浄土	0.28	0.08	0.18	ガラス	黄	

923	荒坂B	5号	洗浄土	0.32	0.13	0.30	ガラス	赤	ムティサラ
924	荒坂B	5号	洗浄土	0.39	0.1	0.27	ガラス	青	
925	荒坂B	5号	洗浄土	0.42	0.12	0.29	ガラス	緑	
926	荒坂B	5号	洗浄土	0.56	0.12	0.27	ガラス	緑	
927	荒坂B	5号	洗浄土	0.40	0.15	0.43	ガラス	緑	
928	荒坂B	5号	洗浄土	0.45	—	1.14	水晶	透明	
929	荒坂B	5号	洗浄土	0.79	0.25	0.27	滑石	灰	
930	荒坂B	5号	洗浄土	0.80	0.23	0.14	滑石	黒灰	
931	荒坂B	5号	洗浄土	0.82	0.25	0.09	滑石	黒灰	
932	荒坂B	5号	洗浄土	0.73	0.25	0.37	滑石	青紺	
933	荒坂B	5号	洗浄土	0.82	0.23	0.10	滑石	黒灰	
934	荒坂B	5号	I面	0.57	0.2	1.20	緑色凝灰岩	青紺	
935	荒坂B	5号	I面	0.59	0.1~ 0.22	2.39	緑色凝灰岩	緑	
936	荒坂B	5号	I面	0.61	0.1~ 0.3	2.77	緑色凝灰岩	緑	
937	荒坂B	5号	I面	0.65	0.15~ 0.3	2.72	緑色凝灰岩	緑	
938	荒坂B	5号	I面	0.60	0.1~ 0.2	2.53	緑色凝灰岩	緑	
939	荒坂B	5号	I面	0.57	0.1~ 0.25	2.61	緑色凝灰岩	緑	
940	荒坂B	14号	I面	0.22	0.1	0.16	緑色凝灰岩	淡青	
941	荒坂B	14号	I面	0.28	0.13	0.17	ガラス	青	
942	荒坂B	14号	I面	0.29	0.09	0.20	ガラス	青	
943	荒坂B	14号	I面	0.26	0.12	0.18	ガラス	淡青	
944	荒坂B	14号	I面	0.29	0.11	0.18	ガラス	青	
945	荒坂B	14号	I面	0.29	0.13	0.14	ガラス	青	
946	荒坂B	14号	I面	0.25	0.14	0.22	ガラス	青	
947	荒坂B	14号	I面	0.25	0.1	0.22	ガラス	藍	
948	荒坂B	14号	I面	0.32	0.13	0.21	ガラス	青	
949	荒坂B	14号	I面	0.28	0.14	0.27	ガラス	青	
950	荒坂B	14号	I面	0.40	0.15	0.22	ガラス	緑	
951	荒坂B	14号	I面	0.41	0.17	0.24	ガラス	青	
952	荒坂B	14号	I面	0.32	0.1	0.29	ガラス	緑	
953	荒坂B	14号	I面	0.37	0.14	0.21	ガラス	淡青	
954	荒坂B	14号	I面	0.46	0.15	0.20	ガラス	黄	
955	荒坂B	14号	I面	0.51	0.2	0.27	ガラス	黄	
956	荒坂B	14号	I面	0.37	0.19	0.22	ガラス	緑	
957	荒坂B	14号	I面	0.44	0.1	0.33	ガラス	黄	
958	荒坂B	14号	I面	0.40	0.11	0.30	ガラス	黄緑	
959	荒坂B	14号	I面	0.38	0.14	0.35	ガラス	黄	
960	荒坂B	14号	I面	0.33	0.12	0.35	ガラス	黄	
961	荒坂B	14号	I面	0.41	0.08	0.39	ガラス	黄	
962	荒坂B	14号	I面	0.54	0.2	0.31	ガラス	黄緑	

遺物観察表

963	荒坂B	14号	I面	0.45	0.15	0.33	ガラス	緑	
964	荒坂B	14号	I面	0.44	0.2	0.35	ガラス	黄緑	
965	荒坂B	14号	I面	0.49	0.2	0.35	ガラス	黄緑	
966	荒坂B	14号	洗浄土	0.26	0.09	0.15	ガラス	青	
967	荒坂B	14号	洗浄土	0.30	0.11	0.19	ガラス	青	
968	荒坂B	14号	洗浄土	0.31	0.08	0.20	ガラス	青	
969	荒坂B	14号	洗浄土	0.30	0.11	0.21	ガラス	黄	
970	荒坂B	14号	洗浄土	0.38	0.11	0.22	ガラス	濃青	
971	荒坂B	14号	洗浄土	0.44	0.15	0.24	ガラス	青	
972	荒坂B	14号	洗浄土	0.31	0.1	0.21	ガラス	黄緑	
973	荒坂B	14号	洗浄土	0.27	0.1	0.20	ガラス	黄緑	
974	荒坂B	14号	洗浄土	0.30	0.14	0.29	ガラス	青	
975	荒坂B	14号	洗浄土	0.31	0.12	0.26	ガラス	淡青	
976	荒坂B	14号	洗浄土	0.32	0.1	0.35	ガラス	青	
977	荒坂B	14号	洗浄土	0.44	0.13	0.29	ガラス	青	
978	荒坂B	14号	洗浄土	0.38	0.15	0.27	ガラス	黄緑	
979	荒坂B	14号	洗浄土	0.51	0.16	0.23	ガラス	黄	
980	荒坂B	14号	洗浄土	0.50	0.2	0.34	ガラス	黄	
981	荒坂B	14号	洗浄土	0.46	0.19	0.23	ガラス	緑	
982	女谷B	17号	Ⅲ面	0.65	0.2	0.25	滑石	白灰	耳環863の接面に挟まる

付表8 石器そのほか観察表

(単位cm)

番号	横穴支群	横穴	層位	器種	器形	縦	横	厚さ	色調	石材	残存率(全体)	備考
983	女谷B	12号	Ⅲ面	石器	砥石	8.1	4.8	3.9	淡黄灰色	砂岩	完形	
984	女谷B	2号	墓道埋土	石器	石鏃	1.7	1.45	0.25	淡緑灰色	サヌカイト	完形	
985	女谷B	2号	墓道埋土	石器	剥片	3.8	1.6	0.35	黒灰色	粘板岩		
986	荒坂B	5号	I面	石器	石鏃	2.5	1.3	0.4		サヌカイト	完形	
987	女谷B	1号	Ⅲ面	木片		0.45	0.45	0.1				耳環847の接面に挟まる

報告書抄録

ふりがな	おんなだに・あらさかおうけつぐん							
書名	女谷・荒坂横穴群							
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査報告書							
シリーズ番号	第34冊							
編著者名	岩松保・小池寛・中川和哉・黒坪一樹・村田和弘							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3				Phone	075(933)3877		
発行年月日	西暦 2004 年 3 月 26 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
おんなだに・あらさかおうけつぐん	きょうとふやわたし おおあざみのやまこ あざあらさか・ごけ どおり、おおあざう ちさとこあざおんな だに							
女谷・荒坂横穴群	京都府八幡市大字 美濃山小字荒坂・ 御毛通、大字内里 小字女谷	26210	31	34° 50' 48"	135° 43' 35"	20000126 ～ 20020627	7,540	道路建設
あらさかいせき	きょうとふやわたし おおあざみのやま こあざあらさか							
荒坂遺跡	京都府八幡市大字 美濃山小字荒坂	26210	70	34° 50' 35"	135° 43' 22"	20000118 ～ 20020516	1,770	道路建設
ごけどおりいせき	きょうとふきょう たなべしおおあざ まついこあざとが だに							
御毛通遺跡	京都府京田辺市大 字松井小字梅谷	26211		34° 50' 34"	135° 43' 31"	20020410 ～ 20020510	400	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
女谷・荒坂横穴群	横穴	古墳後期		横穴/墓地内通路/土坑		須恵器/土師器/埴輪 /鉄器/ガラス玉/耳 環/胡録金具/人骨		横穴52基 改葬骨
荒坂遺跡	集落	—		土坑		サヌカイト母岩		
御毛通遺跡	散布地	—		なし		須恵器/磁器		河川堆積

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

京都府遺跡調査報告書 第34冊〈本文編〉

平成16年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)